

何でも検索できるパソコンを手に入れました。—BPC—

木岡(もくおか)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然、自分の部屋に出現したパソコン。それはどんな事柄でも検索すれば答えを教えてくれるものだった。

全知全能。隣の家の晩御飯から地球が滅亡する日まで……何もかもを知っている魔法のようなそのパソコン。しかし、検索できるのは1日に1度だけ。

それを手にした高校生の男が色々と利用し振り回されながらも、あんなことやこんなことを知っていく日常のお話。

基本的に1話か2話で完結する短編でゆるいお話です。

※新しく書き始めたオリジナル小説をこちらでも投稿してみるところにしました。

「カクヨム」<https://kakuyomu.jp/works/16816452219708057760>

目次

word1	「このパソコン 何」	1
word2	「友達の弁当 今日」	3
word3	「僕のことを異性として好きな人 一覧」	6
word4	「幸せ 今すぐ」①	9
word4	「幸せ 今すぐ」②	11
word5	「検索 デメリット」	14
word6	「地球 終わる日」	16
word7	「ドラゴン 実在」①	18
word7	「ドラゴン 実在」②	20
word8	「気になるあの子 オ〇ニー事情」	23
word9	「歌 上手くなる方法」	25
word10	「あの友達 ホモなのか」①	27
word10	「あの友達 ホモなのか」②	29
word10	「あの友達 ホモなのか」③	31
word11	「仕返し 方法」①	34
word11	「仕返し 方法」②	36
word12	「ピラミッド 建造法」	39
在	日常の検索あれこれ① ② 「推しのアイドル 整形」 「神様 在」	存 41
word13	「パンチラスポット 今日」	44
word14	「夜食 食べていいか」	47
word15	「席替えのあみだくじ 後ろの席の棒」	49
word16	「魔法 習得方法」①	52
word16	「魔法 習得方法」②	54

word17	「怖い話 本当」①	_____	56
word17	「怖い話 本当」②	_____	58
word17	「怖い話 本当」③	_____	61
word18	「何時から 並べばいい」	_____	65
word19	「僕のことを親友と誤っている人の数 校内」	_____	68
日常の検索あれこれ③④ 「サスペンス漫画 真実」「占い師 本当」			
word20	「未来 変えられる」①	_____	74
word20	「未来 変えられる」②	_____	76
word21	「競馬 勝つ馬」①	_____	79
word21	「競馬 勝つ馬」②	_____	82
word22	「黒いマウス 機能」①	_____	86
word22	「黒いマウス 機能」②	_____	89
日常の検索あれこれ⑤ 「1番胸がでかい 同級生」			
word23	「姉 弱み」①	_____	94
word23	「姉 弱み」②	_____	96
word23	「姉 弱み」③	_____	99
word24	「若手女優 裸」	_____	102
word25	「両親 SEX」	_____	105
word26	「学年で1番 歌上手い奴」①	_____	108
word26	「学年で1番 歌上手い奴」②	_____	110
word26	「学年で1番 歌上手い奴」③	_____	113
word26	「学年で1番 歌上手い奴」④	_____	115
word27	「折原さん 彼氏」	_____	118
word27	「過去も 変えられる」①	_____	121

word27	「過去も 変えられる」②	123
日常の検索あれこれ⑥	「お隣さん 何者」	127
word28	「お隣さん 本当の姿」①	129
word28	「お隣さん 本当の姿」②	131
word28	「お隣さん 本当の姿」③	134
word28	「お隣さん 本当の姿」④	137
word29	「ゲームのフレンド 顔」①	140
word29	「ゲームのフレンド 顔」②	143
word29	「ゲームのフレンド 顔」③	146
word29	「ゲームのフレンド 顔」④	148
番外編1	「デスゲーム 終わらせ方」①	151
番外編1	「デスゲーム 終わらせ方」②	153
番外編1	「デスゲーム 終わらせ方」③	155
番外編1	「デスゲーム 終わらせ方」④	158
日常の検索あれこれ⑦	「エラー 回避」	162
word30	「折原さん 所属部活」①	164
word30	「折原さん 所属部活」②	167
word31	「クラスメイト ち○この長さランキング」	170
word32	「迷子 親の場所」①	173
word32	「迷子 親の場所」②	175
word32	「迷子 親の場所」③	178
番外編2	「人類 滅亡」①	182
番外編2	「人類 滅亡」②	185
番外編2	「人類 滅亡」③	188
番外編2	「人類 滅亡」④	190

word33 「死後 世界」① | 194

word33 「死後 世界」② | 196

日常の検索あれこれ⑧ 「両親 昔の容姿」 | 199

word34 「軽音楽部 部員一覧」① | 201

word34 「軽音楽部 部員一覧」② | 205

word34 「軽音楽部 部員一覧」③ | 207

word35 「昔見たAV 巨乳のやつ」① | 211

word35 「昔見たAV 巨乳のやつ」② | 213

word36 「お隣さん 何やってた」① | 216

word36 「お隣さん 何やってた」② | 218

word36 「お隣さん 何やってた」③ | 221

番外編3 「検索 履歴」 | 223

word37 「SNS バズらせ方」① | 226

word37 「SNS バズらせ方」② | 229

word37 「SNS バズらせ方」③ | 232

word37 「SNS バズらせ方」④ | 235

word38 「オ〇ニーされた回数 ランキング」① | 239

word38 「オ〇ニーされた回数 ランキング」② | 242

word38 「オ〇ニーされた回数 ランキング」③ | 245

word38 「オ〇ニーされた回数 ランキング」④ | 248

日常の検索あれこれ⑨ 「テイラノサウルス 捕食シーン」 | 251

word39 「記憶 消す」① | 255

word39 「記憶 消す」② | 258

word39 「記憶 消す」③ | 261

word39 「記憶 消す」④ | 264

word40	「今年 運勢」①	_____	267
word40	「今年 運勢」②	_____	270
word41	「黒いパソコン 材料」①	_____	274
word41	「黒いパソコン 材料」②	_____	276
番外編4	「王子 結婚方法」①	_____	279
番外編4	「王子 結婚方法」②	_____	283
番外編4	「王子 結婚方法」③	_____	286
番外編4	「王子 結婚方法」④	_____	289
番外編4	「王子 結婚方法」⑤	_____	293
番外編4	「王子 結婚方法」⑥	_____	297
word42	「オナ禁 効果」	_____	300
番外編5	「幼なじみ 死姦」①	_____	303
番外編5	「幼なじみ 死姦」②	_____	306
番外編5	「幼なじみ 死姦」③	_____	309
番外編5	「幼なじみ 死姦」④	_____	312
番外編5	「幼なじみ 死姦」⑤	_____	315
番外編5	「幼なじみ 死姦」⑥	_____	318
番外編5	「幼なじみ 死姦」⑦	_____	321
word43	「折原さん なぜ」①	_____	325
word43	「折原さん なぜ」②	_____	328
word43	「折原さん なぜ」③	_____	331
word43	「折原さん なぜ」④	_____	335
日常の検索あれこれ⑩ 「チャーハン レシピ」 _____ 338			
word44	「さつきまで考えていたこと 内容」 _____	_____	340
word45	「もしも 世界に男が僕1人だけになったら」①	_____	_____

Word 51	「白いパソコン 何」④	401
Word 51	「白いパソコン 何」③	398
Word 51	「白いパソコン 何」②	396
Word 51	「白いパソコン 何」①	393
Word 50	「作戦 成功？」	390
Word 49	「宇宙戦争 止め方」⑤	387
Word 49	「宇宙戦争 止め方」④	385
Word 49	「宇宙戦争 止め方」③	383
Word 49	「宇宙戦争 止め方」②	380
Word 49	「宇宙戦争 止め方」①	378
Word 48	「隣の家 パソコン」②	375
Word 48	「隣の家 パソコン」①	372
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」⑦	369
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」⑥	366
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」⑤	364
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」④	361
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」③	358
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」②	356
Word 47	「黒いパソコン お隣さんから」①	353
Word 46	「未発見 深海生物」	350
347		
Word 45	「もしも 世界に男が僕1人だけになったら」③	345
345		
Word 45	「もしも 世界に男が僕1人だけになったら」②	343
343		

日常の検索あれこれ① 「1番エロい 動画」

word52 「髪の毛 誰の」①

word52 「髪の毛 誰の」②

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」①

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」②

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」③

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」④

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」⑤

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」⑥

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」①

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」②

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」③

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」④

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」⑤

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」⑥

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」⑦

443

日常の検索あれこれ(最後) 「今まで ありがとうと言われた数」

word55 「この服 変じやない」①

word55 「この服 変じやない」②

word55 「この服 変じやない」③

word55 「この服 変じやない」④

word56 「付き合える未来 あるか」①

word56 「付き合える未来 あるか」②

word56 「付き合える未来 あるか」③

462 459 456 454 451 448 446 440 437 435 432 430 428 426 424 421 418 415 413 411 408 406 404

word58	「夢 叶え方」	⑫	531
word58	「夢 叶え方」	⑪	529
word58	「夢 叶え方」	⑩	527
word58	「夢 叶え方」	⑨	523
word58	「夢 叶え方」	⑧	521
word58	「夢 叶え方」	⑦	518
word58	「夢 叶え方」	⑥	515
word58	「夢 叶え方」	⑤	512
word58	「夢 叶え方」	④	509
word58	「夢 叶え方」	③	506
word58	「夢 叶え方」	②	504
word58	「夢 叶え方」	①	501
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	⑦	498
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	⑥	496
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	⑤	493
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	④	490
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	③	487
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	②	484
番外編（最後）	「親ガチャ 僕の両親」	①	481
word57	「歌う曲 何がいい」	④	479
word57	「歌う曲 何がいい」	③	476
word57	「歌う曲 何がいい」	②	474
word57	「歌う曲 何がいい」	①	471
word56	「付き合える未来 あるか」	⑤	468
word56	「付き合える未来 あるか」	④	465

あとがき・ネタバレ

589

Last word 「さようなら」②

584

Last word 「さようなら」①

581

579

Word60 「黒いパソコン なるべく優しい人へ送付」②

577

Word60 「黒いパソコン なるべく優しい人へ送付」①

Word59 「黒いパソコン 作り方」② 574

Word59 「黒いパソコン 作り方」① 571

Word58 「夢 叶え方」☒ 567

Word58 「夢 叶え方」☒ 564

Word58 「夢 叶え方」☒ 562

Word58 「夢 叶え方」☒ 559

Word58 「夢 叶え方」☒ 557

Word58 「夢 叶え方」☒ 554

Word58 「夢 叶え方」☒ 552

Word58 「夢 叶え方」⑳ 549

Word58 「夢 叶え方」⑑ 547

Word58 「夢 叶え方」⑒ 544

Word58 「夢 叶え方」⑓ 542

Word58 「夢 叶え方」⑔ 540

Word58 「夢 叶え方」⑕ 538

Word58 「夢 叶え方」⑖ 535

Word58 「夢 叶え方」⑗ 533

word1 「このパソコン 何」

ある日の夜、就寝の為に自室に入った僕は見慣れない光を見た。暗闇をぼんやりと照らす淡い光だ。

なんだこれ――。

半分閉じていた目に力を入れて、恐る恐る蛍光灯のスイッチを入れる。

すると、机の上に現れたのは謎のパソコンだった。

黒い色をしているノートパソコン。ディスプレイがあつてキーボードがある。黒いマウスもセットだ。一見したところ何の変哲もないごく普通の代物。

謎なのはなぜそんなものが自室の机に置いてあるか、ということだった。

僕は自分用のパソコンを持っていない。まだ高校2年生なので親からスマホは与えられていても、パソコンは与えられていない。だから、昨日まで無かったパソコンがここに置いてあるのはおかしいのだ。

近づいてよく見てみる……。そうしてみても、やはり特におかしなところはない普通のノートパソコンだ。画面は起動したばかりのパスワード入力画面のようで、黒い背景に白色のワードボックスが中央にぼつりといるだけ。

親のパソコンはこんな色だったか。いや違う。僕の家には黒色のパソコンはない。友達の家でも親戚の家でもこのパソコンは見たことが無い。誰かがここに間違えて置いていったという線は薄い。

じゃあもしかして僕へのプレゼントか。大きくなってきた僕へ親からのサプライズプレゼントだろうか。

少し嬉しい気持ちが見せる。しかし、誕生日もクリスマスも今日からはまだずっと先だ。だとしたら……。

「このパソコン 何だ」

僕は独り言でぼそりとつぶやく。

するとその時パソコン側からコンタクトが取られた。

「このパソコン ナニ ケンサクワードハコレデヨロシイデシヨウカ」

「え」

車のカーナビみたいなイントネーションで女性の声がする。僕は画面に顔を近づけて何が起こったのかを確認した。

見ると中央のワードボックスに「このパソコン 何」と入力されている。

あ、何かAIのヘルプ機能みたいな感じのやつかな——。パソコンの知識が乏しい僕はそう思った。そして機械音声の言う通り軽く操作させてもらえば謎のパソコンの正体に辿りつける気がしたのでパソコンの前に座る。

この場合そのままEnterキーを押せばいいよな。それしかない。ほいっと。

弾むようにキーを叩く。そのほうが気分が良いので2回。これでユーザーネームとかが見れたら話は早い。

ワードボックスが消えて代わりに画面中央にグルグルが表示される。スマホでも動画を見る時なんかによく見るロード中のグルグルだ。

最近のパソコンは進化したんだな音声認識とは。腕を組んで数秒間グルグルが消えるのを待った。

そして、次に画面に表示されたものを見て僕は眉をひそめる。

予想外にそこそこの長文がそれだけで画面に表示された。

「このパソコンにはありとあらゆる全ての疑問の答えが入っています。あなたは気になる言葉を入力することでその答えを知ることができますでしょう。しかし、それにはルールがあります。答えを検索することができるのは1日に1度だけです。1日に1度であればどんな質問にも答えることができます。宇宙のことでも、未来のことでも。そう、このパソコンならね。」

英語を翻訳したかのような文で構成された文章。その内容を読み解くと最初に抱いた疑問はより深いものとなった。

「いや……何だよこのパソコン」

次の日、僕は朝から突然部屋に現れたパソコンと向き合っていた。寝て起きてても黒いパソコンは変わらず机の上にあった。顔を洗って朝飯を食べて、頭がはつきりと目覚めても確かに目に映る――。

となると、ちよつと不気味で怖い。よくよく考えれば考えるほど、とんでもない出来事だ。何で突然謎のパソコンが自分の元に現れたんだ。

少し離れた場所で警戒しながらパソコンを睨む。昨日も気になつて寝付くのが遅くなった。もつと言うとほとんど寝てない。迷惑な話である。今日も平日で学校に行くというのに昼頃にはまた眠くなつて勉強どころじゃないだろう。

でも、こいつを気味が悪いと速攻で処分しようとは思わない。何でも検索することができるパソコン。もしそれが本当ならこれは人生において禁止級の超チートアイテムだ。自分の人生を如何なる方向にも変えられるほどの。

だからその真偽を確かめる必要がある。

僕は黒いパソコンのキーボードに指を乗せた。当たり前前にプラスチックの無機質な感触を指先に感じる。人智を超えた物質に触るのは僕の鼓動を早くした。

手っ取り早くこれが本当に何でも分かるパソコンだと判定するには何と検索するのがいいだろうか。1日1回の制約があるが、今日は真偽を確かめることに使うとして、上手い事を求める方法。

ただ自分が知らないことを調べるだけでは当然ダメだ。自分が知らないことでも誰かが知っていて、普通のパソコンでも調べることができるならこのパソコンの性能の証明にはならない。

全く誰も知る由がない情報でもダメ。地球が終わる日を調べたとして、それがデタラメではなく本当かなんてその日になってみないと分からない。

だとすると、今現在自分には全く想像が付かないし普通のパソコンでも調べられない、それに加えてすぐに答えが分かること。これが条

件になる。

そう難しく考えなくてもこの条件ならたぶん、少し未来の話をこのパソコンに聞いてみるのがいいだろう。今日の夕食のおかずだとか、今日行われる何かしらのスポーツの勝敗だとか……。

検索することの方向性は決まったのだけれど僕はこれというものをすぐに決められなかった。おかずや勝敗じゃ当てずっぽうでも命中させられる気がしてしつくりこない。キーボードから手を離して、頬杖をつく。

そしてしばらく、僕は結局しつくりこないながらも検索ワードを「親友の弁当 今日」にすることにした。

他人の弁当なら自分の家のおかずを調べるより信憑性がある気がする。

入力してEnterキーを叩くと昨日と同じように出て来た答え。それは……。

「今日のあなたの親友の昼ご飯はカップラーメンです」

「は？」僕はだらしなく口を開けた。それというのも全くあり得ない回答だったからだ。僕が昼飯を共にする親友は真面目なタイプで、弁当も毎日親の手作り。たまにコンビニ弁当を持ってきているところすら見たことが無い。

間違っても高校の昼休みに目立とうとしてカップラーメンを食べるなんてことをするタイプじゃない。

「はあ……」

あほらしい。期待して損したみたいだ。手の込んだイタズラか。どこかで俺が検索したワードに適当に返答している奴がいたりするらしいな。

逆に言えばこれが本当であれば確実にこのパソコンは真だ。でも、ありえない。そうなったら100回土下座してやる。僕は黒いパソコンを軽く殴ってそのまま家を出た。時間を取られて遅れそうなのにも腹が立っていた。

そしてその日の昼休み――。

いや……めっちゃカップラーメン持つとるやんけ……！

そこには今まで見たことが無い親友の姿があつた。教室で粉末スープを開けかやくを開け、魔法瓶の水筒に入った熱湯を容器に注ぐ。

「いやいや、嘘やん。自分そんなキャラとちやうやん。急にどうしたん。」

周りの友達やクラスメイトも奇妙な目を親友に向ける。眼鏡をかけた真面目なタイプの親友どころか、クラスメイトの誰も高校の昼休みにカップラーメンを作っているところなんて見たことが無い。

「いや今日さ。俺もビックリしたんだけど、親がこれ持っていけてカップ麺と熱湯をさ——」

そんなことある？何かの罰ゲームじゃなくて？

心の中でツツコミを入れてはみるけれど、僕の親友は嘘偽りない表情で。むしろ眼鏡を湯気で曇らせながら恥ずかしそうに言っているのであつた。

「なあ。いきなりだけど、お前って自分用のパソコン持ってたっけ？」

「え？持っていないけど。ほんといきなり何の質問？」

「いや、何でもない……」

僕は教室中に充満するカップラーメンの匂いと、パソコンが本物だったこと——2つの理由でごくりと喉を鳴らしたのであつた。

word3 「僕のことを異性として好きな人 一
覧」

また次の日、今日は土曜日、休日である。

帰宅部の僕にとっては何も予定が無い真っ白な休日だ。たぶん家で1日中ごろごろ寝て過ごす。既に朝起きてからもずっとベッドの上で大の字になっていた。

でも楽しみにしているというか考えていることが1つある。そう、もちろん黒いパソコンで何を検索するかだ――。

突然手に入れた魔法のアイテム、何でも検索できるパソコン。それをどうやって活用しようか。

かれこれ1時間ほど天井と相談している。何でも知ることができないなら知りたいことなんて山程あるけれど、1日1回という制限がある以上思いついたものを安易に検索することはできない。

突然現れたパソコンがいつ消えるかも分からないし……。慎重に選ばないと……。

でもまあ……最初はこれしかないだろ。僕はベッドから起きて収納に隠すようになった黒いパソコンを取り出す。

常に電源がついた状態で、それを切ることにはできない奇妙なパソコン。今日も画面にはワードボックス1つだけ。そこへ決めた検索ワードを入力する。

「僕のことを異性として好きな人 一覧」

これしかないでしょう。僕が今一番知りたいこと。

きつと彼女のいない男子高校生なら誰もがどうにか手にしてみたいと思うであろう情報。恋愛のお話だ。検索の仕方は色々とパターンがあるがこれにした。

今一番気になる子がどうだとか、その恋が叶うかとかよりも欲求に従ってこの質問。男子高校生の僕にとってこれだけでこれからの生活の幸福度が全て決まってしまうというくらい究極の質問である。

入力したはいいものの、僕はその先へ進むのを恐れていた。もし

……あの子の名前が無かったら、だけでもしあんな子の名前があったりなんてしたら……。

心を揺らしながら、意を決してEnterキーを押す。結果は……。グルグルが無くなるのが怖くて僕は目をつぶる。そして……。「あなたのことを好きな女性は0人です」

目を開けた僕は……夢が覚めるのを待ったのだった。しっかりと目を開いた状態でこれが夢の中であることをただひたすら願ったのだ……。

うなだれにうなだれることになった休日。僕は比喻ではなく本当に心に穴が開いたんじゃないかというほど、自分の胸に心臓の所在を感じなかった。

やっぱりこのパソコンは嘘つきなんじゃないか。何度も疑問に思った。

気付けば夜……そしてまた日付が変わった……。

僕はその日の黒いパソコンでの検索を昨日と同じものにすることにした。対象者を変えて。

きっとアイドルや芸能人であれば何万人という結果が出る。その質問を今度は僕が通う学校の同級生で1番のイケメンで試してみることにした。

なんだかもう怖いもの見たさみたいな気持ちだった。自分とあいつでどれだけ差があるんだろう。

表示された結果は……54人。ちなみに僕の同学年女子は約100人なので、そういうことでそんなところだ。

一覧で検索したので学年一のイケメンが好きな女子達の氏名もフルネームで表示される。

同じクラスに在籍している女子の見たことがある苗字と名前から、知らない女子の名前まで。きっと後輩だとか先輩だとか。

おそらく適当に書かれたのではない歩美や晴香という名前達を見て、より確かな黒いパソコンの信憑性も感じた。

これが現実。すげえんだなイケメンって……こんなに好意の向く先は偏っているのか……。

そこまでされると吹っ切れてやけくそになった僕はそっ閉じした
黒いパソコンを収納の奥に閉まって、家中のお菓子とジュースをかき
集めた。

word 4 「幸せ 今すぐ」①

まだ太陽の元気が良い午後、帰宅部の僕は自宅に帰ってきた。荷物を置いて、制服を脱いで、パーカーに着替える。帰宅が早い僕は帰宅してから在宅モードに入るのも早かった。

手を洗うと、僕は自室に戻る。マイホームの中のマイホーム。ドアを閉めると心が落ち着く。

今日の学校生活はあまり気分が良いものではなかった。黒いパソコンに自分のことを好きな女子がいないと聞かされたからだ。そんなにイケてないほうではないと思っていたのだが、現実には厳しいらしい。

まあモテてるほうでもないと自己評価していたが、いざ0人と言われると傷ついた。教室ではどうせ誰も自分のことなんか好きじゃないんだからと、いつもよりも顔に力を入れずに過ごして、半ば睨むような視線で周りの女子を気づかれぬように見たりした。

そんな週末から続くちよつとした自暴自棄な生活。でも、そんなことはよく考えたら大したことじゃない……。

収納の奥に押し込んだ黒いパソコンがまだそこにあることを確認したら、僕は部屋に帰って来た時よりもさらに大きな落ち着きを感じる。

だって、これがあれば今の不幸なんて吹っ飛ばしてお釣りがくる程の幸福が得られるじゃないか。

——例えば、分かりやすくお金という幸福を得ようと思えば。

この未来も知れるパソコンをもってすればギャンブルで簡単に大金を当てることができよう。競馬や競艇、番号を自分で選ぶタイプの宝くじなんかは約束された勝利にできる。

どの馬が勝つかを知つてからぶつぱでできる。言葉の意味が違うが、勝ち馬に乗るといふ言葉をそのまま実行できるのだ。

だから僕は勝者なのだ。何を落ち込むことがある。

今日は数日何かを知る為だけに使った分、直接的な利益を得る為に検索を使いたい。して……どんなワードにしようか。

ギャンブルの為に使えば簡単だけれど、高校生という身分上それは難しい。やったことが無いからやり方も分からないし。邪な考えは不幸を知った頭からはいくつも浮かぶけれど、現実的に実行できるものとなると悩ましい。

スマホを弄りながら考えて、浮かんだ第一候補はプレイしているソシャゲで大当たりが引けるタイピングを検索することだった。

現代人が多くプレイするありとあらゆるソシャゲで、みんな大好き大正義ガチャ。様々なキャラクターやアイテムをランダムで入手するシステムで、ほとんどの場合は大当たりが引けるのは低確率だ。それを確定にする。

欲しいキャラが手に入ると、僕も嬉しい……けど……それって虚しくないか！すごいパソコンを使って行こう僕の野望ちっちゃー！

待て待て。そんなこといつでもできるし、運が良ければ黒いパソコンがなくてもいいし、金を手に入れていっぱいガチャ引いたほうがいいだろ。

でもでも。それしか思いつかん……。

悩んだ僕は拳句の果て、「幸せ 今すぐ」と検索したのであった。

word 4 「幸せ 今すぐ」②

「幸せ 今すぐ」という検索ワード。かなり人任せならぬパソコン任せな質問である。

どこでどんな風なタイプの幸せを見つけに来てくれるのか。そもそもこんなアバウトな検索で答えが出るのか。

そう思いながらEnterキーを押した僕は期待しながらグルグルが消えるのを待った。得られる幸せの量は1から100まで可能性があると思う。こういう時は100のほうが起こることを期待してしまふ。思いもよらぬ魔法みたいなことが起こることを……。

画面が切り替わる。

「ちょうど今からあなたが最寄りのコンビニへ行けば良いことが起こるでしょう。あなたが思うペースで歩いて、あなたが思う物を買ってみてください。」

僕はそれを見ると、急いで部屋を出た。

雑なパーカー姿に財布だけを手にして。正直帰ってきてからすぐに、しかもこんな格好で外には出たくなかったが、黒いパソコンに幸せを求めた結果に今から外へ出ると言われたら外出せざるを得ない。

僕の家からコンビニは近かった。歩いて10分もかからないくらいだ。静かなほうの住宅街に住んでいるけどそのくらい。

そんな距離をポケットに手をつ突っ込んで歩く。誰か知り合いに会ったりしないか不安で、ポケットの中の手はぎゅっと握ってしまっただ。

そして何事もなくコンビニへは到着する。

そうしたは良いものの、一体これからどんな幸せが起こるというのか。

今回の黒いパソコンからの答えは凄くアバウトだった。僕がアバウトの質問をしたせいだろうか。僕はどんな幸せが起こるのかを全く教えてもらっていない。

とりあえず言われた通りにカゴを持って店内を歩く。自分が好きなように買えと言われたので、なるべく普段通りの感じで。

とは言ってもここからコンビニという場所で大した幸せも起こりそうにないけれど、どこまで期待していいのやら。

そのコンビニで1番好きなパンと2番目に好きなパン。ざっと見て選んだ新発売のジュース。そして、丁度買わなきゃいけなかった毎週読んでる漫画雑誌。さらに、これも買い忘れていたシャーペンの芯。あとは、見かけて無性に食べたくなったソーダ味のアイス。

それらが入ったカゴを持って僕はレジに向かった。

「いらっしやいませ」

店員に会釈してカゴを渡す。店員がレジ打ちを始める。

まだ何も良いことは起こらない。まさか、レジ打ちをする店員がひそかにファンをしている好みの女性だということがそれじゃあるまいし。さすがにな……かわいいけども……。

「820円になります」

僕は1000円札で支払って、小銭を受け取る。かわいい定員がいつもよりも丁寧に小銭を渡してくれた。手が触れられて嬉しい。

けど、これも違うはず。

「それと現在700円以上お買い上げでくじが引けるキャンペーンをやっております……」

きたっ……。これだろ……。

「1枚どうぞ」

店員がくじ用のBOXを僕に向けた。絶対これだ。僕は気合を入れて1枚の紙を掴んだ――。

「おお。おめでとうございます！そちらの商品お持ちしますね！」

――コンビニから出た僕はなんとも言えない顔をしていた。手には購入額以上に膨らんだビニール袋を持っている。

当たった商品はカップラーメンだった。かなり良いやつではある。値段もカップ麺の中では高いし、味も旨いと評判で品薄になるほど。量が多いのも男子高校生には嬉しい所だ。

でも、この程度じゃなあ……。思っていたのと違う。嬉しいんだけど嬉しくねえよ。

普通に買い物に来たのだったら喜んでいいおまけだが、今回の外出の期待度からしたら随分期待外れな結果だ。

くじを引くときは大きく射幸心が煽られたが、よくよく考えてみればコンビニくじが検索した結果の幸せという時点でシヨボい。そもそもこういうくじって本当の当たりは応募券とかを引いてハガキを出した先にあるのだ。

僕は家に着く前に買ったアイスの封を開けて、ため息を吐きそうな口を塞いだ。当たりを引いたはずなのにハズレたような気分だった。頭をきーんとさせながら急ぎ足で食べたソーダ味のアイス。食べ終わるころに再び部屋に戻ってきて、木の棒をくわえたまま黒いパソコンの前に座る。

また片付けておかなければ。今日のは質問の仕方が悪かったという自分の責任でもある。明日はもつと良い検索をしよう。

黒いノートパソコンを折りたたもうとする。その時だった。操作してもいないのにパソコンの画面が切り替わった――。

「幸せなんて己の受け取り方次第。幸せなんて探せばどこにでもあるんですよ。」

検索した時と同じような文の表示。

「え」

僕は驚いてくわえていた木の棒を口から落とした。転がり落ちる棒が止まると、そこには「当たり」の文字。

それが初めて何も言っていないのに、黒いパソコン側から話しかけてきた瞬間だった……。

word5 「検索 デメリット」

この黒いパソコン……何でも検索することができるパソコン。見たまんま機械でメタリック。他のありふれた家電と同じように人間が操作することで、人間がプログラムした通りに動く道具。形からはそんな風に見える。

けど、少し違っている。

僕が実行した検索に対して融通が利く……。本来のパソコンであれば答えを求める為に上手くワードを選んで検索する必要があつて、アバウトな質問ではなかなか答えに辿り着けない。

それとは反対に黒いパソコンは求める答えをパソコン側が上手く意思を汲み取って出してくれる。

今までも僕が検索ワードに入っていたりとかかなりアバウトだったのだが、求める答えを出した。

データ内から答えを引っ張り出してきてくれるというよりは、神様にでも話しかけている感じだ。

そして、昨日パソコン側から操作もしていないのにお言葉があつた。

本当にこのパソコンは何なんだろう。部屋にパソコンが現れてからずつと考えていることだけど、僕はまたパソコンと向き合つて改めて思った。

不気味さも増した。このパソコンに生物的な知能を感じたことで、正直怖くなった。人工知能とかではないちゃんとした生命体の知能。どういう仕組みなのか。人智を超えた物質ですと言われたらそれまでだが……。

昨日当たったアイスの棒を手で回しながら、黒いパソコンの黒い画面に薄っすらと映った自分の顔とにらめっこする。一瞬その自分の顔が不自然に目を動かした気がして、僕は息を止める。

今日はやけに部屋の照明が暗く感じる。重力が強い……。空気がねつとりと肌を撫でてくる……。

目に見えない何か部屋にいるんじゃないかと、第六感が危険信号

を出している……気がする。

僕はいつもより慎重にキーボードを操作して、決めていたワードを入力した。

詳しくパソコンの事を知るよりもまず第一に確認しておきたいことがある。だからこのワードにした。

「検索 デメリット」

旨い話には必ず裏がある。何かを得るためには何かを失わなければならぬ。この世で生きていくうえでよく聞くような言い回しだ。

このパソコンもそういう類の物ではないかと不安になった。こいつは詐欺師みたいなもので、僕が気付かないうちに何かを奪っているんじゃないかと。検索に伴うデメリットがあるのではないかと。

寿命を奪うとか、死後に地獄へ落ちるだとか、バッドエンドのお話では大体そうだ。

少し使ってしまったけど、まだ手遅れじゃないならさっさと捨てなければならぬ。考え出したらそうとしか思えなくなっていた。

もう、こんなもの使うんじゃないかった。

検索結果を待っている間、背筋に寒気が走った。もう僕は気づかぬうちに悪魔へ心臓を差し出して……。

「このパソコンで検索することにデメリットはありません。何度使用しても問題ありません。」

あっ……。

じゃあ、これからもたくさん使おうわ。

「ちなみにあなたが捨てるまで消えませんよ」

それから僕は心の中で汚い笑い声を発しながら、この先検索したいワードリストをノートにまとめた。

部屋の空気はこれでもかというほどに軽くなっていた。

word 6 「地球 終わる日」

初めは漫画雑誌に付いていた懸賞の応募から始まった。

ふと色んな商品が並べられた1ページが目に残った時、これは良いものがあつたと思つたのだ。

黒いパソコンで検索すると、ハガキを出すタイミングと入れるポストから一言コメントの内容まで細かく指示があつた……。

それからというものは僕は懸賞というものにハマることになった。これなら高校生でもタダでギャンブルじみたことができる。

それに気付いたらこれこそが正解だと思つた。SNS何かでやっているワンタップで応募可能なちよつとした懸賞なんかも探してみれば種類はいくらでもあつた。

その次は前に思い付いたソシヤゲのガチャでもずつと欲しかつたキャラクターを手に入れたし、高校の授業で出されためんどくさい課題の答案を教えてもらうこともあつた。

ノートへ黒いパソコンで検索したいワードリストを書き込むと、目に付いたものから特に選ぶことなくキーボードで入力していった。1日1回、時間帯も特に決めずにバラバラで。

定期テストの答えを全部教えてもらおうかとも考えている。けれど自慢じゃないが僕は勉強が苦手ではないし、そこまでやるかは……。まあそれはまたその時が来たら悩もう。時間はある……。

小さなギャンブルや小さな気になることは生きているとたくさん見つかった。漫画やドラマの次の展開とか、いつからか失くしてしまつてずつと見つかつていない探し物。芸能界の裏事情なんかも。

そういつた小さな幸せを得て、小さな好奇心を満たす生活の中で当然大きなことも検索する——。そんな生活が続いた——。

僕はある日の夜に、新しく買った音楽プレイヤーでお気に入りの歌手の音楽を聞きながら、新しく買ったクツションを抱いて、新しく始めたソシヤゲをプレイしていた。全てすぐに結果が出るタイプの懸賞で当てた商品券で買ったものだ。

僕はちよつぴりお金持ちになっていた。まだまだ本当にちよつぴりだけど、前から買いたかったものは買えた。

その内、好きなお菓子がダンボールで1箱やら好きな芸能人のサインなんかも届く予定である。

僕は充実していく生活の中で全てを手に入れられる気でいた。と
いうか、実際手に入れられるはずだ。

鼻くそをほじりながら、屁をかます。僕はこの世の裏の王になってしまったのかもしれない。そんな気分です。

ふと窓から見た夜空では満月が見たことないくらいに輝いていた。その月を見てぼんやりと思う。この時間はいつまで続くのだろうか。

生きていく中で何度か疑問に思ったことがある。けれど知れるはずが無いから諦めていることの1つ。こんな平和な空気はいつまで地球にあるのだろうか。

それを考えると、心が透明になっていくというか……達観した気分になる……。誰にでもそういうことってあるんじゃないだろうか。

綺麗な月を見たりしてふと思うのだ。

今日はまだ何も検索していない。だから何を検索するか迷っていた。

もう日を跨ぐまで時間が無かったし、僕は思い立ったら気分任せですぐに行動した。

「地球 終わる日」

僕は黒いパソコンにその答えを問うた。

「地球が宇宙から消える日は、19万年201日後。地球上の人間が0人になる日は――」

僕は黒いパソコンの画面を見て、ただ口をだらしなく開く。

遠い……だけど、そんなに遠くもないんだな……。

word 7 「ドラゴン 実在」①

皆さんは空想上の生き物と言われると何を思い浮かべるだろうか
—？

僕は当然、「ドラゴン」だ—。

この世界には時折その存在が実際にあるのか語られる生物がいる。宇宙人だったり、妖精だったり、魔法使いだったり、幽霊だったり……。幽霊は生き物ではないけど……。

多くの人間はそんなもの存在しないと言うだろう。非科学的で馬鹿らしい。信じているのはまだ世の中のことを知らない子供くらいだ。議論を交わすまでもなく簡単に否定する。

でも空想上の生き物たちが人々を引き付けるのもまた事実である。その存在を信じていない人たちも、現実離れたそれらについての話を聞くこと自体は好きだったりする。口ではないと言いつつも、心のどこかでロマンを感じている。

もし本当にいるのなら……そうやって空想上の生き物たちに夢を見ている。

あなたには存在を信じているものや、信じたいものがあるだろうか
—。僕にはいる—。

そう、ドラゴンだ。

僕は子供の頃を買ってもらった「世界のドラゴン図鑑」という題名の本を机の上に置いた。ずっと昔に本棚の奥に閉まってからもう10年は取り出していないんじゃないかという代物だ。

手元にあるだけで古臭い紙の匂いがするし、端のほうは傷だらけになっている。

今日の検索ワードを決めた僕は、実行する前に昔買ってもらった本のことを思い出して、予習するというか、ノスタルジーに浸りたくなっただ。

ボロっぼいその本。しかし最初のページをめくると、中はそれほど汚れていなかった。

見開きで描かれた巨大なドラゴンの絵、赤い体に大きな翼が生えていて、口からは炎を吐いている。子供向けのイラストではなくて、ゲームに出てくるようなリアルな感じの絵だった。

どういう経緯で買ったかと思ったら、謎の凶鑑の一枚の絵、子供の頃ただじつとそれを見ていた午後のことを今でもぼんやりと覚えている。子供の頃は大好きだったのだ。ドラゴンが。

そして、今でもそれを見ると胸が躍った。

かっこいい……。心からそう思えた。

昔好きだったものを収納の奥から引っ張り出してくると楽しいとかではなくて、普通に。高校生の目から見てもやっぱりドラゴンってかっこいい。

僕はじっくり凶鑑を見ようかと思っていたけれど、居ても立っても居られなくなって黒いパソコンハードを入力する。

「ドラゴン 実在」

今日の検索ワードはこれだ。ペガサスでも雪男でもなくて、ドラゴンがこの世にいるかどうか。

それをこのパソコンに聞く。

いないとは分かっているけど期待した。だってドラゴンは空想上の生き物の中では可能性があるほうだ。世界中の昔話や神話で登場する共通のモチーフであることがその理由。日本でもヨーロッパでも昔話にドラゴンが登場する。

だからもしかしたら……。もしかしたら昔は本当にいて、もしかしたら今も……。

でもまあ、いないか。そう思って結果を見た。しかし……。

「この世界にドラゴンは実在しません。」

黒いパソコンはそういう答えを出した。

いや、いるのかよ——。

word7 「ドラゴン 実在」②

黒いパソコンからドラゴンが実在することを聞いてから数日後、週末の土曜日。僕は自然が多めの隣町に来ていた。

僕が住む町から都市が発達していないほうへ3駅ほど電車に乗ると、たったそれだけの距離で吸い込む空気の透明度が全然違うことが分かる。そんな場所だった。

すんなり体に入ってくる空気と快晴の空、道端で寝ころぶ野良猫も気持ち良さそうだ。

今日ここへ来たのは他でもない。ドラゴンをこの目で見に来たのだ。

ドラゴンが実在すると聞いてからの数日間の黒いパソコンでの検索はドラゴンについての情報を詳しくすることに使った。

「ドラゴン 実在」は別にいなくても良いと思って検索したことだったのだが、いるのなら当然の行動だ。

黒いパソコンによると……ドラゴンは意外と身近にいるらしい。個体数はその辺の生物と比べると随分少なくて、大変貴重な生物ではあるけれど、こんな都市から少し離れたとはいえまだまだ人の多い町にもいるほど。

それというのも普段は姿を変えていたり消していたりするそうなのだ。ドラゴンとか龍と呼べる奴らは我々と同じように地球で暮らしているが、人間と干渉することはない生物なのだそう。

彼らは賢くて、上手く人に見つからずにこの社会へ溶け込むことができている。普段はそもそも人がいない場所で暮らしているが、たまに人里へもやってくる。猫や鳥なんかに姿を変えて。

道行く野良猫も、もしかしたら本当はドラゴンが化けている姿かもしれないと黒いパソコンは言っていた。人に化けることもあるそうだ。すごくファンタジックな話である。本来ならとてもじゃないけど信じられない話だが、あれが言うならそうなのだろう。

人間がどれだけ祈ろうとも、探そうとも、決して望んで拝むことはできないドラゴン。そんな彼らを見る方法も教えてくれた。

僕は小学生の夏休みに戻ったような気分であっていた。

歩いて目的地を目指す。その足取りは僕の興奮する気持ちをそのまま表していた。

この辺りでは少し目立つ、周囲の山よりも倍ほど大きくそびえる山。僕はそのふもとまで行くとまた、歩いてそこを登る。

山登りなんてこの年になると僕にとって久しぶりのことであった。加えて、僕は高校で運動部に入っていないので若くして運動不足だった。思っていたよりも坂道は足にくる。

ふくらはぎがじんわりとして、太ももが上がらなくなってきた。それでも歩みを止めずに頂上近くの開けた場所まで来た僕の足は、その時には疲労困憊で……。

足が棒のようという例えがあるけれど、これはもう本当に僕の足じゃなくて棒になってしまったんじゃないか。と僕は思った。

だけど、気持ちの良い疲れだ――。

それから僕は腕時計を見ながらその時を待った。何度も何度も時計を見てタイミングを計った。

深呼吸をして、目に持参した目薬も差す。

普段は姿を消していて人間の目には映ることが無いドラゴンも、極めて稀な条件が揃うとその姿を見ることが出来る。

太陽からの光の屈折だとか、目の水分量だとか、空気の湿度だとか……様々な要素の線が天文学的な確率で交わると見ることが出来るのだ。

黒いパソコンは言っていた。

僕は指示された通りの時間に指示された通りの行動を取って、空を見上げた。条件を調整する為に周りをうろろうしながら瞬きを繰り返す……。

そして現れた景色は、わずか10秒ほどの出来事であったが、僕にとって人生で1番の景色だと確信が持てるものだった――。

ドラゴンと言うよりも龍に近いだろうか……。鋭い目の近くに髭があつて角がある。

長く巨大な体を持つ龍が地上から天高くへ、僕のすぐ近くを通り過

ぎていった。

金色の鱗を輝かせて悠々とうねりながら空を泳ぐ龍の姿には、ただひたすら圧倒された……。

見ることができる条件が無くなったのか瞬く間に幻のように消えていったけれど、確かに見ることができた……。

その場で尻もちをついた僕は町の景色を見下ろしながら、しばらくそこから動くことができなかった。

word 8 「気になるあの子 オ〇ニー事情」

まさか、ドラゴンが本当にこの世に実在していたとは……。歴史上の人物が幼い頃に龍を見ただとか聞いたことがあるけれどきつと嘘ではなかったのだろうか……。。

しばらくの間、僕の頭ではそんな言葉が繰り返された……。そして考え方や価値観みたいなものが変わった。

日本とは全く違う外国に旅をすると人間が大きくなるみたいな話を聞くけれど、それと似たものだと思う。

おそらくこの世界にあるものの中でも最高位に分類されるであろう驚きで美しい光景。それを見たことで大抵の事では動じない気の大ききみたいなのが備わった。気がする。

龍を見た今であれば、虹を見てもどんな絶滅危惧種の生物を見ても、何を見ても何を聞いても驚かない。

そんな僕の次なる目標も決まらずばり、自分磨きである。

この素晴らしい世界で小さく纏まっちゃいけない。そう思った僕は自分を高めることにした。自分を高めて……。かつこよくなつて……。女にモテて……。彼女を作る。

少し不純なところへ帰結した気もするけど、ぶっちゃけそれがやりぱり全てだという結論に至った。とにかく彼女が欲しい。僕は今まで碌に付き合った経験が無かった。

でも、この黒いパソコンがあればその状態も解決することは容易いはずだ。

イケメンばかりがモテているという現実を黒いパソコンから教わってから遠ざかっていたが恋愛の話に帰ってきた。

僕は自分磨きを志した次の日からとりあえず筋トレを始めた。まずは雑にたるんだ体を強くする。これは間違いなく必要だ。

自室のベッドの上で腕立てして腹筋して背筋をする。そんなことを長い事してなかった僕は筋トレが1セット終わる度に枕に顔を沈めて、その度にモテる為だと気合いを入れた。

あとは何が必要だろうか……。筋トレをしながらも考えた……。モテるようになる為に何を黒いパソコンへ訪ねようか。色々あると思うけど何からか迷う。

何を聞くかを尋ねるといふか、どうやったらカッコよくなれるかとアバウトに質問してみるのもいいけれど……。

僕は悩んだ……。悩んだ挙句……。辿り着いた答えは……。

「気になるあの子 オナニー事情」

考えている間にムラムラしてきたのだ。これからの自分磨きのモチベーションにもなるかもしれないし、前からずっと気になっていたことを結局のところどうなのか調べることにしたのだ。女の子ってどうなんだろう。

クラスメイトの中で僕が最も思いを寄せている清純系女子について僕は黒いパソコンに尋ねた。下半身に突き動かされて――。

「彼女の部屋のぬいぐるみ置き場にはアダルトグッズが隠してあります。かわいいぬいぐるみの中押し込まれる形で1本のオ○ニー専用で作られたバイブがあります。これは彼女が親に内緒で通販により買ったものであり、彼女はこれを使って週3日のペースで快感を得ているでしょう」

えっへえ……。こりや驚いたな……。

僕は30分後――。賢者になった。

word9 「歌 上手くなる方法」

僕は窓から入ってくる風が気持ちの良い日の午後、自室で鼻歌を歌っていた。そよ風に目を細めながら、体をほぐす体操なんかをしたりして。

かっこよくなることを決めた次の日、さっそく始めた筋トレで体のあちこちが固まっていて、それをほぐすことも気持ちが良かった。

今は家に僕が1人だけ。気分が良くなってきた僕は鼻歌からアカペラでの1人カラオケに移行する。

好きな歌手の好きな歌、発せられる僕の声は中々に達者で、そこそこにかっこいいではないか。

どんどんハイになっていった僕のカラオケは、いつの間にかそれが目的になって。体操はやめてマイク代わりにボールペンを握っていた。

普段適当に聞いている歌の歌詞をスマホで検索したりもする。そうやって歌う自分の歌声をそのままスマホのボイスレコーダーで録音もした。

そんな時、歌っていた曲の音程が高くなるところで、僕は声が出ずに裏返った。誰もいないけれど、間抜けな声が出ると少し恥ずかしくなる。

好きな曲だからよくこうして歌うのだけれどいつも同じところが上手く歌えなかった。自分なりに声の出し方を変えてみても、掠れたり音程が外れたり。

こういう時には歌っている歌手と自分の喉の生まれ持った出来の違いのせいにして、なんとなく自分ももっと気持ちよく歌えたらとナイーブな気持ちになるのだ。

だけど、今の僕はそれで終わらない。できないことがあればやり方を聞いてみればいいのだ。

そう、黒いパソコンに。

僕はさっそく今日の検索ワードをそれに決めた。歌が上手くなったらかっこよさというステータスも上がると思うし、悪くないワード

を見つけた。

「歌 上手くなる方法」

普通のパソコンでもよく検索されているし、いくつか望むようなことが書いているサイトがヒットするワードだと思う。僕もスマホで検索したことが数回ある。友達とカラオケに行く前や行った後に検索するのだ。

でも、普通に見つかるサイトだとイマイチ有用なことが書かれていない。分かるような分からないようなボイトレなんかを紹介されてしつくりくることなく、最終的にはボイトレの教室やらカラオケアプリを紹介されるのだ。

歌が上手くなる方法ってきつと存在するのに割と業界で秘密にされてることだと思う。

黒いパソコンは期待通り、それを教えてくれた。

「まずあなたの姿勢を直すことから始めましょう。両手を真っ直ぐに伸ばしてから、そのまま下ろしてください。その状態で顎を少し前に突き出して——」

細かく指示された検索結果、言われる通りのことを真っ直ぐな姿勢を維持したまま横目で読んでいって実行すると、本当に気持ちが良いくらいの高音ボイスが自分の喉から発せられた。

まるで別の喉と入れ替えられたかのように。これなら女性の曲でも歌えるんじゃないかと僕は思った。

それはボイトレのようなもので。僕はこれから筋トレにプラスでボイトレも続けることになった。

僕は自分磨きトレーニングを毎日続けていた――。

筋トレにボイトレ、有酸素運動。そして小顔体操やら髪の毛のセット方の勉強。家族にこうやってモテる為の努力をしているのがバレるのは恥ずかしいので自室でこそそと励んだ。

ボイトレは布団を被って枕に顔を埋め込んでやった……だから、終わった後はかなり息苦しい。

やり方は当然どれも黒いパソコンから教わったもの、知らないけどたぶん優秀で僕の体に合っている方法。それが分かる証拠は僕の体が目に見えて変わってきたからだ。

まだ自分磨きを決めてから経ったのは1週間とちよつと。たったそれだけの期間で随分と体の調子が良くなった。朝の目覚めもスッキリしたものになったし、だらしなかつた腹筋も、力を入れて角度を合わせるとほんのり割れてきた気がする。

そんな疲れるけど確かな充実感を得る生活の中で同級生の恋愛事情を調べたりなんかしました。すごく気になることだ。誰がどの子を好きだとか、現在あの子に彼氏がいるのかとか。

そのくらの質問であればぶつちやけあんまり想像とは違わない。もちろん驚く事案もあるけれどそんなに黒いパソコンに聞くことでもなかつた。もつと言うと気分を害することが多かつた。

彼女のいない僕にとっては人の恋愛事情なんてくそでしかかないのだ。

リア充爆発しろつ。くっそ。消し飛んでこの世からいなくなれつ……そんなことも思いたくない。

結局何が言いたいかを言うと、知らなければいいこともあるということだ。この世界には。恋愛なんて特にそれだ。分からない要素があるから楽しいのだ。

だから、僕は今日という日に一旦同級生の恋愛事情を検索するのはやめることにした。あと1度だけ検索して……次は自分がかつこよくなつて恋愛に自信を持てるようになった後でまた。特に検索する

ことが無い日にも。

最後に1度だけする恋愛関係の検索はもう決めていた。

「告白したら付き合ってくれる人 人数」

これだ。

自分の今を知ってこれからのトレーニングのモチベにすると共に、1か月後2か月後に同じ質問をするときの比較対象。自分の現在地点を計るのだ。

前に自分を好きな人と検索したときは0人だったので下にいることは分かっているのだが、告白したら付き合ってくれる人くらいなら数はさすがに在る気がする。

そして「一覧」ではなく人数というのも肝だ。もしも良い人の名前があれば僕は楽しんでしまうかもしれない。普通にかつこよくはならない。それに知りすぎることは良くない、人数だけくらいがちょうど良いと思ったのだ。

今日のトレーニング前に僕は黒いパソコンのキーボードを叩いた。まあただ現状を知るだけ。いなければそれはそれでモチベに繋がるさ。そんな気持ちで――。

「あなたが告白するとOKをもらえる人数は2人です」

僕は検索する前と後で表情を変えなかった。どういうリアクションを取るべき数字なのかすぐには分からなかった。

まあまあ。うん。たぶん少ないけど0じゃなかった。うん。

ここからだ。ここからこの数字を10にでも100にでもしてやろう。

その日のトレーニングは昨日よりも多めに頑張った。

word10 「あの友達 ホモなのか」②

「なんか最近雰囲気変わった？」

次の日の教室で僕は言われた。

「え」

「なんとなくしゅっとしてるといふか。髪型のセットの仕方も変わったよね。腕時計とかもしてるし。そこそこ高そうな」

「ああ。まあな」

恥ずかしくって後ろ髪を撫でながら答える。話し声が各所で行き交う教室で僕の頬が緩んだ。

確かに変わった。このふわりとした髪も、懸賞で頂いたちよつと良さげな腕時計も。

僕はこの日初めて自分磨きトレーニングの成果を得られたのであった。まだまだだとは自覚しているけれど変化に気づいてもらえた。今日も体を苦しめる筋肉痛と戦い続けた甲斐があったのだ。

「何で何で。なんかあった？」

「いや別に特に何もねえけどさ」

「その時計どこで買ったん？」

「これは……。なんとなく懸賞応募したら当たった」

こんな話をしているクラスメイトが女子だったらより良いのだけれど、相手は男子だった。現在近くの席に座っている男子の草壁君。

男子も男子でバリバリの男子。野球部に所属していて、その中でも体格が良くて筋肉質なほうだ。髪型も丸坊主で、今日も日焼けした笑顔が話していて眩しい。

「マジ？すげえな。ちよつと見せてよ」

野球部の草壁が僕の腕を掴んで腕時計に顔を近づける。やけにしっかりと掴まれてじっくり腕時計を観察された。

「D&Gってこれドルチェ&ガッバーナのやつじゃん。いいな。こんな懸賞で当てたのかよ」

「ドルチェ？なんだっけそれ？」

「有名なブランドじゃん。知らねえの?」

「聞いたことはあるような無いような。ブランドか。へー」

「流行りの歌の歌詞にもなったりするじゃん。ブランドとか興味ないの?」

「無いな。逆にお前はなんかそういうところおしゃれだよな。その鞆もなんかのブランドなんだろう」

「そう。好きなんよな。ブランド物」

何気ない雑談をしている間も草壁はずっと僕の腕を掴んで巻かれた時計を見ていた。目を光らせて。それがだんだん窮屈に感じてる。

「ってかいつまで腕掴んでんだよ。これツツコミ待ちか」

「あ、悪い悪い」

「めっちゃ長いこと見てたなあ。肩凝るわ」

「ははは。俺も離すタイミング見失ってた」

やっと離してくれた腕をわざとらしく肩ごと回す。

「それはそうと、おしゃれしてるってことはやつぱ好きな子できたとかっしょ。もしかしてもう付き合ってるとか。俺聞いてないけど」

「いや、全然そんなじゃないよ」

まあ、次はそうくるだろうという男子高校生の話の流れ。草壁がにやりと笑う。僕は目を逸らして否定した。

「いやいや絶対そうやん。それ以外におしゃれする意味ある?」

「マジで違う。ただ気分だよ。俺は今そんな女子に興味ないし」

「へー」

「マジでマジで」

「いやいや」

「マジでマジで」

お互い腹の内を分かっているながらも深くは話さないといった対応を取った。そこからは何も言わずただ見つめ合った。そうこうしている内に休み時間の終了を告げる鐘がなってその時の草壁との会話は終わった。

——次の日からだ。なんとなく違和感を感じるようになったのは。

word 10 「あの友達 ホモなのか」③

次の日から草壁は毎日のように僕の腕時計を見せてくれと、僕の腕をぎゅっと掴んだ。脇の下で抱えるように腕を固定して。

初めはよほどブランド物が好きなんだなと特に何も思わなかったけど、3日4日と続くと気持ちが悪い。何しろ男でブランド物好きってあんまりいないし。

しかも、前は香ってこなかった匂いが草壁に近づくと香ってきた。腕を掴まれるときに草壁の制服が目の前に来ると香る。運動部らしい制汗剤の匂いとかではなくて、経験のない匂いだ。

なんの匂いと言われると表現に困る。とにかく甘くて良い匂いだ。僕は気づけばその匂いを楽しみにしていた。誰から香るとか関係なく良い匂いだったから。もし僕が女だったらこんな良い匂いがする男がいたら惹かれてしまうかもしれない。

だから僕も香水を買ってみようかな、どこの香水だろうと興味を持って……。

でも、なんだろう。何かがおかしい。

「今日も腕時計見せてよ」

「……ああ」

その日も僕は何の抵抗もすることなく草壁へ腕を委ねた。筋肉質な腕が絡みついて、香ってくる甘い香り。じつくりと腕時計を見る草壁を、よく飽きないなと思いつつ見つめる。

草壁の顔はいつもと変わらず目が細くて芋っぽい。けれど見せる表情は前と違うと思う。真剣で動物的と言うか野性的と言うか……。

これってこの腕時計を譲ってくれないかと遠回しに言われているのだろうか。いや、さすがにそれは凶々しいよな。そんなことも考える……。

考えながら見つめていると、不意に草壁もこちらを見た。真っ直ぐに目が合う。そして、腕をより草壁のほうへ引き寄せられた。力づくで。

「ねえ。この前言った女の子に興味ないって本当？」

耳元で囁かれるように言われた言葉。周りのクラスメイトに聞こえない声量で。

その時僕はようやく違和感の正体に気づいたのだ。

あれ？こいつもしかして……？

ほんのり顔を赤らめていた草壁をその場は上手くごまかして、その日の学校生活を取り切った僕は急いで家に帰って急いで部屋に入った――。

疑問に思ったことをすぐに黒いパソコンで調べるため。いつものこのパソコンでないと調べられないことだ。

「草壁 ホモなのか」

僕は入力した。でもたぶん調べるまでもなく十中八九そうだ。まだ胸をざわつかせているあの草壁の表情。あれは男の顔だけど女の……。

だけど確定させたいから調べたい。勝手な妄想で彼をそんな風な目で見てはいけない。だから僕はEnterキーを叩いた。

「あなたのクラスメイトの草壁君は同性愛者です。」

まじか……。いや、やっぱりそうだよな。

驚くと共に、こんな身近に本当にいるものなんだと関心が高まる。

つてか、ちよつと待てよ。この前検索した「告白したら付き合ってくれる人 人数」の結果が2人つてもしかして1人は――。

僕の首筋の辺りに一粒の汗が伝った。

そして今回の黒いパソコンはまださらに文を表示する。

「ちなみに隣のクラスに在籍する夏尾君も同性愛者です。あなたの学年の男性同性愛者は2人です。意外と身近にいる者ですよね。」

そういえば前にそんな噂を聞いたことがある。隣のクラスの誰かにホモの疑いがあるとか無いとか。

へー……。そっか……。

僕はそれから普通のスマホで調べて同性愛者は1.5%くらいの割合でいることを知った。100人いたら1人か2人はいるということだ。

そりやうちの学校にも数人いるわ。

そのまま同性愛者への接し方なんかも勉強して、今日知ったことを他人に知らせることはしないことも誓った。

次の日から僕がD & Gの腕時計を付けて学校に行くことは無かった。

word 1 「仕返し 方法」①

ある日、僕は冷蔵庫を開けて絶望した……。

無かったのだ……。そこに……。

冷蔵庫の上から2番目の段、左隅……。

僕が買っておいたプリンがそこから消えていた――。

「あれ?どこだ?」

夕食後に食器を片付けた僕は冷蔵庫を開くと、ドアを開けつばなしで中を探っていた。

ある物を探して。置いていたと記憶している場所に無ければ、その下の段、そのタツパの後ろ。まさか野菜室に入れた覚えはないけれど、ある可能性がある場所を手当たり次第に。

「何がサゴソ探しとるんじゃ?」

そんな時後ろから父の声がする。飲み終わった缶ビール片手に。次のつまみを取りに来たようで迷惑そうな表情をして。

「俺が買っておいたプリンがない。知らない?」

「プリン?知らん。ちよつとどいて」

中年らしい肥満体系の父は冷蔵庫の前から僕を遠ざけて冷蔵庫から3個ほど食べ物や飲み物を取り出すと、リビングの机に戻っている。

「ゴージャスプリンみたいな名前のちよつと大きい奴。本当に知らない?」

「知らん」

父の背中に尋ねると、背中を向けたまま返ってきた。

僕の家族には他に母と姉がいるが、その場にいなかったので僕は諦めて自室に戻る。

でも諦めたのは一旦のことである。僕は諦めない為に自室にやってきたのだ。

プリンの在り処を黒いパソコンに尋ねる為だ――。

……。うん。世界のどこかにいる有識者の皆さんが言わんと

している事は分かる。言われなくても。プリン1個を探すのに全知である黒いパソコンの力を使うのは勿体無いのではないか。

僕もそう思う。だけど、食べようと思っていたプリンは僕が3日前から食べるのを楽しみにしていたものだ。コンビニで見かけて財布の中身と相談して払った398円。高校生の食後のデザートにしては高額である。

週末の今日に食べようと決めて舌と腹のコンディションを整えてきた。仕上がった舌はもうあのプリンでなければ満たされない。プリンの舌になってしまっているのだ。食べたくて食べたくて仕方がない。

「僕が買ったプリン 在り処」

僕は迷わず検索した。

たぶん家族の誰かが食べたんだと思う。冷蔵庫の中から見つけれなかっただけで本当はあったのならそれが1番だけど。おそらく誰かの腹の中だ。

そうだとしたらもう帰ってこないのも無駄なことかもしれない。でも、このプリンを渴望する舌の収まりの悪さを。この怒りを。「勝手に俺が買ったプリン食べんなよ」という言葉でぶつけなければなるまい。

黒いパソコンは表示した。犯人の名前を。

「あなたの買ったデリシャスプリンくまろやか仕立てくは昨日の深夜にあなたの父親が食べました。」

僕は表示された文を見て驚く。他の誰かならまだしも……あろうことかさつき知らないと言った父の仕業……。

あの酔っ払い。とぼけやがったな。

僕はすぐにリビングに行つて父に文句を言うということはしなかった。椅子に座つたまま怒りを笑いに変えて、静かに怒っていた。ただ文句を言うだけじゃ生温い。僕はどんな風に復讐するか考えていたのだ――。

word 1 「仕返し 方法」②

仕返しをしてみると言ってもパターンはたくさんある。何をすれば僕の心が1番スッキリするだろうか……。

僕は考えた。そしてその答えは「答えを黒いパソコンに聞く」ということだ。

それすらも黒いパソコンに頼る。2日分の検索をプリン1個の為に使つてやることにしてやった。

僕は怒りを抱えたまま0時になり日付が変わるのを待った。黒いパソコンの検索回数は0時になると同時に回復する。

「仕返し 方法」

家の外も中も静まり返った少し湿気の多い夜。たぶん家族は皆寝てしまっていて、僕も眠かった。けれど僕はそのワードをキーボードで入力した。

やっと待つていた時間が来た時に怒りがまだ収まっていないことに喜びを感じながら。

「あなたの父親が大切に保管しているおつまみセットが床下収納の缶詰置き場の下にあります。あなたの父親はそれのおつまみセットを今日のゴルフから帰宅したときに食べるでしょう。あなたが父親が帰ってくる午後8時までにおつまみセットを食べることが素晴らしい仕返しになります。」

僕はその文でさらに頬を緩ませる。なんて良い案件があったのだろうと。

そして、黒いパソコンを本当に良い子だと思った。僕と気が合う。僕も仕返しするなら同じことで仕返しするのが良いと考えていた、食べ物への恨みは食べ物への恨みで返す。目には目を、歯には歯をだ。

次の日、僕は黒いパソコンに言われた通りに床下収納を開けた。家族がそこに誰もいない時を見計らって。普段開かない場所だったので開けた時にはこんなものが家にあったのかと探検しているような気分だった。

缶詰がいくつか入った箱をどけると簡単にそれは見つかった。

ぱつと見は見えなかったけれど箱の下にはおつまみが描かれたパツケージの袋がいっぱい。数は多いけれど1つ1つの袋は小さかった。

僕はそれを全て持って素早く自室に戻る。

しかし、そこでまた1つある問題が発生したのだ。大きな問題である。

机の上に置いたおつまみ達がどれも僕の好みではない。全く食べたいと思えないものだったのだ。

それというのも……僕と父は食べ物好みが全く違う。しかも酒のつまみとして食べる物の中で上等であれば、まだ未成年の僕の舌にはより合わない。

父はチーズが大好物であるけれど僕は嫌いだった。チーズ味のお菓子でも絶対に食べたくないほどに。

チーかま、チーズサラミ、そのまんまチーズ、なんかよく分からない鶏の爪みみたいなやつ……並んだ袋を見て僕は体を引いた。

嫌いであれば食べなければいいかもしれない。このまま隠してバレないように捨ててしまえば……そんなことも頭をよぎるけれど、食べ物がもつたいないし、仕返しとしてきつちり同じことをやり返さなといけない。気が済まない。

こいつらをしっかりと腹に入れた状態でおつまみを必死に探す父に「知らない」と言っつてやらなければ……。

僕は悩んだ。一旦ベッドの中に入って現実逃避をする。そうしながらも時間をかけて心の準備をした。

最後に戦うと決めると喉を鳴らして、一息つく……意を決して苦しみながらおつまみ達を頬張っていった。飲み物も用意して半ば飲み込むように。

チーズの味が舌へ伝わる前に取り込んだ固体をかみ砕いて飲み込む。凄いスピードで次から次へと。そうやって被害を最小限に抑えながら戦って……10分後、僕は勝利した。

開けては空にして、投げ捨てていったつまみの袋の上、僕は勝利の栄光をつかみ取ったのだった。

その時にはもう父が返ってくるかと聞いた午後8時前だった。後が

ない時間だったことも意を決することができた理由である――。

仕上げの為リビングに待機していると、思惑通りに床下収納を漁り始めた父に僕はこう言った。

「何を探してるの？」

「ここに入れ取ったつまみ知らん？ チーズの美味しそうなやつ」

「知らん。昨日も飲んでたしそんなの食べてなかつたっけ」

色んな棚を開けてつまみを探す父。「これはおかしい」と首も傾けていた。

そんな父を背に部屋に戻った僕は、椅子に座って大きなゲップを一発かます。チーズの風味が口の中に戻ってきたけれど気持ちの良さ1発だ。

復讐は果たされた。大勝利だ。

しかし次の日僕は1日中トイレの中にいた。

word12 「ピラミッド 建造法」

ある日の世界史の授業で担当の先生が話した。

「このピラミッドという建造物には未だに解明されていない謎が多く存在します——」

授業の主題とは少し逸れた脱線話だった。授業中に時折訪れる先生個人が話したいこと。テストの話を聞いているよりはちよつと面白かったりする時間だ。

「ピラミッドの建造法だったり、何の為に誰が作ったのか、内部には謎の空間も存在していたりとたくさん謎があつて、今も調査している学者がいます。中でも最も大きいものは世界の七不思議の1つに数えられているほど——」

僕も先生がその話を始めた時に、机の上の教科書とノートを見ることをやめて顔を上げた。

「先生も興味があることなんですよね。特に建造法。よくたくさん奴隷たちが汗水垂らしながら石を積み上げたつていう話を聞きますし、ピラミッドを作つてる絵があつたらそんな風に書かれていますよね。でもあんな大きな石を人力だけである高さまで積み上げるのつて普通に考えて無理ですよ。しかも奴隷の身分の人間が」

たしかに。何でだろう。そう思つた時に僕は既にノートの端っこにメモを取つていた。

「じゃあ優れた建築法で優れた技術者が建築に関わつてないとおかしいんですけど、その当時にそんな建築法があつたのかつて話になつてくるんですよ。奴隷だと思われていた人たちは奴隷じゃなかつたのか、そもそも本当に王様が墓として作らせたのかつて話にも繋がつて行くんですけど——」

——そんな授業があつた放課後、僕はたまにはこんな日があつてもいいかという気分で黒いパソコンの前にいた。

ほとんどのことを自分が知りたいことや自分の利益の為に使つてきたこの黒いパソコン。その気になれば当然僕だけの疑問じゃなく

て、世界中の謎を解明することもできる代物だ。

本日はその1つを知ることを使う。午後の授業中に興味を持ったことを調べてみることにしたのだ。

今まではあまり興味を持ったことはない分野だ。普通のパソコンやスマホで調べようと思ったことも無い。けど真実が知れるなら1つくらいなら調べてもいい。

既にノートには書かれている検索ワード「ピラミッド 建造法」。僕はそのワードを黒いパソコンへ入力した。

こういう謎って世界にはいくつもある。建築の分野でいくとモアイとかストーンヘンジの話も聞いたことがある。誰が何の為に作ったのかはつきりとしていない建造物が世界に点在している。

黒いパソコンは答えを数秒で表示した。幾人もの学者が熱を注いだ疑問の答えを数秒で。

「ピラミッドは周りに巨大な傾斜路を作って建造されました。今世界にあるピラミッド建造法の仮説の内では直線傾斜路説が正解になります。また傾斜路を使って石を高い場所へ運ぶときには現代でも開発されていない特殊な車輪の技術が用いられています——その方法はこのパソコンを古代のエジプト人が使って調べました。」

世界の謎は僕にとって、その謎が解明されたから何なのという感想を抱く分野だった。だから、調べてみたは良いもののよく分からないことを説明されてピンとこなかった。

しかし、最後の1文が僕を驚かせる。古代エジプト人がこのパソコンを使っていたのだと。

「ちなみに世界の謎の多くはその時代に無い技術や知識をこのパソコンによって得た人物がいることで発生しています。」

はー。へー。そうなんだ。へー……………えっ?えっ?

日常の検索あれこれ① ② 「推しのアイドル 整形」 「神様 存在」

「失くした耳かき 場所」

『収納内の棚の3段目にしまつてある冬用ジャージの右ポケットの中です。』

「今日 傘がいるか」

『今日の午後に降水量1ミリ以上の雨が降る時間帯はありません。』

「次の地理のテスト 答案」

『1ー①エ ② ア ③イ ④ウ ⑤キャツサバ ⑥ナイジェリアー
ー』

「父親 月収」

『あなたの父親の昨年1月から12月までの平均給与は45万6820円です。』

「推しのアイドル 彼氏」

『現在ドラマで共演した男性俳優と交際中です。彼女が今まで付き合った人数は4人です。』

「推しのアイドル 整形」

『彼女は今までに2度大きな整形手術を受けています。1度目は目を部分切開、2度目は鼻整形です。』

……………。

僕には中学3年生の頃から好きなアイドルがいた。周りの友達徐徐にそういうアイドルやら女優やらに興味を持ち始めた時に僕も同じように出会ったのだ。その天使のような女性に。

彼女の魅力は世界中全てを同じ顔にしてしまうほど素敵で笑顔と、

生まれながらにしてアイドルと呼ぶに相応しい純粋さ。

顔も人気グループに所属するだけあって高いレベルではあるけれど、容姿以上に性格やファンサービスへの熱量に魅かれた。

テレビでしか知らないけど、いつでも笑顔で、どんなファンにも平等で優しく接する彼女。そんな子にまさかこんな裏側があったなんて……。

僕は今、驚きと悲しみから頭が混乱している。

ただ、そんな僕から1つだけ言えること……。

それでも僕はあの娘を推すぞ。

「古いテレビ 治し方」

『あなたの家の2階にあるリビングのものよりも古いテレビを一時的に直すのであれば、本体の左側面下から15cm辺りを軽く叩くと良いでしょう。しばらく綺麗に映ります。ちゃんと直したのであれば修理に出してください。』

「次のワールドカップ 優勝国」

『次のワールドカップで優勝する国はフランスです。』

「ペガサス 実在」

『地球にペガサスと呼べる生き物は存在しません』

「お隣さん 夕食」

『今日のあなたの家のお隣さんの夕食はカレーライスです。』

「神様 存在」

『この世界に神様と呼ぶに相応しい存在はあります。しかし、その神様が人間に干渉することは決してありません。』

やっぱり神様に祈るのって意味が無いんだな。昔から思っていたけど神様がいるにしてはこの世界には理不尽や悲運出来事が多すぎ

る。高校生の目から見ても。

そして1つ当てが外れた。神様が人間に干渉しないということ
つまり……。

『このパソコンも神様ではないし、神様が作った道具でもありません』

word13 「パンチラスポット 今日」

「無人島に1つだけ持っていくなら何を持っていく?」という質問がある。

大抵の人はライターだとかナイフだと答えるだろう。もしくは水とか食料。僕もその辺りが安定だと思っていた。

けど今の僕がその質問に回答するなら、答えはこうだ。

「何でも検索できる黒いパソコン」

これがあれば間違いない。火の起こし方や食料の手に入れ方も黒いパソコンに聞いてしまえば話は早いのである。無人島からの脱出の仕方もすぐに教えてくれるだろう。

そんな無人島遭難時にも使える便利アイテム、黒いパソコン。突然僕の元に現れてから僕はこれに頼りつきりだ。

ありきたりな質問の答えとしてもすぐに思いつくくらい身近な物にもなった。

それがかなり昔から存在していたことを知った僕は黒いパソコンのキーボードの上に指を置いて考え事をしていた。朝方の話である。

先日の検索では古代エジプト人がピラミッドの建造法を調べるのに黒いパソコンを使っていたことが明らかになった。そうなる少なくとも1000年とか2000年以上前からこのパソコンは存在していたということになるということ。

ピラミッドが建てられた年なんてよく知らないけど……。

なんとなく触れてみるキーボードにはアルファベットが並んだ文字を打つキーだけでなく、ファンクションキーやAltキーCtrlキーも存在していた。押してみても何かが起こるといった訳でもないボタンではあるが。

検索機能以外にこのパソコンの機能として僕が知っているのは音声認識機能くらい。文字を打ちこまなくても声で言えば検索ワードを入力できる。それだけ。

とにかくこのパソコンにはまだまだ謎が多い……。

「あああ……」と打ち込んでBackSpaceキーを同じ数だ

け押しして消す。そうやって指を遊ばせながら僕の考え事は続いた。

でもまあ、機能は検索だけだとは思う。初めにこのパソコンについて検索した時そうとしか教えられなかったし、適当に思いつく操作をしても何も起こらない。

僕が今考えているのはなぜ僕の元へ来たかということだ。

世界中の謎にこのパソコンが関係しているということについてよく考えた時、僕はこのパソコンが僕の元へ来たことに何か意味があるのではないかという思考に辿り着いた。

それというのも、世界に残る謎を作るって凄いことだ。

凄いことをした人は凄い人だ。

凄い人がこのパソコンを持っていた。

つまり、このパソコンを現在持っている僕も凄い人なのである。

凄い人になる可能性があると言ったほうがいいだろうか。今現在はただの17歳だけれどこの先何か凄いことを成すという天命みたいなものがあるんじゃないだろうか。

だから黒いパソコンは僕の元に現れた。そう気づくと考え込まずにはいられなかった。

もしも僕にこの先何かを成さなければならぬ大きな運命が待っているとしたら、僕は今何をすべきだろうか。それに備えたほうが良いだろうか――。

そしてもしも備えたとして、このパソコンの力があつたとしても乗り越えることができるだろうか――。

朝のまだ眠気が抜けきつていない時に、さも自分が世界の主人公になったような気分で鼓動を高鳴らせた。中二の時以来の感覚である。そろそろ家を出る時間になった時に僕は今日の検索ワードを入力した。考え込んだ結果に辿り着いたワードだった。

「パンチラスポット 今日」

いかん。指が勝手に入力してしまった。考えるのがめんどくさくなってきた一旦後回しにすることになった。このワードを検索するのなんてもう3回目だというのに。

動画投稿サイトとかにいくつかあるもの凄いパンチラの動画。あ

んな風な中々お目にかかれなけれど日常的にどこかで起こっている幸せ景色と巡り合わせてくれる神ワードである――。

その日の午後、学校の帰り道。狙いを定めていた僕の視線はしっかりとその景色を捉えた。

強風に吹かれてだいぶがつりめくれ上がった同じ学校に通う女子生徒のスカート。その中にあつた純白のパンツを。さらに向こうにうつすら見えた黒い毛まで。

ふっ……。

word 14 「夜食 食べていいか」

今、僕はとても良くない状況にある――。

とてもとても良くない状況だ。端的に言えば究極の選択を迫られている。

もう日を跨ごうかという深い夜のこと。僕のお腹が空腹を訴えていた。

そう。究極の選択とは「夜食を食べるか否か」というものだ……。

自分磨きのための黒いパソコンから教わった筋トレを続けていた僕は、今日も決めている通りのメニューをこなした。夕ご飯を食べてから風呂に入るまでの間に軽く汗をかきながら。

そうして体を疲れさせていると、就寝に向かう数時間の間にまた腹が減ってしまう。風呂からあがってから明日の授業の予習なんかをしたり、テレビを見ながらスマホを弄ったりしていればちようど何かを食べるのにいい腹のコンディションの出来上がりだ。

しかし、欲望のまま遅い時間に食事を取ってしまうと体に良くないという一般常識がある。誰もが唱えることだ。夜寝る直前に食べると太るだの眠れなくなるだの。しかも、筋トレ中の僕にとっては脂肪をつけることは最悪である。

最近の僕にとってはこの寝る前に腹が減るというのはよくあることだ。いつもは耐えられているし、眠気のほうが強い。でも今日の腹はそうはいかないぞという調子だった。

腹はすこぶる減っているのに、目はとことん冴えている。絶対に眠れないからベッドに寝転ぼうとも思わないほど。たぶん何か食べないと眠れやしない。正にとっても良くない状況だ。

僕は手で腹を撫でながらどちらを選択するか考えている。かれこれ10分くらいそうしていた。食べたなら太ってしまう、でも食べなきゃや眠れそうにない、でも食べたら……、でも食べなきゃ……。それの繰り返しだ。

腹から感じる明らかな空腹。かなり丁度いい空腹だ。筋トレから

数時間経って夕食はすっかり消化された。今食べれば一番おいしく受け入れられるはず。だけど……。

こんな悩んでいるのならいつそさっさと食べてしまってからもう少し起きていればいい。そう主張する僕もいる。

だけど、さらに悩めるところは食べるとすれば大盛りのカップラーメンだということだ。

いつぞやの検索によりコンビニくじで当てた良いカップラーメン。そもそもあれを思い浮かべてしまったことでこの夕食を食べるか1人議論は始まったのだ。

食べるにしても大盛りカップラーメンは良くない。とても良くないなあ……。

正直なところもうどちらにするか腹を決めてしまっている。ここまで食べたいと思ってしまった以上、もう食べなきゃダメだ。

自分の本心に気づいてはいるけれどあと一歩が踏み出せなかった。そんな僕はあと一歩をよりにもよって黒いパソコンに求めた。

「夕食 食べてもいいか」

キーボードで入力する。良くない。これも本当に良くない。

日付が変わってすぐに僕はそれを検索した。こんなことに黒いパソコンの検索まで使用するなんて正気じゃない。分かっているながらも罪を犯したのだ。

「今からあなたが本格とんこつ〜随一〜ノンフライを食べて水を1杯飲んで寝た場合、食べてから10分以内の就寝であれば約62gの脂肪が体につきます。飲み物が緑茶であれば約50g。食べるかどうかはあなた次第です。」

それを見た僕の感想は50gくらいなら食べていいというものだった……。

深夜にカップラーメンへお湯を注ぎ自室に運ぶことこの罪悪感。5分待つて蓋を開けた時のこの幸福感。

液体ソースをしっかりと混ぜ込んで、いきなりチャーシューと共にすれば、この脂ぎった麺はなんて旨いのだろうか。

その後、僕は冷凍のからあげもレンジでチンした。

word15 「席替えのあみだくじ 後ろの席の棒」

今日も見慣れた校舎が見えて来た。澄んだ朝の空気の中、あとは橋を渡つてもう少し歩けば僕が通う学校に辿り着く。

僕は徒歩通学でいつも1人で学校に行く。早起きだけど朝食は控えめ。時間に余裕を持って出発する僕はゆっくりと歩いて行く。

そっちのほうが好きだから。朝を忙しくしたくない。空に浮かぶ雲でも眺めながら歩いていたい。

そうやって1人で歩いている時、最近はおっぴら考え事をしていく。もちろんと言っていていいだろう。黒いパソコンで何を検索しようかという考え事だ。

でも今日は違った。今日は既に検索を終えている。今日検索することは前から決めていたのだ……。

何故なら今日は席替えがある日。僕は朝のうちに、席替えの為の検索をした。

多くの人が望む席替えで理想の席を手に入れるという未来。それを確定させる為。僕にとってそれは最後尾の席だ――。

「席替えのあみだくじ 後ろの席の棒」

僕の担任の先生はいつもあみだくじで席替えをする。だからこうやって検索した。

するとパソコンはこう答えを出した。

「今日のあなたのクラスで行われる席替えのあみだくじで最後尾の席に繋がる棒は、右から3本目、8本目、23本目、25本目、31本目、35本目です。」

クラスの席の列は6本、最後尾ならどこでもいいと思つて検索した僕への完璧な答えだ。

僕はその答えを暗記して、一応メモも取つて出発し、朝の通学路を歩き終えた。靴箱で上履きに履き替えると、教室に入って自分の席に座る。

今日は早く着きすぎたようで、まだ教室内に人は少ない。僕は机の上に置いたスクールバックを抱いて並んでいる机とイスを眺めた。

この席の中でどこに座りたいかって結構人によりけりだと思う。大体の奴は後ろの方の席を好んでいるけど、その中でも一番後ろが良い派と後ろから2番目が良い派に分かれる。

前の方で右端か左端が好きという意見も聞く。意外とそこが一番目立たなくて落ち着いたりするのだ。

僕は普通に1番後ろ派だった。

そしてその好みの席に座れるかどうかって普段の学校生活において結構重要だ。迷わず黒いパソコンに答えを聞けるものである。

——いつもの雰囲気で時間が過ぎて……その時は来た。席替えがある授業。つまり担任の先生による授業だ。

僕のクラスでの席替えの詳しい方法はこうだ。担任の先生が担当する授業中にあみだくじが書かれた紙を生徒で回して書き込んで、授業の最後にくじの結果を発表する。

「じゃあ約束通り席替えのくじやるねー」

担任の先生がにやっとながら紙を生徒たちに向ける。

僕のクラスの担任はこの学校にも1人はいそうな陽気なおばちゃん先生だった。

先生がひらひらとさせる紙を見ながらちゃんと検索結果を覚えているか確認する。3本目に8本目、23本目に……あとは……よし。

楽しみそうで少しぎわつく生徒たちに向かって先生が歩き出す。僕はせっかくのイベントを楽しむことはできなかったが優雅な気分だった。

しかし、そこで先生が思わぬ行動を取る。

「いつもはこっちから回すから今日はこっちからしよっか」

いつも通り右に歩いた先生が踵を返して左に行く。

先生が問題を生徒個人に問うていく時に気まぐれで行われるとちよつと困るやつだ。いきなり想定してない問題に答えさせられることになって焦る。

けど今日のそれはちよつとどころではなくてマジで困る。

僕の席の位置はいつも通りの方に近い。逆からだともみだくじの棒を選ぶ余地が無くなる。

状況が変わってしまった僕は机の下で拳を握りしめた。このまま先生の思い通りにやらせてしまえば僕に回ってきたときに後ろの席へ繋がる棒が残っていない可能性が高い。どうする……。

どうすると言っても何を行動することもできなくて……僕は後ろの席へ繋がる棒が残っていることを祈るしかなかった……。

そして落ち着かない授業を受けながらあみだくじの紙を受け取った時、僕は唇を噛みしめる他なかった。

案の定、黒いパソコンに聞いた後ろの席へ繋がる棒は他のクラスメイトの名前で埋まってしまっている。こういう不安って大体的中してしまうものだ。

いや、参ったな。まさか他のクラスメイトの名前を消して書き直す訳にもいかないし……こうなれば後ろから2番目の席狙いの勘で行くしかない。

後ろから2番目の席も検索しておけば良かった。悔やんでも仕方がない。

僕は脳内黒いパソコン検索シミュレーターを使って「席替えのあみだくじ 後ろから二番目の席の棒」を検索した。

うーん。あのパソコンならなんとなく7番目とかこの辺か。うん。間違いない。

渾身の苗字記入。いつもより達筆で名前を書いた。

そんな僕の次の席は最前列の真ん中になりました……。

word 16 「魔法 習得方法」①

この世に魔法って存在するんだろうか——。
ある午後に思った。我ながら馬鹿らしい疑問である——。

気持ちの良い昼寝から目覚めた僕は枕元に散らかったティッシュの紙くずたちを見つけた。

それを1つにまとめてゴミ箱に投げたが、見事に外した。ベッドに寝転んだ状況から投げられた紙くずは床に落ちて転がり、それを見た僕は舌打ちをした。

そんな時だ。魔法が使えたらいいのにと思ったのは。

立ち上がってゴミ箱に入れ直すのがめんどくさい。指を振れば離れた紙くずが浮き上がって、思いのままに動かすことができればとても楽なのに……。

できる訳がないけど紙くずに向かって人差し指を振ってみたりして。

こんな願望は生きてきた中で何度も抱いたことだ。喉が渴いた時には魔法で水を生成できないか、忘れ物をした時は魔法で家からテレポートさせられないか、もしも道端でモンスターと遭遇することがあつたら魔法で手から炎が出せないか。

床に落ちたままうんともすんともならない紙くずを見つめたまま、魔法を使えたらいいのにという妄想は飛躍して、今までの魔法を使えたらいいのにエピソードを思い返す。

ゲーム機が壊れてしまった時は本気で念を送ったし、空を飛べたらいいのになんて王道な妄想は何度もした。触れずに紙くずを持ち上げるなんて超能力の妄想も繰り返しのことだ。

妄想しながら、ああだろうかこうだろうかと手の動きを変えたりしてみても当然何も起こることは無いんだけど……きつと魔法なんてこの世にはないのだから。

ああ。考えていても仕方がない。さっさと立ち上がって行動しよう。

僕は重い体を起こしてベッドから下りる。そして紙くずのほうへ歩き出した。

しかし、その足は紙くずの横を通り過ぎて、収納のほうへと向かう。収納を開けると黒いパソコンを取り出して、僕は机の上に座った。紙くずを投げ入れ損ねたけれど、立ち上がって拾い上げるのがめんどくさいのなら、立ち上がって黒いパソコンで寝転んだまま解決する方法を調べよう。

立ち上がったのは何も諦めた訳ではない。思い通りにならない紙くずを意地でも触れずに魔法で持ち上げる為だ。

さて、どうやって検索しようか……「紙くず 持ち上げ方」……それじゃダメだよな。そもそも魔法ってこの世にあるのか。

そう疑問に思った僕は検索ワードをこれにした。

「魔法 存在」

入力した後に画面を見た時、自分で自分の精神年齢に少し驚きを持った。この年でこんなファンタジックなことに期待しているなんて。

だけどあり得ない話じゃないと思う。ドラゴンだっていたんだし、何よりもこの黒いパソコンの存在が魔法みたいなものだ。

まずは存在を確かめて、無ければ無いで諦めて。あつたらまた明日やり方を聞けばいい。黒いパソコンなら僕の意志を汲んでやり方で教えてくれるかもしれないし。そんな考えで Enter キーを叩く――。

「この世に魔法と呼べるものはあります。それは人間が鍛錬により習得できるものです。」

今回の検索での黒いパソコンからの返答は短い文だけだった。しかし内容はすぐさま僕を興奮させてガッツポーズへ至らせる。

そして、僕は待っているという気持ちで床に落ちた紙くずを睨んだ。

word 16 「魔法 習得方法」②

僕は丸まった紙くずを前にして床に座った。胡坐をかい腕を組み、気の持ちようも勝ち誇ったもので。

お前の命もあと1日だ。せいぜいそこで這いつくばっている。そんな気分だ。

明日には手を触れずして紙くずをゴミ箱に入れてやる。もしくは炎を出して灰にしてやろうか。指をピロピロさせながら紙くずが泣いている姿を想像する。

——と、それよりもだ。もっと嬉しいのは魔法がこの世に存在していたことだ。紙くずが処理できるなんてことよりもそつちに意味がある。僕は明日魔法使いになれるのだ。

いや鍛錬が必要と書いてあったから明日は早いかもしれないけれど、その内。誰もが夢見る魔法使いになれる。

それから僕の精神年齢の低下は加速して小学生に戻ったくらいのテンションで魔法使いについての妄想とトレーニングの予習が始まった。

そもそもリアル魔法ってどう使うんだろう。杖は必要だろうか、必要だとしたらどのサイズだろうか。創作の類では、その辺に落ちてる木の棒サイズの杖と、ロッドと呼ばれるようなでかい奴がある。

ボールペンを振ったり物干し竿をかつこいい感じで持ったりしてみる。

もしかすると、魔法陣が必要なタイプかもしれない。だとしたら綺麗に円を描く練習とかもしといたほうがいいだろうか。

でもさすがにそれはちよつとめんどくさいな。

次の日になるまで僕の妄想は続きに続いて……。

魔法使いの生き残りでもない僕が突然使用した魔力を察知して、今も世界のどこかで隠れて暮らす魔法使いたちが僕を捉えに来る物語まで妄想した。

少しヤバイ。でも、この先は強制的に魔法学園で若い魔法使いたちと魔法を学ぶ人生を送る。それも悪くないだろう。もしかしたら僕

にはとてつもない魔法の才能があるかもしれないし……。

そして次の日、0時になってすぐ。僕は黒いパソコンで予定通りの検索をした。

「魔法 習得方法」

炎の魔法だとか水の魔法だとか限定して検索したほうが良いかとも思ったが、それは黒いパソコンなら色々教えてくれると信じてこのワード。

もう芽生えた気がする自分の中の魔力を感じながらEnterキーを押す。

「ある魔法を習得するには、その魔法を発動する姿をイメージしながらひたすら念じる精神修行を行う必要があります。魔法を発動するのに重要なのは念力と精神力。魔法は脳と心で使うものです。そして多くの魔法は、その習得修行に最低でも10年は必要になります。ちなみにあなたが今思い浮かべている物体を浮かせて操る魔法の場合では平均50年を要します。」

ええ、マジかよつ。ウインオーディウム・レビオーサでも使えるようになるのに50年もいるのっ。

騙された。詐欺じゃないか。口をハの字にして見えた文に驚く僕へ黒いパソコンは追い打ちをかける。

「ちなみに炎を出す魔法なら平均80年です。あ、でも毛を生やす魔法なんかは5年くらいでできますよ」

は？おもんな。この詐欺パソコンめ。ぬか喜びさせやがって。50年や80年はさすがに長えよ。

僕からしたら今日はちよつとイタズラだった黒いパソコン。なんだか笑われているような感情が奥に見える。

それに腹が立った僕は拾った紙くずをゴミ箱に強く投げ捨ててから、いじけて眠った。

ある夜、僕はスマホで怖い話を読んでいた。自室のベッドの中で――

寝る為に自室に入って、ベッドに寝転ぶと、スマホを起動した。SNSや検索サイトのアプリをタップしてざっと画面を指でなぞっていく。スマホを手にした時からルーティーンとなった眠くなるまでの暇つぶしだ。

フオローしているアカウントやお気に入り登録しているサイトを見て、気になったものがあれば画面を止めて情報を仕入れる。それが終わるか、特に気になるものが無ければ、後の時間は動画サイトで何か見たり。

20分か30分くらいそうしてまぶたが重くなってきたら寝る。

今日のその時間は怖い話を読むことに使うことにした。

特に理由はない。適当にインターネットのサイトを渡り歩いていると目に付いたからだ。ホラーな気分でもなかったけれど、ホラーという文字を見たらいい暇つぶしになりそうだと思った。

タップしたサイトの名前は「名作ホラー 殿堂入りの怖い話まとめ」みたいな感じのだった。開いてみたら名前通りそこから色んな怖い話載っているサイトに飛べるようだ。僕は中から面白そうなものを選んで読んでいった。

部屋の蛍光灯を消して、デスクライトだけを灯す。そうして暗い部屋の中をベッドの辺りだけ明るくすると雰囲気が出る。暗闇でホラーと向き合おうと鼓動が早く強くなってしまいが……だけどそれが心地よくて……布団にくるまっっているという安心感もホラーの楽しさを増幅させる。

最初に読んだのは昔流行った意味が分かって怖い話みたいな話で、よくできた話ではあったけれど怖いということはあまり無かった。

次に読んだ話も怖いというよりは感動ものというか、物語の最後の結末が本当は良い霊だったというものだった。

それからいくつかタイトルと概要だけ眺めてみても、どれもイマイチ気にならない。面白いんだけど少し違う。だから僕は十分間ほどこれじゃないという思いを抱きながら、求めているような怖い話を探した。

そして、見つけた。本当に怖い話――。

それは1人の男が匿名掲示板に悩みを相談するところから始まる怪談だった。怪談と言うよりは、男が自分の身に起こっている経験をそのままリアルタイムで書き込んだことが……結果、怪談になったというほうが正しいかもしれない。

始まりは深い夜、1人暮らしの男が深夜という有り得ない時間に自宅マンションのチャイムを鳴らされるところからの書き込みだった。

書き込み日時は午前2時を過ぎている。「さつきからずっとこんな夜中に俺ん家のチャイム鳴らしてる奴がいるみたいなんだけどどうしよう」。

そんな文章から始まる怪談を僕はじっくり読んでいった。

午前2時、俺の部屋のチャイムが鳴った。

その時、俺は眠っていた。突然に高く大きな音が鳴ったので目が覚めたのだけれど、起きてすぐには状況が理解できなくて、俺はしばらく暗闇の中……半目を開いて寝転んでいた。

高く大きな音は繰り返される。何度も何度も。そして、それがチャイムの音だと理解できたときに枕元のスマホを開いて、時刻を見るとちょうど午前2時だった。

スマホのライトの眩しさに目を細めながら、回らない頭を無理やり働かせて現在の状況を整理する。

俺は寝ていた、そして起きた、こんな深夜に、寝たのはいつだったか、たしか、そう時間が経っていない、夜に寝たはずだ、なのにすぐ起きた、チャイムの音で……。

「チャイムの音が鳴っている」。こんな遅い時間に。

それに気づいた時、俺の体から瞬時に汗が噴き出した。

つまり俺のことを誰かが呼んでいるのだ。常識的に考えてあり得ない時間に。玄関のドアの向こうで。一体誰が。心当たりはない。眠気もたちまち無くなっていた。

月明かりが差し込む部屋の中で、ぼんやりと見える玄関への廊下を見る。チャイムの音は止むことなく鳴らされていた。連打されている訳ではない。1つの音が止んだらまたもう一度押す。一定のリズムでもなく、ちゃんと誰かの意志でボタンが押されている。

気付けば俺は息を潜めていて、肩は強張っていた。

誰がチャイムを鳴らしているのか知りたければ、玄関まで行けばいい。簡単なことだけれど、俺は動けなかった。こんな時間に人の家のチャイムを鳴らすなんてろくでもない奴に決まっている。

もしくは、機械の故障か。それでもしくは……。

その可能性を考えると当然怖い。けど、考えてしまう。部屋が真っ暗だからか。いくらろくでもない奴でもこんな時間に他人の家のチャイムを鳴らすだろうか。

深夜という時間に不可解なことが起こったのならそこに行き着いてしまう。これは心霊現象ではないかということに。

そう考えると、布団の中で待つしか無かった。何もしなくてもこのチャイムが止む時が来るのを信じて、何かがいるのであればどこかに行つてくれることを願つて、俺は頭ごと布団の中に隠れた。

布団の中ではしきりにスマホの上で指を動かしていた。頭の容量を使わずにできるいつもの操作だ。スマホを手にとつたらまずは行う指が覚えていること。

俺にとつてそれは匿名掲示板の閲覧と書き込みだった。

いつからか頻繁に連絡を取るような友達がいなくなつて、利用するようになつた匿名掲示板。精神的な助けを求めて、俺はさっそく匿名掲示板でスレッドを立てた。

「こんな真夜中に俺の家のチャイムがずっと鳴らされている件ww」

おもしろおかしいテンションで、そのままの状況を書き込みつつ心当たりはないという文章を付け加えておいた。こんな珍しい出来事ならどこかに書き込むのではなく、自分がスレッドの主になっていいと思つた。きつとすぐに誰かが反応してくれると思つた。

そして予想通り、更新ボタンを連打しているとすぐに書き込みが増えた。

付いた書き込みにありのまま返信していった。最初は質問ばかりだったので、1人暮らしだとか仲の良い友達はいないだとか答えて。音だけでも証拠もアップロードして。内心が気じやないけど、冷静を装つて対応した。

そうしていると、かなり落ち着いた。いくらかの人自分と同じようにこの問題と向き合つてくれている。彼らは大丈夫。なら自分も大丈夫。俺は1人じやない。

面白がつて「さっさと見に行け」やら「それ4回目までのチャイムで出なかつたら殺されるよ」という書き込みを見ていると、自分もこの件を楽しめるテンションになつた。

さらにそのタイミングでようやくチャイムの音が止んだ。

かれこれ20分くらい鳴っていたんじゃないかと思う鬱陶しい音から解放されて、俺の部屋に静けさが返ってくる。

本当に危機は去ったのか布団にくるまったまま数分待つも、楽になつてしまえば大したことは無くて、俺はもつとこの話題を盛り上げる何かが無いかなんて期待しながら玄関へ出向いた。

逐一状況を書き込めるように匿名掲示板が表示されたスマホを持つたまま。さすがにここまで長ければただ機械が故障しただけだろうという思いもある。

玄関の覗き穴から外を見ると、案の定そこには誰もいなかった。

明かりを点けてもさすがに覗くときはちよつとドキドキしたが、誰もいなくて本当に良かった。俺はほつと一息吐いて1Kの小さな一部屋に戻る。

後気になるのはテレビドアホンのモニターに保存されているはずの画像に何も写っていないかだった――。

「誰もいなかった」と書き込んで、俺はモニターを操作して保存された画像を見ていった。やはりそこにも人影は無くて、いくらか保存された画像たちを送っていてもそこには誰もいない廊下があるだけだった。

おそらくはなんらかの機械の故障。このままただの機械の故障であるならば嘘について誰かが写っていたことにしよう。

そうやって解決が見えて来た時だった。指先で次々と表示されていく画像の1つに女の姿があった。

突然表示されたその画像を見た時……俺は息が止まった。

暗闇をフラッシュ無しで捉えているのでよくは見えない。ぼんやりと形だけが写っている。

けれど、たしかに長い髪の女らしき姿がそこにあった。

肌が白くて、服も白い。どちらかと言えば華奢な体系。見て分かるのはそれくらい。顔のパーツもぼやけてしまっている………けど、薄っすら笑っているように見える………口元………そして………

俺はそれを見た時に、なんだか今までにない喉のつまりを被った。一瞬呼吸が苦しくなって、その場で咳き込んだ。

ただ驚いたというだけではない何か。表現できない身の危険を突き刺されるように感じた。

もちろん、偶然その時通りかかった同じマンションの住人が写っただけかもしれない。けど、これは………

それから俺は自分1人だけじゃとてもじゃないが抱えきれない問題を匿名掲示板で共有して、ドアホンに保存された画像も載せた。眠れない夜を朝まで顔も知らない連中と乗り切った――。

その後、彼の身の回りには奇妙なことが起こるようになった。

初めは毎日深夜に自宅のドアが何度もノックされるようになったこと。チャイムが鳴った次の日から、チャイムが鳴ったのと同じような時間に決まってノックされる音が部屋に繰り返されるようになった。

何度か勇気を出して外を見ても、ドアホンのモニターで見ても誰もそこにはいないのに。

あとはどこまで関連や信憑性があるのか分からないが、呻き声が聞こえたり、ベランダに鳥の死骸がいくらか転がっていたり、毎晩悪夢にうなされたり、ポルターガイストがあったり。

それらの事象には証拠の画像や動画が添えてあるものもあった。

そんな「閲覧注意」と付けられたリンクの先や、匿名掲示板の話の流れを見ていった僕は今、この男と同じ経験をしたかのような気分に

陥っていた。

特に最初の謎の女の画像。サイトにも書かれていることだが、よく見ると女の両肩からはそれぞれ2本の腕が生えているかのようになってる。

実際に深夜のチャイムからのことを加味したその画像のインパクトと言ったらもう。しばらく忘れられそうにない。

そして最後は深夜のノックに嫌気がさして、ある日いよいよ外へ飛び出した男が、しばらく散歩して帰ってくると、そこにはまだノック音がしているドアがあつて。よく確認すると実は中から叩かれているように聞こえるらしかった。

「待って まだいる 中にいる」

「こつちから覗いたら 手が見えた」

「右手が2つ」

そんな書き込みを残した男がその後どうなったかは語られていなかった。

同じ匿名掲示板を覗いていた人が心配する書き込みをしても返信が返ってくることは無かった――。

終始匿名掲示板テンションで語られていて……この件について大家や警察に相談するのは、普通に生きてるだけで騒音や悪臭で注意されたことがあるので大家と顔を合わせるのが嫌という理由でやらないというユーモアなエピソード。

それらを加味しても僕はその怪談が怖かった。とにかくそのリアルさが、幽霊と言う物を身近に感じさせた。

大抵は作り話であろう怪談の中で、本当にあつた話なんじゃないかと思わされた。

読み終えた後もまだ落ち着かない。鳥肌が二の腕に憑りついたまま、鼓動が収まらなかつた。

あの純度100パーセントの心靈写真に写った女の姿も、呻き声を捉えた暗い部屋の動画も頭の中で繰り返される……。

「でもまあ……これも作り話でしょ」

僕は言い聞かせるように声に出して言った。

隣人に聞いてみた話も、マンションの掲示板に匿名で不審者の情報を尋ねた話も、作ろうと思えば余裕で作れる話だ。

これは作り物だ。実際にはこんな事件は起こらなかった。

言い聞かせてみても、僕はしばらく寝れそうにない精神状態になっていた。体を動かすのもためらってしまうほど。

だから、僕は一応確かめることにしたのだ――。

ちよつとこのままにしたままでは気になってしまう。

「怖い話 本当」

黒いパソコンによる検索だ。普通のスマホで幽霊が実在するかどうかを検索するのじゃダメだ。確定させたい。

さつさと寝たいので暗い部屋のままで、僕は黒いパソコンのEnterキーを叩いた。

待つてる間は後悔が僕を襲う。それというのも、逆に本当という結果が出てしまったら、一体どうすればいいのだ。

そして結果は表示された。最悪の結果だ。

「あなたが先ほど読んだ怖い話は本当にあつたことです。被害者の男は四つ腕がある女の幽霊に首を絞められて殺害されました。」

僕はそれを見た時に、なんだか今までにない喉のつまりを被った。

画面を見たまま固まってしまう。

「幽霊は実在します。基本的に生きて人間では認識もできない死んだ人間の現世に留まる魂だけの姿ですが、非常に強いストレスを抱えた人間が死ぬ、または寝ている間に無意識で魂が抜け出すと人に害を及ぼす幽霊になります。」

続いて表示された文で、さらに指先まで固くなってしまった。

つまり、あれか……。この男を殺したような幽霊が今もこの世界のどこかにいるというのか……。

その時、僕の部屋のドアを叩くノックの音。軽い力で3度――瞬時に僕は臨戦態勢に入る――。

「まだ起きとんか。早く寝ろよ」

肥満体型の父がドアを開けるとすぐ閉じて、トイレの方へ歩いて行く音を立てる。

一瞬今日一番の緊張感があつたが、僕は少し安心を得られて……。デスクライトを灯したまま、足先までしつかり布団にしまつて眠つた。

word18 「何時から 並べばいい」

明日は新作のゲームが発売される日である――。

ずっと昔から続いているシリーズの最新作で、今年でなんと30周年。モンスター育成要素がある王道ファンタジーRPGは3年くらいおきに新作が発売される度、世間全体で大きな話題になる。30周年記念作品の今回はより注目されていた。

僕が生まれる前からあったゲームだけれど、僕もそのゲームのファンだった。

高校生になってからはコンシューマーゲームから離れていたが、そのゲームだけは明日の発売日に買ってプレイするつもりだった。PVが発表されてからずっと楽しみにしていて、ついにこの日がやってきたかという気分である。

僕は待ちきれなくて、今公式から公開されている情報を自室で見ながらにやにやしていた。

ただ、問題があつて……僕はそのゲームを予約していない。

前から買うつもりではあったのだけど、なんだかめんどくさくつて。昔よくゲームを買っていたような近くの店はいつの間にか潰れてしまっていたし、そもそもゲームを予約して買うって自分1人ではやったことない。

あとは、まあ予約しなくても午前中に行けばさすがに買えるっしょという考えもあった。実際そうだと思う。いくら人気ゲームとはいえ初日からどの店も完売つてことはないはず。最悪、今のご時世ならダウンロード版という手もある。

けれど直前になってさらに問題が1つ。

できれば初回限定版がほしい……。

コントローラーのカバーやらストラップやらが付いてくるやつで、パッケージも普通のやつより気合が入っているやつだ。

基本的に僕はそういうところまでこだわらないタイプで、初回限定版というのがどういう物かも知らなかつたのだが、つい数日前に内容を見た時一目惚れしてしまつてどうしてもほしくなつた。

大抵の店では店頭販売はしてなくって、予約せずに買おうと思えばメーカーの公式ショップに行くしかない。

そして、おそらくそこで買おうとすれば開店前に長蛇の列に並ぶ必要があるだろう。いつから並べば買えるかも分からないのでなるべく早く行つて。

こんなことならもつと前から準備しておけば良かった。黒いパソコンを持っている僕なら一番安いところで予約するのも、懸賞で当てしまうのも訳ないというのに。

でも、それすらも大した問題ではない。黒いパソコンなら今からでも確実により良い初回限定版までへの道を教えてくれるだろう。

「何時から 並べばいい」

僕は黒いパソコンにそう入力する。何時から並べばなるべく時間を使わないでいいか、いつ並べば最後の1人になれるのかを調べる……。

と、そんな生温い検索をするつもりはない――。

「何時から 並べばいい (エロ)」

僕はワードを付け足した。

最後だろうが列の中盤だろうが、ある程度長い時間並ぶのは変わらない。だとしたら、並んでいて一番心地が良い場所を狙うべきだと賢い僕は考えた。

それはつまり数人はいるであろう綺麗な女性の後ろとかで、入力せずとも僕の考えを汲み取ってくれるかもしれないけど僕はワードを付け足したのだった。

「7時12分11秒〜7時13分34秒の間に到着すれば、あなたの望む位置に並ぶことができます。」

多くは語らないその文を見て、本当に今日の僕は冴えていると思つた。その後、明日のゲームプレイを妄想しながら眠りについた――。

翌日、時計をよく確認しながら問題なく店へ辿り着いた僕はちやんと望んでいたような光景があることに安堵した。小さくガッツポーズをして、何知らぬ顔で最後尾に並ぶ。

並ぶ際にすれ違い、ちらりと見た横顔から推測する年齢は23歳。朝方でしつかり支度もしてなさそうなのにきめ細かくふわつとした栗色の髪と、びっくりするくらい綺麗な二重の目。

マスクをしているから顔の全体は見えないが、とんでもなく上玉だと確信を持てる女性がそこにいた。

おまけに体もナイスボディ。割と軽い服装で太ももは後方から丸見えだった。これから開店までのおよそ2時間、ずっと拝むことができきる。

それから僕は前から香ってくる良い匂いを、鼻で気づかれない程度に精いっぱいかき集めながら時間が来るのを待った。

はあく……良い匂いだ……。

途中、係の人に「もう少し詰めてください」と言われるラッキーイベントもありつつ、ゲーム以上に価値のある物を入れた休日の朝であった。

word19 「僕のことを親友と思っている人の数
校内」

黒いパソコンというチートアイテムを持ってかつ、暇を持て余している僕が——最近思いついた新たな遊びがある——。

名付けて、「いいともチャレンジ」。

何かしらの条件で人数を検索して、1人という結果が出ればチャレンジ成功。

昔のテレビ番組にあった1つのコーナーで、スタジオ内にいる観客100人の中から1人となる質問を狙うのに似ている。だからこの名前。

言わなくても平日昼にやっていたあの番組だ。サングラスをかけた大物芸能人が司会を務める。お昼休みはウキウキWATCHINGだ。

僕は今のところ同じ学校に通う生徒の中から1人を見つけ出すことを狙って検索をしている。

と言っても、今日でまだこの遊びをすることに決めたのは2日目なので本当に今のところという感じだ。別に何か他の条件を思いつけばそれでいい。

僕は授業中や家での勉強中の時間よりも集中して今日のいいともチャレンジの検索内容を考えていた。

いつになく頭の回転がスムーズな気がする。やはり面白いことに使うときのほうが体は力を発揮する。

前回やったこのチャレンジでは「妊娠したことがある女子の人数校内」で検索した。少しえっちな気分状態で思いついた遊びなのでこの質問。

結果は2人。僕の想像よりも校内に経験がある女子の数は多かったらしい。つまり、その時のチャレンジは失敗に終わったということだ。

だから今回の検索では成功したい。ちなみに校内で1人を達成で

きた場合にのみ、その1人の名前も教えてもらおうという僕の中で勝手に決めたルールもある。黒いパソコンがそのルールを汲んでくれているか分からないけれど、たぶん大丈夫だ。

ああでもない、こうでもない……考えながら僕はそれっぽい雰囲気を出すために顎に手を置いていた。

チャレンジを成功させることだけを考えるのなら、いくらかすぐに質問は思いつく。けれど、「僕の隣に座っている人」とか1人だと分かりきっている質問では当然ダメだし、結果が面白くない質問も好ましくない。

定期テストで連続総合1位をとったことがある奴とか検索すると1人だったとして、名前が出てきたところで何も面白くない。これが校内でたった1人だと、しかもその1人がこいつなのか、そんな風に思える質問を探していた。

僕にとって何かしらの利益が欲しい。

そして10分——。辿り着いた答えがこれだ。

「僕のことを親友と思っている人の数 校内」

僕は校内にいる自分の親友は1人だと思っている。だから、僕のことを親友と思っている1人の数も1であるはずなのだ。その可能性が高い。いや、そうであってほしい。

少し怖い質問でもある。僕からは親友だと思っけていても相手からは親友ではないと思われていたら最悪だ。泣いてしまうかもしれない。

けれど、気になってしまったらもう確かめずにはいられなかった。安心したい。きつとあいつも親友だと思っけてくれているはず。

僕にとっけて親友というのは同じクラスの眼鏡をかけた友人。この黒いパソコンに真偽をつけるときも彼に関する質問だった。実は小学生の時から仲が良かった友人である。

そんな彼が自分をただの友達だと思っけていたら正直へこむ。高校生になってからはそれほどべったり一緒にいるという風では無くなっただけれど、きつと親友は誰かと聞かれたらむこうも僕だと答えてくれるはずだ。

僕はEnterキーを押した。

グルグルが表示されて、脳内で流れる某いいどものコーナーのBGM。

僕はすかさず目を瞑って、BGMが終わると共にまた開いた。

「あなたのことを親友だと思っっている人の数は、1人です。名前は――」

表示された文を見た僕の脳内はチャレンジ成功の嬉しさよりも安堵のほうが割合が大きかった。

1人で男の熱い友情というものを味わって、これはこれで涙を流してしまいそうだった。

「おめでとうございます。」

そんな文がパソコンから1つ。

「あ、どうも」

僕はチャレンジ成功のご褒美は何にしようか気分を躍らせた。

日常の検索あれこれ③④ 「サスペンス漫画 真実」
「占い師 本当」

「動画サイト ログインIDとパスワード」

『あなたが忘れたログインIDはponkan1221。パスワードはdcbal221です。』

「さつき見たAV やらせ」

『あなたが10分前に見たアダルトビデオの出演女性は素人ではなく、企画の内容をあらかじめ知っていました。』

「お隣さん 趣味」

『あなたの隣の家に住む主人の趣味は天体観測です。』

「僕の家のごキブリ 数」

『現在あなたの家の敷地内にいるクロゴキブリの数は9匹です』

「サスペンス漫画 真実」

『あなたが先日読んだサスペンス漫画に真実と言うような設定はありません。作者が各話を盛り上げようとした結果、設定を増やし過ぎた為、辻褄を合わせることが出来なくなったので、そのまま謎を増やしたまま終わらせました。』

つい最近、僕が一口气読んだサスペンス漫画がある。パンデミック系で謎が謎を呼び、人間同士の騙し合いも描かれる王道サスペンス。凄く面白くて読んでいる間はずっと最後がどうなるんだろうと気にしていたのだが、楽しみにしていた最後は結局あやふやなまま謎を増やして終わった。

続編への伏線かとも思ったけど何も考えていなかったただけらしい。謎が多い物語とは大体そんなものだったりするのだろうか……もしくは拍子抜けする大したことが無い真実……。

「時間 止め方」

『時間を止める方法はありません。厳密に言うと、あなたが考えているように時間を止めた状態であなただけ動けるという状況を作ることはできません。』

「催眠術 やり方」

『一時的に人の思考を誘導することや、長期的な管理で他者の行動を制限することは可能ですが、あなたが考えているように異性を意のままに操るようなことはできません。』

「お隣さん 年齢」

『あなたの隣の家に住む主人の年齢は67歳です。』

「賞味期限切れ 食べてもいいか」

『あなたが今食べようか悩んでいるクッキーは賞味期限が10日過ぎています。食べても体調を悪くすることは無いでしょう。』

「占い師 本当」

『あなたが先程見たテレビ番組に出ていた占い師の能力は嘘です。彼女が言い当てた未来や過去、憑いている霊の話は全てテレビ局のスタッフが作り上げたものです。そもそもこの世界に未来を視るという類の占いは存在しません。』

先程ゴールデンタイムのバラエティ番組で特集されていた占い師が凄かった。訪れたことが無い場所や初めて会う人を1度見ただけでその過去を詳しく話し出すし、心霊スポットや数カ月前に占った未来が当たるかどうかという企画もバリバリに視聴者を驚かせる内容だった。

今まで見たそういう類のスピリチュアルな人間の中ではぶっつきぎりで凄かった。

占いに興味が無い僕が信じてしまいそうになるほど。幽霊はこの

世にいたのだから見る事ができる人がいてもおかしくない。

けれど、蓋を開けてみれば結局それも作り上げられたもので……。未来を知れるだとか、その辺にいる幽霊が見えて会話できるなんて人は胡散臭い占い師なんて職業に就かない。普通に考えたらそうである。

そんなチート能力があるならもつと有効活用できるはずだ――。

そう。そんな能力がこの世にある訳ない。もしあるとしたら……。

『人が未来を知る術はこの世界で唯一、このパソコンだけです。』

word20 「未来 変えられる」①

この黒いパソコンを使って僕の未来について検索する――。

それはこのパソコンを手に入れてからすぐに思いついたことである。たぶん10代の若者が何でも知ることができると言われたら、「未来」は結構な割合の者が知りたがることではないだろうか。

自分の未来について……将来自分がどんな職業に就いているだとか、誰と結婚して子供は何人いるかだとか。

僕も当然知りたしいし、本当にすぐ思いついた。ノートへ検索したいワードを書き始めた時に3番目か4番目くらいには。それでも、どのワードを優先するか考えた時にはどんどん後回しになって結局今まで検索してはいない。

理由の1つは、すぐに変えられるし変わってしまいそうだからだ。現時点から10年後の自分を知れたとして、それが気に食わなければ、そうならないように全力で行動して変えてしまえばいい。

特にこの黒いパソコンを持っている僕ならそうだ。未来を検索した後にそれがどんな形だったとしても、また未来を変える方法を検索して変えてしまえばいい。

例えば、10年後の僕は望まない職業に就いた挙句、リストラされて無職になってしまっているとか教えられたら、そうならないように今から努力する。黒いパソコンの検索を活用してでも……。

この黒いパソコンがあれば望んだ職業になるのは難しくない。プロスポーツ選手とか肉体的に無理な職業で無ければ、競争倍率が高い試験も成功するのに必要なナイスなアイデアも思いのままだ。

成りたいと思った職業になる方法を検索してしまえばいい。

だから、現時点での未来を検索することには意味が無い。

そんな結論が出た。

減るもんじやないのだから、単なる興味本位でエンタメとして検索してもいい。どんな結果が出ても深く考えないということ前提で。

だけどそれも何と言うか……怖いんだ。

僕は入力した「10年後 自分」という検索ワードをBacksp

a c e キーを長押しして消した。

僕が未来を検索しないもう一つの理由。それは未来を知るのが怖いからだ。もしも全知全能に、「あなたに10年後はありません。何故なら3年後に確実に死ぬからです」なんて言われた日にはどうしたらいい。僕に不可避の不幸が待っている可能性を考えると、未来を知るのって怖い。

不可避じゃなくても嫌な気分になる。このままだと死にますと言われただけでも日常が崩れてしまいそうで。

勇気が必要だった。自分の未来を知るには。勇気が無くて、だらしない僕はずっと未来を検索するのを後回しにしていた。

また入力しては、またその文字を消す。今日も後回しにしてエロいことでも検索しようか悩んでいた。

——そうしながらも僕はなんだかんだこころの準備を整えて、未来を検索するまであとEnterキーを押すのみというところまで辿り着いた。既に指を乗せて半分押ししている。

word20 「未来 変えられる」②

今日という日にどうしても未来を検索しなくなったのは夢を見たからである――。

未来の自分の夢だ。僕は今日夢の中で未来の自分を経験した。おそらく20代後半くらいになった時の自分。

夢の中の僕はスーツを着たサラリーマンだった。かなり苦勞している様子で、中間管理職と呼ばれるほどまで偉くなっているかは分かっていなかったけど、とにかく上司には色々怒られて後輩へは指導とミスのフォローを要求される。

ひたすら会社での苦しい経験を見せられる夢の中で、僕は厳しそうなお顔をしておじさんや禿げたおじさんに何度も頭を下げた。昼休みの休憩中にはずっと転職を考えたり、机に伏せながら全て投げ出して楽になってしまおうかなんて考えていた。

トイレの中でそんな大人になったときの自分の顔を鏡で見た時はその陰の濃さに驚いた。

本当にただ苦しい場面が繰り返される夢だったからあの僕に心を安らげられる友人や恋人がいたかなんて分からないけど、きっといい。あの僕を見たら分かる。辛い感情を経験したから分かる。孤独でつらい仕事に追われるだけの生活。

そんな絶望的な未来を見た後に起きた僕は思ったのだ。

僕の未来はこんなんじゃないっ。僕にはバラ色の未来が待っているのだと。

小学生の頃から美人なお嫁さんとそこそこな収入を手に入れる未来を思い描いているのだ。何度もコミュニケーションしているから夢じゃなくて目を閉じただけでもまぶたの裏にはつきりと見える。そんな未来があるはずがない。

それを証明したくて未来の検索を決意した。誰に見せる訳でもないけど自分を落ち着かせるためだ。起きてからまだ1時間足らず、モヤモヤする気持ちを何とかしたい。

時間が経てば忘れると思うけど、未来の検索から逃げるのも終わり

にしたい。だから、忘れないうちに――。

僕は「10年後 自分」と入力済みの画面を見ながら、Enter キーに置いた人差し指へ力を入れた。

あとはたぶん、わずか数ミリ指を下げるだけ……。

だけど、ダメだ……やっぱ怖いっ。

僕は寸前のところで、また腕を引いてパソコンから指を離した。

ああ。もう怖いからからやめてしまおうか。今日は休日、ゲームのバグ技でも調べてドラドラしよう。

机から離れてゲーム機へ手を伸ばす。

そうやってまた未来の検索から離れかけた時、僕の頭の中に1つの妥協案が浮かんだ――。

「未来 変えられる」

自分の未来を知りたい、けれど知るのが怖い。その間に生まれた妥協案のワードだった。

まずは直接未来の話を知るのではなく、検索した結果の未来が変えられるのかについて検索する。

これを知っておけば、いざ未来を検索するとき心に余裕を持っている。どんな結果が出ても絶対に変えられる。それなら勇気はいらない。

変えられるとは思うけど変えられなかった時が一番怖い。だからまずそれを確定させておけば……。

「未来 変えられる」

さつきまでとは違って楽な気持ちで入力して、検索を実行するのもすぐだった。とりあえずはこれを知ったところで何も自分に変化はないから。

「変えられる未来と変えられない未来があります。あなたから遠く、関りの無い人の近い未来ほど既に確定しまっていて何をしても変えることはできません。あなた自身の未来で10年後、20年後等であればいくらでも変えることができますでしょう。」

また、未来を知ることができるのがこのパソコンだけである以上、未来を変えたと認識できるのもこのパソコンを持つ人間だけなので、

未来を変えることができるのは実質このパソコンを持つ人間だけです。」

少し難しく書かれた文が表示された。けれど、とにかく自分の未来は変えることができるということでもいいんだよな。

僕は表示された文を見て嬉しく思った。特に利益が得られた訳でもないけれど、なんだか気分が上がった。

しかし、その気持ちは続けて表示された文で少し濁る。

「もう1つ、どんなに親しく身近な人のどんなに遠い未来でも変えられない未来もあります。これは人間が生まれた時から既に決まっているもので、日本語で言うなら運命でしょうか。運命はこのパソコンでそれを知ってどれだけ変えようとしてもかえられないものです。人によって人生の中で絶対通らなければならぬ道がいくつか用意されています。その最たる例は死。人間は生まれた時から死ぬ日が決まっています。」

僕は正確に理解できないも、知ってはいけない何かを知ってしまった気がして放心状態になった。

人間は既に決まっている変えられない運命の中にいること、僕もその1人でこの先に何かが待っていること。

それも知りたいことの1つになった。けれど、それもまた今度向き合うことにした。面倒くさいから。

僕はそういう人間だ。

word 21 「競馬 勝つ馬」①

僕の家には黒いパソコンの他にもう1つ……赤いパソコンがある。こうやって黒いパソコンと並べて言うときい物のように思えるが、普通のパソコンだ。家電量販店で購入されたごく普通のパソコン。リビングに置いてあつて僕の家族に共用で使われている。

基本的には頻繁に使われるということはない。父は家に仕事を持ち込むタイプではない。母も姉もネットへの依存度は低い。だから、使われるのは家族の誰かにスマホでは難しい用事ができた時だけで、忙しいのは年末に年賀状を作るときくらいだった。

僕もたまに使うけど、逆に言えばたまにしか使わない。

そんなパソコンが今日は朝起きた時から起動していた。パソコンの前には父が座っている。

「おはよう」

「……おう」

あくびをしながらリビングに入った僕は父に挨拶した。すると父は僕の方を向きもせず、難しい顔でパソコンの画面を睨んだまま返事をした。手には何やら雑誌を持っている。

今日は日曜日、休日だ。時刻は休日ならまだまだ寝てても神様が許してくれる時間帯でリビングにいるのは僕と父だけだった。

冷蔵庫から取り出したお茶を飲んで、洗面台で顔を洗う。そうして戻ってきて父はさつきと全く同じ態勢のまま全く同じ顔をしていた。

父が朝からこの行動を取っている時が父にとってどういう日かを僕は知っている、競馬にチャレンジする日だ。

年に数回、父にはそういう日がある。そしてこの日を僕は待っていた――。

「今日賭けるん？」

僕は父の隣に座ってパソコンの画面を覗き込みながら言った。

「……おう」

「ねえ。今日俺にも選ばせてよ」

「ええ。お前が？」

父はようやく僕の方を向いて、嫌な顔をした。

「うん。久しぶりに」

「だめだめ。お前が予想した馬は昔から1度も勝ったことないやん」

「いやっ。今日は絶対当てれるから！」

「何やその自信は……」

昔から僕は父の趣味である競馬と一緒に勝つ馬を予想させてもらうことがあった。僕にとっては完全に遊びだ。出走する馬の一覧を見て名前が気に入った馬や、好きな数字の枠番の馬を選ぶだけ。

父も一緒に予想する人がいるほうが楽しいという理由だけで、息子がいい加減に選んだ馬へどうせ勝てないだろうと分かっているながらも100円だとか200円だとか賭けてくれた。一応、当たったらプラスになった分をお小遣いとしてあげる約束をして。

けど、それも僕が中学生に上がる前くらいまでで……。それ以降は僕がやりたがっても父が拒否した。僕もやりたいと思わなくなっていったし。

理由は本当に全く当たらないからだ。普通はいくら適当に選んでも数撃てば1回くらい当たる。少なくとも2位や3位にはなったりする。けれど、子供の頃から僕が選んだ馬は1度も1着を取ったことがないどころか、3位以内に入った記憶もほとんどない。

僕が選んだ瞬間にその馬が呪われているんじゃないかと思うほど……。

そんな感じだから僕は子供の頃、競馬場で大泣きした経験もあり、父は僕を競馬から遠ざけるようになったのだ。

「お願いー！」

「だーめ。お前にはこういうのに対する運が無いんだから。自分でも分かっとするやろ。大人になっても絶対やったらあかんぞ」

父はまたパソコンの方を向いて、僕の相手はしないという態度に。

「お願いお願いお願いお願い」

「ダメだったらダメ」

「なんか肩叩きとかするから」

「うーん……」

「今回賭けるお金は俺のお小遣いから出すから。それで、勝ち分の半分は父さんのものにするとかでもいい——だから、お願い」

僕は胸を張って机を叩きながら言った。

「んん？今日はなんか気合入つとるな。そこまで言うなら賭ける馬だけでも聞こうか」

「うん。で、どのレース？」

「これや」

「えーつと……これね。ちよつと待ってて」

僕は父が賭けるレースを確認すると、すぐに自室へ走った。そして、黒いパソコンに聞いたのだ。

何をかは……言うまでもない。

Word 21 「競馬 勝つ馬」②

「俺この馬にする。6番のマーマレードアップル」

黒いパソコンでの検索を終えて再びリビングに戻った僕は自信満々に指を差した。

「6番のマーマレードアップル?なんだ。また、適当に選んだだけか」

「いや、適当じゃないよ」

「珍しく選ばせてくれなんて言ってくるもんだから、何か競馬勉強して策でもあるんかと思っただけ違うみたいやな」

「弱いのか?」

「うん。まあ、絶対に勝つ可能性が無いって程でもないけど今回のレースでは9頭中6番人気。その地方競馬でも20回近く出てまだ1回しか勝ったことがないって馬やな」

父が見ている雑誌の出馬表でマーマレードアップルという名前の横にはバツ印の書き込みがあった。人気も低くてどうやら父も賭ける気はないらしい。

けれど、それを見た僕は嬉しく思った。だってオッズが高いほうが返ってくるお金が高いのだから。

「へー。でもそいつがいい」

「あのなあ。競馬はただ好きな馬に賭ける運のゲームじゃないんですよ。ちゃんと各データを読み取って勝つべき人間が勝つゲームなんよ。こうして色んな馬のデータを見るのも大切で面白い時間。どうや、お前もちゃんと見てみんか?」

「いいよ。そんなもん見なくても絶対こいつが勝つから」

父はわざとらしくデータブックみたいなものをボールペンで叩いて見せる。

勘で賭けて一喜一憂するものでなく、データで勝つ可能性が高い馬を予想するのが通の競馬だというのは本当の事なのだろう。誰がその馬に乗るだとか、過去にどんなレースで勝ってるかとか判断材料もたくさんある。

競馬に人生の熱を注いでいる予想屋なる人物がいることも知って

いる。父もメルマガに登録していて、賭けずともテレビでレースを見ては何やらメモしては一人でやついたりしている。自分もやれば楽しめる部分があるかもしれない。

けど、そんなことはどうでもいいのだ。僕には絶対の予想屋が出した答えがあるのだから。

「で、何円賭けるの？自分の小遣いから出すんやろ」

「全財産」

「え？」

「もちろん俺の全財産だよ」

「いやお前それはやめとけ。はつきり言つて勝たんぞこの馬は。別に
お前の小遣いが無くなっても父さんに被害はないけども、あとになつて小遣い要求されたり不機嫌になられても嫌だし」

「大丈夫。負けても後悔しないから」

僕は財布から5000円札を叩きつけた。

それからしばらく父は「本当に後悔しないんやな？」「知らんかな」みたいなことを言い続け……言い続けながらも渋々僕が予想した馬の馬券も購入した。

「父さん今日は競馬場には行くの？」

「お前はどうすんだ。父さんが行くならついてくるか？」

「俺はいいや。あそこに良い思い出ないし」

「じゃあ父さんも行くこうかと思ってたけど家で見よか——」

——そんなやり取りがあった後の昼。僕と父はテレビの前で正座して件のレース中継を見守っていた。

別に僕には正座するほどの気合いは無いけれど、願いを込める父に合わせて僕も気合を入れてるふりをした。

もう馬と騎手はゲートインしていて、間もなくレースが始まる。

「始まるね」

「……おう」

父はまた集中モードで、内心僕は笑ってしまいそうだった。

「さあ、各馬一斉にスタートしました！」

おきまりの実況の声と共にテレビの中の馬たちが走り出す。

序盤、中盤は僕が選んだマーマレードアップルは後ろのほうに位置していた。反対に父が賭けた2番人気の馬はずつと前の方で良い位置に。

父から見たレース展開は良好らしくて父は頷き笑う。

「先頭が最終コーナーに入ってきました——2位との差はあまりない——マーマレードアップルが5番手」

父の様子を見ていた僕は最終コーナーと聞いてテレビのほうへ視線を戻す。そしてマーマレードアップルが現在5位だと。

実況の通りもう姿を覚えたその馬はまだ後ろのほうにいた。大丈夫なのか、不安になる。そこからは僕も画面から一切目が離せなかった。

マーマレードアップルと1位との差はかなりあるように見える。けれどそこからマーマレードアップルは最後の直線だけでものすごい加速を見せた。

まるで別の生物かのように、余裕にも見える足さばきで外側から一気に先頭までごぼう抜きしていったのだ。

結果が分かっていたはずの僕も熱くなるほど美しくかつこい走りであった。

競馬ってちゃんと見ればすげえな……と、喜ばなければ——。

「よっしやあ！勝ったあ！」

「嘘やん……ええ……」

父は肩を落とし、僕は思いっきりガッツポーズをした。マーマレードアップルのオッズは11倍、5万円ゲットだぜ。

「んじや。お金受け取ったら勝った分ちようだいね。本当に半分父さんにあげてもいいから」

「ちよつと待て」

「え」

「何でこんな予想ができた？」

「……勘だけ」

一瞬黒いパソコンの姿がちらつきながらも答える。

「今日のお前はなんかついとる。今まで一回も勝てなかったのにこん

な大穴当てるなんて」

「うん。そうだね」

「もう1レース賭けてみんか」

「え、俺はいいよもう。じゃ」

「うんうん。十分勝つたのは分かる。父さんも次は賭ける気なかつた。でもお前の予想だけでも聞かせてくれんか。父さんがそれに賭けるから。今日のお前なら絶対当てれるから」

足早に自室に戻ろうとした僕を父がしつこく引き止める。

「いやあ……やめといたほうがいいんじゃないかな。なんというか運使い切っちゃった感じするし」

「大丈夫だ。頼む」

困ったことになった。けれどそれから何度も父が僕に選んでくれと頼むものだから、僕は適当に名前がかわいいやつを選んであげたのだった……。

数時間後、次に僕が選んだ馬は3位にも入れずに惨敗した……。

僕には姉がいる――。

現在は高校3年生で違う高校に通っている姉だ。僕が高校2年生なので1学年しか差がないとなるとちよつとだけ珍しいかもしれないが、1年9カ月差生まれの1歳年上。姉が遅生まれで僕は早生まれ、年齢関係はそんな感じ……。

当たり前だけど生まれた時から同じ家に住んでいて、普通に成長を共にして、普通に同じ食卓を囲んで、同じ環境で生きてきた。自室の位置も隣である。仲もまあ普通くらいだと思う。話すときはよく話すし、話さないときは話さない……。

性格は一言で言えばおっとり……そんな姉が今、僕の自室にいる。高校から帰宅して自室に入ると何故か自室にいたのだ。

「え……何やってんの……？」

見つけた時、第一声で僕はそう言った。

「ああ。あんたいつの間にか帰ってきてたんだ。何やってんのって見て分かんない？」

「分かる。俺の部屋の収納を漁ってる」

「正解。あんたの部屋の収納を漁ってるの」

僕が部屋に入った時から収納が開いていて、そこを漁る姉の周りには物が散らかっていた。さらに収納から物を取り出していく姉は、ちゃんと僕の質問に答えていないのにお構いなしであった。

「いや、それはそうなんだけど何か探し物？」

「そうだね……。ちよつとどこにあるか分からないものがあつて」

「へー。服？姉ちゃんのはここには無いんじゃないかな」

「服じゃない」

「じゃあ何？」

「ちよつとね……」

僕の部屋の収納には僕のものだけでなく、家族の季節ものの衣服やあまり使わない工具や掃除道具が入っていたりするスペースがあった。だから、たまに僕以外の人が収納を開けることはある。

それは問題ないのだけど、ある引き出しだけ見られたらまずいものが入っている。

「言ってくれたら俺が探すよ。大体中にある物把握できてるし」

「いや、いいよ」

「俺が困るんだって。部屋散らかし過ぎだし」

「ちゃんと見つけたら片付けるって」

「うーんと……そういう問題じゃなくなつて……。とりあえず何探してるかだけ言つてよ。そこに無いものじゃいくら探しても見つからないし」

「——ここにあるのはもう確定してるよ」

その時、姉は声色を冷たく鋭くした。そうされたものだから僕もひやりとしたのだ。

「え？」

「ほんと、とんでもないものがあんだの部屋の収納にあったもんだね……」

あ……終わつたかも……。

「ちよつと前から何かおかしいと思ってたんだよ。あんたが部屋に入るときやたら楽しそうで、なんか懸賞にハマったりもして、この前は競馬。拳句の果てに隣で耳を澄ましたら微かにキーボードの音が聞こえた日があつた……」

まさかとは思つたが既に見つかつてしまつていたのか。そんなまさか……。

「これは一体どういうことっ！」

姉が僕の前に何かを突き出したので、僕はもう見る前に仰け反つてしまった。目の前の景色を遮るように目の所へ手を持ってきて、何かを避けるように。

反射的にコントのようなリアクションを取つた僕は観念して、ゆっくり目を開ける。しかし姉の手にあつたのは思つていたのとは違つていたもので……。

黒くてメタリック……そうなんだけどかなり小さい。姉の掌の上に収まっている。これはパソコンではない……その付属品だ。ねず

みの英訳と同じあの……。

「あれ？それ何？」

次にしたりアクションもまた……思っていたのと違うものになった。

word22 「黒いマウス 機能」②

姉の手にあったのはパソコンのマウス。色は黒色。

これが何なのかは少し考えれば思い出した。初めに黒いパソコンが現れたときに一緒にあったものだ。使うことが無いから収納のどこかにしまいっぱなしで、黒いパソコン本体の隠し場所をより見つけたりづらく取り出しやすい場所へ変えていくうちに黒いマウスの方は存在も忘れていた。

「それ何ってとぼけちゃって。あんたパソコン隠し持つてるんでしょ」

「いや本当に知らないものだよそれ」

「あーあ。私もまだパソコンなんて買ってもらってないのに……。あんなだけパソコン買ってもらったの？男の子だから？それともあんたが自分で買ったの？ここんところ景気いいもんねあんた」

姉は昔から基本的におっとりしているがやけに鋭い勘を見せることがある。そんな姉が僕の隠し事を嗅ぎつけて、パソコンの存在に気づいた。自分も持っていないものを弟だけ持っていることに腹が立って証拠を掴みに来た。

今回の件はそんな具合か。

「何で知らないマウスがこんなところに入ってるの？家のパソコンのマウスはちゃんと別にあるし」

「はあ？意味分かんね。こつちが聞きたいよ。天に誓っていきなり出てきたものだもの」

誰にもバレないように気を付けて、実際今のところ秘密にできている物に唯一気が付くなんて恐ろしい女である。

しかし、状況的には僕に有利なことになっている。

本当に思いがけないものが出て来たから嘘つぽくないリアクションができた。嘘を言わずに嘘をつけている。

「まだとぼけるんだ。嘘つくの下手なくせに」

「嘘じゃないって。どこにあったのそれ」

「ここだよ。この中」

姉がマウスがあつた場所を指差しながら僕の顔色を伺ってくる。しかし、僕はしつかりと偽りないとぼけ顔を作っていた。

「心当たりないなあ。マウスだけ入ってたってどういう状況」「本当に知らないの?」

「うん。逆に姉ちゃんが意味分かんない嘘ついてるんじゃないの?」

「ふーん。じゃあ父さんと母さんに何か心当たりないか聞いてみてもいい?」

「いいよ」

今すぐ黒いマウスを奪い取って調べたい気持ちをぐつと我慢して、ここでも平静を装う。

「もつと奥まで調べてもいい?」

「いいよ。マジで何もないから」

これも強気に白を切る。唇が震えそうになるけれど気合でこらえた。

「じゃあ、このマウス預かってもいいの?」

「……いい、いいよ」

ああ……それはちよつと困るなあ。でもここも我慢しなければ。それだけは勘弁なんて言ったら筋が通らなくなる。

「分かった。今日の所はこのくらいにしてあげる。このマウスは没収します」

「何だよ。勝手な言いがかりで偉そうに」

「じゃ」

「おいっ。片付けてけよ」

姉が腕を組んで部屋から出ていく。僕はとりあえず助かったと安心しつつも怪しまれないように怒鳴ってみせた。

ドアが閉まると、すぐに耳を澄ませて姉の足音が遠ざかっていくのを確かめる。1歩2歩確かに1階まで下りていくのを聞いた。

そして部屋を片付けるよりも先に始める検索。バレずに済んだ宝物を取り出して、僕は収納の中に置いたままキーボードを叩いた。

「黒いマウス 機能」

あれは本当にどういう代物だったか。もちろん存在を知らないな

んで嘘だったけど、あれをどうやって使う物かは知らない。何で今まで忘れてしまっていたんだらう。もしかしたら凄い物を姉に取られてしまったかもしれない。

たぶん大した機能は無いと思う。黒いパソコンはマウスについて教えてくれなかったし、ただのアクセサリーだと信じたい。

けれど、大きな損失をした気も……。

「先程あなたのお姉さんが持っていたマウスには、このパソコンの検索を画像検索や動画検索に切り替える機能があります。マウスを操作してカーソルを画面上に置いたまま右クリックすることで選択肢が表示され、クリックすることで切り替え可能です。これを使えばどんな景色や映像も見ることができます。また、文字を選択したりといった標準的な機能やマウスだけで文字を入力するという機能もあります。」

めっちゃや有用やんけ。何だそれ。

僕は失ったものが大事過ぎて、何だか逆に笑ってしまうような気持ちになった。そんなものがこの収納で使われずに眠っていたのか。昔使っていた財布が出てきて、中に1万円入っていたなんて騒ぎじゃないぞ。

ということとはだ。あのマウスを使えば女湯や女湯なんかも覗き放題だということなのか。

……………。

……………。

……………。

絶対に取り戻さなければっ。

日常の検索あれこれ⑤ 「一番胸がでかい 同級生」

「ゲーム バグ技」

『あなたがこの前購入したゲームでは建物やダンジョン内の角から壁抜けができるバグがあります。方法は斧系の武器を装備し、主人公をアクセル状態にして抜きたい壁の前に立つ。視点を壁とは反対方向の床に向け、回復薬を飲むモーシジョンをキャンセルしながら強攻撃を地面に向かって放ちのけぞらせる。タイミングや位置の調整が少しシビアですがこれで壁を抜けることができます。壁の向こうにエリアが無い場所を抜けた裏世界では色々な利益があなたを待っているでしょう。スクマ地方のシュツティ山から入るのがおススメです。』

「1組の先生と2組の先生 不倫」

『あなたの学年の1組の先生と2組の先生は交際しておらず、肉体関係もありません。ただとても仲が良いだけです。』

「僕 顔面偏差値」

『今、世界にある顔の整い具合を計る指標を利用者の多い順から並べて、上位3つの指標をまとめて総合的に判断した場合、あなたの顔面偏差値は53になります。パーセンテージで言えば上位38.2%になります。』

半分よりは上だけど、逆に言えば本当にちよつとだけ半分より上。何とも言えない数字……いや、喜ぼう。男は顔だけじゃないし。

「他人のリコーダーを舐めたことがある奴 校内」

『あなたの学校内で他人のリコーダーを舐めたことがある人の数は、6人です。』

先日から続くいいともチャレンジ。今回の検索ではありきたりな罪を犯した人間は思ったよりもいることが分かった。僕も正直1人じゃなくて3人くらいいるんじゃないかと思っていた。

ちなみに僕は小学生の時チャンスがあったけれど、ちゃんと我慢し

た。

「1番胸がでかい 同級生」

『あなたが通う高校の2年生で最もバストサイズが大きい女子生徒は笠野さんです。』

その日僕はそうやって検索した。前から気になることはちよくちよくあった同級生の女子の中で誰が1番胸が大きいのかという疑問。

友達と男子だけで会話している時に議論したりもする。1番大きいのは何組の誰かとか、それに対してあの子のほうがもつと大きいだろうか。

勝手にガタイがいいだけとか、盛ってる感じがするだとか、胸はでかくても顔がなあ……なんて話題に発展して、上から目線で話をする。女子からしたらもの凄く失礼な話である。

そんな話の結論をこのタイミングで僕が求めたのは他でもない……明日は体育で長距離の持久走が行われる日だからだ。

何で持久走の前日に胸の大きな女子を調べるのか。賢い紳士にはすぐに分かるだろう。

あんな疲れるだけで面白さの欠片もない持久走なんて……何か楽しみがないとやってられないのだ。

word23 「姉 弱み」①

姉に黒いマウスを取られた日の夜、僕は如何にしてそれを取り戻すのかを考えていた。

予期せぬ角度から飛んできた攻撃でかなり惜しい物を無くしてしまった。思い返すとマウスの存在を忘れてしまっていた過去の僕が本当に馬鹿に感じて、どうして姉があんな行動を取る前にもっと大事に隠しておかなかったのかと後悔してしまう。

だけど、黒いパソコン本体が見つかるよりはよっぽどマシだったとポジティブに考えて、今は取り返すことだけに集中して前を向く。

マウスを取り返しつつ本体の存在をこれ以上怪しまれないような、なるべく穏便に済ませられるような作戦を考えていた。

まず思いついた作戦その1は、姉がいないときに姉の部屋に忍び込んでマウスを盗む作戦。シンプルな作戦だ。

今日姉がしたように先に帰宅して部屋を漁ったり、休日に姉が出かける日を狙って部屋へそつと入ってマウスを探し、盗み出す。

ただこれだと……姉がマウスが無くなっていることに気づくとまづい。というか、姉の性格的にまず気づかないなんてことは無い。取ったその日のうちに気づいて尋問しに僕の所へ来るだろう。奴はそういう女だ。

代わりに似たマウスを置いておくとか気づくのを遅らせる案もあるけど、費用と労力がかかるのでとりあえず保留。

じゃあ作戦その2、嘘をつく――。

さつきはあのマウスが何か分からなかったけど、よくよく考えたら友達が前にパソコンを家に持ってきたときに忘れていったやつだ。そんな感じの嘘をついて返してもらおう。

しかし、あの姉がぱつと思いつくような嘘で騙されるかは怪しい。僕も嘘が得意なほうじゃないし、ずつと一緒に過ごしてきた経験から僕の嘘を見抜く力もある。マウスのごとは知らないとはぼけ過ぎだし、よく考えてもこの状況からマウスを返してもらえないような嘘が思いつく気もしない。だからちよつとこの作戦も苦しい。

僕が嘘をついても、表情1つ変えずに嘘だと言ってくる姉の姿が目
に浮かぶ。

あとは逆切れして無理やり強奪してやるかとか、何かしらの好物や
お金を渡して姉を買収するとか、穏便や怪しまれないのとは程遠くて
作戦とも呼べない案が色々………：………：………：………：………
1つ。

作戦その3、黒いパソコンでマウスの取り返し方を検索する。

これが1番強い。きつと数あるマウスの取り返し方から1番良い
ものを教えてくれるだろうから。

1日1回の検索を使ってしまうが致し方ない。自分の脳だけでは
他にこれといった作戦が思い浮かばないし、もうそろそろ日を跨ぐ。

考えるのも面倒くさくなってきたので、僕は作戦3で行くことに決
めた。

word23 「姉 弱み」②

「マウス 取り返し方」

黒いマウスの機能を知ってから最初の検索。本当なら早速、画像検索か動画検索を試してみたいところではあるけれど、僕はこのワードを入力した。

結果にどんなものが表示されるのかは全く分からない。僕の考えでは答えが全く想像つかないから。なるべく楽しんで、穏便に怪しまれないように取り返すのが求める条件。そんな方法があるだろうか。

分からないけれど、僕は条件を頭に浮かべながら検索を実行した。

『あなたの姉からマウスを取り戻す方法として最もおすすめするのは待つことです。しばらくの間、このパソコンを控えめに使ってあなたの姉からかけられている疑いを薄めればマウスは自然とあなたのもとへ返ってきます。次のあなたの誕生日、「あげるもんじゃないし考える時間も無かったからこれ返すわ」と言いながら投げられるでしょう。』
姉からのマウスの返却方法は置いておいて、僕はそう来たかという感想を持った。待つのが最も正解か。確かになるべく早くという意識は抜けていたけどちよつと求めていたものとは違う。

時間をかけていいのなら一番正しいと思うけど、このパソコンならもつと……いや、少なからず早くマウスを使いたいという僕の気持ちも汲んでいてくれたはず。それでも待つのが正解ということは姉がかなり警戒していて穏便に済ませようとすると待つ以外ないということだろうか。

そうだとしたら我が姉ながら抜け目のなさに驚くしちよつと引く。まさか姉を殺して奪うだとかそういう物騒な答えが出る訳もないし、検索結果に関しては仕方ないと思う。

けれど、どうしたものかと悩む僕に黒いパソコンから更なる文が届く。

『ちなみにあなたの姉のマウスの保管場所は机の隣にある棚の鍵付きの引き出し。その引き出しの鍵は本棚に並べてある漫画「風神の遠い親戚」の17巻に挟んであります。』

うーん。それを知っても悩みは深まるばかり。隠し場所が分かってても安易に取ってしまうことはできない。逸る気持ちをぐつと堪えて待つしかないのだろうか――。

――と、そんなことができる訳なくて。次の日僕は姉の部屋の中にいた。

いつもより急いで帰ってきて姉はまだ家にいない。荷物を置いた僕は誰もいないのが分かっていながら忍び足でそつと部屋の中に侵入した。

思えば、姉の部屋に入るのは久しぶり。お互いに良いお年頃になってからは自室で2人きりになるという機会は減った。たぶん高校2年生になってからは初めての入室なんじゃないかと思う。

だから、この姉の部屋の匂いは久しぶりだし家具の配置も少し違っている。いくら姉とはいえ人のプライベートを覗くつてドキドキする。僕はちよつとだけ鼓動が早くなって、それを隠すようにまた意味もなく音を立てないように努めた。

我慢できないからマウスを一旦取り返して検索を終えたらまた元の場所に戻すという手段を取ることにした。手間がかかるがそれがいい。もしすぐに返せなくてバレたらバレたでその時に任せる。

たしかこの棚の中にマウスは入っていて、鍵はこの漫画の中。僕は久しぶりの姉の部屋を何か変わったものがないか見ながらマウス奪還作戦を進めた。

こんな枕カバーだったつけどか、こんな香水つけて学校行ってるんだなんて思いながら僕は棚の前にあつた椅子をどかして鍵付きの引き出しへ鍵を差し込む。

このどかした椅子も出る時にまた完璧な場所に戻して置かなければ。姉はこういう細かいところにも気づく。

引き出しを開けると、ノートやらアクセサリーが入っているのが見えて黒いマウスも確かにそこにあつた。僕は迷わずそれを手に取る。しかし、持ち上げるとすぐに手を止めた。

マウスが置いてあつた場所の下にメモ用紙が置いてあつたのだ。「取つたらすぐ分かるから。やっぱあんた何か隠してたのね。バー

カ」

.....。

その文を見た時に僕の中で徐々に引きのばされていた糸が一気にちぎれてしまった。

ああ、何だやる気かと、そつちがその気ならこつちにも考えがある。僕は怒ったのだった。

大体何で僕が得た物を勝手に奪われたというのにこんなにごそごそとしなければならぬのか。間違っている。喧嘩を売られたのなら買ってやろうではないか。

僕はマウスを戻した。盗むのではなくちゃんと奪い返すことに決めたのだ。

すぐに自室に戻って黒いパソコンを取り出す。穏便に済ませようなんて間違っていた。この黒いパソコンを持つ僕と戦えばどうなるか教えてやろう。

「姉 弱み」

僕は怒りのままそう検索した。

word23 「姉 弱み」③

僕が何かを隠しているという弱みを握られてマウスを取られたのなら、同じように姉の弱みを握ることで立場をフラットにして返してもらえばいい。

最初からこうすれば良かったのだ——。
もう、どうなっても知らないぞ——。

『あなたの姉は家族や友人に秘密にしているTwitterのアカウントがあります。これは彼女にとって現実で交流のある人物には絶対にバラしたくないものです。アカウント名は「コッペパンちゃん♡@chancoppe0404」、彼女はそこで自撮りや歌声を発信し、動画サイトにも同様のアカウント名で動画を投稿しています。』
黒いパソコンも容赦なくそれを表示した。

僕はすぐさまスマホを取り出して、教わったアカウントがどんな感じか見に行く。

検索すれば真っ先に顔の一部を隠した自撮りのアイコンが目をつけた。検索結果に表示されたのは1件だけで、アカウント名も黒いパソコンに表示された通り。つまり、この顔の半分以上を見せながらカメラに向かって手を振るようなポーズを取り、上半身裸のように見えるのは僕の姉ということになる。

いやアカウント名を見なくても弟の僕なら目元と顔の輪郭を見ただけで何となく分かる……。

プロフィール欄を見ると、JKであることや裏垢であることがまず書かれていて手短に好きな漫画の事も書かれていた。さらには気軽にDMするという文字や常に彼氏募集中という文字まで。

そのプロフィールを見て僕が驚いたのはハートの絵文字がたくさん使われていたことだった。如何にもそういうアカウントと言うか……何と云うか頭が悪そうって感じがする。姉のイメージと違うのだ。こんなことをするタイプとは思っていなかった。姉も僕と同じそこそこの優等生だったはず。

そこからすぐに下着姿を撮った自撮りやら本気の歌を披露してい

る動画がスマホに表示されて、それを見た僕は言葉を失った。

友達の悪口に大人の男との気持ちが悪く感じの絡み。スクロールしながら見ていけば……見ていくほど……弟として検索したこっちが恥ずかしくなってくる内容。

さすがに下着の下まで写している写真やSNSで知り合った男と会っている様子は無かったが、姉のそこそこでかい胸も強烈だった。

迷い無く検索したとはいえ悪いことをしてしまった気分になってくる。いや、悪いことをしているのだけど。これを知ったことを姉に知らせることを戸惑ってしまう。

けど、迷っているのは大事なものを取り返せない——。

その時、誰かが家の玄関を開ける音がして、指を遊ばせながら待っている姉の部屋のドアが開閉する音を聞こえた。

行くか。いきなり——。

僕は最後に自分は間違っていないと言い聞かせると、姉の裏垢を表示したままのスマホを持って部屋を出る。怒りが無くなって迷ってしまう前に。

今回姉の部屋のドアをノックするとき、今までしたどんなノックよりも緊張した。

「はい？」

「入るよ」

「何よ。帰ってきて早々」

「いやさ。昨日取られたマウス返して貰おうと思ってさ……」

「ふーん。やっぱりそうなんだ。大事なものだったんだ」

姉は優位の笑みを浮かべて、してやったりという顔をした。

「そう。友達の忘れ物でさ……」

「ウソウソ。絶対ウソでしょ。隠していること正直に話したら返してあげてもいいよ。それで、そのパソコンを私にも使わせなさい——」

そのタイミングで僕はポケットからスマホを出して、姉に画面を見せつけた……。

僕は何も言わなかった。ただ、スマホを持って無表情のまま姉の表情が変わっていく様子を見ていた。

姉も何も言うことは無かった。すぐに顔が青ざめて、一瞬僕のほうを睨んだけれど、無言のまま状況を理解して眉間に皺を寄せた。さながら紋所を見せる水戸黄門のようなシチュエーションで、その行動だけで形勢が変わり、気付けば手の平に黒いマウスが返却された。

「お互い知らなかったことにしよう……」

部屋を出る前に僕は言った。

「……………」

姉はそれでも何も言わずに、僕のほうをもう見てなかった……。

自室に戻ってきた僕は罪悪感を抱えていた。

けれど、それと共に黒いパソコンの超強化パーツもしつかりとそこにあつた。

僕は正義なのか悪なのか――。

この黒いパソコンを手に入れてからというものの、色々なことを検索してきた。そのパソコンの使い方は客観的に見て正義だったのか悪だったのか。

基本的に人を不幸にするようなことは検索してはいない。平和な検索をしてきたと自負している。おそらく他人に知られたくないであろう人の隠し事を知ったりしたことはあるけれど、それをさらに誰かへ広めたりはしてないし、僕のせいで凄惨不幸に陥った人は絶対にいないと思う。

だから、正義なのか。それもちよつと違う。

正義に満ちた人間がこのパソコンを持てば人々の役に立つたためのことを検索しているだろう。僕は自分の為ばかりに使ってきた。世のため人のため、指名手配犯の居所を掴んだり、この知識を使って医者を目指したり、そんなことはしようとも思わなかった。エロ目的で使ったことが1番多い。

でもやつぱり、悪でもないと思う。

悪人がこのパソコンを持ったらそりやもうとんでもない悪事を働けるだろう。盗みとか人への嫌がらせなんかは簡単にできるだろう。その人が盗まれたことを気づかない時間や一番嫌がることなんて検索したら一発だ。その気になればきつと世界の秩序を壊すなんてこともできるかもしれぬ。

だから僕は正義の人間でも悪の人間でもない。結論を言うとなんか悪な気がする。

だけど今からやろうとしていることを実行してしまえば僕は悪の人間になってしまうかもしれない――。

なぜ僕が今こんな難しいことを考えているのかと言うと、僕が今あと1歩で悪に染まってしまおう境界線に立っているからだ。

黒いマウスを取り戻してからの最初の検索、その選択を間違えると僕は人として堕ちてしまうのではないか、下種に成り下がってしまう

のではないか。そんな気がする――。

僕はマウスを取り返した日の夜、目を跨いですぐにその機能を確かめることにした。

マウスを操作して右クリックをすると、すぐにその機能の存在は確認できた。画面に見たことが無いウインドウが表示されて、そこに画像や動画といった選択肢があった。普通のパソコンで右クリックしたときとなんら変わらない白いウインドウが出てくる挙動であった。

初めて黒いパソコンを私利私欲の為に使おうとしたときと同じ気持ちになった。誰も経験できないであろう夢の体験へ手を伸ばす。神になろうとでもしているみたいだ。二度と経験できないときさえ思っていた気持ち。

世界が1段階広がるときの気持ちだ。

画像や動画のみならず地図や知恵袋といった項目もあった。最も気になるのはショッピングという項目。それらの項目を見た時は本当に胸が躍った。

しかし、僕はそこで衝動に任せて検索を実行せずに思いとどまる。何でも見れるというのならやっぱり今日本で1番人気のある女の子の裸を見ることにした。具体的には今映画やドラマに引つ張りだこの若手女優の裸だ。だけど、それはさすがにまずいんじゃないかと思っただ。

僕の勝手な基準だ。エロい情報を知るのはいいけれど、裸をそのまま見てしまうのはいかがなものか。直接手を汚している感じがしたのだ。

だってそうだろう。これって超完璧な盗撮じゃないか。僕は気づいて頭を抱える。

絶対にバレることは無いだろうけど、やってることはその人の風呂ヘカメラを仕掛けて見ているのと変わらない。盗撮ってちゃんとした犯罪だぞ。犯罪を犯した人間は捕まるんだぞ。女の子を平気で盗撮するなんて男として終わっているし。

今まで心の奥底に眠っていた僕の中の倫理が声を大にして反対している。

胸に手を当てて目を閉じると聞こえる。それはさすがにやめておけ……後悔することになるぞ……絶対にやめろ……。

でも、まあ検索するんですけどね。

僕は心の声を振り切つてある若手女優の名前と裸という文字を入力した。

いや、これは僕のせいじゃない。僕は悪くない。もしこの行動に文句を言ってくる奴がいるなら聞きたい。日本一フアンの多い女優の裸を見れると言われて見ないなんてことがあるのかと。

見ないなんてそれはもう逆に男じゃない。何ならこの若手女優にも失礼ではないだろうか。目を開ければ日本一の裸があるというのに目を開けないなんて逆に失礼になってしまう。

そんな考えが悩んでいた僕の背中をあつさり押した。

表示される若手女優の裸画像。そこには思っていた以上の光景があった。

自然な姿で立つ全裸の若手女優の姿、背景は白色。そのモノホンの胸の形、乳首の色、乳輪の大きさ、へその下にあるほくろまで、そして……。絶対に一生直接は見ることでできない国宝級の裸体。それがなんと驚くほどの高画質で。

「いや……やっぱ……」

思わず声が漏れる。興奮すると鼻血がでる漫画のキャラならたぶん大量の鼻血で宙に浮く案件だ。

さらには、マウスをスクロールすることで上下左右色んな角度からその姿を捉えた画像が出てきた。

顔を近づければ産毛も見える。クリックだの右クリックだのを交えて操作すればズームすることも可能ではないか。

ああ。手にしてしまったんだ。僕は。手にしてしまったんだ……。

それから僕は裸の画像を見るだけで2時間という時を過ごした。

黒いマウスを手にしてからの2回目の検索を行う時が来た。基本的な方針は何かしら動画を検索することだ。昨日は画像だったから今日は動画。

高校から帰宅して数時間が経ってから僕は黒いパソコンを取り出していた。すぐに動画検索をしたいという気持ちを抱えながら夕飯を食って風呂に入つて、明日までにやっておくべき授業の課題もこなして。その後に。

我慢して我慢して、何も気にすることは無い状態で臨みたかった。楽しみを後に取っておくことで、いざその時が来た時に最大限の幸福を感じたい。今日はそういう思考が働いたのだ。普段から最後の1口は好物で締めるタイプでもある。

しかし、待ちに待った時が来たというのに僕はすぐに操作はせず、まだまだ検索するのを後回しにする態勢になっていた。

理由は決めかねているからだ。どんな動画を検索するか迷っていた。

そりやまあ見てみたい映像なんてものは山程ある。だからどれにしようか迷っている………という訳ではない。半分は正解だけど動画検索1発目ならどんな感じで見れるのか知れば満足だし雑に最初に思い付いたものでも良いのだ。

今日の僕の最大の迷いポイントは他にある。それはずばり今僕に性欲があまりないということだ。

昨日黒いパソコンで検索した超高画質若手女優の裸は自分のスマホで撮影することでしたっきりと保存してあった。昨日だけで随分それにお世話になったし、僕は今それだけで満足してしまっている。

あの画像は僕のエロ歴史に名を刻む衝撃的なものだったし、当分はあれ以上を欲しいと思えない。逆にあれ以上に来られるとちよつとしんどい気までする。それはまた後々でよくて、今は全く欲が無い。

だとしたら何を検索するというのだ。何でも見れるなんて言われると、僕の頭ではエロ以外思いつかない。そういう理由で僕は悩んで

いた。

テレビの衝撃映像特集なんかでやっている大事故の映像だとか未知の生物の映像だとかは別に興味が無いし、そこまでできるのか知らないけど宇宙の成り立ちだとか未来の地球だとかはありっちゃありだけど知ったところでどうなるの感があった。どうやって宇宙ができたのかよりは女の子のスカートの裏のほうが気になる……。

今どき本当にあらゆるジャンルでたくさん動画がネットに出回っているし、黒いパソコンで無くても大抵の需要には答えてくれる。だけど今回の検索では黒いパソコンならではのものではないと……だとすると……。

「ダメだ……。エロいことしか思いつかん……」

しばらく考えた後に僕は頭を抱えた。どれだけ考えを巡らせてもエロい所にしか到着しない。

それと同時に情けなくもなってきた。さすがに昨日からそればかり考え過ぎである。高校での授業中でも頭の中は若手女優の裸でいっぱいだったし、今もスマホでなんとなくその画像を見ながら考えてしまっている。

ちよつとほんまにあかんぞこれは。その気が湧かない状態の頭でもこれなんて。僕はそう思った。

このままではまずい。画像検索や動画検索がエロという分野で最強すぎてそれに溺れかけている。本来もつと利益になるはずの黒いパソコンがエロ専用機になってしまうぞ。

僕はそこで決めた。今回の検索はエロを消す為に使おう。

そう決めると何を検索するかは不思議とすぐに答えが出た――。世の男を最も萎えさせる、最も見たくない夜の営み――。

「両親 SEX」

その文字を見ただけで僕の中からかなりのエロがすつと抜けていった。見たく無き界の王であると断言できる。見たくなさ過ぎて逆にやっぱりやめようとも思わない。グロ映像を見ようとするときのような怖い物見たさがあった。

マウスも操作して、あとはEnterキーを押すだけ。本当にそれ

だけでこれからそんな映像も流れるのだろうか。

流れて欲しいような流れてほしくないようなそんな気分でその先へ進んだ――。

最初に大きく表示されたのはベッドだった。うちの両親の寝室に置いてあるベッドだ。徐々にカメラが引いていつて……そのベッドの上に裸の両親が抱き合う形でいた。

これはいくつぐらいの時だろう。今よりは若い感じがする。僕が小学生の頃ぐらいの2人はこんな感じだったろうか。

すぐに行為は始まるみたいで肥満体系の父が腹で押しつぶすような形で母と重なる。

そして最初の喘ぎ声が――と、僕はそこで早々にウィンドウを閉じた。

もう我慢ならん。ものの十数秒で僕は限界を迎えた。これ以上こんなものをまともに見ることなんてできない。

たったの十数秒であったけど確実にしばらくトラウマになる。さつきまで幸せなエロが頭を支配していたのに、今ではエロを考えようとすると必ずあれが邪魔をする。きつと薄れていくまでずっとそうだ。

作戦通りではあるけれど、自分の想像以上の衝撃があった。久しぶりの父の濃いけつ毛とそのアップ、両親の性器なんていつ頃頭から消えてくれるか。

でも良かった。これで良かったのだ。ありがとう、父さん。ありがとう、母さん。

「おえっ」

word 26 「学年で1番 歌上手い奴」①

ある日の放課後、僕はカラオケ店に来ていた。クラスメイトの友達3人と一緒に。

普段は授業が終わった後に寄り道して帰る流れともつぱら安い飲食店でスマホを弄りながら喋るだけだが、今日は特別だった。テスト週間で昼に解散となる遊ぶにはもってこいの日だ。本当は明日もテストだから勉強しなければならぬのだけれど、たまにはこういう日もあっていいかと教室でいつもつるんでいるグループで意見が一致した。だから、今日は部活動に所属している奴も一緒にカラオケである。

僕にとってカラオケに来るのは久しぶりのことだった。たぶん1年以上は来てないと思う。中学生の頃に学校でカラオケブームが来た時はよく行っていたけれど、それ以来ほとんど行く機会が無くなっていた。高校では流行っていないからだ。

だから、カラオケ店のドアを開けたときの匂いと流行りの曲がいくつかループするBGMは懐かしく感じた。今回のメンツで来るのは初めてだったし、歌いたい曲も歌声が聞かれる相手も昔とは違うから、初めて入店した時のような緊張感と楽しみさもあった。

高校ではカラオケが流行ってないと言いつつも、僕自身カラオケが好きなのはなかった。誘われたら行くだけで自分から誘ったことは1度もない。だけど今回はどちらかと言うと誘った側の人間だった。

どこに行くかという話になった時にカラオケという案が出たらすぐに同意した。そして、あまり乗り気じゃない友達も積極的に説得した。その内カラオケには行きたいと思っていたのだ。僕は少し前から黒いパソコンから聞いたボイトレをしているから――。

「おっしや誰から歌う？俺からいいか？」

店員に案内された部屋に入るとすぐに言い出しっぺのサッカー部がマイクを持った。

「めっちゃやる気じゃん。俺は後でいいから、先に聞きたいわ」

と、昔からずっと一緒に僕の親友。彼もたぶんそんなにカラオケが好きなほうではない。

「じゃあ、俺から。もう歌う曲も決めてあるからね。1発目からかますわ」

「マジで何でそんな気合入ってるんだ」

僕も歌う曲は既に決めてあつて早く披露したい気持ちはあるけれど、落ち着いた態度を崩さずにゆっくり機械で目当ての曲を探した。いつも聞いているバンドのカラオケで定番の曲だ。

僕はあまり色んなアーティストの曲は聞かない。狭く深くが僕の音楽の嗜好ではぼ3組に限られる。人気過ぎないおしゃれなバンド、実力派で特徴的な声の歌姫、好きなアイドル。その中でボイトレと共に練習を重ねたバンドの曲で僕の進化した歌声を轟かせる……。

そのつもりだったのだけど、それよりも先に轟いた歌声があつた。言い出しっぺのサッカー部がカラオケに行きたかっただけあつて、

感心する歌声で歌い始めた。

word26 「学年で1番 歌上手い奴」②

今日のカラオケ1発目、曲の歌い出しから数少ない観客が沸いた。力強い歌い方と、高い声と低い声が混ざり合ったような独特で気を引く歌声。マイクを握った友達が歌い出すとすぐに、僕を含む周りの奴らは驚きの声をあげた。なかなかこんな声で歌う人はいない。テレビでも聞いたことがあるプロの中でも特徴的な歌声だ。

そう、その友達が披露したのは超クオリティの高いモノマネだった。

女性なら10代から50代以上のおばちゃんまで人気がある男性歌手がいる。その歌手の曲を歌う友達はさながらCD音源かのように歌っていた。モノマネもよくされているが、その中でも上手いくらいに聞こえる。

「悲しみがー黒い雷のように僕を撃つよー……」

マイクを通した声カラオケ特有に壁を反射するように響く。声の終わりの微妙な癖まで丁寧に再現して。

周りにいる僕たちが感嘆の声をあげて、少しからかってみたり合いの手を入れたりしてみてもあまり反応を見せずに、その友達は男性歌手になり切った。モノマネをしつかりやり通したのだ。

途中サビなんかは声が出しきれていない部分もあったけれど、その曲が終わり切った時にまだ残った体の芯まで音で振るわされる感覚は拍手に値するものであった。

「すげーじゃん。何々これを見せる為にカラオケ誘ったの?」

「まあな。どうだったよ。超練習したんだけど上手くない?」

「いや普通に文化祭とかでそのままできるレベルでしょ。テレビの素人モノマネとか出てても変じゃないよ」

「うんうん」

「実は昨日も俺1人でここのカラオケ来て練習したんよな。店員昨日の人と同じでちよつと恥ずかしかったわ」

歌い終わった後は別人のように恥ずかしがる友達。いや本当はこっちがいつものよく知っているほうなのだけだ。

「俺お前が気付かんうちに今の動画撮ったからさ。SNSに上げちゃうか」

「いやそれは恥ずかしいからやめよう。お前らに見せるのでぎりだったわ」

「でももうあと1タップで上げれるけど」

「もうちよつと待とう。てか次の曲もう始まるで」

嫌とは言いつつもまんざらではない様子の友達とそれをからかう友達。そして、次の曲は僕が入れた曲だった。

自信はあるけれどちよつと緊張してしまう。家族にバレないように気を付けながら風呂場なんかでこっそり練習しているこの歌を、練習通りに歌うことはできるだろうか。

「俺もこの曲好き」

「え、どんな曲。俺は知らんわ」

上手く歌うコツを復習しながら呼吸やあごの位置を整えて、始まった曲の歌い出しは上々の滑り出しだった。

先程の友達が歌った時ほどではないが「うまいじゃん」くらいの声がある。僕はその中でしつかりとリズムに乗せて確かめるように歌った。

歌声は練習通りよく伸びた。僕からしたらどこまでも伸びるような感覚があつて、息切れが訪れる気もせず、とても気持ちよく。

サビも大サビも自分の持つ歌唱力は90%くらいは発揮できたと思う。前にカラオケに来た時より確実に上手く歌えた。僕が歌い終わった後にも拍手が起きたし、機械の採点でも92点だった。

けれどちよつぱり最初の友達のモノマネのほうが反響が凄かった。

別に勝負している訳でもないし、全然悔しいとかではない。僕自身凄いと思つたし、友達の新たな一面を見て良かった。でもほんの少し恥ずかしさというか、先に歌いたかつた感はある。

「みんな歌上手いんやな」

「なんか上手くなつてない。前に一緒にカラオケ来た時よりも」

親友も褒めてくれて、僕は笑つた。

緊張も無くなつてきて、それから僕たちはカラオケのフリータイム

で5時間以上店内に居座った。碌に食べ物なんか頼んだりせず騒ぎまくった。

途中歌うのを中断してクラスメイトの噂話になったりなんかあったりしたときは、友達が気になっていることを僕はその気になれば黒いパソコンで検索できるなんていう優越感に浸りながら話して……時間を忘れるほど楽しいカラオケとなって終わった……。

いやあ、楽しかった。それにしてもあいつのモノマネ上手かったなあ。そんなことを考えながら家に帰った僕は今日の検索タイムに入った。

検索することは帰り道で既に何となく決めてある。それは必ずばり歌が上手い奴を調べることだ。今日のカラオケでひっそりと歌が上手いことを隠していた奴を知ったし、どれだけ近くに居ても他人がどのくらい歌が上手いかを知る機会って中々ない。だから気になった。

「学年で1番 歌上手い奴」

僕は今日の検索ワードをこれに決めた。

word 26 「学年で1番 歌上手い奴」③

イメージで考えるなら誰が歌が上手そうだろうか。僕は検索を実行する前に考えた。

僕の勝手なイメージでは顔が良い人のほうが歌が上手い気がする。頭の中でカラオケで歌っているところを想像してみるとイケメンやかわいい子のほうが達者な歌声が似合う。実際に経験上でもそんな気はする。

だから、クラス1のマドンナであるあの子かなとか、バスケットのあいつとか上手そうだなみたいなことを考えて……僕はワクワクしながら結果を表示した。

「人が上手いと判断する感覚に近い最新のカラオケ採点機械とあなたの好みから総合的に判断した場合、あなたが通う学校の2年生で最も歌が上手いのは……折原 裕実さんです。」

もしかすると今日一緒にカラオケに行ったサッカー部のあいつかもとも思ったが、黒いパソコンが教えてくれた名前は違うものだった。

折原 裕実《ひろみ》さん……っていうとどの子だったっけか……。そしてその名前は僕にとって馴染みのない名前であった。名前を見ても顔がすぐには頭に浮かんでこない。学年が同じであることは知っている、名前に見覚えはあって1年生のときは同じクラスだったことを覚えているからだ。

たぶんあの子だというのは分かるけれど自信が無い。ほとんど関りが無い女子のグループに所属していた子だったはずだ。

僕は男子とは広く交友しているほうだと思うけど、女子となると限られた人数としか交友関係はない。そんなものがあつたらちやんとした彼女の1人くらいいる。だから話したことのない女子はたくさんいて、その中でも遠い存在となると顔と名前が一致していなかったりする。

向こうが目立たないとか言ってるのではなくて、たぶん折原の方も自分のことなど知らないのではないかと僕は思っていた。

よく考えてみてもピンと来ない。やってしまった。折角検索したのに知らない子だったので驚きや意外といった感情がない。知っている奴だったなら何かしらの楽しみはあったんだけど。

1年の頃のクラス写真でも引っ張り出してみようか。いや、そもそもこういう時にこそ画像検索を使えば良かったのか。ううん、それは逆に顔だけ見せられたところでこの子誰だっけとなるか。

僕は拍子抜けして、まあやっぱり学年で1番歌が上手い奴でも文化祭でライブとかはせずに潜んでいるものなんだというちよつとした結果だけ胸に閉まい黒いパソコンを収納の奥に戻す。

しかし、その手を不意に止めた。

待てよ。その折原さんが歌っているところを動画検索すれば見れるはず。学年で1番と黒いパソコンに評されるその歌声は見ときたいな。

回れ右した僕は机の上にパソコンを置いた。今日の深夜に日付が変わったらすぐにそれを検索することにした。顔も知らぬ女子のカラオケを見る。

時計の針が12を差すまではあと2時間ほど、黒いパソコンの上にタオルと近くにあった教科書に乗せて、漫画でも読みながら待った……。

word26 「学年で1番 歌上手い奴」④

「折原さん カラオケ」

そのワードを入力した後に押すEnterキーには心をざわつかせるものがあつた。他人のカラオケを合法で覗けるなんて中々ない。歌ってみたとかカラオケ配信の動画ならいくつもあるけれど、一般人のプライベートなカラオケルームを覗けるとなると訳が違う。

本来カラオケ店において、他人のグループの部屋に入ってしまうというのは超恥ずかしい経験の代名詞である。あるあるのミスだ。僕も前に1度やらかしたことがある。トイレから戻りドアを開けると、他人の顔が見えたときに秒で背筋が凍る、あの経験を……。

そういう経験をしてやっと見える世界ということだ。他人のカラオケは。

それに加えて、僕と折原の微妙な関係性が胸をくすぐった。同じ学校に通っているけれど遠い存在。その気になると、ちようど覗いてみたくなってくる距離感だった。

唾を飲み込みながら動画検索を実行する。どういう風な動画が出てくるだろうか。歌が上手いと評されるくらいだから無いと思うけどカラオケに行ったことなかったりもしたりしなかったり――。

表示された動画は女の子を真正面から捉えた視点から始まった。肩に届くくらいの長さの黒髪で、僕が通う学校の制服を着た少女。普通に見たら女子高生の少女がカラオケルームっぽいちよつと暗めの部屋でソファに座っている。

マイクを持ったその目はやけに真っ直ぐで、集中している感じだった。部屋の暗さも相まってか、黒目が濃くて大きく、少しだけ暗闇の猫のように光っている。

たぶん近くで正面から見るのが初めてだから新鮮さがあるのだけど、前に校内で見かけたことがあるような雰囲気もすっかりあつた。ああ、この子が折原さんかという気持ちがあつた。

イヤホンをしていた僕は彼女が歌い出す前に一瞬イヤホンを耳から外して、廊下の方に人の気配が無いか確かめる。安全を確認すると

ベッドで布団の中に包まってスピーカーのゲージをMAXにした。

友達視点というか彼氏視点と言うか、そういう視点で同級生の女子を見ていると想像通り緊張した。これから歌っているのを聞くと分かっているとどうしても。

機械が音楽を奏でだして、折原はマイクを口元まで持ってくる。それ以外は姿勢も表情も何一つ変えず、歌いだしを待っていた。

そして始まった曲の前奏は僕がよく知っているものだった。数少ない僕が好きなアーティストの1人女性シンガーソングライターの代表曲――。大人の恋を歌ったようなセクシーな曲だ――。

画面内の折原は曲の歌い出しが近づくと、ゆっくり息を出して……そしてゆっくり息を吸い込んでから声を出した。

「あなたのーいつもの嘘にー……何も感じなくなっただわ」

緩やかに始まる第一声から僕はその歌声に息が止まった。

折原が発する歌声は今までのどんな歌声と比べても次元が違っている。1パート聞くだけでそう僕は確信した。

透き通るような声という表現がよく似合う。けれど力強さも感じる。声の質も歌い方も今までにない。

そんな訳はないのに口パクを疑ってしまったって、本当かと意味もなく首を横に振る。

「あの夜よりも確かなーそんな一瞬を探しているのー」

サビに突入して曲も転調、より強い声を出しても折原の声はまるで楽器のように綺麗なままで、その音量にも驚かされる。こんな風に歌を歌える人間がこの世に本当にいるんだ。しかも同じ学校に通っているなんて。

耳がかつてないほどの響きに衝撃を受けて、脳みそのほうまで浸透している感じがする。そして、もう1つ僕の心に別の感情が……これは一体何だ……。

折原のこれといった特徴は表現できず悪く言えば地味な顔、でもよく見ると整っていて歌っている時の目は本当に綺麗で目が離せないほどに美しい。その鼻、その唇、これほど見つめてしまうのは歌に感動しているからか……。

途中から胸が苦しくなつて、手を当ててみると異常なほどに鼓動が大きくなつていた。そんな状態でも僕は全く姿勢を変えないまま画面にしがみついて最後まで視聴を続けた。

「ただ本当の事だけは……知りたかったー」

曲が終わる。伸ばす声が終わるのが惜しい。まだ聞いていたい。気付くのが怖いから。

折原の歌声には120%の満足感があつた。けれど、終わつてしまつたらこの感情と向き合わなければならぬ。それが嫌だつた。

でも違うはず……そんなはずはない。

画面内の折原がマイクを口から離す。そこまで来てもあまり歌い始めと表情は変わらない。けれど曲のメロデーが途切れた瞬間に彼女の口元がほころんだ。

満足そうな笑みを浮かべる折原。その笑顔はセクシーな曲を歌つていた時とは打つて変わつて純粹で——子供のようで——。

「うっ——」

そのあまりのパワーに僕の胸は耐えられなかつた。とてつもないほどのギャップに次ぐギャップ。気にもかけてなかつた子がセクシーな歌を凄いいレベルで歌つていて、次の瞬間には純粹そのものの笑顔。こんな胸の容量に収まるはずがない。

僕は放心状態で黒いパソコンを片付けた。そして全く収まらない胸の鼓動で確信してしまう。

僕はどうやら恋をしてしまったんだと——。

ただならない感情を抱えてしまった僕は、翌日の学校でその真偽を確かめた。

いやきつと既に真偽はついていたのかもしれない。それがどれくらいの大きさなのかを知りたかった。

折原は今何組にいるのだろうか、普段はどんな風に学校生活を送っているのだろうか。そんなことも知らなかった僕のその日の学校生活は折原を知りたい気持ちで頭がいっぱいだった。

教室を移動するときはいつもと同じように友達と話しながらも、目だけはずっと彼女の姿を探していた。今ならきつと一目で分かるはず。意味もなく他クラスの友達に会いに行ったりもした。

誰かに聞いたりはずせずにひっそりと、全く表情に出したりはずせずに秘密のまままで……。

そしてついに見つけた。3組の前を通り過ぎたときだった。

折原がちょうどいいタイミングでドアを開けて出てきた。

僕は少し視線を向けただけで歩くペースも変えずに通り過ぎた。

それだけだった。たったそれだけで僕の胸はまた耳まで届くほど大きな音で鳴り始める。

振り向きたいけど横すら見ずに歩き去る。誰と一緒にいたとか見たいけど、できなかつた。これ以上ちよつとでも近づくだけで顔が赤くなってしまうそうだったから。ただ歩くしかなかった。

紛れもなく本物だった感情。折原のちよつと微笑むような顔を見ただけでまさかここまで……。

一体どうしたのだろうか。僕は自分が抱える胸の高鳴りに違和感を持っていた。今までのどんな「好き」という感情とも今回は違っている。そもそもそのベクトルすらも。

もちろん小学生の頃だって中学生の頃だって好きな子っていうのはいた。高校でもクラスにこの子可愛いなっていう子がいる。だけど今までのそれとはまるで違う。

具体的にはそう、今回の恋は純粹で大きいといったところか。例え

るならば何かラットもするようなダイヤモンド、汚れが一切無くて手にするのも躊躇う。ただ他には何も無くて良いから、ミステリアスな彼女のこともつと知って隣を歩いてみたい。そんな風に思える。

彼女がミステリアスだというのも問題だ。昨日までの僕の女性のタイプと違う。僕は背が低くて裏表のない純粹な子が好きだった。けれど折原に魅かれた理由はあのギャップにある。そうは見えない子があんなにかっこよく歌って、その直後にあんなに無邪気に笑った。どちらが本当なのかも分からないミステリアスさ、そんな子に胸打たれているのも僕が違和感を持っている理由だった。

先程もまさか学年で1番歌が上手いような雰囲気は出していなかった折原だけど、その顔が頭から離れなくなる。

まさかこれが本当の恋で今までの恋は恋とは呼べない紛い物だったとでも言うのか。今まで僕が好きになった子は本当は僕のタイプとは違っていたのか。とにかくかかってない感情だというのは事実。

抑えるにしろ爆発させるにしろ。どうにかしなければならぬ。このままでは胸が張り裂けそうだった――。

家に帰っても僕の頭の中は折原で一杯だった。普段当たり前になっている筋トレや授業の予習も手につかない。何をしていても時折ぼーっと折原のことを考えてしまう。

一体全体どうなっているんだ。何が僕をこんな状態にしている。ただカラオケで歌っているところをみただけで……たったそれだけなのに……なぜこんなにも、彼女のことを頭から離れない。

折原について検索したいことがあるのだけど今日の分の検索は日を跨いですぐに使ってしまった。こうやって日付変更後に検索することはよくあって、これにはすぐに検索したいワードが見つかる。と苦しいというデメリットがあった。

何もやる気が起きないまま、ベッドの上でただ時間が過ぎていくのを眺めて……その時が来ると打って変わって跳ね起きた。

「折原さん 彼氏」

この検索ワードの答えが知りたかったから。

何故だか折原のことを思うとこのぐらいの検索しかしたくなかつ

た。何ならこれ以外のことは今後も検索しないかもしれない。

まだ恋なのかも定かではない。昨日の衝撃的な映像で沸いた一時的感情かもしれない。だけどこの純粋な気持ちをズルして汚したくなかった。気持ちを度外視するなら裸でも検索すればいいけど、そんなことできないやりたくない。

時間があつて十分に覚悟できていた僕は流れるようにEnterキーを押す。

「折原さんに現在交際している人物はいません。」

その時僕は人生で1番のガッツポーズをした。反射でガッツポーズをすることがあるんだとすぐ我に返って驚く。

「あなたのその気持ちは恋ですよ。頑張ってください。」

続けて表示されたメッセージ。握った拳を開くと、僕はその手で自分の頬を叩いた。

word 27 「過去も 変えられる」①

僕は今日の学校である失敗をした。午後の授業を受けていた時のことである。

心地よい天気の日、5限目、昼ご飯を食べてほどほどに時間が経った高校生には睡魔がやってくる。それは席についてリラックスした状態ではどう頑張っても撃退できる気がしないほどで、少し気を抜けば身を委ねて机に突っ伏してしまいそうになる。

今日の5限目もそうであった。落ち着いた声をした先生の話だけが雑音として流れて……ほとんどノートを取るようなペンの音も聞こえず……クラス全体から眠気が感じられた。

僕も漏れなくそうだった。もう睡魔と戦うことも諦めてほぼ目を閉じながら意識を失いかけていた。ノートの上のシャーペンや消しゴムを片付けて、いつ力尽きても良いように準備もしていた。

しかし、そんな時クラスの状況は変わった。

「ちよつと皆眠そうだから、問題あてていこっか——」

教壇に立つ先生がそんなことを口走ったのだ。いつもはそんなことをしない定年退職間近のお爺さん先生だけど、今日は機嫌が悪かったのか単にだらしない生徒への指導心に火がついたのかは分からない。けれど、とにかくそれで生徒の態度は変わった。

皆が一斉に教科書とノートを整え始めて、教室が騒がしくなった。そこで今日の僕にとって問題だったのが、睡魔が強敵過ぎてすぐにエンジンがかからなかったことだ。先生のセリフを夢かもと勘違いしてまだ指すら動かさずに呆けていた。

「じゃあ、まず最初の問題を——」

さらに問題だったのが……最初に当てられたのが僕であったことである……。

自分の苗字を呼ばれて僕はようやく目を開けた。正面にいる先生と目が合い、どの問題を問われているのかどころか、何で名前を呼ばれているのかもすぐには分からなかった僕は動揺した。

あるミスで一番前の席になり、にもかかわらず目を閉じていた僕は

焦りに焦った。

どうしよう。このままでは怒られてしまう。勘で答えてみるか。そうやって急速に頭を巡らしたけど、諦めるしかなかった僕はそこで正直なことを言った。

「すみません。ぼーっとしてしまつてて……どの問題ですか？」

バツが悪そうな雰囲気から発生させて、軽く頭を下げながら。でも、そんな僕へ次に浴びせられたのは怒声でも許しの言葉でもなく、笑い声だった。

教室から笑い声が沸々と起こって、振り返るとやはり僕の方を見てクスクスと笑う男子が数人。

「当てたのは竹中さんですよ。寝ぼけとんな。ははっ」

……最大のミスがこれだった。実は当てられていたのは別のクラスメイトだったのだ。1つ後ろの席に座る女子。

しかもその子は僕と全く違う名字で、どうして聞き間違えたのか自分でも全く分からない――。

先生が笑うと、つるんでる男子だけでなくクラス全体が笑い始めて、僕は顔を赤らめた。何も考えられなくなつて自分も笑つて誤魔化したりすることもできず、ただじつと笑いが収まるのを待った。

そして授業が終わつた後も友達に謎のミスをからかわれて、あだ名が竹中さんになりかけているし、学校を出た後も恥ずかしさと後悔の気持ちが収まらなかった……。

そんな災難があつた日に帰ってきた僕は黒いパソコンを取り出して、机の前に座っている。

「過去 変えられる」

画面のワードボックスにはその言葉が入力されていた。

word 27 「過去も 変えられる」②

その検索への本気度はそれほどでもなかった。ただ、未だに残るこの恥ずかしさを別のことで忘れられたらそれでいい……。

だってそれほどのミスでもない。きつとクラスの皆も1週間後には忘れてしまっているだろう。こんなことで過去に戻りたいなんて願っていたら人生やつてられない。

そもそも僕は過去にタイムスリップすることに関しては否定派だった。たとえ現在の記憶を完璧に保持したままで、過去の自分に戻れるという話が存在していたとしてもあまり魅力を感じない。

別に今の自分の人生に不満が無いからという理由ではない。客観的に見ても自分が人より賢く人生を歩んできたとは思わない。

今では黒いパソコンというチートアイテムを持っているが、以前は人並みに失敗と過ちを経験してきた。いや、今でも失敗はよくあるけど……そんななんなに過去の変更の魅力を感じないのはたぶん僕がめんどくさがりだからだ。

前に小学生の頃に戻れたらと考えたことがある。家族でタイムスリップものの海外映画を見ていた時だ。僕は頭の中である時この選択をしていたら、もう1度あんな楽しい時間を過ごせたらと妄想していったけれど、それ以上にもう今までのめんどくさい経験や辛い経験をしたくないと思った。

その思いの方が強かったのだ。受験勉強だとか身内の死だとかいう壁をもう1度乗り越えたくない。ネガティブだとか高望みしないとも言うのだろうか。そんな訳ないのにメリットよりデメリットの方が大きく見えてしまう。

人生それなりに挫けていくものだと、半ば諦めて失敗を受け入れる心が僕にはあった。

それでも万が一簡単に……スイッチ1つで過去へ戻れたりする方法があるものなら……試してみたい気もする。

僕は気分で軽く腕を回してから、少し格好つけてEnterキーを押した。

「過去へ戻る方法は存在します。ただ、ある時刻へある程度正確に移動しようと思えば、それには果てしない時間と技術が要求されます。このパソコンから毎日知識を得たとしても、物理的に最低350年ほど。タイムマシンを作ることとは理論上可能なことですが、今のあなたはおろか地球の人類では未来永劫作ることはできないでしょう。」

黒いパソコンの画面にはそんな文が表示された。夢があるような無いような。本気ではなかった僕が何とも言えない顔をしていると、さらに画面が切り替わる。

「危険が伴うあまりおすすめしない方法ですが、もう一つ過去に戻る方法があります。しかも、この方法であればタイムマシンとは違ってあなたの体も過去のものに戻すことができます。やり方自体は簡単、ある点を押すだけ。この宇宙には人間の指先くらいの大きさで一定の力で押せば時間が逆流を始める点がいくらかあります——。」

そこまで読むと僕は急いで画面に顔を近づけて目のピントを合わせた。

「常にゆっくり移動しているその点は現在の地球にも数か所あります。あらゆる物体の表面積全てがその点になる可能性があつて、世界中の木々の葉から……全ての図書館の全ての本の各ページまで、地球の表面積の何万倍もの広さを肉眼では見えませんが移動しています。その点を正確に捉えて4N以上の力で押せばそこから空間の歪みが発生して、時間を巻き込み反転します。瞬く間に世界は何もかもが過去に戻り、この時抱いていた一瞬の思考と感情だけが脳に信号となつて残留します。あなたが何かを変えたい場合、押す瞬間に短い命令を紙に書いて凝視したりしておけば過去のあなたに伝わるでしょう。」

黒いパソコン曰くあるにはあつた簡単に過去に戻る方法。少し想像しただけで日常生活を送っているだけでは地球上の全生物が束になつても引き起こせないだろうことは分かる。

超を何重にも重ねていいほどの低確率を引いてやつと起こせる超常現象、もつともらしい説明を添えてある。ただそれでも僕は本当にそんなことがあるのかと思つてしまった。

黒いパソコンが言うならそうなんだろうけど、さすがにどこかを押

すだけで時間が戻るとはとてもじゃないが……。

「ただし、先ほど述べた通り大きなリスクが伴います。押す瞬間の位置やかける力の量と時間などが少しずれただけで結果が大きく変わってしまいます。発生するのは人間では御しきれない高次元のエネルギーなため押しながら調整することもできず、何かの数値が0.1ずれるだけで10年前に戻るつもりが100年前まで時間が巻き戻ってしまうこともあります。」

説明されたりスク……大きなリスクだ。100年前に戻ったりするということは自分の存在自体消えてしまうということだろうか。しかもそれって押しした本人だけではなく全ての人々がということ。恐ろしいことである。

けど、それって本当に本当か。たった1人が何かしただけで地球はおろか宇宙規模でそんなことが起こるといえるのか。今日の僕は探偵のごとく疑い深かった。

そんな僕の気持ちを察したのか黒いパソコンはさらに続ける。

「何事も創造より破壊、複雑化より簡略化するほうが簡単なんですよ。ちなみに、今その時間を巻き戻す点はこのパソコンのF2キーに位置しています。」

黒いパソコンの横で肘をついていた僕はその文を見て、机の上に虫を見つけたかのように反射で身を引いた。

そんな危険なスイッチが今すぐそこにあったのか。嘘だろ。誤って押ししてしまったら大変なことになる……でも、だからこそちよつと押してみたい気もする。ほんのちよつとなら大丈夫だろう。少しだけ不思議な体験を試みたい。

いやいやそんな好奇心だけで押しちゃダメだ。

そう思いながらも僕はそつとF2キーに手を伸ばす。何秒もかけてゆっくり。

言われてみればF2キーの周りに謎の力が働いている気がした。伸ばしても伸ばしても届かない。見えない壁みたいなものがある。

しかし、そこでまた黒いパソコンの画面が切り替わった。

「嘘です」

「え」

僕の下顎が下がって短く声が出た。

「ここにそんな点はありません。どこかにあるのは本当ですけど」
……またしても恥ずかしさを感じた午後であった。

日常の検索あれこれ⑥ 「お隣さん 何者」

「お母さん 秘密」

『あなたの母親は家族に内緒でよく友達と焼き肉等のお高いランチを食べに行っています。』

「お父さん 秘密」

『あなたの父親はほじった鼻くそをほとんどの割合で食べています。』

「親友 秘密」

『本人も気付いていないことですが、あなたの親友はあなたが小学5年生の時に貸したゲームを借りパクしています。』

「隣の英語の先生 秘密」

『あなたの隣のクラスで英語を教えている教師は1人暮らしのマンションで隣人に嫌がらせをしています。特に理由は無く、半分は娯楽で半分はストレス解消のために唾やガムをドアノブへ吐いたり、ゴミを郵便受けに入れたり、ネットの共同回線をわざと重くしたり……。』
何も検索したくないときに気分で行う検索シリーズに他人の秘密をアバウトに検索してみるというものがある。姉の秘密を検索した時と違って別に脅したり弱みを握ったりしたい訳ではなくて、ちよつと笑ったりちよつとした驚きが欲しいから。

黒いパソコンもその気持ちを含んでくれているのか本当に知られたくないであろうことは結果として表示しなかった。

僕も親しい人だけを検索するようにしていた。絶対と決めている訳ではないけれど、秘密を知った時に悪用しようと魔が差したり、関係が悪化するようなことが起こってほしくないから。

でも今日はそんなルールを破って隣のクラスの英語の先生という全然近くない人を対象にした。理由は学校の先生の中で1番可愛いと思うからだ。大体の男子はまだ20代中盤で若い世界史の先生のほうが好きだと言うけれど、通な僕は愛嬌のある彼女のほうが好き

だった。まだ彼女も20代だし。

理由になつていないけれど、それが理由だ。可愛いと思つていられど、授業を受けたことも無いから気になった。遠い存在もそれはそれで検索がしやすかった。

しかし、どんなものが出るかと思つていたらとんでもないものが出た。全くそうは見えないのにまさか人に嫌がらせをしているなんて。事実なはずだけど文だけでは信じられない事実。人当たりが良くても誰にでも見せる笑顔は嘘だったというのか。

ただ、彼女のそんな性格の悪い一面を知つてちよつと興奮したのも事実である。

「お隣さん 何者」

『あなたの家の隣に住んでいる主人は他の惑星から来た生命体、いわゆる宇宙人です。彼が地球に来た理由は地球を母国の管理下に置くためです。』

僕の家のお隣に住むお隣さんはちよつと変な人だ。子供の頃からずっと変な人だと思つていた。だから、黒いパソコンでも時々お隣さんについての検索を行つてきた。

そして、この前の検索でお隣さんの年齢を検索した時にやっぱり普通の人じゃないことが確定した。

黒いパソコンはお隣さんが67歳だと言つたけれど、僕の間からはどう見ても40歳手前くらいだからだ――。

意を決して、真実に迫るとそこには見てはいけないものがあつた。

何気なく始まった朝に違和感を感じた。何もかもが作り物のよう
な気がして、自分自身も本当の自分なのか分からなくなる。

見た目はいつも通りの朝だった。澄んだ朝日が窓から差し込んで
いて、それに当たると体が暖かくなる。

その暖かさは心まで暖かくして落ち着きを感じられる……と、言い
たいところだけど、芯までは届いていなかった。

これが偽りの温もりだと分かっているからだ――。

僕は朝食を無言で口の中に入れていった。あまり好みではないメ
ニューだった。味覚も薄いし食欲もない。それでも食べないと今日
一日のエネルギーが不足するからひたすら胃の中に送り込んだ。

食べ終わった後に牛乳を一気飲みしても嫌いな味が舌に残ってい
たから、僕はいつもより時間を空けずに歯磨きをした――。

「いつてきます」

玄関のドアを開ける。起きてから家の中で家族とすれ違っても挨
拶は返さなかったけれど、これだけはちゃんと行って家を出た。

外へ出ると、やっぱり空は青くて、いつもの世界がそこにあるだけ
だった。僕は靴へ入り切っていないかかかとを地面を蹴って押し込み
ながら、いつも通り高校がある左の方向へ曲がる。

スクールバッグを肩にかけてから数歩、僕はちらりと横を見る――
。そこには僕の悩みの原因があった――。

他のものと同様にいつもの姿でそこに。昔からあるお隣さんの家
だ。ただの変人だと思っていたけれど、その実、宇宙人だと判明した
お隣さんの家。2階建てだけど少し？せていて、その代わり庭が広
い。

知ってから家を見ると、周りの家と同じような雰囲気なのに窓の形
なんかも気になってしまう。

確か……お隣さんが僕の家の隣に引っ越してきたのは僕が小学生
の頃だったと思う。正確な年や季節は覚えていないけれど、小学生の

中でも1年生から3年生くらいの前半だったはず。

そんな時から近くで人生を送っているのに僕はお隣さんについてほとんど知らなかった。

あまり見かけることも無かった。子供がいない家のことを子供は知らない。町内でなにかイベントがあっても、会うのは子供は子供と、大人は大人とだ。

興味もあまりなかった。父や母がお隣さんについて何か話しているのが聞こえてきても耳を傾けようと思わなかった。

ただ知っているのはお隣さんが変わり者であるということだけだった。

お隣さんの噂話で聞こえてくるものは悪い噂ばかりだった。ある時は、いつもは町内の集まりには来ないのにいきなり来て料理を食べるだけ食べて帰ったとか、犬の散歩をしている時にすれ違ったら急に笑顔で犬を撫で始めたとか、深夜に公園で望遠鏡を覗いているだとか、犯罪ではないけどいつか何かやらかしそうみたいな、そんな話ばかりだ。

聞こうとしなくても近所のおばさんや親が話すのが聞こえてきていた。でも僕に向かってそんな話がされたことは無いし、僕が直接お隣さんの奇行を目撃したことは無かったから別にどうでも良かった。

周りの人が変な人だと言っていなければそうは思わなかっただろう。むしろ僕は、自分が直接何かされたわけでもないのに変な人だという風に見るのはやめようという気持ちすらあった。

それでもやっぱり……こうして僕を見ると、必ず立ち止まって両手で手を振ってくるお隣さんと出くわすと、変な人だとか思えないのだ……。

Word 28 「お隣さん 本当の姿」②

「おはよう〜」

素早く横に振られる手と同時に、気の抜けた声も僕に向けられる。子供をあやすような少し高い声だ。

「おはようございませす」

僕も挨拶を返した。立ち止まって会釈しながら。ちようど良いタイミングというか、嫌なタイミングでドアを開けて出てきたお隣さんに向かって。

目が合ったけれど、気付かないフリをして歩きさろうかとも一瞬思ったが、僕はやけに落ち着いていた。

「今日は良い天気だねえ」

「そうですね」

「まあ。あったかい。最近はずっと寒いのに」

男のくせに目はぱっちりしていて、全体的に顔のパーツが濃い。見た目はやっぱり40歳手前。そんなお隣さんは僕に手を振り続ける。

服装はスーツ姿だし、ネクタイをして髪も髭も整っている。普通にしていればどこからどう見ても普通のサラリーマンだ。そんなお隣さんはずつとずつと僕に手を振り続ける。

昔からこの人の僕に対する振る舞いはこうだった。小学校低学年の時に初めて会って頭を撫でられた時から、ずっと同じノリの子供扱いで絡んでくる。僕が中学生になっても高校生になっても。

「い、いってきます……」

「うん。いってらっしゃい。車に気を付けるんだよ」

「はーん」

最後までお隣さんの姿を目で捉えながら歩き去る。塀で見えなくなるまで表情を伺った。そのお隣さんもまた目を大きく見開いて、僕のことをじつと見ていた――。

いざ会ってみても怖いということは無かった。予期せぬ遭遇だったけれど鼓動が早くなりもせずいつも通りだった。理由は自分でもよく分からない。おそらくはまだピンと来ていないのだ。

長い間隣の家にいた人間が宇宙人だと言われて、それが紛れもない事実だと分かっているとしても、実際に確たる証拠を見るまではどうしても……。いつもの姿を見てもやっぱり全く宇宙人には見えない。怖いどころかむしろいつもの、僕には優しいお隣さんを見て安心したくらいだ。

僕は道ですれ違う電信柱になんともなく触れて、ザラザラしたコンクリートの感触を指で味わった。今見えている物が本当にそこにあるのか確かめるためだ。当たり前前に細かい砂が指に残るだけだった。

なんだか不思議な感覚が胸にある。形容し難い解放感というか万能感というか。黒いパソコンと同じように、自分自身が全知になった気分。見かける人は同じ地面を同じ目線で歩いているのに、それを見下ろす神にでもなったような。

黒いパソコンを手に入れてからまだそれほど時間が経った訳ではないけど、本当にたくさんを知った。黒いパソコンと出会わなければ絶対に知ることが無かったことだ。中には情報だけ仕入れて、自分の目で確かめていない物事もある。あいつがあの子を好きだとか、魔法が存在するなんて本当に本当なのかと思う。

そんな疑わしい事柄がまた一つ増えて、僕は改めて世界は不思議だと感じた。考えさせられてしまう。この世界は何なんだろうって。

本当にあることは分かっているけど、信じられないことは黒いパソコンの検索結果の他にもたくさんある。授業の科目で言えば化学や歴史がそれに当てはまるものが多い。色んな固体から気体までもが原子なるものでできているとか、大昔にあんな偉業を成し遂げた人がいたとかも疑わしい。

特に昔から思っているのは世界に何十億もの人間が本当に存在しているのかということだ。何万キロも離れた地球の裏側に同じように大地を踏みしめ、同じように呼吸している人間が果たしているのか。作り話じゃないのか。

僕はいつもと違うところで十字路を曲がり、高校とは反対側の都市が発展している方へ向かう。

この街の人間にしたってそうだ。今見えている全ての家に、全ての

マンションの全ての窓の向こうに、こんなにたくさんの方に場所がそれぞれ違う人間がいて全く違う暮らしがある。僕にとってはそのほうが信じられないことかもしれない。宇宙人が地球にいることよりも。

もしかするとあの建物の壁の向こうには実のところ何も無くって、そこへ帰る話したことも無いような人間はただの人形じやないんだろうか。意思があるように見えて無い。家では動いてもいない。そんな風に思えるのだ。

だってそれにしただって原子や歴史と同じように僕が確認していないことだ。

そう、この目で見なければ分からない。

僕は今、お隣さんの後をこっさり追っていた……。

お隣さんの背中がギリギリ見える距離を保って後を追う。不自然ではない範囲で足音や気配を消して。

尾行などしたことは無いので特に変わったことはせず歩いた。ただ遠くから歩いてついて行く。見失ったらそこで終わりで構わない。朝のひんやりしているながら、そこへ降り注ぐ温かい日差しという環境。包み込まれて守られているような感じがする。加えて眠気の残った頭。それらも僕をこんなとんでもない行動に至らす要因だった。

この尾行は予定していなかったものだった。家を出たら、例のお隣さんがいたので思い付きで始めた。ノリで言ったらお散歩にちよつとそこまでつて感じた。そんなノリで地球に潜伏する宇宙人の後を追う。

さすがに見つかつたらヤバいということとはほんやりだが認識できているので、いつでも振り返る準備はしていた。曲がり角でも追い付こうとはせず、自分が曲がった時にどっちに行つたか分からなくなつたらそこで、やっぱり高校へ向かう。

そんなスタンスだったけれど、僕の尾行は思いのほか上手くいった。

初めに見れたのは、お隣さんが野良猫を撫でるところだった。歩いているとお隣さんが止まったので、僕はそれとなく近くにあつたマンションの入り口に入った。近くに誰もいないことを確認してお隣さんを遠くから監視すると、お隣さんはしゃがんで猫を撫で始めた。

お隣さんは持っている鞆を道においてまで両手で猫を撫でたのだけれど、猫はすぐに嫌がつて逃げ出した。よく見えなかつたけれど引つ搔かれたようにも見えた。

素性を知らなかつたお隣さんから得た今日初めての情報。動物が好きらしいというちよつとした一面だった――。

その後も主に空を見上げながら歩くお隣さんの背中を追つて……この方向にあるのはうちの家からの最寄り駅だと思っていいたら、やは

りお隣さんの目的地はそこだった。駅につくと真っ直ぐにホームに向かつて、ICカードをタッチして改札をくぐる。

困ったことになった。僕はそう思ったけれど、迷っている時間は無くて、増えてきた周りの人間の中で当たり前のように切符を買った。お隣さんの目的地は想像もつかない。1000円札を入れると、切りよく500円のボタンを押した。

追い付けるか不安だったが、お隣さんが上がっていった階段を上るとスムーズにお隣さんのいるホームは見つかった。線路が2本しかない小さな駅だ。道はそこへ繋がるものしかなかった。

僕とほぼ同時くらいで電車は来た。また迷っている暇は無かったので、お隣さんと別のドアから同じ車両に乗り込んだ。横を見ると尾行を始めてから初めてお隣さんの横顔が見えて——僕はすぐに逆の方向を向き、少し背を低くした。

アナウンスと共に電車のドアが閉まる。床が動き出してから最初に思ったのはこっちに行くやつなんだということだった。都市に行く方ではなくて、家がまばらになるほうへ。方向で言うと僕の高校がある方角だ。

気付いて周りを見ると、見慣れた同じ高校の制服を着ている人がそこそこいた。言うまでもなく電車通学の生徒。座ってスマホを弄っている奴や、立って友達と話している奴。

そして、僕のクラスメイトでそこそこの仲の良い男子も近くにいた。「あれ？何で？」

目が合ってしまったって、すぐに向こうも僕のこと気づき話しかけてくる。

「おう。おはよう」

僕は焦ったけれど、平静を装った。

「おはよう……何で電車？」

「ああ、ちょっと気分で……」

「気分？」

「うん……えつとちよつと用事あつてさ。用事ある場所がこの駅の近くだったからたまには電車通学してみるかって」

「へー。こっからって1駅じゃん」

「いや、歩くと長いんだぞ」

上手い言い訳が瞬時に見つからなかったけど、それ以上問い詰められることは無かった。

友達に見つかることは何も問題ない。だから、非日常から日常に切り替えて、早くなった鼓動を抑えるのに時間はかからなかった。

けれど、このままでは尾行を続けられない――。

1呼吸着いた僕は普通に今日のめんどくさい授業についてなんてありきたりな世間話を始めて、遭遇した友達も普段電車で会うことは無い生き物の僕と、珍しいからか少しだけテンション高めに絡んできました。そうしながら、次の策を頭の中で練る。

すぐに僕が通う高校が窓から見えるようになった。普段見ることは無い角度からの学校だ。友達と話しながら、電車から朝日を浴びる高校を見て何をしてるんだろうと目を細めた。

そんなこんなで次の駅に着くと、僕は友達と一緒に電車から降りた。ここから何か言い訳して電車に乗り続けられるような策はなかった。「俺尾行中だから今日学校サボるわ」なんて言える訳がない。

お隣さんの尾行はここで終わり。電車に乗っている時間を含めて十数分の短い旅だった。

たった1駅の移動。おそらくお隣さんは降りないだろう。そう思いながら、下りた車両を振り返る――。

そこには電車の窓越しに僕へ向かって両手を振るお隣さんの姿があった。

「なあ……宇宙人っていると思う？」

結局サボらずに来た高校の教室で僕は友人たちにこの質問を投げかける。

「いるんじゃないね。遠い宇宙のどこかには」

1人の友人がそう答える。こういう話が割と好きなほうの僕の親友だ。

「知ってる？宇宙ってとんでもないぐらい広いし、地球に似た環境の惑星がある可能性は充分にあるらしい。つーか何かもう見つかったとかいう話も聞いたような……」

僕の親友はスマホを取り出して検索を始めた。眼鏡を抑えながらにやにやと。

「いるとは思う」

「俺もいつかは見つかるんじゃないかと前から考えてるわ」

他の友人たちもこんなようなことを言った。口を揃えて。いると思うけど自分と干渉することは無い。そんな考えだった。

僕も昨日まではそうだった。そういえば黒いパソコンに存在するかも聞いたことがあった。だから宇宙のどこかに宇宙人はいる。けれど干渉してくることは無い。そう思っていた。

そして事実、宇宙人はいて……どこに居るのが明らかになった。

それがたまたま家となりだったというだけだ……。

僕は授業が始まると言い聞かせるように心の中で唱えた。

お隣さんがうちの隣に住み始めたのは最近のことではない。今までずっと隣の家で過ごしてきた。距離で言ったら10メートルもない。にもかかわらず何年間も安全だったということはすぐに危険になることは無いと思う。

パソコンから教わったお隣さんが地球に来た目的も「地球を滅ぼす」とかではなく、「地球の管理」。僕自身、お隣さんから危険を感じたことは無い。むしろ、いつも優しい雰囲気を感じていたし子供扱いも両手を振ってくるのも嫌ではなかった。

だから、もう少し尾行を続けてみたかった。バレていたのだとしても。

気になって授業に集中できない。知らなければ何も変わらない日常があるだけで、行動しなければ変わることも無い。言い聞かせてみてもどうにもこうにも。しかも今日は日を跨いですぐに検索をした日だった。

僕はノートの右隅に自分が想像する宇宙人の絵を描いてみた。目が大きくて頭も大きくて、体は細い。お隣さんの本当の姿がこれだったとしても僕は……いや、やっぱり恐怖を感じる。

僕はまだお隣さんを危険ではないと思っっているし、危険だと思うようになりたくない。けれど知ってしまった以上は、「お隣さんの本当の姿」と「お隣さんが実際危険なのかどうか」これくらいは検索せねばなるまい。

今日の夜はどちらをまず検索しようか。僕はそれを考えることと、夜になるまでそれを検索できないことにため息を吐いた――。

学校の授業が終わると僕は長い寄り道をした。行き先は決めず、なるべく歩いたことが無い道を歩いて。街の方をぶらりと。住んでいる街でも曲がったことが無い角を曲がるだけで知らない店がたくさんあった。

ついこの間まで無かったはずの新しい店も何個もある。僕はお金を使うことを躊躇せず、何の記念日やご褒美でもないのに食べたことのない物や欲しかったものを買ってみた。

家の近くまで帰る頃には太陽が色を変えていた。朝からずっといい天気だった今日の夕焼けはこれでもかというほどオレンジだった。自分の家まで辿り着く直前、お隣さんの家の前を通り過ぎようとする――。

すると、そこで珍しく日に2回目のお隣さんとの遭遇があった。

「おかえり〜」

朝と同じく玄関から出てきての遭遇。お隣さんは変わらず両手を振った。

「あ、こんばんは」

「今日は遅いね」

「ああ、ちよつと用事が」

「そう。僕もちよつと用事……あ、そうだ」

お隣さんが手を振るのをやめて近づいてくる。そして、朝から変わらぬスーツ姿のポケットに手を入れた。

一瞬だけ緊張を持った。けれど取り出したものは何でもないものだった。

「はいアメちゃんあげる」

「……。あ、どうも。ありがとうございます」

それが終わると……お隣さんは手を振りながら後ろ歩きで道を行って行った。僕が自分の家に入るまでずっと。逆見えなくなるまで手を振ると言ったところだろうか。

やっぱり、悪い宇宙人だとは思えない――。

しかし、夜になって「お隣さん 本当の姿」と画像検索をした僕目のには思いを裏切るものが表示された。

人間よりも1周り大きい体に……小さな目とサメのような歯、緑色の体は筋骨隆々と言った感じで元のお隣さんとは似ても似つかない。

それなのに野蛮と言うような雰囲気は無く、コードが通った科学的な服装からは1つ次元が上の高度な文明が感じられる。

画像は裸と服を着た姿の両方が見れたけど、裸の方の画像にはとんでもない長さの物まで……。

僕はそれをひとまず、見なかったことにしようと思った……。

先日、僕は1つのゲームをクリアした。

前に朝から店の前に並んで、初回限定版を購入したゲームだ。モンスター育成要素がある王道ファンタジーRPG……僕はその、ゲームを10日前くらいにクリアした。

クリアと言っても完全クリアではない。今どきの良くてきたRP Gは基本的に、ラスボスと呼ばれるストーリー上の最後のボスを倒せば何もかも終わりということはない。裏ボスと呼ばれるより強いボスがあったり、集めることで特別なイベントが見れる収集要素があったりするのだ。

でも、僕はそのラスボス撃破後の要素を攻略してやろうというモチベが沸かなかったから、エンドロールを見てからしばらくそのゲームをプレイしなくなった。

買ってせっかくここまでプレイしたのだからと、数日に1回起動はしてみるのだけれどクリア後に出現するダンジョンの敵が強すぎて……レベル上げから始めたり、攻略情報を調べるのがめんどくさくなってやめてしまう。

やる気になって起動してみても、アホ面で雑魚敵相手に無双して終わりの繰り返し。そんな状況だった――。

ただ、今日は違っている。5日間の平日を乗り越え、休日を迎える金曜日の夜という時間。尚且つ、しばらく攻略から離れてモチベが回復した。長時間のやり込みがしたくて堪らないという気分になっていた。朝までぶっ続けてプレイできそうなほど。

僕は夜のルーティーンを終えると、飲み物や長時間を想定した姿勢を整えてゲームを起動した。朝よりも調子が良くて、風呂上がりのシャンプーの匂いと清潔な体も気分を上げる。

ゲームを起動している最中が一番心地が良い。

タイトル画面を通り過ぎると、前回のセーブポイントからゲームが始まる。ラスボスのいるダンジョンの手前にある村で主人公のキャラクターが動き始めた。現在いる町の名前やキャラクターのステータ

タスなんかも表示されて……ついでに、表示されるのが「オンラインのフレンドがいます」という文字。

このゲームにもオンラインプレイの要素があった。プレイ中にボイチャやチャットを繋いだり、アイテムの交換、育てたモンスターで対人戦や協力バトルとか、そんなことができる。

基本的にソロプレイでオンラインを主としたゲームではないのでどれもちよつとした要素ではあるけれど、名作RPGだけあってそういう部分も作りこまれていてやり込み要素はあった。

ハマる人はハマるし、それがメインコンテンツになつてしまうような人もいる。

僕は別にオンラインプレイに興味は無くつて、前作でリアルの友達と数回やっただけだった。それなのに昨今のゲームはネットが普及しすぎてしまっているからかやたらオンラインプレイを推している。

ボタン一つで繋がられる便利っぷりであるし、その気の無い僕でもいつの間にか形だけフレンドになつている人がいくらかいた。

そんな顔も知らないフレンド達をよそ目に、僕は今日もソロプレイでゲームを遊んでいく。まずは予定していた通りレベル上げから、攻略サイトを見た効率の良いやり方で、その後は装備作り、それと強いモンスターを捕まえて育成もやりたい。

やり出すと止まらなくて、次々とやりたいことが浮かんできた。その気になれば無限にできる系のゲームでもあって、聞く話によるとまだゲームが発売してから1カ月と経ってないのに何百時間もプレイしている猛者もいるらしい。

時間を忘れること数時間、ちよつと作成難易度の高い装備を作り終えたときに僕はコントローラーから手を離れた。

少し目が疲れてきたし、同じ姿勢のまましていると体が痛くなつてくる。手汗が出てきている手を乾かしながらあくびをした。

まだまだやりたいけど、ここらで終わってまた明日やろうか。そんなことを考えながら時計を見て、また画面を見る。

「この人いつもやってんな」

その時、僕は独り言で声を漏らした。

オンラインのフレンドの通知と同じように右上のウィンドウで表示される「フレンドがパーティメンバーを募集しています」という文字。ユーザーネームは今日何度も表示されている名前だった。

それどころか、いつ起動してもオンラインな気がする。

なんとなく気になって僕はフレンドリストからそのフレンドの情報をしようとした。メニュー画面を開いてボタンを操作する。

しかし、そこで僕は間違って「パーティに合流する」を押してしまった――。

やばい——。

そう思っても光回線。時代の高速通信は僕のBボタンを押す速度を上回った。

すぐに操作不可能のロード画面に切り替わって、あつという間に僕が操作するキャラクターがオンラインプレイの集会所へ連れて行かれる。

そこには既に2人のプレイヤーがいて、そのどちらもが僕のとは全く違う迫力の装備を身に纏っていた。

「こんばんは〜(。・ω・。)」

「こんばんは」

入室するや否や打ち込まれるチャット。僕はそれを受けて思考が固まった。

画面を見ながらどうするという言葉を頭の中で連呼した。明らかに場違い、間違えて入ったことになって抜けるのが正解……一言間違えましたと言うか、何も言わずに速攻出るか……それが正しいはずなんだけど……。

「こんばんはー!」

僕は何故か気づけばそのチャットを送っていた。深夜テンションで怖いものなしになっていた。

「初めまして よろしくお願ひします〜(。・ω・。)」

「よろしく」

「よろしくお願ひしますー!」

現実で話をしているのなら語尾に汗マークが付いているような精神状態だったけれど僕は当たり前前に振舞った。

画面内でパーティーメンバー達が近づいてきて見たことが無い派手な装備を近くで見せつけられると、さらに委縮する。片方は漆黒のごつい剣士。もう片方はしろくてふわっふわの魔法使いだった。どちらも僕は今まで見たことすらない。

けれど、堂々とキャラクターを動かして輪に加わる。

「今から果てクエの火2をマルコー壁1周回するんですけど一緒にいきますよ。(。・ω・。)?」

なんて……??

次に送られたチャットで僕はさっそくピンチになった。知らない用語、おそらくこのゲームのヘビーユーザー達の間で使われている用語だということは分かるが、ライトユーザーの僕では意味を予想することもできなかった。

「はい！行きたいです！」

しかし、僕はまだ折れなかった。そのくらいの用語は知ってますよという態度をとる。

自分で見ても明らかに地雷キッズの身なりとチャットだけれど、こうなったからにはどこまでいけるか挑戦だ。

「じゃあ準備しましょうか。(。・ω・。)」

「ああ」

「はい！」

準備とは何をすればいいのか……。分からなかったけれど、僕はとにかく2人について行つた。

「私火力しますね。(。・ω・。)」

「了解だ」

「はい」

このゲームの協力オンラインプレイはモンスターを使って行われる。育てたモンスターを各自1匹ずつ出してCPUのモンスターと戦うのだ。

だから、僕はとりあえず自分が持っている中で1番強いモンスターを1番強い装備にして設定した。

「あ、ポンカンさんは回復お願いします。(。・ω・。)」

そう思っていたのだけど否定されてしまった。ちなみにポンカンというのは僕のユーザーネームである。

他の2人は「hinacorin♡」と「黒竜」。無論のこと、魔法使いがhinacorinで剣士が黒龍だ。

そんな、2人との協力プレイはそのまま流れるように始まって、僕

は知らない世界を連れまわされることになった。

敵も味方も見た目だけで間違はなく強力なモンスター達に囲まれる中で、僕はひたすら回復魔法を唱え続けた。指示されるまま、2人のプレイヤーの後ろをにひつつくように操作してボタンを連打した。

次元が違う戦闘を戦場カメラマンとして見ているのは楽しかった。緊張していたけれど、すぐにそれも解けてきて……協力プレイの楽しさを感じ出していた。

しかし、緊張が解けたことでミスが生まれた。操作ウインドウより敵のグラフィックを見て適当に連打していた僕は、誤って回復魔法ではなく攻撃魔法を使ってしまった。しかも、味方に向けて。

さらにパーティーで一番下っ端の僕が回復をミスったタイミングで敵の攻撃がクリーンヒット。

パーティーは全滅してしまった。

Word29 「ゲームのフレンド 顔」③

「すみません!」

オンライン集会所にパーティ全員が戻されるとすぐに僕はチャットを打った。

「わざとじゃないんです!本当にすみません!」

間髪入れずにさらにチャットを打つ。誠意を見せるための2段階謝罪だ。

「気にしないでいいですよ。(。・ω・。)」

「どんまい」

チャット欄に流れてくる文字。怒られるかと不安だったけれど、返信は優しいものが返ってきた。

「もう夜も遅くなってきましたしミスもありますよね。(。・ω・。)」

「そうだね」

「すみません……」

「そんなに謝らなくていいですよ。(。・ω・。)」

「てか、初心者ですよねポンカンさんw。(。・ω・。)」

バレていた。そして今の僕にはさすがに嘘をつき通すほどの度胸は無かった。

「すみません!実は初めてだったんです!さっきの敵と戦うのも初めてでー!」

「ですよね。(。・ω・。)」

「(笑)」

「このパーティに参加したのも本当は押しミスだったんです……」

「www。(。・ω・。)」

「www」

入力しづらいコントローラーで僕は急いでチャットを続ける。

「全然気にしてないですよ。(。・ω・。)」

「逆に凄いなww」

「えへへ……」

「まだやります。(。・ω・。)?」

「え、まだいいんですか!？」

「負けて終わりもあれですし、もう少しだけ(。・ω・。)」

「ああ」

「行きましよう!」

何て良い人たちなんだろう。僕はそう思った。ネットゲ廃人と言え
ば悪いイメージを持ちがちだけれど、たまたま出会ったこの人たちは
とても心の広い人達だ。

それから僕たちこと……最高のパーティはまた1時間ほどオンラ
インプレイを楽しんだ。途中で戦うのはやめてチャットに移行する
と、僕は2人に攻略情報なんかを教えてもらった。あのモンスターは
ここにおいて、こう育てるといいだとか。

印象に残ったのはその知識量の多さとチャット入力 of 早さだ。僕
が何かを質問をすると、驚くほどの早さで答えを教えてください。分か
らない用語もあったけれど、丁寧に答えてくれて優しきは伝わった。

「それじゃあここらへんで(。・ω・。)」

「はい!ありがとうございます!」

「またやりましょ(。・ω・。)」

「やりましょやりましょ」

「いいんですか?やりたいです」

「はい またいつでも入ってきてください(。・ω・。)」

「それでは おやすみなさい」

「さようなら!おやすみなさい!」

こうしてお開きになった時に、時刻はもう深夜の3時になってい
た。

こんなに遅くまで起きていたのは久しぶりだろう。寝たら確実に
昼まで眠る。

突然一緒に遊ぶことになったけれど、本当に良い人たちであった。
なんだかゲームが面白かった以上に得られたものがあつた。

強くて優しくして……。

そして……。

「hinaccorin♡」さんは絶対かわいいっ。

これって安直だろうか。ゲームの中で偶然出会って、優しくしてもらって、プレイヤー名と操作キャラがかわいいという理由だけで、中身もかわいいと思ってしまうのはちよろすぎるだろうか。

ネット上での振る舞いから想像される容姿と、現実での容姿が大きく違っている場合があるなんて当然のこと。オンラインゲームの話に限らず、SNSや配信で顔を晒すと良いにしる悪いにしる驚かれるなんて最近ではよく聞く話だ。

それでも何だろう……。hinacorin♡さんだけは絶対にかわいいという謎の自信が僕にはあった。いきなり入ってきた地雷初心者に、そうだと分かっていたいながら優しくするなんて心も顔も綺麗じゃないとあり得ない。

僕の脳内hinacorin♡さんは芸能人並みの顔に仕上がってしまっていた。

寝たら昼まで起きないと感じつつも、まだどうしようもなく眠いわけではなかった僕はスマホでSNSのアプリを起動した。hinacorin♡さんのアカウントが見つからないか調べるためだ。

ゲームに満足いった心地よさと共にベッドに寝転がる。

アカウントはすぐに見つかった。ゲーム内の名前とゲーム名を検索にかけたら1発だ。それが分かったのはプロフィールにそう書いてあることと、3分前に「見知らぬ初心者さんと遊んだ♡めっちゃかわいかった♡」という投稿があったからだ。

そして、飛び込んでくるJD2年生という文字。目を大きくした僕は続けて自撮りがないか探る。

投稿をしばらく遡ってもはつきりと顔が写っているような投稿は見つからない。代わりに見つかったのは料理とか風景の画像。そこに少しだけ手や足が写っているものくらいだった。

ただ、それだけでもかわいいと確信する。薄ピンクのネイルがキュートな手からはフローラルの香りがしそうだ。

hinacorin♡さんのSNSを見ていっていると、僕はふと

ネットゲのあり方に感心した。遠く離れた場所にいる女子大生と僕はさつきまで遊んでいたんだと。

考えてみれば何の壁もなく合法的に女子中学生だとか人妻なんかとも遊べてしまうのだ。ネットゲでなら。それってよく考えたらとてもないことではないだろうか。今どきゲーマー女子なんかも珍しいくないし、そりや出会い厨なんかもたくさんいるわけだ。

自撮りの画像は無かったけど満足した。ゲームの攻略情報とかも仕入れられたし、暴言や晒しが全くない投稿内容からも性格の良さが伺えて、こんな人とまた遊ぶ約束ができた。

実際の顔が気になったけれど諦めるしかない。普通ならば。

けれど、すまん僕は黒いパソコンを持っているのだ――。

「今日遊んだゲームのフレンド 顔」

収納の奥から黒いパソコンを取り出した僕はすぐさまそのワードを入力した。

顔は知らないけど名前は知っている誰かの顔の検索。それは画像検索という機能を知ってからいつかやってみたいと思っていた検索だった。SNSだけでの知り合いだとか、資料の残っていない歴史上の人物だとか。

丁度いい気になり度の今回の対象……その結果は……。

「めっちゃかわいいっ」

芸能人顔負けのルックスをしている女性の顔が画面に表示される。アイドルや女優の宣材写真のような構図で。前にしようがなく女優の裸を検索した時と同じ背景に、今回は白いシャツを着た女性。

芸能人顔負けと言うか本当にこんな顔をした女優がいなかったかと思う。ビククリするほど綺麗な二重の瞳に栗色の髪。でも女子大生というよりは少し大人っぽい気もする。

「つてか……ん？……あれ?」

どういうことだ。おかしい。画像は2つ表示されたのだけれど、おそらくもう1枚のそれは今日一緒に遊んだもう1人、†黒竜†のもので他ならないはず。

どこにでもいるアラフォーの中年……よりはちよつと小汚いとい

うか顔面偏差値が低いぐらいの男。小太りで固そうな髪。

別に変じやないしキモいとかもない。それが†黒竜†だと言われれば、まあこんな感じの見た目っぽいと思うのだが……その中年の画像の上にかかっている文字が†黒竜†ではなく「hinacorn♡」だったのだ。

逆に女優みたいにかわいい女性の上に書いてある文字が「†黒竜†」。

これは一体……。僕は間違いかと不審に思っ、何が変わる訳ではないけど持っている黒いマウスを操作した。画像をクリックしてみたり、「hinacorn♡」と「†黒竜†」という文字をカーソルでなぞってみたり。

「逆じゃないですよ。」

すると黒いパソコンから新しいウィンドウで文字が表示された。

頭がゆっくり理解を始める。こつちが「hinacorn♡」で……こつちが「†黒竜†」……。本当にそうなのか。あのかわいくて優しい魔法使いがこのおじさんで……。あの痛い中二病みたいなのがこの美女……。

「いやっ。逆！」

僕は心の中でこだまするほどの勢いでツツコミを入れた。

番外編1 「デスゲーム 終わらせ方」①

「今から このクラスの全員デ殺し合いのゲームをしてもらいまーす」

唐突な話であるけれど、ある日の午後の授業でこんなセリフが僕たちのクラスに放たれた。化学室で化学の授業が始まるとすぐのことである。

突然部屋のカーテンが動き出して全ての窓を覆えば、次の瞬間に化学室の隅に置いてあったミニサイズの人体模型がこれまたひとりだけで動き出した。

子供用のおもちゃくらいチープなデザインでずんぐりむつくりな人体模型は黒板の前にある先生用の机の上によじ登り、口を開いて話したのだ。

「デスゲームを開催すると――。」

「タのしいタのしいバースゲームのはじまりはじまり。今から1カ月かけテ開催するゲームで君たちの何人力に死んデもらうよ。何人死ぬ力は君たちの行動次第、なるべく多く生き残れるように頑張つてね」

誰かのイタズラか、それとも先生がサプライズで何か企画しているのか。高い声で響く異様な宣言に教室がざわつく。

化学室でも前の方の席だった僕はいち早く異変に気づいていた。何しろミニ人体模型は機械仕掛けではなく、人のように動いている。

「えーつと……。誰のイタズラですかね。預かっておくのでこれをやった人は授業の後にここへ残ってください」

先生がミニ人体模型に手を伸ばす。しかし頭を掴まれてもミニ人体模型は動じず、話を続けた。

「さっそク詳しいルール説明に入るよ。1回しか言わないのデ、しっかり聞いテね。二度同じことを言わせるなヨ。これから1カ月間、化学の時間はバースゲームの時間になるよ。毎回違うルールのゲームをして敗北者を決めて、敗北者になった人には死んでもらうよ……」

「ん……？動かないな」

腕に力を入れてミニ人体模型を持ち上げようとしている先生。しかし、ミニ人体模型はそれでもびくともせず……。

そして……。

「ちよつと緊張感がないナ」

次の瞬間、先生が倒れた――。

重く深い振動音が教室中に届くくらいの音で数秒。それと連動して先生の体が不規則に震えた。机の上にぐったり先生が倒れ込んだ後には、行き場を失ったそれが今度ははじけるような音を数度。

音だけでもすぐに分かるけど、僕の席からはしっかりと目で捉えることができた。ミニ人体模型の指と指の間で暴れる青紫色の電流が。

「静かに聞いてネ。ふざけてやつちやせつかくのゲームが面白くない」

言われなくても静かになった教室。横目で見た隣の女子は肩を抱いて震えていた。

「敗北者の数はゲームによつて違うよ。そのゲームにおける参加者の行動デも変わる。1つのゲームで1人しか死なないこともあれば、半分以上死んじゃうこともアルかもね。でも、安心して。中には誰も死なない攻略法があるゲームだつて存在する。それに……最後まで生きることができた勝者にはなんと……1億円の賞金をプレゼント！」

ミニ人体模型だけが嬉しそうに拍手する。その長い拍手をクラス全員見ていることだけしかできなくて、誰も動くことは無かった。

「時間が無いからどんどんイくよ。最初のゲームの発表。記念すべき君たちの第一回ベースゲーム、ゲーム名はブラックボート。こうならずに生き抜けるように頑張つてね」

ミニ人体模型が話しながら持ち上げた先生の顔には稲妻が這ったあとの傷がシダ状に赤く浮き出ている、目は白目を剥いていた。

いよいよ同級生の女子の1人が悲鳴をあげて、それが試合開始を告げるホイッスルかのように僕たちのデスクゲームは始まった。

番外編1 「デスゲーム 終わらせ方」②

「おいおい何だこれ。冗談だろ……………冗談じゃないなら早く皆逃げよう」

クラスメイトの男子1人が入り口のドアへ走る。背の高いリーダー格の男子だ。それを合図に同様の考えの者も数人入口へ向かった。

けれど、デスゲームを始めるような相手がそれを許してくれるわけもなく…………。

「カギは閉まつてるよ。もちろん窓も全部。無理やり出ることもしないかもしれないけど、おすすめはしない。ついでに説明しとくと、このゲームから逃げ出すことも他者に助けを求めるとも禁止だからネ。禁止行為をすることも死ぬことに繋がるから注意しよう。さあ、席に戻つて。ゲームはもう始まつてる」

「ふざけんなよ。そんなゲームには俺達誰も参加しないって。化け物め」

「うるせえナ。さっさと席に戻れよモルモット。今死ぬカ？」

ミニ人体模型が手を伸ばして、再び指の間から電流をちらつかせる。リーダー格の男子の顔が引きつった。

しかし、その男子は近くにあった丸椅子を掴んで戦う姿勢を見せた。クラス中に緊張が走る。

「——とりあえず、ゲームの内容を聞いてみようぜ。ここは大人しくしといたほうがいい」

その手を止めたのは近くにいた他の男子。やけに落ち着いた様子で逃げようとした連中を席に戻るように促した。

僕は現在既にこのデスゲームの攻略法…………ゲーム脱出への道が見えている。だから逃げるも止めるも頭に無くて、とにかく行動を起こさずにその時が来るのを待つ構えだった。

大丈夫。僕にはあれがある。最初のゲームさえ乗り越えれば僕の勝ちだ——。

「気を取り直しテ最初のゲーム、ブラックボートの説明をするヨ。大

げさな名前をしてているけど、このゲームは簡単に言うとは多数決サ。ここにいる全員が誰を殺したいかをそれぞれ投票して1番獲得票数の多い者が敗北者として殺されル。投票はこのボックスの中で1人ずつの決まりネ」

とりあえず事なきを得た化学室でミニ人体模型が嬉々として話す。ミニ人体模型が指を鳴らすと部屋の後ろで物音がして、振り返るとそこにはいつの間にか電話BOXサイズの真っ黒な箱があった。

「期限は次の化学の授業まで。投票をパスするのは禁止で、期限までに投票していない人は得票数に関係なく追加で敗北者トなるよ。それトお助けルールがもう1つ最多得票者を同率で2名以上にできれば敗北者は生まれず、全員が生き残れるヨ」

そこまで聞いた段階で僕は勝ちを確信した。

「最初のゲームだからシンプルで簡単でシヨ。それじゃあ話し合うのは自由だからここからは思うようにどうぞ。ちなみに僕からのアドバイスを1つ。このゲームは全編通して生き残ることを最優先に考えるのがおススメだよ。他者が死ぬことよりも自分が生き残ることを優先。ゆえにバースゲーム——」

誰か1人は確実に死ぬルールかもしれないと思ったが……誰も死なない道があつて良かった……。

そこから僕のクラスでは死者を選ぶ会議が始まった。

番外編1 「デスゲーム 終わらせ方」③

「誰かを殺すなんて……あり得ない……」

「やっぱり早く逃げよう」

初めの議題はどうかしてこの状況から逃げられないかというものだった。

学級委員長とか部活でキャプテンをやっている奴とか、普段からクラスを中心にいる奴がメインになって話し合った。

どこかで見たことがありそうなデスゲームという状況にそれぞれ戸惑いながらも、話せる精神状態になった者から徐々に意見が出てきた。

みんな死にたくないし殺したくもないからミニ人体模型から逃げる算段を立てて、逃げれた奴が警察や他の大人に助けを求める。この話の際中に否定意見は出なかった。

スマホは何故か誰の物も外へと繋がらなくなって、だから無理やり窓ガラスを割って出ることしか方法は無かった。

それが決まると、誰がそれをやるのかという話になって、すぐには誰も手を挙げなかったけど程なくして背の高いリーダー格の男子が手を挙げた。

「俺がやるよ……」

しかし、いざ実行時用とすると、またもやその手は止められた。

ミニ人体模型ではなく、同じクラスメイトの手によって窓を割ろうとした手は止められる。

「このゲームからはそんな方法じゃ逃れられない」

そんな何かを知っていきそうなクラスメイトの発言で生まれた疑念に拍車をかけるようにミニ人体模型が口を開く。

「言い忘れていたけど、このゲームの開催は君たちの中の誰かが望んだものだヨ。僕は頼まれてココにいる。ちなみにその裏切り者を敗北者として殺せば、このゲームは終わるヨ」

そこで僕たちの話し合いの議題は切り替わって、どうしてこんなことになったのかというものになった……。

クラスメイトの間で生まれた疑念。「何か知っている人がいるなら正直に話してほしい」から「何か知っていそうな人を正直に話す」。

どんどん僕のクラスの話し合いは不穏な方向に進んでいった。

そして、ついに自分が一番怪しいと思っている人へ投票するしかないと言い出すものが現れた。

「——もうそれしかないだろ。俺は投票するよ」

「待って。明日まで時間があるんだから、もっと色々試してみたらでいいだろ」

「そんなこと俺だつて分かっている。でもそれがダメだった時の保険だよ。明日までにかできたらこの件は忘れてそれはそれで一件落着でいいじゃん」

「おい……」

「もう嫌……」

1人の男子が止めても無駄だと言わんばかりに力強く投票用の黒いBOXに向かう。しかし、その間に複数の男子が割って入った。

僕はそんな修羅場を見ている時も俯瞰しているような気分で、ただこれ以上被害が出ないまま時間が過ぎるのを祈っていた。

普通の高校生じゃ解決できそうにないから僕が真の力を見せるしかない。例え力がバレることになっても使うしかない……。

「投票するにしてもお前の感情だけで入れたらダメだ。獲得票数同率1位が生まれる方法を考えないと」

「そんなもん無理に決まってるだろ……だって誰かを同率1位にするとしてその役を買って出る奴なんている訳ねえだろ……」

「だったら別の方法を……」

「……………」

「……俺がやるよ。1人目は俺が票を受け取る」

……それから投票が始まって、それぞれが苦しい表情を浮かべながらも黒いBOXの中に1人ずつ入っていった。

しかし、黒いBOXから出てきた者が何故か急に態度を変えたり、自ら自分がデスゲームを開催した裏切り者だと宣言する奴が現れるといった事件が起こった。

もうクラスはパニック状態。状況を整理できている人が誰もいなくなつて、殺される人が決まる票がどんな風に流れているのかも把握できなくなつた。このままではデスゲームを始めた人間の思惑通り誰かが死ぬ――。

そんな時にチャイムが鳴つた――。絶望の時間だつた――。長かつた――。

ようやく僕の出番だ。

番外編1 「デスゲーム 終わらせ方」④

「ちよつと俺に考えがあるんだけど、20分くらいこのまま待つとい
てくれない?」

チャイムが鳴つても沈黙するだけだった教室で僕は言った。

今まで話し合いに積極的に参加していなかった者が急に勢いよく
立ち上がったことに対する皆のリアクションも見ることなく僕は走
り出す――。

階段を飛び降り、化学室から靴箱まで一直線。そこからさらに校門
までもダッシュで走り抜けた。

もしかすると傍から見たら逃げていると思われるかもしれないが、
そんなことも気にせず最速で家を目指す。

外に出てあの重苦しい空気から解放されても未だに緊張が解けな
い。後ろを振り返つても誰もいなかったけど、背中のぞくぞくが収ま
らない。

まるでメロスにでもなった気分でも早くとも早くとも走り続けて
……その結果、僕は10分とかからず家まで辿り着いた。もちろ
んいつもの登下校平均時間を大幅に上回るタイムだ。

息を切らしながら自室の扉を開いて、休む間もなく黒いパソコンを
取り出す。

おぼつかない指でタイピングをミスしながらも僕は辿り着いた。
全てにおける最強の解決法へ。

僕がクラスメイトの皆を救うにはこれしかない。

「デスゲーム 終わらせ方」

額から出てくる汗を拭いながらグルグルが終わるのを待つ。

グルグルから検索結果へ切り替わると、僕はその画面をスマホで撮
影した。

そして、黒いパソコンを片付けもせず、また走り出す――。

検索結果にはかなり長い文章で、衝撃の事実も記されていた。だか
らすぐには覚えられないと思って、僕はスマホで撮影した画像を見な
がら小走りでもまた学校を目指した。

「え、マジ？」

思わずそんな声を漏らしながらも、僕はちゃんと検索結果が出てくれたことに安堵していた。解決方法が存在すると分かれば緊張も無くなっていく。

気付けば、突然すぎるデスゲームという状況が面白くなってきた。

「そうか……………なるほど……………」

つまり――。

「犯人は、お前だ――竹原」

戻ってきた教室で、僕は一人のクラスメイトを指差した。

「……………。は？戻ってくるなり何言ってるんだお前？」

「俺はもう全部知ってる。とぼけても意味ないぞ。このゲームにこのクラスを参加させたのはお前だ」

「……………え？……………は？」

意外とも言えるその男。最初からミニ二人体模型に立ち向かう姿勢を見せていた背の高いリーダー格の男子は全く動揺を見せず、呆けた顔をしていた。

それもそのはず……………。

「お前は前からこのゲームに参加していて、続けていくうちに精神が不安定となり今は2重人格の状態にある。デスゲームを望むお前と正義感の強いお前。本当は自分でも気づいているんだろ。さあ……………自分の胸に手を当ててゆっくり考えてみるんだ……………」

そう言うと、竹中は嘔吐するような様子で床の上に四つん這いになった。

「え、本当なの……………？」

「嘘だろ……………」

教室がざわつく。そりや驚くべきことだ。だって、言った本人も内心もの凄く驚いているのだから。

「でも大丈夫。お前のせいじゃない。何故なら……………本当の悪は別にいるのだから……………」

まだ驚くばかりで半信半疑であろう教室の中、僕はさらに畳みかける。

「こいつの精神が不安定なことを知りながらゲームの開催を促した人物。それが君だ。里田さん」

「——!?!」

逆方向を指差すと、そこにいた女子が目を丸くした。ほんの一瞬だけ。

ちなみに、セリフも全て黒いパソコンから指示されたものだった。僕は今、自分以外の誰かを演じている気分である。

「でも、さらにその向こうにいる黒幕は……えっと……1月前に来た転校生の飯野……ここにはいないけど、その協力者の教頭先生」
忘れたのでスマホを確認させてもらう——。

「里田さんの協力は精神が崩れていく友人を見ていられなくてやむを得ずやったこと、しかしそれを知ったお前は竹中に嫉妬した。幼馴染の里田さんの気持ちが自分に向かなくて。そもそも、最初に竹中がデスゲームに参加するきっかけを作ったのもお前だ。竹中の父親をデスゲームで殺した飯野。お前が全ての黒幕だ」

「……………お前一体何者だよ。教頭が裏切った？それとも前のゲームの参加者か？どうやってそんな情報を手に入れた？——いや、俺はそんなことやってないぞ」

たぶん本当はもっとポーカーフェイスを決めれる奴なんだろうけど、さすがに全ての真実を知っていきそうな雰囲気には押されていた。

本来ならば、いくつも死のゲームを生き残った末にようやく辿り着ける真実。その全てをざっと言い終えた僕は最後の仕上げに取り掛かる。

「おい、俺にもデスゲームを開かせてくれ。こいつと1対1で」

「資格はアるんデすか。資格無き者のゲーム開催は承認アきません」

僕はミニ人体模型の耳元まで行って、囁く。運営側の秘密も、この場で懐柔させる言葉も僕は知っていた。

「……………致し方ありません。2人デのゲームの開催を認めます」

再びカーテンが窓を覆って、始まったゲーム、配られたカード……。

僕にとつての2回目のゲーム。手札のカードを広げて持った僕は
余裕の笑みを浮かべた。

「さあ、やろうか。俺が勝ったら、正直に全てを話して罪を償え。俺が
負けたら死んでやるよ——」

相手の手札も戦略も全てを把握していた僕は……そのゲームをス
トレート勝ちで圧勝。クラスの危機を救った……。

……。

………という夢を見た。

日常の検索あれこれ⑦ 「エラー」回避

「母のスマホ 落とした場所」

『あなたの母親は本日、友達と昼食をとったホルモン焼肉屋ぺこぺこの店内にスマホを置いたまま店を出ました。現在ソファの隙間に挟まっています。』

「喧嘩1番強い奴 校内」

『あなたが通う高校の生徒のうち、殴り合いの喧嘩で最も強いのは2年4組の柔道部、坂東 剛史さんです。』

「最近出てきた女優 ゴリ推し」

『あなたが最近テレビや雑誌でよく目にすることがあり、特に動画サイトや広告で何度も出てくることから嫌っている女優・井藤歩佳さんは所属している事務所の上層部から好感度が高く、多くのテレビやドラマの出演にはその力が大きいと言えます。また、SNSや口コミサイトや井藤歩佳さんを絶賛する投稿を行う人間を事務所が雇っていて、ネット上の人気より実際の人気は低いと言えるでしょう。ただ、現在は作られた人気に実際の人気が追い付いてきています。』

「このパソコン 前の持ち主」

『ERROR ご覧になろうとしている情報は表示できません。』

方法を検索したとしても、そんな方法はありませんという結果が出ることもある。

存在を検索したとしても、そんな存在はいませんという結果だけが出ることもある。

ただ、こういう質問だけは黒いパソコンから「ERROR ご覧になろうとしている情報は表示できません。」という定型文が返ってくる。どうしてここに来たのとか、どのように部屋へやって来たのだとか検索内容を変えてみても結果は同じ。

だから、黒いパソコンを手にしてからしばらく経つと、僕はなぜ黒

いパソコンがといったことを調べる検索をしなくなった。何しろエラーを吐いても1日の検索回数のは1回は消費されてしまうのだ。

黒いパソコンは何でも解決してくれるほど超チートアイテムではなく、無理なことは無理と言う。今までも何度か望んだ結果を表示してくれないことがあった。けれど、エラーと言うのは唯一こういう質問だけだ。

何か違っている。きっと特別な質問なのだ。トップシークレットに設定されている。

当然、初めから気になっていることであるけれど、黒いパソコンで調べても分からないのならしょうがない。自分の力で調べようとしても何の心当たりも当てもない……。

「エラー 回避」

『ERROR ご覧になろうとしている情報は表示できません。』

優先して検索したいことも無かったので、今回は次の日にもっと探ってみたけれどやはりダメだった。

エラーにならずに検索を実行させる方法も無し。

じゃあもう気にしないのが正解だ。二度とこの検索はしないことにしよう。

そう思ったのだけれど、今回は黒いパソコンが続きの文を表示した。

『いずれ、知るときがきますよ。』

検索するか……検索しないか……。

それとも検索しようか……検索しまいか……。

僕はある検索をするかどうかで頭を悩ませていた。授業中、教室の中で黒板を見つつも頭の中はそればかりに支配されてしまっている。先生が書く文字の数や、開く教科書のページで花占いのようなことをして、あることを検索するか否かについて考える。そんなことをしていた。

あることと言うのは他でもない。折原についてのことだ。

ひよんなことから魅力を知ってしまったって、未だ全く衰えず僕の胸を悩ませる彼女。話したことも無ければ、同じクラスでもないのに恋をしてしまっている相手である。

そんな彼女に関する検索として、するか悩んでいるものというのは、簡単に言ってしまうえば出会いのきっかけを作れないかというものだ。検索ワードにすれば「折原さん 仲良くなり方」とかだろうか。もっと簡潔にすると「折原さん 付き合い方」とかになるのだが、少なくともそれは絶対にしたくない。後ろめたいことを生み出さずに純粋な恋がしたいから。僕の心がそれを望んでいるから。

そういう理由で、折原との恋に関することはなるべく黒いパソコンに頼らないと決めていたのだが、あまりにも接点が無くて僕は話すきっかけくらいなら黒いパソコンに頼ってもいいのではと思いつめていた。

だってどうしようもないじゃないか。同じ高校で同じ学年でも、隣のクラスでさええないという遠さなら普通に生活していて交わることなんてない。何かちよつとしたものでもきっかけがないと話しかける術なんて……。

僕は膝の上で掴んだシャーペンを強く握った。

何の生産性もない心のもやもやをずっと抱えているくらいなら、プライドを捨ててさっさと検索してしまっただほうが合理的だと思うが、これについて悩むと結局やっぱり黒いパソコンというチートアイテ

ムに多くを頼るのは嫌だという結論に落ち着いてしまっていた。

黒いパソコンに頼らずとも何かでどうにかしてきつかけさえ作れば、僕は上手く話せる自信がある。いつそのきつかけが来ても大丈夫なように脳内シミュレーションは入念に行っているからだ。

とにかくきつかけさえあれば……きつかけさえあれば……。

——ふとすることそんなことを考えながら送る学校生活。5限目まで終えた僕は最後の6限目までの休み時間を過ごしていた。

今日の6限目は総合の授業、前から決まっていた内容は2年生の全組が多目的室に集まって進路の話を聞くというものだった。

楽なようなめんどくさいような。まあ小テストがあるような授業よりは随分マシなその時間に向かって僕は友達と共に廊下を歩く。

「はあ……あとは適当に座っとくだけで帰れるな……」

「今日家帰ったらさ、さつき教えた動画マジで見ってみろよ。くっそ面白から」

「ああ。忘れんかったら見とくわ……。何ていう名前だったっけ？」
「だから——」

脳の容量をほとんど使わない会話をしながら、僕は折原を探すといういつもの廊下の歩き方をした。

「正直に言うと俺最近さあ、太ってきたんだよね」

「元から痩せてないやん」

「ああ、やっぱ分かんない？顔もちよっと俺からしたら太くなったんだけど、その理由がさ……夜食」

「そりや夜食くつたら太るよ。でもうめえんだよな。分かるわ」

「いやでも前までは夜食くつても全然大丈夫だったんよ。でもさ夜食にお好み焼き食べるようになったら目に見えて変わったね。やっぱ粉モノ太るって本当だわ」

「……………。お好み焼き!?!夜食に!?!」

「うん」

「自分で焼いて食うの?」

「うん。めっちゃうまいの作れるで」

「へー……………ってあれ?この行列何だ?」

「さあ……たぶん多目的室がまだ開いてないんじゃないかね」

「そっか」

友達同士の会話を聞きながらぼーっと歩いていた僕も目の前に見えてきた列の最後尾に並ぶ。

立ち止まって腕を伸ばすと気持ちの良いあくびが出た。6限目の授業が始まると、寝てしまうかもしれない。

しかし、次の瞬間に薄っすら涙を浮かべる目で後ろを見ると僕の眠気が吹き飛んだ。

僕の後ろに並んできたのが折原だったからだ。

背中から感じる気配で僕の体が固くなり、動けなくなってしまうた。その気配は今にも心臓まで貫いてしまいそうなほど鋭くて、余りにも大きい。

恐怖の感情は恋をしている時の感情と同じと言うが、逆もまた然り……僕はその瞬間、天敵から息を潜めるように呼吸を殺した。

この現象を名付けるのだとすら、逆お化け屋敷効果といったところか……と、そんなことを考えてる場合ではない。

「ねえねえ聞いて。この前中学の頃の友達がさあ」

「うんうん」

「これ裕実に似てないって画像送ってきたの。それで見てみたら男の画像でさあ」

当たり前前に僕の後ろで始まる会話が鮮明に耳に届く。今までで一番近い距離で聞こえる折原さんの地声……話し声はこういう感じなのか。

「見てこれ」

「え、イケメンじゃん」

「そこ？まあイケメンかもしれないけどさ。似てるって男の画像送ってくるかな普通」

「嫌なの？」

「嫌でしょ」

これはもしかしてチャンスなのではないか。僕が望んでいたきっかけという状況なのではないか。突然訪れた好機にどんどん鼓動が早まる。

でもダメだ。後ろを振り返るところか、正常に体を動かすのもままならない。

その判断は一瞬のことであった。深く考えなくても今の僕が後ろの折原に話しかけるなんて絶対に無理だと直感した。

脳内シミュレーションはではこういう時の話しかけ方はとにかく自然に、何でもいから男友達に話しかけるような感じで状況を考え

ながら、今なら「何で列できてるか分かる？」とかか。

でも僕が言うのか。今そんなことを。後ろを振り返って。おかしくないか。絶対無理だ。

それとも自然と会話に加わるか、そんなことも考えたけれど、僕が次にとつた行動は前の男友達のほうの会話に加わることだった。

「いや、ラーメンはとんこつしかないでしょ。それ以外ゴミじゃん」
「でああ。とんこつ至上主義」

夜食の話から始まっていたラーメンの話へ。緊張をどうにかする為に加わる。

ちよつと今日のところはまだ無理だ。そんな話しかけやすい状況じゃないし、2人とも近くに複数人友達がいる。こんなところで2人で話し出せば目立ってしまう。

「まあとんこつが1番王道じゃない」

「1番王道はしょうゆじゃねえの」

「最近塩ラーメンしか食ってない」

「それは味覚おかしいわ。塩はくない？」

「いやお前ら塩ラーメンの旨さ知らんじゃん」

そんな話をしながら、また今度もつと良い機会があれば話しかけようなんて決めると、チャイムが鳴った。

ようやく進み出した多目的室前の行列。しかし、そこでまた事件が起きる。

「あ、ごめんなさい」

背中にかかがぶつかり、自分にかげられたであろう声に振り向くと、そこに折原がいた。

一瞬、時が止まる――。

後ろの女子たちがじゃれ合い出していたことを知っていたので、どういふ状況かはすぐ分かる。好機も好機、大チャンスが訪れた――。
「うん大丈夫……」

けれど僕はそんなそっけない一言だけで、前に向かって歩き始めた。僕側からそれ以上会話はしないという形。目も碌に合わせずに……。

というか、見れなかった。真つ直ぐ見た折原がかわいすぎて。そこからはもう何も覚えてない――。

ちゃんと多目的室で座っていたとは思う。けれど授業の内容なんて全く頭に残っていない。そこから、家に帰ってくるまでの間のことも、どういうルートを通って歩いてきたか……夢だったんじゃないかと疑うくらい。

ただ折原のことで頭がいっぱいになって、まだこの恋心に上がってんだなと驚いたり。そして、情けないという気持ちもあった。

あれだけどうにかきっかけをくれないかと神様にお願ひしていたのに、いざそれを貰っても何もできなかった自分が情けない。

だらしない顔をして帰ってきた僕は、そのままの状態で黒いパソコンを取り出し、倒れるように椅子に座る。

「折原さん 所属部活」

入力したのはこのワード。まずはこんなところか。

今日の1件でよく分かった。何て言って話しかけるとか、話しかけやすい状況とかではなく、僕に足りないのは自信だ。

こんなんじやもし黒いパソコンに話しかけ方を聞いたとしても、実行できない。

待っているだけでは絶対ダメ。受け身のままじやいつまで経っても動き出さない。自信をつけて自らアタックしに行かなければ。そういう意志が必要だ。

まずは所属部活なんかでも検索して、アタックする方法のヒントにする。可能ならばいつかそこに乗り込んでいってやるくらいの気持ちである。

「折原 裕実さんの所属している部活は軽音楽部です。」

軽音楽部か……なるほど。へーそうなのか。

僕は机の上にあつた紙とペンで「折原」という文字を書いて、今一度目標を定め、気合を入れた。

word 31 「クラスメイト ち○この長さランキング」

男の自信ってなんだろうか。そう考えさせられるある一件があった次の日、僕は机の前に座って頭を悩ませていた。

自分に聞いてみてぱっと思いつくのはやっぱり顔だろうか。異性に対する自信となるとそれが一番分かりやすい。自分がどこからどう見てもイケメンであつたなら異性にもっと強気でいられると思う。

あとは何か人にはない特技を持っているとか秀でた点があるとか。部活で優秀な成績を収めたり、模試で全国上位だとかくらい勉強ができれば自信に繋がると思う。

いくつか答えとして頭に浮かぶけれど、どれもしつくりこない。それが答えだと分かったとしても意味が無いからだ。今更願つたところでイケメンになることはできないし、部活で全国大会優勝なんてのも無理な話だ。

一体どうすれば自分に自信が持てるだろう。何をすれば……何を知ってどんな考えた方になれば……。男の自信……男が女に対する自信……。男が女に……。

男だの女だの頭の中で唱えていたら、僕の下半身で動くものがあつた。ズボンを少し持ち上げて、手を挙げるように話しかけるように立ち上がる。

視線を下に落として、今はお前の出番じゃないだと僕は心の中で言った。けれど僕の下半身に生えたもう一人の僕は何かを主張したいようだった。

徐々にそこへ血が集まっていく様子を観察して……そうしている内に僕は気になることが1つできてしまった。今はそんな場合じゃないのだけど、気になりだしたらどうにも無視せずにはいられないほど気になりだす。

さっき考えていたことも遠くはないと思う。今日の検索ワードとして凄く良いものを見つけてしまった。

これが男の自信の答えという訳ではないけど、その1つにはなり得る――。

前から気になったことがあることだ。黒いパソコンに聞かなくても聞くことはできるかもしれないが、普通は絶対に聞けない。

少しが無しは逸れるかもしれないが、僕の僕が今勝負したいと言っているのなら、ここで調べてみるのもいいかもしれない。

「クラスメイト　ち○この長さランキング」

ワードボックスに打ち込むと、ここ最近で1番Enterキーを押すのが楽しみになった。

男を象徴するモノの長さを人と比べる。それを今日の黒いパソコンによる検索に決めた。

その長さの平均を普通のパソコンで調べたりすることは男なら1度はあるんじゃないかと思うが、あれにはどうも信憑性がない。そもそもそんな質問を万人にすることは難しいし、調査では直接見て調べることができないので個々の正直な答えを信じるしかない。となると、やっぱ少なからず見栄を張っちゃう気がする。

だから調べた団体によって差があるけど、実際のとこどうなの――

僕は正直なところ、自慢じゃないが自分のモノが並みの人よりも劣っていると思ったことが無かった。そういうビデオの男優のモノの目測と比べても遜色ないし、ネットで調べられる平均よりは数cm上である。

僕のマグナムは一体クラスの奴らの中でどのくらいのものなのか……。

いざEnterキーを押す。その時には不安でしぼんでしまっていた。

「1位	畑本	孝之	・18.7cm	11位	柴田	正一	・13.1cm
2位	竹中	誠	・18.2cm	12位	武	仁介	・12.9cm
3位	草壁	幸雄	・17.0cm	13位	佐山	雄太	・12.9cm

..... 勃起時の長さを根元から測ったものです。」

期待と同じく、表示された結果の見応えもここ最近で1番のものであった。

いつも同じ教室で過ごしているクラスメイトの男子にどのくらいのモノがついてるか知れるのって面白い。あいつはイメージ通りだとか、あいつはあんなに身長小さいのにそんな立派なのかという楽しみがあった。

そして、僕の名前は5位のところにあった。やはり大きいほうではあるみたいで誇らしい。黒いパソコンが表示した僕の長さも前に興味から定規で測ってみたときと同じくらいだ。今更だけど、本当に何でも分かってしまうのだな。

平均するとネットに載っているものと大差ないだろうか……14 c m いかないくらいといったところか。なるほど……。

嬉しいけれど、それほどでもない。何とも言えないちよつとした自信を手に入れた僕は少しの間誇らしい気持ちで彼をいじって遊んだ。

word32 「迷子 親の場所」①

僕は今日、ちよつとしたお出かけをした。そして今はその帰り道である――。

休日に服を買いに市内のアウトレットへ。そろそろ寒い季節がやってくるので冬用の上着を求めて。それと、前から続いている自分磨きや恋の為、今年はずつと去年と同じ服で過ごしていた僕は午後から気合を入れて乗り込んだ。

久しぶりだったおしゃれな若者が集まる空間で、いくつも店を回っていくのは歩いていただけで疲れることだった。けれど、その分収穫もあったと思う。高校生にしては財布が厚い僕は一目で気に入った服をいくつか買った。流行も取り入れた自信が持てるコーデインナートが揃った。

普段の生活圏からは遠く離れたアウトレットへはバスを利用して行った。だから、帰りもバス。20分ほど音楽でも聴きながらバスで揺られた僕は、目的地のバス停に着くとイヤホンを外して降車する。見慣れた近くで一番大きい駅。人の流れに乗って歩く。それほど人だらけでもないけど、帰りの乗り物が招く眠気を飛ばすには十分な数だった。

ここからは自転車でもた10分ほど。少し離れた自転車置き場でサドルに跨ると、自宅目指して車の数が少ない通りのほうへ入った。家に帰ったら何をしようか。筋トレはするとしても、他に何かやるべきことはあるだろうか。やりたいことはいくつもあるけれど、もう夜までそれほど時間は無いし……。

そんなことを考えながら、自転車を数分こいだ時に僕は異変に気づく。完全に住宅地に入って信号も無くなったので速度を上げた時だ。後ろから猛スピードで迫ってくる足音がある――。

何事かと後ろを見る。するとそこには小さな女の子の姿があった。小さな手足を必死に動かしている。

目は明らかに僕のことを見ていた。その顔は嬉しそうで、輝くような笑顔をしている。

僕は動揺した。そのまま角を曲がってみてもやはり同じように曲がってついてくる。どう見ても自転車でゆく僕の後をダッシュでついて来ているのだけれど、その理由が分からないのだ。

自転車を止める。すると、謎の女の子も足を止めた。

「……な、何かな？」

「……はあ、はあ」

僕は息を切らしていないけど、全力疾走していたであろう女の子は疲れて舌を出す犬のような息遣いになっていた。

長い髪で目はぱっちりしている幼稚園児くらいの女の子。ヒマワリ柄の服を着ている。周囲を見たところ、親らしき大人はいなかった。

「えっと……」

自転車から下りてみたけど、何と声をかけていいか分からない。何しろ僕に下の兄妹はいないし、親戚や仲の良い友達にも年が離れた子供はいない。小さな子と接するのはやり方が分からなくて苦手だった。

しかし、そんな壁を取り払うように少女の方から僕の方へ数歩近寄ってくる。

「タッチ！捕まえた！」

Word 32 「迷子 親の場所」②

「…………え？」

「えへへ。っへへ」

僕の膝上あたりを叩く少女。3回ほど、高い声で笑いながら。

「あ…………たっち…………タッチね」

それを受けた僕はどもってしまった。同級生の女子と話すよりもよっぽど何を言っているかわからない。

そんな必要はないのに手を胸の位置まで上げて敵意が無いのをアピールして、その状態でどこかに少女の保護者がいないか探す。さっきの曲がり角の道まで。

しかし、大人の姿がないどころか誰もいない……。住宅街の真ん中で少女の笑い声と遠くからの車の音だけが周囲に響いていた。

知らない少女が1人きり…………僕はこの時点で、ある推測が頭に生まれた。

この子は迷子の状態にあるのではないかと。

「お、お母さんはどこにいるの？」

「おかあさん？」

「うん。一緒に来た？」

「いっしょだよ」

少女が後ろを振り返る。すぐ後ろにいたりと思っていた様子で上を見上げた。もちろんそこには誰もいなくて、さらに僕と同じように周囲を確認するけど、僕と同じように誰も見つけられない。

そして、一通り首を振り終わると…………。

「おかあさん…………どこ…………？」

急に元気を失い、不安そうな顔で僕を見て言った。

「やっぱり迷子か——。ツツコミ半分、僕も不安半分と思う。」

「お母さんどこ行っちゃったか分かんなくなっちゃった？」

少女がうなずく。

「さっきまで一緒にだったの？」

「……………」

「こつちの道から今来たよね？」

「……………」

少女自身、自分が迷子になっていると今気づいたらしくてかなり絶望している模様。さっきまで笑顔だったのに、なんだか今にも泣きだしそうな顔に変わって返事もしてくれなくなった。

いきなり僕を追いかけてきてタッチしてきたという状況から察するに、おそらくは勝手に僕を対象に鬼ごっこでも始めてついて来てしまつて、夢中になっている内に親と離れてしまつたつところか。

何で僕なんかについて来たのか分からないが、子供の行動は読めないと言うし……………」

「もしかしてお兄ちゃんとも一緒だった？」

「……………うんうん」

「追いかけてっことが好きなの？」

「……………うんうん」

どちらも少女は首を振る。お兄ちゃんと間違えてついて来てしまったのかとも考えたが……………まあこの際何で迷子になったかとかはどうでもいいか。

問題なのはこの子をどうやって親の元まで送り届けるかということだ——。

「どこから来たか分かるかな……………じゃあ、今日はどこに行つた？……………」

それから僕は少女にいくつか質問をした。どこに連れて行けば少女の迷子が終わらせられるか特定するための質問だ。

少女はやはり動揺している様子で、分かっているのか分かっていないのか判断ができないような返事をした。その不安が痛いほど伝わってくるのだけど、僕は安心させてあげられる良い言葉を知らなくて……………」

ありきたりな質問をなるべく優しい声で聞くことしかできなかった。だから結局、得られた確かな情報は少女の名前だけだった。

「ちひろちゃんって言うんだ？」

「うん……ちひろ」

「じゃあ俺も手伝うからお母さん探しにいこっか」

「……ありがとう」

ここでようやく僕から近づいて背中を軽く叩くと、シャンプーの匂いだか服の匂いだか、石鹸系の良い匂いがした。頭に付いた何のキャラクターだか分からない髪飾りからも誰かに大切に育てられている子だと分かる。

名前を知って「ありがとう」と一言もらっただけでも、かなり親心というか、自分が責任持って守ってあげないとという気持ちが湧いた。

でも、そんなに肩に力を入れなくても大丈夫なはずだ。だって僕には……。

「安心して。俺はもうお母さんの居場所分かったから。絶対連れてってあげる」

word32 「迷子 親の場所」③

幸いなことに迷子に気づいたこの場所から僕の家はそれほど遠く
なかった。

何か僕に困ったことが起こったとしても、家まで近いのであれば、
それは困ったことではない。1日1度の制限はあるけれど……。

「ほんとう？」

「本当本当。でもちよつと準備しなきゃならないんだよね」

「じゅんび？」

「うん。5分間だけ待っててもらっていいかな。その公園で」

僕が指差す方向にはちようど公園があった。休日の午後だとい
うのに誰もいない。ブランコしかない小さな公園だ。

「絶対に5分に戻ってきて、そしたらお母さんの場所まで連れてつ
てあげるからここを動かないでね」

「うん……」

「大丈夫？」

「うん……」

公園には入ってみたものの、やはり不安そうなちひろちゃん。僕に
とってはここが山場だった。5分待っててもらおうことさえクリアで
きれば安心させるための嘘ではなく本当に親の元まで迷うことなく
連れて行ってあげられる。

何かいいものはないかと鞆の中を探してみると、ちようど小さなポ
ケットからアメ玉が出てきた。何のアメかは分からないけどイチゴ
味っぽいピンク色のアメ玉だった。

「これあげるから。このアメを舐めて待っててくれたら無くなる頃に
は帰ってくるよ。いい？」

「……わかった」

小さな手をぎゅっと握ってアメ玉を渡すと、僕はすぐに走り出し
た。これ以上は何か安心させる策を考えるよりさっさと帰って、さっ
さと戻ってきたほうがいい。

いつにない速さで自転車を走らせる。僕は時間に余裕を持って行

動できる人間だったのでこういうことはあまりない。正直なところ5分で戻ってくるのはかなりギリギリな時間だった。けれど、迷子の少女の気持ちを考えるとやるしかなかった。

自宅にはすぐに到着できた。自転車をまたすぐに出せる状態で止めると、さらにまた家に入って検索してから出ていくまでのRTA始まりである。

交番に連れていくとか、僕が自転車を漕いできた道を遡っていくとか他に方法はあったけれど、たぶんこれが1番確実に早いと思う。僕も初めてで何をすれば正解か分からない状態だと不安だし。

「迷子 親の場所」

収納に黒いパソコンを入れたままの状態で検索を行った僕は、ざつと文を読み終わると画面をスマホで撮影した。

黒いパソコンにやるべきだと指示されたのはそんなに難しい内容ではなかったけれど、1分1秒が惜しい。

そのまま黒いパソコンを奥に入れずに収納を閉じるだけで、また走り出す――。

公園まで戻るときも同じように急いだ。けれど、心の余裕は全然違っていた。不測の事態が起こったとしても解決までの道が見えさえすれば落ち着くことができる。

そして、ちひろちゃんの姿がまだ公園にあることを確認すると僕は勝ちを確信した。

「さあ。行こうか。準備完了したからお母さんのところ行こう」

他人からしたら根拠のない自信。ちひろちゃんから見てもおかしいという思いは多少あったかもしれない。けれど、そんな自信は程なくして安心を与えた。

「俺ねえ。本当は神様なんだよね」

「かみさまっ」

「うん。だから1発でちひろちゃんのお母さんの位置も分かっちゃうんだよね」

「すごい」

「すごいっしょ。何でも知ってるんだよ。俺が調べれば何でも分かる

の」

相手が子供なのを良い事に僕はべらべらと喋った。

「ドラゴンって知ってる？」

「うん」

「あのドラゴンって奴はね本当にいるんだよ。人間に混じって地球に暮らしてるの」

「うそだ。いないよ」

「いるいる。見たことあるんだから。また今度機会があったら見せてあげれるのにな。あとは魔法もあるし未来のことも分かるし……あ、この辺通って来たでしょ。見覚えない？」

黒いパソコンの画面を撮影しておいたスマホを確認しながら歩く。黒いパソコン曰く、思うままに歩いて僕が今日行ったアウトレットの近くにある公園まで戻ればちひろちゃんの親に会えるということだった。

その結果が出たということは、このちひろちゃん……かなり気合が入った迷子である。いつからか詳しくは分からないが、帰りのバスに乗る前からついて来ていたということだ。

鬼ごっこどころか追跡ごっこというかストーカーごっこというか……全く、なんてかわいいんだろう。

「わたし、ちくわになつたみたい」

「ちくわ？」

「うちのねこのなまえ」

「へー」

「このまえまいごになつてさがしたの」

自分から話すようになってきて、笑顔を取り戻したちひろちゃんは天使のようだった。というか天使である。

バスに乗るときはちひろちゃんのほうから手を握ってきた。その手はこんなに小さいかというほど小さくて。バスの座席で隣に座つてずっと握っていると、小さな子ってこんなにかわいいんだと思つた。

とてつもなく純粹で素直。守りたいと心から思える。

「ねえかみさま。わたしもいつかドラゴンにあえる？まほうつかえる？」

「うん。きつといつか。大きくなったら」

——バスから降りる頃には綺麗な夕焼けが見れた。その町をまた、僕は自信を持って歩いた。

目的地の公園の前までくると、繋いでいた手がほどかれた。僕が母親らしき女性を見つける前にちひろちゃんは走り出した。

僕はちひろちゃんが母親に抱きつく前にはもう後ろを向いて来た道を帰りだしていた。親子の喜んでいる声が後ろから聞こえてくればそれだけで幸せな気分になれたから。

黒いパソコンを使って人助けをするって、良い事をするって悪くない気分だ。ちひろちゃんが最後に約束した「もう知らない人についていっちゃダメ」をこれから守ってくれるのなら検索した価値はある。「……かみさま、ありがとう」

背中から微かに聞こえた声で胸が痺れる。たった1時間にも満たない時間だったけど寂しさもあった。

けれどそれ以上にいつか自分も……そんな元気が心に満ちていた。

番外編 2 「人類 滅亡」①

「あーあ。本当に使えない奴だね」

今日もそんな言葉が私に向けられた。いつも通り、溜め息と一緒に言われた言葉だ。

向けられたと言っても、直接目を見て言われた訳ではない。隣の部屋からわざと聞こえるような大ききさで言われた。

相手は母親。きつと18歳でフリーターをしている私のことが嫌いで嫌いではないのだ――。

今年の春、私は高校を退学した。通信制の高校だった。やめた理由はめんどくさいからだ。

あと1年頑張れば、卒業できる。卒業したら大学に行くか就職するか、そういう状況だったのだけれど、私にはそのどちらも魅力的ではなかった。大学にも行きたいと思わなかったし、就職もしたくなかった。したくない目標の為に人は頑張れない。だから、やめた。

理由はそれだけではない。私の家にはお金が無かった。

母親は水商売、父親は無職。ボロいアパートで3人暮らし。そんな家庭には言うまでもなくお金は無い。

私は中学を卒業と同時に働くことを強要されたくらいだ。高校には行っていいけど、行くなら自分でお金を稼げ。中学卒業前に親からそう言われた。

そういう理由で、私はその時からバイトをしていた。職種はホテルの清掃業、働く時間を多くする為に高校は通信制のものを選んで、週6でシフトに入った。

支えも目標も特にないし、勉強の仕方目上の人との付き合い方もよく知らない。そんな状態から2年頑張ったのだけど、肉体的にも精神的にも疲労が溜まって、バイトか高校どちらかをやめないと倒れてしまう。そう感じて、どちらをやめるか考えた時にお金の無い家庭に生まれた私には高校をやめる選択肢しかなかった。

それからはフリーターとなってバイトだけをして生きた。やるバ

イトの数や量を増やした訳ではないから、今までよりも時間に余裕はできた。勉強と高校に使っていた分の時間で休むことだできるようになった。

けれど、しばらくして別の問題が発生した。親に嫌われてしまったのだ。

大して金を稼がない癖に、家で寝ていることが多い私を見て、母親は事あるごとに嫌味を言うようになった。

暇ならもつと働けだとか、自分と同じ水商売を勧めてくることもあった。父には何も言わなくせに弱い立場の私には思うことを何でも言ってきた。

自分が10代で水商売を始めるなんて考えると、涙が出そうだ。しかし、遅かれ早かれそうなるしかないと自分でも分かっていた。そもそも高校をやめる時も最悪、体を売って生きていけばいいと思っていたのだから……。

「さっさとやればいいのに……はあ、産んでやったんだから……」

私は体を起こして耳を塞ぐ。母親の溜め息と独り言として発する愚痴が聞くに堪えなくなった。

その状態で視線を落として見えた、私のふとももには数か所青いアザがある。

父親からのDVも母親だけでなく、自分にも頻繁に向くようになった。ちよつとでも逆らったら体罰。お酒を飲んでいる時は何もしてなくても目が合ったら体罰。対策方法は別の部屋で隠れているしかない。

人生詰んでしまっている。これから先も幸せなことがある気がしない。母親の言う通り水商売を始めたとしても私の不幸は変わらない。

私と似た境遇をしている漫画やドラマの人物は皆自殺を考えていた。けれど、私は違った。死ぬのも嫌だった。痛いのは嫌、死ぬぐらいたったらまだ今の生活のほうが良い。そう思っていた。

別に明日や未来に何が待っている訳ではないけれど、何故か時間が過ぎるのだけが今の私の楽しみだった。夜まで生きて布団に入れば、

少しは落ち着けるから。暗闇で目を閉じていれば、何も考えなくていい瞬間が私を包んでくれた。

そんな最後の砦さえもつい最近崩されてしまうようになった。深い夜、初めて私の顔面へ水がかかって飛び起きた時は一瞬悪い夢かと思った。

「コンビニ行って酒買ってこい」

暗い部屋で咳き込みながら、影も見えない父親に無理やり立たされる。同じようなことが数回あって、これが続くと分かった時にはいよいよ私は絶望した。死にたくなくても死ぬしかない。

そんな時だ。私の目の前に黒いパソコンが現れたのは。

番外編 2 「人類 滅亡」②

初めての出会いは深夜2時。そんな時間なのに父も母も外出している自宅のアパートで、見慣れない黒いパソコンを見た。

私も家にいたくなかったので外出していた。知らないものは放っておいて、誰もいないうちにゆつくり寝たい。しかし、それを遮るように私が使う枕の上に黒いパソコンはいた。

「何これ」

見つけた瞬間に私は言った。

「このパソコンにはありとあらゆる全ての疑問の答えが入っています。あなたは気になる言葉を入力することでその答えを知ることができるでしょう。しかし、それにはルールがあります。答えを検索することができるのは1日に1度だけです。1日に1度であればどんな質問にも答えることができます。宇宙のことでも、未来の事でもそう、このパソコンならね。」

そしてその答えは眠気眼で雑にキーボードを叩いた私の元へすぐに届けられた。

使われてない布団の中へ、黒いパソコンを挟む。そこから私の人生は変わった――。

初めは「お金 欲しい」とワードボックスに入れた。黒いパソコンの性能は疑わなかった。他に頼るものも信じる物も無かったから、神様が私にくれたのだと決めた。神様なんて信じていなかったけど、救いの手は誰にでも差し伸べられるのだと思った。

『3丁目のホストクラブ「ラスト・プリメーラ」の向かいにあるアパートの裏、最も古い室外機の下を覗いてみてください。』

それに対して、パソコンはそう答えた。

私は指示通り、私が知っている3丁目に行つて、ホストクラブの向かいにあるアパートの敷地内に入った。

いくつも似たような室外機が並んでる中、明らかに1番古い室外機はあった。内側から草が生えてきていて、犬の小便のような跡もついている。

周囲を確認して頭を地面に付けると、茶色い封筒がそこにあった。掴むと重みと厚さで分かる。もしもこの全てが1万円札なら……。鼓動を早めながら、近くの公園のトイレに移動して、中身を数える。すると、82万円もの札束だった――。

私はそれからしばらくビジネスホテルで生活した。黒いパソコンを鞆に入れて持ち出して、1泊5000円。高いホテルではないけど、自宅のアパートよりはずっと豪華。

ご飯はコンビニで少し高い弁当を買った。好きなお菓子を買って食べたのも久しぶりのことだった。野菜も果物も、長く食べていなかったものは片っ端から腹に入れた。

最近は髪の毛がよく抜けるようになっていたし、常にお腹の調子が悪い。きつと栄養不足とストレスが原因だったんだけど、死ぬことはなさそうだから放っておいた……。

それが1週間やそこらで劇的に改善された。

前から欲しかった服やバックも買った。収納する場所はないので、1着だけけど。

お金を好きに使うのに抵抗は無かった。茶色い封筒の中に「死ぬので好きに使ってください」と書かれたメモが入っていたからだ。

その間、黒いパソコンでは大したことは検索しなかった。お金がたくさんあるだけで抱えきれないほど幸せだったから。

前から気になっていた疎遠になった友達の現在だとか、テレビに出ている好きな俳優の前にあったスキャンダルの真相だとか。ちよつとビツクリしたのは父と母の過去についてくらいだった。

元気になった私がお金を30万円くらい消費した時だった。私は今までで1番気合いを入れて黒いパソコンの前に座った。深呼吸をして、柄にもなく数分間の間、瞑想なんかもした。

私はここ2週間くらいでたくさんのお金を使って、好きなことをしたが……。それは最後の晩餐のつもりだった。黒いパソコンを手に入れてから数日後には、この旅の最終目標は決めていた。

いくら私を嫌っている両親でも面倒なことになっていないかと私

のスマホをしきりに鳴らしてきて、無視することもできなくなってきたので実行に移すことにした。

検索するワードは……。

「人類 滅亡」

私が幸せになることを目標に生きてみることも考えたけど、私はこちらの道を選んだ。私の中にある憎しみを発散する道だ。

私1人が幸せになるか、他の全人類を不幸にするかを天秤にかけた時に、いとも簡単にその道は決まった。そんなもの全員を地獄に落とすにやるに決まってる。

私1人の力で何ができるとも思わないけど、きっとこの黒いパソコンなら道を示してくれると思った。

そして、その願いはどうやら叶うらしいということがEnterキーを押すと分かる。黒いパソコンはできませんとは言わなかった。

……………。

なるほど、でもこのやり方だとたぶん私も死ぬな……。

それが分かっても私は笑っていた。

番外編 2 「人類 滅亡」③

弁当の空き箱やお菓子のゴミが散らかるホテルの一室で、私は覚悟を決める。そうは言っても、本当にやるのか自分に聞いてみるくらいで重さはそれほどなかった。

その日のうちに私は黒いパソコンから指示されたことを実行した。上着に袖を通して外出すると、必要なものを買って求めていった。

そもそも決行日まで指示されていたのでその日のうちから準備し始めないと間に合わない。黒いパソコンが指示した決行日は明後日だった。

そしてその明後日という決行日は私にとって非常に都合が良い。人類を滅亡させる前に私はやっておきたいことがあったから。そういう都合まで黒いパソコンは汲んでくれているのだろうか……。

翌日、私は両親を殺した。父、母、両者ともナイフで首を切りつけた。

父は酔って寝ている時にそつと近づき、ハンマーで後頭部を殴った後にゆっくり殺した。入念に血を流させた。私が受けた分の痛みを返した。

母は力づくで勝つことができると思ったから特に小細工はしなかった。どちらとも別に聞かなくてもやれると考えていたけど、一念のため黒いパソコンにやるべきタイミングは聞いておいた。

人殺しをいざやってみても悲しみや苦しみたいな感情は湧いてこなかった。黒いパソコンを手に入れてから私は変わったと思う。実際に健康状態とかも変わったはずだけど、それよりも何でもできる気がする万能感、自信。それだけじゃなくて現実離れた状況に自身も人間ではない何かになったような。

両親を殺した私は血に濡れたまま、冷蔵庫に入っている父用のお酒で1人、祝杯をあげた。初めて飲んだ私にも分かるくらいアルコール濃度が濃い。不味いけど美味しいお酒だった――。

酒に酔った私はいつの間にか寝ていたようで、気付けば朝になっていた。深夜に寝たはずなので4時間くらい寝ていただろうか。ちよ

うどいい睡眠時間だ。

私はまずシャワーを浴びた。体に付いた血の跡を落とす為だ。ひどく気分が悪く、眠気もあったので時間をかけてゆつくりと。シャンプーもボディソープもボトルを何回もプッシュしたけど、なかなか落ちてくれなかった。他人の血がこんなに消しづらいものであることもそこで初めて知った。

今日は人生で1番の大舞台。せっかくだから、私は風呂上がりの暖かい体のまま鏡の前で、人生で1番のオシヤレをした。裸の状態から1つずつ、服やアクセサリー、化粧品で着飾っていった。

あとは行ってこなすだけ。全ての準備が整った私は黒いパソコンでの最後の検索をした。

「明日以降 生き方」

この計画を成功させたとしても、明日の世界を少しもこの目で見れないのなら面白くない。だから、聞いてみた。

「痛み止めや解熱剤を飲めば多少は長生きできますが、あなたが今日から明後日を迎えることはないでしょう。しかし、この世に強く未練を持つ者は死んでもその場に留まることができません。」

それを見ると、完全に迷いは無くなるどころか、実行するのが楽しみになってきた。苦しみも伴うが、その先には希望がある。

もう後戻りはできない。私はお腹を押さえて玄関を開けた。

番外編 2 「人類 滅亡」④

私は駅まで歩いて電車に乗った。ちょうど通勤や通学で混雑する時間帯だったので同じ服を着た人が多かった。ほとんどが制服やスーツ。

その中だと私は場違いな服装である。大した都市でもないこの街で、どこの都会かぶれかという余所行きの服装。夜のお店で酒を注いでいてもおかしくはないものだった。

同じ車両に乗る人間で隣に知り合いがいる者は、思い思いの会話をしていた。当然、皆私がかれから何をするのかなんて知る由もなく、朝のニュースの話だとか眠いだの帰りたいだの。

自分と同世代の女子高生らしい集団はやたら目に付いた。友人と楽しそうに笑いながら窓の景色を見ている。同じ国の同じ地域に同じ頃に生まれたのに全く違う世界を生きている人間。

私も少し違えば、今あんな風に笑っていたのかもしれない。

こうすると決めていたけれど、一応自分の幸せについても黒いパソコンに聞いてみた日があった。どうすればこの状況から人生逆転できるのか。それも黒いパソコンは教えてくれた。

まず、どこどこへ何時何分に行つてこういう人に助けを求めてください。それから今度はああいう人にこんなことをして食べ物や寝る場所を恵んでもらってください。他人に無償の愛を提供できる人はいる。その人の所で体と心を休めたら……そんな内容の文を読んでいった私はめんどくさいという感想を持った。

難しい言葉や行動も含まれていたその検索結果。私は金とやる気を理由に高校をやめたけれど、そもそも勉強が得意ではなかった。運動神経も良いほうではない。理解できなかったし、できる気もしなかった……。

数時間、電車を乗り換えつつ予定通り移動を終えると、私はのどかな自然の多い所へ降り立った。駅から見渡す景色がほほ緑。東北地方の某所にある言い具合の山岳地帯である。

自転車もないし、車もバイクもない。そもそも免許を持っていな

い。そんな私はそこからさらに歩いて目的地を目指した。黒いパソコンの検索結果の画像と地図アプリを頼りに、ひたすら歩く。ただ歩く。

歩くことだけに集中していないとその場で倒れてしまいそうだから――。

「あなたが1人で人類を滅亡させる方法は、あなたが人類を滅亡させられるほどの感染症の最初の感染者になることです。その為には2日後、ある場所で水溜まりの水を飲み、ある虫を飲み込む必要があります。まず、準備としてこれからは主に牛乳とコーラでお腹を満たしてください。蓋を開け、常温で6時間以上放置したものが好ましいです。お酒も前日であれば助けになります。食べ物は食べるのであれば、スナック菓子やファーストフード、それから……」

人類滅亡についての検索はこのようなものだった。私はそれのできる限り実行した。

誰が見ても不健康になり、免疫力を下げる為の指示であった。その指示は大体守ればいらしくて、とにかく重要なのはこれから行く場所指定された水と虫を見つけることであるということだった。

私は人里を離れて深い山の中へ足を踏み込む。途中、草陰でしゃがみ嘔吐した。そうしながらも逐一スマホで現在地を確認しながら進んだ。

頭の悪い私にも分かるようにか、黒いパソコンは目印も教えてくれていた。この場に来ると、それが凄く分かりやすくて、私は迷わずここが目的地であろうという場所まで来ることができた。

森のちよつとした広めのスペースに深めの水たまりがある。それは酷く濁っていて、油のようなものも浮き出していた。まるで一味唐辛子のように謎の赤い粒も漂っている。特徴的に、明らかに目的地だ。

私はそれを両手ですくって飲んだ。何ml飲めと書かれていて、それがどのくらいか分からなかったので、なるべく多く。今までにない味をしているそれが、もうどうしても喉を通らないというところまで。

吐き気を催したけど我慢した。さっき吐いておいて良かった。

そんな水が無くても、汚く悪臭がする森の中。虫も全く見たことないやつがいて、アフリカのほうの危険な森にでも来たみたいだった。さつきまではそうでもなかったもので、この辺の狭い範囲だけ特殊なのかもしれない。

体内に取り込めと言われた虫もそこからすぐに見つかる。周辺で最も背の低い木の幹。それも黒いパソコンから聞いていたことだったので、白っぽいマダニのような生物はいとも簡単に捕まえられた。もうそれを躊躇できるような段階ではなかったので口に入れた。体内に取り込む、つまり噛まずに飲む。味などは無いので水よりは楽だった。

混ぜたら危険を自分の胃の中で混ぜ合わせる。その効果はものの数分で実感できた。腹から沸騰するように熱が生まれて、体中が燃えるように熱くなった。

火傷しているんじゃないかと錯覚する。それと同じように指先をじつとどめておけなくて、両手をすり合わせていないと落ち着かない。

さつきまで疲労していたのに逆に体が軽くなった。目が冴えて、全身の血管が浮き出ていくのが見なくても分かる。

ああ、これだ。成功だ。きつとこれが私の望んだ力だ。

その状態で私は走り出した。来た道に戻って、誰か別の人間の近くに行くため。

もうほとんど考える力は残っていなかった。ここ数日の強い意志が私を動かしている。

アスファルトの道まで戻ってくる頃には、私の手を流れる血管は肌の上からでも分かるくらい黒色に汚染されていた。

今度は手足の感覚が火傷のような痛みから、全くの無に変わった。もう長くは持たないと自分でも分かる。けれど、私は同じ道を歩く人間を遠くから見つけた。

一心不乱。見つけてすぐ、肉眼でギリギリ捉えられるほどの距離から、私の眼は相手の首を狙っていた。

追い付けば、倒れ込むように抱きつき、首筋に噛みつく。

確かに死のバトンを繋いだ私は、さらになるべく人の多い場所を目指して這って行った。

その間、もう他の部位は全く感覚が無くなったのに、どうしても上がってしまう頬の感覚だけは強く残っていた。

word33 「死後 世界」①

死んだらどうなんのって思う時がある……。

いや、思う時があったと言うべきだろうか。最近はめつきりそんな考えをすることが無くなった。

昔は何でかよく考えていたことだ。でも、いつからか気になることは無くなってしまった。もし自分が死んでしまったら、次の瞬間何が起こるのかっていうことについて。

僕はある日の夜に、またそれについて疑問を抱いた。

本棚に並んでいるバトル漫画を一気に10巻くらい読み直した時に、登場キャラが「あの世でまた会おう」とか「死んだらすぐに俺も後を追う」とか死後の世界があるみたいなセリフを言うものだから、実際このキャラ達はあの世でまた会えているのだろうかと気になったのだ。

感動シーンだったので少し涙ぐんで、そのほとぼりが冷めると漫画から手を離して頭を働かせた。

現実で死ぬとどうなるかって議論を交わすときに出る結論は大きく分けて3つあると思う。1つは生きている内にどんな行いをしてきたかによって天国に行くか地獄に落とされるか決められて、天国に行った者は安らかに暮らし、地獄に落とされたものは途方もない苦しみを味わうというもの。

もう1つは輪廻転生。死んで肉体から離れた人間の魂は1度天界に帰った後、何年か経ってからまた別の肉体を授かり、再びこの世界へ生き返る。どのくらいの時間が経ってから転生するとか、人間の魂が別の生物に生まれ変わったりするのかなどとかは諸説ある。

最後は、何もなくなる。死んだら人間はそこで終わる。無になるだけ……。

正解はこの3つのどれかかもしれないし、それ以外の全く違う選択肢かもしれない。ただ、今はどれが正解かを考えるのは置いといて、僕はこの中のどれがいいとか転生するなら何が良いみたいなおことを考えていた。正解は後で分かるから。

僕の好みではとりあえず、無になるのだけは嫌だ。そう思う。だって今まで生きてきて培ったものがその瞬間全く何も無くなってしまうのって怖いし、じゃあ何で人間は生きてんのって思ってしまう。そういえば、昔もそれが嫌で定期的に死について考えていたのだ。小学生くらいの頃だ。今よりも先が長く見えていたはずなのに怖くって、暗い夜が来る度に考えさせられていた時期もあったっけ。安心を求めて大人にその質問を投げかけてみても、子供の頃は自分もそんなこと考えてたなと懐かしまれるだけで望む答えは得られなかった。

考えども考えども、絶対に答えが出る問題ではないから、きっと皆大人になるまでにその不安に慣れてしまっただけで考えるのをやめてしまふんだと思う。

答えは得られないし、答えが分かったところで人間は死から逃れないから結果は変わらない。だから、死ぬまで自分が1番楽になれる死後の世界を信じていればいい。

たぶんこれが、死んだらどうなんのって疑問の答えなのだろう。

ただ、僕には答えを得る手段があるし、今日の僕はそれを受け入れられそうな精神状態だった。

「死後 世界」

黒いパソコンを開くとワードを入力した。

死んだらどうなるのかを知るので、生まれてきた意味を知ることにも繋がると思う。

もしこの検索結果が「無」という答えだったとしたら、生きているうちに何をしても終わりは皆同じ。その場合やはり、僕は生きる意味など無いのではと思ってしまおう。人が生まれてきた意味など無いのだと。

椅子の上で膝を抱えて座る。最近朝晩どころか日中通して冷え込むようになった。季節の変わり目の急速な気温の変化にまだついていけない僕は、半袖短パンという服装、靴下すら履いていない。そんな冷たい足先まで暖めるように手で足を包んだ。

この寒さとは裏腹に僕の心はあたたまっていった。これからは鬱陶しくなるのだから久しぶりだから新鮮でテンションが上がる。ずっと鳥肌が立っていくのも気持ちよく感じる。

検索内容も冷たための内容。まるでスリリングなアクション映画を見る前のような気構えだった。

大きく息を吐くと僕はEnterキーに手を置いて、無という答えだったら嫌だなあ……。それ以外で頼む……。そんなことを思いながら押した。

「人間が死ぬと、靈魂となり現世に留まる稀なケースを除いて、その魂は天界へ向かうことになります。そこで魂は新たな肉体を与えられるか、また別の生物として宇宙に生を受けるか、天界の大地の養分となり自然の一部となるか、この3通りのどれかになります。どれになるかは死ぬ人間の脳が絶命する寸前に選択します……」

人間が主に想像する死後の3通り、その全てが起こりうることで正解ということか……。さらに続く文を、僕は頭の中で朗読するようにゆっくり読んだ。

「再び生まれる」と、自然の一部になることはほぼあなたの想像通りです。違うのは転生する場合に、全ての魂が集まってそこからまた1つの魂が生み出されるので前世みたいな概念は無いということく

らいでしようか。想像できないのは天界で生きるという選択をした時ですよね……………」

天界、その単語を耳にすると、脳には雲でできた世界やそこに大地も乗っかっている自然豊かで鮮やかな世界が浮かぶが……。

「天界は地球と比べて、自然はより広大で、文明はより発達しています。広さはその比ではありませんが、見た目は地球が幾度も進化を重ねたようなものです。雲が大地ではありません、宇宙とは別の時空にあるものです。自然を維持した創作物における何千年後の地球みたいな場所です。再び肉体を得た魂は、そこで第二の人生を送ります。そして、天界での人々の暮らしの本質は地球と変わりません。また何故肉体を得たのかも分からず、生まれてきた意味を求めたり求めなかつたりして生きるだけです。」

人生レベル2といったところだろうか。今の自分からはまだまだ先の話で、望遠鏡ではるか遠くのそのまた先まで見ようとしているようだった。

自分の魂には果てしなく長い道が用意されているらしい……。「もちろん違うところもたくさんあります。肉体は半永久的に若く、天界に行った後で転生することも自然の一部になることもできます。人間以外の知的生命体も存在します。自然にも都市にもあなたが見たことない物はごまんとあるでしょう。魔法も当たり前に使われています。そして、天界で暮らす魂の目標の1つに全ての魔法を習得するというものがあります。そうすれば神という存在になり、宇宙に舞い戻る力が与えられます。ただ、戻ったところで他に干渉することはできず、見ることでできません。神まで辿り着いても、魂には何故そんな力が与えられ生まれてきたかの理由まで辿り着いた者は1人もいません。」

過去に検索したことがある魔法や神の話も出てきた。

そこまで読むと僕は椅子から立ち上がって、伸びをしながら天井を見上げる。天井のもつと上にあるものに焦点を合わせて。

黒いパソコンはまださらに文章を続ける。

「ちなみに人間が死んだときにする選択の比率は、新たな肉体を授か

る41%、転生する25%、自然の一部になる34%です——」

今の僕から見ると、それは楽しみなような怖いような……。

きつとこれから僕が年を取って死ぬ間際になれば感じ方も変わってくるのだろう。ただ今は胸をざわつかせるだけでどういう風にも捉えられない。

窓を全開にして、外の空気を迎え入れる。冬の冷たさをより感じたい。そんな気分になったから。

窓から上半身を出して、室内からでは見られない星空を眺める。

「そっか……。どこまで行っても人には生まれた意味とか分かんないのか……」

でも、この黒いパソコンはその先すらもきつと何かしらの答えを示すのだろうか……。

「……………」

「……………うん、寝るか」

日常の検索あれこれ⑧ 「両親 昔の容姿」

「化学の参考書 おすすめ」

『あなたが最も効率よく大学入学共通テストの点数を伸ばせる参考書は「里田のゴロで覚える高校化学」です。各参考書を使用してあなたが勉強するのをシミュレーションした時に、伸ばせる点数／時間が最も高くなりました。』

「あそこの競馬場 今日の勝つ馬一覧」

『単勝馬券を買った時に払戻となる馬番は、1 R : 2、2 R : 2、3 R : 1 1、4 R : 7、5 R : 9、6 R : 3、7 R : 2、8 R : 4、9 R : 1 1、1 0 R : 8、1 1 R : 8、1 2 R : 5です。』

「クラスメイト男子 週の平均オ〇ニー数」

『あなたのクラスの男子の週平均自慰回数は4. 0回です。』

どれだけ普段温厚なやつでもやらなきゃ生きていけない。本当にしたことが無いと言う彼も、僕からすれば疑わしい。

そんな当たり前なことだけれど、人に胸を張って回数を言えることではない。

ただ僕のクラスには1人、その回数を面白がって人に話す奴がいた。そいつの1日の最高記録は7回らしい。きつとこの平均も上げているに違いなかった。

「クラスメイト女子 週の平均オ〇ニー数」

『あなたのクラスの女子の週平均自慰回数は2. 1回です。』

男子のを調べたから女子のも調べた。一応と……興味本位で……。

それは日本中、もしかしたら世界中の男の最大の謎かもしれないこととの答えで、できることなら声を大にして皆と共有したい情報であった。

「両親 20年前の容姿」

突然だけれど、僕の母親は美人である。子供の僕から見たらあまりそういう風には感じないけれど、たぶん他人から見たら高校生の子供が2人もいる女性には見えない。

その他人から「お母さん綺麗だね」と実際に言われることもある。昔から交流がある友達にしても、小学生の頃はあまりそういうことを言わなかったくせに、中学生になってから僕の母親は近所の母親界隈で1番綺麗だと言ってきた。

そんな母親も今では40歳を超えて、綺麗とは言っても芸能人の40歳なんかと比べたら、所詮近所で1番レベルのまあまあ若々しいくらいのおばさんになってきている。

美容にも力を入れているようには見えなくて、何かと大雑把な部分がある。

それでも確かにクラスの保護者が並んでいると目立つ顔立ちをしていて、そんな母親に対して前から疑問に思っていたのは何故あんな父親と結婚したのかということだった。

僕の父は太っていて、お世辞にもかっこいいとは言えない。それは僕が小学生の時から変わっていないことで、僕からしたら美人と結婚できる男には見えなかった。

収入はたぶん平均よりも多いと思うんだけど、それでも滅茶苦茶多いという訳でもない。酒もギャンブルもするし、昔はタバコも吸っていた。加齢臭もきつい。

なのに……どうして母は父を選んだのか気になって、ある日僕は答えを求めて昔の両親の容姿を画像検索で検索してみた……。

その結果には、驚くほど今と変わらない体型をしている父と、驚くほど美人な母親の姿があつて……。それだけで……。

僕は大人の恋愛の深さを感じた……。

また今度、直接でも母に父のどこが良いのか聞いてみたいところである。

各部活に対するイメージっていうものがこの世にはあると思う。

この部活に所属している人はこうだとか、ああいう人が多いとか。あの部活入る人間は陽キャだよ、陰キャだよとか。そんな話はきつとどこにでもあるものである。

例えば、サッカー部に所属している奴はチャライ奴が多いだとか。野球部は丸坊主でいつもうるさいなんて言われてるのを聞いたことがある。各々が脳内にある各部活のイメージを言っつて、他人の考えを聞いたり共感して楽しむのだ。

でもまあそれっつて、ほとんど偏見というか……。そりゃ共通しているイメージもあるだろうけど、そんなもん人の育つてきた環境によつてまちまちなはずだ。

たくさんの人が持つイメージとはかけ離れたケースもまた多くある訳で。真面目で紳士なサッカー部もいるし、寡黙で仕事人タイプの野球部もいる。各中学校や高校で陽キャの部活と陰キャの部活も違っているはず。

僕の住んでいる地域の僕の世代ではサッカーがあまり人気が無くて、中学でも高校でもサッカー部はスクールカースト上位では無かつた。そもそも人数がかなり少ない。ちよつと珍しい学校だと思う。

そんな中でも「軽音楽部」っつて言うとな世間の人はそれぞれどんなイメージを持っているのだろう。メジャーな部活ではないので話題になることはあまりない。けれど、名前を聞いたことが無いほどではないのできつとイメージはあるはず。

僕にとってそれは今、好きな人がいる部活で……。それともう一つ、親友がいる部活というイメージであった……。……。

「なあ。お前っつてさ。軽音楽部……。入ってるじゃん?」

「うん」

休み時間の教室、親友の席に出向いた僕は彼の目を見ずに話す。

「1年のときからさ」

「うん」

「中学生の頃からさ、ギターだかベースだかもやってたじゃん？」

「初めはギターやってたんだけど、すぐベースに乗り換えたんだよね」

「ああ……それで……なんか作詞もやってたよな。あのノートに書いてたやつ」

「それは言うなよ。あれは、まあいわゆる黒歴史の……」

「恋がなんちゃらとか書いてたよな。そういえば」

「もうええって。急になんなん」

親友が僕の手を強く握りながら笑う。

好きな人とはもちろん折原のことで、その人が所属する部活の内情を知っている親友に僕は聞きたいことがあった。だから、ある日それを聞くと決めて話しかけた。

でも、いざ言おうとするとそれを言うのが何だか恥ずかしくって。僕は違う方向へ話を逸らしてしまった。

「初めて見た時は言いづらかったけど見てるこっちも恥ずかしかったよなあ……いやいや、悪い悪い。ベースって難しいの？」

「初めは難しかったかな。まあ練習したら簡単って訳でもなくて、上手く弾くにはとにかく練習……かな」

「へー……。んでさ、軽音楽部ってどんな感じなん？」

ようやく聞きたいことを口にする。今の僕の目標のための第一歩である。

「どんな感じ……まあ、ぶっちゃけ特に何もやってないかな。いつつも雑談してるよ」

「え」

「いやもちろん楽器を弾いたり合わせたりすることもあるけど、基本的に皆やりたい曲も違うし部員でバンド組んでるとかもないし。基本雑談かな。そもそも週3くらいの気分活動」

「文化祭のときとかも軽音楽部で演奏とかも無かったもんな。それぞれクラスで別の誰かとやってたりしたけど」

「そうやね」

「実質帰宅部みたいなの？」

「否定はしないかな」

聞けることならもつと深く。できれば自分よりは近いであろう親友に折原さんのこととか折原さんのことを聞きたかったけど僕はそこで一旦止まる。

「何?なんか楽器始めたいとか?」

代わりに親友が質問を始める。

「いや。まあ……そのような違うような」

「軽音楽部入るの?」

「うーん……軽音楽部に入りたいとかではなくと言うか」

「何?」

「好きなバンドのライブ映像見て、俺もちよつと楽器に憧れはしたんだよね——」

もちろんのこと、目標とは軽音楽部に入学して折原とお近づきになることであった。しかし、その日はそれとなく楽器に興味があるアピールをするだけで、しっかりと入学したいということを言うことは無かった。

優しい親友は会話の終わりに「入りたいんだつたら歓迎するよ」と言ってくれた。それだけで今日のところは十分な収穫だった。

——授業が終わって帰宅した僕は自室まで帰ってくると、黒いパソコンを取り出した。

目標の為に知っておきたいことや、やらなければいけないことはいくつかある。その1つを検索する為である。

「軽音楽部 部員一覧」

今日の検索はこれだ。軽音楽部の規模とメンバーを知る。

これに関しては大体把握していてそこまで知りたいことではなく、そんな奴も思い浮かばないけど嫌いな奴とか苦手な奴がいなか確認するため。

ぶっちゃけ検索しなくてもいいくらい。黒いパソコンで検索するというのにその内容よりも別のことを考えているくらいだった。

別のことは、軽音楽部に入るために何の楽器を始めるかというこ

とびある。

word34 「軽音楽部 部員一覧」②

軽音楽部に入るのであれば、当然楽器を始めることが必要不可欠である。

ボーカルしか志望しませんとかだったら、ありだったりするのかもしれないけど、うちの高校の軽音楽部にはとんでもない歌唱力の子がいるし、僕にそんな手ぶらで軽音楽部に入るほどの自慢の歌声はないので、何か楽器を購入して練習することも入部の条件になる。

それをどうするか、何の楽器にするか。

考えながら「軽音楽部 部員一覧」の結果を見て、想像と全く違わなかった名前前列は1分と経たず閉じられた。

普通に考えたらまあギター安定だと思う。軽音楽部と言えば一番最初に浮かんでくるのはギターとかベースを持っている人だし、ドラムとかキーボードよりは始めやすく購入しやすい気がする。

でも、ドラムとかキーボードもなくはない。演奏している姿を想像するとかっこいいし、珍しい楽器のほうが目立てる。今の僕には資金もあるし。

僕の財布には今ちようど15万円もの大金があった。その理由は先週末も父が競馬をやっていたからだ。競馬で勝つ馬を検索して父に賭けてもらうことに味を占めた僕はもう1度作戦を実行した。

前回とは違って父が賭けたレース全てに僕も賭けて、なんと儲けたお金は30万近く。さすがに全てを僕の財布に入れてもらうことはできなかつたけど、僕にとつては金銭感覚が狂いそうな15万円という額を所持することには成功した。

これだけあればどんな楽器でもいけるはず。良い服やゲーム機を何個も買える値段だ。かっこいいデザインのものも選べるんじゃないだろうか。

「まあでも……ギターかな……」

色々と頭の中で考えたけれど、僕はとりあえずそう決めて普通のスマホでどんなものがあるか、どのくらいの額で買えるかを調べ始めた。

「ギター 初心者 購入」

検索欄にギターと入力するとサジェストに頼ってその検索をする。ギターについての知識がほぼ0だった僕のギター購入への検索は、まずギターにどんな種類があるのかということを知るところから始まった。

「アコースティックギターと……エレキギター……へ……」

そういったところの説明も1通り書いてくれているサイトを見つけた僕は目を細め、真剣に読んでいった。

弦の違いがどうか、初心者におすすめの値段はこのくらいだとか読んでいくとギター購入が現実になんげ近づいてきて、それだけで弾けそうな気がしてきた。思い通り音が出せたらと思うと、面白くもなってくる。

添えられているギターの画像もカッコよくて、黒と白のデザインのそれが今部屋にあったらと思うと、部屋のコーディネートもレベルが上がると感じる。

それ自体が目標ではないけど、きつと上手く弾けた方がカッコいいと思ってもらえるだろうからモチベーションはすこぶる高かった。

「あ、エレキギターってヘッドホンで練習できるのか……」

決め手となったのはそれだった。僕は楽器を演奏するとなると、外に音を出さなきゃいけないくて、少なくとも家族には拙い演奏が聞かれると思っていたのだけれど、エレキギターであればイヤホンやヘッドホンに出力して自分だけが音を聞ける。

ボイトレみたいに布団の中に潜ってやんのかと考えていたのに、その必要が無い。僕はエレキギターを買おうとそれで決めた。

「好き放題弾けるじゃん……ええ、楽しそう」

その気になってきた僕。ちらりと時計を見ると、まだ17時にもなっていないかった。秒針が時を刻む音が良く聞こえる部屋の窓から、外を見ると明るい夕焼けも見える。

こういうのは勢いが大事だ。思い立ったが吉日——。

僕は急いで着替えを終えると、財布とスマホだけ持って外へ出た。

外に出ると思ったよりも気温が低くて、学校に行く時よりも軽装だった僕は肩を上げて歩くことになった。さらに辺りはみるみるうちに暗くなつていつて、初めての場所に1人で行くのは不安……。

そう思ったのは目的地の楽器屋のアメリカンな看板がもう見えてきてしまった時だった。

初めて行く店で買ったことがないものを買う。しかもギターなんて高い物を買うのであれば、事前に黒いパソコンにどういうものを買ったらいいか聞いてみるなんてことも考えた。それか、それに詳しい親友に同伴を頼むとか。

でも、僕は1人で行つて1人で選びたかった。ギター初心者用のサイトにも書いてあったけど、お気に入りなものを自分で選ぶのって大切なことだ。きつと買ってからの練習のモチベや楽しさが変わってくると思う。

「いらっしやいませー」

ベルの音と共に入店すると、近くにあったレジのほうから挨拶が届く。見ると、大柄で腹の出た店主らしき男がギターを磨いていた。集中している様子でこちらにはあまり興味を示さず。

僕は周囲を見回して目的のコーナーを探す。小さな店だったのですぐにその文字は見つかった。「2F ギターフロア」と矢印と共に書かれている。

店内にほとんど客はいない。木製楽器の木の匂いだろうか。独特な良い匂いがする。

その匂いの中をすり抜けて階段を上がると、そこには少し圧倒される景色があった。

見るところ見るところ全ての場所に所せましとギターが並んでいる。まるで美術館のような配置で、ただ並んでいるだけでなく、天井から吊り下げられているものや真ん中に立たれられているもの。ショーケースに入れているものもあった。

赤、白、黄色に塗られたり忙しくデコレーションされているギター

達。中には宝石みたいに輝いているものもある。キャラクターが描かれたものも……。

「おお……」

早足で軽く一周した僕は誰もいなかったので思わず声が漏れた。小さな店とはいえ2階はまるまるギター用。とんでもない種類、選択肢がある。

形も普通のものだけではない。エレキギターはどんな形でも成り立つものだから、丸いものや三角形に近いもの。そして中央で目立っているギターはギザギザで尖りに尖っていて、思わず心の中で殴つたら人殺せそうやんとツツコンでしまうほどだった。

そんな凶器に近づいてみると、22万円という値札が見えて、僕はより圧倒させられる。

まあ買えてもこれは買わないかな。奇抜なものではなくていい。

僕は次に値段とデザインをじっくり見ながらフロアを回った。どんなやつが欲しいとかはここに来るまで考えていなかったの、見て気に入ったものが10万円以下で買えるならそれにしたい。形は普通でかつこいいと感じるもの……。

ぶつちやけどれもかつこいい。この前までギターを買おうなんて思いもしなかった僕が見ても感動する。ださく見えるものがない。この中から1つ選ぶって難しい。

売られている品とは違って静かだった店内のBGM。それはギターじゃなくてピアノの音だった。落ち着くBGMの中で僕はあれでもないこれでもないと思んだ。

しかし、ちゃんとはつきり答えは見つかった。これしかないと思えるものがあつた。

一見したところでは目立つギター達に埋もれてしまっていた……。けど見つけてじっくり向き合うと一際スタイリッシュな……心を鷲掴みにする黒いボディ。

1度それを見ると、他に目移りはしなかった。ボディの部分は真っ黒で、ネックの部分は木が見えている。ヘッドの部分はまた黒色、なによりその黒色の質感が僕のハートを射抜いた。上品で高級さを感じ

じる黒だ。

「お兄ちゃん何か気に入ったの見つかりました？」

「え」

その黒いギターに見入っていると、気付かぬうちに僕だけだったはずの2階フロアに人がいた。さつきカウンターにいた太った店主だった。

「じつと見とるもんやから、ええのあつたんかなって。持ってみます？」

店主はやけに優しい笑顔で僕に話しかけてきた。

「どれ？」

「えっと、これです。でも持ってみなくていいです。これ買います」

「へー。これね」

指を差すときに見た値札には「93,800円」という文字があった。払えるけれど、想定したものよりはかなり高額。それでも迷いはない。

「はい」

「ジャクソンギターか。お目が高いですね」

「じやくそん？」

「お兄ちゃんギターは初めてですか？」

「はい」

「初めてならこういうのもおすすめだけど——」

それから、ギター好きそうな店主の話に10分間くらい付き合わされた。店主は他のを見せてくれたり特徴を楽しそうに語った。

もう決めてしまっていた僕にとっては迷惑だったけれど、初めてのギター購入に必要な付属品もパパッと集めてくれた。

僕は何が何やら分からなくて、説明されることに適当に相槌を打っているだけだった。ぱっと見怖そうだったけれど笑うと優しいそうだったので全て任せてしまった。ピックだとかチューナーだとかは店主のおすすめに甘えて、初心者ギター入門と書かれた冊子もタダでもらった。

「ちよつと値段はおまけして、合計で10万5000円になります」

ギター本体とケース、その他諸々込みでお会計はそんな高額なものになった。

「お兄ちゃん。ギターは背負って帰る？」

「はい。そうします——」

店を出た僕の背中と片腕には大きな荷物があつた。外に出るとまともや寒さで肩が上がって、それと同時に頬も上がった。

はあ。来週からテストだっけ。勉強しないとまずいなあ。でもなんだか、やる気が出ない……。

筋トレもしなきゃ。ボイトレもしなきゃ。せつかく高いお金出して買ったんだし、ギターの練習もしなきゃ。というかやりたい。でもなんだか、体が重い……。

週末の休みの日、僕は朝いつも通りに起きた。7時前だったから休みであればかなりの早起きである。しかし、早起きしただけでそれを全く活かせていなかった。

顔を洗って朝飯を食べて、またベッドに寝転んだ。そこからは、ただベッドで寝ころんでいるだけ。これといって何もせずスマホで動画を見たり、ソシヤゲをしたり。二度寝すらもしていなかった。

とにかくぼーっと寝転んで、3時間くらい……。

やる気がでなかったのだ。体中から気力が抜け落ちている。その理由も原因もない。たまにあるそういう日だ。1カ月に1回くらいある体に力が入らない休みの日。

やる気も体力も無くて、予定も約束もない。あるのは多少の性欲だけ。

だけど、そっちのほうもやる気が無くて、処理するほどではない。本当にどうしようもない日だった。

仰向けの状態でスマホ画面の動画を見ていると、頭上に構えたスマホが手から落ちてしまつて、僕の顔面に直撃する。素早く首を動かしたけど避けることは叶わなかった。

枕元に落ちたスマホから好きな芸人の声がする。漫才の動画を見ていて、ちよūdどオチに近づいてきたところだったのに、それを拾い上げるのもめんどくさかった。

「ああああ……」

汚い声を出した僕は目を閉じた。二度寝の時期も過ぎてしまった気がするけど、やっぱりもう1度寝ようか。また時間を無駄にするが1時間くらい寝て起きたらやる気が出るかもしれない。

あくびをしながら、ベッドの中で手足を目一杯伸ばす。そうすると、良い具合にリラックスした状態になれて、寝られそうだと僕は思った。

しかし、そんな時に僕の下半身でもぞもぞと動くものがあった。

「ええ……今立つの……」

あまりのタイミングの悪さに僕はツツコンでしまう。さつきまでは妙におとなしかったのに、頭をからっぽにしようとした瞬間に元氣100倍。ポジションを変えてやらないと痛いくらいに。

こいつにはこういうところがある。自分の体の一部なのに自分の意志とは関係なく動く。朝起きた時にそうなっていたりするのだから訳が分からない。

だいたいさつきからのやる気のなさはこいつのせいでもある。ムラムラしているようなしてないような状態って集中力がなくなるのだ。どうも他のことへ気が散ってしまう。

今も寝づらくなつたし、うっとうしいと思うのなら出してスッキリすればいい。そうすればゼロにできる。気分じゃなくても無理やりにやってしまえばいい。

だけど、何にムラムラしてるのかも僕は分からないのだった。

「はあ……」

溜め息を吐いて、僕は再びスマホを起動した。今日のおかずを探す為だ。

それから僕はスマホで画像や動画を見てそえられるものを探した。「その他」と名前を付けてある画像ファイルだったり、お気に入り登録してある優秀なサイトを見ていった。

男の性欲は食欲に似ていると聞いたことがあるが、その通りだと思う。

基本的には新鮮でおいしいものが好まれるし、その時々で食べたいものは変わる。食べたいたものではないと満足できないなんて時もあったってしまう。ちよつと手間をかけてでも好物でない……そんな時が。

特に食欲があまりないときはそうだ。美味しいもの以外では食欲をそられない。それなのにその美味しいものが自分でも分からない時がある。でも、一度食べたいものが見つかってしまうと、それが食べたくて食べたくて仕方なくなるのだ……。

僕は今、正にそういう気分であつた。何か食べたいものが見つかったから食欲が出てきたのではなくて、ちよつと食欲があるけど何か食べたくなくなるものがあるかなと家の棚を漁っている感じだった。

常備してある食べ慣れたインスタントラーメンや缶詰、冷凍食品なんかではダメなんだ。もつとデリシャスなものではないと。

それと同じように、あれでもないこれでもないとスマホを操作した。これには一生お世話になると思つて保存した画像でも何回か使えば飽きてきてしまう。それもまた食べ過ぎると飽きる食欲と同じである。

探せど探せど見つからなくて……ムラつてはいるけど、徐々に僕の僕も元気を失つてくる。

もういつそ何も見ないで、無感情の処理をしようか。けれど、こんなに悩んだ末に結局そんな形を取るのか。自分に問いかけているとようやく僕のアンテナが電波を受信する。

そういえば、昔見たあの動画ちよーエロかったなあ……。

思い出すと気分は一瞬で変わった。文字通りアンテナのように僕

の僕が再び立ち上がる。

自分がいつか見たAVのワンシーン。それが少し脳内でちらついただけで、これしかない、探し求めているものだと確信する。

その瞬間だけでもう快感があった。別ベクトルの快感だけど、パズルのピースが埋まったような感覚。

僕はベッドの中で態勢を変えて、さっそく検索の方向をシフトした。

確か巨乳の女の人だったと思う。髪は金髪で長くて……本職の人なのか知らないけど少なくとも設定では素人だった。なんかちよつと露出なんかもしちやつたりして……。

少なくとも見たのは半年以上前だった。そんな過去の情報から思いつくことを頼りにその動画を探す。

見つかりさえすれば一瞬でこの無駄な時間を終わらせられる。なのに僕の求める動画はなかなか見つかってくれなかった。似たような動画はたくさん見つかるのにそれだけが出てこない。

似た動画にこんなブスじゃないんだなんて悪口を心の中で言っていると、それらしき動画が関連動画で発見された。

邪魔で無駄に多い広告を跳ね除け、流れるように向かう。

しかし、それをタップするとリンク先では「動画は削除されました」という文字だけがあった……。

もう我慢できなかった。やっと見つかったと思ったのにこの仕打ち。やり場のないモヤモヤが体に生まれる。

そして、それをすぐに解決する方法が1つだけあった。1つだけしかない――。

「昔見たAV 巨乳のやつ」

急いで黒いパソコンを取り出し、その言葉を入力した。

下半身裸のまま布団から出て椅子に座る。

見せたくないものをさらけ出している部屋の中、今ドアを開けられたらとんでもないことになるけど後戻りはできない。

僕は握りながら、動画検索を行った――。

画面が望んだものに、切り替わった時にはもう本当に黒いパソコン

に感謝した……。感謝という意味では今までで1番かもしれない……。こんな素敵な使い方もできるんだなと思った……。

それから5分くらいで、僕は浄化された。急ぎ足で終わらせた。

でも、終わった後の感想は「こんなもんだったか」というものだった。

昔見たものって美化されてるんだなあ……。そう感じた休日の朝だった。

word36 「お隣さん 何やってた」①

僕の家の隣にはお隣さんが住んでいる。家があつて人が住んでいるのだ。

それは別に珍しい事でも何でもない。けど、住んでいる人はとっても特別……何しろ地球人ではないのだから………。

——ある休日の日に僕は外に出かけた。予定が無ければ基本的に寝て過ごすのだけれど、その日は予定があつたからだ。

クラスの友達と週末に勉強会をやろうと約束していた。来週から始まる期末テストの対策をする為に朝から友達の家に集合。解散時刻は決めずに、できるだけ頑張ろうという予定になっていた。

その予定通りに集まつた僕たちは広い部屋を持つ友達の家で、教科書とノートを机の上に広げたのだった。

4人の友達が集まつてそんな会を開けば、当然最初の目的を忘れる奴が出てきて、脇道に逸れる場面がある。関係ない話で盛り上がった、ここまで頑張つたのだから休憩で遊ぼうとゲームをしたり麻雀をしたり。僕らもそうだった。

けど、そうしながらもそこそこ勉強は捗った。途中でそんな時間を挟みつつも集中する時は集中。ペンと紙の音だけがする時間があつて、家で1人でやるよりも賢くなれた気がする時間を過ごせた。

そんな会は夕方になる前に解散となつた。友達の1人が夕方から用事があつたので、じゃあ皆ここで解散でいいかという流れになつたのだ。

別れを言つて友達の家から出た僕……今は帰り道を歩いている。

天気が良い日だったので、日が落ち始めても暖かさを感じられた。僕はそんな中を、寄り道せずに真っ直ぐ家へ向かう。いつも通り、景色を楽しみながら少し遅めのペースで。

横断歩道の信号に止められたときは、今日覚えたことをすぐに忘れていないか頭の中で確認したりなんかもある。点数の勝負をすると決めた地理のテストの復習だった。

そんな考え事をしながら家に帰って、家に帰ったらゆっくり過ごす。今日も世界は平和に終わる。そう思っていたんだけど、家の近くまで帰って来た時にある人物と出くわしてしまった。

僕の家のお隣に住む、お隣さんである。

ただの人間に見えるけど、本当の姿は宇宙人だということんでもない存在のお隣さん。他の人間は誰もそのことを知らないだろうけど、僕だけは黒いパソコンから聞いて知っている。

そのお隣さんが少し先の自販機の前にいた。

前の検索で本当の姿はかなりいかついと判明した。僕はそれを一旦見なかったことにして忘れようとしたけれど、その数日後に「お隣さんが危険な宇宙人なのか」についてはさすがに検索した。

結果は安全だとパソコンが言ったので、僕はもう完全に忘れたつもりで何事も起こさずに過ごすことにした。

その結果には「何もしなければ安全」という風に書かれていたので、そりやもうこれ以上の詮索はしない。平和が一番である。僕は誓うように決めたのだった。

それからはいつも通り……よりはお隣さんからちよつと距離を取って生活した。たまに見かけては、なるべく話しかけられないように立ち回って、あれは普通の人だと自分に言い聞かせた。

今もそうである。あれは普通の人……あれは普通の人……。お隣さんを見ながら念じる。

けれどやっぱり、ああして自動販売機の下を地面に頭をつけて覗いているお隣さんを見ると、変な人だと思えないのだ……。

word36 「お隣さん 何やってた」②

おもむろに自販機の前で四つん這いになるアラフォーの男性。さらに地面についているんじゃないかというほど頭を下げて覗き始める。

僕が角を曲がってちょうどお隣さんを発見したと同時にかなりの出来事であった。「あ、お隣さんだ」と思ったらすぐこれである。

僕はそのあまりの光景に足を止めた。止めてしまった。

百歩……いや千歩……いやいや万歩譲って、大の大人が自販機の下を覗くのはいいとしよう。でも、奥に普通に歩いている人がいるんです。それが――。

奥から歩いて来た人がお隣さんの横を通り過ぎていく。知らないおばさんだった。そのおばさんは当然おかしな人を見る目でお隣さんのことを見て、数秒後にあんまりこういう人を見るもんじやないという風に反対方向を見ながら去っていった。

そうやって通行人が通り過ぎる間もお隣さんはずっと自販機の下を見続けて、僕もなんだかそこから動くことができなかった。

一体何をやっているのか……。普通に考えれば小銭を落としてしまったとかだろう。100円玉くらいなら大抵の人は諦めるものだが、1000円玉とか5000円玉が運悪く自販機の下に行ってしまったのなら取ろうとする人もいるであろう。

でも、その場合でもあんなに地面まで頭を下げないし、僕にはそういう風には見えなかった。

お隣さんは財布を取り出してジュースを買おうとしていたでもなく、直立不動の状態からあの態勢になったのだ。

じゃあ何だ……。相当金欠なのだろうか。自販機の下の小銭に頼らないといけないくらい。そんなことあるのか、宇宙人なのに。もしそうだとしたら人目を気にして、深夜に行くとかしてくれ。

見ているこっちも恥ずかしいので、心の中で叫ぶ――。

僕は周囲を見て、これ以上誰かがお隣さんの恥ずかしい姿を目撃しないか確かめた。車やバイクの音はしないし、どうやら今のところ人

は近づいてきていない。

それが分かると……一安心。一安心なのだけど、こっから僕はどうしよう。

話しかけてみるか、「何してるんですか」と。こんな状況黙って見過ごせる訳が無いし、お隣さんのあの行動の理由はめっちゃくちゃ気になる。だってまだ覗き続けているんだぞ。

僕は1歩踏み出しては、1歩下がり。前を向いては後を向いた。けれど、結局遠回りして別の道から帰ることにする。お隣さんとは関わらないと前に決めたのだから――。

曲がろうとしていた道を横切って、2歩3歩。道の中央までやってくる。そして、そんなタイミングでお隣さんが顔を上げた。

「やあ」

四つん這いの状態で僕を見つけたお隣さんはそう言った。さらに立ち上がり、いつもの両手バイバイの状態に入る。

「あ、どうも……」

溢れる気持ちを抑えながら会釈をして、笑顔を作る。

僕は足を止めずにさっさとその場を後にした。早歩きに切り替えて、なるべく早く遠く進む。そして、次の角を曲がったら……。

「ああああああああああ!!!」

心の中で全力で叫んだ。

結局見つかると聞けば良かったじゃないか。そもそもあの人がマジであんなところで何してたんだよつ。

その勢いのまま僕は相当早いペースで歩いて家まで急いだ。もう今日やった勉強のことも頭から抜け落ちてしまった気がする。さっき考えていた地理の問題とかも忘れた。あるのは「お隣さん 何やってた」、これだけだった――。

「ああああああああああ!!!」

家に帰って自分の部屋に着くと、まず実際に叫んだ。枕に向かってただけ。

そして、黒いパソコンを使って検索をする。

もうお隣さんについては詮索しまいと思っていたが、致し方なし

……。

「お隣さん 何やってた」

word36 「お隣さん 何やってた」③

なんとなくイライラしているのでEnterキーを連打する。そして、気になるその結果は黒いパソコンの画面に表示された。

「あなたの隣の家に住む主人が、先ほど道で自動販売機の下を覗いていた理由は、自動販売機の下に小銭があるかを確認する為です……」
まず1番上にある文を見て、僕はシンプルにそういう理由だったことに驚いた。もっと他の理由があったのだと思っていた。

けれど続く文はさらに衝撃的な内容で……。

「彼は今日、町中の自動販売機の下を覗き歩いて何枚の小銭が集まるかを調べています。3時間という時間を決めて、その時間の中で町を歩き、見つけた自動販売機全ての下を確認して、合計何円分の小銭があるかの調査です。その結果は母国の惑星へ報告され、彼はさらにその地球のインターネットへ記事をアップロードする予定です。彼はそういった調査を自身のブログに記しています。」

その文章に目を合わせたまま、僕はポケットからスマホを取り出して検索エンジンを起動する。

何だその面白そうな話は。あの人がブログなんてやっているのか。しかも自動販売機の下を探せば何円集まるかとかちよつと面白そうだし。

そのブログを探そうとしたけれど、今どきブログはメジャーじゃないし、1人として誰かのブログなど読んでなんていないし探し方も分からなかった。

困った僕は黒いパソコンがさらに答えを教えてくれないかと画面を見つめる。すると、画面は切り替わった。

「ちようど今、彼が調査を始めて3時間が経過したので結果が分かりました。この町内の自販機の下に落ちていた小銭の合計は1円玉が1枚、10円玉が1枚、他は全て0枚だったそうです。」

望んでいたのとは違う文章。さすがに何をやってたかを検索してそこまでは教えてくれないか。

それにしても、3時間探し回ってたったの11円しか小銭って落ち

てないんだな。僕は腕を組んで短く何度か頷いた。

確かに自販機の下に小銭を落とすことって考えてみればほぼはない。僕は今まで1度も経験したことがないと思う。小銭を財布から取り出して自販機に入れるとこまでで落とすかつ、落ちた小銭が自販機の下まで跳ね返らないと起こらないことだ。

もつと言うと、昔より自販機自体利用する人が減ってきているはず。特にこの辺は。色んな種類のコンビニがけっこうある。電子マネーなんかも普及しているこのご時世で小銭落とすってまあないであらう。

頭の中でそれについては納得する。うん、それはいいんだけど……お隣さんは町中の自販機で覗いていったのか。駅のほうの人が多いエリアでもきつとあの態勢になったのだろうな……。

地球を管理する為に来たっていうのはそういうところまで調べるのか。なるほど、今までの奇行ももしかしたら何かの調査でやっていた可能性もある。

何にせよ、これは伸びしろのある検索分野だな。

僕はお隣さんについて調べること禁止を一旦無かったことにして、検索したいことノートに「お隣さん ブログ」と書き込んでおいた。

番外編3 「検索 履歴」

73日目	「お隣さん 何やってた」	…
72日目	「昔見たAV 巨乳の奴」	…
71日目	「軽音楽部 部員一覧」	…
63日目	「化学の参考書 おすすめ」	…
62日目	「ち○この長さ 全国平均」	…
61日目	「折原さん カラオケ」	…
55日目	「お父さん 秘密」	…
54日目	「折原さん 彼氏」	…
53日目	「折原さん カラオケ」	…
35日目	「黒いマウス 機能」	…
34日目	「お隣さん 年齢」	…
33日目	「競馬 勝つ馬」	…
23日目	「ピラミッド 建造法」	…
22日目	「仕返し 方法」	…
21日目	「僕が買ったプリン 在り処」	…
15日目	「ドラゴン 実在」	…
7日目	「検索 デメリット」	…
6日目	「幸せ 今すぐ」	…

- 4日目 「僕のことを異性として好きな人 一覧」 ……
- 3日目 「親友の弁当 今日」 ……
- 2日目 『検索 無限』 ……
- 1日目 「このパソコン 何」 ……

黒いパソコンにタダで検索履歴を見る機能は無い。

けれど、1日1回の検索を利用すれば、自分が黒いパソコンを手に入れてから今までの履歴は全て見ることができた。

見てもどうなるということはないけれど、特に検索することも無かった日に僕はそれを眺めてみた。昔のアルバムを見る感覚で、あの時こういうことがあったとか、あれは失敗だったなとかって懐かしんでみた。

夢のアイテムを使って普通のパソコンでは絶対に検索できないことを調べた経験は、どれも鮮明に覚えている。当たり前だ。僕にだけ許されている特別な経験。忘れるはずがない。

特に最初の頃の検索はそうだ。黒いパソコンが突然部屋に現れてから数日のことはその時の部屋の状態だとか、自分の感情や感覚まで。あの時はとにかく驚いた。それと共に胸が熱くなるような感覚……。

黒いパソコンで僕が最初に行った検索は「このパソコン 何」というものだった。思わず声に出た言葉を黒いパソコンが認識して、そこでこれがどういう物かを知ったのだ。

そして、確かその時の時間は23時55分くらいのことだ。

詳しい時間を知っていた訳ではない。でもそれが確かなのは僕が最初の検索を行ってすぐに2回目の検索を行えたことで分かる。日付が変わって、あの夜に僕は2回連続で検索したのだ――。

「検索 無限」

そのワードはこれである。

願い事を叶えてもらえるが、回数に制限があるという状態はよく耳にすることである。物語でもよくあるし、友達同士や家族で「1つだ

け願いが叶うなら何を願う？」とかつて雑談したりもする。

そういう時にもし可能ならば一番望ましい選択は、「1つ目の願いで叶える願いの回数を無限にする」ということだ。小学生が考えるようなことではあるが、そりやできるならばそれが正解。

僕も黒いパソコンが現れてその性能を知った時に、この方法が頭に浮かんだ。

どうせ嘘だろうと、本当に1日1回しかできないのかなんて思いながら深く考えずに、何でも検索できるならじやあとりあえず無限に検索できる回数を教えろやと検索をした。

その結果はこうだった。

「100日後に分かります。」

ふざけていると思っただ。こんな短い文で、しかも答えになっけない。やっぱり誰かのイタズラなんだと思考が動いた。

でも逆に、そんな雑なところに信憑性も感じた……。

それから1日検索できなかつたので、2日眠れぬ夜を過ごして……3日目に真偽を確かめたつけ……。

100日後はそろそろ近くなっている。一体どういう答えを僕に見せてくれるのか、無限に検索できるようになるかどうなのか……楽しみではある。

まだ太陽が高い位置にある午後、帰宅した僕は荷物を自室のベッドにぶん投げた。

肩を軽くした後は、暖かいけど窮屈な冬用の制服カスタマイズセット達を脱ぎ捨てていく。手袋と、マフラーと、長い靴下。綺麗に脱ぐのは面倒なので手袋と靴下は裏返しにして。

制服だけは雑に扱わずにハンガーにかける。この前アウトレットで買ったお気に入りのカーディガンも。すると、随分楽な服装になって、服の中に溜まっていた熱が抜けていくのが気持ち良い。

冬の学校帰りは脱ぐだけで着替えが終了。他の服を着なくても、部屋着になる長袖シャツもジャージのズボンも制服の下に着ているからである。

プライベートモードへスイッチを切り替えた僕は今日、休む態勢にはならず……先週からの1番のお気に入りを手に取ってベッドに座る……。

期末テストが終わった今日という日、僕はこの日を待ちわびていた。ようやくめんどくさいテストのことを気にせずに興味に没頭できるようになるこの日を。

そう、僕は今日から本格的にギターの練習を開始する――。

部屋に来る前に入念に洗っておいた手で、まだまだ光沢が美しいギターを膝に乗せる。ピックやらアンプやら諸々の準備もすぐに済ませると、僕はまず最初に軽く6本の弦を弾いた。

ヘッドホンから響くイカした音。この基本的な音1つだけでテンションが上がる。

次に開くのは今日帰りに買ってきた、ギター初心者用の練習マニュアル。いつもなら友達と遊んで帰ったりするのだけど、本屋に直行して買った。まだ先の話だけどギター用の楽譜集なんかもビニール袋に入っている。

何を参考にして練習するかは悩んだけど、とりあえず本にした。ネットで調べるとそれ用のサイトや動画もいくつか出てきたが、こ

れ。本屋でぎつと見た感じでは分かりやすそうだった。

その本の目次から、1ページ目。僕は書いてある通りきつそくギターを使つてのドレミファソラシド練習から始める。

今日がくる前にも当然ギターには触った。ギターを買って帰ったその日から楽器屋の店長にもらった冊子を頼りに、練習というほどではないけれど基本的な知識を頭に入れながら触ってみた。

まだやったことは基本中の基本の内容だと思っただけど、今のところあんまり難しい感じはしない。何か曲を1曲演奏しようと思えば、かなりの時間の練習がいる感じがするが、逆に言えば練習すればできるようにはなる気がする。

とにかくやる気とやるしかないという気持ちはあるから、難しいと聞いていたコードについても嫌な顔をせずになんか知っていくことができた。

「この弦のここを押えて……こっちはここ……合つてんのかな」

どれだけのことを覚えたら軽音楽部に入部しようかはまだ決めていない。けど、少なくとも今のほとんど分からない状態では行くべきではないし、自分としてもある程度弾けるようになってからにしたかった。

初心者ならではの教えてもらおうという会話パターンはあるかもしれないけど、僕はそういう形じゃなくてかっこいいと思つてほしかった。やっぱ、男は女をリードするものでしょ——。

ラブパワーに身を任せて、僕はギターの練習に没頭した。数時間経つても集中力は切れなくて、やる気もきれなかった。

でも、そつちが切れる前に指が痛くなつてしまつて僕は練習を中断する。

弦を抑える左手はもちろん、ピックを持つていた右手もなんだか固まつてしまつて、ほぐしてやらないとつってしまいそうだった。

ヘッドホンを外すと、もう夕飯を作るような音が台所から聞こえてきていた。何か野菜を切るような包丁の音。それが聞こえてから自分が空腹であることにも気づく。

今日の練習をこれで終わりにするかは別として、僕はいったん休憩

に入った。ギターを大切にスタンドに置くと、ベッドに寝転がってスマホを起動する。

すると、まず画面で注目を集めるのは友人からメッセージが届いているという通知。タップすると、そこには……。

「俺の犬の動画がめっちゃバズってるから見てくれ」

こういう連絡があった……。

メッセージが来ていたのはちょうど30分前。興味を引くその文は1つの共有リンクと共に送信されていた。

タップすればSNSのアプリが件の投稿まで僕を導いて、不透明だった詳細を明らかにする――。

「いつもすぐ抱っこしてあげてるのにずっとスマホで動画撮ってたらブチ切れた」

そんな文と一緒に投稿されている1つの動画。再生開始の時点で1匹の犬の顔がアップで表示されている。僕もその友人の家で会ったことがあるコーギーだった。

自動で再生が開始される動画。確か名前はブン太であるコーギーがずっとこちらを見ている……。

動物にあまり興味が無い僕でも友達の家に行ったときに見てかわいいなと思った犬だ。ただ黙って写っているだけでもくりつとした目がかわいい。しかし、犬の動画よりも気になるのが、その投稿の拡散回数。

なんと1万を超える数の拡散。ハートマークの横にはさらに多い2・3万という数字があった。

何事かと思った僕はまず動画をちゃんと見ることにした。再生画面をタップして、顔を画面に近づける。

ブン太を収めた画面が少しズームアウトすると、ブン太が足をもぞもぞした。そして、小さな声でクーンと鳴く。徐々にその声は大きくなっていった、足の動きも激しくなる。

どうやら何かを求めて撮影者の傍にいるらしいブン太は、次に手招きをするように足を動かし始めた。なのに撮影者は何もせず無言のままカメラを構え続ける。

動きが激しくなっていくブン太。そして、次の瞬間吠えながら撮影者に向かって突進した。

怒り狂ったブン太はおそらく友人である撮影者の足の上に無理やり飛び乗り、そこで先程までとは違う唸り声をあげる。

ブン太の行動に乱れたカメラは最終的に噛みついてくるようなブン太の顔に支配されて、さらにブン太の追撃により撮影者はカメラを落とす。真つ黒な画面の中で人が襲われるような音が聞こえて動画は終わった……。

なるほど確かにかわいい。バズるに値する動画だと、見終わった僕は思う。犬が甘えてくる動画なのになんとなくホラーっぽい展開と最後を迎えていてシニールなのが面白いし。

僕は1度も経験が無いSNSでバズるといった現象。その真つ最中である友達の投稿に来ている返信もぎつと見てみる。

そこにはバズった投稿でよくあるような大喜利や感想が書かれていた。

『こっわ』

『強制的に抱っこを要求してくる危険生物』

『犬「カメラ構えてないで抱っこしろや』

『かわいいすぎる。私の家にも欲しい』

へー、と感心しながら返信を見てみると、たったそれだけの時間で動画の再生回数は1000くらい増えていた。昨日の夜に投稿されているので、今は伸びている真つ最中である。

毎日見ているたくさんの人が反応している投稿だけど、知り合いがそれを経験していると僕も心が躍った。シンプルにすごいという感想が出てくる。

昨日はテスト勉強、今日は帰ってきてからずっとギターの練習で丸一日くらいSNSを覗いてなかった間にこんなことになっていたとは。友人のアカウントをタップすると、バズったことの喜び投稿もたくさんあった。

『ヤバwwwwww』

『通知が止まらねえんだけどwww』

僕はそんなバズった人間のテンプレみたいな喜び方をしている友達達の投稿を見ると、あることを思いついた。

けれど、それを行う前に「気づいてなかったわ。すげーじゃん。俺も拡散しといたぞ」と友達に返信を送る。

おそらくずっとスマホを見ているからか返事はすぐに来た。

「何千個も通知来て怖いわ」

微笑ましさに笑って、それと同時に僕はより早く思いついたことを試したくなった。メッセージ画面を開いたまま立ち上がって黒いパソコンを取り出す。

面白そう。羨ましい。それ、自分もやってみたい――。

「SNS バズらせ方」

僕はそんなワードを入力した。

黒いパソコンで検索する時は、Enterキーを押す前にどんな結果が出るのかを予想するのが紳士の嗜みである。いつもはそうしている。

しかし、今日の僕はすぐにEnterキーを押した。早くその先が見たかった。幾通りも答えがあるだろう質問に、黒いパソコンがどう答えるのか……。

『まず、スマホを手に取ってあなたが普段使っている動画サイトのアプリを開きます。今から5分後の17時34分ちょうどに動画の視聴を開始してください。あなたが好きな動画であれば何でもいいです。動画が始まる前に広告が流れますが、そこですぐにスクリーンショットの準備をしてください。広告の再生時間が15秒ちょうどになったらスクリーンショットをします。タイミングは多少ズレても構いません。撮影したスクリーンショットを「奇跡の瞬間取れてワロタ 最近やたら出てくる広告、やっぱみんなうざいんやな」という文と共に17時45分から18時03分までの間に投稿してください。』

結果は時間をかけずに画面いっぱいに表示された。

その文を2回早足で読んで、ざっと内容を把握すると、スマホを手元を持ってきて、またパソコンの前に座る。そして、検索結果を表示したまま、書かれていることを実行する準備を始めた。

答えを教えてくれたとしても、実行するのがめんどくさいのがあるかとも思ったが、さすがは黒いパソコン。この場ですぐにできる順序を僕に差し出した。

まだ一体何が起ころのかは不透明。だけど僕はさらによく結果の内容を把握しながら待つて5分後、書かれている通りにスクリーンショットの構えでスマホを持った。

気分で見に入った動画のサムネイルを押す。選んだのは僕が最近ハマっているゆるキャラの動画だ。

始まった広告の動画。僕はそれを見ながら、これから何が起ころか

予想するでもなく、ただ15秒の瞬間に狂いなくスクリーンショットを撮ることだけに集中していた。

うるさいおじさんと、うるさいおじさんのキャラクターが叫ぶうるさい広告。始まってすぐにボリュームを下げ、10秒……9秒……とカウントダウン。

そして、狙い澄ましてその瞬間を撃ち抜いた――。

固まったスマホの画面。そこには思いもよらぬ瞬間が記録されていて、僕はまず吹き出してしまった――。

最近やたら出てくる広告動画がある。黒いパソコンの検索結果にも書いてあったが、ウザいと感じる広告だ。たぶん中国のソーシャルゲームの広告なのだが、おじさんとおじさんのキャラクターがひたすら叫ぶという内容の。

それがとにかくうるさいのだ。不快に聞こえるガラガラとした声に、何故か他の広告よりもでかい音量で、どうでもいい面白くなさそうなゲームのセールスポイントを叫ぶ。広告動画なんてどれもウザいものだけど、その中でも群を抜いてウザい。

そんな広告を咎める勇者の姿が、手元のスマホの画面にある。

それは僕が好きなくるキャラ、世間的にも人気な猫。右手を大きく上げた姿が、下の関連おすすめ動画にあって、15秒の瞬間に出てきた別のバナー広告とパズルのように繋がった。

別のゲームのバナー広告には銃を握って上に突き上げている手があって、その銃口はアップで表示されたおじさんの首に向いていた。

まるでゆるキャラが笑顔でおじさんを脅しているような構図。逼真的なおじさんの顔と、とろけそうな表情のゆるキャラとのギャップはインパクトがある。

なるほど〇〇に見える系か……。僕はにやつきながら思う。バズる投稿でよくあるパターンだ。スクリーンショットに限らず、色んなジャンルで撮影した物が、違った形や思いもよらぬ形で写るというのは……。

これを決まった時間に、決まった文と共に投稿すればバズるのか……。

僕は間違えないように注意して、その投稿をSNSに放った。

その投稿をするのは別にどのアカウントでもいいのだろうか。本名で使っているアカウントと「ポンカン」という名前で使っている趣味用アカウントの2つがある僕は、どっちのアカウントで投稿するか迷った。

その結果、書かれていないならどちらでもいいのだろうという結論に至って、それならば趣味用アカウントのほうに投稿しようとした。

理由は本名のほうで投稿すると、僕がゆるキャラが好きなことがバレてしまうからだ。それは恥ずかしい。

指定された時間は15分以上余裕があるけれど、すぐに投稿した。毎秒何千個、何万個と増え続けている文や画像の群れへ、僕のスマホからも発信される。

いつものようにそれが始まるのか見るためにずっと画面に張り付いていた。でも、すぐには変化が無かった。わずか50にも満たないフォロワー達も、誰1人として反応を見せない。

ちゃんと投稿できているのか気になり始めて、SNSのアプリ内で「ウザい広告」と検索すると、ちゃんと僕のものもあった。

そして、やはりあの広告のウザさについて投稿している人がそこそこいることも知る。僕自身、動画を見るときにあれが流れ始めると殺意が沸く……。

ウザい広告についてネットの民がどういう感想を抱いているのか見ていって15分後、もしかするともう何も起こらないのではないかと思いはじめた時であった……1つのアカウントから拡散されたと通知を受ける。

知らないアカウントだった。けど、それを皮切りに僕の投稿のバズりはスタートした――。

2つ3つと、通知が届くようになって、最初に僕の投稿を拡散したアカウントを見ると、10000人もフォロワーがいるアカウントであった。

ぱつと見では何故そんなにもフォロワーがいるのか分からない。知らないアニメのキャラクターがアイコンのアカウントが火付け役となつて、僕の投稿が広く広く拡散されていく――。

顔も知らない他人のアカウントを渡り歩いたたびに、僕のスマホが振動した。ペースはそれほど早くない。1分に1つくらいの通知のペースである。けれど、そのペースは時間を増すほどに早くなつていった――。

「おお……すげえ……」

通知と拡散の数が増えていくのを楽しんでいると、最初の拡散からものの30分ほどで拡散の数が100を超えた。ハートの数はその倍以上。

まだまだバズつたという数字ではないが、それでも自己最高記録を大きく超えているので興奮してしまう――。

夕飯の時間になったので、僕はそこで一旦SNSのアプリから目を離して、リビングに行く。スマホは持たずに、部屋に置いたまま。敢えて数時間寝かすことにしたのだ。そのほうがよりおいしくなる気がした。

ゆっくり夕飯を食べて、家族でテレビを見て、風呂に入る。まだ僕しか知らない自分の投稿がバズっているという事実を胸の中で楽しみながら……。

自分の部屋に戻ってきたときには、スマホの電源を切ってから2時間半が経っていた。期待しながらスマホを開く――。すると、そこにはSNSからの通知で埋め尽くされた画面があつて、その光景を見ている最中にもさらにスマホが振動する――。

夕方に行った投稿の拡散数は7000を超えていた。思っていた以上のペースである。見間違いではないことを確認する為に目を凝らしてしまう。そしてその数が増えているのは真つ最中のことで、常に画面上部に通知が届いていた。

「ヤバ……なんだこれ」

消しても消してもどうしようもない通知は毎秒自分の投稿に何か反応があつたことを告げている。SNSの通知欄を見ると、色んな人

のアカウント名がずらりと並んでいた。

スクロールすると、中にはアカウント名に「芸人」や「アイドル」といった単語が入っているちよつとした有名人っぽいアカウントもあつて、その人の名前は知らないけど、こんな人まで僕の投稿を見ているのかと思つた。

「バズっているツイート速報」というアカウントにも拡散されていて、数々のバズっているツイートの中に僕のアカウントも名を連ねていたりした――。

王道の動物系、子供系。日常の役立つアイデアを紹介している投稿に、失敗や偶然から生まれた日常の1コマ。めちやくちや旨そうな料理のレシピと画像、そして張り紙やアニメの画像に秀逸なツツコミを入れている投稿など……：……そんな中に他と劣らない面白さだと思える僕の投稿。なんだか誇らしい気分にもなる。

――僕の投稿に対しての感想も見ていって、その内に増えた通知でどんな人が反応しているかをまた見る……。しばらくそうやっていると、僕と同じ高校に通う同学年の生徒からも反応があつたという通知を見つけた。

僕の本名アカウントの方でもフォローしているからすぐに気付いた。1年生の頃に同じクラスだった女子。自撮りのアイコンをタップすると、やはり知っている女子のアカウントで、その子は別に有名なでもないけどなんだか今日1番の驚きがあつた。

世間は広いようで狭いというか……もうそこに辿り着いたんだなと、ちよつと手を止めて考えさせられる。

けれど、その数分後にはさらに何倍もの衝撃を与える出来事があつた。

数々の通知の中から運命的に、僕の目に飛び込んできた通知。それを見つけた時には反射で自然と手がガッツポーズを作つた。

「折原 裕実」というアカウントからの拡散という通知だ――。
「はっ!」

僕は立ち上がった。茫然として、どんどん来る通知にそのアカウントが流されていくのを見送る。

別に何かを達成した訳でもなく、最初に目標を設定した訳でもなかった。でも僕は今、この瞬間にゴールテープを切ったような感覚を抱いた……。

やり遂げってしまったんだと喜びが湧いてくる。僕はきつと勝ったんだ。凄く嬉しい。

数分間余韻に浸って……折原が何か感想を投稿していないか見に行く。いつもはたまにひっそりと見ているそのアカウントへ。そうすれば真っ先にそれは見つけられた。

「私もこのキャラクター好きだから物騒なことやらせるのはやめてほしいな」

文章の末尾に付けられていたのは、目に涙を浮かべる顔文字であった。所謂、ぴえんと呼ばれるやつ。言うまでもなく拡散した僕の投稿に対する感想である。

「は?！」

再び僕は言った。驚きだけではない、色々な感情からくる「は?！」だ。

これは状況が変わってしまった。さっきまでのことは吹き飛んで、僕の中でどうするかという議論が始まる……。

もう十分楽しんだのではないか……結局、黒いパソコンに考えてもらった投稿であるし……やりたければ、またいつでもできる……通知がずっと来ること考えたによつてはうっとうしい……。

反対派の意見が強かった。わずか数十秒で結論が出るほどに。

僕は勢いのまま、バズっている投稿を削除した。

それが、僕のバズりの終わりであった――。

①

冬なのに足出しすぎだろ——。

僕は、ある日の教室で思った。少し離れた席に座っている女子が、股を広げて座っていたのだ。窓際の席で、壁にもたれているからかスカートもかなり際どいラインまで上がっている。

今にも見えそう。というか、姿勢を低くすればたぶん見える……。

帰りの前のSHRのさらに前の時間。返却される課題だとか連絡プリントとかの配布物を日直が配っている時だった。後ろの席に配布物を渡すときに、僕はその景色があることに気づいた。

エロいと思つて見たのではない。迷惑だとか、寒くないのかという気持ちである。高校生男子の僕だつて、見れるならいつでもどこでも誰でも構わないという訳ではない。

教室で女子の足をじろじろ見ている、それを誰かに気づかれるようなことがあつたらまずいし、ルックスが好みでない女子のものを見ても別に嬉しくない。

だから、見てもすぐに目を逸らして、何も気付いてないふりをする。自然な感じで、何事もなかったかのように配布物を渡す作業に戻つた。

教室で女子のパンツが見えそうだった場合、それを見たいにしろ見たくないにしろ、男子は気を付けなければいけないのだ。見る時は、周囲から怪しまれないよう細心の注意を払って、上手く横目で見たりしないといけないし、見れば息子を刺激してしまつて、ズボンがもっこりしてしまう危険性もある。

今回みたいに自分にとって興味が無い女子のパンツが見えそうなきときはただ注意するだけ、注意したところでメリットもないのに、自分に変態ではありませんとアピールしなければならぬ。

よつて僕は、後ろへ配布物を回すときに前を向いたままの姿勢を強制されていた——。

「おい、さつきホームルームの前さ、笠野さんのパンツ見えてたよな」
しかし、僕が好みでない女子を好きな人もいて、その1人がSHR
が終わると話しかけてきた。たぶんクラスで1番スケベ心に素直な
男だ。

「まあ、見えてたね」

「やっぱお前も気付いてたか。白と青のしましまだったよな。俺めっ
ちや見てたわ」

「お前、あんまり見るもんじゃねえだろ」

背が低めの丸刈り野球部は、嬉しそうな顔をして、周りには聞こえ
ないように小声で話す。それと一緒に僕も小声で対応した。

「だってあんなん見てくださいって言うてるようなもんだろ。見せて
んだよあれは」

「あの人けっこう頻繁に見えてるよな」

「うん。注意してないね。俺日常的に注目してるもん」

笠野が好きではない僕は少数派の人間だった。笠野は男性的に
ちようど肉付きが良い体をしていて、胸も尻もでかい。顔もブスでは
なくそこそこに良くて、クラスの男子からは人気があった。

何より豊満な体をしているくせにだらしないのだ。性格もさばさ
ばしていて男子からの目を気にしてない感じがする。

だらしなさが僕は受け付けないけど、エロいと評判の女子だった。

「昨日は白いパンツだった」

「あ、昨日も見えてたよな」

「お前も見えてんじゃん」

「だって見えるんだもん。この席に座ってたら」

「むっつりめ。じゃあな」

部活があるスケベな友達は自分の席に戻って荷物を背負った。そ
の背中を見て、きつとあいつは笠野さんをおかずにしていたりするん
だろうなと思った。

小柄な彼がサイズの大きい女で興奮している様子がなんとなく想
像できてしまった。

そして同時に、笠野はどのくらいの子のそれになっているんだろうと疑問に思う。やっぱりかなりの数の男子がお世話になっているんだろうか――。

学校を出て、帰り道を歩いている時も、出くわした疑問の答えが気になってしまつて……さらにその疑問はもっと広がった。皆、普段誰でやってるんだろうと……。

そんなことを考えながら、昼間の道を堂々と歩いている僕は確かにむつつりなのかもしれない……。

家に帰つた僕は迷いなく今日の検索ワードをそれに決めた。もう幾度も検索してきた恒例の下ネタ分野のものである。そして今回もまた、実際に集計することは絶対に不可能なランキング調査だ。

『オ○ニーされた回数 ランキング』

②

そのワードに対して何か文字を付け足すかを、検索する前に考えた。

クラスメイトの女子や同学年の女子の中でランク付けするのか、それとも芸能人の女優やアイドルを含めるのか。これは重要なところである。

仮に芸能人を含めた場合は、される方ではなく、する方にクラスメイトの男子という条件を付けなければならない。いちいち文字を付けないでも、黒いパソコンなら僕の意志を汲んでくれるはずだが、ちゃんと決めてないとそれもどうなるか分からない。

さて、どうするか……。

少しの間だけ悩んで、僕は学年の女子という範囲にすることに決めた。そのほうが今日抱いた疑問の答えとしては正しい。さらに気になることがあればまた明日検索する。

「同学年の女子 オ〇ニーされた回数ランキング」

Enterキーを押すときにワードボックスに入力されていた文字はこれであった。

以前にも誰が誰を好きだとかは検索したことがあったが、好意が寄せられている数をランキングにするのもやったことがなかった。今回の検索は好意とはまた違うものであるが、好意のランキングと同じような結果になることは予想できる。

となると、まるで何かのスポーツのドリームマッチを見るような気分になった。

普通では考えられない夢の対決。男子たちの間で、同学年の中で5本の指には入ると言われた女子たちが、実際競い合えばどうなるのか。真の5本の指の席は誰のものになるのか。熱い戦いである。年末の夜にテレビをつけたみたいだ。

ロード中のグルグルが消えると、チャンネルが変わって、黒1色が

ら一気に検索の結果へと画面が変わる。

「1位 村本 明音 : 2705回 49位 白川 梓 :

7回

2位 森 彩花 : 1564回 49位 八木 実和子 :

7回

3位 西原 友里恵 : 1096回 54位 佐藤 千春 :

6回

4位 笠野 優衣香 : 904回 54位 金田 優里 :

: 6回

.....
.....
.....
.....

あなたの高校入学時から現在までの期間で、全国の男性が1度射精
することを1回として集計したものです。」

.....その全体を見て僕が最初に感じたのは、下位の女子にもい
くらか数字があるのだという驚きだった。

いや、結果を見せられて考えてみたら当たり前とも言えることでは
あるのだが、不人気なほうの女子にもおかずにされた時が何度かある
らしい。

僕もそれをするときにいつも同じような人をおかずにするのでは
ない。普通に毎回違うことのほうが多いし、ごくたまにあるのだ。全
く好きではない女子に、性的興奮を覚えてしまう時が.....。

つまり、この結果はそういうことなのだろう。どんな子にも少な
らず需要はある。

0回と表示されている女子はほとんどいなかった。わずか3人。
102人の内、たったの3人であった。

でも、そうか。そうなのか。あの子でも抜いている奴がいるんだ
.....。

そして、やはり気になるのが上位のメンツ。TOP10のランキン
グがどういったものになっているのか。その回数はどうなのか。注
目してみると.....やはり、大体僕の予想通りの名前がそこにはあっ

た。

森さん……現在、隣のクラスにいる女子で、入学当時からその圧倒的ルックスですぐに大人気となった女子である。芸能人にも余裕で匹敵すると思う顔。しかも顔だけでなく、体も素晴らしいときたものだから、納得の2位。

西原さん……一見すると目立たない。けれど、スクールカースト最上位グループに所属していて、よく見ると一般的に男が1番好きな顔をしている。最上位グループの中で1番大人しくて男子に優しいという最高のステータス……納得の3位だ。

他にも我がクラス自慢の巨乳、笠野さんとか。2年連続離れたクラスに所属していて、僕は1度も話したことはないが地元アイドルとして活動していると聞く女子だとか。錚々たるメンバーの名前が上位にはあった。

しかし、その中で1位だけ……何故か頂点である1位だけが見てもピンとこない名前をしていた……。

一体これはどういう訳か。さすがに学年で1番おかずにされている女子の名前が分からないはずはないのだが。

僕にとっては全く興味が持てない女子が、周りには大人気だなんて。僕の場合は少なくともそんなにはずれていない。

じゃあ、なぜ……。村本さんとはいったい誰だ……。

その探求は次の日に持ち越された……。

③

じっくりとそのランキングの結果を見てみると高まるものがあった。ただ文字と数字が並んでいるだけであるけれど、これが作り上げられた過程を考えると、それだけでエロ方面での想像力が刺激された。

学校中の男子が特定の女子で下の処理をしている……。その女子で色んなシチュエーションを妄想している……。こういう風にフィニッシュしているのか。想像すれば、頭の中が白く白く、染まっていた……。いった……。。

そして、他に芽生えた感情が折原で抜いたことがある不屈者への怒りの感情である……。

翌日の学校では……上位にランクインされた女子のことを、「あ、5位の人だ」という風に見た。かなり考察しがいのあるランキング結果だったものだから、しっかりと画像として保存して、昨日のうちにTOP20くらいは暗記した。

頭の中のデータを頼りに「今日も4位がパンツ見えそう」だとか、「5位はすれ違った時めっちゃ良い匂いするな」とか心の中で言ってる順位で見ていたのだ。

そんな目で上位の女子を見ていたら、その中の1人とふいに目が合ってしまった時に、かなりわざとらしく逸らしてしまった。申し訳なき、恥ずかしさと共に「3位の女子と目が合ってしまった」と鼓動を早めながら思った。

それから、一体1位の村本さんはどこにいるんだろうと探してもした。そんな訳もないけれど、ひよつとしたらめちやくちやくかわい子女子のことを忘れていて、見たら思い出すかもしれないから、女子を見かけると顔に注目した。

同じクラスになったことがなくて名前の覚え間違いとかもあるかもしれない。そう思ったけれど、1日過ごして上位にランキングして

いないのがおかしいレベルのかわいさを持つ女子は見つけられなかった。

たった1日の検索ではあるけれど、村本さんの詳細は自分だけの力では分からない。僕はそんな気がした。きつと知らない名前が1位だったことには何かしらカラクリがあつて、正当な手段でランキングしているのではないのだ。

——で、あるならば。今日の検索はそれに使えばいい。うちの学校のマドンナたちを跳ね除けて、圧倒的1位の座に君臨する女王の正体を暴いてやる。

僕はまた家に着く前にそう決めて、家に帰るとすぐに検索する構えになった。

多少の予想はできる。カラクリの方向性というか、ぼんやりとあんな感じの理由で知らない女子が1位なんだろうなど。

それは昨日の検索結果の最後の部分だ。「あなたの高校入学時から現在までの期間で、全国の男性が1度射精することを1回として集計したものです。」という部分、これを見ると全国の男性から何回おかずにされたかというランキングだということが分かる。

全国の男性ということは僕の同学年の男子だけではない。もちろん先輩も後輩も含まれるし、村本さんの中学時代の同級生だとか他に所属するコミュニティでの知人、もし村本さんが日本全国に名や顔が知られる活動をしているのならその人たちも含まれる。

僕的にはたぶん、You tubeとかをやってるんじゃないかなろうかと思っていた。そうじゃなくてもどこかのサイトになにかしら動画をあげているのではないか。踊ってみたとか歌ってみたとか若い女子がやりそうな中でもジャンルは色々あるけれど、何かのジャンルでリアルでは目立たないけど人気があるとか。そんな推測、それが例えば普通にSNSで自撮り名人とかか。

とにかくきつと、そこには僕が分からないし、黒いパソコンでないとたどり着けない何かがある。

「村本さんが1位 理由」

入力する単語はこれにした。普通のパソコンだと全く訳が分から

ないものだが、黒いパソコンであればたぶん僕が欲しい情報を教えてくれる。

もうきつとそうだとか、願うでもなく。当たり前に入enterキーを押す……。表示されたのは予想通りだけど、予想とは全く違うものであった。

④

『村本 明音さんは彼氏とのセックス動画をネットにアップロードしています。現在大学3年生の彼氏が始めたことですが、彼女自身も合意していることで、広告や有料動画で収入を得ています。現役の女子高生であることは隠し、常にマスクを付けて動画を撮影しています。彼女の若くハリのある肉体と、彼氏の指示や視聴者のリクエストにNOとは言わず何でも答える姿勢が人気を得ています。……』

思ったよりハードで直接的だったその内容。最初の1文だけで衝撃的で、読みながらこんなことをしている女子が同じ高校にいるのかと戦慄する。

何かの分野で人気になって、本意ではないが世の男性のおかずにもなってしまうのではないかと思っていたが、自ら望んでそれになっただけとは。自分が写った動画を投稿しているのはあつていただけ、まさかそういう動画投稿者だったとは――。

検索結果の最後には、「これが彼女のR-18サイトでのアカウントです」という文と共にURLも載せられていた。僕はURLだけでそれがエロサイトのURLだと分かる。僕も利用したことがあるサイトの名前が入っていたからだ。さすがは黒いパソコン、そんなこと教えられたらそりや実際見てみたい。

スマホにURLを入力する。無論、その作業は興奮するものであった。

辿り着いたサイトでまず最初に目に付いたのは、たくさんの動画のサムネイルだった。黒い背景とピンクの装飾に囲まれたサムネイルは、どれもこれも胸に尻に、男と交わる姿までもが全く自重せず曝け出されている。大量に写っている男が好きな物、僕の目も自動的にそこへ向く。

そして、視点を上に向けると「Akane channel」という文字も見つけられた。アカウントのアイコンになっているのが胸

を出しているマスクの女子、首には首輪がはめられていた。すごいことになっているけど、この方が村本さんということでもいいのだろうか……。

ざっとサイトをスクロールしただけでも、白目を剥いている村本さんや、縛られて調教されているような村本さんが見受けられた。AV女優と何ら変わらない恰好やポーズ。そんな村本さんを見ると、僕は怖いと思った。

エロいよりもかなり恐怖のほうが大きい。デープで馴染みのない世界だから、それを見ると、背筋が冷えていく感じがしたのだ。一体どういう風な流れで村本さんがこうなったのか、こんなことをしているながら僕と同じ高校で普通に授業を受けて普通に弁当を食べているのか、それを思うと同級生のエロ動画を見つけたことに喜んで、ズボン脱ごうとはならない……。

そのサイトから得られる情報を閲覧している時は、凶鑑を見ているような感覚があった。化粧をしていて、普段の村本さんとは顔が違うことも分かるし、同じ高校の子という感じが全くしなかったからかもしれない。エロサイトだけど、ただ興味のあることを調べている感じ。

マスクを付けている村本さんは確かにかわいい感じがする。再生回数的にもそこそこ回っている。大体数千くらいで、多い物は万。そして、再生数の数の横には投稿日時があって、見ると一番古い動画が今年の8月の終わりくらいのものであった。

なんと村本さんがこの活動をやり始めたのは今年からのことではないか。もつと言うと今年からどころか数カ月前からのこと。たぶん夏休みの間に何かあったんだろうなと思う。そしてたったそれだけの期間で数千回おかずに見られているという事実……。

じゃあ、一応1つくらい動画見ておくか……。僕はそこで思っただけでも興味を引く動画をタップした。僕が好きなシチュエーションの奴を。一応だ。一応。

しかし、始まった動画にはかなりモザイクがかかっていたりカットが入ったりしていて、あまり抜けるものではなかった。動画の最後に

はフルバージョンはこちらというURLが表示される。

「なるほど、そうやって稼ぐのか……」

快感や、形に残る収穫は無かったけど、好奇心は満たすことができた。これをそう言っているのか分からないが社会勉強。色々な世界があるものだ。

もう1つ知ったというか、思ったのは……高校という場所には僕が知らないだけで結構ヤバイ奴が何食わぬ顔で暮らしているんだろうなということ。何人いるかは分からないけど、200人も300人もいれば数人はヤバイ奴がいて当たり前。それなりに大人になってきた体力と行動力のあるモンスターが他人には言えないことをやっている。

そして、多分僕もその1人だ。プライベートを知られるとまずい。こんなものを持っていることが誰かにバレるとかなりまずいことになってしまうのだ……。

日常の検索あれこれ⑨ 「ティラノサウルス 捕食シーン」

「ティラノサウルス 捕食シーン」

黒いパソコンで、何でも思いついた場面の動画を見ることができると知ってから、いくらか普通では絶対に見ることができない動画を見る日があった。

見るときは、いつも夜中に布団を被って見る。せつかく1日1回の動画を見るのなら、集中して見たいからだ。

冬の間は寒さを気にしないように、再生開始する前に布団を自分のぬくもりで暖めておいて……お腹が減っているときは、先に腹を満たしてからという準備も怠らない。

見る動画の選択は大体、普通の動画サイトで面白かった動画の延長であった。あるジャンルの動画を見た後に、もっとこのジャンルの動画が見たいとか、もっと凄いやこういう動画が見たいと思った時に頼る。黒いパソコン tube を。

それは見たいと思った動画を検索1発で表示して、広告なしで再生することができる神サイトである。

例えば、動物の捕食シーンを見た後にもっと大迫力で高画質なものが見たくなった時がある。その時は古代の地球の頂点に立っていた恐竜の捕食シーンを見てみた。

今では考えられないサイズの肉食動物で、恐竜の代表と言えばティラノサウルス。その捕食シーンは言うまでもなく、その前に見ていたフトアゴヒゲトカゲがゴキブリを食べるのはまるで違う迫力があつた。

大きな体を持つ自身よりもさらに大きな恐竜を狙ったティラノサウルス、何サウルスと言うのか知らないが首が長くてちよつとしたビルくらいのでかきの恐竜にのそのそと近づいて、ただ真っ直ぐに噛みついた。

何の小細工もなしで、早くもなく、賢さもなし。シンプルにパワー

だけの狩りである。顎の力ぶっぱで噛みついた敵の足の根元の肉をちぎる。

ものすごく重い粉碎音と、トマトを潰すような音がイヤホンを通して伝わり、それは繰り返された。

足を失い大量の血を流す首の長い恐竜は程なくして横たわり、ただの肉塊になる。それをティラノサウルスは実においしそうに食べた。がつつき、時には首を上げて好物を名一杯口に含むように……。

迫力の分、満足感も何倍もあった。

ちなみに、ティラノサウルスはゾウやサイみたいな色だった。

「中学の頃の同じクラスの子 喧嘩」

昔々の話であるが、僕が中学3年生の頃に同じクラスだった女子2人が喧嘩した。現場を見ていないが殴り合いの喧嘩だったはずだ。ある日の昼休みの後にその2人の女子だけが教室に帰ってこなくて、次に見た時には2人も顔に青あざや傷ができていたのだ。

ふと怖い物見たさで殴り合いの喧嘩の動画を見た後に思ったのだ。喧嘩と言えばあれはどんなものだったんだろうと……。

今でもその事件は鮮明に覚えている。2人の女子が殴り合いの喧嘩をしたと知った時はそりやもうクラスの男子は戦々恐々としたものだ。もちろん女子も怖かったと思う。けれど、男子が特に怖がったのは喧嘩した2人の女子がどちらもスクールカースト上位で、どちらも顔が結構かわいくて普段は仲が良かったからである。

いつもは笑顔で男子や先生に接していて、おしとやかさも感じられていた。

そんな女子2人がどうしてあんなったのかはあまり語られていない。男子たちは知りたくもないという感じであった。

そして、今こうして実際の映像を見てみても、やはり見ない方が良かったと思う。想像していたよりも殴り合いが激しいし、お互いボロボロになってきても全く容赦しない。

2人のかわいい顔の女子が、その顔をぶつ潰すように殴る殴る。片方が倒れば馬乗りになって追い打ち。髪は引っ張るし、首を絞めよ

うともする。制服も脱げそうなるし、パンツも見えた――。

さらに知らなかったことは、2人の女子が喧嘩している時にはどうやら周りにその友達の女子たちも数人いたことであった。しかも喧嘩を止めようとはせず、笑っていたりして、チャイムが鳴るとさっさとその場から離れてしまった……。

「猫の動画 続き」

よくおすすめにでてくるものだから、見る度についつい押ししてしまふ猫の動画があった。他の猫動画と比べても僕が好みの猫だったので、いつからか新作の動画がアップロードされる度に見てしまっている。

その中でも特別かわいいと思う動画と出会った。それは猫が撫でられたそうだけど、素直になれずもじもじし続けて、動画の最後のほうでようやく甘え始めるというもの。ゴロゴロと喉を鳴らしながら撮影者で飼い主の布団に入り込んで丸くなる。飼い主もそんな猫を撫でる。

動画はもじもじ猫がメインで、甘えるのは溜めて溜めて最後のオチみたいなものだから短くてもしょうがない。けど僕は甘えているところをもっと見たかった。10秒ぐらいじゃ物足りない……。

黒いパソコンで動画検索をしてみると、すぐに見たかった動画は表示された。元々見ていた動画の最後と同じ画角で、撫でられているところから始まる……けれど、すぐに状況は変わった。

飼い主の手が消え、布団がめくられる。そして、どこかへ行く足音と、猫のキョトンとした顔。撫で撫での時間はすぐに終わってしまったのだ。

黒いパソコンに映る動画のアンクルが引きになって、猫が布団の上で黄昏ているところが流される……。程無くして、戻って来た飼い主の男はカメラを持っていて、また猫の撮影を始めた。

飼い主は色々と角度を変えながら猫の周りを回った。見たところ、猫のほうはまだ撫でて欲しそうに飼い主に寄って行くのだけど、近づいては布団の真ん中に戻される。猫が動かないようにたまたま撫でた

りはするのだけど、片手で雑に、しかもその間には常にカメラがあった。

何をしているんだろうと見ながら僕は考えたのだけれど、たぶん動画のサムネイルを撮影しているのではないかと思った……。

ペットの動画を投稿している人の闇を見てしまった瞬間であった……。

黒いパソコンを手に入れてから3か月の時間が過ぎようとしていた。初めは夏の終わりくらいであったけど、季節は冬に変わり……服装も半袖から長袖に変わった。そして、高校生の僕はそろそろ冬休みを迎えることになる……。

最初は使用する時に毎度していた緊張も、黒いパソコンと過ごす日々が長くなるにつれ薄まってしまつて、今ではほとんど無くなつてしまつた。黒いパソコン自体の扱いも少し雑になり、隠し方も雑になつてきている。

時には、黒いパソコンを収納に隠さずに部屋を空けるときもあるほどだ。何かを検索した後に、また収納の奥に戻るのがめんどくさくつて、教科書や服を被せるだけで外へ出る。

1度だけ、それすらもせず外へ出たこともあつた。何も被せず、黒いパソコンをそのまま机の上におきっぱなしで数時間外出した。あの時、家族の誰かに部屋を見られていたら……このチートアイテムが僕以外に知られてしまう可能性があつたのだ。

……でも、それでもまだバレていない。そんなことをしても尚、僕だけのものだつた……。

だから、もう二度と誰かに知られることはないのではないか……。そうやって考えた訳ではないけど、心のどこかでそう思つていた。思つてしまつていたので。油断していた――。

――いつも通りの学校生活を終えて、帰つてきた僕は、この日もすぐに黒いパソコンでの検索を使った。

鞆を置いたら、制服を脱ぎもせず収納を開いて、黒いパソコンのキーボードを叩いたのである。

収納を開けてすぐに見える位置にある黒いパソコンは、いくつも積み重なつた収納ケースの1つの上にあつた。僕はそれを取り出さずにたくさんかけられたコートやジャンパーたちに顔をつつこんで使用する。服ばかりの収納の中は良い匂いが微かに漂う。

検索内容は今日の朝に報じられたちよつとしたニュースの真相についてだった。かなり有名で人気のある若手女優に彼氏ができたとかできていないとか、噂程度のニュース。それが本当かどうか、本当なら相手の男はどんなだろうということを黒いパソコンに聞いた。

ぶつちやけ僕はそんなことどうでも良かったのだけど、僕の親友がそのニュースを聞いて今日一日落ち込んでいたものだから、なんとなく気になった。

どうでもいいのに1日1回の検索を使ったのは、他にこれといって検索したいことが無かったからだ。そして、ギターの練習に集中する為にさっさと消費しておきたかったから。黒いパソコンの検索を残している、何を検索しようとそればかりに気を取られてしまうことがある。

検索を終えて、大したことのない検索結果を見た僕は、予定通りギターの練習に取り掛かった。

すらすら弾けるようになってきたドレミファソラシドを、本の手本を見ずに何度か弾いて、メインをやり始める。メインとは1曲何か弾けるようになるとういう当面の目標のことである。僕は好きなアーティストの曲で簡単そうな曲から1つ決めて、1週間ほど前から始めていた。

もう出だしから、サビ前くらいまでは何とか弾けるようになっていた。まだ、本来のペースでは弾けないけど、半分くらいのスピードならどうにかなる。半分のスピードでも弾きながら聞いている身としては、エモく聞こえて楽しい。

上達のスピードは自分でもまあまあ早いと思う。まだ、ギターを買ってから1カ月経っていないくらいだけど練習量でゴリ押ししているから……。

習慣になった帰宅してから夕ご飯までのギターの練習と、休憩でやったソシヤゲが気づけば僕を夕方まで運んだ。

ここまで上手くできるようになったら終わろうというところが終わって、スマホで確認した時刻は18時30分。ちよつど良い時間だったので、僕はヘッドホンを外した――。

そして、寒いからという理由と集中したいからで、壁を向いて羽織っている布団から出る――。

僕はそこで見た――。その瞬間まで全く気付いていなかった事件を――。

開けていないのに開いていた収納の扉、その前には姉がいた。

それだけでなく、黒いパソコンのキーボードに手を置いて、何やら操作をしていたのだ。

目の前の光景が信じられなくて、僕は固まった――。

振り向いただけで、全く予期してなかった展開にぶち当たったものだから、次の行動の正解がすぐに出てこない。けれど、1歩2歩と自然と体が動いて……。

「ちよつと何やってんだよ」

姉の肩を掴むと、僕は言った。

姉は僕の方を振り向きもしなかった。全く僕に対して反応を示さず、黒いパソコンを弄り続ける。

気付いていないはずはない。わざと無視しているのだ。

「やめろって」

それならばと、僕は姉の前から黒いパソコンを奪った。2つ折りにして脇に抱える。

そして、これから姉がどんな行動を取っても対処できるように考えを張り巡らせた……。

「何勝手に部屋の中入ってきてんだよ」

「……あんたやっぱり持ってたじゃんパソコン」

姉はまだこちらを見ずに行った。表情が分からなくて不気味である。

「ああ、持ってるよ。別にいいだろ」

そして僕は、1発目の返答から逆ギレの構えを取った。

もうバレてしまったのであればしょうがない。ここからパソコンを持ってないだなんてもう通りっこない。だったら、その点は諦める他ない。

重要なところはそこではないのだ。最悪、僕がパソコンを隠し持つてるといふ事実は知られても良い。まずいのは、この黒いパソコンが特別だということが他人に知られてしまうこと。

既に僕はその思考に辿り着いていた――。

「そのパソコンってさ……あんたが自分で買ったの……?」

「……うん。そうだよ」

「ふーん……それって、お母さんもお父さんも知らないよね？」

「いや、どうだろう。たぶん知らないかなあ……」

「じゃあさ……何で隠すの……そのパソコンを隠す意味は何？」

姉がついに僕と目を合わせた。これは今この時のみならず、久しぶりのことであつた。この前の黒いマウスを巡る争いがあつてから、僕と姉はまともに話していない。

お互いに目を合わそうともしなかった。けれど、黒いパソコンを指差しながら姉は僕の目を見た。久しぶりに見た姉の顔は別に変りなく普通である。だがしかし、別人のような雰囲気を感じた。少し大人びたか。

「ねえ、何で隠すの？」

「別に……意味とかはないかな。机の上にあると、勉強ができないし」

「はい。嘘」

「は？」

「あんた嘘つく時、目逸らすもんね」

おそらくは僕の嘘を見抜く為に見ていたであろう視線はその役割を果たした。人の目を見て嘘をつけないのは僕も知っていることである。

だったら、こちらにもやることがある。

「あのな姉ちゃん。俺もこんなことしたくないけど、この前の奴……」

「あのアカウントなら消したよ」

「え」

「その話は2度とすんな」

さすがに、付け入るスキを残したままこんな大胆な作戦には出てないか……。取り出したスマホをすぐにポケットに戻す。

前の検索で知った姉の裏垢は消された。しかも僕も見たくないものだったのでそもそもとつくの昔に忘れてしまっている。

「あんた、絶対なんか隠してるよね。今もそのパソコン見たけど何かおかしかったもん。普通のパソコンじゃなかった。それ、本当は何なの？」

さすがは我が姉と言ったところだろうか。昔から勘がいい。もし

かしたらもう何か気づいているのではないかと思ったが、本当にそうらしい。

少し状況が悪い。じゃあ、致し方ないか――。

「部屋にいる時なら入念には隠されてないんじゃないかと思って来たの。でも別に喧嘩しに来たわけじゃないわ。あたしも黙っててあげるから、あんたの秘密教えて」

たぶん姉の事だから、いくつか作戦を立てて乗り込んできていると思うのだ。僕が言い逃れできないように。僕が真実を明かすまでの算段を立てている。

絶体絶命――否、これは僕が望んでいた状況だった。ついに、この時がやって来たかと興奮してしまう。

事なきを得るには姉の記憶を消してしまうくらいしかないだろう。でも実はその検索は既に終わっているのだ。

「記憶 消す」

これを検索したのは1カ月ほど前のことである……。

word39 「記憶 消す」③

毎日黒いパソコンを使う度に、扉を開け、ボックスを開け、衣類を掻き分けて取り出し、また後を残さないように丁寧に戻す……。その作業がめんどくさくなくなって段々やりたくないと思ったのは事実である。そして、作業を少しずつ怠るようになっていったのもまた事実……。

しかし、黒いパソコンが他人に知られた時の危険性を僕はちゃんと分かっていた。重く重く受け止めていた。綺麗に隠すのをめんどくさがりながらも、さすがにバレたら終わりの状態で、黒いパソコンを隠さずに外へ出ることなんてできなかった。

だから、バレても大丈夫なように準備をしておいたのである。

まさか僕が部屋にいる時にバレるとは思っていなかったけど、まあこんな場合も問題なく対応できるほどの準備をしておいた。

なんと僕は人の記憶を消すことができる。その力を手にしていた。少し前から。

油断していたのは、万が一バレても大丈夫だからだったのだ――。

その力を手にするには3回、黒いパソコンでの検索を要した……。まず1つ目のワードは……。

「記憶 消す」

これを検索をしたのが1カ月とちよつとくらい前のことだ。検索した理由は正に黒いパソコンがもしバレても大丈夫なようにしたいと思ったから。雑に隠せる楽ちん生活になりたかった。

黒いパソコンはその検索に対して「あなたの力ではできません」と答えた。僕も正直なところ、どうせそういう答えだろうなと思っていた。

人の記憶を簡単に消す方法なんてあるわけ無い。

しかし、黒いパソコンは続けてこんな文を表示した。「後日シヨツピング検索をしてみてください」。

それを見た僕は次の日、また黒いパソコンの前に座った。

言われた通り、ショッピング検索とやらをしてみる為に。

けれど、その前に得体の知れない黒いパソコンでのショッピング検索が気になった僕は先にそっちから検索してみることにした。ショッピング検索を勧められたけどそれって一体何だったっけ。

それが記憶を消す力に辿り着くまでの3つの検索の内、2つ目だ――

「ショッピング検索 とは」

スマホでもよく行う単語の意味の検索、「とは検索」。存在はしつていたけど、詳しくどういいうものかは知らなかったショッピング検索について教えてもらった。

『ショッピング検索は宇宙中にある物の内、商品として売られているものの中から、条件に合う物を見つけ出し、望むならばそれを取り寄せることができる機能です。購入には毎日の検索で貯まるポイント消費する必要がある、購入にも1日1つまでの制限があります。なお、所持ポイント以上の値がする商品は検索しても表示されません。』黒いパソコンにはこんな文が表示された。

ざっと読んだだけで分かる。えれえ機能や。まだこんなのが隠れとったんかい。

実のところ、僕はこのショッピング検索をただのショッピング検索だと思っていた。少し便利なくらいの。たぶん欲しているものが1発で表示されて、最も安く売られているところが分かる機能ではないかと。

それがまさかこんな機能だったとは。良い意味で裏切られた。

――さらに次の日、僕はまた黒いパソコンの前に座った。新たな体験に胸を躍らせながら。

初めからチートアイテム、知れば知るほどチートアイテム、そしてさらに1段階進化する。記憶を消す力に辿り着くまでの3つの検索の内の3つ目を検索した日は、そんな進化を目の当たりにする日であった。

「記憶を消す 道具」

右クリックから始まるショッピング検索で行ったこのワードでの

検索は、黒いパソコンを見たことが無いタイプの画面へと切り替えた。

黒でデザインされた、どこかにありそうな通販サイト。利用者は僕しかないはずなのに上部にユーザーIDやお届け先住所が書かれている。下を見れば購入履歴やおすすめ商品の欄も用意されてるだけ、そこに並ぶ商品は何もなかった。

そして僕が望む商品は画面の真ん中に表示されていた。

1つではなく、2行使って画像と共にいくつか並んでいる。僕はその中から僕が最も望むものを選んだ。

深く考えずに押しした購入のボタン。押せば、住所や減少するポイント量の確認画面が表示されて、さらにOKのボタンを押せば……すぐに日付と「お届け済み」という文字が表示された。

あまりにも早い配達。どこに届いたのか分からなかったのだけど、ちよつと視線を逸らして部屋の真ん中を見れば、既にそこに1つの段ボール箱が置いてあった。

入っていたのは先程まで黒いパソコンの画面に表示されていたものだった。プチプチに包まれたそれを持ち上げる時に僕の手は震えた――。

それから1か月とちよつと後、僕は今、その性能を姉に試そうとしている――。

記憶、見た物を覚える。人間が当たり前にしていることだけど、詳細な仕組みは未だ解明されていないと聞く。

どうやって見た物や聞いた物がデータとなって、どのように脳内に蓄えられているかはつきりと分かっているのだ。おそらくは全世界で研究されているにもかかわらず。

そして、それならば記憶を消す方法はもつと謎。

いくつか推測で理論は提唱されているけれど、その理論通りに機能して、人間に使える道具として実用的なものなんてない。研究に研究を重ねて、いつかは開発される可能性はあるだろうけど、それはきつとまだまだ先。

宇宙のどこかの星では販売されているらしいとはいえ、その未知の道具を使うのに僕は抵抗があった。だって、もし使い方を間違えたら危険なものな気がするし、宇宙のどこかで作られたということは地球人用ではないということだ。

黒いパソコンに道具の安全性を尋ねてみたところでは、「安全だ」と言われた。念の為、2回検索を使って聞いてみたが、使い方を間違えたところで死ぬことは無いし、脳に大きなダメージが入ることも無いと表示された。

黒いパソコンが言うのならこれは本当なのだろうけど、それでも使うのが怖い。どうしても来るべきの為に、試しておこうということができなかつた。軽く試そうにも、実験対象がいなかつたのだ。理由なく家族に試すのも戸惑ってしまう。

だから、使う理由が欲しかつた。使うのは抵抗があるけど、向こうから僕の秘密を探ってきたのであれば仕方がない。そんな状況を待っていた――。

僕は姉の疑いの表情からあまり目を離さずに、片手だけで机に付いている鍵付きの引き出しから、記憶を消す道具を取り出す。まるで登山用の酸素缶のような形状をしているその道具、硬い缶の上に円錐状のカバーがついたノズルがあつて、色は全身白色。酸素缶よりは一回

り小さくてスマートだ。

使い方も至ってシンプル。ただ対象にノズルを向けて、上部に付いたスイッチを押すだけ。頭に向けてスプレーを吹きかける感じだと教わった。そうすることで何か記憶を消す電波的なものが発せられるらしい。

詳しい仕組みは分かってないけど、磁場やら電波的な攻撃。それを受けると受けた秒数の長さによってその分直近の記憶から消えていく。いくつか種類はあったけど、今僕が持っている物なら約2秒で1時間くらいの記憶が飛ぶ。ちなみにそのエネルギーの補給はできない、使い切りタイプだ。

僕は待ったなしでそれを構えて、スイッチを人差し指で押す。すつと自分の後ろから取り出して。

姉は避けようとはせず、何のつもりかと表情を曇らせるだけだった。やれるもんならやってみろという態度。僕の攻撃は当たったのだ。

果たして効果はあるのか――。

そんなことを考える暇もなく、姉の曇った表情が一瞬で無へと変わっていった――。

視覚的には何も放出されていない。音も小さく、虫が飛ぶような低く細かい音がしただけ。それでも確かな効果を与えていると姉の表情で分かった。

すかさずスイッチから指を離す。今回の場合長くやらなくても1時間か2時間くらいで充分である。

攻撃をやめても姉は呆けたまま、立ち尽くしていた。自分が何をされたのか分からない。きつと今自分が何故弟の部屋で立っているのかも分からない状態なのだと僕は思った。

僕もどうしていいか分からなくなつた。けど、姉が何か考える前に何かしなないと思つた僕は、部屋のドアを開けて、姉を部屋から押し出した。姉は無抵抗であっけなく部屋から出ていく。

ドアを閉めると……ここ最近で一番大きく心臓が動いていた。手で触れなくても分かる。胸から飛び出そうなほど脈打っている。

本当にこれで大丈夫だったのか。平和的に黒いパソコンを守れたのだろうか。

しばらくそれを考えながら、ドアに背中を預けたままその場から動けなくなった……………。

その日の夜、また姉が僕の部屋に黒いパソコンを探しに行こうという思考に至って、同じ展開になるかと思われたが、もう来ることは無かった……………。

word40 「今年 運勢」①

僕は年末年始の休みをダラダラと過ごしていた。そして今日は1月3日である――。

クリスマスも大晦日も特にこれといったイベントが無く終わった。外出することも無く、家で家族と少し豪華なご飯を食べながら、色々やっている特番でも見て過ごした。

高校2年生としてはちよつと寂しい過ごし方かもしれないけれど、それはそれで幸せだったし、僕自身は自分が寂しい男だとは思っていなかった。

どんな年のクリスマスや正月も一生に一度だけ。それぞれが一生に一度の体験で、特別。何をしたら勝ちだ負けだなんて無いのだ――。

昔見たドラマでそんなことを言っていたおじさんの言葉を僕はなんとなく心に留めていた。

この年にこうやって家族と過ごすのもまた一生に一度しかできない特別な体験。年越し蕎麦や雑煮を食べて寝て、友達からの面白いあけおめメッセージを見て笑ったり、いくつか女子からもメッセージが届いていたりして喜ぶ。それでいいのだ。

あと、どうしても気になって検索して、折原にまだ彼氏がいないことを確認したことも僕が余裕な理由だった。折原さえ無事なら他がどうでも気にならない……。

年末年始期間中の検索はソシャゲのガチャを引くタイミングとかに使った。年末年始のソシャゲといえば豪華なイベントや、性能が飛び抜けて強い「人権」と呼ばれるキャラの追加で熱いもの。

僕もやっているソシャゲで人権を剥奪されないように、すっかり黒いパソコンに指示された時間でガチャを回した。

あとはお正月の豪華な懸賞に応募したり……。でも、色々当ててやるつもりが途中でめんどくさくなってきて、それらはやめてしまった。

休みなのに何時何分何秒にあれをしなければと考えるのが煩わし

かったのだ。ソシヤゲのガチャタイミングに至っては神引きの為に深夜に起こされたりしたし、そうやって結局完璧なタイミングで押せなかったりして、アホらしくなった。

かくして、正月休暇はいつもの休日と変わらなくなった。それよりもちよつとダラダラ度が高いかもしれない。ギターの練習はやっているけれど、筋トレなんかは正月くらい休むかという感じでおぎなりになってる——。

「——明日は皆で初詣いくか」

そんな僕も、こんな父の言葉で、今日はずいぶん外へ出る事になってた。

父が昨日の夜寝る前に家族全員に言ったのだ。明日は朝早くから初詣に行くから全員朝早く起きるようにと。

これは我が家にとっていつものことである。大体1月2日か、1月3日に父がふらつと予定を立てて家族で初詣に行く。

朝早くという予定だったから、家族は皆午前7時には起きた。僕も昨晩は午前1時過ぎくらいまでは起きていたものの、目を擦りながら目覚ましを叩いた。

しかし、朝ごはんの後の休憩や各々の外出準備で気づけば午前9時になっていて、そのくらいの時間にやっと僕ら一家は神社に向かって出発した。これも毎年のことである。

決まって誰かの準備が遅れて、それを見た誰かも——じゃあ自分も遅くていいかと思う。

アホみたいな寒さを嫌がりながらも車に乗り込んで、うとうとしながら車に揺られて……20分ほど……。

1つ山を越えれば、目的地の神社が見えてくる——。

目的地の神社もまたほとんど毎年行くところであつた。ある程度でかい神社で最も近場にある神社、この辺りの人は大体そこへ行くという場所だ。僕の家からは車で20分くらい。それほど遠くない。

僕はそこへ着いて車を降りれば、駐車場に並ぶ車と行き交う人の多さに白い息を吐いた。

分かっていたことだけど、とんでもない人の数である。皆よくこんな朝から人の多い場所に来ると思う。皆分厚い服を着て鳥居をくぐっていた。

今から僕もあそこへ行つて、長い階段を登らなければならぬのか。全くもつてめんどくさい、今すぐ帰りたい……………とまでは思わなかった。なんだかんだ初詣という行事が嫌いじゃなかったからだ。1年に1回くらい人混みにもまれるのも悪くない……………。

「さあ、行きましょー！」

家族の中で唯一楽しそうな母を先頭に僕ら一家は神社に乗り込んだ。

かじかむ手をジャンパーのポケットに突っ込んで歩いた。行き交う人も皆、突っ込むポケットがあればそうしていた。

天気予報通りに冷え込んだ今日は震えるほどの寒さだった。十分すぎるほど着込んでいるのに、肩が上がってしまふ。

だけでも何故か、神社の本殿が見えてくるころには寒いと感じなくなっていた。

昼に近づくにつれ気温が高くなってきたからだとか、体を動かしたからだという訳ではない。もちろんそれらもあるだろうが、そうではないのだ。

お正月の雰囲気というやつだ。すれ違う人が皆笑っていて、それはお年寄りであり子供でもある。並ぶ屋台なんかについている紅白の装飾や「賀正」の文字、線香の匂い。そういった諸々全てからめてたさを感じて、それを周囲と共有できている感覚。

僕はその雰囲気が好きだった。身も心も暖かくなる。

それから僕は初詣の一通りの儀式を家族とこなした。人の流れに乗って次々と。

まずは手水舎で根性手洗いをして、やっぱり冷たいし寒いやと、さつき思ったことを撤回した。身も心も暖かくなるなんて言ったのは嘘だ。こんな寒いのに暖かい訳が無い。

冷え込む時期に初詣なんて言って外出するのは日本の悪しき風習である。

次に、線香の束を大きな釜に投げて煙を浴びるやつを致した。窮屈を感じながら、煙を自分に向かって仰ぐことに何の意味があるのかと、咳き込みながら僕は思った。

いや何かしら伝えられてきたことはあるのだろうけど、きっとその効果は科学的に根拠が無い。

そしてメインと言えるお賽銭からの拍手とお辞儀。僕は一応心の中で今年1年の健康を願いながらも、すぐに考え事を変えて……この何万人もから得られる小銭はどのくらいになるのだろうかと考えてい

た。

近辺の駐車場代やお守り屋の売り上げだってそうだ。一体正月期間だけでどのくらいになるのだろうか。気になる。

気がつくと僕のひねくれ心が仕上がりには仕上がっていた。何事も斜めな視点で捉えてしまう。

てか毎年何万人もの願いを叶えるとか無理ゲーじゃね。神様どんだけ全知全能だよ——。お守りとかも持ってて果たして効果あるのか、中身はどうせただの紙——。

それは黒いパソコンで検索したいことを探す行為でもあった。初詣に来ると気になることがいくつも見つかった。

「よし。皆でおみくじ行こうか。お母さん今年は大吉引きたいなあ」
それからその最たる例がこれである。おみくじとかいう何の信用も持てない占い。

この先の1年の運が、筒を数秒振って得た紙切れ1枚で決まる。冷静に考えるととんでもないことである。1年の長さを舐めているのか。

僕は昔からこういうった占いの類は信じていない人間であった。そこに去年黒いパソコンから得た情報で確信が乗ったものだからますます信じられない。

「ほら、空いたよ。お母さんからやっていい？」

心の中では否定しながらも、大吉が出たら信じてやろうと僕はガチャ感覚でおみくじを引いた。

筒から出た番号の小棚を引いて、1枚の紙を抜き取る——。結果は——。

凶だった。

ほら見たことかと僕は思った。確か去年も凶を引いた気がする。いや一昨年だっただろうか。とにかくどうせ凶が多く入っているのだ。こういうものは。

「ええ。大凶なんだけど」

1番気合いを入れていた母も悪いものを引いていた。父と姉も凶では無かったが、所詮吉と中吉という普通なものだ。

やっぱり全く信用ならない。この僕の運勢が凶な訳がなからう。

大体僕は16歳にしてもう既に大吉を引いた1月にちよつとした勝負をして失敗したり、大凶を引いた帰りにすぐ他のくじが当たるといったことを過去に経験済みなのだ。

「もう1回引く?」

「いいよ凶で」

去年までは凶以外が出るまで引いていたけど、僕はもうやらないことにした。詳しい運勢も読まずに隣にあるひもへ紙をくくりつける。

そして、溜め息を吐いた。さつさとこんな寒い場所から帰宅して寝たい。

本当に信用できるおみくじがあれば引きたいものだけど、そんなものはない。あつたらいいのに……。

いや、待て。あるではないか。僕の部屋の収納の中に――。

帰宅した僕は、昼寝をする前に神社で決めた検索を行うことにした。

「今年 運勢」

それは黒いパソコンをおみくじとして使うことである。黒いパソコンみくじでも命名しようか。絶対精密な黒いパソコンとおみくじという運ゲーがすぐには結び付かなかつただけど、こうすれば信用できるおみくじができるではないか。

買ってもらった今年用のお守りを開封せずに机の棚にしまって、正座で本当の勝負に挑む。

大凶は出ないんじゃないかという自信があつた。だって今のところ何事もまあまあ順調だし、この黒いパソコンが僕の味方をしているのだぞ――。

こんな何でも検索できるパソコンなんてものを持つてる時点で大
大大吉――。

「吉です。」

黒いパソコンは過去最短の文を表示した。そしてまた何とも言えない運勢である。

普通……いや、吉とはちよつと良いくらいの運勢なのだっけ。確かそうだった気がする。

そう思つて納得しようとした僕。しかし、次の瞬間続けて黒いパソコンに表示された文を見て凍りつく……。

「山あり谷ありな1年になるでしょう。」

word 41 「黒いパソコン 材料」①

僕は年末年始休み中のある日、黒いパソコンをいじっていた。机に置かれた黒いパソコンのキーボードを叩いたり、マウスを動かしたりしていた――。

普通のパソコンの場合、パソコンをいじっていると言えば、パソコンを使って好きなように遊んでいるということである。人によってその遊び方は諸々だろうが、ネットサーフィンをしたりちよつとしたゲームをしたり、あるいは動画を見ているだけでもパソコンをいじるに入るか。

物好きな人はExcelやWordを使って作業したりするのが好きという人もいる。そして、それもまたパソコンをいじるという言葉の意味に含まれるだろう。

今さら言うまでもなく黒いパソコンではそのどれもできない。この黒いパソコンは1日に1回しか機能を使えないため、長時間の操作をすることは無いし、できない。チートアイテムであることは間違いないが、普通のパソコンにできて黒いパソコンにできないことも実は多くあるのである。

メールの送受信もできないし、データの保存やコピーもできない。資料のまとめや作成もできない。暇を極めた時にやるソリティアもできない。最近のパソコンにはカメラやマイクも内蔵されているから、電話やビデオ通話ができるけれど、それもできない。

じゃあ僕が今なぜそんな黒いパソコンをあれこれいじっているかというと、黒いパソコンを手に入れてから100日が過ぎているということに気づいたからである――。

それというのも、僕は黒いパソコンを手に入れてから100日が過ぎれば、黒いパソコンを無限に使えるかどうかが分かると言われている。それは黒いパソコンを手に入れてから2回目の検索でのことである。無限の検索を望んだ時に、100日後に答えが分かるといってお告げがあったのだ。

あれから100日と少しの時が過ぎた。そのはずなのに、僕は黒い

パソコンから答えを聞かされていなかった。だから、今こうして黒いパソコンを思いつく限り操作して捜査しているのだ。

キーボードを左上から順に押してみる。普通のパソコンでもどういう時に押して、どういう効果を得られるのか分からないボタン達だ。escと書かれたボタンにファンクションキーという謎の集団。それらを2つ同時、3つ同時に押したりもしてみる。

しかし、どうしても何も起こらないか、ワードボックスにただ入力されるだけである……。こうしていれば、何か分かることがあるかもしれないと思っただが、今まで同じことをやった時のようにうんともすんとも言わなかった。

だとすれば……。

だとすれば……。そうだとするならば……。もしかしたら……。

もしかしたら、僕はもうその答えを知っているということになる。黒いパソコンが言ったことが間違っているとは思えない。僕が黒いパソコンを手に入れてから100日後に無限検索の答えを知ったというの間違いではないはずなのだ。つまり、あの検索結果は真実で僕は既に答えを知っているということ。だと思われる。

実は既に、僕は1つの予想を胸の中にはつきりと持っていた。黒いパソコンを無限に使おうと思っただらあの方法しかないのではないのかというもの。ついこの間思いついたことだ。もしかしたらちょうど100日後の日だったかもしれない。

それが合っているのだ。黒いパソコンで無限に検索できるかという答えと。

一体それがどんなものかと言うと……。

「黒いパソコンで「黒いパソコンの入手法」や「黒いパソコンの作り方」を検索する。」

というものである……。

word 41 「黒いパソコン 材料」②

この黒いパソコン1つで、1日に何度も検索できないことはもう十分に分かった。過ごした時間と僕の勘が言っている。何をしたらって無駄である。これでは24時間に1度しか検索することはできない。そして、1つでできないならば2つ以上使うしかないじゃないか。シンプルな発想だ。

シンプルだけど、僕が今までそんな発想を持っていなかったのはそんなこと無理に決まっているからだ。そんなこと言われていないのに黒いパソコンは世界で1つだけだと思っていたし、2つ以上あったとして一体どんな無理難題の入手法だろうか想像もつかない。

作るなんてもつと無理だし、まずこれを構成しているおそらく希少な材料が手に入りっこない。

だから、考えもしていなかった。黒いパソコンを2つ以上保有するなんて。でも最近そうでもないと思っただの……。思わされる出来事があった……。

ショッピング検索の登場だ。宇宙のどこかから一瞬で物を取り寄せるこの機能。これを使えばどうにかできる気がする。

姉の記憶を消した時に感じた異質な雰囲気。それは初めて黒いパソコンに触れた時のものと酷似していた。地球の人類の脳内から外れた力。これを取り寄せられるのであれば、もしかしたらこの黒いパソコン自体も……。

ここで、ショッピング検索の説明をもう1度読んでみる。一応スマホで写真を撮っていたものだ。

『ショッピング検索は宇宙中にある物の内、商品として売られているものの中から、条件に合う物を見つけ出し、望むならばそれを取り寄せることができる機能です。購入には毎日の検索で貯まるポイントを消費する必要があり、購入にも1日1つまでの制限があります。なお、所持ポイント以上の値がする商品は検索しても表示されません。』その説明はこうだった。

この説明から僕の望み通り黒いパソコンを購入しようと思えば、2

つの条件を満たしていないといけなことが分かる。まず1つ目が黒いパソコンがどこかで売られていないといけなことが、そして2つ目が黒いパソコンを購入する為に必要なポイントを所持していること。

どちらも予想の段階では難しいと感じる。1つ目の条件から考えると、宇宙の全てすら知っているこんなものが宇宙のどこかに売っているとは思えない。さらに2つ目の条件もたぶん無理だ。

どういう基準で値が付けられているかは定かではないが、ショッピング検索で要求されるポイントはけっこう高いのだ。ポイント自体は1回検索をするごとに1ポイント、つまり1日に1ポイント貯められるのだけど、その要求量は買えば安いものでもかなりのものである。

僕は試しにその辺のスーパーやコンビニで売っている物でショッピング検索をしたことがある。僕が好きなたてきしょう・コンソメ味だ。食べたくなつたのに家に無くて、安ければ買いたいと思ったという理由もあるが、それでショッピング検索で日本のものを取り寄せた時の費用はどれくらいか実験した。

どこでも100円くらいで買える、セールをしていれば80円とかもあるだろう。そのくらいのもものなのに、それを黒いパソコンで取り寄せようとすれば5ポイントが必要だった。

タダで貯まるポイントなのでそれでも安いけれど、100円のもので5ポイントなら普通のパソコンを買うのにだって何十年もかかってしまう。

1ポイントの価値が日本円における価値と比例するとも思っていないけど、記憶を消す道具は1番安い僕が持っているものでも40ポイントの値がした。価値のあるものはちゃんとそれなりの値段になっているっぽい。

となると、僕はまずもう少し価値の低いものから検索してみたい。黒いパソコン目的のショッピング検索だけでは、現時点で黒いパソコンは買えないという情報しか落ちない可能性があるから。

それでも別にどちらが先でもいいのだけど、たぶん黒いパソコンが

1つしか無いのは正解だと思うのだ。これも勘だけど、こんなものが2つ以上あつてどこかで売られているなんて、どうしても考えられない。2つ目の条件以上に、1つ目の条件が満たせない。

だから、今日の僕が検索するワードに選んだのは……

「黒いパソコン 材料」

これだ。

材料が何かを調べるのではなくシヨツピング検索。材料となるものがあるのであれば、これでも分かる。

黒いパソコンを作ろうと思えば、それは材料と作り方を黒いパソコンに聞くしかない――。

矛盾しているけれど、そう思うのだ。

黒いパソコンの画面のデザインが変わって、結果が分かる――。

僕はそれを見て「ビンゴ」と、思ったのだった……。

番外編4 「王子 結婚方法」①

「——家で食べる分はこのくらいでいいかね？」

花柄のエプロンに長靴、頭にはサンバイザーといういかにも農家な姿の母が言った。

「いいんじゃない？」

私は食い気味で即答した。

母が指差すカゴには山積みのおさつまいもが入っているからだ。村中の人間に配っても余るくらいある。我が家には十分過ぎることは考えるまでもなかった。

そして、そのカゴの横にはさらに何十倍という量のさつまいも。1トン袋まるまる2つつ分もある。

「今年もいっぱい取れたな——」

「ね——……」

私は今日という日を、1日中さつまいもを掘って過ごした。朝から夕方まで芋を掘っては袋に詰めるという作業を繰り返した。

母と変わらぬ見るからに農家の服装で、長靴と軍手を土だらけにしながら。

そのザ・農作業の成果がこれである。ようやく運び終えた、長屋を埋め尽くすほどのさつまいも。

見ると「たくさん」とか「いっぱい」という感想で埋め尽くされる。ただひたすらに芋、芋、芋という光景。

私は匂いも景色と同じ長屋で、それをじっと見ていた。ゴソゴソと片付けを続ける母を手伝いもせず、突っ立っていた。

今日1日の仕事量が形になっていて、見ていると達成感が心地良かったのだ——。

「疲れたな——。ほら、いくぞ。お父さんが待つとる——」

ここはある自然豊かな地域の農業が盛んな地区だ。こういうと聞こえが良いけど、一般的にはド田舎だとか過疎地域だとか言われる場所。

軽トラの窓からは、見渡す限り山と畑しか見えない。進む道のアス

フアルトも荒くて、街灯もろくに立ってない。テレビもねえ、ラジオもねえ……というほどではないけれど、あの歌と一致している箇所がいくつかある。

そんな場所に私は住んでいた……。

別に嫌と言っている訳ではない。生まれた時からここに住んでいる私にとっては居心地がいいし、経済的には充実している。今のご時世、田舎だつてインターネットは普及しているし、宅配で最新の電子機器も届く。

穏やかな父と母の元で、のんびり田舎生活。不自由は無かった。

ただ1つ問題があるとすれば私が26歳ということだろう。

ほとんどが50歳以上の高齢者の村で、私はピチピチの26歳。何がダメかって出会いが無いのである。

私が結婚したくてしたくてしようがないのに、相手がいらないと言っているのではない。親からも近所のおじさんお婆さんからも「そろそろ結婚相手が欲しいね」と言われるのが鬱陶しいのである。

私は何も焦っていないのに、日常的に寂しい子だと扱われる場面がある。さすがに深刻な顔をされる訳ではないのだけど、笑顔でさらっと言われるのだ。それが逆に鬱陶しい。

結婚への不安や将来への不安なんて全く無かったのに、そのせいで最近、私は寂しい女なのだろうかとふと考えてしまうことがあった。

26歳と言えば確かに結婚を考え始めるくらいなのかもしれないし、少なくとも彼氏や身近に思い人がいたりするのだろう。添い遂げる相手を選ぶ真剣な恋愛を楽しめる時期だ。それなのに私には異性どころか、身近に同性の友人すらいない。

これってやっぱり寂しいことなのだろうか……。だとしたらそれって誰が決めたことなんだろう……。

私は別に寂しくない。私本人が寂しくなかつたらそれは寂しい女ではないということじゃないだろうか。

それに……。だって私にはちゃんといふのだ……。運命の赤い糸で結ばれた相手が……。

畑から10分くらいで家に着くと、母がすぐに取れたてのさつまいもを料理し始めた。私も手伝おうとしたんだけど、母が「今日はたくさん疲れとるじやろうけ私1人でやるよ」と言ったので私は父と居間でテレビを見て待った。

19時のバラエティが始まる前にはさつまいもの天ぷらがテーブルに置かれた。私はそれを1個つまみながら食卓の完成を急ぐ。

ちょうど良い時間にご飯ができた。どうでもいいニュースがやっている内にお酒も一緒にテーブルに並べよう。これから見たいテレビがあるのだ――。

もちろんさつまいもだけでなく、海老やちくわや他の野菜の天ぷらもあった。私はそれを1つずつ口に運んで、所々で好きな味のお酒を顔上げて飲んだ。

色んな具材の天ぷらがある中でもやっぱり一際舌をうならせるのがさつまいも天ぷらだった。この辺りの土地はさつまいも作りに適した気候や土壌をしていて、どこでも作れるさつまいもとは全く質が違うさつまいもが作れる。

糖度がなんと10度も違う。家で取れた、取れたてのさつまいもがこんなに甘いことは声を大にして世の人々に伝えたい。値段も安いさつまいもの数倍するが、買う価値はあると思う。

甘い甘い……。特別で深みのある甘さだ……。

食事が終わって、見たいテレビも終わると、私は一番風呂を頂いた。いつも父が私に譲ってくれるのだ。私は遠慮なく長風呂をした。芋掘りで疲れた身体をしっかりと癒さなくてはならなかった。明日も農作業があるのだし……。

寝るまでの準備まで片付けて、私は2階にある自室に入った。明日までにやるべきことは何も無い。明日以降の不安も全くない。気持ちの良いプライベート時間への以降だった。

とても幸せだ。なんだかんだこの瞬間以上のものはない――。

部屋に入った私は、私が習慣にしている儀式を始めた。

まず私の部屋の壁の真ん中に貼られているポスターの前に正座で座って、そのポスターを満足がいくまでずっと見つめる。

そして、心の準備ができれば、ポスターに写った1人の男にキスをするのだ。

ああ、ドキドキする。きっとあなたもいつか私と同じ気持ちに……。

「愛してるわ……私の王子様……」

番外編4 「王子 結婚方法」②

そのポスターは、ある男性アイドルグループの、あるメンバーの顔が、アップで写ったポスターだった。

王子様という言葉がよく似合う整えられたセンター分けの髪型に、誰が見てもイケメンだと答える中性的な顔立ち。

所属するグループではセンターポジションを務めている。そんな彼が私の王子様だった。

もう何年応援し続けているか分からない。デビューしたばかりの人気の無いころに、たまたま付けたローカル番組に出演しているところを一目見たときからファンだった。

慣れないテレビ出演であどけなく笑う彼。何だか見た瞬間にピンと来たのだ。この人は私の好きなタイプの人だと。

そして、その時既に「この人と結婚したい……」とも思った……。正に運命的な出会いである。一目見た瞬間にここまで私の心を奪えるなんて運命の相手以外あり得ない。

生まれる前から神様に結ばれると決められていたので、あんなときめきが発生したのである。

あの日から私は彼の虜だ。特に趣味の無かった私は、使うところの無い金でグッズやCDを全て買ったし、彼以外の男には見向きもしなかった。

握手会で会ったこともある。目一杯おめかしして彼の前に立った私を、彼は目を輝かせて見てくれた。

名前を覚えてと言ったら「約束する」とも言ってくれた。

その日の夜にSNSでメッセージを送ったら返信もしてくれたのだ。そして、ちゃんと私の名前を覚えていてくれた。

それはまだそこまで人気の無いときだったからのことで、今ではメッセージを送ることもできないけれど、きっと今でも彼にとって私は特別なファンだと思う。確信している。

だって、こんなに愛しているのだから。絶対に私が彼のことを一番愛している。だから彼に1番相応しいのも私なんだ――。

いつもの儀式が終わった私は、疲れた体をベッドに寝転ばせた。そして、子供の時から一緒に寝ているぬいぐるみを抱いて、スマホの電源を付ける。

私は今日も彼の動画や、彼が所属するグループの動画を見ていった。画面に顔を近づけて、何度も視聴した曲のPVや録画したバラエティ番組を気分を選んで。

動画を見ている最中は頭の中で彼との甘い生活を妄想する。もし今も私と彼が付き合っていたらどんな生活をしているのか考えるのだ。それは何度やっても飽きない。

もう色んなシチュエーションで何度もデートしているし、いくらか喧嘩して仲直りしたこともある。1度行ったデートを思い返すこともあった。

それなのに飽きずに、どんどん新たなエピソードが私の胸に刻まれていく。私の中にある彼との大切な思い出の日記。そのページを増やしていくのが私の日課だ。

そのまま数時間ほど過ごせば、スマホの電源を切った。気付けば日付を跨いでいて、夜はすっかり静かになっていた。父も母もとくに寝ているし、こちら辺で夜中に走る車は無い。

虫の声は微かに聞こえるけれど、夏のカエルの声に比べたらよっぽど静かである。

私は眠るために電気を落とす。すると、先ほど動画を見ていた時とは打って変わって、私の心も暗くなった。

私の中にいるもう1人の私が、現実を見ろというのだ。これも最近のことである。両親や近所の人から結婚しろと遠回しに言われるからだ。

ずっと疑っていないなかった。今でも疑いのような無いことだけど、時折不安になってしまう。私は本当に王子様と結婚できるのかと。

できるはずだ——。不安になる度に言い聞かせた。けれど、徐々にそうやっても打ち消せないほど不安が大きくなっているのを感じてしまっている……。

一晩明けて翌日の朝も、農作業の為に畑に行く前に両親からお見合

いの話をされた。私のいないところで色々と話を進めているのだ。

「そういうの私嫌だから」

お見合いの話をされる度に私は言った。絶対に試しに会うなんてこともしたくない。

それは彼への裏切りだし、少なくとも両親に用意された恋愛なんて死んでもごめんである。ロマンチックとは正反対だ。

そんな悩ましい生活がまた数日続いた――。妄想しては、また不安になって、また妄想する――。芋を触っている時も、お風呂に入っている時も――。

そして、ある休日の朝のことである。私が黒いパソコンと出会ったのは――。

番外編4 「王子 結婚方法」③

日曜日の朝、午前11時に起きた私は、顔を洗うよりも朝食を食べるよりもまず先に、1つの段ボール箱を開けた。

それは前々から楽しみにしていた王子様の公式グッズが入っているものであった。数ヶ月前前に予約していたものが今朝届いていたらしくて、母親が受け取り私の部屋の前に置いておいてくれたのだ。

ルルン気分分で部屋に持ち運ぶと、すぐにテープを剥がした。

人形だとかストラップだとか服だとか、色々なものが入っているはずで、また棚に並ぶ私のコレクションが増える――。

しかし、段ボールを開けるとまず目に飛び込んで来たのは、黒色のノートパソコンであった。黒色のマウスもセットで。

「ん……？」

身に覚えのない配達品。眠気が飛んで、私は何でこんなものが入っているのかを考えさせられた。

何これは。私はこんなものを頼んでないはずだ。もしかしたら間違えて、注文してしまったのだろうか。それとも……父か母が頼んだものが一緒に入っていたのか……。

「お母さんかお父さん通販でパソコン買った？」

とりあえず私が注文したグッズもちゃんと届いていることと、注文履歴にパソコンが無いことを確認した私はリビングに行つて両親に聞いた。

「してない。知らんよ」

しかし、父と母から返ってきた言葉は全く知らないといったものであった。2人も首を横に振った……。

じゃあ一体この黒いパソコンは何だろう。私は何だか嫌な予感がしていた。

何が変わって、そのパソコンは包装されていなくて、充電ケーブルみたいなものも付いていないのだ。

私は思いきってそのパソコンを起動してみることにした。そして、

開いてみるとさらに不安が大きくなる。

パソコンは最初から電源がついていた。

画面も真っ黒なところにワードボックスがぼつりというだけ。ただ使用するユーザーにパスワードを求めていた。

「このパソコン何w」

私は冗談のつもりでキーボードを操作して文字を入力した。

きつとパスワードが違いますと言われるだけ……そう思っていたのに黒いパソコンは私の言葉に返答した。

「このパソコンにはありとあらゆる全ての疑問の答えが入っています。あなたは気になる言葉を入力することでその答えを知ることができますでしょう。しかし、それにはルールがあります。答えを検索することができるのは1日に1度だけです。1日に1度であればどんな質問にも答えることができます。宇宙のことでも、未来の事でも。そう、このパソコンならね。」

——その黒いパソコンの性能が本物だということはすぐに分かった。

私が昔好きだった人や私の貯金額なんかを、黒いパソコンはいとも簡単に言い当てた。普通のパソコンで調べても分かるはずのないことだ。

最初は危ない気がしていたのに、それがとんでもない性能をしていると分かったら、あっさりとその不安は消え去った。

何だ。悩む私に神様が与えてくださったものだったのか。やっぱり私は天に愛されている。

「王子様 私のことをどう思っている」

パソコンの性能を信じた私は手始めにこう検索してみることにした。

他にも検索したいことは山ほどあるのだけど、まずはこれ。黒いパソコンの詳細についても、王子様の様々な個人情報も後回しにして、最近の悩みを解消したかった。

その為に私の元へ黒いパソコンは現れたのだとも思っていた。

しかし、表示された結果を見ると、私は目を疑った。

「彼はあなたのことをどうとも思っていない。あなたの存在を認識していません。」

衝動的に目の前のパソコンを壊してしまいそうだった。そんな訳がない、やはり嘘をつくものだったか。

そう思ったのだけど、私の中の私は黒いパソコンのほうが正しいと分かっていて……………悲しみが脳まで達すると私は泣いた。

今までに無いほど、長く泣いた。さすがに叫びはしなかったが、両親が起きている時間ならすすり泣く声でばれたと思う。

我慢できなかった。どうしようもなく、こぼれ出るものを抑えられ無かった。私はずっと愛していたのに、相手からは愛されていなかったなんて悲しすぎる。

初めて経験した。これが失恋か。

「……………はっ……………ははっ……………」

泣き疲れると、今度は笑った。どれだけ泣いたか分からないけど、日付が変わるほど時間が立ったのを確信していて、自分の中で悲しみに対する結論が出たのだ。

こんなこと許されるはずがない。諦めてやるもんか。私のことを知らないなら、思い知らせてやるまで。

「王子様 結婚方法」

私は絶対にあなたと結婚する——。

番外編4 「王子 結婚方法」④

「これはかなり難しいことです。このパソコンの検索結果で指示されることをミスせずにクリアしていく必要があります。けれど、不可能ではありません。今から表示される文章をよく読んでください——」
そういう言葉ではじまった検索結果。私は涙で滲む目でそれを読んだ——。

読み終わるまでにさほど時間はかからなかった。それが計画の大まかな概要だったからだ。

まず王子様と結婚するまでには約2年の時間が必要だと言って、黒いパソコンは本気でそれを望むなら定期的な検索の使用を私に求めた——。

検索結果を要約するところだ。

①計画の期間は約2年で重要なのはその内最初の1年、その間は微妙に変化する状況に対応する為、数日おきに「王子様 結婚方法」と検索すること

②数日おきに指示していくことは過酷な内容になることもあるが、完璧にこなす為に精一杯努力すること

③全てクリアできれば、1年後にさつまいも畑で王子様の方から積極的に迫ってきて告白されること

④当面の目標はダイエットと美顔トレーニング、そして勤務する会社で芋掘り体験の事業を強化すること

——過酷な労働やダイエットが必要だと分かった時も私の覚悟は全くぶれなかった。きつと愛が試されているのだと思った。私の中の愛と私がこれから生み出せる愛、その全てを集めてあなたに届けに行くと誓った。

夜が明けて、その日の朝から私の計画は始まった。

黒いパソコンからまず買えと指示されたのがダイエット器具と美顔器であった。私の容姿が足りていないと言われてみたいで腹も立つけど、最近太ってきて顔にたるみが出てきたのは私も思うところで

あった。王子様と結婚するまでにはやろうと考えていたのだ。きつかけができて良かった。

通販も駆使して道具を揃えるとさっそく毎日のトレーニングを始めた。

ダイエット器具や美顔器の使い方にも細かく指示があった。今まで1度も使ったことのないような筋肉が刺激されている感じがして、そのトレーニングはかなり体を苦しめた。

でも辛くは無かった、王子様の事を思えば、あの人の為ならどんな痛みにだって耐えられる。私は昔からDMなんだ。

もう1つすぐに始めなければいけなかったのが私が勤める会社で行う指示だった。私は1年中畑で農作業しているのではなく、近くの会社に勤めていて、忙しくない時期のほとんどをそこで働いて過ごしていた。一応OLと呼ばれる人種なのである。

さつまいもの自社生産と、地域の生産者達のさつまいもを集荷して加工・販売を主にする会社だった。とにかくさつまいもで儲けて地域を支えることを目標としている場所。他にもさつまいもを用いたスイーツの開発や、街の方で1つカフェを経営している。

私を含めて正社員12名のアットホームな会社だ。この地域のあな人物が1人で費用を負担し皆をまとめ上げて起業した。私が小さな子供の頃の話だ。この会社ができてから私の村のさつまいも農業は劇的に変わったらしい。収入も生産技術も……成功する人はどんな環境でも成功する。

収穫時期はさすがに忙しいので無理だったが、私はそこで芋掘りの事業を強化しなければならなかった。その為の下準備だろうか、職場での立ち回りを黒いパソコンは色々と私に指示した。

主に積極的に仕事を行うことだ。何事も自ら作業をする。今までの私はなるべくサボるように仕事をしていたので真逆のスタイルである。

地域の年齢の割合と同じくおじさんおばさんが多い会社でもっとこうすればいいのと思うことは以前からもよくあった。でもめんどくさいから言わないし、やらなかった。そういうことをどんどん

やった。

もちろんきつかった。けれど、そんな仕事とトレーニングの日々を1カ月過ごすだけで私は劇的に変わっていた。

容姿は別人になったのかと思うほどだ。鏡に映る自分の顔を見てこんなにかわいいと感じたことは無い。

農業でも芋、勤める会社も芋の会社、田舎住み、そんな超が付く芋女にはとても見えない。自分ではそう思っていなかったけど、変わったからこそ言える。今までの私はブサイクな芋女だったのかもしれない。

じっと見ていると自分でどきりとする目。すっきりした輪郭。しかも、変わったのは容姿だけでなく内面もだった。いつからか失っていた自信が自分を見ていると沸々と湧いてくる。いや頑張っている自分に自信を持って容姿も変わったのだろうか――。

忙しくしていると時間はすぐに過ぎていった。進む速度が変わったのかと思うほどすぐに。王子様との結婚方法を検索しなくても良い日の検索は、数少なくなつた。プライベートな時間に使った。

ある時に知つた黒いマウスを使う動画検索で王子様に関する色々な動画を見るのだ。

正面から見た王子様の食事シーンを画面に映して一緒にご飯を食べたり、寝顔を映して一緒に寝たこともあった。いつかそんなことをしなくても近くに感じられる日を夢見て、元気をもらった。

個人情報も調べに調べ尽くしたし、画像検索で彼の裸の隅々までも見させてもらった。

凄く興奮した。彼はあまり裏表のない人だった。テレビやラジオで話している内容はほとんどが事実であった。実は彼も実家が農家で、食べ物などの好みも私と似ている。そういうところが大好きだった。

私に黙って交際していた女性もいたけど、今は特定の女性はいないらしかった。

それならばギリギリ我慢できた。最終的に私の物になるのであれば、彼のことを信じようと決めた。

さらにそのまま1カ月2カ月と時間が過ぎた。何もかも上手くいっていた。上手くいっていると黒いパソコンも言った。

年が明けてさつまいもの販売が一段落した頃に、芋掘り事業を強化しようと企画している時は本当にきつかったけど。忙しすぎて……。

土地も費用も労働力の確保も全て自分で企画して、やり手の社長を納得させる必要があった。もちろん全て黒いパソコンがやったことではあるけど、それでも自分で勉強しなければならぬことも山程あった。

しかもよく分からない指示もあったのだ。これをやることでどういう効果があるのか分からない指示。突然週末に東京に行つてこの場所に座つていなさいだとか、インターネットの掲示板にこういうことを書き込みなさいだとか。

私はそれらを分からないままとにかくやった。黒いパソコンに聞いても王子様と結婚する為に必要なことだとしか教えてもらえないし、そう言われるとやるしかなかった。

けれど、頑張る私にはどんどん味方も増えた。職場の人たちが私を見る目は変わったし、最終的に社長も私のやることを老人とは思えないほどの器量でサポートしてくれた。

そう、何もかも上手くいっていたのだ――。変わったのは約束の1年まで残り3か月に迫った時の事である――。

「細く頑丈なロープと、90L業務用の黒いビニール袋、深い穴が掘れるスコップを購入してください。」

そんな指示が私にあった。

番外編4 「王子 結婚方法」⑤

「あなたの王子さまは現在ある女性と交際しています。1週間後、これから言う場所で、ある時間にその人物を殺して、死体を特定の範囲に埋めてください——」

次の指示ですぐに直接的なことを言われた。不穏な気配を感じていたのだけど、やはりそういうことだったらしい。

初めに感じたのは怒り。確かに王子様のことを信じると決めてから、交際している女性や親しい女性の検索はやめた。見ても腹が立つだけだから。

だけど、よく動画検索で王子様の様子を覗いていたのに知らなかった。一体いつから付き合うなんてことをしていたんだ。

気付かないうちに浮気をされた気分である。浮気は良くない……浮気は良くないわ。シヨックよりも怒りが大きい。握る拳の手に爪が食い込んだ。

しかし、殺すのか……。その交際相手を……。私の手で……。

殺意は湧く。ぶっ殺してやりたい、死んでほしいと思う。けど、心で思うだけで実際に私が自らそれを行うとなると戸惑ってしまう。それはさすがに簡単にやると決められない。

運命の日まで残り3か月。もうゴールは見え始めた。このまま黒いパソコンの言う通りに行けば、きっと王子様と結婚できる……。だから、もう後には引けない。

でもでも、殺さなきゃダメなのか。他に方法は無いのだろうか。別に殺さなくてもどうにかして別れさせるだけ、それだけでいいんじゃないのか。

いや、もし別の方法があるのなら黒いパソコンはそれを示してくれるだろう。長い付き合いで私は分かっていた。この黒いパソコンは本当に私のことを分かってくれている。常に私が求めるもののなかで、最も良いものを教えてくれた。見せてくれた。

だから、殺すしかないのだ。それしか王子様との結婚に辿り着ける方法は無い。最初から難しい事だと、険しい道だと分かっていたじゃ

ないか。何を今さら怯える必要がある。

そう。これは愛なんだ。2人の幸せの為ならなんだってできる。2人の為、彼の為、邪魔者は私の手で殺してあげないと……。

それから殺害決行日の1週間後までは特にこれといった指示は無かった。ただその日までの準備をする時間であった。殺人のやり方とその場所をしっかりと頭に入れておく、心の準備もしておく、そしてあらかじめ死体を埋める穴も軽く掘っておいた。

あとは、以前から指示されていた化粧のやり方も教わった通りに練習した。たぶん彼が好きになる為の化粧の方法だと思うのだけど、化粧に関しても黒いパソコンは細かく指示してきた。本当に細かく、でも練習の甲斐あって随分上手くなったと思う。

髪型だってそうだ指示された通りのものにした。この顔を見て彼が私に惚れるのだろうと考えると興奮する。もうそろそろ会えるんだと実感できた。

——そして、殺人を指示されてから1週間が経った。

あまり眠れない夜を過ごした私は、心を落ち着ける為に慣れた化粧をした。鏡に映った自分の姿を見て、何度何度ももう後には引けないと言い聞かせた。1週間前にも思ったことだ。やるしかない。

昼前に母へ「遊びに行ってくる」、それだけを言っておいた車だ。昨夜のうちに必要な道具を乗せておいた車だ。

母はどこに行くのかも何をやりに行くのかも聞かなかった。笑って「いつてらっしゃい」と言った。これから私が人を殺しに行こうとしているんだなんて微塵も思っていなかっただろう。

高速度道路を走らせて——私は東京に向かった——。私が住むド田舎から大都会東京までは何時間もかかる。その間ずっと、私は落ち着かなかった。ただ座っているだけなのに、息がしづらくて、そわそわした。

その日の夜に指定された場所に着いた。ここで相手を殺すという場所だ。思ったより移動に時間がかかってしまったけど、問題ない到着時間だ。

殺人の方法は至ってシンプルだ。この人通りが少なそうな路地で

ターゲットの首をロープで、気を失うまで絞めて、今私が勝手に車を停めているアパートの駐車場まで運ぶ。

そこに私がやったという証拠を残さなければ細かいやり方はどんなものでも良いらしかった。時間にも8分という余裕がある。車にはロープや黒いビニール袋以外にもナイフや、何故か家の倉庫にあったスタンガンが乗せてあった。黒いパソコンに言われるまで家にあると私も知らなかった物だ。

相手の女性は今日の深夜に、かなり酔った状態で1人でここを通るのだそう。しかも、居酒屋にスマホを忘れた状態で。たぶん今日しかない絶好のチャンスである――。

その時が近づいてくると逆に私は落ち着いてきていた。東京と言えどその場所が静かで、辺りも暗くなったので大丈夫になってきた。人目を感じないからだ。酔い過ぎない程度にお酒も飲んだし、やれそうな気がする。

人を殺すと言っても酔った状態の赤の他人。いつも遠い地で暮らしていた、私から遠い存在。さつさとやって、さつさと忘れてしまおう。これが最大の試練なはずだ。これを乗り越えれば私は……。

王子様と交際している憎き女が道を通る数分前になると、私は車を出て近くのマンションの陰に身を潜めた。手にはロープ、ポケットにはその他の道具を入れて。

静かな暗闇にやがて、ヒールで歩く足音が聞こえてきた。少し不安定、不規則な足音はふらついているような感じがする。

絶対にこいつだと分かった。ロープを握る手に力を入れる。都会で過ごしている女に力で負けるはずはない。

長い運命の赤い糸を辿って……あなたに会いに行く……こいつを殺せばさらにぐつとあなたに近づける……。

私は後ろからそつと近づいてその女の首にロープを回した。嗅いだことのあるシャンプーの匂いと酒の匂いが香る。

体を後ろに反らせながら、思いつきりロープを絞った。一切手加減なしに。躊躇だけはしてはいけない。

「あ………」

最初だけ短く声にならない声を出した。女の体は少しだけ浮かせた。けれど、私に対してそれほど抵抗はしてこない。ただ必死に両手でロープをどけようとしていた。

いとも簡単にその瞬間は訪れた。女が全く動かなくなつてぐったりとした。私は息が上がつてもいかなかった。

私は女の上半身を抱え、引きずりながら車まで運んだ。その間は何も感情を持っていなかった。何も考えないようにしていたのだ。後ろめたさも喜びも持たない。全て終わるまでは。

後部座席のドアをどうにか開けて、私の体重もかけながら動かなくなった女を運び入れた。ドアを開けると勝手にライトが点いたので焦った。けど大丈夫。あとは扉を閉めて……トドメを差すだけ。

そう思つて開いたドアへ手を伸ばす……。しかし私はその時、体の動きを止めた――。

女の顔を見てしまったのだ。目を見開き、口をだらしなく開けて横たわる女の顔。それに衝撃を受けて、体が固まってしまった。

自分がやってしまったことを痛感してそうなのではない。恐ろしかった……とは言つても、ただ表情が恐ろしかったのではない。

似ていたのだ。その女の顔が……私と……。

番外編4 「王子 結婚方法」⑥

鏡を見ているかのようだった。私も驚いてだらしなく口を開けたから、表情も同じ。目も口も……眉毛の形もそっくりそのまま。化粧を落とせばまた印象は変わるかもしれないけど、少なくとも今は私そのもの——。

私はその顔をじっと見ていると、目眩がしてきた——。

そこから先のことは良く覚えていない……。

気が付くと、女の死体を山に埋め終わっていた……。

走り出した私を、もう自分でも止めることはできなくなっていた……。

ただ一目惚れしてもらえるものだとばかり思っていた。このダイエツトや化粧は彼の理想の女性になる為の工程だと思っていた。

けれど、違っていた。彼が惚れた女になる為のものだったのだ。

そうとも知らず、ずっと私を見つけて喜ぶ彼の姿を想像していた。ずっとその笑顔が私の力の源だった。

でも、このまま行けば彼は私を見つけているのではなく、行方不明になった恋人を見つけて喜ぶのだろう。

黒いパソコンが用意したシナリオの全貌がようやく理解できた。そうか、そうだったのか。黒いパソコンはさつまいも畑で彼の方から迫ってくると言っていたが、考えてみれば一目惚れだけでそうなるのはおかしい。

彼は私と結婚するのではなく、私を好きになるのではなく、以前の恋人の生き写しを好きになるのだ——。

だけど、それでもいい。

それでも私は彼と結婚したい。人の命を奪って、不本意な出会いであつても構わない——。辿り着くまでの形なんてもうどうでもいい——。

予想通りと言えば予想通り、次の日からは黒いパソコンで「王子様結婚方法」と検索すると、私が殺した女についての話を聞かされた。外面だけでなく、内面もその女に近づけると言うのだ。

女は少しだけ人気な声優だったらしい。絶賛売り出し中の若手声優。王子様とは地元が同じで、趣味も似ている。私が殺してから1週間後にはネットでニュースにもなっていた。行方不明になった女性声優がいると。

私は彼女の考え方や性格を知って、そうなるように考えながら生きるようになった。一朝一夕で身につくものではないので努力が必要だったが、知っているだけでも随分違うらしかった。必要な時に彼女だったらと考えて行動すればいいのだ。黒いパソコンはそう言っていた。

涙は毎晩流れた。身体的にはもうそれほど辛くなくなったのだけど、今度は精神が消費されるようになった。自分でも自分が分からなくなっていた。ただ、王子様と結婚したいそれだけだった。

この気持ちをどうにかする方法も黒いパソコンで検索したけれど、答えを示してはくれなかった。都合良くいらぬ部分だけ記憶を消す方法は無い。未知の力に頼らず、現実的な方法で精神安定剤を飲むようなことをするのもダメ、酒に溺れるのもダメ。

私の内面や外面が変わってしまって、彼の元カノの生き写しでは無くなるからだ。私はただ、純粋な心を持った田舎娘を演じ切るしかなかった――。

ゴールにはある時、すつと辿り着いた。黒いパソコンに言われた通りに芋掘り体験案内のサイトを作成していたのだが、そこへ書かれた電話番号へテレビ局から連絡があった。

他のどの芋掘り体験案内よりも分かりやすく惹きつけられるサイトに仕上がっていると自分でも思っていた。いとも簡単に獲物が罠にはまった。

あとは待つだけになると、随分心が楽になっていた。苦しみが消えたわけではないけれど、ついに握手会以外で王子様に会えると思うと

楽しみでしよすがなかつた。

待ち焦がれた……。本当に……。頭の中が王子様のこと一杯になつて、その時だけは他の事を忘れられた――。

王子様が所属するグループ全員で芋掘り体験に来る当日、私は今まで1番丁寧化粧をして……。殺した女と全く同じ顔になつた。実際に見たから、完成形が頭にはつきりとあつた。だから、完璧に仕上がつたのだ……。

さつまいも畑で……。私を見た王子様は、瞬く間に目を丸くした。

私はその日のうちに王子様とキスをしてしまった。

それでも魔法は解けなかつた。

word 42 「オナ禁 効果」

同じ高校に通う天使、折原さんがいる軽音楽部へ乗り込む日を来週に決めた――。

そして、僕はその日までオナ禁することも決めていた――。

オナ禁、とはオ〇ニー禁止の略である。つまり自慰行為を一定の期間我慢する。

そうすると何が良いかと言うと、好き放題やる日々と比べて体調が良くなるのだ。常時やる気が沸々と湧き上がり、疲れにくくなった。集中力が上がった。目覚めが良くなる。

それと何より、容姿も良くなる。肌質や髪質が良くなり、顔つきも普段よりシユツとする。

だから、僕は好きな人に近づく勝負の日まで、そのオナ禁をすると決めた。

ただ、その効果のほどについては、軽く調べてみたところ医学的根拠が無いらしい。今述べた素晴らしい効果は全て、どこかの誰かが言った個人の感想である。もしかしたら、全く効果は無いかもしれない。

それでも僕がやると決めたのはもちろん、恋の為だ。この恋を叶える為なら効果の怪しい努力だってなんだってやってやる――。

と、大袈裟に言ってみたものの、そんなに辛い事でもないだろうし……。

そんな気持ちで僕のオナ禁生活は始まった……。

――1日目、2日目と、特に問題なく我慢できた。

自慢じゃないが……僕は大体2日に1回のペースでそれを行う。部屋に1人である時にやりたくなれば、我慢する理由が無いからだ。1日しなかったら、次の日は絶対どこかでやりたくなって、そういうペースになる。

だから、2日我慢するくらいであれば全く苦しむことなく、余裕で

クリアすることができた。一時だけ少し踏ん張れば良かった。

——3日目からである。問題が発生したのは。

ふとした瞬間に指が勝手にスマホを操作して、エロ画像のフォルダを開いたのだ。そして、それを見た僕は落ち着きを失った。一度握ってしまえば我慢できないという興奮を覚えて、そうならないように手に無理やり別の事をさせなければならなかった。

爪切りだったり、耳かきだったり、ゲームだったりを僕はした。

数時間おきにそんな時間が僕を襲った。けれど、まだ我慢できる範囲であった。

——4日目、5日目も同様である。

ダメだと分かっているのに、勝手に手が、頭が、そっちのほうへ向かってしまうのだ。しかも時間が経つほどその力は強くなる。学校や家のリビングにいる時はそうでもないのだけど、1人になると落ちて着かなくて、無意味に足をバタバタさせてしまったりした。僕の中に悪魔が生まれてしまって、そいつがどんどん成長しているのだ。

悪魔は僕に言う。「もう楽になつてしまえ」と……。

しかし、天使の為に、僕はまだその悪魔と戦った。戦うことを決めた……。まだいける……。まだ僕は……。

——6日目、決めたのにも関わらず、すぐに山場が訪れた。

もう、我慢できない。そう思う瞬間があった。何もしてないのに僕の僕が勝手に立ち上がり、かつてないほどのエネルギーを持っている。もうエロとかではなく、しなければならぬ状態だと僕は思った。

本当にオナ禁なんてものに効果があるのかと思いついて、スマホで検索することでやめる理由を探す。絶対に効果が無いと分かれば、こんなことをする理由はないのだ。

けれど、若干効果のほどを自分自身感じ始めていた。やる気だとか集中力は逆になくなったと思うけれど、今日の寝起きはすこぶる良かったし、下にエネルギーが溜まっていることで自信はでてきた。

だから難しいところなのだ。効果を感じてはいるけれど、僕の僕を見る限りこれ以上は逆効果な気もする。そう自分に言い聞かせてし

まう。さすがは6日目、悪魔の数字。僕はもう自分の力だけではどうしようも無くなっていた。

——そして、今。僕はその決断を黒いパソコンに委ねることにした。

「オナ禁 効果」

このワードを検索して、ちゃんとした効果が表示されれば我慢するし、表示されなければやらない。そういうことにした。

もうズボンの上からでも分かるくらいにギンギンだったので、僕はすぐにEnterキーを押す。

そして、スマホのエロ画像フォルダを開く準備もしていた。

「少なからず効果はあります。まず、最も大きいのは効果を信じて実行し、成し遂げることで、実際には効果が無いものでもその働きを示すという現象が人の体にはあります。足が速くなったと思えば、実際に足が速くなりますし、熱いと思えば入っている物に触れると火傷してしまいます。自慰行為を我慢することも同様に——」

長たらしく始まった文章、ちゃんと読まなければならぬものであった。

しかし、極限状態にあった僕は一瞬でその中から自分が求めている1つの文章だけを見つけ出した。

「——。適度にするのが最も健康に良いです。——」

ありがとう。その言葉を待っていたぜっ……。

番外編5 「幼なじみ 死姦」①

俺はある朝目覚めると、パソコンの電源ボタンを押した。

電源を点けたのではない。切ったのだ。

ベッドの上、枕元で点けっぱなしのまま眠ってしまったノートパソコンの電源を……少々乱暴に切った。

画面からのライトが眩しく感じたのである――。

そして、またすぐに目を閉じた――。

――二度寝から目覚めると、もう昼と呼べる時間になっていた。

締め切ったカーテン越しからでも明るい光が部屋に入ってきている。6月初旬の気候が部屋の気温を上げていて、そのせいでじんわりと寝汗をかいていた。もう夏になる季節が、28度のクーラーを見事に突破している。

体を起こすとまずは……丸めたティッシュ達、チューハイの500ml缶が2つと、弁当の空き箱、寝る前に散らかした物を片付けていった。投げられる物は、ゴミ箱に投げ捨てて。

いくつかは外れて、床に落ちたけれど、拾うのが面倒なのでそのままにした。これを何度か繰り返した結果、床に溜まったゴミ達が、いつからか俺が住むマンションの部屋の足場を奪っている。

壁に肩をぶっつけながらトイレへ向かった。いつも通り開けっ放しのドアを通り抜けて用を足す。そうしながら、ここもさすがにそろそろ掃除しなければとぼんやり思う……。

あくびが出たので、またベッドに寝転ぶ。たぶん二度寝と合わせて合計10時間くらいは寝たと思うのだけど、まだ眠い。寝すぎて眠いというやつだ。昨日飲んだ酒も、まだ抜けていない。その気になれば、さらに明日まで眠っていられそうだった。

だけど、どうしようか……寝てもいいんだけど、やりたいゲームや見たい映画があるし……それに……。

少しだけ考えて、あることを決めた俺は、眠気を断ち切り体を反転させて、うつ伏せの状態で肘をついた。そしてまたあくびをしなが

ら、となりにあるパソコンの電源を入れる。

——今日は平日だった。水曜日、1週間の半ばである。祝日でも無ければ……特別な事情があって休んでいるという訳でもない。にもかかわらず、俺は今日という日をベッドの上でダラダラと過ごすことにした。

昨日もそうだった。同じ姿勢のままパソコンを操作し続けて……腹が減ったら飯を食い、眠くなったら寝た。まだ決めていないけど、きつと明日もそうやって過ごすと思う。

今年の春のことである。俺は通う大学で留年してしまった。3回生から4回生になれなかったのだ。たった1個、必修の科目を落とすただけでそうなってしまった。

だから、俺は今3回生をもう1度やっているという状態にある。たった1つの科目を受け直すために1年を使っている。他にやることは全くない。つまり、時間は山ほどにある。

毎日が予定すつからかんの休日、パラダイスである。おかげで、俺は留年してしまったことをあまりネガティブに考えていなかった。留年が決定してしまつた瞬間はショックだったけれど、数日よく考えてみれば、俺の人生にとってそんなにダメージは無いことに気づいた。

何しろ俺は医学部だし、将来は医者だ。偏差値の高い超エリート。医学部の留年なんて大して珍しくもないし、先輩にも同級生にも知り合いに留年してる奴はいる。精神的なダメージは大したものではない。気にする必要なんてない。

お金の問題にしたってそうだ。1つの必修科目の為に払わなければならぬ多額の授業料だって、働き始めればすぐに取り返せる。なんなら返さなくなつて、現役の医者で金持ちの親が気前よく払ってくれたものだ。これも気にしなくていい。

なんなら俺は1年ダラダラする権利を手に入れたと言っているであろう。長い人生どこかで立ち止まったり、回り道をするのも悪くない。よく聞く言葉だ。

……そういう訳で俺は、興味がある選択の専門科目1つの講義があ

る日以外が休みという日々を2カ月半ほど送っていた。取り逃した必修科目は後期の授業日程にある。

驚きの週休6日、そのうちやろうと思っているバイトも始めずに……親からの仕送りに甘える、1人暮らしのほぼニート生活……。

自由な俺は今日も朝から、朝立ちしている自分の竿を握った。こういうことも時間と回数を選ばずに行える。

そして、起動したパソコンの画面に女の死体を映すのだ――。

番外編5 「幼なじみ 死姦」②

それは昨日の夜に見つけたばかりの画像だった。アジア人で好みの女の子の死体が、どこかの山道に倒れている画像。腹に大きな傷があり、内臓が飛び出ている以外にこれとって傷は無い。

傷が多すぎたり、骨が折れて体が曲がっていたりするのはストライクゾーンではない俺にとって、本当に好みの画像である。最近見つけた中ではぶつちぎりで1番。

特に、アジア人で……日本人っぽく見える死体の画像はあまりネットに落ちていない。どうしても日本人がよければ、ドラマとか映画のワンシーンで写る女優の死体演技で妄想するしかなかったのに……。だから俺は、この画像を見つけた時、本当に興奮した――。

今も立っていた竿がより固くなる。首のあたりから体が熱くなるのを感じる。触ればすぐに、飛ぶような快樂を手に入れられるであろう――。

俺の性的嗜好は死体性愛である。横文字にすればネクロフィリア。女の死体に性的興奮を覚えるのだ。

たぶん、珍しいタイプだと思う。

初めにそれに目覚めたのはつい数年前のことである。やる気に満ち溢れていた大学1回生の時に、大学の図書館で勉強のためにパソコンを使っていた。その時にいずれある人体解剖実習の予習をしようと思ったのだ。

いきなり死体を見ると、恐怖でショックを起こしてしまう人もいると聞いていた。だから、その様子に慣れておこうと……。

しかし、動画を見て俺が感じたのは恐怖とは全く違うものだった。エロいと思ったのだ。とんでもなく。

俺が見たのは海外の医科大学で行われた解剖だった。その特徴はと言うと、検体となった女性が若く、スタイルが良かったというところである。動画の開始時点からそこにしか目がいかなかった。本当にモデルさんかと思うほど、日本人ではなかない胸と尻のボ

リニュームだった。顔も整っているし、髪はブロンド。その光景は何度も見たし、今でも鮮明に覚えている。

俺はその美人の検体が、複数人の男に体を弄られているのを見て、今までにないほど興奮した。死んでしまっただけでなく無抵抗の女がやりたい放題されていたのだ。そこに言葉では言い表せない極上の感情があった。

動画が再生されている画面にくぎ付けになった。気付けば座っている場所が大学の図書館ということも忘れて、自分のズボンに手を入れてしまいそうなほど。

勉強や医学のことなど一切忘れて、隅々までその映像を楽しむことができなくなった。

それからというもの、俺はそのジャンルに熱中することになった。パソコンを使って好みに合う画像を集めるのが日課になり、同じ趣味を持つ同志が集まる掲示板もお気に入り登録した。

相手が絶対に抵抗できないところが征服欲を満たすのだ。自分が死体を犯しているところを想像すると、相手が何をしても嫌がらないから、支配している感覚が凄い……。あとは奪うという快感、自分がその女を殺したところから考えると、まだ何十年も生きるはずだった人生を奪ってやったというところに性的快感がある。

やってはいけないことだからこそ興奮する。生命を奪っておいて、生命を生み出すことを行う禁忌。知ってしまったら戻れなくなった。

——俺は行為を始めてから、わずかに数分で絶頂に達した。気持ち良すぎていつも長く楽しむことができなかつた。

少し息を切らしながら、ティッシュで後始末をする。4枚ほどのティッシュを要した。それが終わると、脱力してベッドに寝転ぶ。

「はあ……」

そのタイミングで訪れるのは、性欲が一気に引いていって、冷静な自分まで戻る瞬間。悟りを開いたように脳がスッキリする……通称「賢者モード」と呼ばれるものだ。

俺は平日の朝から何をしているんだろう。このままでいいのだろうかとぼんやり考えてしまう。

大学を留年してしまったけれど、大したダメージは無いというのは自分に言い聞かせるように頭の中で何度も言っている事だった。合理的に考えれば事実そうであるのだけど、やっぱりできることなら留年したくなかった。

そして何より留年してしまったせいで、実は大きな損失が1つだけ生まれてしまっていた。好きな人が遠い存在になってしまったのだ。

小学校、中学校、高校、大学と全て同じところに通っている幼馴染が俺にはいた。同じ医学部ではないのだけど、同じ大学の教育学部に通っている彼女は、ずっと近くに住んでいて、ずっと俺の好きな人だ。

いつか付き合いたいと考えていたその人がこの1年のせいで遠く離れてしまったような気がする。勉強が優秀なことが自信だった俺が留年なんてしてしまった今、もう2度と付き合うことはないんじゃないかと心を暗くしてしまう。

笑顔が素敵な彼女、今みたいな自慰のおかずにも昔から何度もした。俺の相手は彼女しかいないと思っていたのに……もう、顔を合わせて話すことすらできそうにない……。

俺はまた数週間、何の生産性も無い時間を過ごした。変化とさえいば、酒を飲む機会が増えたことにより体に脂肪が増えてきたし、食べ物で消化する為に寝る時間も増えたというところだろうか。

1日のほとんどをネットと睡眠で過ごしていた。

そして、完全に夏という季節になった時だった——。黒いパソコンと出会ったのは——。

番外編5 「幼なじみ 死姦」③

早朝、点けっぱなしで眠ってしまったパソコンの電源ボタンを押す。――。
自慰の後は何もしたくなくなってしまうて、そのまま寝る。朝のこの行動はいつものことになっていた。直そうと思っただけ、どうにもならない。

しかし、この日はパソコンの電源ボタンを押しても光が消えなかった。目をほぼ閉じたまま、何度か押ししてみても消えてくれない。

どうい問題が起こっているのかと隣のパソコンを見る――。すると、そこには自分の物ではないパソコンがあった――。

見慣れないそのパソコンの色は、全身が黒色。画面の背景もマウスも。キーボードに書かれた文字だけが白色だった。そんなパソコンが俺のパソコンに重なる形で置いてあった。

俺は驚いて体を起こした。自分の知らない物が自分の部屋にあるということが、他人の不法侵入を意味することにはすぐに辿り着いたのだ。

俺が寝ている間に誰かが勝手に入ってきて……パソコンを置いていったということか……そういうことになるよな……一体何故……考えたって類似するケースを耳にしたことは1度も無いので、意味が分からない。

周囲を警戒しながら、恐る恐るパソコンに触れた。まずそれが本当にただのパソコンなのかを調べる為である。

どっからどう見てもパソコンの形はしている。触れてみた感じも自分のノートパソコンと変わらない、さつき寝ながら電源ボタンを押した時も……反応はしなかったもののちゃんと押し込めるボタンだった。

マウスも動かしてみれば、画面上でカーソルが動いた……しかし、不気味なのは、パスワード入力画面っぽいそこに、カーソルとワードボックス1つしかないことだった。普通はユーザーネームとか、下の方に設定や電源のマークとかがあるものなのだが……。

じゃあ、適当にパスワードを入力したらどうなるだろう。寝起きの俺はまだ思考が浅くて、特に何も考えずにキーボードを打った。なんとなく自分のパソコンのパスワードを入れてみたのだ。

「パスワードが違います。」、そう表示されて、手がかりが得られないまま別のアプローチで謎の黒いパソコンが現れた理由を探すことになる——そう思っていた——。

しかし、黒いパソコンが表示した文は……。

「この文字列はあなたのパソコンのログインパスワードです。」
より不気味さを増すものだった——。

俺はそのパソコンが何でも検索できる代物で、おそらくはデメリツトが無いということを理解し、それを信じることに10日間ほどの時間を要した。

いくら何でも現実離れしすぎている。夢ではないということ信じられない。これを1人の人間が使うなんて許されるはずがない。

俺は疑った。一体どんな罠が張られているか。どういった可能性があるかを10日考え続けた。

けれど、最終的には信じることにした。

怖いからと言ってどうすることもできないからだ。性能を知ってしまった以上、もう黒いパソコンを捨てようだとか壊そうだなんて考えられない。信じないという選択が余りにも有り得なかったから信じるしかなかった。

こんなチートアイテムを自ら手放すなんて、できなかつた。

——俺は完全にやる事が無くなつた夏季休暇中に、黒いパソコンを使ってあらゆることを検索した。今はほぼニートとはいえ医学生、勉強をすることは好きだった。何かを知るといふのは楽しかった。

今まで疑問に思ったことがあることの答えを全部、黒いパソコンは教えてくれた。宇宙の全貌も、空白の歴史も、誰も解明できない難病の治療法すらも、数秒で答えが表示された。

公に発表すればノーベル賞は間違いない情報の数々。自分で見つけたことにすれば、俺が世界で1番の有名人にだってなれる。

一体これからの人類の何千年分の知識量か分からない。知つていく度に、俺の世界が広がった。いつしか、自分がこの世の神にでもなったのかと錯覚するほど……心が広く、透明に……。

その一方で……いや、だからというべきか……性に対する欲望はより強く、よりアブノーマルになっていった。

画像検索や動画検索の存在を知り、色んな死体や、実際の死姦を見た日もあった。正確に言うとは屍姦、女の死体に覆いかぶさり腰を振る男の映像。いくつも見ていくうちに、俺はより刺激の強いものを求めるようになった。

あらゆることを知った脳では、ちよつとしたことでは興奮できなくなつてしまつたというところだろうか。傷が多いのは苦手だったのだけど、いつしか首が切れていて、その断面が鮮明に見える画像すらグロテスクに見えなくなつた。もつと……もつと……そう求めてしまうように気付けばなつていた。

そうなつてしまつた俺が辿り着いたのは実際にそれをやることだつた――。

もうどんなに好みのものでも、画像や動画を見ているだけでは満足できない。実際にやって、これ以上ないほどの快感を肌で味わつてみたい。性欲が高まると、そう思うようになった――。

番外編5 「幼なじみ 死姦」④

神を感じたとはいえ、所詮は人間。腹は減るし、性器は立つ。食べなきゃいけないし、処理しなければならぬ。神から人間への気持ちの移り変わりは早かった。一晚寝たら、もうリセットだ。

性的に興奮しているときは人間どころか、ただの獣である。自分が気持ちよくなる為なら他のことはどうでもいい。どんなに非情で残酷な映像を見ても、かわいそうだとか思わない。

黒いパソコンで、実際に人を殺してから死姦をする映像を見てもそう。ただ、気持ちよさそうだなあと思うだけ。犯す側の男と自分を重ねて、どのくらい気持ちいいんだろうと想像する。

その度に、俺もやってみたくなった。この自分の手で女を殺し、その感覚を味わい、死体の隅々まで堪能して、穴という穴に物を入れたい。

そして、黒いパソコンがあればそれは可能であろう――。
だから、俺はやることに決めた――。

自分の感覚が異常だとは思わない。性癖がズレているのは認めるが、理想を実現させようとするのは普通のことだ。叶えられる願いを叶えない奴なんていないだろう。

例えば、巨乳だとか貧乳だとか、高身長だとか低身長だとか、各々の理想とする女とエッチできる方法を知ることができたら、そりゃ誰だってやる。他にも女優とかアイドル、推しているあの子とできるなら多少の犠牲を払ってでもやるだろう。

ただ、やり方が分からないし、警察に捕まるリスクがあるならやらないだけで。

俺にとつての理想が、美人の死体だった。それだけの話だ……。やることは決めたけれど、じゃあ誰とやろう、誰を殺そうか、俺は考えた。何でも知ることができればなら、俺のやる気次第でけっこう誰でもいける気がする。それこそ女優やアイドルでも。

黒いパソコンに殺して犯してもバレない方法を聞けばいいのだ。何千通りもあるやり方の中の最善策なら届く気がする。まあ、難しい

だろうけど。有名な人ほど。

そもそも俺に好きな名人なんていないし、この線はない。無理して皆が知っている人を狙うより、町で見かけた美人を楽にやれるほうが興奮する……。

こうやって考えているときに、まず最初に浮かぶ異性が俺にはいた。小学生の頃からずっと好きな幼なじみ。留年してしまつて今は遠い人になってしまったけれど、今でも好きだ。俺の好きな人と言えれば彼女しかない。

黒いパソコンを手に入れてから彼女が自分のことをどう思っているか検索したこともあった。今付き合ってる彼氏がいるのかどうかも……。結果は彼氏はいるし、昔から俺のことは気持ち悪いと思つていたらしい。

近くに住んでいるし、トラブルを起こすのが嫌だったから愛想よく接していたけれど、じろじろ見てくるのが気持ち悪くてしようがなかったんだと。できれば、どこか遠くへ引っ越してほしい。こんな奴と家が近いことが周りに知られるのが嫌、そのくらい散々な印象だったと言うのだ。

とどのつまり、留年しなかったとしても付き合うなんて無理だったのである。

しかし、それでも俺にとって彼女は異性として魅力的だった。むしろそれを聞いて興奮したかもしれない。「奪う」ことに興奮する俺は「奪われる」というシチュエーションにも興奮した。通称NTR、あるいはいい。

もう好きではなくなつたけれど、交尾をする相手としてはより魅力的になつた。だって気持ち悪いと思つている俺に殺されて、死んだ後も性処理に使われるとなると、彼女にとってどのくらい屈辱的なことだろうか。

誰を狙うか考えようとしたけれど、本当はもう最初から決まっていた。

死姦をするなら、絶対幼なじみのあの女。ちよつと想像しただけで頭がおかしくなつてしまいそうなほど、脳があらゆる魅力的な発想を

生産する。ぶっ殺してやりまくりたい。

幼なじみは親のこともしつてるから、可哀想なのを想像してよりそそののだ。娘を殺された親の気持ちも、俺の快感の材料になる。親とか恋人の前でやってやりたい。

狙う相手は決まった。けれど緩やかな道のりではないだろう。有名な人ほどではないと思うが、あの女が消えたとなると、俺にも疑いの目は向けられるだろう。俺は彼女が好きだと友達に話したこともある。

考えるべきはそこである。黒いパソコンに聞く内容も、おすすめの女じゃなくて……。

「幼なじみ 死姦」

番外編5 「幼なじみ 死姦」⑤

人を殺すのは言うまでもなく犯罪だ。ましてや、死体を性的に利用するという目的で故意に殺害するなんて言語道断。バレれば間違はなく警察に捕まるどころか、死刑になったっておかしくない。

俺はそうなるのは嫌だった。相手は殺したいけど、俺は死にたくない。だから、全知全能の黒いパソコンにその方法を聞いた。

まだ厳しい暑さが続く、ある日のことだった。

——黒いパソコンが提案したのは今日から1年近く先の日に実行することだった。季節をまたぎ、幼なじみの彼女が大学を卒業して別の街で暮らすようになってから実行すれば確実にバレないと黒いパソコンは言った。そうすれば難しい作業も無く、疑われることすらない。

それは納得のいく結果ではあつた。俺は絶対バレないような方法を聞いたのだから、超が付くほど優秀な黒いパソコンがそう答えるのは自然である。時間が経つのを待ちさえすれば、より確実に労力も少なく望むものが手に入る。

けれど、喜べるような結果ではなかった。詳細な計画の内容が書かれた検索結果の画面を見た俺はすぐにムラムラした。性的な意味でも、苛立ったという意味でも。無論、そんな時まで待ちたくないからである。

俺は今日でも。明日でも。なんなら今すぐにでもやりたいくらいなのだ。1年なんて待てっこない。絶対に待ちたくない。

そして実際、その気になれば待つ必要はないと思う。

確実な作戦に時間が必要なら、不確実な作戦には時間が必要ないはずだ。

このパソコンがあれば、殺人をしてもバレない時間が……場所が……方法が瞬時に分かる。偽装、冤罪、放火、俺でも思いつく証拠隠滅法の数々から……このパソコンでしか調べられない部類の有効に働く自然現象や気候条件なんかや、事件を調べることになる警察が最

もポンコツになるタイミング、そいつのコンディション。あらゆる条件を加味したうえで最も最適なものが分かる。

最悪バレたとしても、時間を戻す方法すらあることも知っている。ならば、時間と労力を注ぎ込み、演技力が必要になることや多少のリスクが伴うことも承知の上でなら……。

「1週間後に周辺の地区が停電する時間があります。――」

と、そんなことを考えていた俺へ黒いパソコンは続けて文章を表示してみせた。その検索は明日になると考えていたが、初めから黒いパソコンは俺が本当に望む答えを提供する気でいたらしかった。

本当に優秀なパソコンだと思った。無機物を愛しく思っ、優しく撫でたのは初めてのことだった……。

――1週間後、実行当日、俺は彼女の自宅マンションに侵入した。前にストーカーをしたことがあるから場所だけは知っていた、近くて遠いそのドアをゆつくりと開いた。

侵入することはいとも簡単なことだった。高級なマンションでもないでドアの前に行くことは誰でもできる。あとは暗証番号式のドアロックに黒いパソコンが教えてくれた6桁の数字を入力するだけ……。

昔嗅いだことがある彼女の匂いが香る部屋。そこにまだ彼女の姿は無かった。指示された時間は彼女が外出しているときだった。

彼女は今、外出している。行先は居酒屋。仲のいい友達との飲み会らしい。

つまり、俺はこれから酒に酔って帰ってくる彼女をここで待つ。

俺は玄関から色々なところを舐め回すように見ながら部屋に上がった。電気を点けることはできないので、スマホのライトで照らしながら、あらゆるところを見ていった。

匂いが気になるところは匂いも嗅いだ。風呂、トイレ、洗面所のタオル、箸とスプーン、洗濯カゴの中の衣服や下着。鼻の穴を広げて嗅いだそれらはどれも良い匂いがした。きつと別の場所でそれらの匂いがしても全て良い匂いという訳にはいかないが、彼女から発せられ

る彼女が作り上げた匂いだと思えば全てが良い匂いだった。

部屋も綺麗に見えた。1人暮らし相応に散らかっている部分もあるけれど、踏み場所に困る自分の部屋に比べたら天と地の差。十分に客を招くことができるレベルである。

俺の想像でも部屋は綺麗そうだと思っていたので解釈の一致。一通り部屋の中を見終えると、その中でもメインディッシュとなるベッドの上に寝転がった。

本当に興奮した。心の底から、かつてないほど。五感全てを用いて、全神経を使つてそれを味わった。枕の匂いを嗅ぎ、布団を抱きしめて、体を擦り付けた。

ここは天国。俺にとって最高の空間だと思った。これ以上の場所は無い。

ただ1つ不満があるとすればクーラーが付いていないところである。部屋の気温が高かった。まだほんのりクーラーの力を感じて、外よりは涼しいけれど暑い。

けれどクーラーを付ける訳にもいかなない俺は、もうじつと待つ態勢に入ることにした。何もしていなければ多少楽になるはず。

そう決めると、今度はベッドの下に寝転がった……。

番外編5 「幼なじみ 死姦」⑥

黒いパソコンが教えてくれた彼女の帰宅時間まではまだ2時間もある。何もせずに待つにはちと辛い長さだ。退屈になるだろうことを考えると、暑さも相まってだらしなく口が開いた。

一度家に帰る選択肢や、いつそ電気もクーラーも点けてしまう選択肢も頭に浮かんでくるけれど、俺はただベッドの下で目を閉じた。

理由は下手なことをしてこの先の幸せをおじやんにしたくないからだ。2時間後のことを考えればこのくらいのことでも文句を言っているとバチが当たると思った。

だって、今でさえ実のところ幸福のほうが大きい。鼻に香ってくる彼女の匂いだけで十分だ……。

狭い中で少しづつ態勢を変えながら、スマホをいじったり、目を閉じたりを繰り返す。時折、雫になって流れてくる汗は幼なじみの彼女のパンツで拭った。あまり吸水力が高いものでは無かったので、何度か肌に押し付けて。

まだ浅い夜なので、微かに周囲の部屋や外からの音が感じられた。自分の部屋で聞くのと同じようだけれど、少しづつ違う音だった。彼女は毎日この音を聞いている。

俺はその中で彼女との思い出を振り返ったりした。幼なじみの彼女は素直で愛嬌がある子だった。誰にでも笑顔で優しく接していたし、顔もかわいい。美人と言われるタイプではないけれど、なんだかわいかった。

スマホに保存してある彼女の写真を何度見てもそう感じる。

俺のことを内心気持ち悪いと思っていたようで、現在彼氏もいるらしいけれど今でも悪い子ではない。黒いパソコンで調べたところ不純な恋愛ではないし、内心どんな風に思っている相手にもそれを悟られないようにするだけで優しいと言える。

色んな悪がこの世の中では、白いほうだ。清純と言っても過言ではない。いじめや犯罪の経歴もないし、親も兄弟も真つ当に生きている。殺される理由など何も無い子だ。

だからこそ、そんな子が殺されるって興奮する。あの白が似合う子が好き放題汚されるなんてたまらない。俺にとって可哀想なのは抜けるのだ――。

ようやく玄関のドアが開く音が聞こえて、彼女が帰ってきたときには着ているシャツがががつり湿るくらいの汗をかいていた。見なくても背中と首周りは色が変わっている。

すぐに何の警戒もしてないだろう速度で彼女の足音が近づいてきて、部屋の電気とクーラーが点けられた。急に明るくなった部屋を、目を細めながら見れば、すぐそこに彼女の足が見えて、髪の毛が一本落ちてくる。

そしてそれを見た俺はもう興奮がピークに達した。まだ早いけれど、いつも一人で妄想している時であれば間違いなくピークと言える興奮度。思わず、強く吐息が漏れてしまったので、口を手で覆う。

続けてスカートが落ちてきたときはもうどうにも止められない。

おそらくはすぐにお風呂に入るつもり。さらに続けて、上に着ていた服がベッドの上に置かれる音、靴下を脱いで肌が見えるようになった足。俺は鼻も覆って荒くなる呼吸を抑える。

かくれんぼをしている時であれば見つかっていたに違いない。それくらい吐息の音がしてしまったと思う。けれど、自分以外の人間が部屋にいるなんて思いもよらない彼女はそのまま風呂場のほうへ向かった。

それを確認した俺はベッドの下から出た。本当は風呂に入っているときに襲う予定だったけれど予定変更を体が強く求めた。

小さな洗面所で鏡を見る彼女と一瞬目が合う。その自分が知っているよりもつとかわいくなつた顔が振り向くよりも早く、俺は首を強く締めて彼女を羽交い絞めにした。

殺人、人を死に至らしめるその行為をするのは想像の何倍もの恐怖を伴った。俺がそうしようとしているのが分かった彼女が全力で抵抗してくる、正に火事場の馬鹿力を発揮して酒に酔っている女とは思えない力で。全く愛嬌を感じない見たことの無い顔をして。

それを断ち切ろうとするのは怖かった。殺すのも気持ちがいいと

ついさつきまで思っていたのに、血の気が引く感じがした。短い時間の中で何度もやはり力を抜こうか考えてしまう。

次第に抵抗の力は弱く、踏ん張っても大したことが無くなってくる……逆に恐怖心はより強く……強く……頭の中で怖い怖いと叫んでしまうほど……。

けれど、それなのに……股間の竿はがちがちに固くなっていた。

番外編5 「幼なじみ 死姦」⑦

彼女が動かなくなってから俺は首を絞め続けた。完全に意識を失ってもう二度と戻らないだろうと確信できるころまで。人間そう簡単には死なない。知っていたから俺は手を震わせながら続けた。恐怖と性的興奮が混ざり合う体中の毛が逆立つような感情と共にずっと絞め続けた……。

もういいだろうという時に力を緩めると彼女の脈があるか確認した。風呂に入る前で裸だった彼女の、胸を直接触って。

10秒ほど触れていても確認できない。彼女の首が横に倒れる。すると俺は、見えた耳の穴に舌を入れた――。

とりあえず動かなくなった彼女をベッドに運び、それが終わると俺は床に座った。クーラーの風が直接当たる位置に座って、後ろに手を着く。

なんだか息を上手く吸い込めなかった。少しずつ小分けにして吸い込まなければつつかえてしまう。

苦しくはない。ただ興奮のあまり体が正常じゃないことは分かった。

8畳ほどの広さの部屋で死体と2人きりという異常な空間。俺はそこで一息つく。クーラーが効いてきてさつきよりも空気がさつぱりした……なのになにさつきよりも空気が重い感じがする。先ほどまで彼女が感じていた絶望と不幸が空気に交じって漂っているようで、重く、濃い。

けれど、居心地は悪くない。やってはいけないことほど、異常なシチュエーションであるほど燃える。

手を伸ばせばもう届く。だけどまだもう少し……もう少しだけ……この静寂を楽しみたい。そんな気分だった。今この景色を、この空気を、この匂いをしっかりと脳に焼き付けておきたかった。

服を脱ぐ。パンツも。そしたら、じゃあもう始めようか。いやまだもう少し我慢しようか。そうだ、始める前に彼女のスマホを覗いてみ

よう。そういえば、やる前の死体の画像も保存しておきたいな……。
……………いや、もう……。

ぐったり仰向けになった彼女の、足の間。股間の真ん中の性器に目がいった瞬間に俺は我慢できなくなった。

衝動のまま、そこにしゃぶりついた。漏れてきていた尿も一緒に掬い取るように舐め上げた。音を立てながら目一杯吸い込んだ。

間髪入れずに足をがごと開く。どうしようもなく顔が引きつった。抑えないといけないと分かっているても歯を食いしばってしまうほど顔に力が入った――。

行為の最中は彼女を殴り続けた。髪の毛を鷲掴みにして東ごと抜いてみた。爪を？がしてみた。恋人つなぎをした後、指の骨を折ってみた。

本来ならば死体を保存して何度も使い回すことも考えていた。死体をなるべく腐らせずに長く清潔に保つ方法、エンバミング。それを個人で行う方法や費用も黒いパソコンに尋ねていたのだけど、全く無駄になった。

こんなにも我慢できなくなるとは自分でも思っていなかった。

休むことなく、抜くことなく、ずっと彼女と交わった。この場で終わりでもいいなら、あとはこのマンションに放火して帰るだけ。ある無職の男の部屋に侵入し、その男も殺してそこから火を放つ。

男が周囲も巻き込んで自殺を図ったかのように見せるため、男のスマホを操作して犯行予告をネットに投稿するという下準備も既に済んでいる。

あとは停電する時間で脱出すれば俺の姿を目視する者は存在せず、消火活動も遅れる。

だから、その時間がくるまでずっとこのまま続けよう……。

5回目の絶頂を迎えた時もその考えは揺るがなかった。しかし、また続けよう、そう決めてまた体位を変えた時だ。突然大きく素早く2回鼓動した。

そんな気がしただけか。だとしても最初から既にいつもの何倍も鼓動が強くなっているのが分かっていた俺は止まらない……が、すぐ

に胸の真ん中に激痛が走る。

彼女の腹の上に頭を乗せる形でうずくまってしまった。まるで焼かれているかのような痛みだった。高温の鉄を胸に押さえつけられているかのような。手で胸を抑えてどうにかなるものではないとすぐに分かるけれどそうする他ない。

生まれ、生まれと頭の中で唱える。そうしていても治まらなくて、俺はついにこの状況が本当にまずいものだと思つた。

どうにかしなければ自分まで死ぬ。そのくらいにまずい状況が来ている。なのに腰が止まらない。

心臓に異変が起きているのか。だとしたら意識があるうちに早く、激痛を伴いながらも自分で応急処置するしかない。そんなことできるだろうか、じゃあ他の誰かを呼ぶしかない。救急車……でも今そんなものを呼んだら……。

どうしていいか分からなくなった。自分では答えが分からない。焦れば焦るほど思考が固まる。そんな時俺の脳裏に黒いパソコンが浮かぶ。

あのパソコンがあれば……この状況からでも助かる方法が。そんなものがあるんですかという方法が……。

何か役立つものはないかと横を見る。そうすればなんと、求めるものはすでにそこに……すぐ近くにあった。音もなく、物理的に侵入できないはずの場所へ移動してきていた。

間違はなく俺の部屋にあったはずの代物。いつも通り黒い画面の中にワードボックスがぽつりといるそのパソコンだ。

俺はなぜ黒いパソコンがここにあるのかその意味を考えた時にいよいよ腰の動きすらも止まった。

前にその辺りの検索を試みたことがあったからだ。

「あなたは死にます。お伝えした通り、今までの検索履歴とあなたの記憶を消します。」

突然のことに思考は停止した。このまま死んだ後の惨憺たる明日のことも気にならない。

「良いデータが取れました。ありがとうございました。」

振り絞った力は彼女の唇まで自分の唇を届かせることに使った。

word 43 「折原さん なぜ」①

「よし……」

男子トイレの中で鏡に映った自分を見ながら小さく唱えた。

生徒たちが使う教室からは少し離れた位置にある特別教室棟のトイレでは人の気配を全く感じられなかった。自分が流したトイレの音がせせらぐという言葉が似合うくらいにだけ聞こえる。

自分の掃除場所から遠回りしてここに来た僕にとつて望み通りの環境だった。僕はこのトイレに用を足しに来たと言うよりはゆつくり鏡を見に来た。

指の間まで入念に手を洗い、服に乱れたところが無いかを確認し、髪を自分のベストに調整し終えた僕は大きく息を吐きながら廊下へ出る。

よく晴れた今日という日、僕はずっとこうしていつもはしない行動を取っていた。授業中もずっと教科書に載っていることではなく、別のことを考えていた。頭の中はあることでいっぱい、その為だけに体を捧げていた。

なにゆえに僕がそういう状態になっているかと言えば、そう……今日は軽音部に入部して初めて活動に参加する日だからである。僕が好きになってしまった女子、折原と会うことが理由だ。

今、せつかくセットした髪が乱れないように頭を掻くふりをして抑えているのも、折原と会うから。

朝、家族に隠れてこそこそと念入りにおしゃれをしたのも、折原と会うから。

昼、弁当をあまり食わず、食後に良い匂いがするガムをただのゴムよりも味がしなくなるまで噛んだのも、折原に会うから。

学校にギターを持ってきたのも、何度もシミュレーションしたのも、他の女子には一切近づかなかったのも、足の小指に赤い糸を巻き付けるなんて小学生女子みたいな恋のおまじないをしているのも、全ては折原に会うから。

今日はずっと前から目標にしていた決戦の日なのだ。

今のところ全ては順調だった。何も問題は起こっていない。だからこそ自信にも繋がっているし、割とリラックスできている。

もうあとは帰りのSHRが終われば戦いが始まるというのに、緊張とかはしていない。この分ならたぶん前と違って話しかけることくらいはできると思う……。

「今日は軽音楽部が音楽室使えるんだっけ？」

教室に戻った僕はすぐに親友に言った。元々軽音楽部に所属している眼鏡の親友に遠回しのこれから一緒に行くことの確認である。

「うん。今日は吹奏楽部練習休みらしいからうちらが使っているって聞いている」

「楽しみだわ。俺、外に音出してギター弾くの初めてだから」

「俺もお前のギター早く聞いてみてえよ。なんか思ったより練習してるとみただし」

「そう、聞いたら腰抜かすかも分からんよ。あまりの音色に」

「あ、それでよ……俺今日部活いけなくなっちゃったわ」

こつちのほうも大丈夫そうですよしよしよと思っていた矢先のことだった。親友はさらっと想定外を口にした。

「え」

「なんか急用入っちゃって、すぐに家に帰らんといけんくなった」

「マジ？」

「マジ」

「……そっか。そうなんだ、じゃあ俺の演奏が聞けるのはまた今度か」「うん。ごめんな。どうしても外せなくて。それで今日はお前だけで行くの？」

「ああ……まあ、えっと行こうかな。一応」

そう答えてみるけれど、内心はけっこう心細くて迷いが生まれていた。室内だというのに冷たい風が吹き抜けてきた気がする。

しかし、ここでやめては今までの準備がもつた気ないだろ……。僕は自分の席に戻りながら、もう一度覚悟を固めようとした。

「——じゃあ、また明日な」

背中から言われた言葉が僕にはずっと遠くから言われたように聞

こえた。

——SHRが終わると初めて学校に持ってきたギターを背負って1人で教室を出た。もう頼れる相棒はこいつだけ、こいつさえいけば親友はいなくたって軽音楽部に参加できる。練習もしてきたし不安になることなどない。

軽音楽部の知り合いだって何も親友だけという訳ではない。同級の男子がいるし、親友の友達というだけあって何度も話したことがある奴がいて、ご飯を一緒に食べたこともある。

それに親友がいなきゃ何もできないなんて格好悪いし、むしろ親友ほど近い奴がいれば逆に女子には話しかけづらかったかもしれない。ずっと親友と話してばかりになるという心配がなくなった。言い聞かせるように心で言う。

最悪、折原に話しかけるというミッションまで達成しなくても軽音楽部に馴染むだけなら何も難しいことは無い……。

もう1度背筋を伸ばし、近くのガラスでさらっと自分を見た僕が音楽室のドアに手を伸ばした時には、また自信を取り戻していた。

そつと開けるのではなく、胸を張って堂々とドアを開ける——。

しかし、そんな僕を待ち受けていた音楽室には折原ただ一人がいた。

word 43 「折原さん なぜ」②

確か……僕が入学する前の年にリニューアルされたばかりの音楽室。他の学校で見えるものよりも綺麗で、しかも豪華。古めの学校ではあるけれど、ここだけ最近の新設された小学校みたいに、これ本当に学校なのか、オシャレすぎるだろみたいな雰囲気がある。

明るい色で質の良さそうな木材が壁を覆い、ピアノからも並んだ机からも照明の光が反射されている。外よりもまぶしいくらいだ。

けれど、その真ん中あたりに座っている女性は、周囲の何倍もまぶしく見えた。目が合えば……すぐに逸らしてしまうほど……。

「あ……」

僕は折原と目が合うと、短く声を出して目を逸らしてしまった。そんなことしようと思っていないのに、開いたドアが正しかったのか確かめるように首を振る。

すぐに後悔した。自分は何をやっているんだと……しかし。

「あ、新しく入部する人？ 軽音楽部だよね？」

「うん……あ、そうそう」

いきなり今日最大の目標を達成してしまった。

「なんか今週新しい人くるって男子が言ってたから」

「伝わってたんだ。多分それが俺……です」

さらに折原は立ち上がってこちらに近づいてきた。教室にいる時とは違って首にヘッドホンを巻いている。少し違う、たったそれだけで感動するかわいさがあった。

「珍しいね。この時期から入部なんて」

「だよね。急に部活入りたくなったというか……」

「いやでも、軽音楽部ならそんなに珍しくないかも」

どっちだよ——。そう頭には浮かんだけれど、外側へ発することはできない。

この黒く純粋な瞳が、整った前髪が、目立つタイプではないけど天使のような顔が、僕のPCを狂わせる。

「今日ってさー人？」

「え？うん、そうだけど」

「他の男子誰も来ないの？」

「それはどうだろ。同じクラスの奴は来ないって聞いているけど他は聞いてない。たぶん来るんじゃないのかな」

「へー、そうなんだ」

折原は音楽室の入り口から顔を出して廊下のほうを覗くと、先ほど座っていた机のところに戻っていった。隣のイスには彼女の物らしいギターケースがある。

再び座ると僕とは別の方向を向いた――。

話してしまった、ついに。しかも一言二言ではなく、結構何回も……。

話してしまった、ついに。しかも一言二言ではなく、結構何回も……。

あまりにも大事なことなので自分の脳内で2回も同じことを言うてしまう。

どもったりもせず、割と目を見て話すこともできた。超緊張したが、その割には……夢にも見たことなのに意外と僕はやればできる子ではないか。恋における春の訪れを感じる。旬の季節だ。

「今日の活動場所は音楽室で合ってるんだよね？」

跳ねた鼓動が治まる前に、さらに僕は畳みかけた。思い付きで、分りきっていることを聞いてみる。

「うん、普段はこことは反対側にある何も無い部屋だけど」

「そうなんだ。俺こういう防音設備があるとこでギター弾くの初めてでさ、音楽室使える日で良かった」

「ギター弾くのは初めてじゃないんだ？」

「初心者ではあるけど、家ではそこそこ弾いてる」

「まあギター背中に背負ってるもんね。これでうちの部でギターは4人目かな？いや、1年の新しく入った子入れたら5人目か」

「やっぱギターが多いんだ」

「そうだね」

それは僕自身も驚くことだった。やってみれば意外と簡単という

か、他の人と話すのとは明らかに違うけれど、飛び込んでしまえばどうにかなった。

そして、何よりとてつもない幸せ。今この時が、折原と会話してる1秒1秒が過ぎていくごとに脳内から幸せを感じるホルモンみたいなものがドバドバ排出されている――。

「じゃあ、私は帰ろうかな」

しかし、次に折原から発せられた言葉で僕は我に返る。

「へ？」

「いや実はね、今日女子は私1人なんだ。2年生は皆行かないって聞いているし、1年の子も今日用事あるって言ってた子たち以外は幽霊部員だしね。だから、今日は男子も来ないなら1人で音楽室占領してやろうと思っただけなの」

「あ、じゃあ俺邪魔？」

「いや、ごめん全然そういう意味じゃない。今日は朝から1人の気分だったし、さっさと家に帰るかカラオケかなって思ってたから気にしないです……それじゃ」

暗くなる僕の心など知る由もなく、折原は荷物を持ってさっさと立ち去っていく。

いくら高速で頭を回転させようとも、それを止める手段なんて僕には無くて、さよならの挨拶をすることもできなかった。

ただ、振り返りもせず立ち尽くし、こんな時のシミュレーションまでしておくんだって後悔する。あらゆる場合の手札を用意しておくんだって。帰る彼女を止めるカードがあれば……。

「え、待って。それってよく見たらジャクソンギターのギターケース？中身もそう？」

「ん？……あ、そうだけど」

「マジで？！ちよつと見せてー！」

あつたああああ――。

word 43 「折原さん なぜ」③

「——ねえねえ、開けていい」

「う、うん——いいよ」

折原が急にかしまし始めたので、僕も急いで背負っていたギターケースを下ろした。

すると、折原は奪い取るようにギターケースを受け取り、今度はそつとそれを机の上に下ろした。

「わあああ……綺麗……触っていい？」

「うん」

そこから、折原のギター講釈が始まった——。

「——で、これがジャクソンギターの特徴なんだけど、このヘッドの部分！ここが尖がってるの。あ、コンコルドヘッドって言うんだけどね。ジャクソンギターは全体的に攻撃的なデザインというか……これはそうでもないんだけど……いやでも落ち着いていながら、ちよつとロックな部分がちらついているのがたまないね」

「へー……」

「これはたぶんソロイストかな……もしかしたらデインキーだけど……いや、ネックのところがスルーネックだから絶対ソロイスト！でしよ？」

「あーたぶん、そう」

「ほらね」

最初から思わず眉をひそめてしまいそうな言葉攻めを食らっていた僕は、ここでも1つ1つ言葉の意味を聞くのはやめた。

その話口調は先ほどの折原や、普段僕が少ない情報から作り上げている折原のイメージとも違った。明らかかなギターオタクによる、オタク特有の早口、どちらかと言えば落ち着いた子のイメージだったのだけど、子供みたいにはしゃいでいる。

「だけど、そのギャップがまた……かわいい。」

「このギター高かったでしょ。いくらくらいした？」

「えっと、約10万円かな」

「10万円!?!自分で買ったの?」

「うん、まあ」

「もしかして学校に内緒でバイトとかしてる?」

「いや……その、競馬でね。パカラパカラっ」と

言おうか戸惑ったが、競馬という言葉を口にすると同時に開き直つて、馬の足音のように指で机を叩いた。

「競馬?それはそれで問題じゃない?」

「親がやってるのに俺も混ぜてもらって、それが何と連続的中。初めは5000円だったのに、気づけば30万円」

「え、やば。何その話。私もやるっかな、競馬」

「いや、ダメだから。って俺が言うのもなんだけど」

「はははっ。買ったのはどこ?」

「駅前……」

「あ、あそこでしょ!ギター専門店!」

「駅前だけでよく分かったね。そんな駅前でもない場所なのに」

「私もよく行くんだ。週1回はいくかも。店長さんとも仲良くなっちゃったし」

「つてことはやっぱ折原さんも……あれくらいのギター好きなんだ」

僕はそこでまた分かり切ったことを聞いた。

「うん」

すると、折原は今日1番大きく頷いて見せた――。

折原はかなりのギターオタクだった。僕がそうじゃないので正確には分からないけど、聞いている感じでは男でフィギュアやカードを集めているような連中と似た雰囲気がある。

歌もあれだけ上手いし、軽音部。考えてみれば意外な趣味ではないけれど、そのテンションに初めは驚かされた。

しかし、さすが趣味の話である。戸惑いながらもこの話題に付き合ったおかげで折原とかなりの時間を一緒に過ごすことができた。

この黒いギターを選んで本当に良かった。

「へー、ギター集めたりとかしてんの?」

「高校生って身分上、全然大したものじゃないけどね。ギターって高

いし」

「そっかあ」

「でも知識はその辺の楽器屋にも負けなくらいあるよ」

「じゃあ、ギターのメーカーどれくらい言える？」

「えつと……ジャクソンでしょ、フェンダーでしょ……ギブソン、グレッチ……たぶん20くらいは言えると思うんだけど」

目を輝かせて指を折っていく折原を見ると、僕は幸せというものを確かに感じた。これも初めてのことだった。今までの嬉しかった時に抱いていたものとはレベルが違う。この体の中心から花が咲き乱れていくような感覚が幸せなのだ。

それはもうオーバーフローしていて、部屋に入り込む前にあった緊張とか不安もすっかり飲み込んでしまった。

「ねえ、ギター弾いてみようよ」

帰ると言っていたはずの折原はその後音楽室にいてくれて、僕にギターの弾き方についてアドバイスしてくれたり、僕のギターを弾かせてほしいと言ってきた。僕にとっても大のお気に入りであるけれど、相手が折原なら断る理由は無かった。

音楽室に入ってから1時間経っても、軽音楽部の部員は誰一人として現れなかった。折原はそれについて驚いていなかったし、たぶんそんなものなのだ。まさか2人きりになるなんて思っていなかったが、結果的に最高だった。

「——いやあ、ほんとめっちゃ上手かったね」

「え、嬉しい。小学生の時からやってるからね」

「俺が参考にしてる動画の人とかと比べても遜色ないもん」

「まあ私はギター専門だしね。それ以外の楽器は全然で、部でもギターしかやってない」

「え？ そうなの？」

「うん、歌うのもあんまり好きじゃないから——」

「え!？」

その言葉を聞いた時、僕は反射のまま驚いた分を全て声にしてしまった。

2人しかいないし、もう帰ろうかと荷物をまとめている時だった。
音楽室の防音壁を楽器の音と同じく貫けるほどの声が響いた。

word 43 「折原さん なぜ」④

「え、何でそんな驚いてるの?」

折原が逆に驚き返してくるのは当然の反応だった。僕だって自分がやってしまったことに驚いているのだから。

どうしようか——。目を逸らす間もなく、折原を見つめたまま——。言い訳を探した——。

「えつと……その……」

「おもしろ。すごいオーバーアクションだね」

しかし、折原はそれを冗談として受け取ってくれたようだった。

「え……ああ、あはははは」

「別に変じゃないでしょ。ギター専門なんて」

「うん。バンドってそういうもんだもんね。歌う人がいて……ドラムの人がいて……ギターの人がいる。全然変じゃないよ。ははは」

「じゃあ、帰ろうか」

当然その場で、本当に歌うのが好きじゃないと言った理由など聞けなかった。好きじゃないだけで歌うのは上手いかなんて質問も、焦って思いつきもしなかった。

「カギは私が職員室行って閉めとくから、またギター見せてね」

「うん、また教えてほしい。じゃあね——」

音楽室の前で折原と別れた僕はその場でしばらく、呆けた。今度は夕日と2人、目を合わせて……。

自室に帰ると、僕はまずギターを撫でた。ベッドの上に寝ころばせて、ペットを撫でるように。

他の荷物は全て床に投げ捨てたけれど、ギターだけは別だ。今日のMVPにはこれだけでは足りないくらい。もしこいつが人間なら、好物をご馳走してやりたい。

もちろん、お互いのグラスを合わせて、祝杯をあげるのだ。

「乾杯」

僕はそれと同じ要領でガッツポーズをした——。

帰り道ではずっと呆けていた。けれどそこでようやく僕の口が緩む。

別れ際にちよつとした問題があつて、考え事ができたけれど、今日の戦は概ね勝ちと言つていいと思う。いや、勝ちどころが大勝利だ。あんなに折原と話ができるなんて想像していなかった。しかも2人きりで。

目も合わせられたたし、近くで声を聞けたし、匂いも嗅いだ。こんな日があるだろうか。なんて日だ。

僕は我慢できなくなつて、今度は自分もベッドに寝ころんでギターを抱きしめる。

はあ、何て良い子なんだ——すごくスタイルが良い——ずっと大事にするからな——。

ただ、やはり気になるのは僕が変に驚いてしまった時の折原の反応だ。あれは本当にギャグだと思つての発言だったのだろうか、もしかすると変な奴だから踏み込むのはやめただけだったのではないだろうか。

だとすると、無駄に下がつてしまった好感度を取り戻すために今後、も頑張らなければならぬ。

……それともちろんもう1つ。あの折原の発言は何だったのだろうか。

「歌うのが好きじゃない」なんて、彼女の口から発せられる言葉であるはずがない。だって僕は知っている、彼女が学校で1番歌が上手いことを。当然軽音楽部では歌が上手い人と認知されていると思つていたのだ。

それが一体どうして……。

僕は冷静さを取り戻して、収納から黒いパソコンを取り出した。

黒いギターよりも前から愛用している黒いギター以上の相棒、黒いパソコン。まさかこいつが嘘をついているはずもないし、嘘をついているのは折原ということになる。

そこは疑いようがない。黒いパソコン以上の真実はないのだから……だから、僕は嘘の理由を検索することにした。

帰り道で既に決めていたことだ。折原との恋愛においてずるや不純な内容の検索はしないつもりだけれど、これは僕の中ではセーフだったから。もしどんな結果が出ても、僕は利用しないし気持ちは変わらない。ただ、疑問を解消したいだけ。

「折原さん なぜ」

予想をするならば、単純に恥ずかしいからという理由くらいしか思いつかない。あの衝撃を受けたカラオケ動画の時も雰囲気的には1人っぽかった。そんな感じもしないが、歌う時はしゃいな可能性もある。

しかし、表示されたのはそんなたった一言で終わる話ではなかった。

「折原 裕実さんには歌手になるという夢があります。ただ、親からの反対や以前友人に夢を語ったところ、遠回しに無理だと言われた経験からその夢を他人に言わないと決めています。夢を他人に語るのはある程度の結果を出してから、そしてそれまでは誰の力も借りず、自分の力でと決めているので、周囲へ歌唱力に自信があるとは言わず、あなたにも歌手を目指していると感づかれるようなことは言いませんでした。」

一通り読み終わると目を細めて、顎に手を当てた――。

僕には本気で目指している夢などない……だから、この文だけでそこにきつとある複雑な気持ちは理解できなかつた。

けれど、確かにかっこいいと思った。そしてそんな彼女にまたもや惚れた。

折原のことが好きだ。その言葉だけが素直に頭へ浮かんだ。

日常の検索あれこれ⑩ 「チャーハン レシピ」

「明日 大雪警報」

『明日、あなたが住む地域に大雪警報は発令されません。よってあなたが期待しているように休校にはならないので、早く寝ましょう。』

「小学生の頃突然引越した友達 現在」

『あなたが小学3年生の時に週が明けると転校していた友達は、親の離婚を理由に母方の実家に引越す為、転校しました。現在は、岡山県に暮らしていて、県内で最も偏差値の高い高校に通っています。クラスは2年4組、所属部活は男子バレー部です。』

「帰り道 人影」

『あなたが今日の帰り道、廃墟となっている工場で見た人影は、周辺に住む徘徊老人が用を足そうとしていた時の姿です。』

「僕の体 福毛」

『あなたの体には左足の太もも裏、やや膝よりの位置に他の毛より長い毛があります』

日中、友達と自分の体にはどこに福毛があるかなんて話になった。そんなもの調べたことも無くて、会話の最中にも見つけることができなかつた僕は、会話していた者の中で1番位が低いことにされてしまった。

特に検索したいことが無かつた僕はそんなしょうもないことを黒いパソコンに聞いた。

しかし、教えてもらった場所を探しているとき、他よりも長い毛を見つけると、喜んだ拍子にそのまま抜いてしまった。

「チャーハン レシピ」

『現在、あなたの家にある食材と調味料で最もおいしいチャーハンを作るレシピは、材料：卵2個・炊飯器に入っている白米全て・豚こま

切れ肉冷凍庫に余っているもの・レタス3枚・カットねぎ・にんにく
チューブ・中華だし・塩・こしょう・味の素・七味。①豚肉とレタス
を親指の大きさに切る。②切った豚肉とレタスを、サラダ油大きさ
2杯で炒める。③豚肉とレタスに軽く焦げ目がつくと、それらをフラ
イパンに端に寄せ、空いたスペースへさらに大きじ2杯を加え、溶き
卵を注ぐ。④空気を加えるように卵を混ぜ、半熟になったところで白
米を入れ、さらに炒める。⑤大体混ぜたところで、カットねぎとに
んにくチューブを4cm加え、さらに炒める。⑥味付けは中華だし5
振り、塩6振り、こしょう4振り、味の素4振り、七味6振り。ポイ
ントは火力を最大にすることと、素早く手を動かして炒めること
です。卵は必ず溶いてフライパンに白米よりも先に入れてください。』
家に僕1人だけという休日の日のお昼。僕は無性にチャーハンが
食べたくなった。

しかし、冷凍庫の中に冷凍チャーハンはない。それに、なるべくお
いしいものが食べたかった僕は、たまには料理でもすることにした。
様々な自己流レシピが存在するであろう家庭チャーハン。黒いパ
ソコンからはこんなレシピが渡された。

慣れない手つきで包丁を使い、台所に米粒を飛ばしながら、作って
みたチャーハンは母親が作る物よりもずっとうまかった。

見た目はろくなものではなかったけれど、病みつきになる味だ。

word44 「さっきまで考えていたこと 内容」

——あれ、さっきまで何考えてたんだっけ？

そう思ったのはある日の夜のことだった。

就寝前のルーティンが終わった23時40分。あとは眠くなるまでベッドでだらだらとするだけ。そんなタイミングのことだ。

僕はつい先ほどまで考えていたことを忘れた。何か考えていたのは確かに覚えている。それなのに何を考えていたのかが頭から抜け落ちてしまった。

操作していたスマホを置いて、思い出すことに頭を集中させる。トイレに行く前には考えていたはずだ。何かの疑問を解消しようとしていたのか、しようもない妄想だったか、それともやらなければならぬことを唱えていたのか。いずれにしろ何かは考えていたはずだ……。

数分間、頭を悩ませた……。けれども何を考えていたのか思いだせなかった、どうしても。そこで僕は思った……。あー、イライラする。

忘れてしまったくらいだから、きっとどうでもいいこと。この苛立ちも一緒に放つてしまえばいい。しかし、思い出せそうで思い出せないこの感覚が僕を諦めさせなかった。あー本当にイライラする。

もう少しでパッと。次の瞬間にはパッと閃いていそうなのだ。頭の中が霧ががっついていて、そこに対象が見え隠れするのに、手を伸ばせども伸ばせども捉えられない。

寝ころんだ体を起こしてまで頭を働かせる。すると僕は決めた、こいつだけは許してなるものかと。

たまにこういうことがあるが、僕は1度も思い出せなかったことが無い。何戦何勝かは分からないが無敗の男だ。その力を見せてやる。必ず正体を暴いてやるぞ。

僕は必殺技、さっきやっていたことをそのまま再現する、を実行した。自分がやっていたことを振り返って、記憶に残っているとところから1つ1つそのまま実行する。きつときつかけはそのどこかにある

はずなのだから。

トイレに行く前はえつと……スマホでこのサイトを見ていて……その次にこの動画を視聴していた……。ベッドに寝転ぶところからそのまま再現した。足に挟んでいたクッションも同じ格好で足に挟んで。

……が、しかし求めるものは降ってこない。

「はあ？」

僕は動画を見終わると言った。何のひっかけりも得られなかった。こんなに手がかりが無いのは初めてだ。

頭から何かを取り出すジェスチャーをしてもダメ、一度全く何も考えない無の状態になってもダメ、いよいよ僕は笑った。怒りを通り越して笑ったのである。

はははは、そつちがその気なら僕にも考えがある。

僕は力強く収納のドアを開けた。こんな時に頼るのはもちろん黒いパソコンである。

「さっきまで考えていたこと 内容」

間髪入れずにワードを入力した。こうなったら必ずあの気持ち良さを手にしてやる。ここまで焦らされてから得る快感は一体如何ほどのものか。

今回の検索結果に対しては予想などなかった。そんなものがあつたら今頃こんな1日1回の検索を使うなどという愚かなことはしていない。

Enterキーを叩くと短い文章が表示される。

「あなたが忘れた考え事は、先ほど動画を視聴するとき広告に出てきたキャラクターの声がどの声優の声かというものです。」

僕はそれを見て戦慄した——。まさか、そんなことがある訳がない。しかし、微かに感じるスツキリとした気持ち。頭では分かっている、体がそれを事実だと認める。

そうだ。そうだった。こうやって悩む前もまた悩んでいたのだ。あの見たこともないキャラクターの声、どつかで聞いたことある気がするんだけど、どのアニメのどのキャラの声だっけ……。

ぬわあああああ——。頭の中で叫び、地に伏せる。
心が折れかけた……しかし、僕はまた笑う。上等じゃねえか、そつ
ちがその気であるならと……。

——翌日の僕は目を瞑ってあくびをしながら家を出た。

word45 「もしも 世界に男が僕1人だけになつたら」①

もしも僕が空を飛べるとしたら――。

たまにこんな妄想をすることがある。ふとした時に、学校の教室で、親が運転する車の中で、窓の外を見ながら思うのだ。

あの広い大空を飛ぶことができたなら、どれほど気持ちいいだろうか――。

景色の見え方はどうだろう。あの遠くに見える山を空から見下ろせば、どう感じるのだろうか。綺麗だと思うのか。はたまた高くて怖いと思うのか。

風の受け方はどうか、匂いはどうか、周囲からはどんな姿に見えるのか、頭の中で思い描いてみる。

ただの暇つぶしだ。暇だけど、スマホをいじったりできないときにやるくらいのもしょうもない暇つぶし。やったところで意味は無い。実際飛べるようになる訳がないし、頭の中だけじゃ空を飛んだらどうなるかの答えも分かる訳がない。

けれども、そんなことに没頭してしまふ瞬間がある。目を開けたまま眠っているかのように、体の動きを止めて、口を開いて考える。自分だけの世界に入り込むって楽しい……。

……そして、またある瞬間に肩を叩かれたり、話しかけられたりして、そんな窓の外の世界から現実に連れ戻されるのだ。

――妄想と言ったら、みんな日常的にやっていることだと思う。誰にも言わない自分の頭の中だけの世界を創造する。そのジャンルは十人十色で様々であるだろうがきつと人類みんな。

女性だったら、恋愛の妄想をする人が多い。もしもあの人と付き合ったら、結婚したら、どんな生活が待っているだろうか。その相手は芸能人かもしれないし、好意を抱いているけれど理由があつて絶対にそれを伝えられない人かもしれない。そういうケースだった場合、正に頭の中だけの世界。

中学二年生だったら、自分が超能力を持っていた場合だとか、学校にいきなり不審者が侵入してきて、それを華麗に撃退するだとかの妄想をよく聞く。自分が他人とは違う特殊な人間だという妄想だ。

自分の中にもう1人の自分を飼っている人もいるだろう。現実の自分とはかけ離れている……大人気アーティストである自分、超売れっ子アイドルである自分、日本代表のスポーツ選手である自分。そういう理想の自分を作り上げて、その生活ぶりを妄想する。

僕はと言えば、最近好きな女子である折原とのデートを妄想することが多い。色々としミュレーションした結果、折原との理想のデートは天気の良い日に素敵な公園を散歩して、雰囲気の良いカフェでスイーツとお茶を頂くのが1番という結論に至った。カラオケとかではなく、敢えて公園とカフェ。ミステリアスな彼女から色々な話を聞きたい。

そんな各々持っている妄想の世界に……実際行くことはたぶんどう頑張っても無理。行けるケースもあるだろうが、その場合でも難しくはあるだろう。

しかし、僕が持っている1つの道具を使えば、行けないにしろ妄想をよりリアルなものにすることができると。

もしも何々だったら……に対して、最も正確な答えを出すことができるのだ――。

『もしもあなたが想像しているように、あなただけが空中を自在に飛ぶことができるようになると、しばらく自宅にも学校にもマスクミが押しかけ、国の内外問わず様々な人間から体を調べさせてほしいと依頼が届き、個人情報やネットに晒されるでしょう。』

こんな風に、身も蓋もないことを言われてしまうこともあるが……。

word45 「もしも 世界に男が僕1人だけになつたら」②

この黒いパソコンは超高性能だ。今更分かり切っていることを言うなどという話だが、こんな驚くべきことも可能である。

ありえない世界をデータ上で再現して、そこで何が起こるかをありえないレベルの高精度でシミュレーションする。

初めてこういった検索を試みた時にそう教えられている。詳しくは分からなかったけれど、要約するとそんな具合だ。とにかく人類ではまず無理なレベルで、条件の中でもっとも高確率で起こることを弾き出し、結果として表示する。

僕は数回だけこの「もしも検索」を利用したことがあった。

初めてやったのはあるニュースを見た日だった。同じ市内に住む中学生が先日、車に轢かれて、病院に搬送されたがすぐに死んでしまったというニュース。僕は家族と夕飯を食べながら、テレビに映った悲しい映像を見た時、箸の動きを止めた。

事故があつた日からニュースにはなっていたけど、その日は残された両親の話や、同級生たちも参列した葬式の映像が放送されていた。

泣いている人や、亡くなった子との思い出を語る人達を見て……僕は、自分が死んだときはどうなるんだろうと思つたのだ。

見ている映像と同じように悲しんでくれる人がいるだろうか……。葬式には何人の人間が来てくれて、どんな風に行われるのだろうか……。

気になつた僕は夕飯を食べ終わるとすぐに「もしも 僕が交通事故で死んでしまつたら」と黒いパソコンに入力した。

結果には、いろんな情報が表示された。僕が死んだ仮の事故の詳細から、加害者へ請求される慰謝料の額……葬式会場の名前と住所、参列者の名簿……授かる戒名……棺に遺体と共に入れられる物。そして、その中のメッセージカードを見た僕は涙まで流した。

そこまですらうとは思っていなかったのだけど、両親から若くして

死んでしまった僕に宛てられた手紙を見ると、唇が震えて目が滲んだ。

さすがにリアルが過ぎて……ちよつと不思議な体験でもしようと思っていた僕の予想とは違うものになった。

けれども、あれは良い体験だったと思う。黒いパソコンでしかできない良い体験だった――。

あとはもしも透明人間になることができたらだったり、もしも昔好きだった女の子に告白したらどうなっていたかなんてのも検索した。

どちらも僕の思考がすっかり計算に入っているみたいで、実際に僕がしそうな行動や反応が細かく書かれていたので、結果を読むのは面白かった。

自分の頭の中だけでは導き出されない答えは、より深い妄想の手掛かりにもなった。

――そして今日、「もしも 僕が空を飛べるようになったら」を検索した僕は悪い意味で期待を裏切られた。せつかくまた面白い妄想ができると思ったのに残念である。

だから僕はまた明日も、もしもを用いた検索することに決めた。

黒いパソコンを収納にしまえば、今度はどんな妄想にするかと考えを巡らせる。

word45 「もしも 世界に男が僕1人だけになつたら」③

次の日、僕は暇があればどんなもしもを検索するのか考えた……。その結果検索するワードを……。

「もしも 世界に男が僕1人だけになつたら」

これに決めた――。

思いついた候補の妄想の中から選りすぐりに選りすぐった結果である。1つ1つの妄想を自分の頭の中でやってみると、これを1番黒いパソコンに聞いてみたいと思った。

他の候補はもしもゲームの世界に入ることができたらとか、もしもかわいい女の子になることができたらか……。あとは、もしも世界にいる人間が僕1人きりになってしまったらというもの。

それを思いついて妄想していると、やはり寂しくて死にたくなると感じたので、どうせなら男が僕1人きりになるなんてどうだと考え着いたのだ。

ちよつとしたハーレムの妄想ならよくあるものだけど、男1人对女数十億人なんていうとんでもハーレム状態が実現すると一体どうなるのかなんてのは、さすがに想像がつかない。

黒いパソコンに頼るに相応しいもしも検索が見つかった。

もしも僕以外の人間が黒いパソコンを持ったら何を検索するかというのも検索してみたいと思ったが、それはまた別の機会に――

僕は机の上にパソコンを用意すると、まずは窓の外を見た。夜になると僕の部屋からは、街のほうがよく見える。近所とは違って、背の高い建物が山のように聳え立っていて、重なる光が眩しい。

世界中で男が僕1人になれば、あの街に何万と住んでいる女性も全て僕だけのものになるというか、女性側から僕以外の選択肢が無くなる。付き合ったり結婚したり、子供が作りたいたいと思えば僕しかいないのだ。

学校の同級生も先輩も後輩も当然そんな訳で、普段目になっているあの子もその子も……。

そう考えるとちよつと可哀想ではある。逆の立場になったことを考えて、異性の選択肢がたった1つしかないなんて思うと、とんでもなく退屈な世界だ。

1人になった男側も、初めのうちは幸せでもいつしか疲れてしまう気がする。嫌でも人類存続のために、その身を捧げることを強要され、世界中に自らの精子が飛んでいき、各所で自分の子供が生まれるなんてことになれば気が狂いそうだ。そのうち同性の友達が恋しくなって孤独も感じそうである。

そんな想像をした僕は溜め息を吐いて、下心全開というよりは、本当にどうなるんだろうという好奇心で検索を実行した……。

「現在の時刻から、あなたが想像するようになあなた以外の世界中の男性が突然いなくなると、まずあなたがその原因ではないかと疑われます。あなたは徹底的な取り調べを受けることになるでしょう。——」

黒いパソコンは最初にそんな文を表示して、それを見た僕は確かに思った。

「それを考慮せず、世界中の人間が男性1人になったことに疑問を持っていないとすると、あなたは翌日から堅牢な地下シェルターに護送され、しばらくそこに住むことになります。男性にしかできない決まりとなっている役職の穴を埋めるためなどの理由で、各国や宗教団体のような組織に身柄を狙われる可能性があります。そこでは複数の女性に生活の世話をしてもらえますが、あなたが望むような性的な行為をする機会はずぐにはやってきません。——」

今回の黒いパソコンはただ疑われて終わるといふ結果だけでなく、僕が想像する世界についてもちゃんと教えてくれた。

「世界では、冷凍保存されていた精子が貴重な資源として何よりも価値があるものになります。自国に何リットルくらいの精子を保有しているかが国の強さを表す指標になり、精子の取引額は何千倍もの高額となります。そして、それを巡って第三次世界大戦と呼ばれる戦争が起こります。当然、冷凍保存されていた精子だけでは量が足りず、

あなたも狙われる資源の1つとなります。日本で任意の精子提供を繰り返し、過ごしていたあなたですが、2か月後にはアメリカ軍に拉致されます。アメリカでは任意ではなく、それ専用には選抜された若く容姿も腕も優秀な女性達から、強制的に精子を搾取され続ける生活を送ることになります。あなたが不活発で売り物にならないレベルの精子しか提供できなくなる47歳までずっとです。ちなみに、あなたの精子は瞬間最高額1m1当たり、1億2000万円もの値が付き、あなたが死ぬまでに2万1256人あなたの子供が産まれます。」

思ったよりも危険なことになるんだな……どちらかと言えばMだし、そんな生活も悪くない……長い文を読んでいる間いくつか感想を抱いた。

ただそういった感想たちは最後の情報で一気に塗り替えられてしまった。衝撃の文字、精子1m1当たり1億円——笑うしかない数字で、この検索をしなかったら人生でまず見ることが無かったであろうものだった。

そうか、そうなのか……僕の精子が1億円……それなら、股間についているものが金玉と呼ばれるのも納得である。

word 46 「未発見 深海生物」

この地球上には未発見の生物がたくさんいる。僕が調べたことではないけど、偉い学者さんたちが言うにはなんと何百万種類もの生物達がまだ見つかっていないらしい……。

信じられないような数だが、偉い学者さんがそう言うんだからそうなのだろう。

それってワクワクする話だ。僕の先祖の代から世界中に人間が住んでいて、クタクタに使い古されていそうなこの地球にまだ何百万もの感動が眠っているというのだ。

中でもその多くは海の中にいるという話だ。青い星地球は陸よりも海の面積のほうが広い。ほとんどの人間が普段生活していないその場所に見つかっていない生物が多いのは当然と言えば当然の話である。

陸からではよく見えない海面の下の暗い海の中、我々人間が生身では到達できない領域に、今も謎の生物が生活している。

見たことない色、見たことない形、もしかしたら驚くほどデカイ生き物とかもいたりするのだろうか……。

長年に渡って名だたる学者たちが研究しているだろうその疑問、黒いパソコンを使えばもちろん瞬時に答えを知ることができる——。海に行かなくても特殊な機械が無くても、ボタンを押すだけで1発だ——。

何でもない場所にある一軒家の、どこにでもあるような部屋の収納を開くと、普通の高校生である僕は、今日も黒いパソコンを取り出した。

今日の検索を未発見の海洋生物を見ることに決めた。動画検索を使って、文字ではなくちゃんとその姿を見る。

生物系のことを調べたり、動画を見るのは嫌いじゃなかった。今こういう検索をしようとしているのも初めは動画アプリのおすすめに出来たきた珍妙な魚の生態を見たからだ。

最近見つかったという初めて目にするような形をした魚を見て、こ

んな珍しい生物は世界中にどれくらいいるのか調べたくなった。

つまり僕が見たいのは未発見生物の中でも、気持ち悪いとか驚くような形をした生物である。

気持ち悪い生物と言えば、1番に思いつくのは深海魚。奴らは高い水圧や光の届かない世界で生きているうちに独特な変化を遂げている。目玉が他の魚と比べてデカかったり、鱗が付いていなかったり。テレビでも時々それらの特集をやっていたりするが本当にどういってもこいつも独特。深海魚と一括りにするにはあまりにも見た目や生態が違っている。

深刻な環境に対する進化の方向が各々違っているのだろう。餌を取るのが難しければ、音で獲物を察知するのか、暗い場所でも見える目を用意するのか。天敵と相対した時の対処法も様々である。

そして、その進化の結果、深海魚は人間から見て見た目が気持ち悪いものが多い。

僕はその深海魚の中でも最も見た目が気持ち悪いやつを黒いパソコンに聞くことにした。どうせなら深海魚に限らず、甲殻類なども含めた深海生物という言葉にして、1番気持ち悪いという言葉も付け足して。

「未発見 深海生物 1番気持ち悪い」

動画検索に設定して、ワードを入力し、Enterキーを押す。するとすぐに、黒いパソコンの画面が切り替わった。

画面に大きく表示されたのは体の表面が透明になっている魚だった。まるで味のないゼリーで体ができているような、見た感じ柔らかそうで、内臓や骨が綺麗に透けている。そんな中、目だけが赤黒く大きいのでグロテスク。

何よりも気持ち悪いのがお腹の部分が風船のように膨れていてそこに小さな粒々がいくつもあることだ。集合体恐怖症の人が見たら泡吹いて倒れそうな粒々は、よく見ると1つ1つが細胞のように透明な丸の中央に黒い珠が1つという作りになっている。

これは卵か何かだろうか……眉をひそめて、気持ち悪い魚を見ていた僕……次の瞬間、さらに僕の眉間が歪む。

気持ち悪い深海魚が何かしたのではない。深海魚を映したカメラの奥に別の生物を見つけたのだ。

しかも、それはどこかで見たことがあるような……。

まさか、そんなはずは無いと思った僕は目をこすった。そして、顔を画面に近づけてもう1度よく見る。

けれど、カメラに映りこんだ別の生物は嫌な予感を決定づける行動を取った。

深海魚に向かって両手で手を振る――。水中に人型で存在するそいつは、皮膚が緑色で筋骨隆々――。

奴はまさしく、お隣さんだ。なぜ、こんなところに……。

word47 「黒いパソコン お隣さんから」①

「未発見 深海生物 1番気持ち悪い」を検索した僕はしばらくその場から動くことができなかった。

深海魚が泳ぎだして手を振るお隣さんの姿が見えなくなるまで、ずっとその様子から目が離せなかった。

そして、次の瞬間——ベッドにダイブ——。

「あああああああああ——」

枕に向かって叫んだ。

一体何が起こったのだ——。あれは何だった——。え、さっきのは夢か——。今は現実じゃないのか——。どうしてこうなった、どこで間違っただらう……僕の人生は——。

気持ちの整理がつかない僕は一旦大袈裟に取り乱した。

頭の中で思いつく限りの疑問を吐き出してスッキリすることによって、落ち着きを得ようとしたのだ。

「はあ……はあ……」

その数分後、ベッドからでた僕は、少し息を切らしていた。ちょうど1発抜いたくらいの疲労感がある。

そして、できればこのまま見なかったことにしたいけれどそういう訳にもいかない事態なので、問題と向き合うために黒いパソコンの前に座り直した。

向き合う問題はもちろん、なぜ先ほどの検索結果にお隣さんの姿があったかということである。

昔から僕の家の隣に住んでいた変人であり、黒いパソコンによって正体が宇宙人であると発覚したお隣さん。

彼が……あの場にいた理由、深海魚に手を振っていた訳、生身で深海に潜れる身体能力。お隣さんに関することだけでも気になるところはいくつもある。

けれど、何より気になるのがやはり……黒いパソコンとお隣さんとの間に何かしらの繋がりを感じた点である。

黒いパソコンは僕の意味を汲んで結果を表示する。つまり、僕が望

んでないものは表示しないはず。

今日、Enterキーを押すときにお隣さんが出てこないでほしいなんてまさか考えていなかったが、あんな驚愕映像を見たくないことはこいつなら分かっていたはずだ。

それに、黒いパソコンの動画検索は既存の映像しか見れないなんて低級なものではない。

もし、どこかで誰かが撮影した映像だとか監視カメラに映っていたものしか表示できない代物であるなら、こう考えられる――。

最も気持ち悪い深海魚を撮影したことがあるのが、地球人よりも高度な文明を持つ宇宙人であるお隣さんと、その仲間しかいない。ゆえにあんな風に手を振るお隣さんが映り込むものしか表示する結果が無かったのだと。

しかし、黒いパソコンはいつこの瞬間でも切り取って映像にすることができるとだ。これは過去の検索で確認済みの事実。前には恐竜の捕食シーンだって見たことがあるのだから、間違いない。

わざわざ別の生物が映っているものを見せるのはおかしいのだ。さすがの僕もムーディに右から左に受け流したりなんてできない事案である。

単なる黒いパソコンのきまぐれか、たまにあるいじわるか。そんなこと考えたことは無かったけれど、もし撮影されていた映像があれば、超科学的な異次元の撮影よりも優先されて表示されるのか。黒いパソコンとお隣さんを切り離せる推理もいくつかある。

けれど、どうしても黒いパソコンとお隣さんに繋がりがあるほうへ考えが引つ張られてしまうのは……人類にとって未知のものがすごく近くにあるからか……。

前々からうつすら考えていたけれど、直視していなかったことだ。とんでもない物がいきなり僕の部屋に現れたこと。とんでもない人間が隣に住んでいたこと。この2つが単なる偶然で片付けられるだろうか……。

2つを関連付けて、とんでもない物とはとんでもない人間の所有物だというような推論が生まれるのは自然のことではないだろうか……。

そう、黒いパソコンとお隣さんとの繋がりは前から感じていたことなのだ。それが今日より強くはつきりとしただけ。

考えるとぞつとする……。怖い……。

しかし、先ほどお隣さんが手を振っていた対象が……深海魚ではなく、画面の向こうにいる僕だと思えてならない……。

word 47 「黒いパソコン お隣さんから」②

仮にお隣さんが今日……いや、今日じゃなくても……僕が深海魚について動画検索することを知っていて、そこに映り込む術《すべ》も知っていたとしたら……この嫌な予感は的中していると思う。

お隣さんはわざと黒いパソコンの画面に自分の姿を映して見せたのだ。その意図は分からない……けれど、方法はお隣さんが僕に黒いパソコンを渡したりなんてしていたとしたら知っていてもおかしくはない。

それこそ僕が無いと決めつけている2台目の黒いパソコンを保有している可能性だってゼロじゃない――。

僕は自分の部屋の中から、お隣さん家の方向を見た。窓がある方向ではないので、ただ壁を見ただけだが、息を呑んで。さっきまで何の変哲もなかった部屋が落ち着かない場所になってしまった。誰かに監視されているかのような居心地の悪さがある。

もしそうだったら目的は何なんだろう。気づいてしまった僕はこれからどうするべきなんだろう。どうさせたいんだろう。

普通お隣さんから受け取るものと言えば、回覧板と旅行のお土産くらいだと思うんだが、何でも検索できるパソコンをお隣さんが届けてくれた場合、その裏にある理由はなんだ。ご近所付き合いなんかでは決して決してない。

必要なくなったからか、何かの実験か、前に知ったブログのネタか、それとも僕のが好きなんだろうか――。

こうやって迷ったときは黒いパソコンに頼りたくなくなってしまう。これを手にしてからはずっとそうだ。

けれど、今回ばかりはそうはいかない。

検索したばかりですぐには使えないし……それ以上に黒いパソコンとお隣さんとの繋がりを検索したとして、その結果が100%信用できるのかという問題がある。

もし実際繋がりがあつたとしたら、それを隠すような結果を表示するのではないだろうか。お隣さんの息が掛かっている可能性がある

となると、黒いパソコンが白かどうか疑わしい。

そもそもそういう検索はエラーになるかもしれない……。

つまり——つまりだ——直接対決を挑むしかないないのである。

「黒いパソコン お隣さんから」

次に知りたいワードはこれに決まった。しかし、聞くのは黒いパソコンだけでなく、お隣さんにも面と向かって聞かなければ。

ちよつと暇を潰そうと思って深海魚を検索しただけなのにとんでもない勝負の時が来てしまった。知ってしまった以上待ったなし、いつかはやらなければと思っていたがこのタイミングなのか。

できればまた後回しにしたいところだが、生まれた疑惑を解消するには、突撃！隣の宇宙人するしかないようだ——。

word 47 「黒いパソコン お隣さんから」③

次の日、僕は「黒いパソコン お隣さんから」を検索した――。

「このパソコンは、あなたのお隣さんから届けられたものではありません。」

黒いパソコンはそう言った。どちらにせよ、そうくるだろうなと思っていた答えだった――。

僕はそれから1週間ほど、お隣さんどう接触するのかを考えた。また、黒いパソコンと一緒に。この件に関しては信頼を置けないながらも、頼るものはこれしかないし、不確定な情報でも集めて、ちゃんと準備してから挑みたかった。

かなり勇気がいる行動のはずだけど、僕が逃げずにそこへ向かうことができたのはお隣さんが悪ではないと信じているからだだった。殺されることはないと思うのだ。さすがに……。

色々お隣さんについて調べてきたけれど、なんだかんだ隣の家で過ごしていること自体に恐怖は無いし、動物への優しさも本物っぽい。今回の件の発端も深海魚を保護している様子だったのかもしれない。

バレたら殺すつもりなのなら、もう手遅れだし、黒いパソコンにも確認を取ったことだ。殺さることはない……誘拐、監禁もされない……。

だとするならば、覚悟は決められる。この前提からの最悪のケースは黒いパソコンを失うことだが、それなら諦めはつく。想像してみたが、そう思った。元々、タダで手に入れたものだ。十分楽しませてもらった。

悲しいけれど、これが最後になっても……はつきりさせたい。

何よりも、モヤモヤを取り除きたかった。この先一緒に生きていくなんて到底無理な不安を処理したい。どんな深海魚よりも珍しい黒いパソコンの真相に迫ってやる――。

そう決意を固めた今日という日は、僕以外の多くの人にとってはなんでもない日であった。平日のど真ん中である水曜日の、晴れた日。テレビでは物騒なニュースが流れてくるが、自分の街では本当に同じ

日本でそれが起こっているのか疑わしいくらい、いつもと変わらず至って平和。

聞こえてくる話し声も、昨日のテレビのことだとか、友達のこと家族のことに関する話。話さなくてもいいような話で笑い合っている声が多かった。

僕はそんな日常が目一杯詰まった空気を吸い込みながら、日中を過ごした。たぶんそうしていないと、お隣さんと接触する予定の夕方まで精神が持たないので、今日がそういう日で良かったと思う。

僕も逆らわずに周りに流されていれば、平静を装うことができたから。

最後になるかもしれない検索は、何でもないことに使った。黒いパソコンの性能を確かめるときに使ったのと同じ「親友の弁当 今日」というワード。

考えるまでもなく、なんとなくそれが相応しいと思った。なるべく刺激が少なく、黒いパソコンがまだちゃんと僕の味方でもあることを確認する検索。昼になれば、結果通りのメニューを頼張る親友の姿があつて、少しだけ気が楽になった。

——だから、これからお隣さんの下へと向かおうという放課後が来ても、僕の覚悟は揺らいでいなかった。

月がいつもより高く見えるほど気持ちが良い空なのに……いや、だからこそなのだろうか……芯から冷え込むような冬の夜。本来ならば早く帰りたいところを、僕はゆっくり歩く。

冬ならもう真つ暗な時間である午後6時、今日はいつもよりも明るくて、遠くの山もよく見えた。いつもは昼間にしか見えないあの山の上の旗まで、探検しに行った遠い日の記憶がうつすらと、空をスクリーンにしているように思い出される。

何も知らなかったあの日の僕と比べたら、僕は知りすぎてしまったのだろうか。

目的地は僕の家から最も近い公園。お隣さんと接触するのはその場所。僕の家をお隣さんが訪ねてくると、両親は決まってそれとなく早く帰るように促していた。当然僕からもなるべく遠ざかるように

手を回していた。

お隣さんが僕はどうしているんですかと玄関で尋ねる声が聞こえてきたとき、母は僕が2階にいるにもかかわらず、友達と出かけていると答えていた。

そんな人と僕の家で会う訳にもいかず、会ってくると言つて出かけることもできない。

だから、放課後にお隣さんと会えるタイミングを探して、今日公園でと決まった。当然これも黒いパソコンで探したことである。

公園が見えてきたけれど、僕はこれ以上速度を落とさなかった。そのままゆっくりとお隣さんだけがいる公園に足を踏み入れる。

その一歩を踏み出した瞬間には、相変わらぬの両手バイバイが始まった時は多少動揺したが、それでも止まらない……。

やはり鼓動が正常でなくなる。けれど、逃げられない。来たと思うのだ……罪を清算するじゃないけど、今まで良い思いをしてきた分、怖い思いをする時が……。

「もしも……何でも検索できるパソコンが手に入ったら、あなたは何を検索しますか？」

お隣さんがいたすべり台のところまで行くと、僕は言った。

word47 「黒いパソコン お隣さんから」④

作戦の最初は遠回しの質問――。僕が黒いパソコンとお隣さんとの関係について気づいていることをこれで伝える。

もし、僕の予想通りであれば、そうすることでお隣さんから何かしらのアクションがあるはずだ。

良いにしろ、悪いにしろ……何かしらの……。

僕は滑り台の坂の部分に座る宇宙人の、一挙手一投足を見逃すまいと身構えた。

「へ〜?」

しかし、お隣さんから放たれた言葉は物凄く気の抜ける音だった。

「なにー? もう一回言ってくれろ?」

「……あ、えつともし何でも検索できるパソコンがあったら、おじさんは何を検索するのかなって」

「何でも検索できるパソコンって? 何かのテレビ番組の話?」

「いや、僕の妄想というか、もしもそんな物がこの世にあったとして、それを手に入れた人は何に使うんだろうって気になったって感じで……」

僕は予想が外れていた時用にあらかじめいくつも用意しておいたカードを、1つ選んで切った。

「ふーん、何でも検索できるパソコンねえ……何でもってというのは何でもっ?」

「……何でも?」

「この地球に今あることだけじゃなくて、過去のことでも未来のことでも、宇宙の果てでも、そのまた向こうの別の世界のことでも検索できるとってこと?」

「はい。それで画像検索も動画検索もできて、何でも見ることができません」

「そうだね………。うーんじゃあ、この世から争いが無くなる方法を調べるかね」

堂々とした顔でお隣さんは言った。徳の高さを感じる答えに、見る

目が変わる。かつこいいとさえ思った。

間違いないという予感がしていたのに外れていたのだろうか……。今のところの受け答えからは黒いパソコンとの繋がりが感じられない。それとも、とぼけているのか……。

「ちよつと、そのベンチに座ろうか——」

次の手を選んでいるうちに、何も言えなくなっていた僕にお隣さんが言った――。

公園全体がよく見える位置にあるベンチにお隣さんと2人座った時には、随分心が楽になっていた。とりあえず、いきなり襲い掛かってくるみたいな展開は無かったから。

いつでも土下座をする準備もしていたけど、それはする必要がなさそうだった。

子供の遊び場としての役目を終えた、静かな夜の公園で第2ラウンドが始まる。

「君だったら何を検索するの?」

「僕だったらですか……何ですかねえ」

「何か悩みがあつて、それを解決する方法が調べられたらなんて考えたから、何でも検索できるパソコンがあつたらつて妄想したんじゃないんだ?」

「……まあ、そうですね。ただ単にふと考え込んでしまっただけです」
「面白いことを考えるんだね。学生さんだったら進路の悩みとか恋の悩みとかないの?」

「悩みが無いわけじゃないんですけどね。今回はそれとは関係ないです」

「……ふーん。あ、アメちゃんあげる」

「あ、どうもありがとうございます」

「もう高校2年生だっけ?」

「はい」

「そっかあ……時間が経つのは早いねえ……高校2年生っていったら17年……もうそんなになるか」

「……ですねえ」

お隣さんが頭を上に向けたので、僕もなんとなくそうした。2人で、夜空を見上げる。

改めて話してみると、意外と普通に話ができ、そんなお隣さんにも、自分自身にも、なんだか笑ってしまいそうで不思議な感覚を抱く。「もしも……もしもですよ。本当に何でも検索できるパソコンが実在したら、どうやってでも手に入れたいですか。誰かから奪ってでも」「まだその質問をするのかい」

「……はい」

「奪ってでもか。まあ、人から奪うなんてやつちやいけないことだから、そんなことはしないかな……でも、さっき言った争いを無くす方法だけは検索させてほしいかな」

「どうしてですか?」

「……」

「おじさん?」

「……」

その時、お隣さんはおもむろに腕を頭の上にあげた。肘まで伸ばして真っ直ぐと、見ている場所と同じ方向を指差した――。

「私からも質問していいかな。君は……空に浮かぶあの星たちの……その1つから私がやってきたと言ったら信じるかい?」

帰る前の最終確認。そのつもりで言った質問だった。これで何も変わった反応がなければ、僕の思い過ごしだったと帰ろうとしていたのに……。

「寒くなってきたんで——」、次にそうやって言う準備もしていたのに、お隣さんは急転直下の爆弾発言をした。

「えっ」

その短い言葉しか言えなかった。とてもじゃないけど、次に何を言っているかわからない。

「……もっと、かいつまんで言うならば、私がこの地球で言うところの宇宙人という存在だったと言ったら、信じられるかい？」

「……な、何を言っているんですか？」

「どうか真剣に答えてほしい。とは言っても直感的に」

そう言いながら、空を見ていたお隣さんがまた僕の目を見たので、ベンチに座ったまま半歩分の距離を取ってしまった。いつでもダッシュで逃げられるようにと、バレないようにそっと足の先を公園の出口に向ける——。

いや待て、これで動揺するほうがおかしいか。まだ普通を演じるべきか。

「そんな……信じませんよ。信じられるわけないじゃないですか。おじさんが宇宙人だなんて。はは……」

「この惑星にはね、人間が気づいていないだけで、いくつもの星から来た何人もの宇宙人が住んでいるんだよ。姿を変えたり、人間が絶対に見れない場所だね。これもやっぱり私の妄想だと思ukai？」

「はい……だって、それってそれこそテレビや漫画の話じゃないですか。何言ってるんですか」

「まあ、信じられないだろうね。でもこれは真実なんだよ」

違う違うと否定の言葉ばかりが頭に浮かぶ。それを声にしたいという欲求が膨らむ。けれど、頭では分かっているのだ。

信じるも何も僕は最初っから知っているのだ——。

「遠回しな言い方をしたけど、私は君に信じてほしいんだ。私は宇宙人なんだ」

「……………」

だから、何も言えなくなってしまった。

「本当なんだ……………」

まるで宇宙空間に1人投げ出されたかのような気分だった。不安で怖くて、無重力になってしまったくらい足に力が入らない。

けれど、僕はその先が気になった。この闇の向こうに何かがあるのか。一体どうしてお隣さんは急に正体を明かしたのか。

「信じたら、どうするんですか？」

「君に聞いてほしいことがあるんだ。でも、これは完全に信じてから聞いてほしいから。まずは、私が本当に宇宙人だと言うことを証明するよ」

「ええ。一体どうやって」

「僕の本当の姿を君に見せるし、君が見たことないような生物や機械も見せるよ。それに……………」

「それに？」

「何でも検索できるパソコンがあるんだ、使わせてあげるよ」

見てどうにかなるわけではないけど、その言葉で僕の目がかっと開いた――。

「今日の君はいつもと違う。きっと本当は何か悩んでいるんだろう。それを使えば解決できるかもしれない」

どうしてこうなったんだっけ——？

僕は歩き出すとすぐに思った。途中までこんなことになるとは全く思っていなかったのに、気づけばなんかお隣さんと一緒に彼の家に行くことになっていた。ほんと、どうしてこうなったんだっけ——。

もし近所の人にこの状況を見られようものなら、面倒なことになるだろう。日中いつも公園付近でたむろしているおばさんお婆ちゃん連中に知られると噂が一瞬で広がる。ねえねえ聞いてあそこのお宅の息子さんがね、と。

それはまあ別に悪いことをしてないからいいとしても、両親に知られたら何故か怒られると思うし、言い訳も作りづらい。

僕の右隣、やや前方を歩くお隣さんは公園を出てからは一言も喋らなかつた。あまり手を振らない、不自然と言えば不自然な歩き方で前を向いたまま歩き続けた。

途中、車が来ていない横断道路を、手を高く上げて歩いたところで唇を噛みしめることになったが、それ以外は普通だ。

僕はその中で、頭を働かせ続けた。とにかく疑問を脳に向かって投げつける。なぜ急にお隣さんが正体を明かそうと思ったのか、お隣さんが聞いてほしいこととは何か、このまま付いて行っても本当に大丈夫か、そして——。

何でも検索できるパソコンとは、「あれ」のことなのか——。

全ての答えはこのドアの先にあるはず。辿り着いたお隣さん家の玄関の……このドアの先……。知りたいなら行くしかない。

「さあ、上がって」

家のすぐ近くだけど、1度もその先を見たことが無いドア。そこをくぐるときには武者震いがして、僕はもう半ばどうにでもなれという心持ちだった。

「…………お邪魔します」

「うん、こつちこつち。付いてきて」

お隣さんが電気もつけずに暗い廊下を歩いていく。僕は言われるがままそれについていく。真っ直ぐに廊下を歩くとその突き当りを曲がる。

入った部屋ではお隣さんが灯りを点けた。そこでまず目に入ったのは、冷蔵庫。それに、流しとテーブル。どうやらこの部屋はダイニングキッチン。ごく普通の内装をした。日本のどこにでもありそうな場所である。

今朝読んだっぼいテーブルに置かれた新聞、そこに猫が1匹寝ている。茶色と白の猫だ。

「ちよつと待っててね。よいしょ……よいしょつと……」

お隣さんは着ていたスーツの上着を脱いだり、ストーブを点けるといった帰宅時のルーティンを始める。

そして、何かしらのリモコンを持って、また僕のところまで戻ってきた。

「あ、ちよつとどいてくれる」

「はい」

覚悟は決めた……はずだった……。しかし、お隣さんのリモコン操作と謎の音により、何の変哲もない壁が地下に続く階段に変わった時は、目をぐつと閉じてしまった。

折れそうな心はどうにかしようと思間を強く摘まむ。

「これだけでも、私が宇宙人ということは分かったんじゃないかな……大丈夫?」

「……はい」

「今からここを下りるんだけど、そりゃ怖いよね」

「……まあ、はい」

「君に危害を加えることは決してしないことは約束するよ。じゃあ、行こうか」

その階段からは家の内装がSFチックになった。すごくシンプルでメタリックで、進む道に沿って淡い光の線が、壁と床にある。SFチックとは言っても地球人が開発した宇宙船なんかもこんな感じだったか。テレビとかで見たことがある。

手すりが付いているので、そこに触れてみると、何とというか高級な感触がした。しつとりと握りやすくて、手に馴染む。あと、触れている部分も淡く光った。

それほど深くは下りず、一般的な地下1階に向かうくらいの距離を下りると、これまたSFチックな高速の自動ドアが開く。

「さあ、ここだ。ここなら君に私が宇宙人である決定的な証拠を見せてあげられる——」

正に宇宙だとかを対象とする研究室、そんな印象を受ける部屋に辿り着くとお隣さんが言った。

そこでまず目についたのは、こないだ検索した深海魚の姿である。

word 47 「黒いパソコン お隣さんから」⑦

「この魚、知ってる？知らないでしょ。地球の図鑑には載っていない、それどころか私たち以外誰も見たことがない魚だからね」

「へー……」

知ってる——。

「そして……これが私の本当の姿なんだ。どうか驚かないでほしい。君にとってはショッキングな姿かもしれないけど……どうか落ち着いて……。さあ、変化が終わったよ。どうかな？」

「おお……」

知ってる——。

お隣さんは続けて宇宙人であることの証明をした。思わず声を上げてしまいそうなほど気持ち悪い魚の紹介……そして、地球人の姿から宇宙人の姿への変化。

一言で言えば、圧縮された布団を戻した時のような感じだった。圧縮袋の役割をしていたであろうお隣さんの借りの姿が膨らんでいつて、十分に大きくなればするりと本当のお隣さんがそこから抜け出てきた。

それもなかなか気持ち悪くて、本当のお隣さんの肌の質感とかにも珍しさなんかはあったが驚きはない。

なぜなら、知っていたからである。

「あんまり……驚かないんだね。これ、作り物じゃないし、ドツキリとかじゃないんだよ」

「い、いや……あの、なんとというか……驚きすぎて言葉が出ないんです」

言われて初めて自分の反応が不自然なことに気が付いて、思いつきの言い訳をする。

「ここには他にも君が驚くだろう物がたくさんある。これなんてどうだ。これが何の機械か分かるかな？」

「……いいえ、全然分かりません」

「これはね……なんと、人や動物の記憶を消してしまえる代物なんだ」

「ええーそんなー」

そうやって見せられたものも、僕の部屋にあるものとはほぼ同じようなもので、お宅の星の製品だったんですねくらいの感想だった。けれど、今度はちゃんと驚いた。

「ほら、見てて。そこにいる猿の記憶をほんのちよつとだけ消して見せるよ。ごめんね……オティフ」

「すごいですね……」

お隣さんがスプレーのような機械のスイッチを短く押すと、リスザルみたいな猿がぼんやりして、次の瞬間驚いたように飛び跳ねる。着地に失敗して、ひっくり返ってしまった。

それを見た僕は、本来こんな風に驚くんだとお隣さんは予想していたのだろうと思う。

「いやあ、ごめんごめんオティフ。お詫びに君が好きなアメちゃんをあげるよ」

お隣さんがまたどこかから取り出したアメを受け取った猿のオティフは勢いよくアメを食らった。そのアメは僕に渡したものと多分同じだった。

「それで……もう、宇宙人であることは信じてくれたよね？」

「はい、もちろん」

「じゃあ、どうしよつか。僕の話聞くのが先がいいか。何でも検索できるパソコンを使わせてあげるのが先がいいか」

「そうですね……じゃあ、パソコンを使わせてもらってもいいですか」

僕は迷わず、1番知りたいことを先に知ることを選んだ。

すると、お隣さんは何も言わずに部屋の奥に進んで、1つのパソコンを持ってくる。

白い色をしたパソコンだった。白いマウスもセットで、一見したところ何の変哲もない。

「これって……」

「これが、何でも検索できるパソコンだよ。君がさつき話してくれた妄想のパソコンよりは性能が劣るけど、普通のパソコンじゃまず無理な検索機能が備わっている」

「へー……」

「人々が鍵をかけて守っている個人情報みたいなデータや、ネットに繋がっていない保存危機にあるデータも検索できるし、地球全体を詳細にスキャンして今現在どこに誰がいて何があるかも完璧に把握できる——」

お隣さんの話を聞きながら僕は、やっぱり違ったかと思った。色を見た時もだが、その前からずっと僕の持つてる黒いパソコンとは違うと思っていた。もし、同じだったら先ほどの公園での会話に違和感があるからだ。

「過去は無理だけど、少し未来のことも知ることができるとだ。例えばある人間の明日の行動を検索すれば、時間はかかるけどその人や周りの人間の性格や行動パターンを分析したり、明日の気候条件を調べたりして、何時にどこにいてどういう気分だとかをほぼ100%当てられる。地球や地球人のことをとことん調べ上げて作られた驚くべき機能さ」

「本当に使っていていいんですか」

「ああ、約束だからね。けどちょっとだけだからね」

「はい」

確認を取ると、僕は画面の中にあるワードボックスに「隣の家 パソコン」と入力する。

それは、ここからも問題が見つからなければ今日一番の目的を達成できる。そんなワードだった。

思ったより冷静で、いろいろ考えられているようだが……そこまで考えはまとまっていない。ただ、ひたすらに最も欲する答えを求めていたら、気づけば入力していた。

キーボードの上、ほんの短い距離で指を動かしていくほど鼓動を早めて、やっとそこに辿り着けば、黒いパソコンとは少し違った形をしているEnterキーを、息を吹きかけるようにそっと……押す。

「右隣、左隣、どちらでしょうか？」

白いパソコンはまず、そんな文を表示した。

僕は頭の中で自宅とお隣さんの家が並ぶ姿を思い浮かべると、すぐに右隣という文字をクリックする。

「この家の右隣に位置する住宅には1つのパソコンがあります。」

すると続いて画面上にそんな文が表示される――。

そして、それと共に目まぐるしいほどの情報を白いパソコンは見せた。

最初に、僕の家に置かれているその赤いパソコンの画像。それとパソコンの販売元のメーカーと型番、購入日時と使用期間、インストールされているソフト一覧に操作履歴。そういった情報がパソコンの画像を取り囲むように、それぞれ小さなウインドウに入った形で出てきた。

やはり――黒いパソコンとは違っている。僕が検索したかったのは僕の家に黒いパソコンというとんでもない物質があることが分かるかどうかだったのに――。

僕は小さなウインドウの1つをクリックした。すると、それが拡大されて、父が閲覧したであろう競馬サイトや誰が使ったのか分からない通販サイトの情報がよく見えるようになった。

そのままいくらか続けて操作してみる。感覚で分かるくらい親切に作られている白いパソコンに頼って、クリックしたりホイールした

り。その結果、僕の部屋の情報や、僕のスマホの情報などもそこから閲覧することができた。

しかし、黒いパソコンの情報はどうも得ることができそうになかった。

良い方の答えが出てくれたことで、ほとんど吸い込めていなかった空気がようやく体に入ってくる。これでやっと確信を持つことができた。黒いパソコンとお隣さんは関係が無いのだと。

散らかったウインドウを消しながら、頭の中で再確認する。お隣さんは何でも検索できるパソコンがあれば知りたいことがあるのに、知れていなかった——。この白いパソコンは性能が低いし、使用者の意思を汲んでくれない、つまり黒いパソコンとは違う——。そして、このパソコンではなぜだか黒いパソコンについて調べられない——。

この辺りの要素をまとめれば、安心していいはず。

けれど、だとしたらなぜ……黒いパソコンは検索結果にお隣さんを映したのだろうか……本当にただの偶然なのか……。

「それは何を検索してるんだい？」

「え」

横からお隣さんがパソコンの画面を覗き込んでくる。

「これは、その……ちよつと試しに感じて……」

「いやいやごめんね。言いたくなかったら言わなくていいんだよ。人が検索してるのを見るなんて失礼だったね。人間にとってパソコンの使い方なんてのはプライバシーの塊みたいなものだから」

「あつはは。そうですね……」

お隣さんは僕の近くから離れて、猿のオティフが入った檻の近くまで行くと指を入れて遊び始めた。きつとそうして悩みを検索しやすいうようにしてくれているのだった。

僕はそれから怪しまれないように思い付きで高校生の悩みっぽいことをいくつか検索した。折原さんのSNSの個人メッセージだとか、定期テストの答案だとか……。

「——もう大丈夫です」

それが終わると僕は言った。

「はいはい。ちよつと待っててね」

お隣さんは軽いノリで返事をした。ちよつとおネエつぽさを感じる口調だった。

オティフを優しく檻の中に入れて近づいてくるお隣さんにもう恐怖は無かった。ちよつと抜けたところがあるお茶目な宇宙人ともつと触れ合ってみたいほどである。

だからその顔を見て、これからお隣さんが聞いてほしいという悩みもきつと大したことが無くて、またちよつと笑ってしまいそうなものだろう。勝手にそう思った。

「終わった？」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ、私が君に聞いてほしい話なんだけどね………実は私もうすぐ死んでしまうんだよ」

けれどここでもまた、お隣さんは状況を変えてきそうな言葉を発する。

「……………」

飛び出てきた言葉に面を食らった僕は、感嘆詞を発することもできなくて……ただお隣さんと目を合わせた。

そのまま数秒間、次の言葉を待ったが……どうも、お隣さん側も困っているようだった。

聞いてほしい悩みと言われたら、何かしらの悩みのことであるとは思っていた。成人男性ならぬ、星人男性。そんないかつい緑色の体をしている彼の悩みがどんなものかは分からないが、どうせまた動物が懐いてくれなくて困ってるだとか、そんな悩みかよと言いたくなるものを相談してくるのだとばかり……。

「できれば、落ち着いて聞いてほしいんだけど……もつと言うと地球も無くなってしまう可能性が高いんだ」

「え、ええ……地球ですか？」

「まだ100%ではないけど、99%と言ってもいい。今宇宙で起こっている戦争が日に日に悪化していてね。色んな惑星や、そこにいる人間を巻き込んでいるんだ。もう奇跡でも起きない限り、地球も戦火に包まれることになる」

「え……ええ……」

僕は叫ぶのではなくて、引いてるみたいな驚き方になった。人間本当に驚くと、上手く声が出ないものである。

あと、その実感が湧かなかった。

「ほ、本当ですか。つまり、僕も……僕の家族とかも皆……」

「そうだね……。中途半端に希望を持たせるのは可哀想だからはつきりと言うけど、助からないだろうね。単純に流れ弾で地球が壊れる可能性も高いし、そうでなくても資源を根こそぎ奪おうと侵略されるパターンもあるだろう」

「そんな……そんなことって」

「とてもとても大きな力を持つ惑星同士が争っているんだ。地球人では想像もできないくらいね。もうそれはきつと誰にも止められない。

私も止めるために召集されていて母国に帰るんだけど、間違はなく宇宙のクスになつてしまっただけだね」

「それは一体いつなんですか？」

「私が地球を出るのは来週。地球がどうにかなつてしまうのがいつなのかは不明瞭だけど、おそらくそのまた来週……1か月以内には恐ろしいことになると思う。だからさつき正体を明かしたんだ」

「皆死んでしまうからつてことですか……」

「ごめんね。それでも話すべきではなかったことだ。しかし、私も誰かに聞いてほしかった。この恐怖や悲しみを誰かと共有したかったんだ。どうか許してほしい」

そう言いながら、お隣さんは僕を抱きしめて頭を撫でた。硬い手だったけれど、触り方が親ほど柔らかかったので落ち着くものだった。

「私はね、この星で長く暮らしていく過程で、この星のことが好きになつたんだ。最初はどこでもいいから誰も私のことを知らない遠い星で、何の刺激もない生活を送りたかつただけだったのに、いつの間にか本当に好きになつた。何より美しく、数多の生物が共存しているのが素晴らしい。こんなにたくさん種類の生物が生息しているのは宇宙中探したつてここだけさ」

「おじさんは生き物が好きですもんね……」

「そう。それから君のことも大好きだよ。こうやって頭を撫でて逃げなかつた人間は君だけだからね。しかもこの姿でも大丈夫だなんて、正直驚いてるよ」

「あの、本当に本当ですか……地球が無くなつてしまうというのは」

「ああ。まだ何もそんな様子がないから信じられないのも無理はない。それでも……これから話すことを……信じられなくても私の話を真剣に聞いてほしい。私という人間について、私の地球での暮らしについて、君に聞いてほしいんだ——」

それから僕はお隣さんの話を聞いた——。

部屋を変えて、1階部分の平凡な日本家屋での対話だった。用意してくれたお茶とお菓子を間に挟んで、1時間ほど。

僕はお茶を飲むことができたし、お菓子を食することができた。胡坐をかいて座ったし、話の途中からは笑うこともできるようになっていった。

その間は問題について考えるのをやめたからだった。考えたって仕方がない、僕なんかの頭じゃ到底答えが見つけれられない問題だからである。頭の中で、触りの部分だけ手を付けようとしたけど、すぐにこりやすさが無理だと分かった。

頭がフラットな状態で、お隣さんと向かい合う空間は摩訶不思議であつた。過去にも未来にも同じ感覚になることは無いと思つた。ちやうど明晰夢を見ているみたいで、瞬きの最中にもこの状況がどう転ぶか分からない不安定さを孕みながら、たぶんどうなつても自分の身は安全である気がする。

その雰囲気の発信源であるお隣さんの話は、彼の生い立ちから始まつて、地球に來た理由、地球での活動、あとは地球人のここが変みたいなどころまで及んだ。

もはや感覚がマヒしているだけな気がするが、驚くような内容ではなかつた。物凄く大げさに言うなら、外国人が日本に移り住んできた理由をインタビュウしている番組を見ると変わらない。

ただ、なんとなく切なくて……ずっと小雨が降り続けている……そんな話だった。

僕は何事もなく、お隣さんの家から解放されると、自室に直行した。いつもより遅い帰宅の理由を問い、ラップがかけられた夕食を勧めてくる母親は、目を合わせずに振り切った。何も話しかけてくるなオーラを放出した。理由を話せないくらい悲しかったり、腹立たしかったりする出来事があるんだとなりふりで主張した。

実際その通りだし――。

わざと大きな音を立ててドアを閉めると、黒いパソコンを取り出す。

その黒いボディを折たたんだまま机に置いて、それを覆うように突っ伏してイスに座った……。

その状態で僕はまず、ぐつと目を絞った。あくびをしてもいないのに目尻が潤うほど強く。そのまま十秒ほど制止すると………今度は全身の力を一気に抜いた………。

それから1つずつ頭の中を整理していった。カードを順番に並べるようにゆつくりと。なるべく先のことは考えたくなかったから。

元々用意していたカードは全て破り捨てた。お隣さんとの接触からは予想外の連続だったのでまるで意味がなかった。

まずは今一度……黒いパソコンとお隣さんに関係がないことを確認する。先ほどお隣さんの家の地下室でも確認したことだが今一度、今日1日を振り返りながら……それが確実に確かである、確定中の確定であることを確信させた。

今日最も得たい情報だったから、やれるだけやるに越したことは無い作業だった。

もう十分だろというところまでそれが終わると僕は本題に入る。また目をぐつと閉じて、体勢を変えながら頭も切り替えた。

端的に言えば、これから僕がどう動くのが正解かという考え事である。

たぶん……そうなのだろう。まだちよつと信じられないし、向き合えないけれど……黒いパソコンとお隣さんに関係が無いのに、あの日

深海魚を検索した時に黒いパソコンがお隣さんを登場させた理由は

——僕に宇宙戦争が起こりかけていることを知らせ、それを止めさせるため。

これは僕の考えすぎで、勝手な決めつけだろうか。しかし今のところそれ以外に候補もない。今日一番のイレギュラー、あれを聞いた時に、一体なぜと考えながらあの場にいた僕は、驚くと同時に「これか」という思いも抱いた。

もしも違っていたとしても、だったら本当にただの気まぐれだったというだけ、間違っていたとしてもこれについては考えなければならぬことだ。

だから、そうなのだとしたら……僕はこれから、今この瞬間からどう動けばいい……。

結局この黒いパソコンが何なのかについては、僕の中で有力な候補が1つ生まれた。きつと真相に近づける検索が1つ浮かんでいる。けれど今は近いうちに地球が無くなるなんていう冗談みたいな話に向き合わなければ。

まず考えるべきは……。

「このまま僕がこのパソコンを持っていいのか……」

自問自答、僕は心の中にもう1人の僕を作って、話し合うように検討を始めた。

横を見れば、見慣れたベッドがそこにある。今朝そこを出た時と全く同じ形で、布団はずり落ちていて、枕は少し斜めの……僕の好きな形。

本来ならお隣さんに関することは、いつものようにあの枕に向かって叫んで見なかったことにしたいものだが、さすがにそういう訳にもいかない。今の僕の肩には人類何十億人も命がかかっているかもしれないのだから……。

黒いパソコンを使えば、たぶん宇宙戦争は止められる。お隣さんの話ではかなり大きな戦争で、宇宙の広範囲を巻き込む深刻な状況であるとのことだったが……たぶんこいつが出す答えをそのまま実行すれば、それで済む。

本来もんのすつごく難しいことであるはずだが、このパソコンならできる。僕はエロ目的や動画アプリ代わりに使ったりしているけれど、それくらい凄いい物だから。

でも、その検索をするのが果たして僕でいいのかという問題がある――。

いやどう考えてもお隣さんに渡すべきだろう。まずは正しい僕が頭の中で言った。

宇宙規模の戦争なら、地球よりもずっと高い文明を築いていて、宇宙にもより精通している宇宙人のお隣さんに渡したほうが、上手く戦争を止められるに決まっている。そもそも僕にはできない可能性だっただけであるのだ。

事情を話して説明すれば、お隣さんよりもっと良い人も見つかるかもしれない。お隣さんの星のお隣さんより偉い人みたいな。イメージで言えばお隣さんより濃い緑をしたより化け物じみたルックスの宇宙人。そんな人が。

時間的にも渡すなら早ければ早いほどいいだろう。もし黒いパソコンを他人に渡した瞬間にその日の検索がリセットされるのであれば、今から日を跨ぐまでの4時間分早く検索できる。その時間で助か

る命もあるかもしれない。

今からこのパソコンを持って、隣の家のチャイムを鳴らして、回覧板を渡すかのようにこのパソコンを渡せば……それでこの件は終わり。それが一番なのかもしれない。

そうだ、それがいい。僕はそう思って黒いパソコンにそつと手を伸ばす。けれどその黒いボディに指が触れると、そこで拳を強く握った。

しかし、それをやってしまうと、2度とこのパソコンを使うことはできなくなる。黒いパソコンとおさらばということになってしまっ
じやないか。

それはどうかな……。そこで今度はもう一人の僕が聞へと変わる。

こんなにすごいパソコンを手放してしまうなんて考えられない。如何なる状況であれ最後まで所有する方法を探るべきだ。僕の生活を鮮やかにしてくれたこのパソコン、もうこのパソコンが無い生活なんて考えられない。

まだ検索したいことが残っているのに、このパソコンを使ってやりたいことがあるのに。せめて最後にもう1回エロいことを検索させてほしい。

しかも宇宙人に渡すととなると、僕に危険なことが起こったりする可能性もあるだろう。こんなパソコンをどこで手に入れたと尋問されたり、宇宙に拉致されたりもあるんじゃないだろうか。

それに、それにだ。お隣さんに渡したほうがいいなんてこのパソコンを舐めすぎではないか。このパソコンならきつと僕でもできる、予想だにしない答えを教えてくれるはずだ。信じるべきだ、このパソコンを――。

僕はそれからあらゆる可能性を考えた。何度か黒いパソコンを持ち上げて部屋のドアの所まで行ったりしながら。頭の中でもあつちへ行ったりこつちへ行ったり。

正しい僕のほうが優勢だった。そりやもう宇宙戦争を止めるという目的だけならお隣さんに渡したほうがいいに決まっているし。人の命がかかっているなんて重すぎて気が気じゃなかったから。

黒いパソコンを誰かに渡すってことも、実は少し前からそうしたほうがいいのではと度々思っていたことだ。恐竜の映像を見たときなんか頭に浮かぶ、こういう映像をその分野の研究者に見せたらどれほど喜ぶだろうと。その方が有意義なのではと。

だから僕は胸を痛めて時間を過ぎさせた。渡しに行かなきゃ渡しに行かなきゃと思いつつも、行動には移せなくて、そんな自分が情けなくて。

この判断すらも黒いパソコンに頼りたい。そんな自分を見つけるよりも情けなくなつて。力が抜けてしまった。

そうしている内にもう0時まで1時間を切ったから、あとはごめんなさいと空気に謝りながらその時を待った……。

そして僕は日を跨ぐとすぐに検索して、答えに少しでも不確定な要素や難しいことがあれば走ってお隣さんの所に行く決めて、その時が来ると――。

「宇宙戦争 止め方」

こう今までで1番のタイピング速度で入力したのだ。

word 49 「宇宙戦争 止め方」③

「まずは、飯を食べて寝てください。――」

それは、これから勝負だと思っていた僕にとって予想外の始まりだった。

「事を起こすのは今日の午後からなので頭と体を休めてください。――」

軽くストレッチをした後、立ったまま検索をしていた僕は力が抜けてしまって、その場に膝をつく。

「宇宙戦争を止めるには今日の午後1時25分以降に、あなたのお隣さんの家に行つてある作業をする必要があります。午後8時35分までに作業を終えれば得られる結果は変わらないため、放課後の時間でも問題ありません。細かい操作も必要になりますが難しいことはありませんし、間違えても修正は利くので落ち着いて作業してください。最初に、お隣さんの家への侵入方法ですが――」

椅子に抱き着いて体を支えてもらいながら読んだ文は、想像の何倍も簡単なもので、本当にこんなこと言いたくなるようなものだった。

そのパソコンからのありがたいお言葉を僕は何度か反芻した。自分の心の書き留めるように。それから立ち上がって、スマホで画面の写真を撮る。間違いがないように2枚、そして3枚と。

部屋を出て、階段を下りて、電気が消えてしまっているリビングへ。冷蔵庫を開けるとラップがかけられた皿を取り出す。

それを電子レンジに入れて温める。適当に決めた1分10秒という加熱時間、僕は無表情のまま暗闇で立ち尽くした。

帰りの階段は寝ている家族を起こさないようにそつと上った。食器が震える音をなるべく抑えながら、猫のように柔らかく。

夕飯を机の上に置いて、席に着く。

箸を握って、とんかつを一口、ご飯も掻き込んだ。

それが喉を通ると……僕はそこでようやく……喜んだ。

「つつつつつしゃ」

箸を折れてしまいそうなほど強く握り、コップを振り上げてお茶を飲む。その喉越しは全身に響くほどの快感、これが……噂に聞く勝利の美酒。いや、勝利の美茶と言うべきか。

宇宙人をどうやれば撃退できるのか、少しでも多くの人間を救うにはどうすればいいか。きつと難しいだろう、結局お隣さんに黒いパソコンを渡すことになるだろう。そう思っていたのに、あんな簡単なことで良いのか。

緊張感もさることながら、乗り越えた時のそれは高校入試の合格発表を凌駕するほど……。

僕だけで戦争を止める方法があったこと、それが簡単だったこと、黒いパソコンを手放さなくても良いこと、それらが分かったその喜びはすぐには飲み込めなくて、息を整えて準備してからでないと体がパンクしていまいそうなほど大きかった。

さらに口いっぱい頬張る。衣がしなしなで、肉も硬くなっていたけれど、その時食べたとんかつは今までの中で最もおいしく感じた――。

――しかし……喜び切るのはまだ早い。また日が昇ってしばらく、僕は再びお隣さんの家の前に立った。

今日の空もよく晴れていた。昨日と同じくらい。

どこかの風景画に描かれていそうな、正に絵に描いたような晴れた日の空。程よく少ない雲と、包み込むような日差し。北極や南極がどうこうみたいな面倒くさいケースを覗けば、地球上のどこにでもあって、見ているだけで生物に平和を感じさせる……。

そんな空の下——とある地点に僕は自らの足を踏み込ませる。

これまたどこにでもありそうな住宅地の、どこにでもありそうな住居。僕にとってはよく見慣れた場所で、物心ついた時から当たり前ここにがある。少し前までは何でもないはずだった場所。

けれど今は、ここが——僕が立っているこの場所こそが——世界の真ん中である。

宇宙戦争が起こるのか止まるのか決まる場所だから、そう言っても全く過言ではない。今からお隣さんの家というこの場所で、世界の命運が決まるのだ。

そしてそれを選ぶ手は、僕の手だ。宇宙人と直接対決する訳ではないから、その実感を与えてくれるシチュエーションとは程遠くて、いざ来てみてもそれほど緊張は無い。

でも確かに、これから僕は世界を救うのだ——。

お隣さんの家の敷地内に入ると、裏口のほうへ回った。置かれた植木鉢やペット用のエサ皿なんかの間を、忍び足で進む。外から見られないように、体は半分折り曲げて。

そうしていても僕の家の2階の窓からは丸見えなので、運悪く母や姉と目が合うことが無いように祈った。

裏口の隣の窓まで来ると、そこへ手を伸ばす。そつと力を入れると開くことが分かったので、そのままなるべく音を立てないように開ききる。

最後にもう一度後ろを確認してスクールバックを投げ入れると、僕はその小さな窓へ体をねじ込んだ。人が通ることを想定していない縦長の窓なのでかなり窮屈、横腹を痛めながら家の中へ転がり落ち

る。

人生二度目のお隣さんの家——。今ここにお隣さんはいない。そして、彼はここに戻ってくるつもりもない。

それはパソコンから聞いたことでもあったが、昨日お隣さんの口から直接聞いたことだった。お隣さんは地球を出ていくまでの1週間を、どこか誰もいない場所で過ごすと言っていた。自然の中で1人、自由に穏やかに生きて……そのまま地球を出ていくつもりだと。

だからこそ、こんな杜撰な戸締りで家を放置していたのだ。

「まずは……」

僕はスマホを取り出して、昨日撮っておいたパソコンの画面を確認しながら窓を閉める。

「リモコン……2階に普通のパソコン……」

お隣さんの家に入って作業に取り掛かると、綱渡りを始めたような感覚が始まった。体も頭を機能を制限されて、黒いパソコンの言葉を復唱しながらそれだけを頼りにするしかなくなる。

僕は無駄なことは一切せず、指示通りの行動をした。リビングから昨日お隣さんが使っていたリモコンを持って2階に上がり、すぐ右手にあった部屋のドアを開けて、机の上に置いてあったパソコンを起動した。

黒いパソコンが教えてくれた宇宙戦争を止める工程は大きく分けて3つ。その1つ目がお隣さんが地球での仕事でも使っているこのパソコンと謎のリモコンの操作である。

「左上にあるソフトをダブルクリック……ファイル内にあるotih55……設定から……パスワードは——」

目で見て、声に出して確認する。あまり急ぐ必要はないので、人差し指だけを使って操作した。

そうしていくと、おそらくはお隣さんの母国語である見たことが無い文字の画面に辿り着いて、そこでも黒いパソコンの指示通り操作する。最後に、リモコンのボタンを1つ長押し——。

すると、どこかで扉が開くような音がした。

まごうことなき不法侵入、家主に見つかる心配は無いとはいえ息を殺してしまう。見慣れない部屋にいるという状況、そこでよく分からない作業をしている、そして上手くいくかどうかという不安。僕はちょうど今が脱出ゲームの中に入っているという風に思えた。

そしてそう思えたら、少し気が楽になった。

「この道具はもう必要なさそうだ……」

そう言いながらリモコンを置く。しかし、手を放す寸前で止めた。元の場所に戻したほうがいいかと思いついたのだ。

スマホの画面を確認する。そこにはリモコンを元の場所に戻すや、パソコンの電源を切るといった指示は無い。けれど、普通に考えたら戻したほうが良いに決まっている。

僕は少しそこで考えた。その結果、動かしたものは戻して帰ることに決めた。決め手となったのは、その場に置けとも書いていないこと。きつとどこに置こうが結果は変わらないはず。だったら戻して帰ったほうが、お隣さんにバレなくて済む。

念のため、また今夜成否を検索するつもりだが、その時にダメだったと言われたらまたその時に考えよう。まあたぶん大丈夫だ。

僕は1階に下りて、リモコンを元の場所に置くと、次の工程に取り掛かった。先ほどの作業のおかげで開いた地下へと続く扉、そこを通って昨日行った研究室みたいな場所へ向かう。

さらに階段を下りて、高速の自動ドアを抜ければ、気持ち悪い深海魚が僕を出迎えた。

「奥の壁にあるボタンの中の……星形みたいなマークがついたボタンを押す……すると液晶パネルが複数出てくるので……」

僕はそこでも先ほどのように黒いパソコンの指示を忠実に実行する。作業内容としてはさっきと大して変わらない。キーボードとマウスを操作するのから、液晶パネルのタッチ操作に変わったただけだ。僕にとってはどういう操作をしているのか全く分からないけれど、ただ言われるがままにやった。

「このウインドウを右にスワイプさせる……右のパネルまで投げるように……打ち込む文字はこれとこれとこれと……ちよつと長いな、えつと……それでこれとこれとこれ……おっぱいみたいなマークを2回タップ……」

スマホの画面とにらめっこしながらぶつぶつと、それでも先ほどの作業と合わせてこの家に入ってから40分か50分くらいだろうか、2つ目の工程が終わりを迎えた。

あとは、もう1つボタンを押すだけ。深く息を吐きながら、そう思つて実行した。すると、部屋の灯りが暗くなる。

同時に部屋全体の機械や装置みたいなものが電源を落とすような音がする。僕はそれらを見て聞いて、先ほどとは違って元の状態に戻す作業も兼ねてくれていたのだと察した。

回れ右して歩き出す。暗くはなつたが見えないほどではない部屋には、できればじっくり見ていきたいものがあつた。昨日も真剣な話をするお隣さんの手前あれこれと目を輝かせる訳にはいかなかつたが、ホログラムや近未来的な銃みたいなものもあるのだ。あとはたこ足みたいに動いている機械の触手とか。

どういふものなのか触つて確かめてもみたい。今なら多少時間はあると思うが、精神的に落ち着けない。だから、僕はそそくさとそこを出た。

そのままお隣さん家の外まで一直線。入ってきたときと同じように窓を通つて脱出した。脱出ゲーム気分でいた僕はその時、ゲームでもこんな風に普通に窓から出れそうなのがあるよなと思う。

あと残つた3つ目の工程は物凄く簡単。ほか2つに比べて時間も手間もかからない。

その内容はというと、外にある倉庫の中からプラスチック容器に入った液体を取り出して、庭にある流しに捨てる。ただそれだけ。

僕はその通り倉庫を開けて、指示された色と形の容器を取り出した。

蓋を開けて流しに注いだ液体は黄緑色をしていた。匂いも薬品っぽくて、いつか化学室で嗅いだことがあるような鼻にツンとくるもの

だった。

「これで終わり……」

軽くなった容器から一滴ずつ落ちる液体を見て思う。本当にこんなので良かったのかと。昨晚文章で見た時の感想もそうだったが、いざやってみてもやはり手応えは無かった。これで宇宙戦争が止まって、世界の平和が守られたとはとても……。

けれど、黒いパソコンがそう言ったのだから間違いはないはず。バタフライ効果とかそういうものなんだろう。地球で起こった小さな変化が、宇宙では大きな変化をもたらしているのだ。

きつと、そのはず……。たぶん、そのはず……。

夕飯を食べ終えた僕は自室のベッドに寝転がっていた。仰向けの姿勢でスマホを手に持って、気になった動画を見ている。動物の動画だとか好きなアイドルの動画だとか。

友達から何か連絡が来たという通知は無視して放置している。他にもやったほうが良いこともいくつかあるが、全て無視。明日の授業の予習も、ギターの練習も筋トレもやる気が出ない。

なぜなら、今日の僕の行いで宇宙戦争が止められたかどうか定かではないからである。

どうにも落ち着かなかつた。おそらくは大丈夫、確率で言うなら98%くらいは。それでも残り数%ダメだった可能性がある。そんな気がするだけで何も手につかない。

だからただ……これと比べてみたい動画がある訳でもないのにスマホを眺めていた。いつもならこの行動は寝る前にするものである。子供でも見れる動画を眺めながら、じっと待つのだ。目を開けるのも辛くなって、スマホの充電コードまで手が届かずに寝落ちてしまうあの瞬間を。

それと違って今は、黒いパソコンが検索可能になることを待っている——。自分1人では何もできない僕は、ただ黒いパソコンが道を示してくれるのを待っていた——。

体勢を変えて体を伸ばすと、あくびが出る気配を喉のあたりから感じたので、僕は口に手を持っていった。しかし少々の間、動画を止めて待つても出てきてくれなくて、代わりに溜め息を吐く。

なんだか情けない気持ちもあった。昨日もそう感じたことだが、ピッチに陥った時に僕は黒いパソコンに頼るばかりで、自分の力でどうにかしようなんて全く考えていない。

今回の件に関してはそんな調子でも仕方ないかもしれないが、思い返してみればいっだってそうだった。僕は黒いパソコンを手に入れてから、何事も黒いパソコンに頼ってばかり。ちよつとした悩み事でも判断を任せてしまうこともある。

いつからか……すっかり依存してしまっている。黒いパソコンが無い人生が考えられない。情けなくなつたと言うよりは、僕が情けない状況になつていることに気付いたと言うべきか。

僕の人生このままで良いのだろうか。ずっと黒いパソコンに動かされるような人生で本当に……。

「……うん。別にいいな」

と、そうやって悩んでもみてもそれが答えである。だって黒いパソコンは世界で1番正しいのだ。その指示通りに生きて何がダメなことがある。

だから厄介だ。黒いパソコンがもたらしてくれるメリットは、依存してしまうことや、今こうして無駄な時間を過ごす羽目になっているデメリットなんかよりもずっとずっと何億倍も大きい。

こんな悩みごとの忘れ方も、無駄にした時間の分を取り戻すほどの効率的な使い方も検索すれば分かってしまう。

手強いな……。僕はもう1度溜め息を吐いて、今度は笑ってみた――。

「作戦 成功？」

0時を回ると、僕はすぐに黒いパソコンを。その必要も無さそうだけど、ハテナマークを最後に付けた。

気持ち的には僕がもうこの件に関して何もしなくていいのかが聞いていた。もうあんな面倒なこととはしたくない、そう思つてEnterキーを押す。

「あなたの活躍により宇宙戦争は止まり、地球に住むたくさんの方が救われました。作戦は成功です。お疲れさまでした。」

結果はなんだかあっけなかった。ホッとはした……すぐくしたけれど、昨日と違ってあまり喜びみたいなのは湧いてこない。リアクションとしては、何度か頷いたくらいである。

小さなガッツポーズすら出ずに、もう1度文を読むと、黒いパソコンを閉じた。

その黒いパソコンの隣には、検索で宇宙戦争が止められたことが確

認出来たらやることに決めた予習用の教科書とノートが準備してある。落ち着いたらやる気が出る気がしていたのだ。

でも、どうしてだろう。まだ全然やる気が出なかった。むしろそういうことは忘れて、さっさと寝てしまいたい。ああ、予習しなくても済む方法を黒いパソコンで検索したい。先生が予習をチェックするかどうか黒いパソコンで検索したい。

ここ最近お隣さんとの件で後回しにされていた娯楽目的の検索もしたい。いくつか思いついたものがあるのに、また24時間待つのが苦しい。

「はあ……」

だけど、明日もまだ駄目だ。次の検索も決まっている。

僕は明日、黒いパソコンの正体を暴く検索をするつもりなのだ。

朝食は、昨日の夕食の残り物だった。母が作りすぎた天ぷらをご飯とインスタントみそ汁と共に頬張る。海老にちくわに、かぼちやだとかナスだとかの野菜、どれもまあ……2日目でもおいしい。

特にさつまいもがおいしかった。塩を付けたさつまいもの天ぷらが、それとは思えないほど甘味と旨味があつておいしい。素材が違つていたので。今回の天ぷらに使われたさつまいもは高級な貰い物である。

母が誰かから頂いた小奇麗な段ボールには、他のさつまいもとの違いなんかを説明した仰々しい小冊子が付いていたほどだ。雄渾な筆致で書かれた品種名と、二つ折りで実を露わにしている芋の写真で構成された表紙。それを見るだけで他との違いは分かる。

僕は机の上に置いてあつたその小冊子を手に取ると、裏返してみた。そこには生産者の写真が載つていて、それが意外にも若くて綺麗な女の人だったものだから、顔を近づけてしまった。

そして、美人農家の詳細を黒いパソコンで検索してみたくなつた――。

登校の支度が済むと、玄関の扉を開けた。すると、数分前に家を出たはずの姉が、何をてこずつたのか今頃自転車を押し出す姿が見えた。あまり姉に近づきたくない僕は少し歩幅を狭めて速度を落とす。

なんとなくスマホを取り出して1歩2歩……。姉が道路に出て行つたのを見送つてから、僕も門を通つた。そうすれば、姉を追うように別の自転車が僕の前を横切つていく。

知つた顔だった。近所に住んでいる青年、確か歳は姉と同じ。僕も子供の頃にいくらか話したことがある。最近は全く顔を合わすことも無くなつたけれど、見ればすぐに分かるものだ。

そういえば子供の頃、彼が姉のことを好きだとか言う話を聞いたことがあつたが、あの恋はどうなつたのだろう。そもそも本当に好きだつたのか……。

姉や近所の人あたりの恋愛履歴書を黒いパソコンで検索してみる

のも面白いかもしれない――。

冬の朝、かじかんできた手を温めながら歩いていると、見知らぬ女の子とすれ違った。毎朝何人も知らない人となんかすれ違うが、僕はなんだかその時だけ振り返ってもう1度その姿を見てしまった。

まだ僕の家がある住宅街から出ていなかったのにもかかわらず、何百回と登校してきて1回も見かけたことがなかったからか。その女の子が景色や年齢に似合わぬ派手なコートを着ていたからか。とにかく自分でも分からない何か感じるものがあつた。

たぶん僕と年齢は変わらないはずだけど、あの子はあんな格好で朝からどこへ行くんだらう。空気に残った香水の香りが消えるまで、そんなことを考えた。

そこでまた、黒いパソコンの影がちらつく。検索回数に余裕があれば検索してみたい――。

家からちよつとそこまで歩くだけ……たつたそれだけで、市販のパソコンやスマホでは検索できないけれど、知ることができるなら知つてみたいことがいくつも見つかる。

あつちにもこつちにも、それはどこでもどこからでも見つかる。

普通に生きていたら絶対に知ることができないこと、見ることができない物、聞くことができなかつた声。僕は今まで色んなそれらを見つけては……選んで、黒いパソコンに教えてもらつてきた。

じゃあもし、何でも検索できるパソコンが手に入ったら、皆は一体どんなことを検索するんだらう。

改めて黒いパソコンについて考えさせられる出来事が終わった次の日の朝、僕は癖になつた検索したいことを探す中で、そんなことも考えた。

もし、黒いパソコンが僕以外の誰かの手に渡つていたらどうなつていたんだらう。黒いパソコンが届けられる場所が少しずれていたらどうなつてたんだらうって。

僕とは違う風に使うはず。人それぞれに興味のある分野は違うはずだし、欲しいものも違うから。

1番人気になる用途は……お金儲けなのかな……。その次はなん

だろう……。やっぱり、お隣さんのことを検索して宇宙戦争を止めたりはしないんだろうか。黒いパソコンを手に入れても宇宙人や宇宙戦争を知ることが無い人もいると思う。

だから、僕が選ばれたんだろうか――。

そういうことでいいんだろうか……。その辺のこと、今日からの検索で分かると良いんだけど……。

日中の間は時間があれば、なぜ黒いパソコンが自分の元にやってきたのかを考えた――。それと、結局黒いパソコンとはどういうものなのかってこと――。

今日僕は黒いパソコンの謎に少なからず近づけるであろう検索をすることに決めただけれど、それまで時間があるし自分の頭も働かせてみることにしたのだ。このことについて考えるのって、面白いし。

初めからあった疑問だけど長い間、これといった手掛かりを得られていなかった。その辺のことについて検索をしても、全てエラーが表示されるだけだし、未知の物体過ぎて自力で手掛かりを探そうにも何から始めていいのか分からない。

だから僕はそれを求めることを諦め気味、時間が経てばそのうち何か手掛かり出てくるんじゃないやねというスタンスだった。

けれど、ここにきて……作戦通りと言えば作戦通り、謎解明の手掛かりになりそうな出来事があった。

なんとなく行った検索に、宇宙人であるお隣さんが出現して、それによって地球を巻き込む宇宙戦争が起こりかけていることを知ることになり、宇宙戦争を止めるために動かされた。

これは単なる偶然では片付けられない事案である。今まで僕以外の為になる検索結果を黒いパソコンがアドリブで表示することは無かった。けれどあれは、地球を守るために黒いパソコンに動かされたようだった。

しかも、僕はそのせいで怖い思いもしたし、時間もいくらか無駄にした。明らかにこれまでの検索結果とは違う。ずっと使ってきた僕だからこそ分かる異質さ。黒いパソコンはそんな奴じゃなかったはず。

それとも僕を守るために地球を守るように促したのだろうか。地球を守ることが結果的に僕を守ることだから、関係ない検索に警告を混ぜてきたのか。

でも、今まで黒いパソコンが危険を知らせるアラートとして機能し

てくれたことは無かった……。死ぬほどの危険だから特例か……。

その可能性も考えられるが、それでも僕はやっぱり「宇宙戦争を止めさせるために、黒いパソコンは僕の元にやってきた」、この説を推したい――。

それは、赤より青が好きみたいな話だった。そこに確かな根拠なんかなくて、そっちのほうが好みだから。何か大きな使命があるから、僕が選ばれたって方がカッコいいからだ。

そうであってほしい。それに、この説が違ったらもうここからは黒いパソコンの謎に迫れなくてそれで終わりだし。

空に浮かぶ白い雲を見ながら、同じようにふわっとした気分での考え事だった。本来そうあるべきなのかもしれないが、未知の恐怖で深刻な気分になってことにはなっていない。

他にも誰が黒いパソコンを僕にという謎を考えたが、それも未来の僕が作って届けてくれただとか、めちやくちやかわいい女の子だったらどうしようなんて妄想めいた方向に頭が行ってしまった。

――雲を見上げたまま通学路を通って帰宅すると、僕はすぐに黒いパソコンを取り出した。制服の上着も脱がずに、キーボードを叩く。

まだ検索できる時間じゃないことは分かっている。けれど、ずっと考えていたから待ちきれなくなってきた……。世界を救ったサービスとかで特別に使わせてくれなしかと考えたのだ。

お隣さんの家に行った時から検索してみようと思っていた、黒いパソコンの謎に迫れそうな検索ワードとは……。

「白いパソコン 何」

これである。この前お隣さん家で調べた「隣の家 パソコン」を今度は自宅から検索する。入力し終わると僕はEnterキーを連打した。

word 51 「白いパソコン 何」③

気持ちが抑えられなくて、まずあり得ないと分かっているながら連打した。バグでも何でもいいから、1日に2度目の検索をさせてくれな
いかと願って……。

しかし、もちろん黒いパソコンからのレスポンスは無く……僕は
また日を跨ぐまで落ち着かない時間を過ごすという選択をする他な
かった。

「白いパソコン 何」という検索をしようと思った理由は、お隣さん
家の地下にあったあの白いパソコンが、黒いパソコンに似ていると
思ったからだ。性能はそのまま黒いパソコンの劣化版のようなもの
だし、色が違うだけで形も……。

まるで黒いパソコンのたまごみたいな、そんな雰囲気を白いパソコ
ンからは感じた。あれがこの先の未来で進化すれば黒いパソコンに
なるんじゃないかと。

だから、白いパソコンが作られた理由とかこれからどんな風を利用
していくつもりかなんてことを検索すれば、黒いパソコンの謎にも迫
れる。そんな気がするのだ――。

もしかすると、この検索もエラーになるかもしれないが、それはそ
れでビンゴ。黒いパソコンの謎にいくらか迫れたと手応えを感じら
れるはず。白いパソコンは黒いパソコンと深く関係しているのだと。

僕は夕飯の時間まで昼寝をした。ただ特に何もせずに時間を潰す
よりはその方が有意義だと思ったから。けれど目を閉じてもすぐに
は寝られなくて、中途半端な時間しか眠れなかったので、起きた時
には寝る前より重い眠気にまわりつかれた。

昨日とは違って授業の予習と宿題はやった。今日は金曜日なので
別にやる必要は無かったのだけど、逆に金曜日だからこそ昨日よりも
やる気が出た。週明けまでの課題をさっさと終わらせて迎える土曜
日は格別だ。

ただそれも集中力がないものだから、いつもの倍以上の時間がか
かってしまった。キリが良いタイミングになる度にシャーペンを置

いて頭を別の方向に向けた。

また黒いパソコンの Enter キーを叩いたりしてみては、そういえば誰かに黒いパソコンを譲渡したときその日の検索回数はりセットされるかという疑問を思い出し、また課題を進めるペースを落とすた。

結局課題が終わったのは日を跨ぐ少し前くらいのことだった。

そして、0時を回ると、またすぐに黒いパソコンで検索した――。

「白いパソコン 何」

ワードの入力は既に終わっていて、出てくる答えの予想も十分にした。だから、即実行。

白いパソコンが何なのかについての僕の最終結論は「人類を危機から救う為のもの」である。これは願望を含んでいて、黒いパソコンが僕の元に来た理由の予想を逆算したものである。

黒いパソコンの存在理由が地球や宇宙を守るためだったのなら、その卵みたいなものである白いパソコンは人類くらいを守るためなんじゃないかと。そういう答えなら色々としつくりくる。

他に何かあるだろうか……逆に地球を支配するためか、ただ単に宇宙人の娯楽か。あんなものを作るメリットは他に……全く予想していなかった結果が出てきてもそれはそれで面白い。

いつもよりも長いグルグルを表示してから、黒いパソコンは結果をちゃんと表示した。

「あなたの隣の家の地下には白いパソコンがあります、そのパソコンには地球にある大体の疑問の答えが入っています。使用者は正しく操作すれば、その答えを知ることができるでしょう。検索範囲は地球に限定されていて、機能はこのパソコンに遠く及びませんが、まあ優秀なパソコンと言えます。――」

どこことなく上から目線で見下しているような文章がそこには混ざっていた。白いパソコンも十分に物凄いもののはずだが、間違っではない。

「白いパソコンが製造され、地球に持ち込まれた理由は、自然と地球人を保護するためです。地球人の力だけでは解決できない未知のパン

デミックや災害が起こった時に、製造元の惑星の住人が早急に対応できるように。また、そんな災害が起こらないようにするための日々の管理が主な使用用途です。さらに、白いパソコンを地球人に譲渡して、地球人の力だけで地球を守っていけるようにする、譲渡された地球人がどういうことを検索するかを研究するという計画もありました。」

これは……正解ということではないだろうか……。

結果を読み終えた僕はまさかの予想通りに困惑した。多少意外な事実も混ざっているけれど、予想通りと、そう言っているもの。やっぱり、白いパソコンは「人類を危機から救う為のもの」だったのだ。

正解……でも、なぜだろう……なんだか思いの外しっくりこない。

予想通りであってほしいと思っていたはず。でも、心のどこかでもっと奇妙奇天烈な何かを期待していたのだろうか。僕からは一生かかっても出てこない、おとぎ話みたいな何かを。

僕が視線をキーボードに落としてしばらく、じゃあ何で宇宙人が地球を守ってくれるのという考え事に至って顔を上げれば、そこには既にさらなる文が表示されていた。

「地球に住む人類が自然を保護しようとするのと同じです。人類に森や海などの自然を美しく、かけがえのないものだと思うものがあるように、白いパソコンを製造した惑星には地球のような文明レベルが低い惑星を宇宙の自然遺産として守っていくべきだと考える者がいます。宇宙全体の中でも文明が発達していて、そういった考えの者が多いその惑星は、いくつもの星で保護管理活動をしています。地球はその1つに過ぎません。まあ、宇宙からの脅威からは守れてませんが。」僕たち人類から見た猿が、お隣さんたちから見る僕たちということか。

地球が特別だからという訳ではなくて、数ある自然豊かな惑星の1つに過ぎない。宇宙がとてつもなく広大なことは知っているけれど、改めてその大きさを感じさせられる事実だ。なるほど、僕が住むこの星が、その辺にある物の1つ……。

そしてつまり、この白いパソコンと地球との関係を、黒いパソコンと宇宙との関係に当てはめると……黒いパソコンは宇宙すらも猿が暮らす森として見下ろす、そんな誰かが作ったものということになる。

一体それはどういう存在か、この宇宙に存在しているのか、もつと高次元の世界にいるのか。そいつ……またはそいつらにも、自然が尊いみたいな理由があつて、宇宙を守るために黒いパソコンを与えた。

何もかもを見通して――。

「そうなのか」

僕は口で言うんじゃなくて、キーボードで入力した。間髪入れずE

nterキーを押す。けれど、黒いパソコンの画面は変わってくれなくて、答えは得られなかった。

本当にそうなのか、僕の推理通り黒いパソコンもそういうものってことでいいのか。他の可能性がないか。僕はまだ考えた。

ただ自然が大切だからじゃ理由として弱い気がするし、だとしたら何故正体を秘密にする——。無償で宇宙を守るパソコンなんて立派なものなら、最初からそう言えればいい——。そう、大体やり方が回りくどすぎるんだ、宇宙を守ってくださいって最初っから言えば僕は——。

僕以外が寝静まった家の中の……小さな僕の部屋では、時間だけが流れた。僕はずっと同じ体制で座っていた。机の上の教科書とノートは開きっぱなしのまま、ただ黒いパソコン一点を見つめて。

深夜にこうして部屋に1人していると、時間が止まったようにも思える。けれど、確かに時間は流れて、地球は回った。

結局、僕は自分が出した答えに納得した。そうする他なかったし、別の可能性を考えても、よりしつくりこないものばかり。

たぶんもう少し、黒いパソコンを楽しみたかったのだ。だから、予想が正解、それで終わりってのが寂しかっただけ。

そして、そうすると肩の荷が下りる感じがした。もう思い残すことが無くなった。

そうか。黒いパソコンは僕に宇宙を守らせるためにここに来たのか。どこまで知って僕を選んだのだろう……きつと全部だな。

そう、もしもお隣さんが正体を明かすような人間がおそらく僕だけのことも、その時僕が宇宙戦争を止めるために動くのも、黒いパソコンは全て最初から知っていて、手の平の上だったとするなら……。

今こんな考え事が僕の脳内に生まれていることも全部……。

僕なら役目を終えたタイミングで手放そうと考えることも、計算の内だと言うのか。

少し前からあった「黒いパソコンを誰かに渡すという選択肢」。それが、数日前から強くなっていたが……さっきの検索で満足感みたいなものを得てさらに強くなっている。そうしたほうが良いんじゃない

いかと思つてしまつている。

実はその判断も今回の検索が何かヒントになつてくれないかと考えていたが、あまり望ましくない結果になつた。

今にも実行に移してしまいそうなほど………みたいな感じでは全然ないけれども。

うん、まだ持つていたい気持ちのほうが強いけど、まあその内そうしたほうが良いんじゃないかと思ひ始めている……。

また地球に危機が訪れたとして、それを救える立場にある人間がまた僕だなんてこともあるはずないし……知れるはずないことを知ること、困難に出くわすケースや、僕自身が墮落するというデメリツトもある……。

気づけば驚くほど時間が過ぎていたので、僕は寝ることにして立ち上がった。

とりあえず明日以降は満足いくまで欲を満たす検索をさせてもらおうか。そう約束しながら、黒いパソコンを収納の中にする。

体を伸ばすと、ここ最近で1番のあくびが出た。めんどくさい考え事は一旦保留だ。

日常の検索あれこれ⑪ 「一番エロい 動画」

「一番エロい 動画」

「ごたごたが終わって、最初の検索はこれだった。なんかもうとにかくエロいもんを見せんかいという検索だ。」

そこに細かい設定はいらなから、とにかくいっちなエロいものを……そう求めたらどんなものを見せてくるのか、鼻息を荒げながら僕は検索した。

結果は、そりやもう極上というか。衝撃的というか。

最初に表示された状態でもうガツンときた。全裸で手を頭を後ろで組み、ガニ股で腰を振る女。顔もスタイルも抜群にいい。胸も尻もデカくて、しつかりした肉付き。だけど、まったく太っている訳じやなくて、肌なんて正に絹のよう。ザ・恵体みたいなその女が、男を誘惑していた。

それが誰かはすぐに分かった。よくテレビで見る顔だったからだ。その女は有名な女優だった。

その体を活用したお色気キャラを演じることもあるけれど、元々の性格はおしとやか。ただただ美しいと感じる清楚な女性を演じているイメージが強い。そんな朝ドラなんかにも出ていた女優が、あまりにも下品なポーズをしている。

画面越しでも、局所から発せられる上品と下品が合わさった匂いが香ってきてそうだった。

動画が続いていけば、その女が誰か知らない男が行為に及んでいく様子が閲覧できた。ベッドで王様のように寝転がる男に、女優が尽くすように行為をする様子を主観視点で見られるそれは、見る天国だと僕は思った。

「あの男 誰」

『貴家 啓介。IT企業、株式会社ワールドフルの代表取締役社長です。年齢は43歳、総資産額は約84億円です。』

昨日見た一番エロい映像で女優の相手をしていた男は一体何者な

のかと僕は思った。イメージではあんなこと全くやりそうにないあの女優の、夜だけ彼だけの姿を独占している、世界一の幸せ者がどんな奴か知っておきたかった。

結果を見て、まーたIT企業の社長かと僕は思った。結局それですか、金ですかと。金があれば年齢が離れててもいいんですねと。何十億円の為ならそりや全裸で腰も振りますわと。

しかし、しばらく考えて、それだけお金を稼げる人ってたぶん見た目も性格も良いんだらうなと思った。そう思うことで自分を言い聞かせたのである。

「寝違え 治し方」

『患部に力を入れてほぐそうとするよりも、力を抜くことが大切です。そこと繋がるあらゆる筋肉を緩めることで楽になります。これから説明するストレッチを、力を抜くことを意識してやってみてください。まず、両手を上げて――』

「温泉水 効果ある」

『水道水と比較して、含有する成分の差で体に与える影響の変化は無いと言っているでしょう。ただ、前にも言いましたが人には思い込みの力というものがあります。味は温泉水のほうがさっぱりだと感じる人が多く、さっぱりしたものを飲めば体内も洗い流されていくイメージを持つことができるので、結果健康に良い影響を及ぼすこともあります。日本の水道水は生涯飲んでも安全に作られているので、水道水を健康に良い物と思って飲むことが最もコスパが良いです。』

「譲渡したとき 検索」

『このパソコンを他人に譲渡したとき、検索回数がりセットされるかについてはその設定が無いので、お答えできません。』

僕はある日の夜、黒いパソコンと1本の髪の毛を前に座っていた。髪の毛は黒いパソコンと同じく黒色で、真っ直ぐに伸ばすとパソコンの横幅よりも長い。

自分のものではないことは長さを見ればすぐに分かる。けれど、誰のものなのかはそれだけでは判断できない。

だから、僕はこれからこの髪の毛が誰の髪の毛なのかを調べようと思う――。

今日の午後こんな出来事があった。僕の学校の数学の授業は、志望する大学のレベルに合わせて2つのクラスに分かれて行われているんだけど、その授業が終わって教室に帰って来た時のことだ。

僕の席の周りで複数の女子が会話していた。しかも、スクールカースト上位のかわいいメンバー達。

数学のもう1つのクラスの授業が僕の教室で行われていることは知っていて、その時に僕以外の誰かが僕の席に座っていることは知っていた。けれど、今日それを見るまでその人物が隣のクラスのマドンナとは知らなかった。

いつもはその時間に教室に帰ってきて僕も僕の席には誰も座っていないんだけど、今日は何故かいた。その彼女たちを見つけると、僕は友達の所へ行って席が空くのを待った。話したことが無い女子達の間に入っていく「ごめん」なんて言う勇気無かったし、別に急いでも無かったし。

全く何て日だ。こんなハッピーを手にしてたなんて知らなかったぜ。あのイスになれるなら死んだ方がいい。おっと、そいつは言い過ぎか、ははっ――なんて思いながら、休み時間が半分終わるころまで友達と談笑していたんだ。

そして、空いた席に戻ると、教科書とノートを机の上に置いた。僕は温もりが冷めないうちにさっさと席に座りたかったから、軽く投げするような置き方だった。だから、その時機で動いたんだ。ある1本の

髪の毛が。

僕はすぐに気づいた——。何しろ一本でも長くて綺麗だったものだから——。そしてその髪の毛が持つある可能性についてもだ。

これはあの彼女たちが立ち去った後に落ちていたものだから、まず間違いなく彼女たちの誰かが落としていったもの。スクールカースト上位の女子の頭の上で共に生活し、育てられ、毎晩風呂もベッドも共にしていたものだ。

それって絶妙に興奮しないか、っていう可能性のことだ。

僕は教科書とノートと共にその髪の毛をカバンに入れてしまった。すぐに気持ち悪いかと後悔したけど、その時咄嗟の判断では欲が勝ってしまった——。

——そして、その髪の毛が今、机の上で黒いパソコンと並べられているこの一本という訳だ。

ああ、そうさ。自分でも気持ち悪いと思う。今あの時に戻れるなら男のプライドが髪の毛を払って床に落とすだろう。

ただジーザス、クライスト。僕は検索をやめない。もう持って帰ってきてしまったのだ。だったらこれが誰のもののかを調べるのが筋ってもんじゃないか。

決して欲に負けた訳ではない。だってこんな髪の毛一本が誰のだったとして、何に使うつもりでもないのだ。

「髪の毛 誰の」

僕は入力すると、まずは一呼吸置いた。

Word52 「髪の毛 誰の」②

OK、OK。落ち着け僕。まずは一旦落ち着こう。すぐにこのEnterキーを押してしまうのは簡単だ。だけどそれじゃあ、スマートじゃないだろう。

まずは結果の当たりとハズレについて頭の中で整理しようではないか――。

誰のだったとしてもスクールカースト上位のJKの髪の毛、それより詳細に個人の特定までしようとしているのには理由があるのだ。そ

れというのも、スクールカースト上位の女子だって皆が皆可愛いわけではないし、僕の好みだつてある。つまり今日僕の席の周りにいた4人ほどの女子にも、この子の髪の毛だったら嬉しくて、この子のだったら本当に何もせず捨てるっていう当たりハズレがある。

当たりハズレの基準は、ぶっちゃけ顔だ。他の基準もあるけどほぼ顔、配点が一番高いのは顔。悲しいことに男から見た女の評価って顔が全てみたいなどころがある。

もちろん例外もあるけれど大体の男はそうだと思う。どんだけ性格が良かったって顔が悪くちゃ話にならない。男の言う性格が良い人がタイプなのは、顔が可愛くて性格が良い人って意味だ。

てか、顔が可愛ければ大体のデメリットは、ギャップというメリットに変換される。風呂に入らないとか、下着を変えないみたいならしない性格だったとしても、美人なら問題ない。

むしろ、それに興奮する男だっている。こんなかわいい顔してて……そうなのと……。

まずは、1番の当たりから決めよう。誰だったら1番嬉しいか。そんな風に考えながら、今日の教室での出来事を思い出す。単純に好きな顔の順に並べるだけだから、ほとんど悩むこともなく僕は決めていった。

1番の当たり、この検索結果のSSRは森さんに決まった。僕の学校ではお馴染みの森さん。男子だったら皆憧れる。最近誰かと付き

合いだしたという噂も聞いたが関係ない、付き合いたい人ランキングではなく、この人の髪だったら嬉しいランキングなので、顔が1番かわいい森さんが1位。

森さんのだったらマジでワツツアファツクだ。正直こんな髪の毛1本でもイけてしまってもいい。黒いパソコンで飛びきりのエロ動画を見た後に、髪の毛1本で興奮するなんておかしな話だが……まこと性欲というのは面白い。持ち帰った髪の毛をひらひらさせながら思う。

2番も隣のクラスのかわいい女子、佐々木さん。3番は同じクラスのかわいい女子、城戸さん。城戸さんに関しても彼氏持ちだという噂がある。しかも、相手は大人の男性らしい。街でスーツ姿の男性と歩いていたという目撃談がある。もしかしたらパパ活という奴かもしれない。それでもかわいいから今回は許す。

最後に4番目、僕が今日席の近くにいたのを確認できたのはその子、児島さんで終わりだ。別に人としては嫌いじゃないけれど、今回の検索ではハズレ。理由は顔がかわいくないから。

むしろ人としては好きなほう。誰にでも優しいイメージだから。打算で皆に明るく優しく接してるんじゃないかと、自然と自己犠牲ができる子に見える。けれど、顔があまり好みじゃない。細身なのもマイナス、だから申し訳ないけどハズレ。

ハズレまで決めた僕は、今一度髪の毛を真っ直ぐに伸ばしておく。そしてその髪が、まるで神へのお供え物かのように、手を合わせた。願ったのは必勝だ。

「髪の毛 誰の」と表示された画面を見つめて、心の中で児島さんに謝りながらEnterキーを押す。さあ、お前は一体誰の髪だ——。「今あなたの机に置かれている髪の毛は、城戸 彩夏さんのものです。」

表示された結果を見て、僕は無表情のまま口を開けた。

ええ、おいおいマジかよ。まさかの3番目の当たりだって。何だそのクレイジーな結果は、頭イカれてんのか。

きつと全米が大爆笑する最高の結果に、さすがの僕も天を仰ぐ。そ

こは1番の当たりかハズレで来るべきだろうと思う。それとも、全く予想してなかった他の人物だとか。面白くもないこの結果は最も好ましくなかったものだ。

まあ嫌でもないけど……何とも言い難い……。

「はあ……」

アホらしい……。僕は髪の毛を掴み、窓を開けると、溜め息を吐くように息を吹きかけて外へ飛ばした。夜の屋外に飛び出した髪の毛はすぐに、風景へ溶けて無くなる。

本当にアホらしい。僕は何をしているんだろう。こんな好きでもない女子達でしょうもない遊びをしている場合じゃないだろう。

そう僕が考えなければいけないのは好きな人だ。未だ僕の胸を締め続ける折原 裕実さん。

彼女と初めて話したあの日から、僕と彼女との距離は全く縮まっていけない……。

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」①

そう、落ち着いた日常を取り戻した僕は今、恋の悩みを抱えていた。いつからか好きになつて、時間が経てば経つほどより好きになつていく。学校生活で見かける度に鼓動が高鳴るし、軽音部の活動中に目が合ったりなんてしたときには脳のCPU使用率100%、完全に思考が停止してしまう。

初めは予想もしてない検索結果の中での出会いだつた。それまでは何でもない同級生の1人だつたのになぜだろう。今こうして自室にいるときも、ずっとあの無邪気な笑顔が忘れられない。

校内の同学年の中で最も歌が上手い人を検索して、その人物だつた彼女のカラオケの様子を検索して、彼女が歌い終わつたときに見せたあの笑顔。すごく良い意味で、高校生とは思えないほど無邪気で純粋に感じた。

真剣な面持ちでセクシーな曲を歌つた後のギャップ、ただそれだけじゃない魅力がそこにあつたんだと思う。

僕は清純で明るい子がタイプだつた。折原はぴったりそういうタイプという訳ではない。けれど、1つの笑顔が僕に突き刺さつた。

目を閉じれば瞼の裏に浮かべられるあの笑顔。あれを2人きりで、僕だけに見せてくれたら……そんなことがあれば……僕は……。

立ち上がった僕は、床に落ちていたクッションを蹴つ飛ばした。反発性が高いクッションは壁に跳ね返つて、また足元まで戻ってくる。

こんなに頭を悩ませているのに、僕は未だに折原の連絡先すら知らなかつた。軽音部に入ったことで確実に距離は縮まった。しかし、そこから先は全く足を踏み入れられていない。

にもかかわらず何も行動には起こさず、気を紛らわせるために黒いパソコンでしょーもないことを検索しては、また何やってんだろつてなる生活。いい加減やめないといけないと思つてる。

でも……でもだ、これ以上こちらから距離を縮めるつてそれはもう

告白みたいなものだと僕は考えるのだ。

たとえば僕は、クラスメイトの女子にいきなり連絡先を聞かれて、何の用もないのにメッセージが送られてくるようになったら、この子気があるんじゃないかと舞い上がる自信がある。

だってそれはそうじゃん。好きでもない男にそんなことしないじゃん。

他人が異性に連絡先を聞いてるのを見たって、同じことを思う。あいつはあいつに気があんのかと。

別に直接聞かなくなっただって、友達に聞くという手もあるし、今どきそんなことすらしなくなっただってその気になればグループトークから折原のアカウントを見つけられる。同学年全員が参加しているグループもあるし、軽音部のグループにも入れてもらった。

しかし、どちらにせよいきなりメッセージが送られてきたとて、相手が気があると思うのは同じことだ。

友達以上恋人未満とかよく言うが、そこへ向かうために踏み込むこのラインも結構超え辛い気がするのだが、その辺既に付き合っているクソカップル共はどう上手くやったのだろうか……。

「はあ……」

また溜め息をつくとき、先ほど蹴飛ばしたクッションを抱いてベッドに寝転んだ。

word53 「告白したら付き合ってくれる人数」②

次の日の放課後は軽音部での活動があった。

座る場所や荷物の置き場所に困らなくなった教室で、僕は親友の隣に座っていた。その隣には同学年の友達がいて、そのまた隣には後輩の男子が2人いる。

「ラーメン屋なのにオススメのラーメンがまずいってマジですか。今度友達だまして食べさせてみます」

「うん。あそこの店、逆にチャーハンとかギョーザもめっちゃうまいのにメニューに1番大きく載ってるラーメンだけ変な味するから」

他愛のない会話がそこにあつた。ギターやベースを抱えている者もいれば、何もせずに話しているだけの者もいる。

軽音部の活動は基本的に、男女に分かれて行われた。教室は同じだけど、同じテーブルを囲むことは無く、少し離れた場所にそれぞれ固まっている。

つまり、折原と話す機会はあまりない。

「なあ、お前も食べたことあるよな？」

折原のことを見ていた僕の肩を親友が軽く叩く。

「え、うん。あそこの電気屋の隣にあるラーメン屋だろ。あそこ安いし早いし基本うまいけど、ラーメンだけまずいよなほんと」

「そうそう」

「で、俺らも何も言わずに友達連れてっておすすめのラーメン食わせたりしたっけな」

言いながら思い出して笑った。評判のラーメンを嬉々として1口頬張った友達の顔が複雑な表情になっていくのを今でもはつきり覚えてる。

折原と話す機会が少ないからと言って、軽音部の活動が楽しくない訳ではなかった。むしろ、最近の生活の中で1番楽しい時間だ。絡みが無かった同級生も後輩も皆いい奴らで、急に入ってきた僕を快く受

け入れてくれた。

話のノリも合うし、ここでこうして雑談しているのは楽しい。それに帰宅部だった僕は後輩ができたことも嬉しく思っていた。先輩と呼ばれるのも悪くない。

ただ、だからこそ僕の恋がまた難しい。なまじ今この場所が心地いいがゆえに、そこから先へ踏み込まなくてもいいんじゃないかという気になってしまう。

「そっか、先輩新しいガチャ引きました？」

「え、なんか良いのきたの？」

「何言ってるんですか。昨日急にめっちゃ熱い発表あったじゃないですか。知らないんですか」

「知らん。ここ数日起動してないし」

「これっすよ、これ」

後輩の1人が共にプレイしているソシヤゲのゲーム画面を見せてくる。

「へー、ついに来たんだ……」

「え、リアクションうつす。先輩この女の子のキャラ好きって言ってませんでしたっけ？」

「まあ言ってたけど、その子にはもうあんまり興味ないかな——」

——結局今日も、折原に連絡先を聞けないまま家に帰ってきた。もっとうとうと、今日は挨拶を交わすことすらも無かった。

けれど、帰ってきてからすぐのこの時間はあまり胸が苦しくならない。まだ男友達と笑い合った楽しい気分が抜けきっていないし、僕には黒いパソコンがあるからだ。

その先に賢者タイムが待っている可能性があるとはいえ、黒いパソコンで何を検索しようかと考える時間は恋の悩みも一時忘れられるほどの力がある。

さて、今日はどうしようか……。やっぱり、ソシヤゲのガチャを引くタイミングがいいだろうか……。

word53 「告白したら付き合ってくれる人数」③

僕はベッドの上に寝転んだ。黒いパソコンを取り出す前にまずは、何を検索するか考えながらネットサーフィンといこうではないか。今日は金曜日で時間に余裕もあるし、スマホを使ってじっくりと……。

一瞬、だからこそ折原と会えない時間も長いことが頭を過ったけれど、僕はわざとらしく首を横に振った。

まずは今日1日の間で世間に何があったかを見ていこう。僕はSNSや検索エンジンにあるトップニュースで、そういった情報を収集した。驚きのニュースがあればその詳細を黒いパソコンで調べてもいいし、有名人の熱愛報道があればまたその真偽を調べてもいい。

指を動かすだけで様々な情報が僕の手の平に流れた。その流れをじつと見つめていると、驚くほど早く時間が進む。そのうち当初の目的を忘れ、ネットの中であっちへ行ったりこっちへ行ったり。僕はそうしてネットの波に呑まれた。

流され流され……結局辿り着いたのは、スマホのアプリ欄の1番上にある僕が昔からやっているソシヤゲだった。最近はログインしない日も増えてきたけれど、そういうえば後輩が何か話していたし、起動だけでもしてみることにしたのだ。

見慣れた起動画面を連続でタップすると、重い更新データのダウンロードが始まる。

うーん、特にこれといった検索候補は見つからなかったの、またこのゲームでガチャから強いキャラを引く為に検索を使おうか。しばらくちゃんとプレイしていなかったし、強いキャラを引いて開催されているイベントを消化していけば良い暇つぶしになるかもしれない。

と、ゲーム画面を見ながらその様子を想像してみる……。けれど、

やはりやる気は起きない。僕はこのゲームに飽きていた。理由は皮肉にもこのゲームに黒いパソコンの検索を使ったからだだった。

欲しいキャラが欲しい時に手に入って、難しいステージの攻略法もすぐに分かるようになったソシヤゲは、僕に飽きをもたらしした。初めのうちは無双を楽しめたけれど、未所持のキャラやクリアしていないステージが減っていくにつれ飽きて、この前最高難度のステージをクリアした瞬間に糸が切れた。

だからまた多少増えたコンテンツを黒いパソコンで消化しても同じことの繰り返し、また飽きるだけ。今更検索なしでプレイしようとも思えない。

僕は始めかけたゲームを強制的に終了してアプリを閉じる。そして、スマホの電源も切って枕の横に置いた。

ずっと同じ体制で寝転んでいたのが体が固まっていた。立ち上がったって、体を伸ばしたい。喉も乾いていた。冷蔵庫まで行って飲み物を持ってきたい。でも、寒いから布団の中から出たくない。

部屋にいても寒い季節は長く続いていて、今季もそれが当たり前になっていった。テレビの中のお天気お姉さんもクラスメイトも、寒い寒いと毎日言っている。僕も同じだ。それくらい冷え切っている……。

飽きていると言えばたぶん——僕はもう黒いパソコンでの検索自体にも飽きているのかもかもしれない——。

いや、飽きていると言えば言い過ぎになる。飽きてきたという言うべきだろう。1日1回とはいえ、毎日使っていると検索したいことがすぐに思いつかなくなってきた。

何でも検索できるなら何を検索したいか考えて、ぱつと思いつくようなワードはとっくの昔に検索し終えた。下ネタやスキヤンダルも程度の低い物じゃ満足できないし、少なからず驚きに耐性が付いてしまった。今ではこうして数十分ネットサーフィンを試してみても……まだこれだと言えるものが見つからない。

いや、折原への恋心を紛らわそうとしてるから高いハードルを設けてしまっている。それだけの話だろうか。

昔はノートに所狭しと検索したいワードを書いていたほどなのに

……。そういえば、あのノートは今どこにあるだろう。いつからか使うことも無くなった、元々は確か英語のノートを後ろから使ったあのノート。

僕は勇気を振り絞って布団を出ると、勉強机にある棚から1つのノートを手に取った。

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」④

あった——。これだ——。

黒いパソコンみたいに隠さなくてよくて、雑に扱ってきたノート。ジューズでできた染みがある裏表紙をめくる。すると、そこに懐かしい光景が広がった。

思いついた傍から走り書きされたワード達。汚い文字を見ただけで、どんな結果が表示されて、どんなことが起こったか思い出される。そんなワードもあれば、書いたままでその検索を行っていないワードもあった。

それらを見ていると、ベッドの中にいた時よりもインスピレーションが湧いてきた。ああでもないこうでもないと思断されていた思考回路が広く長く、伸びていく。このノートがあればきっと良質な今日の検索に辿り着ける。

そう思ったから、僕は上から1つずつ書かれたワードを見ていった。

『「神様 存在」「魔法 使う方法」「一番胸がでかい 同級生」「僕 寿命」「競馬 勝つ馬」「参考書 おすすめ」「映画 ネタバレ」「担任の先生 秘密」……………』

頭の中で声に出して読みながら、引つかかるものがあればその都度止まって、無ければ次に。そうしていくと、ページの一番下に僕の視線を完全に止める……………1つのワードが見つかる。

「告白したら付き合ってくれる人 人数」

いつだったか……………。以前も検索したことがあるワードだった。確か現在自分がどれくらいモチベーションを確認して、自分磨きのモチベーションにする為に。そして、数か月後にもう1度検索してみようとも決めていたワード。

隣には「いつかまた検索」と一言メモも書いてある。

見た瞬間にこれだと僕は思った。骨董品屋で掘り出し物を見つけ

た時のような気分、そんなものは経験したことが無いけど何か感じるものがあつた。

しかし、僕は動かなかつた。不動のまま、ノート of 文字を見つめ続ける。

見つけたワードは物凄く検索したい。今すぐに検索したい。

だけど、これを検索してしまつては、最近の悩みごとの解決から逃げられなくなつてしまうような気がする……。

いや、そうに違いない……。

その検索結果が良いにしろ悪いにしろ僕は追いつめられる。もし結果が良いものであれば、自信を持って早く行動に移したほうがいと焦ることになるし、結果が悪いものであれば、僕なんかじゃ駄目だと目標から遠ざかつてしまう。そう思う。

うん、だめだ。今は恋にちよつとでも関係する検索はダメだ……。

僕は「告白したら付き合つてくれる人 人数」というワードも飛ばして、次に進んだ。

ノートを持ったまま布団に戻つた。先ほどよりも体を丸めて、ページをめくつた。今日検索するワードを探すというよりも、逃げ方を探す作業になつた。

まるで、どうしてもやる気が出ない日に仮病を使って休む方法を考へてるときみたいだつた。するべきことをやつたほうがいいことは分かつている、今逃げてもしつかはそれと向き合わなければいけないことも。だけど何かないか、まだこうして布団にくるまっていれる方法がないか考へてしまう。

ただただ無駄な時間が流れた。当然代わりになるワードなんて見つからず、僕はノートも閉じてスマホの横において、結局同じ形に戻つてしまつていた。

天井の模様を数える僕の中では、好奇心と恐怖心がせめぎ合つていた。しかし、その勝敗がどうなるかを僕は分かつていた。思いついてしまつた以上、もう引き返せない。あとはもう時間の問題だ。

そう、遅かれ早かれなのだ――。

僕はおもむろに立ち上がると、黒いパソコンを取り出した。決心が

ついたというよりは、観念した。容赦ない自分に身を委ねて、無心でワードも入力する。

「告白したら付き合ってくれる人 人数」

そしてあるうことか、Enterキーもそのままのノリで叩いた。

word53 「告白したら付き合ってくれる人 人数」⑤

勢いのままいってしまわなければ、また布団の中に後戻りする。そう思ったから止まらなかつた。僕も男だ。やるときは、やらなければ。

画面にグルグルが表示される。これが出た後はすぐに、黒いパソコンが答えを僕に見せる。

きつと、あと1秒くらいで……。はっ……。やっぱり……。

一瞬何か文字が見えた……。そのくらいのタイミングで僕は正気に戻ってしまった……。

急いで折り返したんだ黒いパソコンの前で、早まった鼓動を抑える。流星にこのスピードでこの検索結果は見れない。裸で雪山に飛び込むようなものだ。流星に、流星にだ。

情けない……いや、でも頑張ったんじゃないか。あとは心の準備をしてもう一度黒いパソコンを開くだけなのだから。

このまま今日中には勇気が出なくても、明日また検索するときには絶対に見ることになる。つまりここは既に取り切ったようなもの。いやあ、頑張った。

「ふう……」

僕は一息ついて今からもうひと踏ん張りするか考えた。そして、一旦風呂に入って夕飯を食べることに決めた……。

「ふう……」

シャワーを浴びて、髪を洗って顔を洗って体を洗った。これからまた勝負が控えているので、体を清めるためにゆつくりと。明日は休みだけど、しっかりとめに髭も剃って。それから暖かいお湯に浸かった僕は、しばらくしてからもう1度大きく息を吐く。

ちようどいいくらいに湯舟で温まって頭がぼんやりしてきた。今なら「告白したら付き合ってくれる人 人数」の検索のことに向き合える。

この前検索したときは何人という答えが出たのだっけ。考え事はそこから始まった。確か3人……いや、2人だった。何とも言えない結果だったのだ。

僕はあれから多少なりとも魅力のステータスが上がったと自分で思う。だって筋トレもこの寒い季節に入ったというのにまだ定期的にはやっているし、ギターもある程度弾けるようになった。

高校生にしては財布にお金がたんまり入っていることも噂で広まりつつあるっぽいし、何よりも自分に自信が付いていた。

これはただ単に魅力的になれたと思うから付いた自信ではなくて、黒いパソコンを持っていくから付いた自信だ。

これまた単に持っているからという話ではなくて、僕は長い間黒いパソコンを使ってきてあらゆることを知った。誰も知りえない情報ばかりをだ。

そして、それ以上に検索に伴ってあらゆる経験を積んだ。大人の世界も見たし、地球の平和も守った。絶対にその辺の高校生よりもあらゆる経験値を持っている。それ即ち、自信になっている。

まあ……その自信をもってしても1人の女の子にあたふたしてしまっている訳だが……。確実に以前よりも良い男に見えるようにはなっているはずなのだ。

だから、今日の検索結果は以前よりも絶対多くなっているだろう。果たしてそれは何人だろうか……。浴槽に温まりすぎた足を乗せて、さらに考え事は続く。

5人くらいにはなかってほしい。数がそれ以下だったらかなり落ち込んでしまう。できれば10人。それくらいの人数が表示されていたら、僕は喜べる。

10人いればきつとあの子もそこに入ってる。だとしたら……もう、やるべきだ。連絡を取るべきだ。でも、やれるか……勇気を出せるか、今こう思っていたとしてもいざ、検索結果を見て10人だったとして行動に移せるか。

いや、やろう。もう絶対と決めておこう。もし、告白したら付き合ってくれる人が10人以上だったら、僕は折原さんにメッセージを

送る——。

風呂を上がると、予定通りできていた夕飯を食べた。大体いつも通りの時間通りの時間で今日も過ごした。

日付が変わる少し前、頬を叩いてから僕は黒いパソコンを開いた。そこにあつた文字は——、

「あなたが告白するとOKをもらえる人数は9人です」
と、こういうものだった。

word53 「告白したら付き合ってくれる人数」⑥

きゅ、9人か——。8人でも10人でもなく、その数か。うーん、微妙。

検索結果を見た僕の顔は今までしたことが無い形になった。唇や眉が絶妙な感じで曲がった。画面の黒い部分に映ったそんな自分と目が合ったので、僕は頭を掻きながら顔を元に戻す。

ここんとこの検索はいつもこんな反応になっっている気がする。救いを求めて黒いパソコンを頼っているのに、いつもこれじゃない。やはり、ハードルを上げすぎてしまっているのだろうか。

それにしても9人とは、本当に微妙な数字だ。

僕が事前に決めたルールに従うと、これでは折原に連絡しないということになる。でも、たった1人足りないだけだ。それだけでまた僕は逃げて、楽な道を選択する。それでいいのか。

うーん、その答えもまた微妙……いやいや、良くないだろ。

ここで逃げたら、じゃあいつやるのって話になる。心に余裕がある週末に、こんなに勇気を出して恋に関連する検索ができることなんてもう無いかもしれないぞ。また来週の金曜日にするか……いや、もういいだろこんな生活は。

僕はまた勢いよく自分に身を任せてスマホを手を取った。素早い操作で、軽音楽部のグループトークから折原のアカウントを探す。すると、それはすぐに見つかった。20人そこそこのグループだから当然。元よりそこは問題ではない。

好きだと言っていたギターのアイコンから、折原を感じる。それだけで心が揺らいだが、まだ止まらない。

もういいだろ、行くところまで行って行き切っていいだろ。こんな遅い時間だけれど、そこも逆にいいだろ。このくらいの時間のテンションじゃなきゃ無理だ。

ずっと縛られてしまっている生活をなんとかしたい。そろそろ弱

い自分が鬱陶しくなってきた。

送るぞ、僕は——。トークボタンも僕は勢いのまま突破した。

でも初めは何と言ってメッセージを送ればいい。いきなりデートに誘ってしまうか。今度2人でどうしようだななんて……でも、ないぞデートプランなど。1月後半という季節にはイベントらしいイベントもないし、そういうのがあったら楽なんだけど、いやというかいきなりデートは無いだろ。

そもそも僕のアイコンやプロフィールはこれでいいか。そういえばずっと変えていないが、これを機に何か格好が良いものに変えたほうが良くないか。一旦やめて、画像を探してみようか……。

いや、考えるな——。もう、やめよう——。ノリと勢いで行ってしまおう——。この胸のビートを思いのメロディに変えて、ぶつけるんだ………何を言っているんだ僕は。

思いのままに指を動かすと、つらりつらりと筆は進んだ。突然やり始めたことだけど、心臓と指が直接繋がったのかというほど迷わなかった。上手く感情を言葉に変換できた。

できたはいいけれど、送信には流石にもう一捻りの勇氣が必要だった。時計の秒針に合わせて指を振り、いちにのさんでそこも乗り越える。

「君のことが気になって連絡しました、音楽室で2人で話したのが楽しかったので、またギターの話が聞きたいです」

個人的にはちよつと攻めすぎかとも感じるそのメッセージ。送信されていくのを見届けると、僕はすぐにスマホを布団へ投げ捨てた。

word 54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

①

どうしよう、何であんなこととしてしまったんだろう。というか、本当に僕がしたのか。夢じゃないよな。もう彼女のスマホに僕のメッセージが届いてしまっているんだよな。

それって、ヤバイ——。

完全に正気に戻ったのは翌日の朝のことだった。目を覚まし、ベッドの中で昨夜の出来事を思い出すと、僕はベッドから転げ落ちた。

落ち着かない朝は、勉強をして過ごしていた。どうやってこの落ち着かない日を過ごすか考えると、すぐにそれに決まった。どうせ何をしていても落ちつかない、そうであるなら週明けまでの課題をやるのが一番良いとなったのだ。

しかし思いの外、勉強は捗った。小便を我慢しているとき、逆に集中力が増す……それに近い感覚があった。ペンを動かしていないと落ち着かない……だからこそ次々に問題に取り掛かれた。

問題の答えに悩むたびに、ちらりと横を見る。そこにはベッドの枕元に置かれたスマホがあった。僕はあのスマホを起きてから1度も起動していない。

答えを知るのが怖いような、楽しみなようなで、どちらかと言うと怖い。昨日の勢いは完全に一時的なもので、まだ自分がやったこととは信じられない。折原からの返信が既に来ているかも分からないのに、スマホに触れることすら恐ろしかった。

でも、後悔はしていない。僕は自分がやり遂げたことを誇らしく思っていた。自分がやりたいことをやったのだ。その結果で心が打ち碎かれることになろうとも構わない。

僕は課題が全て終われば、スマホの電源スイッチを押すことも決めていた——。

昼頃までかかるかと思通していた課題は、11時前には終わってしまった。日の光はようやく強くなり始めた頃だった。当然、部屋の中

はまだ寒いままである。

僕は半分空いたカーテンから入ってきていた光をもつと浴びたくて、窓のほうに向かった。

明るさに目を細めれば、そこにちょうど道を歩く野良猫の姿があった。近所ですく見る猫だった。冬になって毛の量が増え、小さな羊みたいになっているその猫は、電信柱の近くまで行くと、道路の上だというのにひっくり返って寝転んだ。

見ているこっちまでとろけてしまいそうなその猫の寝顔を見て、この世界はなんて平和なんだと僕は思った。

僕はしばらく窓際でその猫と同じように日向ぼっこをした。もういいやと感じるまで、平和を体内に取り込んだ。

「すう……はあ」

心の準備が整う頃には、顔がかなり熱くなっていた。最後に深呼吸をしてから部屋の中央に戻って、スマホと向かい合う。

たぶん、もう僕のメッセージを見ただろうな。彼女が休日に昼まで寝るタイプでなければ、見るのは見たはず。返信ももうしてくれたかな……。

裏返しのスマホに電源を入れて、カードをめくるように画面を見る。

しかし、そこにはまだメッセージを受信したという通知は無かった。

何もセーフではないけど、野球のセーフのジェスチャーをしてまた元あった場所にスマホを置く。

まだ返信が来ていないのなら仕方がない。一旦ご褒美タイムというか。

僕は黒いパソコンが入っている収納を開けると、黒いパソコンと一緒に黒いマウスも取り出した。

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

②

まだこの落ち着かない時間が続くというのなら、気を紛らわせる手段が必要になる。僕にとつてそれは、これしかない――。

昨日までもやっていたこの気を紛らわせるための検索。でも今日のは昨日までのとは違う……良い気の紛らわせ方だ。逃げではない、純粹な。100%で楽しめる気がする検索。

もし黒いパソコンに起動音があるなら、今日はポップな音。僕は弾むような音を脳内で再生しながら、黒いパソコンを開いた。

今日の検索の方向性としては長く楽しめるものが良いと思う。まだざっくりとしたイメージだけど、動画検索で何か面白い映像を見るとか。ずっと見れるものが良い。過去未来すべて合わせた物の中で、最も傑作の映画を見たりするのなんてどうだろう。

でも、何をもつて最も傑作だと言うのだ。その判断基準って何。創作物の好みなんてきつと食べ物好みよりも人によるのだから、最も観客動員数が多い映画とかを見たとして、果たして僕も面白いと思えるのか。数字を当てにして見てみた映画が面白くないなんてよく聞く話だ。

じゃあどうしよう。最も傑作の映画とかではなく、今の僕が見て一番面白い映画とか超パソコン任せのものにしてみるか。そんな何でもありの検索が通るのかという気持ちもあるが、たぶん通るし。

「うーん……」

長く楽しみたいという条件だけなら別に映画じゃなくてもいい。例えば映像じゃなくて画像、映画じゃなくて小説や漫画という手もある。僕の人生では映画を見た時間より漫画を読んだ時間のほうが長いし、未来の名作漫画とか読んでみようか。

いやここまで来たらいつそ一枚の絵なんてどうだろう。部屋の壁に飾られたジグソーパズルで作られたゴッホのひまわりを見て思いつく。芸術なんてものには小さじ一杯の興味もないが、芸術の到達点

みたいな作品を見たら何か心を揺さぶるものがあるかもしれない。

じゃあさらにいつそ黒いパソコンに絵を描かせるとか、AIが絵を描くくらいだからそんなこともできるかもしれない、全ての答えを知るパソコンが描く芸術の答えか……ちよつと気になる……。僕はふざけているのかと言いたくなる現代アートを頭に浮かべながら考えを続けた……。

しばらく悩んでようやく検索の方向性が定まった。お昼が近づいて、僕のお腹が鳴った時だった。どうせならこの腹を満たす為に食事をしながら見れるものがないなと思ったのだ。

だからつまり、結局最初に戻って映画を見ることにした。

僕はスマホを使って最近流行っている映画や評価が高い映画がどういったものなのかを検索した。「おすすめ 映画」みたいなワードで検索して、ランキングサイトなんかを閲覧した。

どんなジャンルの映画を見るか決めるためである。いつ折原から検索が来るかもしれないので早足でサイトを渡り歩いた。そうしていると、何度も1つの映画が目にとまる。

最近テレビのCMなんかでもよく目にする話題作、海外のアクション映画で宇宙人の侵略をテーマにした映画である。どのサイトでも非常に評価が高い。SNSでも絶賛されている。

そんなに面白いなら黒いパソコンを使わなくても見れるけどこれを見てみようか。僕は思った。

そして、次にこうも思った。

宇宙人の侵略と言えば、もし僕が宇宙戦争を止められていなかったら地球はどうなっていたんだろうと。

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

③

あの日もしも僕がいなかったり、黒いパソコンが存在しなければ、地球は滅んでいたはずなのだ。それって一体どんな風に……どのくらいの間で……一瞬なのかじわじわなのか……。

再生した人気映画のPVと、自分の頭の中の想像が重なる。実際の世界にもこんな風に巨大なUFOと大量の宇宙人が攻めてくる未来があつたはず。

黒いパソコンならそれを映像化できるだろうか。もしできるとしたら、それはめちやくちや気になる——。

僕は今まで考えていた検索のイメージを全て捨て去って、新しく思いついた方へ乗り換えた。

まずはさっさと昼飯を食べることにした。もし見れたとしても、その映像を見ながらだとたぶんご飯がまずくなるので、検索してみる前にカップ麺の中へお湯を注いだ。

蓋の上で温めた液体スープを入れて食べ始める。そうしながら僕はこれから見るつもり動画がどのくらいグロさをしているか考えた。やっぱり人の臓器が飛び出したりする様子も見せられるのだろうか。

他にも人が頭から食べられたり、宇宙人に人間の女性が××されるなんて胸糞悪い展開もあるかもしれない。

僕は激しいグロが得意ではなかった。青年誌とかで必要のないグロ描写を見たりするとナンセンスだと思う。ああいうのが好きな人がいるというのも分かるけど、グロく衝撃的にすれば良いってものではないと思うのだ。見ると吐き気を催しそうで、すぐ本を閉じてしまう。

気持ちは分かるのだ。僕も捕食動画とか見るし、今だって程良いグロは求めているし、でも激しいのだと嫌だな。

カップ麺のスープまで飲み干すと、僕はさっそく検索に取り掛かつ

た。

「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

忘れずに黒いマウスを右クリックしてから動画検索にして、Enterキーを押す。

ゆつくりと視聴するためにベッドの中でイヤホンをつけていた。親が何か用事があつて入ってくるのだけが怖いけど、黒いパソコンを露出させて視聴する。

グルグルが表示され、消えて、どこかの都会にある1つのビルが大きく画面に表示された。

数秒後、続けて街全体を映すカメラに切り替わる。それを見ただけではどこなのか分からない。雰囲気は日本のどこかっぽい、そこそこの発展度の街だった。

さらに映像は、その街をいくつかの視点で捉えたものを見せる――。そしてまた、最初のビルの所へ戻ってきたときに視点切り替えが止まった――。

「2023/2/23 14:33 宇宙人襲来」

そんなテロップも同時に表示された。風の音だけが聞こえていた昼下がり。そこへサイレンのような低い音と共に、謎の機械が落ちてきた。

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

④

ヘリコプターくらいの大さきでホバリングする円盤状の機械。その上には十数個の触手のようなものが生えていた。形で言えばイソギンチャク、1つ1つの触手の先は銃口のようになっている。

「2023/2/23 14:34 攻撃開始」

そして次の瞬間、何の前触れもなく攻撃は始まった。

宣戦布告もなく、人々が驚く隙も無い。見た目通り触手の先から見えない速度で弾が放たれる。全ての触手から一斉にという訳ではなく、必要な分だけの触手が屋内の人間を狙いますように動くと、1発ずつだけで人間の頭を貫いた。

その様子も見やすいように様々な視点から流された。屋内の映像では労働中の女が窓の外の機械と目が合った瞬間、床に倒れた。

その効率が良い殺戮は次々に……各地で行われた。謎の機械は1つではなく、中型以上のビルと同じくらいの数がいた。最上階の人間を撃ち終わると、その下の階——隣のビルやマンション——地上と、タコよりも触手を滑らかに使って移動しながら、逃げ惑い始めた人間を狙う。

「同刻 ニューヨーク」

「同刻 上海」

さらに世界各国の都市でも同様のことが起こっていることが映像で説明された。謎の機械が通った後に倒れる大量の死体が、ダイジェストで流れる——。

僕は今のところの映像ではあまり心を痛めていなかった。現実で起こる可能性があった出来事だけれど、現実ではない。それこそ映画を見るような気持ちで見れていたからだ。

むしろこれが起こらなくて良かったなという、他人事のような安堵が強かった。

しかし、次に始まった映像で話は変わる。頭を撃たれ、そこから血

を流しながら倒れているスーツ姿の男がフォーカスされたと思えば、なんとその男が何事も無かったかのように立ち上がった。

急所を貫かれて一瞬で死んでしまったという風に見えていた。にもかかわらず、立ち上がればすぐに歩き出す。これは一体どういうことか、画面を見ながら考えればその男の虚ろな目に気持ち悪さを感じる。

「先ほど撃ち込まれたのは生物の脳を解析し、その働きを制御するチップです。これがこの男のように正常に作動してしまうと、人格や記憶を残したまま侵略してきた宇宙人の操り人形になります。命令には無言で従い、命令せずとも主人の為にその身を捧げる、そんな人間を作り上げる人工の寄生虫のようなものです。」

その考え事の答えはすぐにテロップで画面に表示された。一瞬だけゾンビ化させる生物兵器のようなものかと思ったが、それ以上に高級でエグいものだった。

頭を撃たれた人間たちは次々に立ち上がった。そして、その起き上がるタイミングに差異はあれど、皆同じ方向に向かって歩き出す。

「最初に下されている命令は、半径約41km以内で最も広く開けた場所へ集まれというものです。宇宙人は地球の資源を効率よく回収する目的や戦争に使う捨て駒として地球人の労働力を欲しています。人間達を1度同じ場所に集めて、そこでさらに選別を行います——。」

そこからしばらくの間、人間が集団でぞろぞろと移動していく様子が続いた。車の事故や割れた窓ガラスなどで多少荒れた都市を、無表情で歩くそれらは、さらに殺され続ける人間を見ることも無かった。

信号も無視で、運良く生き残った子供が泣く声も無視。制服を着た若者もいれば、パジャマ姿の老人もいた——。

「2023/2/23 16:25 宇宙船着陸」

ある多目的スタジアムには、グラウンドから観客席まで埋め尽くすほどの人間が集まっていた。スタジアムの外まで長蛇の列が続いている。

そこへ降りてきた宇宙船はよく見たことがあるような形をしてい

て、見たことが無い大きさをしていた。こうして画面越しに見ていると、CGにしか見えない。遠近感がバグる。宇宙広しと言えど、こんなものが存在するなんて信じられない、山なんてレベルではなかった。

そんな中また1人の男へカメラが寄っていく。スタジオアムの真ん中にいたその男は密集する集団の中で唯一、空を見上げていた。表情が見えるところまでズームインすると、その目が曇っていないことも分かる。

僕が映画みたいなものを求めていたからだろうか、そこからはその男が主人公の映画のように映像が進んだ。

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

⑤

「約20億発の人工寄生虫が地球に暮らす人類の脳へ放たれた——。各国の都市部を中心に1人1発ずつ放たれたその命中率は約99.9%——。狙われた大半の人間は、人の形を残したまま人形になった——。」

「どうやら周りの者とは違う様子の男を中心に捉えながら、テロップが流れる。」

「けれどごくわずかに、都市部にいながら運良く支配を免れた者もいた——。弾道計算後、上空から落下してきた巨大な無機物が射線上に入る、下等ゆえ計算外となっている動物達からの多大な干渉、そういった要因で発生する——。元より、全人類を支配下に置くことが目的ではないので宇宙人にとって問題にはならない——。ただ確かに、自らの意思で動く者もいた——。」

テロップと映像の構成からして、この男こそが幸運にも助かった者ということだろう。変わり始めた映像の展開、僕はそれと共に体の姿勢を変えた。あと、怖くなってきたのでクッションを抱く。

画面の中央に映る男は見たところ30代前半くらい、黒いジャンパーを着ていて、頭にはニット帽を深く被っている。

そんなニット帽の男はしばらく上空を見つめた後は、しきりに周りの様子を確認した。あまり頭を動かさずに目だけを右に左に走らせ、ただ真つ直ぐ前を見ているだけの人形たちを見ていた。

宇宙船が開いて、そこから巨大な坂道が出現する。搭乗用の通路か、それが下りてくるとスタジアムの群衆が前へ向かって動き出した。ニット帽の男も周りに合わせるようにその流れに乗る。

「お先にどうぞ……」

「すみません……」

人形となった者達も普通に言葉を発することがあった。密集しすぎて事故が起こらないように社会性を持って行動する。我先に急ぐ

者は1人もいなくて、スムーズに宇宙船への坂道を上っていった。

それが逆に気持ちが悪くって、悪夢でも見ているようである。

ニット帽の男も坂道の下まで辿り着く。そこからだと大量の人の背中しか見えない、先ほどまでニット帽の男まで届いていた夕日も宇宙船の影に隠れた。

おそらく地球上には無いほど真っ直ぐで長い長い坂道、上っていくほどニット帽の男の表情は険しくなっていく。ここへ来たことを後悔しているのか、たまに目を強く閉じて大きく息を吐く。

「やっぱり死ぬのかな……まだ生きていたかったな……逃げたほうが良かったかな……今更戻ったら……でも、たとえ死ぬとしても1人じゃないから……」

映像と共に心の声としてニット帽の男の考えが聞こえる。泣き出しそうな声色だった。

「せめて最後に家族に会いたい……この群衆のどこかにはいるのか……もし、もう少し生きれたらチャンスは………やっぱりあるか……」

坂を上り切ると見えた宇宙船の内部、そこでは見るからに個体を識別している機械があった。空港で見かける金属探知機を大きくしたようなゲート、その奥に先ほど人を襲っていたような触手、そしてさらに隣には床に倒れる死体の山があった。

下唇を噛んでしまう緊張感、僕はそれと共に違和感を覚えた。

⑥

「覚悟はしていた……まあ、どっちみちだ……元より来ても来なくても死んでいた……ダメだったらせめて一瞬で殺してほしい……」

止まる訳にも逃げる訳にもいかない男は歩みを止めなかった。ゲートに向かう人の列から外れずに、周りと同じく真つすぐ前だけを見て進む。

「撃たれていないことがバレると殺されると思ったから、俺に撃たれるはずだった機械は瓦礫の中を探して持ってきた……それで大丈夫かな……頭に穴が空いてないのは帽子被ってきたから大丈夫……他にも帽子を被ったままの人も……いる……」

ニット帽の男がいよいよゲートを通り抜ける——。僕はついに息を止めてしまう——。

短い電子音が鳴って、その瞬間にニット帽の男は触手に体を掴まれた。目で追えないくらい速度、待ち伏せする捕食者のように男を掴んだ触手は失敗作を列から外し、皆が向かうのとは別の通路の前に置く。

ニット帽の男は狼狽えた様子で触手を見たまま動けなくなっていた。先ほど掴まれた腰を抑えながら呼吸を荒げる。殺されるであろう恐怖が抑えきれないと言ったところか——。

触手がもう一度男のほうへ伸びる——。

しかし、触手はニット帽の男を殺そうとはしなかった。手を払うようなジェスチャーで通路を進むように誘導した。

「……………殺さないのか……………何で……………どうして……………進む?……………しかないか」

ニット帽の男が恐る恐る通路を進むと、開けた場所に着いた。そこにはベンチのような細長い形状の機械と、それに座るいくらかの人間がいた。奥には1つ大きなモニターがある。

ニット帽の男の困惑はより大きくなったように見えた。そこへは

近づかずに歩いてきた通路を振り返る。

それもそのはず、俯瞰的に見ている僕もどういふことか分からない。

「チップの存在を確認できるが、それが正常に機能していない個体はこの部屋に連れてこられる——。ここではいくつか実験が行われて、よりよい人工寄生虫を作るためのデータを集めている——。」

答えは僕だけに届けられた。救いは欠片も無いテロップと同時にニット帽の男を見続けるのが辛い。

ニット帽の男は他の人間に習うようにしてベンチに座った。日本人らしさと言っているのだろうか。他の者もそうしているし、とりあえずといった様子で迷いながらの行動だった。

周りの者は皆じつとモニターを見つめていた。だから、ニット帽の男もモニターを見る。しかし、そこに並ぶのは見たことも無い文字。数字すら使ってくれない、きつと宇宙人の言語だった。

しかし、それを僕は見たことがあった——。

また短い電子音が鳴って、モニターの文字が切り替わる。すると、隣に座っていた若い女が立ち上がり、奥に続く通路に消えていく。

さらにまた音が鳴って画面が切り替わると、モニターの近くに座っていた男が立ち上がって奥の通路へ向かう。

「俺も行ったほうがいいのか……分からない……見たところ病院の待合みたい……たぶん指定された奴が向かっている……でも俺には……」

ニット帽の男はしばらく人が減っていくのを見守った。そして、モニターの画面が切り替わっても誰も立ち上がらないタイミング……それを見つけて、奥の通路へ進んだ。

そこでも僕は違和感を覚える。いや、僕は既にその正体に気付いていた。この内装、どこかで見たことがあるような……そんな違和感。それはやっぱり、お隣さんの家で見えたものだ。

ただ、似ているだけかもしれない。そう思ったけれど、画面の中のニット帽の男が辿り着いた場所で、説は打ち砕かれた。

間違いなくお隣さんと同じ惑星の人。一目でそう感じる宇宙人が

そこにいた。

word54 「もしも 宇宙戦争起こっていたら」

⑦

「君は頭を撃たれていないね？」

「……え」

「大丈夫。いきなり殺したりしない。質問に答えてくれるだけでいいんだ」

「日本語……？」

「はいか？いいえか？」

「……はい」

困惑する僕を置いてけぼりにするように映像は進んだ。ただ単に似ているだけの可能性もある……でもこれはどう見ても……。

「じゃあまず、君に撃たれるはずだったチップを返してくるかな？」

「……はい」

ニット帽の男がポケットから1つの小さな機械を取り出した。青い色をしていた。

「ありがとう。じゃあ奥に進んで、手前の椅子に座って」

「……はい」

ニット帽の男は僕がお隣さんに会った時よりもびびっているようだった。とにかく「はい」と答えるだけで、何も考えずに言われた通りにしているという風に見える。

僕はもうこの男がどんな結末を迎えるかよりも、この宇宙人がどういう連中なのかということに頭が引つ張られていた。しかし続く映像は一気に引き戻されるほどの衝撃があった――。

ニット帽の男の顔が別人に変わったかと思うほどひきつる――。

そこでは既に地球人の人体実験が始まっていたのだ。先ほど映像の中で奥へ進んでいった若い女が……周囲にいた人間がもう二度と治ることは無いほどに傷ついていた。

裸にされ脳に何か付けられている若い女は見たことが無い動きをしていた。軟体動物かのように体全体をぬめぬめと動かし、時折両手

足が痙攣を起こしながらばたつく。

その隣のスペースにいた男も、後ろ向きで全力ダッシュを繰り返す奇怪な動き。ただ後ろ走りが早いのではなくて前に走る映像を逆再生しているみたいなの、とても正常な人間ができる動きではない。

そして奥には、シンプルに頭を開いて解剖されている人間がいた。こういうとんでもないグロ描写が来てしまったかと僕は後悔する。選択肢を間違っていたようだ。10秒ほど見て耐えきれなくなった僕は画面を手で覆った。

ここで見るのをやめようかとも思う。けれど、このニット帽の男の結末までは見届けることにした。

「私たちの言うことに従っていれば君にはこんなことしないから大丈夫。さあ、座って」

「……………」

「座りなさい」

「……………」

「話を始める前に1つアドバイスだ。とにかく私の求めた答えだけを話すんだ。はいかいいえで答えられるものにはその2つのどちらかのみを……………」返事は？」

「はい」

「うん、良い子だ。では君が我々の攻撃から逃れて助かった時の状況をなるべく詳しく話してもらおうか——」

僕はそこからの映像をほとんど画面を隠しながら視聴した。時折近くにあるグロテスクな映像が映り込んでこないか心配だったので、ホラー映画のクライマックスシーンをみる時と同じくいつでも画面から目を離せるようにした。

結局男に救いは無かったし、最後はかなりあっけなかった。映画のように上手くいかない絶望が常にあった。彼は物語の主人公では無かったのだ。

「最後にこれから君はどうしたい？もう1度よく狙ってチップを撃たりたいか、帰りたいか、この2択だ」

「……………」家族に会いたいです」

「本当にすまない」

これで頭を後ろから撃たれて終わり。僕はニット帽の男が絶命すると共に、黒いパソコンを閉じた。

イヤホンを取って布団から出ると、背中に汗をかいていたことに気付いた。部屋の空気は映像を見始めた時から何も変わっていないのに、存在にありがたみを感じてほっとする。

1階から父のよく響く笑い声が聞こえる。普段はうっとおしく感じるけれど、今はもつと近くで聞きたい。しばらくこの怖さは消えないんだろうな。僕は悪夢を見た時は翌日まで引きずるタイプだ。

でもまあ、元々こういう風を楽しもうと思っていたのだから、ちゃんと目的は達成できた。

ああ、そういえば……お隣さんと映像の宇宙人の関係はどういうものだったのだろう。地球を救う為の検索をしてからお隣さんと顔を合わせていないけど、本当は悪い宇宙人だったり……。

そんなことを考えながら、黒いパソコンを片付けている時だった――。長らく見ていなかったスマホも目に入る。ちょうどそのタイミングでスマホが振動した――。

「2023/01/27 16:37 折原 裕実 スタンプを送信しました」

メンタルが弱っている僕は別ベクトルの恐怖を受けてすくみあがった。

日常の検索あれこれ（最後） 「今まで ありがとうと言われた数」

「今まで くしやみをした回数」

『あなたが生まれてから現在までにしたくしやみの回数は、8672回です。ちなみに、2回連続の数は1620回です』

「今まで あくびをした回数」

『あなたが生まれてから現在までにしたあくびの回数は、9056回です。ちなみに夜、就寝する前にあくびをする確率は94.4%です。』

「今まで 笑った回数」

『あなたが生まれてから現在までに笑った回数は、19875回です。ちなみに、愛想笑いは数に含んでいません。』

「今まで 泣いた回数」

『あなたが生まれてから現在までに泣いた回数は、1553回です。ちなみにあなたが最後に泣いたのは14歳のとき、映画で主人公の娘が死ぬところを見た時です。』

特に検索したいことが無い日は僕が今までの人生である事をやった回数を検索してみた。僕はもうそろそろ17歳になるから、17と365を掛けて……約6000日。その間の計測ということになる。

泣いた回数を検索したときは、僕はそんなに泣いたことがあったかと思った。きっと赤子の時のものをカウントされているのだろうけど、それにしてもここ数年は1度も泣いたことが無い気がするのに、1000回を超えていたことには驚いた。

このように自分では当然カウントなんてしていないことを検索するのには色々な発見と驚きがあった――。

「今まで 女子にかっこいいと思われた数」

『あなたが生まれてから現在までに同学年の異性からかっこいいと思われた回数は、347回です。ちなみに最も回数が多い年度は2020年、あなたが中学3年生の時です。』

「今まで 女子に気持ち悪いと思われた回数」

『あなたが生まれてから現在までに同学年の異性から気持ち悪いと思われた回数は、144回です。ちなみに最も回数が多い日は、あなたが小学5年生の時に間違つて女子トイレに入ってしまったところを見られた日です。』

「今まで オ○ニーした回数」

『あなたが生まれてから現在までにした自慰行為の回数は、999回です。ちなみに、最も妄想の対象にした女性はアイドルの矢野 咲花さんです。』

この検索をしたときは何よりもその回数がちょうどゾロ目だったことに驚いた。しかも999回。次は何と記念すべき1000回目である。

誕生日の日だとか、新年あけまして1発目なんかは少し特別感が生まれるものだけど、1000回目はそれらとは比にならないほど特別ははずだ。気づかぬうちにそんな節目を迎えていたか……。

さて、今晚のおかずは何にすべきか……。

「今まで 焼肉を食べた回数」

『あなたが生まれてから現在までに焼肉を食べた回数は、101回です。ちなみに焼肉で食べた牛肉の量は35890gです。』

「今まで スマホのロックを解除した回数」

『あなたが生まれてから現在までにスマホのロックを解除した回数は、7896回です。ちなみにあなたの年齢の平均回数は8721回です。』

「今まで 虹を見た回数」

『あなたが生まれてから現在までに虹を見た回数は、48回です。ちなみにあなた自身で見つけた回数は37回です。』

「今まで ありがとうと言われた数」

『あなたが生まれてから現在までにありがとうと言われた回数は、6969回です。ちなみに家族や友人から言われた回数のみです。』

僕はその数が今まで生きてきた日数を上回っていたことで何だか涙が出そうになった。誇れるものなどあまり無い人生だけれど、これは自分で自分を褒めたい。

数は微妙に卑猥だったけれど、嬉しかった……。

word55 「この服 変じやない」①

そっか。そうだった。そういえば僕は今そういう状況にあるのだった。かわいいあの子からの返信を待っていたんだ――。
すぐに目を逸らしてしまったスマホをもう一度覗き込む。

「2023/01/27 16:37 折原 裕実 スタンプを送信しました」

やはり返信があつたのは今だった。画面の上部で確認できる時刻の1分前。まるで、僕が黒いパソコンの映像を見終わるのを待っていたかのようなタイミング。でも……結構返信遅かったな……。

いや、それは問題じゃない。ただ単に忙しかったりしただけかもしれないし、とりあえずちゃんと返信してくれたことが嬉しい。

僕は頬を膨らませながらスマホを手に取った。このスマホを操作すれば、すぐに待ち望んでいたメッセージを見ることが出来る。指をちよんちよんと動かすだけだ。

しかし、僕はそんな簡単なことをするのに頭がパニックだった。

えっと、どうすればロックを解除できるんだっけ……。これは本当に折原さんからのメッセージだよ……。ここ押せばすぐに表示されるんだよね、本当に……。どうしよう……。いや、見るしかないんだけど……。

あともう1タップすればトーク画面。そこで僕は完全に固まった。もしもこの先に待っているのがデートのお誘いだったら、逆に二度と連絡とらないでという内容だったら……。考えれば考えるほど、手が動かなくなる。

部屋の中にしばらく、僕の深呼吸が響いた。部屋中の空気が僕の吐いた息で満たされるんじゃないかというほど、吸っては吐いて、吸っては吐いて。

そして、心臓の鼓動が耳まで届かなくなっただけのタイミングで、僕はその先に進んだ。

「あのギターの話面白かった?」

「聞いてくれるんだったら話すけど」

それと、微笑む猫のスタンプ。目に飛び込んできたのはそれだった。

いや、何というか——普通——。変に色々考えていた自分があほらしくなる。

とりあえず連絡を拒否されてはいなかった。ということは、次は返信しなければ。

もう一度大きく深呼吸をしてから、再び固まって思考タイムに入る。

何て返せばいい……こういうのって早く返したほうが良いよね……そんなこともないか……相手がスタンプ送ってきたからこっちもスタンプ使った方が……なるべくかっこいい感じで……かっこいいメッセージってどんなだよ……。

「聞きたい」

「最近ギター熱がすごくてさ、折原さんが言ってたギター弾くコツとかも分かりやすかったから」

それと僕も、たまに使う別の猫のスタンプ。折原からメッセージを受け取ってから10分後の送信になった。我ながら、考えた割には普通の返信である。

一瞬でかなりカロリーを消費した感覚がある。さつきまで映画のような映像を見てたのも合わせて、頭が重く感じる。寝ないと直らないやつだ。

しかし、僕はトーク画面を凝視しながら返信を待った。苦ではなかった。折原とメッセージのやり取りをしたという事実、それは僕にとって何物にも代えがたい宝だからだ。

すると、30分後に次の返信があった。

Word55 「この服 変じやない」②

「持つてるギターは部活でも使ってるやつだけだったっけ？」

いつでも来いという覚悟を決めていた僕は、答えやすい質問だったのですぐにメッセージを返した。

すると、そこからは良いリズムで会話が続いた――。

「そうだね、俺の相棒はこいつ一人だけ」

「あれ本当良いよね」

「Jacksonのギターって弾きやすいって聞くしこの前触らせてもらった時もめっちゃ手に馴染んだー」

「折原さんは何個かギター持つてるの？」

「てか、このプロフィール写真って折原さんの私物？」

「そうだよ」

「それとなく自慢してるw」

「いいでしょ？」

「え！こんなに持つてんの？」

「すごいね」

「うんうん」

「もつと言って」

「マジでかつこいい」

「赤いやつとかいいね」

「ほとんど中古の安物なんだけどね…」

「今日は何してた？」

「俺はさつき怖い映画見ちゃって暗い気持ちになってた笑」

折原から送られてくるメッセージを見ると、音楽室で初めて2人きりになったあの日のことを思い出して、頬が熱くなった。

あの黒い髪をした天使から送られてくる眩しいくらい言葉。それを受信できるこの普通のスマホは、今現在において黒いパソコン以上のチートアイテムだ。

夕飯時だからか、今日の過ごし方を聞いたところで折原からの返信は途切れた。僕もそのタイミングでご飯を食べて、少し頭を休ませる

ために目を閉じたりした。

当然その間も僕は、上がる口角を抑えるのが大変だった。

「怖い映画？幽霊が出てくるホラー映画とか？」

「いや、ホラー映画ではないけど……昔の宇宙人の映画」

「ふーん」

「地球侵略みたいなの？」

「あ、ちなみに私は今日寝てた」

「折原さんは宇宙人って信じる？」

「信じるよ」

「私小さいころ宇宙人みたことあるしw」

メッセージの間の時間が長いことが続いた後、会話と呼べるくらい
のやり取りが再開されたのはすっかり夜といった時間になってから
だった。僕はお風呂も済ませて、いつでも寝れる状態でスマホを操作
した。

先ほどと同じように別のことはせずに折原からのメッセージを
待った。時折別のアプリを起動したりしてみるけれど、常にいつでも
通知画面を開く準備をしていた。

「折原さんは好きな食べ物とかある？」

「うーん……ピーマンかな」

「ピーマン？笑」

「何の料理で食べるの？」

「そのまま焼いたのが一番好き」

メッセージを受け取る度に新たな発見、それと共により惹かれる気
持ちがあつた。ルックスは年相応だけど、ちよつと子供っぽいところが
あつてかわいいだとか、こういうところは男っぽいだとか、絵文字の使
い方一つを見てもなんかかわいい。ぶつちやけ折原からならどんな
メッセージが来てもかわいいと解釈してしまうのだけだ。

しかし、また時間を追うごとに折原からの返信のペースが遅くなっ
てきた。

初めはこんなにたくさん話すつもりは無かったのに、意外と付き
合ってくれるものだから調子に乗ってしまった。少々がつつき

すぎたかもしれない。僕はそのことに気づくのが遅くなってしまった。

もう気づけば23時を過ぎているというのに……。

「もう寝る?」

だから、僕は適当なタイミングでこう送信した。

そうすればたぶん、向こうからもやめる流れのメッセージが来るはず。長くやりすぎたけど、付き合ってくれたし嫌われては無いよね。そんなことを思いながら未だ衰えない幸せと一緒に返信を待つ。

先ほどは15分返信が来なかったのに、今回はすぐに返ってきた。そしてそれは全然予想外のものだった。

「めっちゃお腹空いた!今はラーメンが食べたい!」

Word55 「この服 変じやない」③

僕も眠気を感じていた。今日は満たされに満たされたから、最高の気分ですりつけそう。

そう思いながらだらしない顔をしていたのに、まだ幸せには続きがあった。

「昨日話してたじゃん、ラーメン屋の話」

「あれ思い出しちゃって」

さらに送られてくるメッセージで、僕は再び気合を入れる。

「ああ、あそこの電気屋の隣のラーメン屋のこと？」

「そう」

「あそこのラーメンっておいしいの？」

「店の名前が付いた店がオススメしてるラーメン以外はおいしいよ」

「チャーハンも餃子も」

「そうなんだw部活の時もちよつと聞こえてたけど面白いよねw」

「私あそこ1年生の頃から気になってるのに1回も行ったことない」

「何で行かないの？」

「だって女だけでラーメン屋に入るのってなんか嫌じゃない？」

女だけではラーメン屋に入りづらい……男だけでドーナツ屋に入りづらいのと同じ感覚だろうか。もしそうだとしたら気持ち分かるかも……。

僕は思いついたことをそのままメッセージにする。

「男だけでドーナツ屋に入りづらいのと同じ感覚？」

「だったら分かる」

「たぶん同じ」

「気にせず入ればいいのに」

「今いるよね、ラーメン女子みたいなの」

「私そういうの嫌い大嫌い」

「恥ずかしいとかじゃなくてそんな風に見られるのが嫌なんだよね」

「あ、あの子女子高生なのにラーメン食べてるとか思われたくない！」

「え、そうなの」

「うん、やだ！絶対やだ！」

「もし1人で行くなら男装する！」

送られてきた言葉で僕はフツと小さく笑ってしまった。突然勢いづいた折原が、今日一番僕が持っていたイメージとは違うキャラだった。でも、これはこれでギャップ萌えである。

それにまた男の立場で考えれば同意できる。僕もスイーツ男子とかいたら気持ち悪いと感じる。

そしてその同意と共に、僕の胸にまさかねという気持ちが生まれた。

「男装は笑う」

「そもそもしたことあるの？」

「ないw」

「ないからラーメン屋にいけない」

「はあ、こんな話してたらもつとラーメン食べたくなる」

「俺まで食べたくなってきた笑」

「決めた：私明日あそこのラーメン屋行く」

「一緒に行く？」

——僕が抱いていたそのままかは、数分後……いとも簡単に現実になった。

そしてそれを見た瞬間、僕はベッドから勢いよく飛び出した。

目が上に上に引っ張られて前が見えない。その状態で飛びそうになる意識をどうにか抑えようと頭を何度も叩いた。

僕は最後に送られてきた一文を完全に折原から言われたように再生できてしまった。なまじそのようにできてしまったものだから、耐えられなかった。

頭を叩いていた手を額にぐつと当てる——その次は胸——その次は右肩——そして左肩。キリスト教の十字の切り方がこの順序だといつか誰かに習った気がする。自然と、そう手が動いた。

手を合わせて南無阿弥陀仏も唱えた。別にキリスト教も仏教も信じていないけど、これまた自然にだ……。

ようやく目をしっかりと開けることができたので、僕はもう一度スマ

ホの画面を確認する。

「一緒に行く?」

しかし、その一文を見て僕の意識は再び飛びそうになった。

もう一周、手を額に当てて——胸に当てて——右肩、左肩。手を合わせて……念仏を唱えていく。

気づけば、着ていた服を脱いでいた。本当にいつ脱いだか覚えていないのにパジャマにしているトレーナーとその下に着ていたシャツが別々の場所に投げ捨てられている。

そのおかげで、寒さが僕を現実に戻してくれたらしい……。

三度目の正直で、今一度スマホの画面を見る。

「一緒に行く?」

やはりそこにはその一文があつて、僕は戻ってきた現実が本当に現実なのか疑った。

word55 「この服 変じやない」④

え、だってこれってデートって事じゃん。この会話の流れだったら2人でだし。そうなるよね。やっぱり誘われ待ちだったのか、誘って良かったのか。マジで……。

折原さんからデートに誘われるなんて思いもしなかった。何かの悪戯か……そうかも、悪戯かも……画面の向こうで家に泊まりに来た友達と笑ってるのかも……いやでも、今のところの会話内容に疑わしい部分は無かったよな。僕、黒いパソコンで何かしたっけ……そんなことまで考えた。

けれど、送られてきたメッセージを見返しても罨だとはやはり思えない。

でも待てよ。じゃあ、折原さんはこんな感じで男をデートに誘う子だって言うのか。メッセージを送ったのは今日が初めてだぞ。もしかして、男で遊ぶ悪い子……だとしても、そうだとしても。

「行くう」

折原さんになら、遊ばれてもいい――。

鳥肌が立ち始めた全裸の体をベッドの中に滑り込ませて、それから僕は折原と明日の待ち合わせについて話した。

もう、何が何だか分からない。けれど、とりあえず待たせる訳にもいかなかったから、僕はメッセージに動揺が現れないように注意しながら指先だけを震わせていた――。

それから夜は滑り落ちるように流れていった。僕の手に負えない速度で、どんどん早くなるように、気づけばもうこんな時間。そんな風に僕を置き去りにしていった。

当然ぐっすりなんて寝られなかった僕は、折原に「おやすみ」を言った後もずっと高校生のデートについて調べた。ラーメン屋に行く約束しかしてないけれど、その後に何があってもいいように調べるだけ調べておかないと目を閉じてても寝られる気がしなかった。

初めてのデートで気を付けることから、ラーメン屋デートのコツなんていうニツチなものまで読み漁る。

ただそんなことをしていても幸いなことに約束は昼からだだったので、寝る時間が全くないという状況にはならなくて済んだ……。

翌朝、僕は爪を切った。できるだけ長く落ち着いていたかったので、眠気を逃がさないようにベッドに入ったまま。

「世詰め」という言葉があるらしい。意味は命を詰める……つまり寿命を縮める。戦国時代に使われていた言葉なのだそう。昔の人はこの「世詰め」と「夜爪」の読みが同じという理由で、夜に爪を切るのをNGにしていた。そんなことをしたら寿命が縮んで、親の死に目に会えないぞと。

「世詰め」ではなく「夜詰め」という言葉だった説もあるらしいが、大体そんな感じらしい。

僕はそんな無駄な事まで調べながら動き出す瞬間を待っていた。

綿密に計算した出発時刻や、持っていく物と着ていく服なんかは寝る前に完璧に決めていた。服の匂いもちやんとチエックした。思えばアウトレットで買った時に最も気に入ったこの服を着るのは今日が初めてだ。ズボンも靴下もそう、新品の状態で値段も高かった。これなら間違いなく最もオシャレな僕になれる。

その自信はあった。けれど、それでも念の為に黒いパソコンで検索もしておいた。「この服 変じゃない」と。

「あなたが明日外出用に着るつもり服は、変ではありません。」

黒いパソコンはシンプルにそう答えてくれた。

財布の中にも一応5万円ほど入れておいた。仮に奢ったとしても、さらにどこかへ遊びに行けたとしても、高校生のデートでそんなにはいらなと思うけど一応。

服に袖を通して、眉毛や髪も整えると準備は万端。事前に行けることはちゃんと滞りなく全てできた。それも出かける20分前に。到着時刻は約束の20分前なので。合わせて40分も早い。

余裕を持っていいほど時間と物資はある。しかし、心の準備は全く完了していなかった。

word56 「付き合える未来 あるか」①

目的地のラーメン屋は大手家電量販店の隣にあった。僕が通っている高校のすぐ近くというほどではないが、窓の外に見える範囲の場所にあった。窓際の席にいた頃はたまに看板が腹を刺激していた。

味はかなり良い。僕もいくらかのメニューを食べたことがあるが、どれも満足のお味だった。オススメラーメン以外は……。

そういえば、おいしいラーメン屋って家電量販店の隣にありがちな気がするけど、それは僕だけの感覚だろうか。

通学路から少し逸れて歩く道は新鮮だった。同じ町でいつも曲がらない場所を曲がっていただけなのに、そう感じる。

まず学校の近くまで行ってからラーメン屋に行く道のほうが近い気がしたが、僕は遠回りすることを選んだ。この辺では、浮いちゃう服装に感じたからだ。部活で休日も学校に通う同級生に会ったりなんてしたら、恥ずかしい。

見たことが無い格安の自動販売機、こんなところにも会ったのかわかって進学校周辺の学習塾。歩いていると見つけた、近くにあるのには知らなかったもの。それらをチェックしながら進めば、初めての道を抜ける。

すると、珍しかった町が急にいつもの場所が変わってしまった。

ここまで来るとラーメン屋はもう遠くない。待ち合わせの場所は隣の家電量販店で、そののこころで一番高い看板は既に見えている。けれど、こんなところまで来てもまだ何かの間違いなんじゃないかという疑いがあった。

だってこんな急にデートに誘ってくるか。普通あり得ないか。ドッキリやイタズラではないかと思いたいけど、行ってみたら折原さんだけじゃなく他の子も居たくらいはあるかも。

まあ、それはそれでありかも――。

辿り着いた家電量販店の中に入る。僕は買えるお金を持っていないが、何食わぬ顔で最新の家電のコーナーのほうへ進んだ。まだ、折原に「着いた」というメッセージを送るには随分早い。最新の家電程

度ではどうにもならないけど、なるべく気を紛らわせようとした。

テレビコーナーにもパソコンコーナーにも行つた。あまり足を止めることは無く、ぐるりと店内を1周した。パソコンコーナーではどれが一番黒いパソコンに近いかを決める遊びをした。

待ち合わせの15分前になると、折原に着いた報告のメッセージを送った。いよいよ学校の外で、しかもプライベートで折原と会う。座っていたいけど座れないくらい落ち着かない。

会った時の第一声は「あれ、男装じゃないんだ」で本当に良いだろうか。親しい間柄じゃないし笑ってくれなかつたらどうしよう。いや、十分考えて決めたじゃないか。今更考え直す余裕なんてない。

スマホを持ったまま歩いていると、ものの数分でそれが振動してしまふ。

「早いね」

「でも、私ももう着くよ」

「じゃあ外出とくよ」

「裏口のほうから出てきて」

そこから僕は、頭の中で自分はイケメンだと唱え続けた。最後に頼ったのは自己暗示、服装を今一度確認しつつ気持ちだけでもイケメンを目指す。

言われた通り裏口から出ると、既に敷地外に立っている女の子の姿は見えた。後ろ姿だけど、すぐに彼女だろうということとは分かる。

万が一……本当に1万分の1くらいの確率で男装してくる可能性もあるかと思っていたが、男装ではない。

だから、僕は近づいて振り返った折原と目が合うと言った。

「あ、あれ……男装じゃないんだ」

「え」

「折原さん、男装してきてないんだ」

うわあ、あんま上手く言えなかった——。そう頭の中で秒速の後悔をする。

「ねえ、やつぱ男装したほうが良かったかな。それにも挑戦しようかと最後まで悩んでたんだけどやめちゃった」

でも折原は笑ってくれて、とりあえず第一関門は突破できたみたい
だった。

word56 「付き合える未来 あるか」②

「うん。てつきり男装が見られるもんだとばかり」

「期待してた？」

「いや、冗談。本当に男装してたら困るって。最後まで悩んでたのも驚き」

「安物のカツラしか用意できそうに無かったし、髪をベリーショートにする勇氣も無かった。私、まだまだだな」

「え」

話しながら、ラーメン屋のほうに向かって歩き出す。短い距離だけど、昨日予習した通り車道側を歩いた。

「電車通学じゃないよね？」

「うん。徒歩通学だね」

「もしかしたら電車の中にいるかとも思ってさ、ちよつと探したんだけどいかなかったから」

「折原さんは電車通学か」

「そう、それに同じ電車通学だったら、私より先の電車で来てくれてたって事じゃん」

「ああ、そっか。そうなるね」

人が少ない時間が良いという理由で待ち合わせの時間は昼前になっていた。2人とも早く着いたので、時刻はまだ11時30分にもなっていない。

だから、ラーメン屋の入り口を開けるとすぐにタオルを頭に巻いた店員が席に案内してくれた。

「いらつしやーせー。何名様ですか」

「2人です」

僕が答えた。2人だと。そう、女の子と、折原と2人きり。待つてるほどいらないとは言っても、店内に客はそこそこいる。その人達にも見られてる――。

緊張は店内に入るとさらに加速した。店中に広まる濃い中華の匂いを堪能する余裕もない。奥へ案内される間、僕は前だけを見てまた

「自分はイケメンだ」と頭の中で言い聞かせた。

「ごゆっくりどうぞー」

お兄さんが気を利かせてくれたのか、ブラインドになってる窓際のテーブル席に辿り着く。僕はそこで、周囲にバレないくらいの深呼吸をしてから、折原の対面の席へ座った。

「うわあ。中はこんな風になってるんだね。ワクワクしてきた」

しかし、少し頬を膨らませながら笑う折原がそこにいて、僕の心が折れてしまいそうになる。

やっぱり無理かも——。デートとか早すぎたかも——。だって、かわいすぎる——。

「め、メニューはこれか……。何にする……」

「あ、これがおいしくないってやつ?」

俯きながらとりあえずメニューを渡して、時間を稼ごうとする。けれど、折原が小声でささやくように言ったものだからさらにかわいが膨らむ。

「私何にしようかな。これはダメだとして、本当のおすすめは何なの?」

「そうだね……。俺は……豚骨ラーメンが1番好きだった……気がする」

「……ねえ、緊張してる?」

息の仕方すらも忘れてしまいそうになっていた僕は、言われた言葉で思わず顔を上げる。

「え」

「緊張するよね。私も実はしてるんだ。男の子と2人でご飯食べに来たのなんて初めてだしさ」

「そうなの?」

「うん。たぶん君とじゃないと無理だった。なんかさ、話しやすいよね。そういう雰囲気がある。メッセージでも話しやすかったから誘っちゃったんだけど、やっぱり会おうと緊張する」

「あ、そういえばごめんね。この前は夜にいきなりメッセージ送っちゃったりしてさ……」

「ううん。嬉しかったよ」

僕ってそうなの……。折原さんから話しやすい感じなの……。それって良い意味でだよな……。

高速回転でオーバーヒートしかけていた頭がまとまり始める……。

そして、その瞬間。完つ全に惚れた。

僕は決めた。頭で決めたのではなく、心や本能的な何かが決めた。

絶対近いうちに告白するんだ……と。

word56 「付き合える未来 あるか」③

折原さんって、けっこう思ったことを素直に言っちゃうタイプだ。メッセージのやり取りからも読み取れた。天真爛漫で、子供っぽい部分もある。

それでいて、自分の考えをしっかりと持っている感じがする。一見相反する2つの要素だが、彼女は2つを含んだままちゃんと成り立っている。

不思議、ミステリアス。ギャップ……高低差ありすぎて、どうにかなってしまうようなほどだ。

そんな彼女に「話しやすい」と言われた……。男の子と2人でご飯食べに来たことが無いことを聞いちゃった……。

これはもう告白……。それ以外ないだろう……。

「このからマヨ丼とかチャーシュー丼もめっちゃおいしいよ。でも、今日はラーメンだよね……だとしたら、この辛い奴も辛党の友達が言うには堪らんらしい」

「え、私も辛いのが好きだよ。うわあ、おいしそう。ありだな」

「俺は豚骨ラーメンでチャーハンと餃子が付いたA定食にしよっかな」

近いうちに告白することを決めると、なんだか体中から力が湧いてきた。好きが限界突破しておかしくなったのか、より高い壁を見据えたことで今立ちほだかる物が低く見えるようになったのか。分からないけど、初めて経験する謎現象だ。

食事が上手く喉を通らないだろうからラーメン1杯だけと決めていたのに、気づけばがつつりめの定食を頼んでしまった。

「じゃあ私も同じのにしてみようかな」

「折原さんも定食でいける?」

「食べきれないかもってこと?」

「うん、けっこう量あるよ」

「大丈夫。昨日の夜からすごくお腹空いてたのに、朝も何も食べずに来たから」

「本当に？」

「食べきれなかったらあげる。だめ？」

さらっと放たれる殺意の高い攻撃にも、僕は自信満々に任せろという態度を取れた。無言で親指を立ててから、呼び鈴を鳴らす。

店には続々と客が入ってきていた。自分たちが入店してからちやうどラツシュが始まったらしくて、もう半分は席が埋まっただろう。初めて背もたれに体を預けると、そういうところにも気づけるほど視野が広がっていた。

ラーメン屋に飾られがちな、達筆な習字で書かれたメニューは壁にも飾られている。そこにでかでかど書かれたオスメラーメンを今入ってきた客が、席に座りながら注文したので、僕と折原は目を合わせて顔だけで笑った。

「ねえ、これ本当においしいね。とつてもギルティ」

「ね。昨日から食べるの我慢して来た甲斐があった」

「私ラーメン食べる用の服も着てきたから」

テーブルにA定食が運ばれてくると、2人で雑談しながら食べた。

「ああ、黒い服着てきたってこと？」

「そう。これで食べるのに集中できる」

灰色のコートを着ていた折原は、注文を終えた後にそれを脱いでいた。さつきまでの僕なら直視できない可愛さだけれど、限界突破状態はまだ継続していた。

「昨日映画見たって言ってたじゃん。それについて詳しく話してよ」

「え」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「いや、見た見た。怖い奴で。その……宇宙人が地球に侵略してくんのよ」

「ああ、最近流行ってる奴？あれってもう家で見れるの？」

「いや、それじゃなくて……ちよつと古い奴で……題名は何だったっけ」

困る質問をされたので、僕は持っていた箸から手を放してしまつて、なんとなく水を飲んだ。

「あ、そういえば家にパソコンってある？」
さらに不意打ちを食らった僕の気管に水が入り込む。

word56 「付き合える未来 あるか」④

「ゴホッゴホッ。え、パソコン。ゴホッ」

「大丈夫？」

「けほっ……」

周囲に唾が飛ばないように口を手で目一杯覆って咳をする。

「どうしたの急に？」

「……うんっ。いや、もう大丈夫。ごめんね。水が気管に入っちゃっただけ」

喉の痛みよりも嫌に頬が熱くなる。まるで首から上だけがじりじりと炙られてるみたいに。ラーメンから立ち上る湯気が上手いこと顔を隠してくれないかと願った。

ああ、初デートなのに何やってんだ。そう思ったけれど、目の前の折原は変わらず「おいしい」と言いながらラーメンを啜っていた。だから、後悔するのは後回しにする。

「それでパソコンの話だっけ。俺自分用のパソコンは持ってない」

「そっか」

「何で聞いたの？」

「いやね、ギター上手くなりたそうだからさ、練習に役立ちそうなパソコンのソフト教えてあげようと思って。私も使ってる奴なんだけど」「あ、そういうことか。でも、ダメだな……いや、ワンチャン買うのもありかも」

落ち着け落ち着け。やっぱり昨日のメッセージの内容で話してるだけだ。流れが悪くて黒いパソコンを持っているのがバレたか的一瞬间思ってしまったけれど、そんな訳はない。

言ったパソコンを持っていないという言葉は嘘のようで、嘘じゃない。あれはまんまパソコンの形をしているけれど、普通のパソコンとは違うものだから。

「例の競馬で当てたお金ね」

「そう。まだいっぱいある訳じゃないけど。安いやつならたぶん買える」

「いいなあ……。私も競馬やれたらいいのに」

「え、お金があるのがじゃなくて、競馬がしたいの？」

「そうだよ。だって私もやったら当てられる気するもん」

折原は言葉の後半で笑いながら言ったので、僕も笑う。

「折原さんはパソコン持つてるんだ」

「うん、ほとんどギター関連でしか使ってないけどね——」

ちよつとしたアクシデントは折原と話していると、すぐにどうでもよくなった。

僕たちは豚骨ラーメンのA定食を周りの人たちより長い時間をかけて食べた。僕にとつては、汚い食べ方にならないように注意していたからという部分も大きかった。けれど、それ以上に話が盛り上がった。

緊張が邪魔するだけで、僕も折原とは話しやすかった。あれこれ考えて気を遣われるより思ったことを言ってくれたほうが、こっちも素直に話せる。学校で話したどんな女子より、もっともつと話していたと心が欲する。

僕たちはきつと相性が良い。生まれた時から結ばれる運命にあるのだ——。

「はあ、おいしかった。でもお腹いっぱい苦しい」

「よく全部食べれたね。俺でもけっこうきついくらいなのに」

「もしかして引いてる？」

「ううん、全然。さすがラーメン女子とは違うなって」

「でしょ。そういう子は残したりしそうだもん」

お互い餃子とチャーハンの皿まで全て空になって、紙ナプキンで口を拭くような時間帯になった。入り口のほうでは数人席が空くの待っている客がいる。長居する場所じゃないし、あとはさっさと会計を済ませて退店しなければならぬ。

僕は未だに言えていないことをいつ切り出すか迷っていた。長めに口を拭いて、お盆まで拭いたりしながら、外出てからでいいかなんて考える。

でも、どうせ言うなら早めのほうが……。

「ねえ、この後って——」

「さあ、帰ろうか。家着いたらお昼寝しようっと」
「あ、うん。そうだね」

word56 「付き合える未来 あるか」⑤

僕は言いかけた言葉を無かったことにした。

なんとなくそんな気はしていたが、折原はやはりラーメンを食べただけで今日のデートは終わるつもりだったらしい。そもそもデートって程での案件でも無かったのかも。

でも、僕もそれで良かった。このまま帰るなら帰るで、今日のところは満足だ。朝の段階では食後のプランも考えていたけど、本当の限界が来ている。折原と絡むことでしか摂取できない栄養は、かなり過剰摂取気味だ。

内心、ほっとする気持ちもあった。

「お会計……とりあえず俺が払っとくよ」

「え——」

僕は早足で席から離れた。コートをを着ようとしている折原からの返答も待たずに。

デートを続ける力は残っていないけど、最後にこれだけは頑張りたい。僕は財布を取り出しながら、出口へ向かった。

「お会計お願いします」

「はい……。えっと、A定食お2つで……2500円になります」

言われた金額をそのまま僕が払う。ちようど払えたので千円札2枚と500円玉。

「はい。ちようどいただきます。ありがとうございます——」

遅れてやってきた折原は財布を手に持っていて、それを開いて閉じて、また開いた——。

「1人1250円だったよね？」

店を出るとすぐに折原は言った。

「いや、払わなくていいよ。今日は俺の奢り」

「え、いいいいいよ。私奢ってもらう気なんて全然なかった……1250円ちようどあるかな……」

「本当に払わなくていいから……その、何というか……」

少し前かがみになってお金を探していた折原の財布を、手で下げ

る。

そうすると、近い距離で折原と目が合ったので僕は目を逸らしてしまった。考えはまとまっていたはずなのに、言葉が出てこない。

「えっと……払いたいんだよ。これは何か借りを作りたいみたいなのとじゃなくて、今日楽しかったからさ。今日の楽しかった分を君にありがとうってこと……」

男のプライドだとかデートの注意に書いてあったからじゃない。身分以上にお金があるからでもない。純粹にこの子の分まで払いたいと思った。

これも朝の段階のプランとは違っていたのに。高校生で奢るなんて逆に申し訳なくさせてしまうかもと考えたから。それでも、僕は気付けば決めていた。

「……………」

「無理して奢ってるんじゃないよ、むしろ払いたいんだよ……」

「……じゃあ、ありがとう」

「うん」

「また近いうちにどつか食べに行きたい。一緒に」

それは僕も言おうと思っていたことだけど、折原のほうから言ってくれた。

「いいね。また他のラーメン屋？」

「それがいいかも。今度は私がお会計しに行くから」

「え……じゃあ、今度は割り勘で——」

帰る方向は違っていたので、僕たちはラーメン屋の前でそのまま別れた。小さく手を振って。

外の日差しは店に入る時よりも強くなっていた。そのせいか、空気はより澄んでいる。車や人の通りは多くなっているのに、どこかの山奥のような静かさを感じる。

見上げればやっぱり雲が少なかった。気持ちが良いほど広がる青空。そんな空が僕には、虹がかかっているように見えた——。

その日の夜、日を跨ぐと僕は黒いパソコンを取り出した。既に決

まっついて流れるように入力するワードは……。

「付き合える未来 あるか」

折原との恋に関して、あまりずるい検索はしたくない僕にとってこのくらいなら許せるかというものだった。いつどうやったら付き合えるかは聞けないけど、上手くやれば付き合えるかどうかだけは聞いておきたかった。

Enterキーを押すときに緊張は邪魔しなかった。初デートに手応えはあったから。次また会う約束までしたし。途中ちよつと咳き込んだりとかつこ悪いところもあったが、付き合える未来が全くないなんてことは無いだろうと胸を張っていた。

「あなたが折原 裕実さんとお付き合いできる未来はあります。」

結果も予想通りだった。

それを見ても消えてくれない恥ずかしさと興奮と付き合いながら、僕は今夜もまた眠れない夜を過ごした。

word57 「歌う曲 何がいい」①

ああ、裕実たん。かわいすぎるよ。一体どれだけかわいいんだー
|。
君の前では女神や天使すらもモブに成り下がる。足元にも及ばないだろう――。

もしも可愛さが罪になる世界だったら、君は重罪人さ――。

折原との初デートを終えた次の日から数日間、僕の頭の中ではこんな唄が繰り返し返されていた。折原へ捧ぐ愛の唄だ。

何をしている時も勝手に始まって、こんなことばかりで頭を満たしているのはダメだと別のことを考えだしても、すぐにまた愛の唄に置き換わって、それを繰り返し返している。そう、恋のミルフィーユが出来上がってしまったているのだ。

脳内での呼び方も「裕実たん」に変わった。気持ちが悪いことは自分でも分かっている。けれど、どうしても止まらない。

「今度行くラーメン屋決めよう」

「いいね」

「私は辛いのが行ってみたいかも」

「辛いのかあ…」

「激辛はお苦手で？」

メッセージでのやり取りは続いていた。学校が終わって放課後になると僕の方から送る形で、夜中の間にスマホを通して会話した。

お互い休日の時と違って返信速度は遅いけど、夜になる度に仲を深めていた。特に折原は数時間返信してくれないこともあったが、無視されることは無くて、たまに勢いよく連投が来た。

「前に話題になってた激辛カップ麺を一口食べてみたけど、それだけでギブだった」

「激辛はお好みじゃない」

「食べ続けていると大丈夫なってくるよ」

「大丈夫に」

「そういうもん？」

「軽いのからチャレンジしよう」

「はい」

裕実たんから言われたことであれば何でも聞けると思った。むしろ従いたい。そのぐらいに愛おしかった。

「死んで」という頼みがギリ聞けないくらいで、それ以外なら大体聞ける気がした。正直黒いパソコンを頂戴と言われても、余裕であげられる。記憶を消す装置まで使って守り抜いてきたものだが、裕実たんの為なら惜しくは無い――。

デートをしてから4日後の木曜日は軽音部の活動がある日だった。顧問の先生や教室の空き状況を考慮して練られる活動日は大体週2回か3回。僕はギターを持って珍しく使える音楽室へ、ギターを背負って入った。

今週は火曜日にも活動があった。しかし、その日は折原が何か用事があつたらしくて参加していなかった。だから今日は今週初めての折原がいる部活だった。

学校で僕たちが話すことは無かった。メッセージで示し合わせていた訳ではないけど、お互い学校で見かけても声は掛けなかった。目が合っても、先週と変わらない態度ですれ違う。まだそういうのは早いだとか、周りに注目されるのは嫌だという僕と同じような気持ちなんだと思う。

そのため軽音部でも先週と変わらず過ごすことになるので、折原がいるからどうしようということでもないのだが、やっぱり特別だ。そこにいるだけで視界に花が咲く。そこにいるだけで、夢の中にいる気分になる。

僕は既に来ている男子グループの輪に加わった。女子のほうにも見えるように黒いギターを取り出して、腰を落ち着ける。

「なあ、今日もあの曲の続きから教えてくれよ――」

「いいっすよ――」

予定通りいつもの感じで軽音部の活動の時間は進んだ。いや、折原がいる分いつも以上に楽しく。

僕はこの前からギターの上手い後輩に指導してもらっていたので、雑談をメインにしつつも好きな曲をうまく弾けるように練習した。

「先輩、このパートは指をこうじゃなくて、こんな風に運んだ方が上手くいきます」

「どう？」

「こうです」

「こうか……あ、確かに弾きやすいかも」

「それで、こうしてこうです」

時に上手い奴同士でセッションしたり、時に全員楽器を置く時間があつたりで、1時間経っても2時間経ってもいつも通りの軽音部は続いた。

それが変わったのはもう下校時刻になるという時だった。音楽室のドアが突然開いて、顧問の先生が顔を覗かせて言った。

「お前らー今年はみんなの前で演奏するかー」

word57 「歌う曲 何がいい」②

今まで夢見心地だった僕はその声で現実に引き戻されたような感覚を覚えた。そしてそれは周囲の皆も同じ。やっていたことをやめて出入り口のドアのほうに注目する。

「おう寒い寒い。ふー、元気か。ちよつとだけこつち注目して話聞てくれる？」

顧問の先生は部屋に入り、腕時計を確認しながら言った。

社会科の山本先生は軽音部の顧問で、まだ青年と呼べるくらいの年齢と容姿をしていた。この学校の教師陣の中では若手で、それなのにベテランのように生徒の扱いが上手い。気さくで誰にでも優しく、顔は人気のお笑い芸人に似ている。

女子生徒に人気なので昔は気に食わなさもあつたけど、可愛いほうの女子生徒からの告白を誠実な対応で断つたことを黒いパソコンで知ってから、僕も好きになった先生だ。

「これ。2月末にある3年生を送る会で出し物をする有志団体の募集の紙。これについての話なんだけど、今年は軽音楽部どうする？」

「ああー」

女子のグループから、なるほどという声が出る。

「去年の先輩は誰も出んかったやつ。確か一昨年はこの軽音楽部で卒業ソングの演奏してたんよ。その前のことは分からんけど、毎年出たり出んかったりという話は他の先生から聞いている。あとね、3月の学校の創立記念日でも軽音楽部で演奏してもいいってチャンスがあるらしいですわ。強制じゃないから皆で話し合つて決めてもらつていいんだけど、ただ締め切りがもう来週まで。前にも紙だけ配つてもらつとるよね……」

先生の話聞きながら、僕たちは隣に座る者と顔を見合わせた。右隣の親友を見た後は、左隣の後輩。そして、女子のグループでも同様に小声で話し合いが行われているみたいだった。

「本当は募集の締め切りが今日までだったらしいんだけど、まだ2組しか希望者がいないらしくて、締め切りの日にち伸ばして軽音部どう

ですかつて生徒会の子に今日言われた。お昼ご飯食べようる時にな、後ろから背中叩かれて」

ジェスチャーで驚くような動きをしながら言った山本先生はそこから黙って、名乗りを上げる者がいないかと僕たちの顔を一人ずつ見ていった。

しばらく音楽室の中を沈黙が満たして、それに耐えられなくなった部長も務める女子生徒の1人が首を横に振ると、一同が笑った。

「ハハハ——出たくないんか。先生もちよつと皆の演奏を聞いてみたい気持ちはあるんだけど。まあまあ、もうちよつと考えてみて……出たくなったらこの紙を先生の所に持つてくるか……職員室の隣の部屋の前に置いてある箱に入れてください……」

山本先生は男子と女子に1枚ずつ手に持っていたプリントを渡した。僕はその紙を保護者へのお知らせのプリントと同じくらいの気持ちで見た。

軽音楽部から誰か出るとしてもまだまだ未熟な僕じゃないし、誰かに出なよと勧めるつもりも無かった。この軽音楽部のメンバーには、頼まれたってステージに立とうという人間はいない気がする。

「お前歌上手かったし、何か歌えば？」

そう傍観していた僕の肩を親友が叩いた。

Word 57 「歌う曲 何がいい」③

「は？何言ってるんのお前」

「うちの部活ボーカルいなかっただけだし、お前が歌えば出れるじゃん」「いや無いわ。知り合いの先輩もいないのに」

「いいじゃん。実は俺出てみたいと思ってるんだよな」

「先輩歌上手いんですか？」

唐突な提案に後輩も乗っかってきて只ならぬ空気が広がっていく。「別に大したことは無い。マジで全然皆の前で歌えるレベルじゃないよ」

「本当にそうなんですか？」

「そう。そうだよ、なあ？」

今度は僕が親友の肩を叩いた。にやついて親友はそこで声を出して笑った。

「はははっ、冗談冗談。いや歌上手いのは本当にそう思ってるけど、3年生を送る会で歌うとかはいいよな」

「なんだよ。変なノリのままやらされるかもって一瞬本気で思ったわ」

親友の言葉はただの冗談だった。そう、親友も分かっている通り僕はバンドのボーカルをしようなんて柄じゃない、体育館のステージで歌うっていうのはよくある妄想のパターンだと聞くが僕はそんなことしたことが無い。

もし、この軽音楽部の中にマイクを握る権利があるとすればそれは、折原だけだ。折原の歌声ならきつと、その場にいる全員が心打たれるに違いない。でも彼女も僕と同じように、そんなつもりはさらさら無いのだろう。

「もう下校時刻まで15分もないくらいだけど、どうする。もうお終いにするなら先生がカギ閉めて職員室帰るけど」

山本先生がそっちのけで話し始めた僕たちに呼びかけるように言った。

「あ、今日も私が帰るときにカギ返しに行きます」

部長の女子がそう答えると、それからまた僕たちはもう5分ほど雑談して、他の部活が片づけを始めるくらいの時間になった時に、音楽室から出た――。

僕は下校時にまた折原と目を合わせられないかと注意を払っていたけれど、彼女は1番に音楽室を出てさっさと帰ってしまった――。

お風呂から出た僕はまた折原の事を考えていた。1日ずっとそうやって過ごしていたけれど、夜は少し違った。折原へ捧ぐ愛の「唄」ではなくて、音楽的な意味の「歌」についてだった。

音楽室で折原が体育館で歌ったらどうなだろうと想像してからというもの、それは止まらなかった。体育館中に響く声、あの楽器のように綺麗な歌声……それを聞いて驚く観客。

黒いパソコンの画面ではなく、生で鑑賞するそれはどんなに良いのだろうか。生で聞いてみたいな、1度でもいいから。

僕はそんなことを思いながら、抑えられない気持ちをメッセージに変えて、今日も折原に送った。まずは何でもない話から。SNSで見かけた日常で使えるような裏技を「これ知ってる？」という風に共有してみた。

「何それ？」

今日は珍しく折原からすぐに返信が来た。僕もすぐに返信を送る。そうしながら僕は別のアプリを開いて、近くにあるラーメン屋のことを調べた。辛いラーメンを提供しているところに絞って、おいしいような所を探す。折原が希望していたからだ。

激辛グルメ専門のレビューサイトなんかもあって、距離と値段も含めればここしかないという店はすぐに見つけた。僕にとっては見ているだけで口の中に唾液が溢れてくるほど赤いスープのラーメンだった。致し方なく、僕は次のデート場所をそこに決めた。

そして次に、会話が途切れたタイミングで店の情報を折原に送った。

「今度の日曜日さ、ここ行かない？」

今日の目標はデートに誘うこと。昨日から決まっていたことだっ

た。前は折原から誘ってくれたから今度は僕から。

「いいね」

「行こう」

またすぐに折原から返信が来た。さらっと成功した。

だからその時、僕はもうワンステップ上の誘いも頑張ってみた。今日という日にこんなに折原の歌を生で聞いてみたくなっていることにも何か意味がある。そんな思いも僕の指の動きを後押ししていた。「でさ、その後カラオケにも行かない？」

word57 「歌う曲 何がいい」④

アプリを開きっぱなしだったのか既読という文字が送信すると同時に表示された。僕もアプリを閉じずにその画面を見続ける。しかしすぐには返信が来なくて、僕は深く考えずに送ってしまったことを後悔し始めた。

ちよつと調子に乗りすぎただろうか。やっぱり返事に困る誘いだったか。でも、断られたとしても他の場所に誘うだけだね。これでお終いつてことにはならないよね……。

折原が他人に自身の歌唱力の高さを知られたくないということは、以前の黒いパソコンによる検索で分かっていたことだった。理由を一言で言うなら、「プライド」といったところだろうか。

「折原 裕実さんには歌手になるという夢があります。ただ、親からの反対や以前友人に夢を語ったところ、遠回しに無理だと言われた経験からその夢を他人に言わないと決めています。夢を他人に語るのはある程度の結果を出してから、そしてそれまでは誰の力も借りず、自分の力でと決めているので、周囲へ歌唱力に自信があるとは言わず、あなたにも歌手を目指していると感づかれるようなことは言いませんでした。」

僕は折原が歌うのを好きじゃないと言った理由を検索したときの結果画面を、スマホの画像フォルダから探して表示した。

歌手になるという夢があるからこそ、半端にちやほやされて満足したくない。僕の解釈はこうだった。時が経った今見ても気持ち全て理解はできていないと思う。でも確かに、折原にとって知られたくないことと言うのは事実だ。

それなのに、10分ほどで返ってきたメッセージにはこんなことが書かれていた。

「いいね」

「行くう」

ラーメン屋に誘った時と全く同じ返事。見た僕はまさかのOKに疑問も浮かんだが、それを一瞬でかき消さられるほどに喜んだ。

手がじんと痛くなるくらいの大きな拍手を1発——そして2発、3発。体が勝手に喜びを形にして発散した。自分でもうるさい音が出たので、拍手をした後は太ももを何度か手で叩く。

だって、これってつまりそういうことだろ。友達にも明かしていないことを僕には明かしてくれる気になった……僕は友達以上に特別な存在なんだとそう思っていていいんだよね。

裕実……ついに呼び捨てになった彼女の名前を、心の中でぼそりと言った。

その瞬間確かに光が降り注ぐ花畑が僕の視界を覆って、そこに折原の姿が見える——。

「やった！」

「じゃあ、時間はどうする？」

「また11時30分より前に着くくらいで集まろっか」

返信をすぐに済ませると、僕は立ち上がった。そうと決まれば笹食ってる場合じゃねえ。今度のデートは絶対に大成功させたい。

今日の黒いパソコンで何を検索するべきか思い立った。即行動で黒いパソコンを取り出し、ワードを入力する。

「歌う曲 何がいい」

また折原と2人きりになれる。しかもこの前よりもっとプライベートなカラオケの個室という空間で。そして何よりあの歌を生で僕だけに聞かせてくれるだと——。

いける、キてる。完全に。もはや次の日曜日に告白まであるんじゃないか……え、本当にあるぞ。状況が良かったらいくか。いつてしま
うか

Enterキーを押した僕はさっそくそこに表示されたいくつかの曲の歌詞を調べた。僕にとって歌いやすくて初カラオケデートに適した曲を望んで検索した、その結果達を日曜までの数日間練習する。

待ってるよ裕実……そうやってまた心の中で呼び捨てにして、机にあったペンをマイクのように持った。

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」①

昨日、僕は母と喧嘩した――。

夕食後に僕が部屋で寝転んでいると、母が部屋に入ってきた。母はほとんどノックもせず、いきなりドアを開けた。そして部屋を見て言った。

「うわ、きたな。どんだけ散らかしとん」

僕はその言葉だけで飛び上がるように腹が立った。言われた言葉もそうであったが、何よりいきなり自室のドアを開けられたことに舌打ちもしてしまった。

僕はズボンを脱いでいたのだ。

「ノックしろや」

投げつけるように言った。

「たまには掃除しなさいよ。ゴミもこんなに溜まっとるし汚いな。何でこんなに片付けられない子に育ったんだろ」

「前もいきなり入ってきたよな。何考えてんの」

「ああ、制服も脱ぎ散らかして」

母は僕の言葉を見無視して床に落ちていた物を拾い始める。

ズボンを脱いでいたと言っても布団の中だったのでまだセーフだった。でも、ちよつと間違えば大惨事だった。季節が冬じゃなかっただけでアウトだったのだ。だから、母の態度でより怒りが湧いてくる。

母が机に置いていた制服を手にとって、黒いパソコンも入っている収納へ向かった時には思わず大きな声を出してしまった。

「やめろやー」

驚いた母はようやく僕の方を見た。ハーフに間違われたことがある母の大きな瞳が、より大きくなっていった。しかし数秒で、鬼とハーフになったのかという形相に変わった。

「あんた、親に向かつて――」

そこからはもう激しく口論になった。久しぶりにそんなことになったので、大体いつもあんたはと日々の小さな不満も合わせて爆発

した。

僕もたくさん腹立つことを言われたので、バレないようにそつとズボンを履きながら応戦して、あれやこれやと30分は言い争った。お互いにああ言えばこう言うを繰り返して、最後には父が止めに入るほどに――。

だから、一晩明けた今も一切言葉を交わしていない。

「……………」

食パン1枚だけの朝食を無言で食べながら見た母は、無言で洗い物をしていた。先に家を出た姉と父の分の皿をいつもより力強く音を立てながら洗っている。

朝に2人きりになっても謝る気なんてさらさらなようで、洗い物が終われば僕がまだいるというのに掃除機をかけ始める。僕がここにいないかのように目も合わせない。

僕も構えは同じだった。向こうから謝ってこないと謝ろうなんて思っていない。昨日の口論は僕が全て正しかったし、100パーセント母が悪い。謝られても言葉だけでは納得できないくらいだ。

普段は朝食の皿は洗わないけれど、僕は敢えて洗って机の上も拭いてから家を出た。

通学路を歩きながら、今朝の母の態度に腹を立てた。何だあの掃除してる姿を見せびらかすような態度は。第2ラウンドを望んでいるのなら受けて立ってやれば良かったか。

昨日言われた言葉も思い出す。部屋が汚いだとか何でこんなに片付けられない子に育っただとか。大体育てたのはそつちじゃないのか。考えてみると、片付ける能力ってどう育てるかでかなり変わってくる部類のものな気がするし。

母と父が子供の頃から僕に片付ける習慣を身に付けさせていれば、僕は片付けられる人間に成長できていたのではないか。僕はこまめに「片付けろ」と言われた記憶も無いし、人一倍熱心に掃除する背中も見せられていない。

そうだ、きつとそうだ。僕の片付けられない体質も母のせいだ。

言い聞かせるように結論付けると同時に良いことも思いついた。

今日の黒いパソコンの検索は「親ガチャ 両親」にしてやろう。

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」②

偉そうに僕のことを叱るけれど、そういうあんたたちは立派に教育できているのか。何でも検索できる黒いパソコンで、僕の親のランクを調べればどちらが悪いか浮き彫りになる。喧嘩を止める時に母の肩を持った父にも憤りを感じていた僕は、父も一緒にして検索してやることにした。

うつぶんが晴れそうな検索を思いついた僕は、気づかぬ間に速くなってしまっていた歩調を緩めた。なんだか今日の検索を思いついただけで勝った気になった。学校に着く前にイライラを無くせて良かった。

1限目の授業中はノートを取りながらも、放課後にする予定の検索でどんな結果が出るだろうか考えた。斜め前に座る同級生や、知った友達の顔を見たりして、彼らの親と比べて僕の両親はどうなんだろうって。

親ガチャという言葉は近頃よく目にするようになった言葉だ。多くの者がSNSを利用する10代20代の若者が自分の親を酷いとか嫌いとか言っつて、それを見た30代40代は私の頃の親はもっと酷かったみたいなのを言っつて広まった。僕も親ガチャという言葉がSNSのトレンドに入っつてているのを見て知った。

現代人なら意味は感覚で分かる。要は誰から生まれたかとその家庭環境で人生の大半が決定しちゃうよねっつて話だ。知能や身体能力の良し悪しは遺伝によるところが大きいし、努力で伸ばせる部分も親がどれだけサポートできるかで変わっつてくる。トンビから鷹が生まれる可能性は極めて低いのだ。

僕もこの教室にいる皆も同様に、親の程度から大きく掛け離れた人間には育っつていないはずで、もつと外の世界にいる同年代の高校生も全員……平均すると大体親の学力と同じくらいレベルの高校に通っつている。

そういえば、親が教師や医者なんていう奴で馬鹿な奴を見たことが無い。定期テストの順位はいつもトップ10だった。自分の考えが

より確かさを増す。

だとしたら、そんなに悪い親でもないよな――。

板書をノートへ丸写しして、重要な項目にマーカーペンでラインを引くところまで終わる。頬杖をついて、先生が「ここからはテストには出ない話なんですけど」と言ったのを聞くと、さらに脳内での独り言は声量を増した。

僕はそれなりの高校に通っていて、それなりに良い子で生きてきたと自分でも思う。少なくとも学力は同年代の中では上のほうだし、生活水準もたぶん……。

そりゃ発展途上国の子供なんかと比べたらめっちゃくちや豪華な暮らしだ。でもそんなこと言い出したらキリがなくて、論点がずれちゃう気がする。よって日本の高校生に絞って……絞ったとしても、色んな意味で平均よりは上。

じゃあ僕の親は上手く僕を育てたかというところ、答えは否だと思う。

僕は今16歳でもうすぐ17歳。その年齢で僕には想像がつかないくらい活躍している人間もたくさんいる。テレビで見かける俳優やアイドルなんかもそうだし、10代でオリンピックの日本代表になってメダルを獲得した選手だっている。

僕がいくら頑張ったところで現時点でそうなれたらどうか。日本中の人間が名前を知っているような人間に……いや、無理だ。よく考えなくても分かる。生まれ持った容姿や能力も足りていないし、僕の両親に有名人を目指せる環境作りはできなかつただろう。

車で20分ほどかかる場所にある塾に行くのも送り迎えが大変だからと反対されたことだっている。

うん、やつぱり当たり前でもない。10代の頃から有名になる人間なんて結局親の力によるところも大きいはずだ。じゃなかったら、人生2週目だとか10歳くらいから黒いパソコンでも持つてない限り10代であんなに成功できるはずない。

僕もあんな風にもっとかっこよく逞しく生まれたかった。それなりに生きてこられたのも親のおかげというより僕がそれなりにがんばっているからだ。

僕だって生まれてくる親が違えば、今頃東京さ行つてたかもしれない――。

母親へ謝罪しないという意向が揺るがないまま、昼休みになった。僕はいつも通り同じクラスの親友と向かい合つて座った。

「ききめって知ってる?」

今日初めて会話する親友は座るとすぐに口を開いた。

「ききめ?」

「利き手、右利き左利きとかの利き目」

「あー目にもあるつて言うよね。右利き左利き」

「俺さ、その利き目が左だったんだよね。しかもそれって珍しいらしい」

「ははっ。なんやそれしよーもない」

「お前も調べてみ。どうせ右だから」

「そんなんいいから、漫画の話でもしよう」

親と喧嘩した話などするつもりはなかった。しても思い出してめんどくさくなるだけだから。

さっさと仲直りしていつもの関係に戻りたい気もする。もつとも僕からは謝らずに母から謝ってくるのを待つが……。

親友の話に付き合つて、黒板上の時計を指さしながら目を片方ずつ閉じる。そうしながらもう片方の手で弁当を開けた。

僕の利き目が右目だと分かり親友が笑うのを聞いて、弁当の中身を見る。するとそこには僕が1番好きな弁当の献立があつて、僕は眉をひそめた。

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」③

これは一体どういふつもりだと思ふ……。すぐに自分の中の自分に問う。

まさか僕に悪いことをしてしまったという気持ちがあるのだろうか、あの母に。僕への謝罪の思いが現れた結果がこのフライパンで作る簡単からあげと冷凍のささみしそフライだとも言うのか。2つが同時に入っていたことは記憶にない。

いや単なる偶然だろう……。だって喧嘩したのは昨日の夜なんだ。弁当のメニューは安い物の段階で決まっているはず。元々作る予定だったものが、狙ったようなタイミングで出てきただけ。

ランチバッグの中に何か紙が入っていないか調べる。親子喧嘩した次の日の弁当に「ごめんね」と書いた紙を入れるみたいな展開をドラマで見たことがあったからだ。しかし、底まで見ても特に何も見当たらない。

ほら、やつぱり偶然だ……。

僕は箸を取り出して弁当のおかずを1口、そして2口と食べた。ご飯も一緒に口の中に入れて咀嚼する……。偶然、偶然のはず……。なのに心なしかいつもより味がしょっぱく感じるのは僕の心に罪悪感が芽生え始めているからか。

「なあ、今日の放課後空いてる?」

口に入れた物を飲み込むと、僕は親友に言った。

「空いてるけど」

「じゃあさ、ファミレスでも寄って帰らない? あそこのファミレスのたらこスパゲッティが食べたい」

「今飯食べてんのに飯食いに誘うのか。いいけどさ」

「ああ、なんか別の場所でもいいよ。久しぶりにお前んち行くか」

「いや、俺もファミレスがいい——」

心の中でざわつくものはある。でも簡単にそのざわつきに屈しなくなかったので、今日はなるべく遅く帰ることに決めた。

午後の授業はあっという間に終わってしまった。いつものこと

だった。昼休みの終わりにはまだ2時間もあるのかと溜め息を吐いて席に着くんだけど、2時間後にはもう帰れるのかという感覚になる。寝ていい教科が午後にある日なんて、本当に一瞬である。

僕は約束していた通り、親友と一緒に教室を出てファミレスに向かった。高校から最も近いところじゃなくて、電車で1駅移動してすぐの場所にあるファミレスを選んだ。親友にはどうしてもそのたらしこスパゲッティが食べたいと無理を言った。

その気持ちは嘘ではなかった。いつもよりしょっぱく感じるおかずはご飯と相性が良かったが上手く喉を通らなくて、3割ほど残してしまったからだ。

「お前はそれだけで良いの？」

「うん、十分。腹減ってきたら俺も追加でなんか頼もうかな」

注文を終えたテーブルには親友が注文したポテトフライと、たらしこスパゲッティになんこつ唐揚げが置かれていた。後者2つは僕が注文したここに来るといつも頼むメニューだ。

「いつもエビフライ定食か、エビフライが付いたオムライス頼んでるじゃん」

「うん、あれめっちゃうまいもん。でもまだ早いわ」

「今日何時までいけんの？」

「別に何時でもいいよ。うちは変わらず門限無しだし」

ポテトをケチャップにつけながら親友が言った。他には誰も誘わなかったので2人きり。昼下がりのファミレスには人が少なかったのも、店の一角が2人きりだった。

「お前んちそういうところがルーズで良いよな。お母さんすげえ優しいんだよ」

「それは俺も思う。でもお母さんならお前んちのほうがいいだろ。優しいし美人じゃん」

慣れっこの親友は他のいやらしい顔をする友達と違って、そっけなく母の容姿を褒めた。それに肯定も否定もせずスルーして僕は話を進める。

「今日みたいに外で夕飯食べて帰ったら、その分お金貰えるんでしょ」

「うん。なんか友達付き合いは大事だから、誘われたときお金がなくて断るのはダメって言われてる」

「それマジで羨ましいわ」

「言うてもお小遣いが多いってわけじゃないし。毎日外食してもお金が増える訳じゃないし、あんまり高いの食べたら怒られるし。競馬でお金持ちのお前のほうが金持つてるよ。奢ってほしいくらい」

「……じゃあさ、今日は俺奢ってやるよ」

「え、マジで」

僕はその時言いたいことを切り出すちようどいいテクニックを思いついた。

「その代わりさ、今日は限界までここにしよう」

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」④

「限界まで……。それって何時?」

「さあ、11時とか?ここって24時間営業だよな」

「24時間営業でも高校生は10時になったら帰ってくださいって声かけられるらしいよ。誰かから聞いた。俺も門限無しって言っても、10時までここに居るのは流石にだわ」

「じゃあ9時とか。そのくらいまでいよう」

どのくらい遅く帰るは決めていなかったけれど、言いながら決めた。中途半端に遅く帰るよりも僕史上最も遅い帰宅時間を更新したほうがいい。その方が母へ僕の怒りが伝わる。

なるべく自分を追い込む為にも親友と約束をしておく。逃げ道は早いうちに消した。

「9時ならいいけどさ……。何で?」

「ん?」

「何で今日は遅くまでいたいなの?」

「……別に理由はない。親が帰るの遅くなるって言ってたから俺も遅くまで外にしようかなって。1回どのくらい遅く帰れるか挑戦してみたかったし」

「ふーん。じゃあドリンクバー取ってくるか」

親へのちょっとした反抗のつもりで始めたことだけど、これからまだ5時間ほどファミレスに居れると思うとワクワクした。その先に待っていることを忘れて僕は親友とスマホを片手に談笑した。

途中オンラインで対戦できる卓球アプリを、ファミレスのWiFiでダウンロードして遊んだ。今どきどこにいてもこの小さなスマホという端末1つで繋がれて、友達と遊ぶコミュニケーションツールにもなる。中1の頃から親に与えられているこれがなければ、僕は生きていけない。

「部活終わる時間になったら誰か誘ってみる?」

「いいね」

「女子誘うか」

「お、いつとく?」

「うん、10人くらい」

「いや……俺らに誘える子なんて1人もいねえだろ……」

「悲しいな……」

一通り会話が終わると、僕たちはテーブルに教科書とノートを広げて課題を進めた。勉強するかという話になった時は、テスト週間でも無いのにファミレスに来てまで勉強なんてと2人して言ったけれど、他にやることも無いので手持無沙汰になるよりはと始めた。

学校の先生の真似でもしながらめんどくさい系の課題を、答えを写す形で終わらせる。教科書が2つあったほうが効率の良い作業だ。

「そろそろ俺も何か頼もうかな」

「じゃあ俺も追加でデザート的なもん食べるわ」

「マジで奢ってくれるんよな? だったらちよい高いの攻めたい」

「でもどうせエビフライだろお前は——」

外が暗くなるにつれて楽しげだった僕の心に暗雲が漂い始めた。まだ青空のほうが割合が多いけれど、なんとなくそわそわする。このまま連絡もせずにここにいると僕の両親はどういうアクションを仕掛けてくるのだろうか。

いつもより帰宅が遅い息子を怒るのか、心配するのか……。僕の帰宅が遅い理由を察して、向こうから謝ってくるのか。

バニラアイスを食べ終えて、またスマホを手に取る。口に残る甘さと冷たさを喉の向こうへ運びながら、SNSのアプリを開いた。体が冷えてきたからかより落ち着かない。次の瞬間早く帰ってくるようにと親からメッセージが届く気がした。

そこでまた僕は昨日の親子喧嘩を思い出す。今そんなこと言わなくていいだろという小言の数々……。弁当箱を出さない、トイレトペーパーをちゃんと切らない……。じゃあおこづかい減らすだとか弁当自分で作れだとか、親の立場を利用したずるいことも言われたっけ……。

「よし」と小さく言いながら、ほどけかけた糸を結び直す。やっぱり簡単に折れちゃいけない。僕の気持ちを態度で示し、帰ったらちゃん

と親ガチャを黒いパソコンで検索するんだ。

しかしそう決めた直後、店内へぞろぞろとやんちゃな風貌の集団が入り込んで。半分は金髪、赤色の髪をした者までいる男女10人くらいの集団は僕と親友が座っているテーブルの近くに腰を下ろした。

「なんか適当に注文しといて。俺らタバコ吸ってくるわ」

「ういーす」

揃いも揃って黒い服を着た集団の中から数人が喫煙ブースへ向かう。連中は扉を開ける前から火を点けて煙草を吸った。

残った集団は第一声から騒がしくて、メニューを見ただけで爆笑している。その笑い声を聞きながら、僕は嫌に刺々しくなった空気を吸った。

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」⑤

「てかき、みゆうちゃんの話マジなん？」

「客の男と手あたり次第パパ活してるって話やろ」

「まじまじあいつヤバイよほんま」

「やば。でも前から後輩全員食ったとか自分で言うてたもんな」

「あたしと同じ18歳で既に経験人数100人超えてるらしい」

「ははははは。やばっ——」

ファミレスという場で最初に始めた雑談がセックスの話で、しかも大声。内容も濃いし、自分達とは別の世界で生きていることがすぐに分かる。

ただ年齢は自分達と同じくらいのように見える。金色のピアスをしている女が18歳と言っていたし、髪色や服装が違うだけでたぶん全員17〜20歳。揃った黒色の服はどれもブランド物っぽい質をしていて、これまた金色の腕時計を巻いている者もいる。喧嘩上等のヤンキー集団ではなく、若くして大人の世界に染まっている……そんな感じがする集団だった。

タバコを吸っていた連中が帰ってくる。

「何？みゆうちゃんの話？」

「うん。お前もみゆうちゃんから誘われたらどうする？」

「いややわあんなん、汚い。じじいが使った穴とか無理。てかほんまに誘われたことあんで俺」

「まじっ？」

「でも夜誘われたんやけどさ、昼に他の子とやってなかったらいつてたかもしらん」

「ヤバお前。誰でもいいやん」

集団はまた周囲の声をかき消すほどの声で笑った。今親友と話しても上手くコミュニケーションが取れなさそうなので、僕はしばらく黙って彼らの様子を見る他なかった……。

たぶん、このままこの集団の近くで過ごしても何もトラブルは起こらないと思う。目が合っただけで喧嘩を吹っかけてくるとかそういう

うタイプではない。

そんな印象を受けたのは注文を取りに来た店員への対応は丁寧だったからだ。あらかじめ注文する品と数をまとめて、それを敬語で伝えた。注文する側なのに数を「お二つ」と間違えて言ったりもしていた。

ただ、僕は店員が長い注文を復唱している間に親友に言った。

「帰ろっか……」

このままここで彼らの話を聞き続ける自信が無かった。固めたはずの僕の決意はあっさりとは折れてしまった。

「うん……」

9時までと約束していたのに親友もすぐに頷いた。口を開けて事故現場を見たような顔をしている親友、たぶん僕も同じ顔になっていた――。

「なんか……別の場所行く？」

会計を済ませて外へ出ると、親友が言った。

「いや、いいわ。帰ろう」

「さらっと奢ってもらっちゃったしどこでも付き合うけどいいの？」

「うん、いいわ……」

「……………」

「……………」

さっきの集団についての感想を言いたいけど言いにくい。目が合うと2人で苦笑いした。

「あの敵キャラはまだ生きてるでしょ」

「いや流石に死んでない？」

「でもどっかで生きてるのを匂わせる描写があっただよな」

気を取り直して漫画の話でもしながら電車に乗った。僕は話しながらもずっと1人になりたいと思っていた。早く1人になって夜の空気の中、考え事に集中したかった。

時刻は18時30分を過ぎている。もう父も家に帰っている頃だ。電車に乗り合わせた人たちも学生よりスーツ姿の人間が多い。

「ごめん俺ちよつと買うもん思い出したから、コンビニ寄って帰るわ。

またな」

駅に着くと少し強引に親友と別れた。もう少し同じ道だけど、僕たちの家があるほうへ歩き出すとすぐ、僕だけ回れ右して駆け足をした。

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」⑥

角を曲がって、夜道に足をそつと乗せた。アスファルトの感触を確かめるように踏み込み、どこへ行くこうという訳でもなくどこか遠くへ、無心で足を動かす。そうすると僕は闇へ溶け込んで、自分だけの世界に入れた。

そこから僕は考え事と一緒に、もういいやと思うまで歩き続けた。ファミレスで見た集団を頭に浮かべて、あの人たちにも子供は大体親と同じレベルに当てはめると……そんな考え事だった。もし先ほど見たあの人たちの親もあんな感じなのなら僕はやっぱり……。

途中で誰かとすれ違ったときは、その人の親のことを想像してみたりもした。容姿を見ただけで親の事なんて分かるはずもないので凄く勝手な想像だが、姿勢よく歩いている人は過保護に育てられてそうだと想像して、ファミレスで見たような夜に出歩く金髪の若者は放任されてそうだと想像した。

そうしてまた僕の親と比較して、どんな親が当たりなのか、当たりの親とは何かを考えた――。

「さあ、ここにだよみゆうちゃん」

「うわ、おつきいマンション。素敵。住みたい」

聞いたような名前と呼ばれる女の子とも遭遇した。ここらでは背が高く綺麗な体をしたマンションの中へ、太ったおじさんと入るタイミングだった。顔は暗くてよく見えなかったけど、そんな暗闇でも光るほど化粧が濃かった。

僕は驚かなかった。いつもの鼓動のままそれを見て、親の顔が見てみたいと思った。親の顔が見てみたいと言えば悪い意味で使われることが多いけど、純粹な好奇心であんな子の親はどんな顔をしているのだろうかとなった。

冷えていた体が温まってくるほどの距離を歩いた。町内を大きく一周して、小学生や中学生だった頃の通学路を懐かしんでみたりもした。小さかった頃の記憶と共に、大きかった背中も思い出の中でちらついた。でも僕はまだ歩くことをやめなかった。

静かになっていく世界の中をペースを落とさずに進んだ。自分の足音がよく響いて、それが心地良くなった。熱くなってきた足裏も、足を止めるまでは全く気にならなかった。

もうそろそろいいか、そう思ったのは20時を回った時だった。スマホで時刻を確認すると「20:04」という文字が眩しく見えた。けれど帰ることにした理由は時間よりも、疲れたというところが大きかった。

結局考えはまとまらなかった。謝るか、謝らないかは答えが出ぬまま。でもこれだけ遅く帰れば、僕の気持ちは親には十分伝わったはず。あちらからきつと何か言ってくるはず。

成り行きに任せることにした僕は家の前まで来ても止まらず、玄関の扉まで一直線でドアノブに手を掛けた。怖くはなかった……そのはずなのに冷えたドアノブを握った時には、夢の中から急に引き戻されるような感覚があった。

「……………」

いつもは言うただいまを、僕は言わなかった。無言のまま靴を脱ぎ、リビングを経由せずに2階の自分の部屋へ向かおうとする。

「おかえりー」

けれど玄関の明かりが点いて、母がリビングの扉から現れた。棒読みのような声色だった。

番外編（最後） 「親ガチャ 僕の両親」⑦

「……ただいま」

「ご飯食べてきたの？」

「うん」

「そう……。それなら決まった時に連絡しなさいよ」

「……………」

「父さんがもらってきたクッキーがあるけど、それだけ食べる？」

「いや、アイスも食べてきたからいいや」

「ふーん……………」

お互いに何度も目を逸らしながらの会話になった。母は終始真顔だったが、こんな顔をしていたかと不安になる表情。怒っているのか謝りたいのか分からない。だからじつとは見ていられなかった。

まだ何か言おうとしていた気配はあったが、母は背を向けてリビングのほうへ戻っていく。玄関の電気も消された。僕も止めていた足を動かして2階の自室に向かう。

何だ、何なんだ……。思っていたのと違う母の対応に僕は戸惑った。たったあれだけで、何事も無かったかのようなあの会話は一体何だったんだ。早足で階段を上り、少々乱暴に自室の扉を閉めると頭を掻いた。

母の心境を考察しながらも僕は部屋に入るとすぐに、黒いパソコンを取り出して机の上に置いた。やり慣れた作業をするように行動した。今の気分がその検索を求めている訳じゃないけれどとりあえず謝罪はされなかったから、続けて朝から決めていた検索ワードを入力する。

「親ガチャ 僕の両親」

いいよな、してもいいよな……。ずっとこの検索の結果を気にしていたんだし、今日は1日中ことあるごとに帰ったらまずこうしようとか決めていたんだ。やめる理由なんて無いよな。迷いはなかったはずなのに、Enterキーの前で指を止める。

体内に気に入らないもやもやがあった。理由は分からない、分から

ないからより気に入らない。僕の理性と相反する存在だということ
は分かる。それが僕の検索を止めていた。

僕は一体何がしたいんだ——。分からなくなつて、天井を見上げ
た。人差し指をEnterキーに置いたまま、溜め息をつく。椅子に
座つてしばらく固まつた。そうしていたのに、長く歩いた体は熱いま
まだつた。

けれど、僕は最終的にEnterキーを押した。そうしないと、こ
のままもやもやは消えずに動けなくなつてしまいそうだったから、検
索する決心がついたわけでもないのになんとなく押した。

「2階の物置部屋のクローゼットの中を見てください。赤いコート
の下です。」

黒いパソコンはそんな文を表示した。正直全く意味が分からない
文章だった。でも考えることに疲れていた僕は言われたとおりに部
屋を出た。

僕の部屋の隣だが、あまり行くことは無い物置部屋に忍び足で向か
う。きつと僕がここに来たことは誰も気づかない、そのくらいの音で
扉を閉めると、何かがあるらしいクローゼットを開く。

すると、物置特有の木の匂いみたいな古めかしい空気の中に何かが
見えた。赤いコートの下に手を伸ばして取り出すと、黄色い包装紙に
包まれた箱だった。見るからに誰かへのプレゼントである。

ラッピングのひもには1枚の紙が挟んであった。2つに折りたた
まれていて「ごめんね」と書かれた紙だった。

僕はそれを見て気づいた。そういえば明後日が僕の誕生日だ。そ
して黒いパソコンが何を伝えんとして僕にこれを見せたのかもにも
気づく。使用者の意思を汲んで検索結果を表示する黒いパソコンの
特性が、思わぬ形になった。あの時僕が望んでいたのは両親のランク
なんかじゃなくて……。

おそらくは僕への手紙、端に花が描かれた1枚の紙を開く。

「17歳の君へ」

お誕生日おめでとう！かわいいかわいい私の天使も

とうとう17歳になりました！17歳の誕生日には母から

手紙をもらった記憶があるので私も手紙を書いて
みることにしました。まずは、生まれてきてくれて
本当にありがとう。誕生日になる度に思います。

それももう17回目か……思い返すとあつという間
だったね。お母さんから見たらあなたはいつまで

経つても子供だけど、もう17歳。立派になったね——」

読んでいるだけで、手から汗が出てしまうほど恥ずかしい文章だっ
た。しかもそれが手のひらサイズの小さな紙にぎちぎちに詰まって
いて読みづらい。僕は斜め読みをして、紙の1番最後に書いてあつた
文章を読んだ。

「喧嘩しちゃってごめんね」

母よりという文字の後に付け足されたそれはおそらく今日書かれ
た文字だった。たぶん手紙の表紙に書かれた「ごめん」という文字も。

「はあ……」

僕は目をぐっと閉じて首を左右に振った。数秒の間繰り返して。
目頭を人差し指と親指でつまんで、もう1度強く目を閉じると、プレ
ゼントの箱を元あつた場所へ押し込む。

その足で僕は階段を下りた——。まだ熱が残る足で1歩ずつ——
今にも止まってしまいそうな足取りで——。

母はリビングの扉を開けると、すぐ前のところへ立っていた。

「なあ……ごめん……」

検索しただけじゃ消えなかったもやもやは、そこでようやく消え
去った。

決戦の日はやってきた——。たった3日が過ぎるだけでやってきた——。

自室の中で僕は震えていた。立ち止まったまま、小刻みにぶるぶると……。膝のほうから来る抑えられない振動がどうしようもなく頭の先まで届く。

でも、今日予定されている折原とのデートが不安で不安で仕方なくて震えているのではない。ただ寒いから震えているのだ。

今日が来ることを待ち望んでいた僕は午前6時前に目を覚ました。待ち合わせの時間は昼前なので度を過ぎた早起きなのだが、居ても立っても居られなくてベッドから出た。

そして今、気合を入れるために窓を開け、寒さと戦っている。

「ふいー……寒い……」

まだ暗い外を眺めながらつぶやく。本来は太陽と目を合わせてやる想定だったのだが、窓を開けてみる夜と区別がつかなかった。いつにも増して寒い気がするの今は1日で最も冷え込む時間帯だからだろうか。

奥歯まで震えだした僕は耐えきれなくなってベッドに舞い戻った。急いで足を忍ばせると、毛布はまだ寝ていた時の暖かさを保つてくれた。

寒いのに耐えて気合を入れるというのはよく聞く話だし、今の僕の心境に丁度いいと思ったのだが正直失敗だった。目は覚めたけれど別に今日のデートに胸を張っていけるほど自信が出てきたかというところ全くそんなことはない。

むしろ、無駄なエネルギーを消費して心細くなった。

折原とのデート本番となった今日、もしかしたら告白まであるかと2日前くらいまで考えていたのに、僕は昨晚から複雑な心境になっていた。

期待と不安が混ざり合った胸の中……期待のほうが大きいい、やつぱり無理と逃げ出す気などはさらさら無くて、この前も上手くいったの

だから今回もきつと大丈夫だという自信もある。

でも、少し足りない……。自信はあるけど折原とのデートには不十分だった。そう、相手は僕が愛する人なのだ、生半可な自信では油断しているとデートの最中に頭が真っ白になってしまう可能性がある。

勢いでいけた前回のラーメン屋や、十分に準備ができた初めての軽音部の時と違って3日という時間は微妙に僕をネガティブにさせていた。頭の中で考えるだけじゃ自信で胸を満たせなくて、小さな不安の穴が空いてしまう。

その穴を埋めるための作戦第1が「冬の朝に窓全開作戦」だったのだけど、まずは失敗に終わった……。とんでもないゴミ作戦だった。でも、まだまだ時間はある。

僕は中々温まらない足先を擦り合わせながら次なる作戦を考えた。コイントスで10回くらい連続で表を出せたら恋が実ることにする「2人を結ぶ恋ントス作戦」や、穴を埋めるのではなく邪念を捨てる「朝勃ち賢者作戦」などが割とすぐに思いついたけど全く成功の景色が見えない。

眠らないように浅く目を閉じてさらに考えること1時間。ようやく思いついた最もマシな作戦はいつそ今日告白することを決めてしまおうというものだった。

この前も告白することにしたら力が湧いてきたし、今も試しに想像してみると不安が自信を押しつけて胸を満たして、逆に大丈夫になる気がする。

だけどそれも危ない賭けであることは明らかだ。

仮に告白することを決めたとすると今が大丈夫になるだけで、いざデートの最中に何か失敗して今日告白は無理だなんて状況になったらどうなる。きつとそれ以降メンタルぼろぼろだ。

うん、やっぱりこれもダメだ。日が差し込むようになった部屋で目を開くと僕は、自室の収納のほうを見た。こうやって自分が取るべき行動に悩んだときは頼りたくなってしまっ、あの中にある黒いパソコンに。

黒いパソコンはいつもあの収納の中にある……。扉を開けばいつ

でも僕を助けてくれる……。

でも今回は黒いパソコンは頼れない。折原との恋に黒いパソコンは使わないと決めているから。

今まで何度も黒いパソコンを頼って、黒いパソコンの指示通りに動いて、様々な利益を得てきた。今回もそうしてデート中に指示通りの行動をすれば、幸せな結果が得られることだろう。

黒いパソコンが教えてくれた場所に行って教えてくれたセリフを言えば、僕は折原と恋仲になって手を繋いだりできるはず。

けれど、それでは本当の幸せとは言えない。男がする検索ではない。誰かを不幸にする検索や、恋でイカサマをする検索は男として恥ずかしいことだ。

黒いパソコンに頼ろうとした自分を否定すると、自信が沸々と湧いてきた。そうだ、あれやこれやと考えるのはやめよう。もつと男らしく、男なら危ない橋でも渡ってやろうじゃないか。

となると、今僕が選ぶべき作戦は――。

「よし……告白する告白する告白する告白する告白する告白する告白する告白する……」

僕は拳を強く握りながら枕に向かって唱えた。

男は黙って告白……。やると決めた僕はそれから「告白する」という言葉を頭の中で唱え続けた。

そうすることで黒いパソコンに頼ろうとする弱い自分を遠ざけることができた。

ベッドの上で座禅を組み、瞑想した。自宅を出発する時間になるまでずっと勝ち続けて、僕は黒いパソコンを使うことなく、待ち合わせの場所に向かって家を出た。

道の途中でもずっと折原に告白するところをシミュレーションした。もしも今日のデート中にどこかで良いムードになったら「好きです、付き合ってください」と、このシンプルな言葉を彼女に言うんだ。

いつもよりも体が軽くて、自分の鼓動を強く感じる。今回の作戦はやはり成功だった。告白するという高い目標を掲げれば、それまでの時間を上手く過ごすことはお茶の子さいさいだと錯覚できた。

だから寒空の下、駅前で、行き交う人々の中から折原の姿を見つけても僕は、自信を持っていられた。

ジャケットのポケットの中から右手を出して、小さく手を振る。僕の手を湿らせていた汗はたったそれだけで消えるほどだった。

「あ、折原さん。おはよう」

「おはようー。また早いね。待った？」

「いや全然」

今日の折原もやはり想像を超えてくるかわいさだった。まるでおとぎの国から現実にやってきた姫様のように見える。でもしつかり目を見て最初の挨拶ができた。

それで確信した。やはり今日はいける。

「寒いね。めっちゃ寒くない?」

「寒い。今日の朝寒くて震えてたもん。でもちよつと太陽出てきてくれて良かったね」

「うん。でもさみいー。早く行く」

口元に手を持ってきて身を縮めるといふ、女の子らしい寒いときのポーズをする折原。彼女が少し走ったので、僕も追いついてラーメン屋に向かって歩き出した。

今日の折原はすらっとした青いコートを着ていた。女性のファッションのことはよく分からないが、オシヤレに見える。もつと都会の街を歩いていても通用しそうな雰囲気があった。実際そうなのだけど、歌とかギターがめっちゃ上手そうな感じだ。

そんな彼女に負けないように僕も背筋を伸ばして歩いた。一応僕の方が10cmは背が高いので、傍から見て不釣り合いではないと思いたい。1人で歩いている人とすれ違う時は特に背筋を伸ばした。

「もう近いよね？」

「うん。たぶん次の角曲がったところかな」

ストリートビューで予習済みだった僕は地図アプリを使わなくても確かな道のりが分かった。

「あったあった。うわあ何かもう看板が辛そう」

折原が前夫に見えてきた赤い看板を指差して言った。看板には店の名前と共に2つの唐辛子が描かれている。

「ははっ、何それ。でも言いたいことは分かる。何かシンプルに唐辛子の絵だけつてのが味で勝負してる感じがあるね」

「あ、これもあった。私これ食べるから」

看板を指差していた折原の手が、今度は入り口の横の張り紙を指差した。

「1日30食限定……しびれる鬼辛……ジヨロキア入り……」

「そう！めっちゃおいしそうじゃない？一緒にこれにする？」

「いや、俺は普通の激辛でいいかな」

「ええ。私男の人が辛いのが食べてるところ好きだから食べてほしいな」

「本当に？え、じゃあ……どうしよ、でもなあ……」

ボケてるのかというほど赤色しか見えないラーメンの写真を前に僕は唾を飲んだ。折原以外からの頼みなら即却下なのだけど……どうしよう。

激辛が得意ではない僕がこんなものを食べたら絶対にやばい。汗と鼻水が噴き出てタオルが1枚じゃ足りないし、水なんて10杯くらいあっても足りやしない。

折原の頼みであれば死んでというもの以外受け入れられると思っているし、できるだけ何でもやってあげたい。でもこれはワンチャン死ぬ……。

「なんて冗談。さ、早く入ろ。寒いし」

僕が激辛ラーメンを食べて死ぬ自分を想像していると、折原が僕の肩を軽く叩いた――。少し心配そうにこちらを見る折原で、僕は我に返る。

「何だ、冗談か。ごめんごめん。行こう――」

暖簾をくぐると店の内装まで赤かった。先週と同じようなやり取りで店員とやり取りして、僕たちはまた窓際のテーブルに案内された。

先週と違ったのは僕の気の持ちよう。人数を聞いてきた店員に対して、前よりも堂々と「2人」と言うことができた。

「匂いがすごいね。これだけで汗かいちやいそう」

折原が座りながら青いコートを脱いで言った。

「ね。嗅いだことがない匂いだわ。鼻にくるし、俺ヤバイかもしれない。普通の中でも食べれるかな……」

僕も外にいた時より緊張感が増していた。でもそれはこの匂いのせいなのか折原と対面して座ったせいなのか分からない。

「30食限定だけどまだあるよね、このジョロキアラーメン」

「あるにはあるんじゃない？こんな食べる人そうそういないだろうし」

「見た感じ今食べてる人もいない感じだもんね」

折原は興奮しているようで、いつもより目が大きくなっていった。その目でなんだか動物のように左右に首を振る。

「本当にそんなの食べるの？大丈夫？」

「いや、たぶん私でもきついよ」
「え」

「私もこんなに辛いのが食べたことないし、たぶん汗とかやばいことになる。食べられるかも分かんないや」

折原はまさかの発言をさらりと saying して笑った。自分できついと分かっている激辛を食べようとしているのはなぜだ、急に理解できない方向に話を進めた。女の人ってたまにそういうところがある。

「折原さんでもきついんかい。なのに食べるの？」

「うん、だつてさ……せつかく来たんだし、どうせなら1番辛いのが食べたくない？その先が地獄だったとしてもさ」

「うーん……そうなの？」

正直理解できなかつたけど、折原のことを否定したくないので我慢する。

「そう、思い出作りみたいな感じ。もうここには来ないかもしれないし2人で来た記念についてことで、1番辛いのが食べた方が記憶に残るでしょ」

その言葉で僕の目がひとりでに大きくなった。さつきは理解できなかったけど、次に言われた言葉は理解できる。それどころか、胸が苦しくなるほど幸せが溢れ出してきた。

お、折原さん——。僕とのデートを記憶に残したいの——。

「ねえ、さつき言ってたさ……辛いのが食べる男の人が好きって言うのはほんとう？」

「ああ、それは本当だよ」

「本当に本当？」

折原の言葉で決意を固めた僕は少しテーブルの上に身を乗り出して言った。

「うん、かつこいいと思う」

「じゃあ……俺も食べるわ。ジョロキアラーメン」

「え」

ジョロキアラーメンを食べたら死ぬだと……でも折原に「かつこいい」と言われるなら別に死んでもよくないか。僕は自分に問うた……

うん、
構わない。

お冷のグラスに付いた水滴が雫になって垂れ落ちる。激辛ラーメンを自慢とする店内では辛さに悲鳴をあげるような声が度々聞こえてきていた。カップサイシンにやられて咳き込んでいるおじさんもある。

そんな店内の雰囲気から受ける恐怖をもともせず僕は決意した。激辛店の中でも一番辛いメニューを食べる気なんてさらさら無かった。辛口のカレーでも水なしじゃ食べれない僕は、なるべく辛くなさそうなものを食べるつもりだった。

でも折原さんにそんなことを言われたら、僕だけ逃げる訳にはいかないだろう——。

「2人で食べよう、ジョロキアラーメン……」

「え、ほんと。私も店の前では冗談のつもりで言ったんだけど、実は一緒に食べたいと思ってたんだよね」

折原も声を高くしていた。それで完全に迷いは無くなり死ぬ覚悟ができた。折原と苦楽を共にした後でどうなろうと構わない。いや……もし本当に死ぬことになっても幸せ過ぎて死んだことに気付けないかもしれない。

「じゃあ、この30食限定のジョロキアラーメンを2つと……他になんか頼むものある？」

「私ここに来る前にメニューだけ見てきたんだけどさ。ほらこれ、このヨーグルトドリンクつてのも一緒に頼んだほうが良いと思う」

「へー、飲むヨーグルトみたいなのやっ？辛いもの食べる時に辛さや和らげてくれるって言うもんね。こういうのも置いてあるんだ……確かにそれは欲しいな」

「豆乳とかアイスもあるけど、ヨーグルトドリンクでいい？」

「うん。じゃあジョロキアラーメン2つとヨーグルトドリンクも2つ……」

「よし、それでいこう——」

折原は両手でピースを作って、ちよきちよきと閉じたり開いたりし

た。

ジョロキアラーメンを注文するときには店員は「本当に大丈夫ですか」と念を押してきた。よほど辛いことは既に承知の上だったので僕たちは「はい」と答えた。僕は一瞬迷ったが、折原が即答だったので僕も乗った。

注文したものが運ばれてくるのを待っている間は、折原からは見えないテーブルの下で自分の下腹部を撫で続けた。これからとんでもない物を送り込まれることが分かっているのか、注文した時点でお腹が痛くなり、やめろと訴えてきたからだ。

思ったよりも早く、10分ほどでジョロキアラーメンはテーブルに届いた。店員がお盆を置き、その地獄のマグマみたいなスープから沸き立つ湯気が僕の鼻に入る。たったそれだけで水っぽい唾液が口内から吹き出し、僕は思わず大きく喉鼓を鳴らしてしまった。

「やっぱ……」

「やばいね……」

最後にヨーグルトドリンクを届けた店員が去ると、2人してほぼ同時に言った。僕と折原とでは少し言葉の意味が違うが……。

「めっちゃおいしそうー」

「死ぬほど辛そう……」

やばい、マジでやばい。匂いを嗅いだだけで全身の汗腺がいかれた感覚がある。1口食べたらなると思っていた状態に匂いを嗅いだだけでなってしまった。

最悪なケースを想定していたはずなのに、さらにその何倍も最悪、超悪、極悪――。

「いただきますー!」

僕が手を震わせながら箸を手にとった時、折原は一足先に麺をふーふうしていた。そして、啜らず折りたたむように口の中に入れる。

「んん、おいしい。でも……かつらー!」

咀嚼を終えた折原は、泣き出しそうに顔をくしゃりとさせた。

「やっぱ、辛いのか?」

「うん、めっちゃ辛い……これ凄いや……でもめっちゃおいしいよ。」

まさかの反応に手を下ろし、真顔に戻って折原を見る。すると折原は箸を置いてさらに笑った。

「はははははっ。ふふっ。はははは」

「え、どうしたの……」

「ははは……ごめん。あまりにもさ、綺麗な辛いリアクションだったから。面白くなっちゃった」

「へ」

言われながら先ほどの自分を振り返って、確かにそうだったと思う。

「もう1口食べてみて」

「あ、うん……うわ、かつら」

「ふふふ、ははっ。やっぱり面白い」

2口目も口が焼けているのかというほど辛い、今度は辛さで顔と手が震えてしまった。そんな僕を見た折原はまた、からかうように笑った。

僕は笑われた——なのに悪い気はしない。急いでヨーグルトドリンクを手に取って口に含み、口内を洗うように飲む。すると居ても立ってもいられないような辛さが大分軽減された。その状態で笑う折原を見ても、やっぱり嫌な感じは全くしなくてむしろ——。

「そんなに面白い……?」

「うん。変ではないんだけどさ、ちよつとツボかも。かわいい」

かわいい、その言葉が放たれてさらに僕に衝撃が走る。かわいい……かわいいだと……かわいいと言われてしまった。

普通に食べているだけなのに大声で笑われた。2人で食事するのが2回目の間柄だつていうのに。男なのにかわいいとも言われた。でも……折原からなら良い……。

「ねえ唇腫れてる……ふふ」

「折原さんも膨れてるよ」

「え、本当?」

2人一緒にジョロキアラーメンを口に運ぶ——。それから僕と折原は激辛に熱中した——。

食べるのに集中するようになっていって、会話は少なくなった。発する言葉は辛さに悶えるものと、お互いのその様子を笑うものだけ。口に入れると苦しいのだけど、何故かどんどん欲しくなる。辛さの虜になってしまったのだ。

僕も気づけばその領域に入ってしまった。折原にも言われていたことだが、最初のほうは痛いだけだったのに途中から痛みが快感にもなった。

こんなこともあるのかと持ってきたハンカチと、卓上に置かれていたティッシュまで使いながら止め処なく流れ出てくる汗と鼻水をぬぐった。目からは涙までもが流れ出た。

折原の様子も僕と似たようなものだった。確かに僕よりスムーズに食べているが、顔が汗と涙で濡れているのには変わらない。折原もまた、持参していたタオルで何度も顔と首を拭いていた。

僕にとって汗が滴る折原は目の中に入れても痛くないほどの存在だったけれど、目のやり場に困った。そういう理由もあってより食べることに意識を集中させた。

きつと何時間後かに、少なくとも腹は死ぬだろう。食べている段階で分かった。何しろ胃の中まで熱いという感覚があったから。絶対に僕が食べていいものではない。けれど、折原と幸せになる為の試練だと思つて、中盤から1口食べるごとに折れそうになる心を奮い立たせた——。

「はあ……はあ……」

「すっご。よく食べきったね」

「う、うん……」

最後の1口を食べた僕は、精神的に満身創痍の状態になった。これ以上にあともう1口食べると言われたら、その瞬間に気絶する自信がある。

「私もどうにかクリアだよ。ああ、おいしかった」

「達成感あるね。きつかったけどさ……激辛にハマる人の気持ち

「ちょっと分かったよ」

「じゃあまた食べにくれば、ジヨロキアラーメン」

「いやそれはいい。絶対に。もう無理」

「ええ、食べにきなよ」

「いいって。何でそんな食べさせたがるの」

「頑張った価値はあった。折原との距離がぐっと縮まった感じがする。一緒に食べた物が激辛ラーメンでなければここまで縮まらなかったと思う。こんな風に冗談を言って笑えるようにはなれなかった。」

「2人で残ったヨーグルトドリンクをちびちび飲みながら口に残る辛さが無くなるのを待った。味の感想を言い合った後、折原の今まで食べた辛い物の話を聞いた。」

「——でもその中でも今日食べたこれが一番辛かった」

「そうなんだ」

「2人でこれ食べたのは一生の自慢になるね。私は色んな人にどや顔で言うよ」

「ジヨロキア入りのラーメン食べたって?」

「皆驚いてころんじゃうかも」

「店内はお昼時になってもそこまで混雑していなかった。ジヨロキアラーメンをずると平然とした顔で食べている強者もいて、きつとニツチな層に愛されている店なんだと僕は思った。」

「最後に手を合わせて「ごちそうさま」を言う。濡れてしまっていた髪も拭いてから数分経てば外に出ても恥ずかしくなくらいになった。」

「じゃあそろそろ行こうか、カラオケ」

「元氣そうに言ったのは折原だった。」

「うん、出ようか」

「いよいよ今日のデートのメインがやってくる。僕の告白するとういちはより強くなっていた。」

「それにしてもヨーグルトドリンクってのは偉大だね。あんなに口の中痛かったのになりましになった」

「めっちゃ効果あるよね。マヨネーズもさ、辛い食べる時にいいよ。でも……」

「でもっ？」

「……でもさ、マヨネーズ系のサラダとか一緒に食べちゃうと……辛さを楽しめなくなっちゃうんだよね。あれはヨーグルトよりも長く口の中をコーティングしちゃうんだよ」

会計は約束していた通り割り勘で済ませて、外に出るとカラオケを指して歩いた。風が強くなっていて、汗をかいた体に寒さが染み

た。

「そうなんだ。じゃあ辛党の人にとっては邪道みたいなの？」

「別に悪ではないけど私は無いか。マヨネーズ一緒に食べるくらいなら辛い物は食べない。同じ理由でタマゴ入れちゃうとかもやだ。タマゴもね、全然辛くなくなっちゃう。なのに何で入れる人いるんだろ」

「あー、タマゴはインスタントの激辛ラーメンとかに入れてる人結構いるよね。それは分かるっていうか……あの、タマゴは俺もやっちゃうかも……」

途中で寄りやすい場所にあったコンビニに入った。2人ともペットボトルの飲み物を選んだ。男友達とカラオケに行くときは店に入る前に飲み物を買うのが常識だったので、僕が提案した。店で頼むと何倍も高い。

ついでに僕は徐々に蘇ってきている辛さを完全に絶つ為に甘いチョコレートも買った。支払いはさつき割り勘だったからと僕が負担した。

「俺払うよ」

「……あ、ありがとう」

レジに入る前に言うと、折原はぼそりと返事をした。

「きつきの店さ、意外と若い人多かったよね」

「え……ああ、うん」

「しかも女の人のほうが多かった。俺あんな感じだとは思ってなかったなあ。なんとなく激辛好きっておじさんが多いのかと」

引き続きカラオケを目指して歩いた。あとは人通りの多い道に出て、信号を2個ほど過ぎれば着くという道のりだった。

「ああでもネットとかでは言われてるよね。甘党には意外と男の人が多くて、辛党には意外と女の人が多くとかって」

「確かに考えてみればそうかも。男も基本的に甘い物好きだしなあ。うちの母さんとかちようど辛い物好きで甘い物嫌いだな、そーいや」「私は甘い物も好きだけど……」

「食べ物好みにあんま性別関係ないか。皆それぞれ違うね」

「うん……皆それぞれ……」

ラーメン屋を出てからの折原はどこか遠くを見る時間が増えた。会話のテンポが定まらない。ぼんやりしているのではなく、別のことを考えているような感じだった。

これから同級生に自分が歌っているところを見られるから緊張しているのか。ただでさえ折原は友達にも歌が上手いのを隠しているのだし、やっぱ隠し事を打ち明けるみたいで恥ずかしいのか。緊張しているのは僕も同じだけど……。

「このカラオケよく来るんだけどさ、会員登録してるから私が受付していい？」

店に入る手前で、スマホを取り出しながら折原が言った。

「そうなの。じゃあお願いしようかな」

「うん、時間はどうする？」

「どうしよう……2時間とか……でも2時間なら……ショートフリータイムみたいなやつのほうがお得になる？この店にもあるかな」

「3時間パックがあるね」

「じゃあそれにしようか」

「うん……」

折原が受付にいて店員とやり取りをした。女性の店員だったし僕

は少し後ろで見守った。

折原の背中を見ながら、通う高校とは違う地域であまりアクセスが良い場所でもないカラオケ店に何で会員登録してるんだろうと思っただ。家がこの辺だったりするのだろうか。

「7番のお部屋だって。行く——」

指定された部屋を探して廊下を歩く間も、折原のテンションは上がってこなかった。僕もそんな折原が気になって、ラーメン屋にいた時よりも静かになってしまっている。

これじゃ駄目だと思っただ僕は7番の部屋に入ると、わざとらしく手首を回して見せた。

「よーしー歌うぞー！」

こういう時は男の僕がリードして緊張を解いてあげなきゃ、僕は元氣よく言った。

それなのに折原はドアを閉める前に回れ右をする。

「ごめん、ちよつとトイレ行ってくる」

「え、ああ……うん……」

急ぐような速度で折原は廊下に消えていき、僕はドアが閉まってから……「いつてらっしゃい」まで小声で言った。たった今歌おうと意気込んだのに情けない声になった。

回していた手首をゆっくり下ろして、ソファに腰かける。先ほど昼ご飯を食べたばかりだが机に置かれていたフードメニューを眺めた……。

気合が空回りして恥ずかしい感じになってしまった。別に向こうは気にしてないと思うけど、僕は動揺した。女の子とデートに来て相手がトイレに行くという状況も初体験なので、なんとなく行動に迷う。

ただ待っているだけでいいよね……デートの攻略サイトにも相手がトイレへ行った時の行動まで書かれていなかったけど……何事も無かったように会話を始めるだけ……。

そういうええもしかして——さつき折原さんが緊張しているように見えたのはトイレに行きたかったからかも——。部屋に入るとすぐにだし、相当我慢していたのかもしれない——。

考えていると1つ謎が解けた僕は、カラオケには絶対あるけどカラオケ以外では見かけない曲を選ぶタッチパネル式のリモコンを手にとり取って、操作し始めた。

トイレから帰ってきていきなり歌ってもらうのもあれだし、先に僕が歌った方がいいよね……。その考えのもと、最初に歌うのにふさわしい曲を吟味した。

いくつか歌う曲を決めて練習してきたけど、今の状況と折原との雰囲気を加味するとこの曲がいいだろうか、それともあの曲か。個室のモニターに映っているバンドのPVも見たりしながら折原が帰ってくるのを待った。

曲は決まり、リモコンを操作してあと1回タップすれば演奏が開始するところまで終わった。

マイクを手に取り咳払いして、まだ帰ってこないようなら発声練習がてら軽く歌ってみようかなんて考える。

しかし、その時ドアが開いて折原が帰ってきた――。

「あ、折原さん。俺もう歌う曲決めちゃったから、先に歌っていい？」
トイレから帰ってきた女性に先に喋らせるのはデートのマナーに反すると思ったのですぐに言った。また張り切って明るい声を出した。

「うん、先に歌っちゃって。私も歌う曲決めようつと」

折原も微笑み、カラオケらしいテンションで言った。

心配していたけど体調に問題はなさそう。すぐに帰ってきたし、やっぱり先ほどまではトイレに行きたかったただけだったんだ。

時間的に大きいほうじゃなくて小さいほうだな……なんていう気持ち悪い推測をどうしても一瞬だけしてしまいながら、僕は機械に曲を送信した――。

「人形たちが踊り狂う消えゆく僕を見て笑う 瞬きする度に 幻想に変わってく――」

なるべく緊張を和らげられるように練習した中で一番しっくり来た曲にした。歌い出しは良好だった。

「ふわりと膨らむ気持ち―その向こうに見えるのは―モノクロのキミ 違う誰かのように見えて 遠く消えてく――」

今までは曲調も歌詞もエモエモし過ぎて好きなタイプの曲じゃなかったが、聴いていると好きになった。流行りの曲だし折原の反応も良くて、サビからは手拍子もしてくれた。

「今夜も酔わせるお酒とともに人々は踊り続ける 儂い幸せを探して 狂う……僕にはそれが人形に見える――」

好きな人に見られながら歌うなんてやっぱり緊張する。自分の声なのに上手くかつこよく出て行ってくれと願いながら歌った。

最初から最後までそんな調子で、曲のテンポがゆっくりになる大サビでは声が震えそうになりながらも、なんとかまあまあ満足がいく出来で僕は歌い切った。

「すごい。歌上手だね」

折原も相応のリアクションで拍手をしてくれた。

「ほんとう？嬉しい。はーでも、やっぱ女子に見られてると緊張するな」

「じゃあ次は私ね。もう曲送信したからすぐ始まっちゃうかも」

「お、どんな曲歌うんだろ——」

そんなにすぐ折原さんの歌が聞けちゃうのか。目立たないように手汗をズボンで拭きながら思う。めちやくちや楽しみだけど、歌つてるときはそれで精一杯だったから心の準備ができていない。

ローテンポのイントロが始まり、このカラオケ店の機能なのか、曲調に合わせて部屋の照明がより暗くなる。

モニターに表示された曲名はあの日僕が黒いパソコンで見た曲と同じだった——。

「私、本気で歌うから……」

とりあえず僕が変に音程も外すことなく歌い切れたことに、ほっと胸を撫で下ろす暇もない。早鐘を打つ心臓は休憩無しで走り続ける。

折原は対面のソファに座っていた。だから、あの映像と全く同じ視点。今度は映像じゃなくて現実で——折原が口元にマイクを持っていった——。

そうすると折原が真剣な表情になって、僕はそれに見とれた。

「あなたのーいつもの嘘にー……何も感じなくなつたわ」

映像と違って体全体が気持ち良く震える。響く歌声は僕を貫いて、背中の向こうまで伸びていく感覚があつた。

呼吸をするのすらもつたいなくなる。全神経を目と耳に注いで彼女の歌を聞いた。それしかできなくなった——。

「あの夜よりも確かなーそんな一瞬を探しているのー」

折原はずっとモニターのほうを見て歌っていた。サビになっても姿勢を変えず、背筋を伸ばしたままだつた。

けれど、サビが終わって間奏に入るタイミングで僕の方を見た——。聞き入ってしまったので固まった僕——。彼女は口元が緩んだので、それを止めるように手で押さえた——。

「す、すっげえ……。何だこれ……」

笑われた僕はようやく自分が今、カラオケ店の個室で折原と向かい合っていることを思い出した。何か、何か言わなければと考えて、咄嗟に出てきたのは語彙力が低い誉め言葉だつた。

「ふふ……ありがと……」

折原はマイクを通さずに言って、またモニターのほうを向いた。

そこからも折原は絶大な歌唱力を惜しみなく発揮して、歌い続けた。僕はまた固まってしまわないように注意しながら、特等席でその歌声を堪能した。

誰かの真似をした上手く聞こえるような歌い方じゃなくって、本物の歌声。そう表現したくなる。透き通っているようで……その透明感でぶん殴れているかのように……力強い。

映像を見た時にも感じたことを桁違いの度合いで感じた。

「あの夜よりも確かなーそんな一瞬を探しているのー」

折原が歌い終わった時にはスタンディングオベーションで称えた。僕が生み出す言葉なんかじゃなくて何よりそれが相応しいと思ったからだ。

折原は溢れるのが抑えられないという風に微笑んだ。よほど自分の歌に満足がいったのだろう。僕もこんなに気持ちよく声を出せて、拍手で褒めて貰えたらこうなる。

「まさか折原さんがこんなに歌が上手いと思わなかったよ。思わず立っっちゃった。歌聞いてここまで感動したのなんて初めてだよ」

「言ってなかったけど、実は歌にはかなり自信あったんだよね」

「いやあ……本当に上手かった。日本一とか世界一とか、そういうレベルに俺は聞こえた」

言ってて恥ずかしくなるような言葉も思わず口にしてしまう。勢いで告白してしまいそうなほどハイになっていた。

「次はまた君が歌って」

「ええ、でもあんな歌聞いちやうと俺歌いづらいよ。もっと折原さんの歌が聞きたい」

「君が歌ったら私も歌うから。そっちのほうが楽しいでしょ」

「どうしよ……じゃあ次は何歌おうかな」

2人だけのカラオケルーム。僕と折原だけの夢の世界で、僕たちはまたお互いに3曲ずつ歌った――。

折原はまるで自分の歌唱力を見せつけるかのよう歌った。僕のようなエンジョイカラオケとは少し違って、歌っているときはプロのアーティストがレコーディングしているみたいな本気の熱量があった。

実際にそんな現場を見たことがある訳じゃないけど……。

でも楽しんでいない訳ではない。歌った後や間奏で見せる純粹な笑顔で分かる。折原が選ぶ曲はローテンポの歌唱力が求められるものばかりで、歌詞にも悲しいフレーズがあったが、時折歌っている最中にも頬があがっていた。

その笑顔で折原に惚れた僕は、その笑顔を見る度に好きという言葉が心の中に溢れて……胸が苦しくなった。

どうして彼女はこんな風に笑えるんだろう……なんて美しい笑顔何だろう……。

「——ちよつと休憩しよつか。喉が疲れてきたし、まだ歌いたい？」
交互に歌っている中、折原が4曲目を歌い終わった時に僕は言った。

「いや、私もちよつと休憩しようかな」

立って歌っていた折原がそう言いながら座って、カラオケの途中の休憩タイムが始まった。

時間が気になってスマホを取り出すと、カラオケに来てからもう1時間ほどが過ぎていているようだった。受付をしたときの時刻は大体でしか覚えていないけどたぶんそのくらいだったはず。

「もう1時間くらい経ってるよ。全然そんな感じしなくない？」

「え、そうなの。確かに」

「いや折原さんの歌上手すぎて上手すぎて。こんな集中して聞いちやうカラオケは初めて……いやカラオケじゃなくても今まで聞いた歌の中で1番上手いよ」

大きく身振り手振りを使って、興奮を表現した。

「本当？」

すると折原はテーブルを叩くように身を乗り出して、近い距離で僕と目を合わせた。遅れて女子の匂いがふわりと香る。

「へ……うん、本当だけど」

「あ、ごめん」

僕が思わず身を引くと、折原はまた座った。本当はもつと顔を近づけたかったとすぐに後悔の念に駆られる。

「……本当の本当に上手だった。こんなに歌上手い人がこの世にいるんだって思った」

「ありがと、嬉しい……」

「声は綺麗だし、全然音程も外れないよね」

「ありがと……」

「うん……」

「……」

先ほどの笑顔をしていた人とは別人のようにぎこちなく笑う折原は、僕から目を逸らしてスマホを取り出した。彼女はなんとなくもじもじとした手つきでスマホを操作し始める。

え、何この感じ。僕は今気づかぬうちに何か悪いことを言ってしまったのか。さっき顔近づけてきたのは何だったの……急に態度が変わってしまった折原に戸惑いながらも僕は会話を続ける。

「折原さんカラオケ来る前に私歌上手いなんて言っただけだからさ、全然こんなに上手いなんて知らなかったし、驚きもしたよね。これって折原さんの友達とかは知ってるの？」

「ううん。私高校の友達とはまだカラオケ来たことなかったから……」

「そうなんだ。きっと他の人とも来れば皆驚くだろうね。うちの学校で一番上手いよ」

「……」

折原はスマホの電源を切った。しかし僕の方は見てくれなくて、モニターのほうを見た。若いバンドの宣伝映像を、どこか遠くを見るように虚ろな目で眺める。

本当に何なんだろう——今折原さんはどういう心境なんだ——。

雰囲気的にはラーメン屋からカラオケへ歩いていった時と同じ、ということはまたトイレに行きたいのか。

でも、1時間経ったか経ってないかくらいでそうなるか……激辛食ったばっかだし無くはないけど、僕はまだ何ともないし……。

じゃあ、もしかしてこれって……。

僕の心がざわつく……。

もしや、良い雰囲気という奴なのでは。

「次は何歌おうかな……」

気づいてしまった僕はリモコンを手に取って、次に歌う曲を探すフリを始めた。体が勝手に動き出したので目についたものに救いを求めた。

待て、落ち着け——。「ま」と「て」をタップしながら思う。確かに告白チャンスかもしれないと考えながら見ると、折原が僕からのアクションを待っているようにも見える、気がする。

でもできないよ……そんなこと……。心の中で僕は泣いた。そんなのって怖すぎる。今こんなになんか幸せなのにそれが急に終わる可能性を生み出すなんて嫌だ……。

モニターのCMが静かなもの変わって、カラオケという本来うるさい場所に静寂が訪れた。このカラオケでは隣の部屋から微かに聞こえる歌声も無くって、防音室が憎い。

「どれにしよっかなあ……次、俺の番だもんね……折原さん歌いたい？」

苦しくなって僕はまた口を開く。

「いや、先に歌って……私はもう少し休憩したいかも」

「そっか……」

すぐに終わってしまう会話。でもあんなに楽しそうに歌っていたのにまだ休憩したいってことはやっぱり待っていてくれるってことなのか。

だとしたら、男として逃げる訳にはいかない。きっと個室で2人きりなんてこれ以上ない状況、僕も言う決めていたし言いたい、黒いパソコンで今告白するべきか聞いたら絶対そうするべきだと言われ

ると思う……。

ど、どうしよう……や、やるのか……今、本当に……。

「……………」

「……………」

さらに沈黙が続いた……その中で弱い自分を鼓舞し続けて……最終的には僕は決心した。

最悪、黒いパソコンに頼ればいい。もしこれからどこまで落ちたとしても黒いパソコンならどうにかできるはず。

決め手になったのはそんな言葉だった。

だから、言った——。

「あかさ——」

「あかさ——」

まさかのシンクロ——あろうことか、その言葉は折原と重なった。

「え……」

「あ……」

咄嗟に出た声もまた重なった。折原と数分ぶりにしつかり目が合って……僕はそこから時間がゆつくりになったような感覚に陥った。

あ、これ噂に聞くピンチの時になるやつだ——走馬灯だっけ——でも死にそうではなくって、前にもあったかわいくて逆に恐怖ってやつ——かんわいいな、折原さん——てか、これ恋愛漫画とかで見る展開——。

一瞬でそんな大量の思考が回って、急速にまた現実へと戻される——。

「あ……何？先に言っつて」

声を出すタイミングが被った時のテンプレみたいなセリフが口から出た。

「いや、私は……」

「俺大したことじゃないから後で大丈夫」

「……そう、じゃあ私から言うね」

経験上こういう時に譲ると、さらに譲り返してくるかと思っただが折原は受け取ったバトンを返さず、握りしめるようにして何かを言おうとした。一度俯いてまた僕の目を見る。

その時、また時間がゆつくりになる。

もし折原がしようとしてるのが告白なら、自分から言うよりも相手から言ってもらった方が気持ち的には楽——だけど、まさか本当に告白なのか——だとしたら相思相愛——告白だよ、僕もそういう気分だしそうだよね——。

折原の唇が開いていく様子すらスロー再生のように見えた。仮に告白だとしたら何と言って思いに込めよう、そんなところまで考え始めた時に、折原の話初めの1文字目が聞こえて、考え事は一瞬で消え去った。

「聞いてほしいことがあるんだけどね……」

「うん……」

「その……悩みなんだけど。聞いてほしい悩みがあるの」

「え、悩み……うん何でも聞くよ」

思っていたのとは違う出だしで僕は少し冷静さを取り戻す。けど、まだ可能性を捨てきれない。

「さつきさ、私の歌が世界一上手いみたいなこと言ってくれたじゃん……」

「うん」

「それでその私本当に歌手で世界一というか……プロの歌手になりたいの」

僕は折原のその夢を知っていた。加えて、やっぱり愛の告白では無かったことで反応に困って、何も言えなくなってしまおう。

「……………」

「それで高校生になってからは色々努力はしてみたんだけど……でも全然ダメで、それが悔しくて不安で」

「……………」

「ごめんね。いきなり変なこと言っちゃって。困るよね……あはは」

僕が何も言わないものだから、折原は暗くなった空気を戻そうと作り笑いをした。

がっかりしている場合じゃない。無言どころか体の動かし方も忘れていた僕は、見たくない笑顔を見て目覚めた。

「いや、全然困ってなんかかないよ。ちよつと驚いただけ……そっか折原さんは歌手になりたいんだ」

「やっぱり変だと思う?」

「凄と思う。折原さんならきつとなれるし」

「自分で言うのも何だけどさ、私もそう思ってたの。私なら歌手になれるって。けど、いざ目指してみたら、その自信が無くなっていくばかりで、私最近怖い。凄く……怖い」

折原は服の裾をぎゅっと掴んで、声が大きくなった。

「最近学校で進路の話とかよくされるじゃん……私は家でもしよっちゅうされるんだけどね……それをさ、私はいつもみんなと同じように大学進学を目指す高校生として聞いているんだ。進路希望を聞かれてもちゃんと県内か隣県にある国立大学だって答える……でも本当の私はそんなこと全く望んでない」

僕は度々頷いて、折原の話聞いた。泣き出しそうな声色から、この話が折原にとってどれだけ深刻な悩みなのかが伝わってくる。

「本当の私は今すぐにも歌手になりたい。勉強に集中なんてしたくない。大学なんて行かずに夢を追いたい。高校だってやめたいくらい……なんて言ったら、君も無謀だっと思っ？」

「そんなことない……けどさ……」

「私もこの夢にリスクがあることは分かっている。それでも諦められないんだ。きつと夢を叶えるその日まで……」

「お、俺に何かできることはある？言ってくれば力の限り手伝うよ」「ありがと、聞いてくれるだけでいい。私も話したいだけだから……」

折原は自分がなぜ歌手になりたいかから、今した話をもう一度詳しく話した――。

折原は動画サイトに自分の歌を投稿してみたり、音声データを送るだけの簡単なボーカルオーディションに参加してみたりしているらしい。撮影場所はちやうど今いるこのカラオケらしくて、少し遠いけど誰にも見られたくないから通っているのだと……。

でも、全然結果が出ない。動画も再生数が回らなくて、オーディションを受けてみた音楽事務所からの連絡もない。頑張り続けても結果が出ない日々に、ずっと誰かに追われているような恐怖感を感じている……大体そんな話だった。

僕はあまり聞き返したりせずただその話を聞いた。折原にもそれだけでいいと言われたけど、頭の中ではどこか自分が力になれるところがないかを探しながら――。

本当はしたかった告白も、今日は無理だとすっかり諦めて――。

「やっぱ話すとすつきりするね。ちょっと心が楽になってきた」

途中からずっと俯いて話していた折原が顔を上げて言った。久しぶりに顔を見た気がした。

「ほんとう？良かった」

「誰かに話しておきたかったんだ、このこと。私誰にも話したことなかったから今日が言ったの初めて」

「そうなんだ。俺なんかが初めて……」

「本当は人気になってから周りの人にも言おうと思ってたんだけど、誰か1人くらい知っててほしくなったから。思い出も作つときたかったし、この街でやりたいことはやっておきたかったの。半分不安な気持ちを紛らわす目的だけど」

その時言われた言葉で、だから僕とデートしてくれたし超激辛のラーメンを食べたんだと納得する気持ちがあった。しかし同時に、理解できない部分もあった。

「カラオケに来れば歌を褒めてもらえるかもしれないし、そしたら自信になるし、自己PRにも友達に世界一上手いって言われましたって書けるでしょ」

「え」

「私さ、来月またオーディション受けてみようと思うんだ。今度は東京に行つて」

「そうなの。凄いじゃん……」

僕は言われた言葉に率直な感想を返した。自分とはまるで違う彼女を見ていたら思った……。

「受けるだけなら別に凄くなんてないよ。親に内緒で行ってやろうと思ってるから、それは別の意味で凄いかもしれないけどね。応募すれば誰でも受けれるオーディションだしさ」

「それでもその姿勢というか生き方というか。俺には大きな夢も無いし、何かのオーディションを受けようなんて考えたことも無かったからさ……凄いよ」

「でも落ちたら何者でもないんだよ。私そうなるのを怖がっちゃってる。何が怖いって……落ちててもきつとまだ諦められないから。私なら一度落ちてもまた次を探すに決まってる。私の中にもう1人いる、歌手という夢に向き合う私はとつてもプライドが高くて負けず嫌いなんだ」

僕は込み上げてくるものを抑えるために拳を強く握りしめた。

折原がオーディションに行くと言い始めてから、僕には折原が遠い存在になってしまったように感じた。いや、そこに元々あった見えないう壁が色を付けて姿を現し出したのだ。

「だけどさ、こういう不安も歌っている時だけは全部忘れられるんだ。それが私の道が正しいって信じられる理由、だってこの先どれだけ苦しくたって歌い続ければいいんだから……君も一緒に信じてくれる？」

「うん……もちろん」

夢について熱く語る折原にまた何も言えなくなってしまった僕は、話を振られたので答えた。本当は自分が今思いついたことを話してしまいたかったけど我慢する。

「ありがとね……本当に話聞いてくれて元気出た。またしばらく頑張れそう。それでさ……今日はこれで解散でいい？なんだか楽しい雰囲気じゃなくなったし、ごめん完全に私のせいなだけどさ」

「うん、そうしょっか」

「ごめんね。いつか必ず何かで返すから」

「いや、気にしないで。むしろ話してくれて嬉しかったよ。またいつでも相談乗るから——」

ここでも僕は気持ちとは裏腹にありきたりな返事をした。僕も早く1人になりたい気分だったから……。1人になって気持ちを整理したい……。

そうして僕たちはまだ3時間パックは余っているのに、カラオケ店から出た。

支払いは折原がしてくれた。私が無駄にしちやっただから払うと言い出して、僕も払うと拒んだのだが、どうしても譲らないという態度だったので最終的には僕が折れて払ってもらったことにした。

入る時よりも暗い雰囲気を受付に行って、店から出ていく僕たちは周囲の人から告白に失敗した男女のように見られているんじゃないかと僕は思った。

「——本当にごめんね」

折原はカラオケ店から出てすぐの帰り道が分かれるところで、最後にまた謝った。

「俺は今日も楽しかったよ。激辛ラーメン意外と食べれたしき」

「うん……」

「それじゃ、気を付けて帰ってね」

数時間ぶりに明るいとこで目を合わせた折原は、カラオケに入る前よりも黒目が大きくって、唇を噛んで申し訳なさそうにしていた。

それがまたかわいくって、誰よりも何よりもかわいくって……。でもだからこそ僕は、今すぐ走り出したい思いに駆られた。

「またね」

「うん、また……」

——家に着いた僕は自室に入るなり、立ち尽くして固まった。いつもなら着替えを始めるのだけど服を脱がず、それどころか座ることもせず、自分の部屋の床を見つめた。

帰り道は思考を止めて、とにかく急いで家に帰ることに集中した。ずっと前だけ見て体を動かした。だから、ようやく先ほどあった出来事と向き合い始めたのだ。

大きなため息を吐いて、また1つ息を吐く。息を吸い込むと、今度は長く遠くへ吹きかけるような溜め息を吐いた。体内で複雑に混ざり合い渦巻く感情が、いくら吐き出そうとしても喉に張り付く。

足を滑らせるように歩いて、勉強机まで行くと椅子に座った。肘を ついて頭を抱える。

そうすると、僕は頭の中で叫んだ。

なんて僕はださいんだ——。

折原があんなに将来のことで悩み、苦しみながらも夢に挑戦していること知って心底思った。自分は彼女と比べてなんてしようもない人間なんだと。

そうか……多くの高校2年生は今進路について頭を悩ませているんだ。折原のようにどうしたって分からない未来と、自分の頭と体だけで戦っているんだ。

それに比べて僕は何だ——。

常に何か問題があれば黒いパソコンで何とかしようと考えて生活し、告白しようとした時もまた最悪黒いパソコンに頼ろうと思った。ああ、なんてなんてなんてなんて僕は——。

自分の髪ごと悔しさを握りしめる。汗をかいたあとの髪から感じるべたつきで、さらに手に力が入った。

ださくて恥ずかしい、けれどそれ以上に悔しかった。僕がダサイということ、折原に告白する資格なんて無かったこと……気づけなかった自分が悔しい。

今まで黒いパソコンを使ってきたのが正しいだとか間違いだとか

ではなく、この半年くらいの生活が実際のところ幸せだったのか不幸だったとかでもない。こういうのは今考えることじゃなくて――。

確かなのは、僕が人として男としてダサイということ。好きな人の自分とは全く違う姿を見るまで気付けなかった。

泣き出すかとまで思った折原の姿を見て抱いた……罪悪感のような負の感情。あれが胸の中に生まれるようでは、折原とは正反対に不安と無縁の生活を送っているようでは、告白しても絶対に成功しなかったし、告白する権利も無かった。

先刻までの僕は間違っていた――。愚か者だった――。

頭を抱えた態勢のまま、僕は一通り自分を嫌った。今日の出来事を振り返って、どうしてもっと早く気付けなかったのかと1日をやり直したくなる。その感情の起伏と共に溜め息の数は多くなり、握る拳は固くなった。

癖でもないのに貧乏ゆすりが止まらない……悲しそうな折原の顔が瞼の裏に浮かんで……僕まで泣き出しそうになった……。

しばらくそうして――疲れた僕は、今度は全身の力を抜いた。机の上に倒れる。

正直なところ、この問題から逃げて忘れてしまいたい。でも、そうするとダサイどころか人として終わりだ。だから、僕もまた立ち上がらなきゃいけない。

僕にはまだ、ダサイなりにやらなければならないことがあるから。

再び気合を入れ直すと、僕は収納から黒いパソコンを取り出した。

このパソコンを使えば未来を人生を変えられる、豊かにできる。今まで僕も何度もそうしてきた。

でもそれは僕の人生だけじゃなく他人の人生もだ。

今の僕が折原にしてあげられること――それは――。

「夢 叶え方」

折原のことを思いながら、僕はこの検索ワードを入力した。

彼女の悩みを知って、それを解決する方法も知ってしまった。以上、僕にはこの検索をする義務があると思った。僕にできる全力で彼女の夢を叶える――。

全力を出すということは当然、黒いパソコンを使うことである。黒いパソコンに頼った生き方がダサイという認識とは矛盾しているかもしれないが、自分の為に折原への助力に手を抜くのはかつこよくなることじゃない。

だから、黒いパソコンを使うことを選んだ。

でも……これで最後だ。この検索をして、折原の夢を叶えた後に僕は……。

いや、そのことを今考えるのはやめよう……。最終的に黒いパソコンをどうするか考えるのは後でいい。今はただ、この検索に集中だ。僕はEnterキーを強く押した。

『折原裕実さんの歌手になりたいという夢を叶えるには約1カ月の間、下記の指示を正確に行う必要があります。また複雑な作業が多く、あなたがミスをする可能性が高い為、向こう1カ月の間は作業後、確認の為に「夢 叶え方」と再度検索することをオススメします。――』

そんな文から始まった検索結果は何度もマウスのホイールを操作して、文を進めなければ読めないほど長かった。

『まず初めに、あなたのスマートフォンを使って新しいメールアドレスを作ってください。よほど非常識な文字列でなければ何でも構いませんが、もし迷うのであればあなたのSNSの趣味アカウントであるポンカンから拝借して「ponkan.BPC.1234@」とでもしましょう。』

『そのアカウントを使って折原裕実さんに連絡を取ってください。折原裕実さんのメールアドレスは――送信する日時は――送信する文章の内容は――』

『次にあなたの両親が使っているパソコンを借りてきて、「Orion

「Studio」というソフトをダウンロードしてください。「Online Studio」とそのまま検索すると検索結果の最初に出てくる、音声編集ソフトです——」

どんな検索結果が出てくるか想像がつかなくて、かなり簡単な可能性もあるなんて考えていたが、黒いパソコンが示したのは大変そうな道のりだった。

ただ、それで気持ちが萎えたりはしなかった。1人の女子高生を歌手にするなんて、面白そうだとも思うからだ。

『折原裕実さんから送られてきた音声データを、先ほどダウンロードしたソフトで編集します。——』

『さらに映像のデータを作成します。新たに「Video JJW」というソフトをダウンロードしてください。——』

『出来上がったデータを2月12日17時33分に折原裕実さんへ送ります。添える文章は——』

内容的にはどうやら折原が投稿しているという所謂歌ってみたの動画の再生数を伸ばすための計画だった。折原が歌った音声データに僕が手を加えて、折原を人気者にする。

先のことを今覚えても仕方ないので、僕はざっと流すようにさらに読み進めた。

後半になればより難しそうな指示があったが、その内僕は力が湧いてきた。今日までがダメだっただけで、まだ折原と付き合うことを諦めた訳じゃないからだ。

この検索を乗り越えて、言えない秘密が無くなり、胸を張って折原と接することができるようになったらまた改めて告白する。そのことを思えば何だって頑張れそうだった。

しかし底までマウスをホイールしたとき、僕は口を開けて固まった。最後に書かれていた文が僕をそうさせた——。

『全てが滞りなく終わると、折原裕実さんは大手音楽事務所にスカウトされて歌手デビューすることができません。』

そんな文章の下で、僕に確認を取る注意書きのように書かれていた言葉。他とは違って赤い文字をしていた。

『ただ、この指示を全て終わると折原裕実さんは通っている高校を中退して上京し、あなたと交際する未来は無くなります。』

「え——」

あまりに突然で、僕は1人きりの部屋で短く声を出した。

頭が理解を拒む。黒いパソコンに映っている文字は日本語で、難しい漢字が使われている訳でもない、目の焦点もしっかり合っている。それなのに、書かれていることがすぐに理解できなかつた。

つまり……どういうことだ……。「あなたと交際する未来は無くなります」っていうのはどういう意味なんだ。あなたって言うのは僕のことだよな……。だからつまり、僕と折原さんが付き合えなくなってしまうってこと……。

そんなの——絶対に嫌だ——。

体中の力が抜け、あらゆる神経が無くなっていくような感覚を覚えていたのに、僕はその瞬間机を叩いた。加減できなくて、勉強机の本棚から本が床に落ちたくらいの威力だったのに、手から痛みを感じない——。

そんなことって考えられない。いつからか僕の日々の中心は恋だったのに、それが告白する前から終わってしまうなんて受け入れられる訳がない。

こんなに好きなのに、一緒にいるとあんなに幸せだったのに、諦めると言うのか……。いや、どう考えてもあり得ない。

脳内に浮かんでくる「失恋」という文字を僕は断固拒否した。あの手この手で押しつけ、かき消し、遠ざける。

いやいや、ちよつと待つてくれ黒いパソコン。もつと他の方法があるだろう。折原さんが高校を中退しない方法や、大学に行つてから歌手になる方法が絶対にあるはずだ。

何でこんな残酷な方法を提示したんだ。お前らしくもない——。

でも……Enterキーを押すときの僕は全力で彼女の幸せを願っていた。きつと彼女にとって最も良い未来を黒いパソコンに求めた。であれば、これが最善……。

こんな僕にとっては絶望的な結果が最善だつて言うのか……。

本当は初めから分かっていたことが、じんわりと僕の脳に沁み込んでくる……。きつと折原さんと僕が付き合いつつ、いずれ彼女が歌手になるという方法もある。いや……。きつとじゃなくて黒いパソコンなら確実に見つけられる。

でもその方法は、今回の検索結果の通りに動いた未来よりも折原が幸せではない未来なんだ。

だとしたら僕は……。頭では分かっている。分かっているけど、拒絶してしまう。どっちにしる歌手になれるなら、少しくらい僕の幸せも求めていいだろう。そう思ってしまう。

だけど知ってしまった以上、もうそんな道は歩けない。この先、折原さんに何か不幸なことがあった時、今現在見ているこの検索結果を実行していればこうはならなかったかもしれない……。罪悪感を抱くに決まっている……。

知った時点で手遅れで、考えれば考えるほど選択肢は1つしか無かった。太陽が赤く染まり、沈んでいくまでずっと考えても別の選択肢は見つからない。

それでも別の可能性を探してしまうのは、ただその1つの選択肢が嫌だというだけ。そうに違いなかった。

だから、最終的に僕は笑った。

机に伏せた状態で、沸々と込み上げてくるように乾き切った笑いをした。そうしてないと、乗り切れそうになかったから。

「いいさ。ああ、やってやるよ——」

その日、こうして僕は初めて黒いパソコンを自分が不幸になる為に使った。

僕は音楽プロデューサーを目指す大学生になりきった。動画サイトにたまたま折原の歌を聞いて、感激を受けたという設定で近づき、陰ながらサポートしていくために――。

僕は折原から受け取った音声データを編集した。元から圧倒的な歌声であったが、より演奏とマッチするように、より綺麗に聞こえるように、慣れない普通のパソコンで毎日作業した――。

言うまでもなく、僕に音楽プロデューサーのようなスキルは微塵も無かったので何が何やら分からない難しい作業だった。

ここをクリックして、ここに数値を打ち込めば一体どういう風に変化するのか分からない。けれど、黒いパソコンの検索結果をそのまま書き写すような作業が進んでいくうちに、データがカラオケで聞いた生歌に近づいていくのは分かった。

僕は見ているだけでも心地が良い映像を作った。簡単な編集で出来る映像でも見せ方の技術1つで、人の目を釘付けにするものになる。何度でも見たい動画にする為に時間を費やした――。

僕は出来上がった動画を折原に送信した。受け取った折原が動画を投稿する、そのタイミングでより多くの人の目に留まるように、時計を見ながら黒いパソコンで指定された時間通りに届けた――。

折原のチャンネルから新しい動画が投稿されるのを確認してからわずか数日で、再生数は爆発的に伸びた。初めはまあまああのインフルエンサーが拡散し、次はそこそこの同業者が絶賛した。

さらに数日後にはSNS上でバズり、めでたく折原は歌い手界の超新星となった。

そうやって段階を踏んで大きくなっていく間にも僕はちよこまかと裏で動いた。折原の動画にコメントを付けて、匿名掲示板で宣伝して、動画サイト上で謎の操作をすることにより折原の動画がオススメに出てきやすくなるようにした。

そうするともう止まらない。さらに2つ目3つ目と、新しくしつかりと編集された動画が投稿されていけば、大手事務所も放っておけな

い存在の出来上がりだ。

元々折原にはそれだけの歌の実力があつたのだと思う。ただ、自分をアピールする技術が絶望的だったのだ。いや、そうしようとしなかつただけか。

折原が自分自身で投稿していた動画は全て、サムネイルから再生中の画面も全て真っ黒だった。動画タイトルも曲名と「歌ってみた」の文字だけ、概要欄にも必要最低限の情報しか書いていない。

黒いパソコンが「夢 叶え方」の検索結果でついでのように教えてくれたことだが、折原は歌だけで勝負したいという思いが強いらしい。

編集技術を磨く暇があつたら歌の練習をするべき。その考えから、あの手この手で再生数を稼ごうとする行為は邪道だと決めつけ、尖りに尖っていたのだ。

折原自身も言っていたことだが、相当プライドが高い。それは尊敬するべき点でもあるが、それじゃ今の無限に創作が溢れる世界では誰にも見られず埋もれてしまう。結局この世の創作はどこまで多くの人の目に触れるかだ――。

僕がそうやって有名になっていく折原を見て……どう思ったかと言うと……どう思ったのだろうか。自分でも分からなかった。

初めは、ただ辛いだけだったけど、自分が頑張った結果色んな人が反応したことは達成感もあった。

折原のSNSやチャンネルを開きっぱなしにして、フォロワーが増えていくさまを見ているのは心地が良かった。

でもやっぱり辛いし、アホらしかった……。

そりゃ自分が失恋することになる作業を頑張るだなんて心底アホらしい。努力が報われないとかでもなく、初めから報われないことが分かって努力するのだ。やはり、こんなこと2度とやりたくないくらい辛いというのが僕の思いだ。

それでも始めたからには、やり切ることに迷いは無かった。だから僕は、最後の仕上げへと向かうときも自分の全力を注いだ……。

僕は暗い部屋でアンプの電源を入れた……。ベッドに座って、ヘッドホンを耳に付ける――。

溜め息をつきながら……ギターを握った。思えばこのギターは買った時からずっと、折原の為に使っている。

くたびれたデスクスタンドだけが手元を照らす……深夜の自室。僕はまず、指を慣らすために弦の上でストレッチさせた。各指の間を大きく開いて、戻し、また伸ばす。

次に楽譜を見ないで、練習中の曲を最初から弾いてみた。もう3週間もずっと同じ曲を練習しているので、やはりある程度のところまでは十分に弾ける。

耳に聞きなれた音が流れ込んできて、気持ちが良い。やはりこのくらいの上達具合がギターを練習していて一番楽しい――。

だけど、1つミスをして快い音が途切れてしまうと、僕はそれだけでギターから手を離れた。

短時間で冷たくなった指を脇の下で温めながら、壁に背中を預けて、僕はまた溜め息をつく――。

折原を歌手にする為の最後の仕上げは、彼女をステージに立たせることだった。僕たちが通う高校の創立記念日にある記念式典で行われるいくつかのパフォーマンス、その1つとして彼女が多くの人の前で歌うことにより僕の役目は終わる。

僕たちが通う高校は来月に創立50周年を迎えることになっていて、今年は記念として保護者や多くの来賓も招いて式典が行われる。市民文化ホールを利用して行われるその式典では、各代表からの祝いの言葉や記念ムービーが上映されたり、在校生徒やクリエイティブな職に就いたOBの他、地域で活動するパフォーマンス団体のステージが披露される。

そのありきたりな創立記念式典で折原が歌うと、凄まじい歌唱力と驚く客席の様子が撮影され、ネット上にアップされるらしい。

女子高生がプロ以上の声で歌う動画はネット上で語り継がれ……

折原のデビュー後、謎の天才女子高生の正体が世間に知れた時、折原の人気を急激に上昇させるというのだ。

さらには同級生の前で実力を明かすことで、折原が精神的にも吹っ切れて、高校をやめて歌手になるのに思い残すことが無くなる……。

黒いパソコンが教えてくれたこの指示の内容には納得していた。創立記念式典まではもう、あと1週間というところまで来ている。

それなのに僕はこんな時になってから急に迷い始めていた。やり切ると決めていたはずなのに、何もしたくなくなってしまう瞬間がある――。

折原をステージに立たせるのは僕の仕事だった。在校生の式典実行委員にステージでの出し物を希望したのも僕だし、折原が歌っている隣でギターを弾くのも僕だ。そして、折原がネット上で人気になってきた今誘うことで、折原をその気にさせたのも僕。

やっぱりどうしても割に合わないとい心のどこかで思ってしまう。ずっと後戻りもできないのだからやるしかないと言いついて聞かせているのだけど、夜も寝付けないほどになってしまっていた。

もう後1週間で本番だから完璧にしないとイケない。時間がない、そういう訳で無理やり頑張ってはいるが練習に身が入らない。

まだ僕だけの折原の生歌が大勢に知られてしまうのが怖い……。また今日も朝まで、何もしない時間を過ごすのだろうか……。

何度もまた黒いパソコンに別の道を案内してもらおうかと考えながら、手元だけはよく見える部屋で無理やり指を動かした……。

「まさか記念式典なんて日が、こんなにワクワクする日になるなんて思わなかったよ」

折原がこれを言うのは今朝からもう4回目だった。昨日までを含めると何回聞いたか分からない。

「いや……俺もまさかこんなことになるなんて思わなかったな。折原さんが全校生徒の前で歌って……横で演奏するのが俺なんて……」

「こんな場所で大勢を前にして歌えるなんてさ、絶対気持ちいいよね」「きつと皆折原さんの歌を聞いたら驚くだろうね……」

まだ1カ月あるとこの前まで思っていたのに、記念式典当日はすぐにやってきた。今日が僕の1カ月やってきた作業の、最後の仕上げである――。

「前から楽しみで楽しみで、本当に楽しみでしようがなかったけど、当日になるともうダメだね。何かおかしくなっちゃいそう!」

「あはは……俺は、何と言うか緊張してるかも……」

「まだ緊張するには早いでしょ。大丈夫?」

「うん、たぶん頭が真っ白になったりはしないと思う」

僕と折原は市民ホールの舞台袖で、ステージのほうを見ながら話していた。

僕たちは他の生徒の集合時間よりも早くここへ来た。もつと言うと、式は昼からなのに午前10時から市民ホールの近くにあるカラオケで、最後の合わせをしていた。

その後、お昼ご飯を食べて、ギターを楽屋に運び入れて、記念式典の実行委員から軽く段取りの説明を受けた。そして、式典が始まるまで何もすることが無くなった今、自分たちが数時間後に立つステージを見ながら話している。

「それにしても本当に生徒でこういうことするの私たちだけなんだね。あとは、演劇部が寸劇するだけ」

「うん……だから、同じクラスの生徒会で実行委員もしてる奴にしつこく頼まれてさ。軽音楽部入ったならなんかやってよって」

本当はそういう話になるように誘導したし、できればやってくれないかという頼み方だったのだけど、折原にはこうやって嘘をついた。

2週間前に僕がこういう話があるんだけどやってみないと折原を誘った時には、ものの見事な二つ返事が見られた。歌手の道で成功し始めた折原は早く皆に歌声を披露したくてたまらないようだ。

「3年生を送る会はなんだかんだ出し物で盛り上がったのにね。色んな部活がダンスとかやってさ」

「そうだね。希望が少ないって話だったのに、最終的には多かったよね」

「私、野球部の人やっていた漫才が面白かったな。隣に座ってた友達もめっちゃ笑うし、つられて私も声出して笑っちゃった」

「あの2人今日の式典でも漫才やろうとしたらしいけど断られたらしいよ。記念式典で漫才はダメだって。んで、漫才形式で学校の歴史を紹介するみたいな内容だったら良いって言われたらしいんだけど、それは俺たちの笑いじゃないって断ったらしい」

「あはは、何そのプライド。笑う」

折原は口を手で抑えながら笑ったけれど、僕は笑わずにステージのほうを見続けた。

「ははは……でも、今日は私の歌であの漫才よりも大きく会場をドツと沸かせたい。いや、絶対そうする」

「そうだね。折原さんならできるよ……」

「うん」

「それでさ……」

「何?」

「その……折原さんってこれが終わったら本当に学校辞めちゃうの?」

「そうすることにした。もう2つの事務所からスカウトされちゃったし、すぐには学校もやめられないだろうけど、その2つのどっちかかもうちよつと様子見て別の所からデビューしようと思ってる。なるべく大手で良いところ選んでさ」

折原は笑顔で浮ついた口調のまま言った。

体が熱くなる——。込み上げてくるものを抑えようと僕は咄嗟に自分の喉のあたりを抑えた——。

どれだけ僕が我慢して、どれだけ僕が頑張ってきたかも知らないで——。そう思った。

「別に学校やめなくてもさ……来年からでもいいんじゃない？」

どうにか言えたのはそんな言葉だった。

「ううん、だめ。私が1番尊敬している歌手もさ高校中退してるんだ。飛び抜けて成功しているアーティストって中退してる人多いし、きつとそこには何かあると思うんだよ。注目されてる内に、デビューできるときにデビューしたいってのもあるし」

「そっか。前もそう言ってたよね……」

「でもまだ親からの許可ももらってないんだけどね。これから頑張らなきゃ——」

薄暗い舞台袖、仄明るいステージで何やら作業している人はいるけど、近くに人はいなくて、折原と2人きり。

今朝もデートのようなものだったし、1カ月前の僕であれば胸をときめかせていたはず。

だけど僕は眠れない夜が沁み込んだままの冷たい心で、自分の運命を呪っていた。

客席の照明が暗くなって、舞台の幕が上がった――。

お堅い式典でもあり、お祝いの華やかな式典でもあるので、迷いが感じられる中途半端な拍手がちらほらと起こる……。

まだ出番ではない僕は、その様子を観客席から眺めていた。出席番号順に並べられた退屈な席で目を細めながら……。

「これより、記念式典を開催致します。私は本日、司会進行を務めさせていただきます――」

始まってしまったか、という思いだった。

まだ急いで家に帰って黒いパソコンを使えば何かが変わるかもしれない……直前までそんな考えも微かにあったけれど、こうなったらもう止められない。これで未来は確定してしまった。

ここからは僕が泣こうが喚こうがどうしようもない。逃げ出したりをぶつ壊してしまおうなんていう度胸は無いし、最悪僕がいなくたって折原1人でステージに立って、アカペラでも歌うだろう。

「一同、ご起立お願いします………礼」

立ち上がり、周りに合わせて頭を下げた。「着席」の指示が聞こえると、周りよりも少し早く座って深く背もたれを使う。

司会の女の人の声も心地いいし、誰も僕なんか見ない暗がり。ちょうどいいから僕は目を瞑った。

それから目を閉じたり開けたりしながら、式典前半の挨拶の言葉を聞いた。

校長やらPTA会長やら市の教育委員会の偉い人の話は、どれも同じような当たり障りのない内容で、とてもじゃないが高校生が聞いていて面白い話ではない。

きつと僕以外も皆、頭では別のことを考えていたんじゃないかと思う。

でも、いつもの授業を受けるよりはずっとマシだから、平日が1つ潰れてくれて良かったといったところだろう。同級生連中も大きな市民ホールのエントランスや待合で騒いでいた。

僕も式典が始まってから時間が経つにつれ、なんだか楽になってきた。もうどうしようもないという状況から生まれる諦めだろう。自分を慰める方向に考えが完全にシフトした。

さっさとやって、さっさと帰ろう。そして帰ってから泣けばいいや。全部終わり、それで全部終わりだ。

もういい、もういいや——。

一通り式辞や挨拶が終わると吹奏楽部の演奏が始まった。ステージには立たず、これから祝いのパフォーマンスを始めますという数分のファンファーレだった。

それが終わると間髪入れずに、和太鼓がなり始める。洋から和のリー、トツプバッターである地域の伝統的な踊りをしている団体の演技である。

空気を震わせる和太鼓の音でにわかに関客席が沸き立ち始める。けれど、僕に彼らの演技を楽しんでいる余裕は無かった。次に演劇部の寸劇があつて、その次は僕と折原の番だからだ。

僕は和太鼓の音に紛れるようにして大ホールから出た。本当は演劇部の寸劇が始まってからでも遅くは無いのだが、座っていたくない気分だった。

重いドアを閉じると、驚くほど音が小さくなる。背筋を伸ばして深呼吸すると、楽屋には行かず窓がある場所を目指した。

歩きながらまた頭の中でもういい、もういいや——と唱えた。ホールの中を一周するのかもしれないくらい遠回りしながら、時には座り心地の良いソファに座らせてもらって、終わりを受け入れた自分を肯定した。

式典中の市民ホール、誰もいないその場所はメンタルを整えるのは中々良い場所だった。夢の世界に入ったようで、落ち着いた。

随分楽になった。これでもう大丈夫。さあやり切ろう……そう思えるようになってから、僕は楽屋に向かった……。

「あ、何してたの？遅いよ」

それでもやはり折原に会って目と目を合わせると、胸の中に好きが現われ出た。

「……ごめんごめん」

「ちようど今呼びに行こうとしてたんだけど、すぐ見つかった」
完全に消した……消すことができたと思っていたのにどうして……。

「あの……なんか迷っちゃってさ」

「もう舞台袖で待機しといてってさつき実行委員の子に言われたから
行こう、はいギター」

「ありがと……」

折原からギターを受け取るときに手が微かに触れた。また好きが
大きくなる――。

今朝も何ともなかったし、愛が裏返って憎しみにもなりかけてい
た。それなのにこうして真っ直ぐに彼女と目が合うとまた好きが生
き返り、溢れてくる。

もうすぐ最後の仕上げが始まって、それが終わればもう会うことす
らなかもしれないからなのか。

今しか話すチャンスは無いかもしれないから、僕の本当の気持ち
強く訴えてくるのだろうか。

「すー……はー……すー……すー……はー……」
「……………」

僕と折原は舞台袖に向かって廊下を歩いた。白色の飾りっ気
ない廊下だった。

最中に折原は発声練習だろうか、珍しい呼吸法をしていた。いつも
より背筋を伸ばしていて、見なくても真剣な表情をしていることが分
かる。

僕はそんな折原の後ろ頭をずっと見ていた。そこしか見れなかつ
た。

言いたい、今すぐ。好きだって――。

いきなりでも、声をかけてからでもいいから、言いたい。

言いたい言いたい言いたい言いたい言いたい言いたい言

いたい言いたい言いたい。好きだって言いたい。

僕は歩きながらずっと思った――。他のことは何もかも忘れて――。

そして曲がり角に差し掛かった時、折原がこちらを振り返ったので、僕は思わず口を開いた。

「あのさ――」

「え」

折原は短く声を出して、立ち止まった。僕が立ち止まったからだ。

「いや、その……」

しかし、自分でも何を言い出すつもりなのか分かってなかった僕は言葉に詰まった。

どうしよう、言うぞ、言っていないよな――。

「あ、軽音部の方。たぶん、あと5分もかからないくらいで終わるので急いでください」

「はーい」

そんな時現れたのは記念式典の実行委員だった。生徒会長も務めている眼鏡の女子が角から顔を出した。そうこうしている内に時間が経って舞台袖まで辿り着いてしまったのだ。

「すみません。遅くなっちゃいました」

折原が生徒会長と走り出したので、僕も小走りで後を追った。

舞台袖には思ったよりも人がいた。学校ですれ違ったことがある実行委員や先生を合わせて、6人。僕たちを見るとすぐに次の出演者だと分かったみたいで、舞台上上がる階段の所まで道を開けた。

眩しく感じるステージでは演劇部の人たちが良く通る大きな声で演技していた。舞台袖からでも伝わってくるこれから立つステージの緊張感。そのせいというか……おかげで、僕は冷静さを取り戻した。

「さっき何言おうとしたの？」

「ああ、何でもない。頑張ろうって……」

「ふーん……」

薄暗がりでは折原の隣に立って、彼女の顔を見る。何度も夢に出てき

たし、彼女の友達がSNSに上げていた画像をスマホに保存しているからにはや見慣れたいつもの顔だった。

花にたとえるならスズランだろうか……草原にいと遠くからじや目立たないけど、近くでよく見ると本当に綺麗な形をしている。純粹そうで幼さも感じるけど、芯の強さを感じる目。急に変なたとえを試してみたけど、しっくりきた。

そしてやはり、見ていると胸が苦しくなる――。

間違はなく、まだ好きだ。でも、そんなこと言えない。さつきは勢いで言ってしまうようになったけど言っていないはずもない。

だって今こんなタイミングで好きなんて言ってしまうたら、そんな無責任な言葉を放ってしまったら、どうなってしまおうというのだ。僕の1カ月が無駄になるし、折原にとっても大事なステージの前に彼女を動揺させてしまう。

うん、やっぱり駄目だ。さつき諦めると決めたばかりじゃないか。

僕はまた今朝と同じように暗い気持ちで心を包み、落ち着けるモードに入った。こうしていれば、好きもどこかへ消えていくはず……。

客席のほうからは音がしない。笑い声もないし、感嘆の声もないし、ざわつきすらも感じない。

演劇部の人たちはあまり観客にうけてないのだろうか。全く内容を知らないし、今も話を聞いていないのに勝手にそう思った。

もうさつきと終わってほしいんだけど、時間が長く感じられてなかなか僕たちの番が来なかった。

妙な気持ちになってきた僕は、実際今このタイミングで全てを話したらどうなるんだろうなんて考えながら、自分たちの番が来るのを待った……。

「好きだ」っていくら真剣な顔をして言っても、冗談だって思われるかもしれない……もしかすると、嘘だって笑われるかな……。

少なくとも黒いパソコンの話まですると、信じてくれないだろうな。

何でも検索できるパソコンなんて、誰も言葉だけでその存在を信じることなんてできないだろう。僕だって、もし自分で持つてなければ何を言ってるんだと笑ってしまう。

そんな妄想みたいな話が現実にある訳がないだろ……なんつって。

でも、本当にあるんだよな——ははは——。

僕は頭の中で笑ってみた。作り笑いだった。

これからある最後の仕上げが終わると、やっぱ黒いパソコンともお別れするのかな。まだちゃんとそう決めた訳じゃないけれど、なんとなく分かってるといいうか……。

決めるのはたぶん、黒いパソコンを手放すかどうかじゃなくて、どうやって手放すかになる気がするのだ。

僕はたぶん普通じゃなくなっているから。

今まではそれが良いことだとばかり思っていたけど、今回のことで悪い部分もあることが分かった。普通の高校生よりも知りすぎている。本来あるべき不安や苦勞が失われてしまっている。

今だって、黒いパソコンのことを考えると何だか気持ちが楽になっているし、おかしい男なんだと思う……。

「続いては軽音楽部の皆さんです——」

拍手の音と共に演劇部が舞台袖に入ってくるとすぐに、アナウンスが聞こえた。

「さあ、行こうか」

「うん……」

緊張は自分でも意外なほどしていなかった。

演奏には自信があった。昨日は30回は通して弾いたし、動画サイ

トでこう弾くとかっこいいなんてものを検索して練習したくらいだ。それにこれから始まるライブで僕はただの脇役で目立つことも無い。成功することも確信している。

「裕実——」

「がんばって——」

僕がギターの音を、折原がマイクの音を確認している間に折原の友達からはそんな言葉が飛んできていた。折原は自分の友達には今日ステージに立つことを言っていたみたいだ。

登場したときの拍手は少なかったから本当によく聞こえた。

実行委員の子が運んでくれた椅子に座って客席のほうを見ると、流石にふわりとくるものがあった。

でも先ほどから画面に映った一人称視点の映像を見ているような感覚があつて、まだ余裕はある。

「こんにちは。2年の折原です。1曲だけですけど、聞いてください。後の御祭り——」

準備が整い、折原の短い挨拶の後で、僕たちは最後にもう一度目を合わせた。

折原も緊張はしていないようだった。少し膨らむ頬に、これから自分の歌を見せつける喜びが詰まっているように見えた。

頭の中で1、2、3、4と数えてから——弦をはじき、ギターの演奏を始めた——。

「ああ、のし付けて返してやるわ 言葉も気持ちも そののけそののけ、私を通る」

がなるような声で始まった歌い出し——それだけで、客席が沸いた——。

こんなに瞬間的に盛り上がる観客を僕は知らなかった。しかも相手は記念式典の場にいる進学校の生徒と先生——。

「行き場がなくて彷徨い歩くように夜へ溶け出したっ そんな振りした私の体は夏なのに冷たくって」

1発目からエンジンを全開にするような曲ではあった。それにしても、やっぱりすごい。

すぐ隣で聞いているとマイクに乗せる歌声が——その大きさが響きが——鮮明に感じられる。鼓膜にダイレクトに注がれているみたいで、そこから体中が痺れる。

この折原の歌でしか味わえないと思われる感覚を今初めて味わっている人たちが、我を忘れて——思わず声を出してしまうのは仕方がない。

拍手や歓声は歌が途切れる度に前方から聞こえてきていた。

「爽快な気分 誰も味わえない私だけの景色 狼狽したあなたの顔
まだまだ忘れられない——」

「ああまた狙い通り 思惑通り この世界は私中心に回ってるの——」

「人生なんてこんなもんねー気付かぬうちに階段上ってたー 重いくらい持つてるからあれもこれも欲しいならくれてやるわ 私、もうどこまでも突き抜けるから——」

カラオケでも歌っていた、折原が好きらしい攻めたアーティストのヒットするきっかけになった曲。

歌詞は尖っているけど、曲調は華やかでノリやすい。サビの盛り上がりではボーカルの実力がストレートに発揮される。

本当は記念式典でこんな歌と言われる少々不適切な曲だった。でもきつとそんなことはもう誰も気にしちやいない。全神経を聞くことに集中させている。

僕はずっと手元だけを見てギターを弾いていた。そうしていないと、折原の歌声に圧倒されてミスをしてしまいそうだったから、必死

になっていた。

それでもかろうじで見える手前の席と、聞こえてくる声だけで、客席の熱狂っぷりは伝わってきた――。

ひたすら脇役として折原を引き立てることに徹した。おかげで、目立つと思われるミスは1度もしなかった。

そして2回目のサビが終わって、曲が静かになるタイミングで一際大きな拍手が起こった。

「やっぱ」

「うまー」

「ドツキリちゃうん？」

折原の声の響きが残る中に、一足早い感想の声も聞こえてくる。

ここからは僕の見せ場でもあった。大サビまでの間奏には少し難易度が高いギターの演奏がある。

毎晩のようにギターを抱えて、できるようになるまで苦労したコード進行。僕はここでもミスをしないように注意しながら、指に力を入れた。

なるべくそれがバレないように注意しながら頭でリズムを取って、ジャンジャカジャーンと掛け声にした音を脳内で叫ぶ――我ながら、上手くいった指捌き――。

けれど、直後の簡単な演奏になるタイミングで顔を上げて見ても、僕の方を見ている人などいなくて……僕の渾身の演奏は、折原の歌声のざわつきにも負けていた。

「星空の一部になったみたいな夜景　あなたがどれだけ素敵にエスコートしてくれても……もう止まらない　そののけ　そののけ　私が通る……」

演奏を始めてから初めて折原の横顔も見ることができた――。

笑って歌う曲じゃないから、あの歌った後に見せる笑顔をしてはいなかった。だけど見下ろすように上段の席を見上げて、僕にしか分からないくらいほんのり上げた口角。

その恍惚とした表情もまた僕の視線を釘付けにした。

同時に敗北感も僕の胸に訪れた――。

どれだけ僕が頑張ってきたかも知らないで、あんなに気持ちよく歌って——。

どれだけ僕が頑張ってきたかも知らないで、あんなに満ち足りた表情をしている——。

だけど、それでいい——君は知らなくていい——。

こんなに凄いんだもの——君はもつと広い世界に羽ばたくべきだ——初めから不釣り合いだったのかもしれない——。

君は僕なんて振り返らずにこのままどこまでも——。

最後まで納得いかなかった思いがようやく洗い流されたような気がした。

彼女がより高く飛べるように——何も思い残すことが無いように——僕も全力を尽くさなきゃ——。

また目線をギターに戻した僕は唇を噛んで、一心不乱にギターを弾いた。

泣き叫びたい気持ちだった。どこか人がいない自然のど真ん中で、思いつきり山や海にあたり散らかしたい。

でも良い気分だった。

ああもう本当にどこまでも行ってしまう、僕の気持ちも攫って、きつと君なら行けるから、僕の手がどうしたって届かないくらい遠くへ。心からそう思えた。

「人生なんてこんなもんね——これっぽっちも怖くない——何もかも勝ち取った——ああ人生なんてこんなもんね——

私の感覚が全て——大事な物は奪えないからあれもこれも欲し
いならくれてやるわっ私、もうどこまでも突き抜けるから——」

——気づけば終わっていたと感ずるほどあつという間に終わった
ラスサビ。折原の声が途切れるタイミングを見計らって僕も、最後に強く腕を振り下ろした。

息をしていかなかったみたいで、呼吸が荒くなる。手が痺れる感じは
歌が終わっても無くならなくて、それどころかさらに強くなった。

けれど、顔を上げるとそんなことを忘れてしまうくらいの景色が
あつた。

ちゃんと僕のギターの演奏が終わるのまで待つてくれていた観客
たちが一斉に拍手を始めた。前列の者が立ち上がったから、自分もス
テージを見続けたいと立ち上がっていく、自然と起こるスタンディン
グオベーション。

巻き起こる音は折原の歌声にも負けないほど激しく大きい。

1年生も2年生も男子も女子も先生も、どこにいるかは見つけられ
ない僕の友達や知り合いも——立ち上がって興奮している。

演奏中、ラスサビから観客の声が雑音になって、折原の歌声も途切

れ途切れに聞こえた。なのに指に触れる弦の感触は気持ち悪いくらい鮮明になって、僕は練習でもできたことが無い最高のパフォーマンスができた。

そのくらいに集中していた——。そこから帰ってきた僕を待っていたのは煌びやかで圧巻で——。

御満悦な客席を見ると、僕の心も満ち足りていった。全ての感情をギター之音に乗せて吐き出したことで、空になった心へ津波のように流れ込む。

やり切った——出し切った——。もう喜びと達成感しかない。

今、僕はこれだけたくさんの人を幸せにした。そしてこの先も僕の方で夢への特急切符を手に入れた折原がもつともつとたくさんの人を幸せな気持ちにするだろう。その人の人生を彩っていくだろう。

もう、これ以上無い……これ以上無い……。

折原の様子が気になって、はっとしたみたいに横を見る。

彼女はやっぱり笑っていた——。目を細くして、一切の曇りなく、眩しいくらいに——。僕が惚れるきつかけになったあの天真爛漫な笑顔だった——。

これだけの歌を披露したのだから、折原がまたこうして笑っているのは当然——だけど、折原を見た僕は戸惑った——。

目が合っているのだ——。

折原は客席のほうじゃなくて僕の方をじっと見ていた——。体の向きもこちらにして真っ直ぐに——。

え、どうして僕を——。

そして、彼女は何かを口にした。マイクに乗せていないから拍手の音に掻き消されたけど、僕に向けて口を動かして……何かを言った。

「軽音楽部の皆さん。素敵な演奏ありがとうございました——」
何を言ったのか考えていると、司会進行の声が聞こえてきた。数秒見つめ合っていた僕と折原は客席に向かって頭を下げる。

姿勢を戻すと、さらに大きくなった拍手を背中にして舞台袖のほうへ歩く。暗がりにはいた実行委員や先生もこちらを向いて拍手していた。

なんだか大物ロックバンドのカリスマギタリストにでもなったかのような光景。たぶん僕の人生にもう2回目は無い。しかし、そんなものを味わっている場合ではなかった。

僕はさつき何て言われたんだ——。それが気になって気になって仕方がない——。

折原から言われた言葉を聞き取れなかった。確かに何か言ったけど、口の動きだけでは分からない。

短い言葉だったし、タイミング的には「ありがとう」……だったか……でも、ちよつと違っていたような……。

舞台袖への階段を下りたところで止まって、折原のほうを振り返る。

彼女は最後まで客席のほうへ手を振っていた。僕よりも優雅に歩いているから、もう少し帰ってくるのに時間はかかりそうである。

次にステージに立つ人達も待機しているようなので、僕は先に出口に向かう。

「凄いね軽音部。先生感動したよ！」

「あ……えつと、ありがとうございます……」

途中、耳を塞ぎたくなるくらいの声で先生に褒められても僕は前だけを見て、ふらつくように進んだ。

ドアの所には高校のOBらしい音楽家やボーカリストとして活動する人たち。沸き過ぎた会場には入りづらそうで、その大人たちの顔は少し引きつっているように見えた。

廊下に出て、すぐ横の壁に背中を預ける。そうしないと、立っ

られそうになかった。1ヶ月間張りつめていた糸が切れてしまったみたいで、体中の力が抜ける。

これで終わり。僕は役目を果たした。はあ……緊張はしていなかったはずなのに、最後で随分力を使ったみたいだ。

肺の中を全て吐き出すように息をついた。そうした後で首を振ったけど廊下に人はいなかった。冷たい空気の廊下に僕1人だけ。やはり防音設備がしっかりしているようで、小さくなった音が程よく包み込んでくれる

しばらくそうしていると、荒くなった呼吸は治まってきた。ただ強くなっている鼓動はまだ耳まで届く。

折原が言った謎の言葉のせいだ。聞き取れなかったのに、あの笑顔と一緒に送られたせいかな、心がざわつく。

「……すごかった」

「……ありがとう」

折原はまだ廊下へ出て来ない。舞台袖にいた実行委員は女子ばかりだったからだろう。

僕はもう次に話せるタイミングがきた時にステージの上で何と言ったかを聞くことは決めていた。既に冷静じゃないし、今なら何でもできる気がするからだ。

告白は諦めたのだから、このくらい許してほしい。

この心のざわつきの理由が正しければ、言われた言葉はあれだと思っただけ、もう1度ちゃんと聞きたい。ハッキリさせたい。

舞台袖へのドアの前に立って折原を待った。

程なくして彼女が廊下へ出てくる。また興奮する人たちへ手を振っていた。

「ねえ、さっき何て言ったの？ごめん俺聞き取れなくて」

折原がこちらを向くまで待って、ドアが閉まるとすぐに言った。自然に明るく言えた。

「え？」

「歌い終わった後さ、こっち見て何か言ったじゃん」

「ああ、好きだよって——」

その言葉はさらっと届けられた。折原はいつも簡単に僕の心を貫く。

「へ？……あ、え……？」

だけど、今回は流石の折原も言い終わった後で真面目な顔になって……僕から目を逸らし、廊下の先のほうを見た。

でも数秒後にはまた笑顔で振り返って――。

「ねえ、このまま抜け出して打ち上げ行こ。私もう戻りたくない」

「好き」だと言われてしまった。確かに聞いた、聞き間違いなんかじゃない。

僕の中だけにあると思っていた物が、不意に撃ち込まれて体内を目まぐるしく駆け回る――。

「……………え？い、今から？……………このまま？」

「うん。いいですよ。たぶん何も言われないし」

しゃんとして受け答えしなきゃいけないのに、口がパニックを起こしているみたいで上手く動かない。

そのせいでさらに頭がオーバーヒートしてしまつて…………。

「はい、行きましようか」

僕はなんか敬語になつた――。

「――ぶはーっ。めっちゃ気持ちいいね。最高だ」

ホールの外へ出るなり折原が言った。確かに澄んだ空気だった。

「うん。今日は良い天気で、空気がおいしい…………」

「え？何言つてんの？」

「へ？…………いやだつて折原さんが空気の話をしたんじゃ…………」

「私はさっきのライブが最高だったねつて意味で言ったの。それ以外なくない？」

「えつと…………つまりなんだ…………うん、凄い歌だった…………よね」

「ちよつと落ち着いて。なんか変だよ」

「ごめんちよつと落ち着かせて。俺なんか変だわ。頭がおかしくなつてる」

僕は折原から少し離れて、人生で1番くらいの全力深呼吸をした。大きく素早く数回繰り返し、頭では落ち着け落ち着けと唱える。

「あはは。大丈夫？」

「うん、なんとか。だつてさ…………折原さんがその、好きなんて言うから」

胸の中の言葉をどもらずストレートに話せるくらいは回復した。

けれど「好き」という単語を言うときは、また鼓動が跳ねた。

「そうだね」

「あれって……本気だったの？」

「歩きながら話そうよ。どの店行く？」

「うーん、俺と折原さんなら……やっぱラーメン屋か中華屋みたいなどこかな。打ち上げならもうちよつと良さげな店か、カラオケでも……」

「いや、私ラーメンがいい。前行った激辛のどこね」

「え、激辛。でもまあいいや今は……どこでも」

僕たちは市民ホールからビルが並ぶ通りへ向かって歩き出した。

「それでその……さっきの話は？」

「私が君のこと好きだって言ったのが本気かどうかって話？」

「うん」

「本気だよ。言っちゃダメだった？」

「いや、全然そういう話じゃなくて——」

「だってさ、君も私のこと好きだって言おうとしたでしょ？ステージ立つ前に廊下でさ」

「ええ………何で、それを……」

「君も私のこと好きでしょ？」

「……えつと………うん、そうだね」

「ね。一旦この話禁止。店に着いてからにしよ」

横断歩道の向こう側は人通りが多かった。だから、折原がこの話をやめようと言ったことはすぐに理解できた。

真剣な話をする雰囲気だから僕もごまかさずに認めてしまったけれど、自分でも今何を言っているのかよく分からなかった。

店に着くまではどこか余所余所しい会話をした。

「道こつちで合ってるよね」とか「気づけばもう3時過ぎなんだね」とか。当たり前障りのないものばかり。

一緒にライブまでしたのに、初めてのデートの時よりも気まずい空気が2人の間にはあった。

沈黙も多かった……。おかげで僕は、僕を取り戻すことができた。落ち着いたし、この先どうするか……。その答えも胸に決めた――。

「――着いたね」

「うん。やっぱここまで来ると店の外からでも辛い」

「ジヨロキアラーメンまだあるかな？」

「さあ……。どうだろ、まだあるんじゃない？」

昼時でも夕飯時でもない中途半端な時間だったから、のれんをくぐった店内に人は少なかった。僕たち2人が入店したときも、店員が洗い物でもしていたのか……。奥から出てきて案内されるまで時間がかかった。

好きな席を選ぶ状態だったので、僕たちは角の席を選んで座った。

「このジヨロキアラーメンってまだありますか？」

「すみません。ちよつと前に最後の1杯が出てしまいました……」

「そうですか。いや、全然大丈夫です。別の選びます」

「ごゆっくりどうぞ」
折原と店員が互いに小さく頭を下げて、店員は厨房のほうへ消えていく。

激辛ラーメン屋と言ってもこの時間なら匂い以外はカフェと変わらない。落ち着いて話すことはできそう。

だけど、折原と向き合って座った僕は何から話そうか迷った。

「……………」

「……………まずは、乾杯？」

沈黙を破ったのは折原だった。

「水で？」

「じゃあまずは注文か」

「そうだね」

「……でもどっちにしろお酒ではないんだよ」

「たしかに……じゃあ」

僕たちは水が入ったグラスを控えめに合わせた。そして、口の半分にも満たないくらいの水を飲む……。

「何で私が君の気持ち分かったか知りたい？」

「ああ……うん、聞きたい」

「なんとなく」

「なんとなく？」

「うん。てか最初からさ、そんな感じだったじゃん。好きでもないのに女子にいきなり連絡とらないでしょ」

「それはそう。まあ……正直遠回しに好きだと言ってたよね俺」

「それでさ……私がネットで成功し始めたの報告したら最初は喜んでくれてただけど、だんだんわざとらしくなっていつて、私が高校中退して東京行こうかな……なんて言った時にはもう……悲しそうな顔に出てたよ」

「え、そうだったかな……そうだったよね」

僕はまた正直に認めた。けれど、先ほどと違って動揺したり恥ずかしくなったりしなかった。

「でね。一体いつ告白されるんだろうって思ってたから、さっきライブ前に声かけられたとき分かったの」

「なるほど……」

「私は実は最初、この人に告白されてもOKしないだろうなって思ってたんだ……でも今は好き」

「……おう、そっか。そろそろ頼むもの決めよっか」

またしれっと感情を揺さぶられた僕は耐えきれなくなって、一旦話題を逸らした。

「私はジョロキアラーメン以外で1番辛いやつにしよっかな。この中だったらどれだろ……」

「うーん。どれも真っ赤だけど……」

「店員さんに聞いてみよかつな。あと、ヨーグルトドリンクもまた欲しいでしょ」

「……………折原さんはさ、この先も歌っていくんだよね」

しかし、逃げていてはダメだと思った僕は、今度はこちらから踏み込んだ。

「え？」

「折原さんはこれから……………また今日みたいにさ、ステージに立ちたいんだよね」

「うん。今日はもう最高だったから、また何回でも経験したい」

「そっか……………」

「そう……………もつと大きなステージ目指して、どんどん歌っていききたい……………だから、だからさ……………好きだけど、さよなら」

僕はその言葉を聞いて、顔を半分隠していたメニューを置き、頷いた。

「さよなら」と言われても涙は込み上げてこなかった。そう言われることが分かっていった。

付き合えないと黒いパソコンにもはつきり言われていたし——。
なにより、僕も同じ答えだったから——。

「俺もそうなんだ。好きだから……本当に好きだから、さよなら」

僕は笑顔で言った。言い始めた瞬間から胸に詰まっていたものがすつと消えていく感覚があつたから、自然と頬が緩んだ。

「え、君もこれでいいの?」

「うん。これがいい」

「私色んなことしてもらつてさ、今日のライブも君がいなきや絶対やってなかったから凄く感謝してて、それでもやっぱり出ていきたいからちゃんと話して謝らなきゃなって……」

折原は深刻そうな顔をしていた。微笑んだ僕と目が合った時は分かりますぐ目を逸らした。

「本当にいいから」

「本当に?結局私は勢いのままステージの上であんなこと言っちゃつたし、さよならつて言つたら絶対悲しむと思つたのに」

「今はもう君と付き合いたいじゃなくて、君に成功してほしいとしか思つてない。ほら、何食べる?」

僕はまた俯いた折原にメニューを近づけた。

「私はこれかな。辛そうだし……」

「じゃあ、俺もそれにしよ——」

それから僕たちは辛さ10倍と銘打たれた、何を基準に10倍か分からぬラーメンとヨーグルトドリンクを注文して——。

運ばれてくるのを待つ間は絶対に人前ではできない会話をした。

「ねえ、聞いていい?」

「ん?」

「どうして私のこと好きになつたの?」

「えっと、一目惚れかな」

「ええ、嘘だ。じゃあ1年生の頃から好きだったってこと？」

「いや、2年になってから」

「じゃ一目惚れじゃないじゃん」

「笑顔を見た時にかわいいなって思ったんだよね」

「へー……そうなんだ」

「折原さんは何で俺のこと好きになってくれたの？」

「私はけっこうマメな人が好きで、色々計画とか立ててくれる人がいいなって思ってたし、私がずぼらだから」

「それだけ？」

「あとはやっぱり話しやすかったから、一緒にいて楽しかったから気づけばみたいな」

僕も今までで1番折原に対して強気な態度を取れた。こんなに胸の中を曝け出したのは初めての経験だったけれど、何だか1度扉を開いてしまえば次々と素直になれた。

前に食べたジョロキアラーメンとの違いが分からない激辛ラーメンが運ばれてきてからは口数を減らした。

笑って話している余裕がないから、麺を咳き込まないようにすることへ神経を注いだ。

激辛料理はストレス解消に効果があるとも聞く。確かに全身から出てくる汗が何もかもを浄化していくような——そんな感覚もあった——。

「あー辛かったーおいしかったー」

「ごほつごほつ、辛すぎた。前のジョロキアラーメンと変わんなかったことない？」

「汗の量は同じくらいだね」

「うん……ああ、ベロが痛い」

僕は舌に浴びせるように勢いよく空気を吸い込んだ。

「あのさ、最後にもう1つ聞いてもいい？」

「いいよ」

「この1カ月さ私の為に何かしてた？」

「え？」

「君に悩みを打ち明けてからの1カ月はなんか怖いくらいに上手くいったから、もしかしたら人の姿をした神様なんじゃないかなって」冗談を言うように笑いながら、折原は言った。半分本気で言っているのは目が笑っていないから分かった。

「何もしてないよ……でも……」
「でも?」

「あ、いや動画をSNSで拡散したりはしたかな」
「……………」

折原は僕の顔を覗き込むように目を大きくした。

「……うーん、折原さんにはいつか言ってもいい……かも」

「何それ? どういうこと?」

「……………いや、やっぱダメだ。絶対言えない」

瞬時に折原が謎の機械に自分の夢を叶えてもらったと聞いた時に、どういう気持ちになるかが頭を回った。

「ええ、何かあるの? 隠さずに話してよ」

「大したことじゃないんだ。今の言葉は、忘れて。話せないから」

「……まあいいや、じゃあ最後にありがとうだけ言わせて。君が私にとって幸運なのは確かだから、ありがとう」

「……………うん」

「いやあ、それにしても今日は本当に最高だったなー。今すぐもう1回やらせてくれないかな」

折原はスイッチが切り替わったようにはしやぎだして、手を組んで祈るような仕草をした。

「知らなくていい——知らなくていい——知ってしまうと辛いこともあるから——」。

僕たちはまた会う約束をしてから店を出た。離れていても連絡は取り合おうと折原が言ってくれたから、僕は「もちろん」と答えた。

この先もずっと友達……それで良かった。なんなら、1番良い結末だったと今は思う。

僕とは釣り合わないと感じてしまったから、付き合ってたって胸を張って隣を歩くことはできなかつただろう。両思いだけど、付き合わ

ないというのが一番納得がいくし……幸せだ……。

今は、まだ……。でも、いつか……。

暮れゆく夕日、ひとけのない小さな駅前西口広場。別れ際に2人して手を振って、彼女の影すら届かなくなった時、視界が滲んだのはきつと……。

僕にとって今日が、瞬きを忘れるほど美しかったから……。

word59 「黒いパソコン 作り方」①

記念式典の日から1週間とちよつとの時間が過ぎた――。

春休みに入る前の最後の週末、土曜日である今日僕は……

黒いパソコンを手放す前の、最後の仕上げに取り掛かろうしていた――。

桜の開花時期のニュースなんてのが聞こえてくる季節、脱いだカーデイガンがかけてある椅子に座り、僕は黒いパソコンと向き合っていた。黒いマウスも隣に置いてある。

今日も1日1回の検索を使用しようとしていて、検索ワードもかなり前から決まっていた。なのに僕はEnterキーを押すのに時間がかかっていた。

――年明けに僕は「黒いパソコン 材料」と検索していた。

そんなワードを検索した理由を説明するなら、時をさらに遡り、黒いパソコンを手にして2日目のことから話さなければならぬ。僕はその夜「検索 無限」と検索して「100日後に分かります。」という答えを得ていたんだ。

それから100日と少しの時間が過ぎた日に、黒いパソコンを増やすことができれば無限に検索できるといふ答えに辿り着いて……そして、今度は「黒いパソコン 材料」と検索した。

作ることができれば増やせるという理屈である。ショッピング検索を使ってそんな物がこの世に存在するのかどうか確かめた。

結果はというと……存在した。

黒いパソコンを使えば大抵はそうであるが、これまたあつげなく、文字を入力してEnterキーを押すだけでその存在が確認できた。

画像と共に画面に表示された黒いパソコンを構成する外部のパーツと内部のパーツ、それらの値段は2つ合わせても100ポイントだった。僕が今までショッピング検索を使って見た商品の中では、高い方なんだけど安い。

9999ポイントとかゲームのやり込み要素みたいな値段でもおかしくないくらいの物なのに、割と現実的に買えるお手ごろな値

段。

そして、記憶を消す装置なんて取り寄せた分を差し引いてもちょうど数日前に100ポイント貯まった僕は、既に2日かけて黒いパソコンのパーツを入手していた。

今は段ボールに入って机の横に置いてある……。

僕は段ボールを持ち上げて、それも黒いパソコンの横に置いた。黒いパソコンを解体した物が入っているので当たり前だけど、重さは黒いパソコンと同じくらいで、一般的な同サイズのノートパソコンよりも少し軽いくらいだ。

中を開けると、個別にビニールに入った部品1と部品2を取り出す。

驚くことに黒いパソコンを構成するパーツはたった2つだけだった。黒いパソコンの形をしていて裏側が開く外部パーツと……もう1つは内部パーツであるらしい謎の物体X。

これに呼び名を付けるならとりあえずそうとしか言えない。ただ黒い何かの塊にしか見えない。サイズはちょうど板チョコくらいで、本当にただただ黒い……黒いパソコンよりも真っ黒な物体だ。

またこうして取り出してみても、それ以外には何の情報も得られない。

ただ持っている不安な気持ちになる。光を全く反射しないから、世界の一部に穴が空いてしまったようにも見えるし、おそらくはここに何もかも答えが入っていると思うと……。

一応固定する用のネジもあるけど、何らかの回路や配線は一切ない。まあ、何度も僕を驚かせてきた黒いパソコンだから、中を開けたら謎の板チョコみたいなのが入ってるだけでしたのほうで、逆に得体が知れなさすぎて納得いく気持ちもある。

どんだけ複雑そうな機械でも全ての答えが詰まっているなんて考えられないから、このくらいふざけているほうが逆に笑ってスルーできるのだ。

「これを組み立てれば終わりか……」

僕は目の前の機械に語りかけるように言った。

僕の想像が正しければあれがああなって、もう今日にでも別れの時
はくる。

たぶん検索しなくたって、その気になれば作れそうなくらい簡単な
組み立て。10分もかからないかもしれない。それで本当にお別れ
……。

僕にとって黒いパソコンは話し相手や相談相手でもあった。超高
性能なAIが搭載されていることは疑いようもないし、ただ明日から
何でも検索できないようになるだけじゃない。

心を許した相棒との別れ――。

そう感じるから、僕はもう少しEnterキーを押したくない気持
ちがあった。

この1週間とちよつとの間はずっと、黒いパソコンを手放さなきゃと考えながら生活してきた。

常に明確な目標を持っていないと、せつかく決心できたあの日の気持ちも忘れて、心が揺らいでしまうかもしれないから、自分で自分に言い聞かせ続けてメンタルをコントロールした。

具体的な行動としては思い残すことが無いように、黒いパソコンで検索しておきたいことを探して、決めた――。

まずは折原の夢を叶えるための作業がちゃんと上手くいったのかを確認した。これがちゃんと黒いパソコンが思い描いた計画通りなのかを聞いておきたかった。何度も検索しながら行ってきたけれど、念には念を入れて。

その答えはイエスだった。「お疲れさまでした。」と簡単な労いの言葉も黒いパソコンからもらった。

だから次の日からは、検索してみたいことをまとめたノートを広げて、そこにあるいくつもの検索ワードに斜線を引いていく作業をした。

もう既に検索したワードを赤い線で切っていくのはもちろん……その作業の中でこれは最後に検索しておきたいというワードを探す……。

というよりは、斜線を引かなかつた検索を諦める理由を探した。

まだ検索したいことが無いかを探すんじゃないやなくて、もう全部検索しなくて平気だと思えるかを確かめたのだ。だから、全てを切り倒すつもりで作業に望んだ。

それでも、いくつかはどうしても切れないワードが現れるかと考えていたけれど、最終的には黒いパソコンを使うことなくノートに書かれた全てのワードに斜線が付いた。

いつか勇気を出してやろうと思っていた僕の未来についての検索だけは斜線を付けるまでに時間がかかったが、それもやめた。

詳細な未来の検索はやらないで即決定だったけど、ちゃんと僕の将

来に人並みの幸せがあるかとか、少なくとも60歳くらいまでは生きていられるかくらいは検索しておいた方がいい気がした。

そういうものが保証されれば黒いパソコンを手放す意思がより強固になる気がしたし、この先の生活の活力になる気もした……。

でも、答えがノーだったときに話が変わりすぎると思ってたやめた。

ノーだったら黒いパソコンをもう手放す機会は来ない。聞かなくてもこんな選択ができた僕の将来は明るいし、自分で自分の力を信じたい。

もし黒いパソコンを手放した次の日に僕が交通事故で死んだとしても、あの世で後悔しないと思う――。

――と、そのくらいの覚悟をしたはずなんだけど。

僕はEnterキーの周りを人差し指でなぞりながら、咳と溜め息の中間みたいな吐息を吹く。

頬杖をついていた手を崩して、ズボンのポケットに手を突っ込んだ。スマホを取り出し、慣れた手つきで短いパスワードを入力すると、画像フォルダを開いて……1枚の画像を表示する。

最も最近撮った写真だった。夕日で赤く染められた山のようにそびえる雲……その周りをとぐるを巻くように飛んでいる龍が映っている。

小さな画面でもひっくり返ってしまうほど迫力があるが、撮影者の僕以外はCGにしか見えない画像だった。

ノートの検索ワード全てに斜線をつけたものなにも検索していない訳ではなかった。

ショッピング検索のポイントを稼ぐ為、前から検索したいことが無かった日にやっていた「今まで ○○した回数」という検索をする中で、ノートの中から1つだけ以前に行った検索をしていた。

それが「ドラゴン 見る方法」。黒いパソコンを手放せばもう2度と見ることはないだろうから今回は撮影法まで検索して……結果がこの画像だった。

既にホーム画面の壁紙にも設定されていた竜の画像。撮影した日に僕は、これからはこの画像を見る度にやる気を引き出そうと決めて

いた。

数日前の考え通り、龍の目を見ていると感動が思い出される。山の上で見た黄金に輝く龍の体、幻のように消えていく儚さ。市民ホールで見たスタンディンググオベーションと比べても遜色ない衝撃……。

僕は竜の画像から力をもらうと目を閉じて、その力を人差し指に集中させた。

寂しさもある——でもやはり、やらなければ——。

腕を天井に伸ばし、振り下ろす。「黒いパソコン 作り方」と入力されたパソコンのEnterキーは、今までで最もスタイリッシュに押した。

word60 「黒いパソコン なるべく優しい人へ
送付」①

「その作業はすごく簡単です。まずパソコン本体の裏側を開いて、そこへあなたが板チョコみたいだと思っっている黒いパーツを入れるだけです。表裏も向きもありません。あとはネジを締めるだけ。もちろん、魔法をかけるなんて工程もないから、魔法使いじゃなくてもあつという間に作れます。」

黒いパソコンを手放す前の仕上げとして、最後から2番目の検索として選んだワードは「黒いパソコン 作り方」。

既に入手した黒いパソコンの組み立て方を教えてもらって、もう1つ黒いパソコンを作るための検索だ。

僕は検索結果を見て鼻で笑いながら、言われたとおりに作業に取り掛かった。どうせそんなこつたらうと思っていた。

パソコンの形をした外部パーツを折り畳んだ状態で裏返して、蓋を外す。すぐに外れる状態だったので前にも開けて見たことがあつたが、すつからかんで何も入っていない。

ビターチョコを煮詰めたような板チョコ、物体Xを再び持ち上げる。

今まで黒いパソコンを使っている、内部のパーツがこれだけだと思わなかったくらいなので見た目よりは重い。重量も質感も金属っぽさはある。

黒いパソコンの本体はガワよりもこつちのような気がする。取り寄せるのに必要なポイントもこつちのほうが高かつたし……。

しかし、こんなもの一体どこに売っているのだろうか。シヨツピン
グ検索のルール上、宇宙のどこかには売っているはずだが……。

なんとなく表に見えるほうを探してひっくり返しながら、言われた通りにただ外部パーツの中へ入れてみる。すると、強力な磁石でくつつくように物体Xは固定された。

少し斜めになったのが気に入らない。けれど、1度くつついてしま

うと、うんともすんとも言わなくなってしまった。これ以上やったら壊れてしまいそうなくらい力を入れてもダメ。

だから僕は諦めて蓋を閉じた。かなり気持ち悪いが致し方ない。

昔壊れたゲームを解体したときに使ったまま、引き出しの中で放置していたドライバーを取り出す。ネジを左手で固定しながら、ドライバーを垂直に立てた――。

僕の机の引き出しは大体とりあえず入れておこうで片付けられたガラクタ達の集まりだった。他の収納も表面上綺麗だけど、中は汚い。

黒いパソコンを手に入れてからは探し物には困らなくなっていたけど、明日からはまた引き出しの中をガサゴソ漁ることが増えるんだろうな。そんなことを作業をしながら思った

――上下に4つずつと、左右の真ん中に1つで、計10個のねじを締め終わる。これだけでも黒いパソコンの完成らしかった。

表に返してカバーを開いてみると、既に起動していた。見慣れたというかどのパソコンでも見れるパスワード入力のような画面は黒いパソコンのものと全く同じ。

初期設定もしていなければ、何の保証も入っていないしウイルス対策ソフトもインテルも入っていない。けれど、説明が無かったからきつともうこれで完成のはず……。

一度やる気が入った僕は、続けざまに次の作業に取り掛かった。

もしも僕の想像通りなら、あの日検索を無限にする方法の謎に対して出した答えが正解ならこれで――今日2回目の検索ができるはず――。

「黒いパソコン なるべく優しい人へ送付」

僕は指紋等の汚れが全くない新しい黒いパソコンのキーボードを叩いて、最後となる予定の検索ワードを入力した。

word60 「黒いパソコン なるべく優しい人へ
送付」②

これが最後の検索になる……よな……。

うん、検索できるなら……もう黒いパソコンを使うことは無い……。

さすがに僕は一旦腕を止めた。でも検索できるかどうか半信半疑の気持ちもあつたから、止まり切ることは無かった。

もしかしたら2つの黒いパソコンを使っても、1人の人間が1日2回の検索はできないかもしれない。可能性は充分にあるから、Enterキーへ指を伸ばした。

けれど画面は切り替わって、すぐにEnterキーを押したことを一瞬だけ後悔した。

でも大丈夫、目は逸らさなかった。

検索中のグルグルを見ながら、履歴の消去とかも同時に行われるのか、送られた相手側にはどのようなように届くのか、その辺りも教えてほしいという願望を頭の中に維持し続けた――。

「その作業もすごく簡単です。このパソコンを誰かの元へ送るには、送りたい相手をイメージしながら電源ボタンを押し、押しのまま34秒間待ちます。誰でもいいから優しい人へ送りたい場合は、その通りに頭の中で唱えながら電源ボタンを押ししてください。そうすると同時に、どこかの優しい誰かが最初に発見する場所へ、このパソコンが転送されます。ここで注意点、セットになつていたマウスも一緒に送りなければ、ちゃんと一緒に送るイメージをしてください。ちなみに、履歴は自動で消去され、このパソコンをどこかへ送る作業はパソコンを使用しての人以外もできます。」

僕は画面が切り替わって文字が出るところを見るとまず、自分の仮説が正しかったことに頬を緩ませた。やっぱり黒いパソコンが2つになれば、2回検索できる。

この方法ならいつか無限に――。

よだれが出そうになつたので口元を手で押さえながら、表示された文を読む。何も難しいことは無く、小学生でも読解できて、パソコンでの作業を邪魔する猫でもできそうな方法だった。

黒いマウスの件は正直失念していたというか、このノリならどこかからひよつこり出てくると思っていた。そして、文の最後ではまた黒いパソコンに関する情報を得られた。

別れの悲しさも感じる、最後の仕上げの最中——。そんな時でも僕は検索をする時は何もかも忘れて、誰も知り得ない情報を楽しんだ。思えばいつもそうだった。黒いパソコンはこれまで一体何度僕に、この気持ちを与えてくれたのだろう——。

この部屋の、この机の上から送るのでいいのかだけ迷った。見晴らしのいい山の上とか、相応しい場所でやったほうが華やかに別れられる気がしたから。

時期的にもう少し待てば、桜が散る駅のホームでとか定番の別れ場所ができるし、1回そういうドラマみたいな別れ方してみたい。

けれど、黒いパソコンを2つも持って外に出る危険性を理由に、こ以外しかないという考えに至る。

手首を回して僕はまず、新しく作ったほうの黒いパソコン2の電源ボタンだけを押しした。検索結果の通りにイメージしながら——。

確かに電源ボタンを押すと、僕は目を閉じる。

34秒という秒数を数えたりはしなかった。だから、凄く長く感じた。網戸から入ってくる春風を受けながら、感覚的には34秒経っても軽いボタンは指先に存在し続けて……。

何か間違えているかもと思つて目を開けると、その数秒後に黒いパソコン2は視界から消えた。

指が机の上に落ちる。レースのカーテンはずつとこちらになびいていた。風すら残さず黒いパソコン2は消え去った。

Last word 「さようなら」①

残った元祖黒いパソコンに目を向けてみる。キーボードの右隅に、いつからか大きな脂っぽい汚れがある。仲間が消えたというのに、相変わらずワードボックスだけの画面を映し続けていた。

僕はそんな無愛想な黒いパソコンをウェットティッシュで拭いた。こっちは人に送る前に綺麗にしたほうがいい――。

以前はお菓子を食べた手で触らないようにするくらいの努力をしていたが、動画検索ができるようになってからは、黒いパソコン使用時における手の状態の縛りは無くなった。外出から帰宅してすぐ使うことも多かった。

だから入念に――。液晶画面からキーボードの隙間、裏側まで拭いた。10枚くらいのウェットティッシュを使ったが、後半になっても使ったウェットティッシュが黒く汚れた。黒いボディで気づきづらかっただけで、思ったよりも汚れていた。

最後に普通のティッシュで湿り気を取ると、山になったゴミを丸めてゴミ箱に投げる。

いよいよ2つ目というか1つ目の黒いパソコン、元祖黒いパソコンともお別れである。

2つ作ったからといって、1つ残したりはしない――。なぜどちらも手放すのに黒いパソコンを2つにしたかというところの方が「面白いから」である。

端的に言えば面白いからで、それ以上の理由もそれ以下の理由もない。

この遠い宇宙でも未来でも検索できる黒いパソコンを使うことは本当に面白い。僕は何度も笑ったし検索結果に目を輝かせた。

それは黒いパソコンを手放す為にした送信方法の検索のときですら同じで、作り方の検索でもそうだった。

きつと僕以外の誰が使っても面白いだろう。この世界に知りたくても知れないことが全くない人なんて果たしているだろうか。誰しも好奇心が湧く対象があるはずで、どうにかしたい悩みもあるはず

だ。

つまり僕はお人好しで、この面白さを、この感動を味わう人を増やすために、黒いパソコンを所持する人を増やしたい。だから、黒いパソコンを増やした……。

と、ただそれだけな訳がない——。

僕は自分がまだ楽しむ為に、黒いパソコンを増やしたのだ——。

だって1つでもこんな面白いパソコンが2つになったら……この先の世界は一体どうなると思う……きっと僕の知らない、想像もつかない未来が待ってる。

僕は先ほど黒いパソコン2を誰かに送るときも優しい人という条件だけでなく、面白い人という条件もイメージしていた。

僕がイメージした通りの人の元へ黒いパソコンが届けば、きっと僕とは違う形で検索を使って、この世界をより良いものにしてくれるはず。

僕にはない発想で、まだこの世には無い……知らない何かを生み出す。それは現時点では存在すらしないから、僕が黒いパソコンを所持したままでは絶対に経験できない何かだ。

知らなければいいこともある、知らないことがあるからこそ人生楽しい部分もある……というのは折原との件で身に染みて分かったことだ。実際、黒いパソコンを使わずに折原とデートしたあの時が僕にとって人生最高の瞬間だった。

折原がデートの誘いを承諾してくれた時、顔を合わせて笑ってくれた時、カラオケで歌を聞いた時、あの時の胸の高鳴りは一生忘れられないだろう。今でも思い出すと鼓動が大きくなってくるくらいだ。

だから、僕はその知らないことを増やしたい——。またあの時の感情を味わってみたい——。

先が見えないことって面白いのだ。黒いパソコンと出会わなければ、この事実を強く意識することは無かっただろう。

僕が今抱いている感情も、やろうとしている行動も、黒いパソコンを使ったことが無い人から見たら信じられないものかもしれない。

でも僕は確かに、もう既に、未知が待つ明日以降の日々に胸を膨ら

ませている……。全知である黒いパソコンを手放す……。

そう、僕は僕が楽しむ為に——知らないことを減らせる黒いパソコンで、知らないことを増やす——。

「で、いいんだよね……」

頭の中の整理が終わると、僕は言った。

自分で自分に問うてみたのではなくて、目の前の光沢を取り戻した黒いパソコンに言った。

自分の中ではもう迷いはないけど、一応最終確認として自分よりも優れた先生や先輩に肯定を求めるような気持ちで言った。

どんなに会心の出来だったって、他人から見れば駄作かもしれない。い。

でも黒いパソコンから返事がもらえる訳もないから……。

「うん、いい」

僕は自分で言っつて、結局自問自答のような形になった。

「さようなら」

今度は声に出して言うのではなくて、黒いパソコンへキーボードで入力してみた。

これも一方通行になると思うが、別れの前にちゃんと挨拶しておきたかった。

しかしEnterキーを押すと、黒いパソコンの画面は切り替わった——。

Last word 「さようなら」②

思いがけない反応だった——。
何でもう1度検索が——。そんな考え事をする暇もなく、すぐに画面は切り替わる。

「さようなら。」

大きめのフォントサイズで、画面中央に表示された文字。黒いパソコンから挨拶の返事をもらって、僕の思考は固まった。

何が起こっているのか分からなくて、恐怖に似た感情も覚える。

しかし、そうこうしているうちに黒いパソコンに表示されていた文字は消えた——。

待てば、何か続きがあるという気がした。「さようなら」だけでなく、まだ何か黒いパソコンが言うと思った。

けれど10秒ほど待ってみても、またワードボックスだけの画面を映しているだけだった。

……………。

これは一体どういうことだ、何故今黒いパソコンは僕と会話してくれたんだ。他に異変が無いか確かめるように黒いパソコンを触ってみる……くあwse d r f t g y ふじこ i p と入力するようにキーボードをなぞる……。

そんな時、脳と連動するように指がピクリと動いた。

まさか——2つだけでも無限に検索ができるのか——。

黒いパソコン1で検索した後、黒いパソコン2で検索すると……1で上限となった検索回数がリセットされてまた使える……まさかまさかそういうこと……。

「さようなら」

僕はもう1度ワードボックスへ入力して、Enterキーを押してみた。

予想通りならもう何も起こらない。けれど、また黒いパソコンの画面は切り替わった。

「へっ。」

「検索回数がりセットされてもう1度検索できた訳ではありません。最後なのでおまけをしてみました。驚きましたか。2回目ですが、さようなら……それともまだ何か話したいことがありますか？」

僕は何度か目をぱちくりとさせた。拍子抜けだった。

読み終わってから数秒後にまたワードボックスが表示されたので、キーボードを叩き始める――。

「さようなら　でいいよね？」

「はい。良いと思います。」

「今まで　ありがとうございます」

「こちらこそお世話になりました。ご利用ありがとうございました。」

チャットのようなやり取りは余所余所しくて、こんなに連続で黒いパソコンからレスポンスがあることは初めてだった。

でも、僕はこのやり取りが初めてな気がしなかった。

「送るのは　ここからでいい？」

「どこからでも構いません」

「じゃあ　電源ボタン押すね」

「はい。どうぞ。」

何でも検索できるパソコン。使用者の意思を汲みとって望む答えを完璧に表示する。使用者のことを1番に考えているみたいで、優しくて、でもなぜかたまに意地悪で……だけど、憎めない感じ……。

結局こいつは一体何だったんだろうか――。以前辿り着いた、宇宙を守る為に宇宙すらも高みから見下ろすような存在に作られたもの、みたいな答えで正解だったのだろうか――。

僕は残った黒いパソコンの電源ボタンにも手を伸ばした――。

手放さなきゃいけないと思う。もう1度折原と過ごした日々のような幸せを手にする為に、いつか折原に胸を張って会える男になる為に、僕は手放さなきゃ……。

前にお隣さんと話して宇宙戦争を止めなければならなくなった時もあったつけ、僕が持っていたいちゃいけない、依存しているって……。

あるいはあの件がなければ、今も手放そうという考えには至っていないかもしれない。

でもあの時の気持ちとは随分違っている、前向きな気持ちだ。自然と頬が上がってしまうほど、清々しい。失うのに、手に入れようとしているかのようである。

僕は優しくて面白い人の所へとイメージしながら、電源ボタンを押した――。

僕は黒いパソコンで色々なことを知って、きつと成長してきたけど、今この瞬間が一番成長できた……そんな気がする。

強烈なパンチを食らっても1発じゃ効かなかったが、2発目を食らって……なんとかここまで辿り着いた。

僕は34秒の時間が過ぎるのを待った。今度は目を閉じずに画面を見続けて。

もう2度と会うことは無いだろう。でも、もしもこの先……何年後か何十年後か、僕がどうしようもなく困ることがあったら助けに来てくれたり……来てくれなかったりほしい……。

本当にどうしようもない時だけでいいから、1日だけ。

共に過ごした日々を思いを馳せながら、心の中でいくつか言葉を掛けながら、時間が過ぎること30秒ほど。

このまま黒いパソコン2みたいに戻って元からそこに無かったかのように消えて、僕も笑顔のまま綺麗に別れられそうな時だった。

黒いパソコンの画面が切り替わる――。

「あなたが出した答えは、半分だけ正解です」

一瞬の出来事だったけど、短い文だったので読むことはできた。

最後の最後にそんな言葉を残して、黒いパソコンは僕の視界から――消えた――。

僕は指先に何も感じなくなっても、しばらく同じ態勢のまま動くことができなかった――。

「――あのアイドルのスキャンダル見た？」

「ああ、見たよ。あれやばいよね」

「整形に過去のパパ活、今はIT企業の社長と愛人関係ってところまで一気にバレてたね」

「やっぱ芸能界って汚れてんのかな」

週明けの教室、聞こえてくる会話は僕にとって前から知っていたことだった。週刊誌に暴露されるよりも前から……。

アイドルのことだけじゃない……。

視界に入るクラスメイトの男子や女子から、今頃は職員室にいる先生までも、本人しか知らないはずの秘密を、僕はいくらか知っている……。

男子はち○この長さまで……。

僕は知っているけど……皆は知らない……。皆が知らずに生きている……この世界って一体何なんだろう……。

「どうしたの？」

「え、いや何でもない」

「何さっきの顔。笑いそうな泣きそうな微妙な顔でぼーっとしてたけど」

僕は弁当を机に置いた親友に笑われると、顔を元に戻して、箸の蓋を開ける。

けれど、またすぐに教室を目で1周してみた。

いつからか知ったはずでいた宇宙が——地球が——別のものに見えていた。でも今は、その別のものに見えていた世界が、さらに別のものみたいで——。

広くなった世界を僕1人で歩いていくことを考えると鳥肌が立つ。武者震いと言いたいけど、不安と緊張だ。

でもそれを乗り越えていけばいつかきつと宇宙のことも、未来のことも……黒いパソコンの全てだって分かるときがくる。

そう、僕なら——。

「あ、弁当の蓋開けるの待って。おかず当てていい？」

「はっ…何で？」

「えっと、豚肉の生姜焼きと卵焼きと漬物にトマト。ご飯の上には……」

「いや、全然違うけど……」

「よっしやー」

蓋が開けられた親友の弁当のおかずが、僕の予想と全く違っていたことを、僕は喜んだ。

あとがき・ネタバレ

いやあ……ついに終わりました。けっこう長いこと書いてきて文字数も34万字までいったんですけども、これにてこの小説は終わりです。

今からはあとがきとして読者の皆さんに、作者の僕から伝えたいことを書いていきたいと思えます。

先に言っておきます。かなり長くなります。

前々からあとがきで書くことリストを作ってたくらい色々と言いたいことがあるので、下手をしたら今までの話より長くなるかもしれません。覚悟してください。

でも、できれば最後までお付き合い頂けると幸いです。せつかくなんで僕の魂を見ていってください。

あと、読んでる皆さんが恥ずかしくなるようなことも書くと思うので、共感性羞恥ってやつにもご注意ください……。

はい、それでは何から話せば良いやら何ですが……。

とりあえず、ここまで「何でも検索できるパソコンを手に入れました。『B P C ー』を呼んでくださってありがとうございます！」

もう本当に本当に頭が上がりません。感謝しかありません。ただ、ありがたうと言うことしかできませんが、本当に物凄く感謝してます。

読んでくださる皆様がいなければ、僕はここまで書けなかつたと思うので読者の皆様は僕にとってかけがえのない存在です。

また後でもう1度感謝の文を書こうかと思っていますが、とりあえず最初にも短く感謝を。

「本当にありがとうございます！」

……それですね、ここからは大きく4つに分けて書いていこうと思います。その4つは以下の通りです。

1. ネタバレ
2. 別作品として社会人編書きます
3. 今後の活動

4. 感謝

はい、順番もこの通りに書いていきます。

あ、申し遅れましたが僕の名前は木岡（もくおか）と申します。本名じゃなくてペンネームです。読み仮名を振ってる訳じゃなくて「木岡（もくおか）」で名前です。

ここまで読んでいただけ作者の名前は知らねえやって人もいると思うので、どうか覚えてやってください。

では、木岡（もくおか）のあとがきを聞いてください。

1. ネタバレ

まずはネタバレです。

（※超ネタバレ注意です。見たくない方は飛ばしてください。）

それというのも黒いパソコンの正体についてです。本文は主人公の出した「宇宙を守る為のもの」という答えが、「半分は正解」ということで終わっています。結局何だったのということを書きます。

書く理由ですが、読者の皆様も腑に落ちない部分があるかと思いませんし、僕自身中途半端に終わらせる話が嫌いだからです。

でもこの作品は主人公が知らないことを増やすという選択をして終わるがゆえに、本編では謎な部分を残して、あとがきでネタバレするという形を取らせてもらうことにしました。

結論から言うと黒いパソコンは「世界そのもの」です。作中の世界はデータで作られた世界で、命があるように見える人も動物も植物も、主人公からはそう見えているだけで、本当は物凄く精巧に作られた3Dモデルのようなもの。

AIが進化しきった何千年後の世界で作られた現実の宇宙と変わらない空間で、宇宙が誕生したビックバンから宇宙が滅亡するまでを繰り返す続ける。

そのデータが内蔵されているのが黒いパソコンであり、黒いパソコンは自分の分身をデータ上の世界に置くことで、各回ごとの歴史のパターンを変えて、宇宙が滅亡しないパターンを探している。

そういう設定で最初から書いていました。

ざっくり言うところな感じなんですけど、意味分からんし何それって思いますよね。この設定自体にもまだ謎がありますし。

でもこの何でも検索できるパソコンの話の思いついて、その正体や結末を考えて……………。

知りすぎたら人生面白くないよねエンドとか……………しようもないことに使っているようで全ては病気の母を救う為の行動だったエンドとか……………危険な思想を持つもう1人の誰かに黒いパソコンが渡って色々争ったのち勝つたり負けたりするエンドとか考えて……………。

普通のパソコンって家にいながら世界の人々と交流できて、世界の景色を見ることができて、世界の情報を集めることができる。それって世界そのものと言っても過言じゃなくね。よし、黒いパソコンも世界そのものにしていう設定が決まり……………。

主人公が黒いパソコンを使ってるうちに世界にゲームのバグみたいな異変が起こり始めて、黒いパソコンの検索制限が解除されて、何人かいた黒いパソコン所持者が集まり、ええあんな人もこんな人も実力じゃなくて黒いパソコンを使って成功してただけなのかよみたいなギャグも挟みながら、宇宙人も絡みつつ協力して世界を救うみたいな結末も、ちゃんと最初から決まっていたんです。

じゃあ何でそういう結末にしなかったの、てか今からでもその結末にできるくない？って話になると思うんですが、それは書いてる途中で違うなと思ったからです。

はい、完全に僕の実力不足で、詳細に考えずに書き始めたミスです。いつかどこかのコメ欄でも言ってた記憶があるのですが、この作品は最初と最後の結末が決まっているだけで、中盤はどこまでも長くできる作品でした。

書いている途中でもっと面白い結末が思いついたらそつちに変えようと思ったのも事実です。

だから、実際に書いている途中に、画像検索で3Dモデルのように人の裸を表示できるとか微妙に伏線みたいなものも書いていたんですが、これは違うな。平和でしようもないのがこの作品のウリだから

怖い感じで終わるのはやめたほうがいいかもなって思ったんです。

思った時期に結末を改変し始めて、頂いたコメントやPV数が多い話とかも考慮して、下ネタの話とかが受けてるなつてことに気付いて、できたのが今の折原さんとの話で黒いパソコンを手放そうと決めるってエンドです。

正直このエンドもかなり良かったなと自分では思ってます。結末を変えたのをミスと言いましたし、自画自賛になります。何でも検索できるパソコンの話の結末としてはこっちのほうがじっくりくるような気がします。

途中で変えたのに、こんな綺麗にまとめるとか自分天才かも……と思います……。

皆さんはどう思われたでしょうか。良ければ感想を残して頂ければ……。

それですね、その気になれば折原との話を入れたとしても初期設定の結末でいけたのではって話の答えですが……僕はこの話の続きがまだ書きたいんです。

2. 別作品として続き書きます

はい、こつからの話はタイトル通りです。

僕はまだこの作品の続きが書きたくて「何でも検索できるパソコンを手に入れました。I B P C I (社会人編)」をそのうち書き始めようと思っっています。

(社会人編)です。話のネタを考えているとき、もうずつと生まれるんですよ。高校生では検索しない検索できない言葉や、高校生ではできない行動を入れないと作れない話が。

だから、この話を書き始めたちょうど2年前くらいからずつと社会人が主人公の話も書きたいなと思つて、終わつてみてもやっぱり書きたいので書きます。その為に完全にはこの話を終わらせませんでした。

ただ、他にも書きたい作品が別にいっぱいあるのでメインに書くつもりはありません。何でも検索できるパソコンの話は書きやすいし、

書いていて楽しいのでこれからの活動の息抜きとして書いていきます。

話が出来上がって、ちよつと気分を変えたいなと思った時に……更新頻度としてはどうでしょうか……詳細には決めてないし決められないのですが、1カ月に1wordくらいでしょうか。

これは今読んでいる読者様がどれほど付いてきてくれるのか、自分がどれほど面白い話を書けるのかによっても変わってくるので何とも言えません。

1話だけは近日中にさくつと書きちやおうかなと思っています。1話のタイトルは「ピンポンダッシュ 誰」に決めてます。

だから、細かい設定とか誰が主人公なのかとかはここでは言いません。

くすつと笑えるようなものを目指して、しようもない話ばかりにしようと思っています。最後の最後の結末は上で話したものにすつもりですが、そこに辿り着くまではひたすらしようもなく、大人の世界の疑問を検索していきたいです。

正直なところ最後まで書くのは一体何年後になるやらって感じなんですけどね。書くことは無いかもしれませんが、それもネタバレの理由でもあります。

結局読んでくれる人がいるかどうかなのですよ……次の話に続きます。

3. 今後の活動

私、木岡（もくおか）はこれからもネット作家として活動を続けます。

まだまだ未熟な身で恥ずかしながら、いつか作家として食っていけるレベルになる。誰もが知ってる作品を書くのが自分の夢なので、叶うまでやめるつもりはありません。

いつからそれを明確に意識したかは覚えていませんが、小学生くらいからの夢なんですよ。

具体的な活動としては、まずは更新を止めてる異世界転生モノの続

きを書いてみようと思っっています。ある程度は読まれていたので話をちよつと修正しつつ続きを書けば人気が出るかもしれないから。それが無理だったならまた別のファンタジーを書きます。あまり触れてこなかった分野なので各サイトの読者の皆様の心を掴めるかは分かりませんが、勉強していつか必ず転生モノやファンタジーで面白い作品を書きます。

無理では無いと思っっています。少年漫画やRPGは好きだし、転生モノに触れてこなかったからこそその自由な発想も武器にできるはず。

転生モノを更新しながら他に思いついている、SFや現実が舞台の作品も書いてみるつもりで、そっちが売れそうならそっちを書きますが、できれば転生モノで勝負したい。

ネットから売れるにはそういうファンタジーが1番だからです。1番読まれる分野で勝負して、僕は売りたい。

売れて、夢が遠くて辛くなることのある生活から抜け出したいのです――。

……と迫真の文章を書いてみましたが、半分冗談です。そんなに切羽詰まったりメンタルやられたりしてません。

僕は自分のことを天才だと思っっているからです。心配しなくても天才の僕はいつか必ず売れます。

根拠のない自信です。傍から見たら痛い奴だということも分かっています。でも成功するには必要なことだと自分を肯定しています。

だって、僕が書いた昔の作品とかも読んでみてくださいよ。僕の処女作である「キンメツキ」という感染病の話なんて、初めてでこんなに美しい文が書けるのかって感じですよ。

序盤だけでもいいから読んでみてくださいよ。何だこの天才は！今すぐ映画にできるレベルじゃねえか！って思いますよ。

他の過去作品も悪夢の中に入るホラーとか、島の高校の女子eスポーツ部の話とかも、成長した僕が書いて多くの人の目に晒されれば絶対売れます！面白すぎる！

……つてまあこれも冗談で、冗談ですけど言いたいことは本当です。

売れる為に活動していくけど、楽しむことも忘れずに、これからも僕は自分のペースで活動していきます。

もしかしたらいつか夢を諦めてしまうこともあるのかもかもしれませんが、売れるのを諦めても書くことはやめないのかなと思ってます。やっぱこの作品を書いていて、読んでもらえて反応がもらえる嬉しさや楽しさが分かったので。

あ、書いてほしい作品とかもしもあればそういうコメントもお待ちしております。

最近は書き直すことも多かつたし、ずっと書くことばかりに集中していたので、僕も誰かの作品読んだりとかもしていききたいです。

作者同士の交流とか憧れるんですよ。僕はネットに小説投稿してる友達が何年か活動して0人なので……。ちよつとというかなり寂しいです……。

まあ同じ活動してて価値観が合う人なんて中々出会えないですよ。たまにTwitterフォローされても大体相互フォロー希望してるだけみたいな数千フォロー数千フォロワーのアカウントばかりなので嫌になります。

だから、僕から探してアプローチする為にも他の人の作品を読んでもみます。

4. 感謝

やっと最後の4番目です。皆様付いてきてくれますか？めっちゃ長いですよ。ごめんなさい。

ここからは書き終わった感想も交えながら、「何でも検索できるパソコンを手に入れました。IBPC」を読んでくださった皆様に僕からの感謝の気持ちを綴ろうと思います。

まずは改めて皆様ありがとうございます。ありがとうございます。本当に何度でも言いたいほど感謝してます。

いやあ、本気でそう思えるほど素敵な読者様だったと思うのですよ。この作品の読者様は。

それは頂いたコメントを見ていたらよく分かりました。長く更新

できなかったときもあったし、番外編を連発したときもありました。なのに、優しくて暖かいコメントばかりなんですよ。

他の作品に届くコメントに詳しくないですけど、なかなかそういう訳にはいかないんじゃないですかね。色々なサイトに投稿しておりますが、全てのサイトでそうですよ。

前に書いていた作品なんかの時は傷つくコメントもあったのですが、この作品に関してはほぼなかったです。

だから、本当に本当に心から感謝できるなって。ありがとうございます。

ギフトもこの前初めて頂きましたし、日々の評価とかいいねも励みになりました。もらえる度に嬉しかったです。ありがとうございます。

はい……そんな感じですね。書き終わった感想を書きます。あまり興味ないかと思うので手短かに。

楽しかったですね。凄く。僕が元々夢に見ていたような作品だったので。いつかはエンタメ小説で読まれる人間になりたいんですよ。だから、笑いを目指して書けるこの作品は楽しかったです。

ただ、各話が短編なので書きやすい部分もあったのですが、短編を目指すがゆえに削らなきゃいけない部分もありました。番外編の「王子様 結婚」とかは整形もさせたり、王子様との結婚生活にも触れたかったのですが、削りましたね。

まあ良いことがあったり、悪いことがあったりですけど、良いことのほうが多かった。

主人公にも書けば書くほど愛着が湧きましたし、コメントで主人公が褒められると嬉しかったです。僕も文章の書き方に迷ってパソコンに向かえなくなった時期があったんですけど、なんとか乗り越えて、一緒に成長できたのかなと思います。

以上で感想と、あとがきも終わりです。

最後にもう1度ありがとうございました。これからも僕は頑張っていくので、できれば応援してやってください。

僕が黒いパソコンを手に入れられるなら絶対に「世界で1番面白い

小説」と検索するのですが、いつかは検索しなくてもそこへたどり着けるように精進して参ります。

今まで1度も言ったことがないですが、こういうことも言わせてください。

評価やコメントを頂きたいです。頑張ったのでください。どうかお願いします。

SNSのフォローとかもよろしければ。

あとそうだ。返信できていないコメントにもぼちぼち返信していかうと思ってます。

今コメント頂ければすぐに目に留められるので、ぜひぜひ。では、木岡（もくおか）でした。ありがとうございました。